魔術の歴史

前書き

　エリファス レヴィは、古代のマギの知についての作品を、完全な道を形成するために、3部に分けている。

　第1部は「高等魔術の教理」と「高等魔術の祭儀」である。

　第2部は「魔術の歴史」である。

　第3部は「大いなる神秘の鍵」である。

　「大いなる神秘の鍵」は後に公にされるであろう。

　分けて手に取っても、「高等魔術の教理」、「高等魔術の祭儀」、「魔術の歴史」、「大いなる神秘の鍵」は、それぞれ、完全な教えをもたらし、知全体を含んでいる様に思われる。

　しかし、完全に理解するためには、「高等魔術の教理」、「高等魔術の祭儀」、「魔術の歴史」、「大いなる神秘の鍵」の全てを用心して研究する必要が有る。

　エリファス レヴィが作業、作品を3つ1組に分けているのは、知自体の要求によってである。

　なぜなら、エリファス レヴィが発見した大いなる神秘は、完全に、古代の秘儀祭司が数が持つと考えていた意味に基づいている。

　古代の秘儀祭司にとっては、3は創造する数である。

　全ての考えを解説する時に、古代の秘儀祭司は、第1に考えの基礎である論理、第2に考えの実現、第3に考えの可能な全ての応用を考えた。

　哲学の考えでも、宗教の考えでも、古代の秘儀祭司は、考えを論理、実現、応用の3つ1組で形成した。

3は創造する数であるので、(マタイによる福音2章の3人のマギによる、)マギの後継者であるキリスト教の考えの総合は、(創造者である)唯一神の中に、父である神、息子であるイエス、神の聖霊という3つの人格を認める様に、人の信心に要求する。

3は創造する数であるので、(マタイによる福音2章の3人のマギによる、)マギの後継者であるキリスト教の考えの総合は、普遍の宗教の中に、信仰、希望、愛という3つの神秘を認める様に、人の信心に要求する。

エリファス レヴィは、隠された学問の最も純粋な口伝であるカバラが示している構想に、「高等魔術の教理」と「高等魔術の祭儀」の配置で従い、「魔術の歴史」で従うつもりである。

エリファス レヴィは、「高等魔術の教理」と「高等魔術の祭儀」を、ヘブライ文字の22文字による22章に分けている。

エリファス レヴィは、数に対応するヘブライ文字とラテン文字といった文字と、最良の学者によるヘブライ文字が表す象形文字的な意味をラテン語で、「高等魔術の教理」と「高等魔術の祭儀」の章の最初に記した。

後記の様に、例えば、エリファス レヴィは、数に対応するヘブライ文字とラテン文字といった文字と、最良の学者によるヘブライ文字が表す象形文字的な意味をラテン語で、「高等魔術の教理」の1章の最初に記した。

1アレフA

修行者(英訳原文のrecipientを直訳すると受容者を意味する。)

修行

普遍

王冠

ヘブライ文字アレフは、ラテン文字 A に相当する。

ヘブライ文字アレフは、数として、1 の意味を持っている。

ヘブライ文字アレフは、修行者、入門(の試練)を求められている人、条件を満たした資格の有る人を意味する。

ヘブライ文字アレフは、タロットの魔術師や騎士見習いに対応している。

(英訳原文の bachelor は学徒や騎士見習いを意味する。)

ヘブライ文字アレフは、修行、または、考えの兼用法を意味する。

ヘブライ文字アレフは、神の普遍の第一の概念における、普遍、または、神を意味する。

ヘブライ文字アレフは、王冠を意味する。

王冠は、カバラの神学における、神の第一の不明の概念である。

「高等魔術の教理」と「高等魔術の祭儀」の章は、章のテーマを展開した物である。

「高等魔術の教理」と「高等魔術の祭儀」の章のテーマは、章全体を象徴的に含んでいる。

「高等魔術の教理」と「高等魔術の祭儀」がもたらした知の普遍の理論に従って、「魔術の歴史」では、時代を通じての知の実現について話して説明する。

「魔術の歴史」の序文で説明する様に、エリファス レヴィは、「魔術の歴史」を、7 に対応させて、7 巻に分けている。

7、7 つ 1 組は、創世記で神が地を創造、実現した時間、1 週間の日数である。

エリファス レヴィは、「大いなる神秘の鍵」を、4 に対応させるつもりである。

4 は、スフィンクスの牛、人、ライオン、ワシという謎の形の数である。

4 は、四大元素という(力の)表れの数である。

4 は、正方形の数である。

4は、力の数である。

エリファス レヴィは、「大いなる神秘の鍵」で、確信を不動の基礎の上に確立するつもりである。

エリファス レヴィは、「大いなる神秘の鍵」で、(神という)完全な解答をスフィンクスの謎に与えるつもりである。

エリファス レヴィは、「大いなる神秘の鍵」で、創世から隠されているものの鍵タロットを読者に与えるつもりである。

ギヨーム ポステルの不明な本で、学の有るギヨーム ポステルだけが、創世から隠されているものの鍵タロットを、ROTAやエノクの創世記といった、謎の説明で、不十分な説明で、大胆に表している。

「魔術の歴史」は、「高等魔術の教理」と「高等魔術の祭儀」の断言を説明する。

「大いなる神秘の鍵」では、「魔術の歴史」を補完して説明するつもりである。

「高等魔術の教理」、「高等魔術の祭儀」、「魔術の歴史」、「大いなる神秘の鍵」によって、少なくとも注意して読み取った読者にとっては、ヘブライ人のカバラ、無上の魔術、ゾロアスター、ヘルメスの秘密のエリファス レヴィによる啓示は、十全であると信じている。

「高等魔術の教理」、「高等魔術の祭儀」、「魔術の歴史」、「大いなる神秘の鍵」の作者であるエリファス レヴィは、「高等魔術の教理」、「高等魔術の祭儀」、「魔術の歴史」、「大いなる神秘の鍵」を探求している、真剣な関心の有る人に、喜んで教える。

しかし、明言すると、読者に事前に通告すると、エリファス レヴィは、占いをしない。

エリファス レヴィは、占いを教えない。

エリファス レヴィは、予言しない。

エリファス レヴィは、ほれ薬を作らない。

エリファス レヴィは、悪人の霊の魔術を助けない。

エリファス レヴィは、降霊術を助けない。

エリファス レヴィは、知の人である。

エリファス レヴィは、学問の人である。

エリファス レヴィは、詐欺師ではない。

エリファス レヴィは、宗教が非難する物を強く非難する。

前記から、知識の危険な応用や知識の不正な応用という問題にためらわないで近づける人と、エリファス レヴィを混同しないで区別する必要が有る。

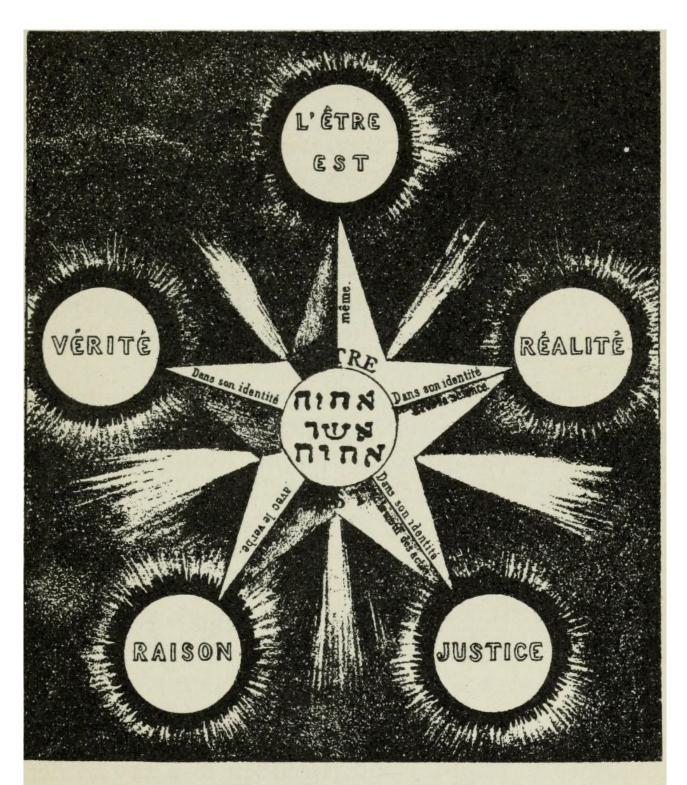
後は、エリファス レヴィは正当な非難を喜んで受け入れる。

しかし、エリファス レヴィは、明確な敵意に対して理解を示すつもりは無い。

真剣な研究と良心的な務めは、全ての非難に対して超然としている。

真剣な研究と良心的な務めが、真剣な研究と良心的な務めを評価できる人にもたらす、第一の恩恵は、深い平和と、普遍の思いやりである。

エリファス レヴィ

1859 年 9 月 1 日

THE PENTAGRAM OF THE ABSOLUTE

序文

長い間、大衆は、魔術を、詐欺師の詐欺、病人の幻覚、異常な犯罪者の犯行と混同してきた。

大衆は、魔術を、原因が無い結果をもたらすわざであると誤解して説明した。

普通の大衆は、普通の特徴である常識によって、魔術は原因が無い結果をもたらすという誤解によって、魔術は非論理的であると誤解して話している。

大衆の常識は正しくない事が多い。

実に、実際は、魔術は、魔術を知らない大衆が話している物とは、全く似ていない。

さらに、魔術は、誰も、こうであるとか、ああであると表せない物である。

数学が数学自体として存在する様に、魔術は魔術自体として存在する。

なぜなら、魔術は、自然と、自然の法の、正確な絶対の知である。

魔術は、古代のマギの知である。

キリスト教は、偽の神託を沈黙させた。

キリスト教は、偽の神々の幻を終わらせた。

それにもかかわらず、キリスト教は、東から来た神秘の 3 人の王者、マタイによる福音 2 章の 3 人のマギを畏敬している。

マタイによる福音 2 章で、イエスの星が、3 人のマギを導いた。

マタイによる福音 2 章で、3 人のマギは、ゆりかごの中の、世界の救い主イエスを敬礼するために、東から来た。

口伝では、3 人のマギは、王者である。

なぜなら、魔術の秘伝伝授は、本物の王者を形成する。

なぜなら、全ての達道者は、マギの大いなるわざを、王者のわざ、神の王国と呼んでいる。

マタイによる福音2章の3人のマギを導いたイエスの星は、全ての秘伝伝授における、燃える星である。

イエスの星は、錬金術師にとっては、第5元素エーテルの象徴である。

イエスの星は、魔術師にとっては、大いなる秘密である。

イエスの星は、カバリストにとっては、神の五芒星である。

五芒星の研究によって、魔術師は、新しい名前イエスを知るに至る、のを証明する事がエリファス レヴィの意図である。

(ヨハネの黙示録3章12節「私イエスは私イエスの新しい名前を勝利した人に記す」)

新しい名前イエスは、全ての名前を超越している。

新しい名前イエスは、イエスを敬礼できる全ての存在をひざまずかせる。

魔術は、哲学の確実性と、宗教の永遠性や誤りの無い絶対性を、1つの学問として併せ持つ。

魔術は、正反対に見える2つの物を完全に議論の余地無く両立させる。

魔術は、論理と信心を両立させる。

魔術は、知と確信を両立させる。

魔術は、権利と自由を両立させる。

魔術は、数学の正確さほど正確な、哲学の確実性という手段と、宗教の確信という手段を、人の精神に与える。数学の正確さの原因は数学自体の誤りの無い絶対性である。

理解の領域と、信心の領域に、絶対である神は存在する。

無上の論理である神は、人の知という光を、運に任せて迷わせたまま放置しなかった。

議論の余地が無い、真理が存在する。

真理を知るための誤りが無い絶対の手段が存在する。

真理という知に到達して、真理を命の規則として選んだ人は、王者の力を、自身の意思に与える事ができる。

王者の力によって、下のものの王者に成る事ができる。

王者の力によって、さまよっている霊の王者に成る事ができる。

言い換えると、王者の力によって、この世を裁く者、地の王者に成る事ができる。

もし真理についての話が事実であれば、どうして気高い知は未だ認められていないのか？

どうして暗い天空に明るい太陽が隠されていると考える事が可能であろうか？

超越的な知は常に知られていた。

ただし、沈黙と忍耐の必要性を理解した、知に選ばれた人だけが、超越的な知を知っていた。

仮に、熟練の外科医が真夜中に生まれつきの盲人の目を開かせても、夜明けが来るまでは日光の性質や存在を盲人に理解させる事は不可能である。

知には夜と夜明けが有る。

なぜなら、命は、精神の世界と交流している。

命は、規則的な運動と、進歩的な段階によって、表れる。

命は、真理と同じである。

真理は、規則的な運動と、進歩的な段階によって、表れる。

命は、光の放射と同じである様に。

隠されているものが失われる事は無い。

そして、発見されたものが完全に新しいものである事は無い。

神は、永遠性という徴を知に付与した。

知は、神の栄光の反映である。

超越的な知、絶対の知が、魔術である。

ヴォルテールの誤りが無い絶対性を疑わない人にとっては、「知が魔術である」という断言は完全な矛盾に思われるかもしれないが。

ヴォルテールは、生半可な知識しか無い人であった。

ヴォルテールは、学ぶ代わりに、笑いものにする機会を逃さなかったので、自分は多数の物を知っていると思い込んでいた。

魔術とは、アブラハム、オルフェウス、孔子、ゾロアスターの知であった。

魔術とは、エノクがエメラルド板に記した魔術的な考えであった。

エノクは、三重に大いなる者、トート、ヘルメス、メルクリウスである。

モーセは、魔術を清めて、再びヴェールで覆った。

「再びヴェールで覆う」事が、「ヴェールを外して明らかにする」を意味する「reveal」という言葉の意味である。

モーセが魔術に与えた新しい仮面が、神のカバラであった。

神のカバラは、イスラエルだけの口伝である。

神のカバラは、イスラエルの祭司の不可侵の秘密である。

エレウシスの秘儀と、テーバイの神秘は、ヘブライ人以外で、魔術の象徴のいくつかを保存していたが、低俗化した形によってであった。

迷信の増大の中で、神秘の鍵は失われた。

エルサレムの大衆は、預言者達を殺した。

何度も何度も、エルサレムの大衆は、アッシリアとバビロンの偽の神々を敬礼した。

エルサレムの大衆は、神の言葉を失う結果に成った。

秘伝伝授の神の星が魔術師達に告げた、救い主イエスが、古代の神殿のぼろぼろのヴェールを裂きに来た時に、伝説と象徴という新しい網状の織物を教会に与えた。

常に、イエスによる伝説と象徴は、大衆から隠されている。

常に、イエスによる伝説と象徴は、永遠に同じである真理を、選ばれた人のために保存している。

前記が、博識な不幸なデュピュイが、インドの平面天体図の上に、エジプトのデンデラの石板の中に、見つけるべき事であった。

仮に、前記を発見していれば、デュピュイは、時代を通じて知の記念碑が一致して証言している、自然の全てが一致して証言している、本物の普遍の永遠の宗教を否定しただけに終わってしまわなかったであろう。

「カトリック」は「普遍の」を意味する。

魔術は、学問の絶対と宗教の絶対の記憶である。

魔術は、1つの言葉に要約された考えの記憶である。

魔術は、交互に忘却され発見される、言葉の記憶である。

魔術は、全ての古代の秘伝伝授の選ばれた人に伝えられた言葉の記憶である。

有名な神殿騎士団が魔術を保存していても大衆の目にさらしていても、魔術という同じ記憶が、薔薇十字団、光に照らされた者、メーソンといった秘密結社に伝えられた。

魔術という同じ記憶が、意味を、秘密結社の不思議な儀式、秘密結社の多かれ少なかれ慣習的な合図に与えた。

特に、魔術という同じ記憶が、正当な理由を、秘密結社の共通の信心に与えた。

魔術という同じ記憶が、手がかりを、秘密結社の力に与えた。

大衆は、魔術の考えと神秘を冒涜した。

エリファス レヴィは、大衆が魔術を冒涜した事を否定するつもりは無い。

時代から時代へ、大衆は魔術を冒涜した。

魔術の誤用は、秘密のものを愚かにも知らせた人にとって、大いなる畏敬するべき教訓に成った。

偽のグノーシス主義者は、キリスト教徒に、グノーシスを禁止させる原因と成った。

(

グノーシスは認知を意味する。

グノーシスは霊感を認めた学問を意味する。

)

そして、公の教会は、天の高等な秘伝伝授への門を閉ざしてしまった。

王座を奪おうとする無知な人の侵入は、知の位階制を汚した。

教会の混乱は、国の混乱を生じた。

なぜなら、好むと好まぬとにかかわらず、常に、王者は祭司に従う。

地上の権力者は、自身の永続を保証するために、神聖化と力の源を求めて、神の教えの永遠の祭司だけの聖所に向かう。

知の鍵は、幼子へ投げ捨てられてしまった。

予期される様に、知の鍵は、実質的には失われた。

知の鍵が、実質的には失われた、にもかかわらず、天の高等な直感と大いなる倫理道徳的な勇気を持っていた男性、堅固なカトリック、ジョゼフ ド メーストル伯爵は、世界が宗教を欠いたままでいられるはずが無い事を認識していた。

直感で、ジョゼフ ド メーストルは、隠された学問という最後の祭司だけの聖所に目を向けた。

心から祈って、ジョゼフ ド メーストルは、独りの天才の精神において、知と信心の間に存在する自然の一致が、知と信心を結びつける時代を求めた。

ジョゼフド メーストルは「知と信心が一致した時代は大いなる時代に成るであろう。知と信心が一致した時代は 18 世紀を終わらせるであろう。人は、中世の粗野な言動について話す様に、18 世紀の愚かな言動について話すであろう」と話している。

ジョゼフド メーストル伯爵の予言は実現中である。

知と信心の結合は、古代から行われていた。

知と信心の結合は、あらわれた。

知と信心の結合は、独りの天才によってではなく、行われた。

太陽を見るのに天才は必要無い。

さらに、天才は、天才の偉大性の希少性と、天才の知力の大衆にとっての到達不可能性だけを実証した。

大いなる真理は発見される事だけを求める。

最も単純な人でも、真理を理解する事ができるであろう。

必要な時には、最も単純な人でも、真理を証明する事ができるであろう。

しかし、真理は大衆の物には成らない。

なぜなら、真理は位階的である。

そして、無秩序だけが大衆の先入観を満足させる。

大衆は絶対の真理を必要としない。

仮に、絶対の真理が大衆の物に成ったら、進歩が阻止されて人としての命は終わるであろう。

正反対の意見の一進一退、意見の衝突、流行に夢中に成る事、意見や流行の夢幻によって常に動かされる事が、大衆の知的な成長には必要である。

大衆は、正反対の意見の一進一退、意見の衝突、流行に夢中に成る事、意見や流行の夢幻によって常に動かされる事が、大衆の知的な成長には必要である事に気づいている。

そのため、大衆は、学者の講座から容易に離れて、詐欺師の講壇のまわりに集まる。

特に、哲学に関心が有ると思われている者どもですら、身振りによる言葉当て遊びをする幼子達に似ている。

身振りによる言葉当て遊びをする幼子達は、すでに答えを知っている子が、遊びの醍醐味である謎を取り上げて、遊びを台無しにしない様に、すでに答えを知っている子を、急いで追い払う。

マタイによる福音 5 章 8 節で、神の知であるイエス キリストは「心の清い人達は幸いである。心の清い人達は神を見るから」と話している。

(コリント人への第 1 の手紙 1 章 24 節「キリストは神の知」)

心の清らかさは、知を清める。

意思の正確さは、理解の正確さを生み出す。

何よりも真理と正義を好む人は、真理と正義を報いとして得る。

なぜなら、無上の神意は、人が命に到達できる様に、自由を人に与えた。

真理は、真理の厳しさにもかかわらず、優しさによってのみ、あらわれる。

真理は、人の意思が虚偽の誘惑に惑わされた時に、人の意思の鈍さと、人の意思の誤りを怒らない。

ボシュエは「真理が、人の快感や不快感より先に存在する」と話している。

ボシュエは「人の快感や不快感より先に存在する、真理によって、人は行動を決定するべきである」と話している。

ボシュエは「好みによって、人は行動を決定するなかれ」と話している。

人にとっても神にとっても、神の王国は、気まぐれの王国ではない。

トマス アクィナスは「神が望むから正しいのではなく、正しいから神が望む」と話している。

神のつり合いは永遠の数学を統治する。

神のつり合いは必然的に永遠の数学である。

知恵の書 11 章 21 節に「神は数、目方、尺度で全てのものを創造した」と記されている。

創造の一角を測りなさい。

創造の一角をつり合いを保ったまま前進的に増やしなさい。

すると、無限の全てが創造の一角の領域を増やすであろう。

色々な領域が創造の一角の領域に満ちる。

創造の一角の領域は、あなたというコンパスが象徴的に伸ばしている両腕の間に、つり合いを保った部分を与えていく。

そして、別のコンパスか別の定規を持った手を、あなたより上の無限の一点に、仮定しなさい。

すると、天の三角形の線は知のコンパスの線と必然的に交わるであろう。

そして、天の三角形と知の三角形はソロモンの神秘の六芒星を形成するであろう。

マタイによる福音 7 章 2 節に「あなたが(他者を)量る量りで、あなたも量られるであろう」と記されている。

神は神の偉大さによって人を押しつぶす様には人と戦わない。

神は不平等な重りを神の天秤に乗せない。

ヤコブの強さを試す時に、神は人の姿に成った。

祖ヤコブは攻撃に一晩中、耐えた。

神は押されていたヤコブを祝福した。

そして、神との戦いに持ちこたえた栄光に加えて、神は、ヘブライ人への敬称に成った、イスラエルという称号をヤコブに与えた。

「イスラエル」は「神に対して手強い」を意味する。

エリファス レヴィは、教養が有ると言うよりは熱狂的なキリスト教徒の大衆が、永遠の罰の教えについて、「神は有限である罪に無限に報復できる。罪人は有限でも、神の偉大さは無限だからである」という変な説明をしているのを聞いた事が有る。

　この世の皇帝である神は、神の衣のすそを故意にではなく汚してしまった思慮の足りない幼子に死の宣告をすれば良かったのか？　いいえ！

　偉大さの特権とは、そうではない！

　アウグスティヌスは「神は我慢強く忍耐強く寛容である。なぜなら、神は永遠(、無限)である」と話した時に神の偉大さを大衆より良く理解していた。

　神の全てのものは正しい。

　なぜなら、神の全てのものは思いやりである。

　神が許す方法は、人が許す方法とは異なる。

　なぜなら、神は人のようには怒らない。

　ただし、性質的に、悪は善と合わない。

　夜が昼と合わない様に。

　不和が調和と合わない様に。

　そして、人の自由は不可侵である。

　そのため、全ての罪は、罪の大きさに比例した労苦で、つぐなわれる。

　全ての悪は、悪の大きさに比例した労苦で、こらしめられる。

　(罪への罰という重荷を乗せた)荷車が泥の中に、はまった時は、神ユピテルの助けを祈り求めても無駄である。

　寓話の荷車の御者の様に、人がツルハシとスコップを手に取らない限り、神は溝(みぞ)から人を引き上げてはくれない。

　あなた自身を助けなさい。

　そうすれば、神は、あなたを助けてくれるであろう。

前記の様に、罰の永遠性の、可能性と必然性を、論理的な、全く哲学的な方法で説明できる。

同時に、永遠の罰から脱出できる狭き道が人のために開かれている。

永遠の罰から脱出できる狭き道とは、労苦する事と、悔い改める事である。

永遠の力の法との一致によって、人は、自身を創造的な力と一体化でき、創造主、保護者に成れる。

神は、ヤコブが夢で見た、光のはしごの階段の数を制限しなかった。

ヤコブが夢で見た、神への光のはしごの階段の数は無限であった。

(創世記 28 章 12 節「ヤコブは夢をみた。1 つのはしごが地の上に立っていた。はしごは天に達していた。天使がはしごを上り下りしていた」)

自然は、人の下のものとして配置したものを、人に従わせている。

人は、絶え間無く向上する事によって、人の領域を拡大できる。

長命と永遠の命。

風と嵐。

土と鉱脈。

光と不思議な幻。

闇と夢。

死と霊。

長命と永遠の命、風と嵐、土と鉱脈、光と幻、闇と夢、死と霊は、魔術師の王笏、ヤコブの羊飼いの杖、モーセの畏敬するべき杖に従う。

達道者は、四大元素の王者に成れる。

達道者は、錬金術師に成れる。

達道者は、予見の解釈者に成れる。

達道者は、夢や幻視の解釈者に成れる。

達道者は、夢解きに成れる。

達道者は、神託の管理者に成れる。

要するに、達道者は、命の王者に成れる。

自然の数学的な秩序によって、達道者は、四大元素の王者、錬金術師、予見の解釈者、神託の管理者、命の王者に成れる。

無上の知的存在である神の意思と一致する事によって、達道者は、四大元素の王者、錬金術師、予見の解釈者、神託の管理者、命の王者に成れる。

前記が、魔術である。魔術の全ての栄光である。

しかし、前記の言葉を今日（こんにち）、大胆に信じる誰かがいるであろうか？　はい！

前記の言葉を今日（こんにち）、大胆に信じる人は、誠実に学びたい人、ありのままに知を得たい人である。

エリファス レヴィは真理を例え話や象徴のヴェールの裏に隠さない。

全てのものが話されるべき時が来た。

エリファス レヴィは全てのものを話すつもりである。

要するに、すでに話した様に、エリファス レヴィの目的は、古代の神秘の影の裏に隠された、秘密の知を明かす事である。

グノーシス主義者は、秘密の知を、不器用に漏らした、というよりは、不相応に評判を落とした。

秘密の知は、神殿騎士団の無実の罪を覆い隠す闇の裏に微かに認められた。

再び、秘密の知は、高等なメーソンの儀式の現在では見通せない謎の下に見かけられる。

さらに、エリファス レヴィはサバトの不思議な王を昼の光の中に公開しようと思う。

エリファス レヴィは黒魔術の根源を暴こうと思う。

エリファス レヴィは黒魔術の恐るべき現実を暴こうと思う。

長い間、ヴォルテールの哲学の子孫は黒魔術を笑いものにしてきた。

多数の読者にとって、魔術とは悪魔についての知である。

ちょうど、光についての知が闇についての知に結びつく様に。

最初に、エリファス レヴィは悪魔が恐くないと大胆に表明する。

聖女テレサは「私は悪魔を恐れる人だけを恐れる」と話している。

ただし、エリファス レヴィは、悪魔が笑いを誘う物ではない、と宣言する。

エリファス レヴィは、非常に多くの場合、悪魔が誤って笑いものの対象にされている、と宣言する。

さて、エリファス レヴィの目的は、悪魔を知の光の前に引きずり出す事である。

しかし、悪魔と知。

悪魔と知は、よそよそしい、つり合わない、2 つの言葉である。

大衆は、エリファス レヴィが、悪魔と知という 2 つの言葉で、目的を全て表した、と思われるに違い無い。

闇の象徴である悪魔を光の中に引きずり出すと、偽の霊である悪魔を真理によって消滅させてしまうのではないか？

悪魔を知の光の前に引きずり出すと、実体の無い夜の怪物である悪魔を昼の光によって消滅させてしまうのではないか？

前記の様に、浅はかな大衆は考えるであろう。

そして、エリファス レヴィの話を聞かないで、浅はかな大衆は、エリファス レヴィの話を無視するであろう。

学の無いキリスト教徒の大衆は、エリファス レヴィがキリスト教徒の倫理道徳の基礎の教えを地獄をけなす事によって崩している、と誤った判断をするであろう。

また、その他の大衆は、もはや誰も信じていない誤りと戦う事が役に立つのか、たずねるであろう。

そのため、エリファス レヴィの目的を明確に話す事と、エリファス レヴィの思想をはっきりさせる事が重要である。

そのため、エリファス レヴィは「本書の著者エリファス レヴィは、あなたたちと同じ、キリスト教徒である」とキリスト教徒に話す。

エリファス レヴィの信心は、強く深く確信しているカトリック教徒の信心と同じである。

そのため、エリファス レヴィは、キリスト教の教えを否定するわけではなく、偽の信心と迷信といった形の死に至る不信心と戦う。

エリファス レヴィは、悪魔の巨人的な無力と恐るべき悲惨さを昼の光にさらすために、偽のゾロアスター教における悪の神格化アーリマンの黒い後継者である悪魔を闇から引きずり出す事に取り組む。

エリファス レヴィは、悪魔を地獄の王座から引きずり下ろすために、悪魔の頭を十字架の足下にひれ伏させるために、悪という長年の問題を知によって解決する事に取り組む。

聖母マリアに象徴される様に甘美な優しい光である知、清らかな処女の母の知は、エヴァの様に古い蛇の頭をかかとで圧倒する運命なのではないか？　はい！

また、後記の様に、本書の著者エリファス レヴィは偽の哲学に話したい。

なぜ偽の哲学は理解できないものの否定を試みるのか？

未知のものに直面して未知のものの否定を断言する懐疑は、信心より、軽率で慰めが無いではないか？

偽の哲学、懐疑は、人格化された悪の恐ろしい姿に、笑いを誘われるだけなのか？

偽の哲学、懐疑には、悪、悪魔という奇形のものに絞められて、のたうち泣く、人間性の絶え間無い泣き声が聞こえないのか？

偽の哲学、懐疑は、正しい人を迫害する、悪人の下品な笑い声を聞いた事が無いのか？

偽の哲学、懐疑は、悪霊、悪の精神が全ての人の魂の中に作る地獄の深淵が自身の中に開くのを経験した事が無いのか？

精神的な悪は存在する。

精神的な悪が存在する事は、悲しい真実である。

精神的な悪は、ある人々の精神を支配している。

ある人々は精神的な悪を体現している。

前記の様に、精神的な悪は人に成っている。

悪人という悪魔は存在する。

実に、悪人という悪魔の中で最も邪悪な人がサタンである。

前記の事を、エリファス レヴィは、あなたたちに、できれば、認める様に求める。

あなたたちはエリファス レヴィの考えに全く同意しないのは難しいであろう。

知の領域と信心の領域が不可侵に離れている限りでのみ、知と信心は支え合う、という事を明確に理解する様に。

人が信じるものは何か？

人は全力で望んでも絶対に知る事ができないものを信じる。

信心の対象は、知にとっては、最高でも、不可避の仮定である。

知の領域に存在するものを、信心の方法によって判断するなかれ。

正反対に、信心のものを、知の方法によって判断するなかれ。

信心のものは科学的には議論できない物である。

テルトゥリアヌスは「不条理だから私は信じる」と話している。

テルトゥリアヌスの「不条理だから私は信じる」という言葉は、一見、矛盾している様だが、無上の論理の１つである。

事実、人が論理的に思考できる全てのものを超越して、癒す事ができない渇望で人が望む、人が夢想ですら理解できない、無限が存在する。

実に、人の有限の理解にとって、無限は不条理ではないか？　はい！

不条理でも、やはり、人は無限が存在する事を感じる。

無限は人に浸透している。

人は無限に満ちあふれている。

人は無限という深淵で、めまいを起こす。

人は無限という畏敬するべき高みによって圧倒される。

科学的に信じても良さそうな仮定は、全て、知の最後の黄昏か、知の影である。

信心は、論理が研究し尽くされて根拠を失う所から始まる。

人の論理を超越して、神の論理が存在する。

人の弱さにとっては、神の論理は無上の不条理である。

しかし、無限の神の不条理は人を反駁する。

そのため、人は無限の神の不条理を信じる。

善だけが無限である。

悪は無限ではない。

前記から、もし神が信心の永遠の対象であるならば、悪魔は知の対象の１つに過ぎない。

カトリックの教義で、悪魔を研究するべき問題としているであろうか？　いいえ！

悪魔を信じると話す事は、神を冒涜する言葉ではないか？　はい！

聖書で、悪魔は名前が記されているが、悪魔は定義されていない。

創世記には有名な天使の反逆の言及が無い。

創世記はアダムの堕天を蛇のせいにしている。

蛇は生きている物の中で最も狡猾で危険である。

創世記の古い蛇についてのキリスト教の口伝は知られている。

しかし、もし知の無上に大いなる広まっている例え話の1つによって創世記の古い蛇についてのキリスト教の口伝が説明できても、神だけを望む信心にとって、ルシフェルの外見だけの高慢な業を軽蔑する信心にとって、何の意味が有るだろうか？

「ルシフェル」はラテン語で「光をもたらすもの」を意味する。

「光をもたらすもの」を意味するとは、「ルシフェル」という闇の霊の名前は、何と不思議な名前か！

「ルシフェル」が光をもたらして弱い大衆の魂を盲目にするのか？　はい！　疑い無く！

なぜなら、キリスト教の口伝は「ルシフェル」についての神の開示と霊感に満ちている。

コリント人への第2の手紙11章14節で使徒パウロは「サタンですら光の天使を装う」と話している。

ルカによる福音10章18節でイエス キリストは「私はサタンが雷の様に天から堕ちるのを見た」と話している。

イザヤ書14章12節で預言者イザヤは「なぜ、あなたは天から堕ちたのか？！ 明けの明星よ？！」と話している。

ルシフェルは堕ちた星である。

ルシフェルは常に燃えている流星である。

ルシフェルは、(地に堕ちて)最早、照らさない(隕石と成った)時には、燃やすものと成る。

しかし、ルシフェルは人格なのか力なのか？

ルシフェルは天使なのか迷っている雷なのか？

キリスト教の口伝はルシフェルが天使であると考えている。

ただし、詩編104章4節で詩編の作者は「神は風を神の使者にする。神は火を神の代行者、神の使者にする」と話している。

聖書では、天使という言葉、天使という名前を神の全ての使者に適応している。

聖書では、使者や新しい被造物を天使と呼んでいる。

聖書では、啓示者や罰を下すものを天使と呼んでいる。

聖書では、光を放つ神の聖霊や輝く物を天使と呼んでいる。

(雷という)無上の天が雲を通じて射る火の矢は、無上の天の怒りの天使である。

オリエントの詩の読者は「(雷という)無上の天が雲を通じて射る火の矢は、無上の天の怒りの天使である」という例えを見慣れているであろう。

中世では悪魔は大衆の恐怖の的(まと)であった。

しかし、現在では、悪魔は大衆の笑いものに成っている。

悪魔は、次々と王座から堕ちた全ての偽の神々の奇形の相続者である。

悪魔という奇形の「こけおどし」は、奇形過ぎて、子どもを脅かす架空の霊に過ぎなく成ってしまった。

けれども、前記について、後記の事を、注意しなさい。

神への恐れを知らない人だけが大胆に悪魔を笑いものにするのである。

病んだ想像力を持つ多数の人々にとって、悪魔は神の影である傾向が有ったのではないか?

または、超自然的な力を罰を受けずに残虐行為を行う物としてしか理解しない、精神が堕落した人々にとって、悪魔は偶像ではないか?

けれども、悪の力という概念が神の概念と両立するか確かめる事が重要である。

要するに、悪魔が存在するか確かめる事が重要である。

そして、悪魔が存在する場合、悪魔とは、どのようなものか確かめる事が重要である。

悪魔の有無は最早、迷信の問題ではないし、滑稽な作り話の問題ではない。

悪魔の有無は宗教の問題である。

悪魔の有無は宗教の問題なので、悪魔の有無は未来全体の問題である。

悪魔の有無は全ての利害関係者である人類の問題である。

人は変な理論家である。

人は、例えば金銭といった物質的利益に関心が有るにもかかわらず、その他の全てのものに無関心である時に、自身を強い者であると思い込む。

人は、世論の母である考え、突然の方向転換によって栄枯盛衰を転覆できる考えを放任する。

金山を発見するより、知を獲得する事が重要である。

知が有れば、金は命の役に立つ。

無知であれば、富は破滅の武器しか提供しない。

後は、エリファス レヴィの学問的な啓示は信心の前で止まる事を完全に理解するべきである。

エリファス レヴィの学問的な啓示は信心を侵害しない事を完全に理解するべきである。

キリスト教徒として、カトリック教徒として、エリファス レヴィは作品を教会の無上の判断に完全に従わせる事を完全に理解するべきである。

エリファス レヴィは、名前を持つものは存在すると、悪魔(と呼ばれているもの)の存在を疑う人々に指摘する。

言葉、名前を無駄に話す事が有るかもしれないが、言葉自体、名前自体は無駄であるはずが無い。

言葉、名前は常に意味を持っている。

神の言葉は無駄ではない。

ヨハネによる福音 10 章 38 節で神の言葉イエスは神の中にいると記されている理由、ヨハネによる福音 1 章 1 節で神の言葉イエスは神であると記されている理由は、神の言葉は存在、真実の表れ、証明だからである。

真実の、神の言葉である福音書で、悪魔(と呼ばれているもの)は名前が記されているし人格化されている。

悪魔(と呼ばれているもの)は存在するし、人格であると考えられる。

しかし、前記に、従うのはキリスト教徒だけである。

知または論理に話をさせよう。

知と論理は 1 つである。

悪魔(と呼ばれているもの)は存在する。

悪魔(と呼ばれているもの)が存在する事を疑うのは不可能である。

人は善か悪を行う。

悪と知りながら故意に悪を行う悪人が存在する。

悪人を突き動かす精神は、だまされている。

悪人を突き動かす精神は、正道から外れている。

悪人を突き動かす精神は、邪魔物、障害物として、善の経路を断つように、投げられて転倒している。

前記が、「悪魔」と翻訳しているギリシャ語「ディアボロス」の詳細な意味である。

(ギリシャ語「ディアボロス」の「ディア」は「分離」、「反対」、「交差」を、「ボロス」は「投げる」を意味する、という説が有る。)

悪を好み悪を行う精神は、意図しなくても、悪である。

したがって、誤った精神、意図して無知である精神、混乱の精神である悪魔(と言える悪人)が存在する。

悪の精神に従う悪人、悪魔の使者(と言える悪人)が存在する。

前記の理由から、福音書とヨハネの黙示録12章9節には、悪魔(と呼ばれているもの)と悪魔の使い(と言える悪人)に対して、永遠の火が、ある意味、運命づけられて、用意されている、と記されている。

前記の、悪魔(と言える悪人)についての言葉は啓示である。

そのため、悪を簡潔に定義して、悪魔(と言える悪人)の意味を探求しよう。

悪は存在における正しさの欠如である。

精神的な悪は行動における虚偽と成る。

嘘が言葉における罪である様に。

不正は嘘の核である。

全ての嘘は不正である。

言葉が正しい時、虚偽は無い。

行動が正しい時、罪は無い。

不正は精神的な存在にとっての死である。

嘘が知性にとっての毒である様に。

虚偽の精神は死の精神である。

悪の精神に聞き従う人々は、悪の手先に成る。

悪の精神に聞き従う人々は、悪の精神によって毒される。

けれども、仮に、悪の精神を悪魔という人格として解釈しなければ成らないのであれば、悪魔は完全な死、完全な虚偽であろう。

前記から、悪魔の存在の肯定は、完全な矛盾を意味するに違い無い。

ヨハネによる福音8章44節を意訳すると、悪魔の父(である悪人)と同じ様に、悪魔(と言える悪の精神)は嘘つきである、とイエスは話している。

悪魔の父は誰か？　悪人である!

悪い考えに従って生きる事によって人格的な存在を悪魔に与える悪人である。

悪い考えに従って生きる事によって悪魔を体現する悪人である。

悪魔を体現する悪人は、体現された悪の精神の父である。

ところで、軽率な、神を畏敬しない、恐るべき、ファリサイ派が自慢していた様に伝統的に成った、概念が存在する。

要するに、見せかけの弁護と共に、18 世紀の軽蔑するべき哲学で武装した、混ぜ合わせた創作物が存在する。

軽率な、神を畏敬しない、恐るべき、ファリサイ派が自慢していた様に伝統的に成った、概念、創作物とは、異端の口伝による偽のルシフェルである。

偽のルシフェルは、自らが神であると思うくらい傲慢な天使である。

偽のルシフェルは、永遠の責め苦と引き換えに独立を獲得するくらい勇敢である。

偽のルシフェルは、絶対の神の光の中でも、自身をたたえたくらい美しい。

偽のルシフェルは、闇の中でも、みじめな時でも、消せない(地獄の)火の王座を作るくらい強い。

偽のルシフェルは、異端によるサタンである。

偽のルシフェルは、共和派のジョン ミルトンによる「失楽園」のサタンである。

偽のルシフェルは、黒い不死者、邪神の偽の英雄である。

偽のルシフェルは、奇形によって中傷されている。

偽のルシフェルは、角と鉤爪で飾られている。

角と鉤爪は、悪魔への無慈悲な拷問器具に成る方が適している。

偽のルシフェルは、悪の王者である。

まるで悪が王国であるかの様に。

偽のルシフェルは、悪魔の手口を恐れる天才より狡猾である。

(1)偽のルシフェルは、黒い光、見える闇、神が望まない力、堕天した被造物である人が創造したわけではない力である。

(2)偽のルシフェルは、清い霊の位階制が罰する、無秩序の王者である。

(3)偽のルシフェルは、神によって国外に追放された者、地上では神の様に遍在する様に思われる者、神より実体の有る者、神より大衆にはっきり見える者、神よりも良く仕えられている者である。

(4)偽のルシフェルは、勝利者である神が、神の子と言える人類を、餌食として与えている、敗残者である。

(5)偽のルシフェルは、肉欲による罪の発明者、肉欲の創造者であり肉欲の主人であると神であるかの様に実際に考えなければ、肉欲が無価値である者、肉欲にとって無価値な者である。

(6)偽のルシフェルは、計り知れない、実現した、人格化した、永遠の、嘘である。

(7)偽のルシフェルは、死ねない、死である。

(8)偽のルシフェルは、神の言葉イエスが黙らせられない、神への冒涜である。

(9)偽のルシフェルは、神が神の全能性への対立者として黙認している、または、ローマの皇帝が統治の証拠品の１つとして女毒殺者ロクスタを保護していた様に神が取って置いている、人の魂を毒殺する者である。

(10)偽のルシフェルは、死刑中の罪人、悔い改めないので、神の裁きを呪うために未だ生きている者、神に対して不服を未だ申し立てている者である。

(11)偽のルシフェルは、無上の力である神が死刑執行人として黙認している奇形の者、ある古代のカトリックの作家の暴力的な表現によれば、神を悪魔の神と呼ぶ者、自身を神の悪魔と呼ぶ者である。

前記が、宗教を冒涜する反宗教的な妄想である。

私たちの救い主を隠す偶像である悪魔を追い払いなさい。

偽の権力者である悪魔を倒しなさい。

偽のマニ教の黒い神を倒せ。

古代の偶像崇拝者による偽のゾロアスター教における悪の神格化アーリマンを倒せ。

神と、人に成った神の言葉イエスが、永遠であります様に。

ルカによる福音 10 章 18 節でイエスはサタンが天から堕ちるのを見た。

地獄の蛇の頭を圧倒した聖母マリアが永遠であります様に。

前記が、神の様な者たちによる口伝の考えの一致した宣言である。

前記が、信心深い心を持つ人たちの宣言である。

大いなる何かを堕落した精神に属させる事は、神性について虚偽の宣伝をする事に成る。

王者らしい気高い何かを神に反逆している精神に属させる事は、神への反逆をそそのかす事である。

王者らしい気高い何かを神に反逆している精神に属させる事は、中世の憎むべき大衆でさえ「悪人の霊の魔術」と呼んでいた犯罪行為を心の中で犯す事である。

なぜなら、古代の「悪人の霊の魔術師」を死によって罰した罪は全て、現実の罪であり、実際に全ての罪の中で最悪の罪であった。

「悪人の霊の魔術師」は、プロメテウスの様に、天から火を盗んだ。

「悪人の霊の魔術師」は、星の光を盗んだ。

「悪人の霊の魔術師」は、メディアの様に、有翼の竜や空飛ぶ蛇に乗った。

「悪人の霊の魔術師」は、星の光に乗じた。

「悪人の霊の魔術師」は、雨の時に木陰にいると危険な毒の木であるマンチニールの木陰の様に、呼吸できる大気を汚染した。

「悪人の霊の魔術師」は、星の光を汚染した。

「悪人の霊の魔術師」は、神聖なものを冒涜した。

「悪人の霊の魔術師」は、星の光を冒涜した。

「悪人の霊の魔術師」は、聖体である清めたパンを破滅させる悪意の呪いの業に用いすらした。

前記は、なぜ可能なのか？

なぜなら、複合した代行者が存在する。

星の光が存在する。

代行者、星の光は、自然なものである、と共に、神のものである。

星の光は、肉体的である、と同時に、精神的である。

星の光は、普遍の柔軟な仲介者である。

星の光は、運動の振動と、形の映像の、共通の貯蔵所である。

星の光は、流体である。

星の光は、少なくとも、ある意味で、自然の想像力と呼べる、力である。

力、代行者、星の光の仲介によって、全ての神経組織は秘かに交流し合う。

星の光によって、共感と反感がもたらされる。

星の光によって、夢がもたらされる。

星の光によって、予見、超自然的な映像がもたらされる。

自然の運行の、普遍の代行者は、ヘブライ人のオドである。

自然の運行の、普遍の代行者は、ライヘンバッハの、オドである。

普遍の代行者は、マルティニストの、星の光である。

エリファス レヴィは、より明確なので、星の光と呼ぶのを好む。

星の光という力が存在する事と、星の光という力を利用できる事は、実践的な魔術の大いなる秘密である。

星の光は、奇跡の杖である。

星の光は、黒魔術の鍵である。

星の光は、堕天使の誘惑をエヴァに伝えた、エデンの創世記の古い蛇である。

星の光は、温める。

星の光は、照らす。

星の光は、磁化する。

星の光は、引き寄せ、斥ける。

星の光は、命を与え、破壊する。

星の光は、凝固させ、分離させる。

星の光は、全ての物を、分け、結合する。

星の光は、力が有る意思の刺激に従う。

創世記１章３節で、創世の第１日に、神が「光あれ」、「光が存在する様に」と話して創造した光は、星の光である。

星の光という力自体は、盲目的である。

ただし、エグリゴリは、星の光(の心の様な物)を傾けられる。

(

「エグリゴリ」はギリシャ語で「見張る者」を意味する。

エノク書にはエグリゴリは地上を見張る天使であったが堕天したと記されている。

)

エグリゴリは、集団の魂の先頭集団、言い換えると、力が有る自発的な精神の集団である。

前記に、不思議と奇跡の、完全な説明に役立つ、理論が存在する。

事実、どうして、正しい人と悪人が、同じ様に、自然の隠された力を自然に明らかにさせる事ができたのか？

どうして、神の聖霊の奇跡と、悪人の霊の奇跡が存在するのか？

どうして、堕落した誤った霊が、ある場合には、実際に純粋で知力が有る正しい霊より、力が有るのか？

大いなる善のためにも、大いなる悪のためにも、全ての人が、悪人ですら、ある条件では、応用できる道具(である星の光)を仮定しなければ、説明できないのではないか？　はい！

出エジプト記 7 章から 8 章で、最初は、ファラオの魔術師たちは、モーセと同じ奇跡を起こした。

したがって、モーセとファラオの魔術師たちが応用した道具は同じ(星の光)であった。

ただし、モーセとファラオの魔術師たちは霊感だけが違った。

出エジプト記 8 章 15 節でファラオの魔術師たちは「モーセは神の指です」と話して自ら負けを認めた。

出エジプト記 8 章 15 節でファラオの魔術師たちが「モーセは神の指です」と話した事実は、人の力には限界が有る事を明らかにしている。

(悪人の霊の力には限界が有る。)

出エジプト記 8 章 15 節でファラオの魔術師たちが「モーセは神の指です」と話した事実は、モーセに超人的な何かが有った事を明らかにしている。

出エジプト記 8 章 15 節でファラオの魔術師たちが「モーセは神の指です」と話した出来事は、魔術の秘伝伝授の母であったエジプト、全ての隠された知の国であったエジプト、位階的な神聖な教育の国であったエジプトで起きた。

出エジプト記 8 章 3 節の魔術でカエルを出現させる事より、出エジプト記 8 章 14 節の魔術で虫のブユを出現させる事が難しかったのか？　いいえ！

ファラオの魔術師たちは、目による星の光の流体的な放射が、ある限界を超えられない事を知っていた。

モーセは星の光の限界を超えていた。

星の光が脳に充満し過ぎると、独特な現象が起きる。

外の物質の代わりに、視覚が内心に向かう。

外の現実の世界に、夜のとばりが降りる。

夢の世界に、現実離れした素晴らしさが輝く。

肉眼ですらも弱く震え、まぶたの中で白目をむく。

想像の映像によって、魂は魂自体の印象と思考の反映を読み取る。

言い換えると、概念と形の間に存在する類推可能性が、星の光の中で、命の光の本質である形に対応する概念の反映を引き寄せる。

前記が、普遍の想像力である。

感覚と記憶の段階に応じて、多かれ少なかれ、人は普遍の想像力の一部を手に入れる。

全ての霊のあらわれの源、全ての驚くべき予見の源、狂気や忘我状態に特有の全ての直感的な現象の源は、普遍の想像力である。

直感による星の光の所有または同化は、科学が観測できる大いなる現象の１つである。

後記を、将来、理解できるかもしれない。

見る事は話す事である。

また、光の自覚は存在における永遠の命への夜明けである。

創世記１章３節の「光あれ」は光を創造した神の言葉である。

形を想像し、形が目に見える様に試みる、全ての知的存在も創世記１章３節の「光あれ」という神の言葉を話す。

光によって見る目のためにだけ、明るい表れ方で、光は存在する。

普遍の美の壮観に夢中に成っている魂、「表れている物」と呼ばれている永遠の書の光る文字に心を留めている魂は、創世記１章３節の第１日の夜明けにおける神の様に、「光あれ」という畏敬するべき創造する言葉を自ら叫ぶ様に思われる。

見る目は、全ての人が同じではない。

被造物は、全ての人にとって同じ色と形ではない。

人の脳は、内心と外の物で記された本である。

酩酊や狂気の場合に頻繁に起こる様に、少しでも興奮すると、脳に内心と外の物で記された物は不明確になる。

狂気の場合に、夢は、現実の命に勝利して、理性を覚めない眠りに陥れる。

夢の幻覚状態には段階が有る。

全ての肉欲は夢中状態である。

全ての夢中状態は段階的な熱狂に近い。

夢中に成っている人は、夢中に成っている対象を包含している無限の完全だけを見る。

しかし、魅惑の赤ワインの香りに例えられる、肉欲による不適切な夢中は、将来、吐き気に例えられる嫌悪を引き起こす、不快な記憶に成るであろう。

星の光にとらわれないで、星の光に圧倒されないで、星の光という力の応用を理解する事は、創世記 3 章 15 節の様に、蛇の頭をかかとで圧倒する事である。

星の光にとらわれないで、星の光に圧倒されないで、星の光という力の応用を理解する事、創世記 3 章 15 節の様に蛇の頭をかかとで圧倒する事を、人は光の魔術から学べる。

星の光にとらわれないで、星の光に圧倒されないで、星の光という力の応用を理解する秘訣、創世記 3 章 15 節の様に蛇の頭をかかとで圧倒する秘訣は、星の光、磁気の全ての神秘を含んでいる。

星の光、磁気という名前を、古代の超越的な魔術の実践的な部分全体につける事ができる。

星の光は奇跡の杖である。

しかし、秘伝伝授者にとってのみ、星の光は奇跡の杖である。

星の光で肉欲を助長するつもりである、または、星の光で遊ぶつもりである、無思慮な無学な大衆にとって、星の光は、象徴的なギリシャ神話によると、過ぎた望みを抱いたセメレの肉体を破壊したユピテルの周囲の激しい栄光の光と同じ様に、危険である。

星の光の大いなる利点の１つは、議論の余地の無い事実によって、魂の非物質性、魂の共感、魂の不死を実証する点である。

魂の非物質性、魂の共感、魂の不死を一度でも確認させれば、全ての知者と全ての心有る人々に、神の存在を証明できる。

そうすれば、神への信心と被造物の調和によって、超自然的な合法なカトリック教会の位階制の中にだけ存在する、大いなる宗教的な調和に、全ての知者と全ての心有る人々を導く事ができる。

なぜなら、カトリック教会だけが知と信心の全ての口伝を保存している。

イスラエルの祭司は唯一の啓示の最重要な口伝をカバラという名前の下に保存してきた。

カバラの教えは超越的な魔術の教えである。

「形成の書」、「光輝の書」、タルムードはカバラの教え、超越的な魔術の教えを含んでいる。

「形成の書」、「光輝の書」、タルムードが含んでいる、カバラの教え、超越的な魔術の教えによると、絶対のものは存在である。

絶対のものは存在する。

神は存在する。

神は神である。

神の言葉イエスは、絶対に、神の中に、存在する。

神の言葉イエスは存在と命の論理を表す。

「存在は存在である」、「存在は存在する」、「存在性は存在性である」、「ある存在は別の存在と存在性が同じである」、「ある存在と別の存在は存在するという意味で同じである」、「神は存在する」は原理である。

「存在は存在である」

「存在は存在する」

「存在性は存在性である」

「ある存在は別の存在と存在性が同じである」

「ある存在と別の存在は存在するという意味で同じである」

「神は存在する」

出エジプト記 3 章 14 節で אהיה אשר אהיה、AHIH AShR AHIH、エヘイエ アシェル エヘイエと神はモーセにヘブライ語で名乗った。

出エジプト記 3 章 14 節で神は「私は存在する。だから、何ものかである、私、神が存在する」、「私は存在したい様に存在する者である」、「私は存在の中の存在である」、「私は本物の存在である」、「私は幻ではない存在である」とモーセに名乗った。

ヨハネによる福音 1 章 1 節「最初から神の言葉は存在している」

ヨハネによる福音 1 章 1 節「最初から神の言葉は存在している」は、神の言葉が過去、現在、未来に存在している事を意味する。

最初から存在している神の言葉イエスは言葉の論理である。

ヨハネによる福音１章１節「最初から神の言葉は存在している」

神の言葉イエスは信心の論理である。

命を知に与える信心の表れは神の言葉イエスに存在する。

神の言葉ロゴスであるイエスは論理の無限の源泉である。

イエスは人に成った神の言葉である。

論理と信心の一致は、現代では、スフィンクスの真の謎に成った。

知と信心の一致、科学と信心の一致は、現代では、スフィンクスの真の謎に成った。

権利と自由の一致は、現代では、スフィンクスの真の謎に成った。

権利と自由の一致という大いなる問題と同時に、男性の権利と女性の権利についての問題が、あらわれた。

権利と自由の問題と同時に、男性の権利と女性の権利の問題が、あらわれたのは、必然である。

なぜなら、大いなる無上の問題の様々な関係の間には、不変の類推可能性が存在する。

また、対応が常に不変である様に、不一致は常に不変である。

哲学と近代政治学の「ゴルディアスの結び目」を解く事を、人は、明らかな矛盾として、あきらめている。

なぜなら、必須の均衡の２条件間の一致を達成するために、一方と他方を混同する傾向が常に存在する。

愚の骨頂と呼ぶに相応しい物が存在するとすれば、信心が論理に成る方法を調べる事、論理が信心に成る方法を調べる事、自由が権利に成る方法を調べる事は、愚の骨頂である。

女性性が男性性に成る方法を調べる事と、男性性が女性性に成る方法を調べる事は、愚の骨頂である。

定義自体が正反対のものの混同に介入する。

正反対の 2 条件を完全に区別する事によってのみ、正反対の 2 条件を一致に至らせる事ができる。

正反対の 2 つのものの類推可能性の力によって 2 条件の一致を実証するために、創造的な三段論法の 2 つの最重要条件を完全に永遠に区別する事は、隠された哲学の残りの大いなる原理である。

隠された哲学の残りの大いなる原理は、カバラという名前の下にヴェールで覆われている。

古代の聖所の全ての神の象徴は、隠された哲学の残りの大いなる原理を暗示している。

現在ですら少ししか理解されていない、古代と近代のメーソンの儀式が、隠された哲学の残りの大いなる原理を暗示している様に。

列王紀上 7 章 21 節で、ソロモンはボアズとヤキンという 2 つの青銅の柱をエルサレム神殿の門の前に立てた。

ボアズとヤキンは強いものと弱いものを意味する。

ボアズとヤキンは男性と女性を表す。

ボアズとヤキンは論理と信心を表す。

ボアズとヤキンは権利と自由を表す。

ボアズとヤキンは力と自由を表す。

ボアズとヤキンはカインとアベルを表す。

ボアズとヤキンは権利と義務を表す。

ボアズとヤキンは知の世界の 2 本柱、倫理道徳の世界の 2 本柱である。

ボアズとヤキンは、創造の大いなる法に不可避な、対立する２つのものの記念碑的な象徴である。

ボアズとヤキンは、全ての力が抵抗、反対の力を、力が上手く機能できる様に、要求する事を意味する。

ボアズとヤキンは、全ての光が影を、引き立て役として、要求する事を意味する。

ボアズとヤキンは、全ての凸面が凹面を、要求する事を意味する。

ボアズとヤキンは、全ての流入が容器を、要求する事を意味する。

ボアズとヤキンは、全ての統治が王国を、要求する事を意味する。

ボアズとヤキンは、全ての統治者、国王が国民を、要求する事を意味する。

ボアズとヤキンは、全ての達道者が第一質料を、要求する事を意味する。

ボアズとヤキンは、全ての勝利者が圧倒するべき何物かを、要求する事を意味する。

肯定は否定をあてにする。

強いものは弱いものによってのみ勝利できる。

凡人を超越する事によってのみ、貴族的な者は、あらわれる事ができる。

弱い者が強い者に成る事、凡人が貴族的な地位を獲得する事は、変革と進歩の問題である。

弱い者が強い者に成る事、凡人が貴族的な地位を獲得する事は、無上の原理を損なわない。

常に同じ人が弱い者でなければ、弱い者という地位が常に存在しても問題は無い。

同様に、凡人という地位は常に存在する。

凡人とは、統治されるが統治できない大衆である。

下位者という巨人的な戦う務めにおいて、個人としての解放は全て、自動的に、戦う務めの放棄である。

幸い、下位者からの解放は知覚できない。

なぜなら、下位者は自動的に補充される。

国民が全て国王である状態では、全ての人が奴隷である状態、唯一の首都における実質的な無政府状態による混乱状態、全くの無秩序状態が予想される。

最盛期のローマの様に。

権威者だけがいる教室と同じ様に、自分を教師と思い込んでいる学生だけがいる教室と同じ様に、国民が全て国王である状態は、実質的な無政府状態による混乱状態に必然的に成る。

国民が全て国王である状態では、他人の意見を聞く人は存在しないであろう。

国民が全て国王である状態では、全ての人が独断的に話して、他人に指図するであろう。

急激な過激な女性解放は無秩序と同じ範疇に陥る。

もし完全に徹底的に女性が受容的な状態を離れて自発的な状態に入ったら、女性は女性性を放棄して男性に成ってしまう。

と言うよりも、女性が男性に変わるのは物理的に不可能なので、もし女性が受容性を放棄したら、二重の否定により肯定に到達して、両性から外れ、女性は不妊の奇形の両性具有者の様な者に成ってしまう。

正反対の２つのもののつり合い、均衡による類推可能性によって、調和に到達できる、正反対の２つのものの区別についての大いなるカバラの教えによる厳しい正確な結論は、もし女性が受容性を放棄したら、女性は不妊の奇形の両性具有者の様な者に成ってしまうという物である。

カバラの教えを一度でも認知して、類推可能性の法によって、カバラの教えによる成果を普遍的に応用する事は、母的な共感と反感についての無上の大いなる秘密の発見を意味するであろう。

また、カバラの教えの応用は、政治の統治の知、結婚の営みの知、磁気の催眠術やホメオパシーや心的な感化という隠された薬の全ての均衡の管理の知の発見を意味するであろう。

さらに、説明する予定である様に、類推可能性の、つり合いの法は普遍の代行者、星の光の発見に導く。

星の光は中世の錬金術師と魔術師の大いなる秘密である。

星の光は命の光である、と言われている。

星の光は磁気を生きている存在に与える。

電気は、星の光が磁気を生きている存在に与える時に付随する振動に過ぎない、と言える。

秘密の学問において、知の有る教えよりも、心を動かす物に関心を持つ人を満足させるために、星の光という不思議なカバラの実践について手短に説明する予定である。

カバラの実践とは、普遍の代行者についての知、普遍の代行者の応用である。

カバリストの宗教は、仮説である、と同時に、確信である。

なぜなら、類推可能性の助けによって、カバリストの宗教は、既知のものから未知のものへ前進する。

カバリストは宗教が人にとって必要な物であると認めている。

カバリストは宗教が明らかな当然な事実であると認めている。

カバリストにとって、宗教だけが神の永遠不変の普遍の啓示である。

カバリストは存在するものについて論争しない。

カバリストは全てのものの論理をもたらす。

カバリストの教えは、知と信心の間に永遠に存在する必要が有る境界線を明確に区別する事で、無上の論理における基礎を信心にもたらす。

知と信心を区別するカバリストの教えは、論理における信心の基礎の議論の余地の無さと永遠の存続を保証する。

カバリストの教えは、論理における信心の基礎を保証した後で、大衆向けの諸形式をもたらす。

カバリストの教えの中で、大衆向けの諸形式だけが変化する場合が有り、相互に無効化し合う場合が有る。

カバリストは、大衆向けの諸形式の変化や無効化という小事にも平静なだけではなく、論理を驚くべき形式にも即座にもたらす事ができる。

そのため、カバリストの祈りは、知と論理の実例によって全ての人の祈りを傾けるために、全ての人の祈りを正統な道に引き寄せるために、全ての人の祈りに繋がり得る。

もし聖母マリアについて話したら、カバリストは、清らかな人の夢のうち神々しい夢が全て聖母マリアに実現している事、全ての母の心の神聖な熱意のうち畏敬できる熱意が全て聖母マリアに実現している事を、畏敬するであろう。

カバリストは、聖母マリアの祭壇を飾るための花々、聖母マリアの教会のための白幕、聖母マリアの気高い伝説のために涙を流す事でさえも、拒まない者である。

カバリストは、飼葉桶という卑しい所で泣く生まれたばかりの神イエス、ゴルゴタの丘の十字架で犠牲に成って傷つけられて血を流す神イエスを、笑いものにしない者である。

カバリストは、心の底から、イスラエルの賢者の様に、イスラムの信者の様に、「神以外に神は存在しない」、「唯一の神だけが存在する」と、やはり、くり返して話す。

本物の知の秘伝伝授者にとって、「唯一の神だけが存在する」は「実に、唯一の存在だけが存在する。そして、唯一の存在とは神である」を意味する。

信心のうち適切な感動的な全ての物。

儀式の輝き。

神々しい被造物の美。

祈りの優美。

神々しい望みの不思議な力。

信心のうち感動的な物、儀式の輝き、神々しい被造物の美、祈りの優美、神々しい望みの不思議な力は、心の命の若さと美しさによって、心の命が放つ光ではないか？　信心のうち感動的な物、儀式の輝き、神々しい被造物の美、祈りの優美、神々しい望みの不思議な力は、心の命の若さと美しさによって、心の命が放つ光である！

仮に、何物かが、本物の秘伝伝授者を、公の祈りと公の神殿から引き離すとすれば、仮に、何物かが、全ての種類の宗教の形式に対する、吐き気に例えられる嫌悪や義憤を、秘伝伝授者に催(もよお)させるとすれば、祭司のあからさまな不信心や、大衆のあからさまな不信心が、秘伝伝授者を公の祈りと公の神殿から引き離し、吐き気に例えられる嫌悪や義憤を秘伝伝授者に催させる。

宗教の儀式における不敬が、秘伝伝授者を公の祈りと公の神殿から引き離し、吐き気に例えられる嫌悪や義憤を秘伝伝授者に催させる。

要約すると、祭司のあからさまな不信心、大衆のあからさまな不信心、宗教の儀式における不敬は、神の物への冒涜である。

集中している魂、思いやりの有る心が神を敬礼すると、神は存在を本当に表す。

心の光が無い人、熱意が無い人が神について論ずると、あからさまに、神は不在に成られる。

言い換えると、理解や思いやりが無い人が神について論ずると、あからさまに、神は不在に成られる。

ヘブライ人への手紙11章6節で使徒パウロは、「神へ近づくには、神が存在する事と、神が神を求める人に報いてくれる事を信じる必要が有る」と話して、学の有るカバラと一致する、適切な神の概念を明かした。

善の概念と正しさの概念と結合している、神の概念だけが存在する。

神の概念、善の概念、正しさの概念だけが絶対である。

神は存在しないと話す事や、神の在り様を制限して定義する事は、神への冒涜に等しい。

人の知力によって推測した、神の定義は全て、宗教的な経験による方法である。

迷信は、人の知力によって推測した神の定義から、悪魔の存在を誤って推測した。

カバラの象徴では、常に、対の象徴で、神を表す。

カバラの象徴では、立っている物と転倒している物で、神を表す。

カバラの象徴では、白い物と黒い物で、神を表す。

白い神の象徴と、黒い神の象徴で、賢者は、神の概念についての知者の理解と、神の概念についての大衆の理解を表そうと試みた。

白い神の象徴と、黒い神の象徴で、賢者は、光の神の概念と、影の神の概念を表そうと試みた。

黒く悪いのに全ての悪魔の神の様な祖であるペルシャのアーリマンの起源は黒い神の象徴への誤解である。

実に、地獄の王者の妄想は神についての誤った概念である。

影が無いと光は人の目には見えないであろう。

なぜなら、影が無いと、光は、無上の闇に等しい、圧倒的な眩しさを人の目に見せるであろう。

影が無いと光は人の目には見えないという物質的な真理からの類推可能性によって、適切に理解し考えると、悪の起源という無上の畏敬するべき問題の１つへの解答が見つかるであろう。

しかし、悪の起源からの全ての結果をともなう、悪の起源の完全な理解を大衆には与えない。

大衆は普遍の調和の秘密を安易に推測するなかれ。

エレウシスの秘儀の秘伝伝授者が、全ての試練に勝利して通過して、神のものを見たり触れたりした後に、秘伝伝授者は最後の無上の畏敬するべき秘密に耐えられる十分な強さを持っていると祭司が判断したら、ヴェールをかぶった祭司が、飛ぶ様な速さで秘伝伝授者を追い越しながら、「オシリスは黒い神である」という謎の言葉を秘伝伝授者の耳にだけ、ささやいた。

オシリスの神託をもたらす者はセト、ティフォン、ピュトンである。

オシリスはエジプトの神学的な宗教的な太陽の様な者である。

「オシリスは黒い神である」という言葉によって、オシリスという太陽の様な者は、突然、影を投じる。

「オシリスは黒い神である」という言葉によって、オシリスという太陽の様な者は、大いなる定義不可能なイシスの影に成る。

イシスは過去と未来の全てである。

イシスの永遠のヴェールを外した人は存在しない。

カバリストにとって、光は自発的な原理である。

対して、闇は受容的な原理に似ている。

そのため、カバリストは太陽と月を男性と女性という神聖な性の象徴、2 つの創造の力の象徴とした。

また、カバリストは最初の誘惑と最初の罪を女性の物とした。

そのため、カバリストは最初の労苦、罪をつぐなう母的な労苦、産みの苦しみを女性の物とした。

闇の中から光は復活する。

空間は充満を引き寄せる。

貧しさの深淵、みじめさの深淵、偽悪、無価値と誤解されているもの、被造物である人による神に対する一時的な反乱は、存在するもの、命、豊富さ、思いやりを大海の様に多く永遠に引き寄せる。

闇の中から光は復活する事、空間は充満を引き寄せる事は、十字架の上で無上の不思議な許しの無限を全て満ちあふれさせた後に冥界へ降臨したイエス キリストという象徴を説明する。

同様の、正反対の 2 つのものの類推可能性による調和の法によって、カバリストは性行為をともなう愛の全ての神秘を説明する。

なぜ性欲は 2 つの性の違いが大きいほど、より長持ちするのか？

なぜ愛において、犠牲にする者と犠牲に成る者が必ず存在するのか？

満足させるのが不可能に思われる肉欲は、なぜ克服し難いのか？

正反対の 2 つのものの法によって、カバリストは男性と女性の優先権の問題を一度に永遠に解決した。

19 世紀前半のサン シモン主義者は大真面目に男性と女性の優先権の問題を提起したが。

女性の自然の力は慣性の力や抵抗の力である。

女性の自然の力、慣性の力、抵抗の力は、謙虚を無上の絶対の女性の権利にしている。

女性の自然の力、慣性の力、抵抗の力は、女性が、ある種の男性的な謙虚の無さが必要に成る物を望んだり行ったりする事を禁止している。

そのため、自然は甘美な柔和な声を女性に与えた。

自然は、おかしな耳ざわりな高音にしないと大きな集会で聞こえない様な声を女性に与えた。

男性の役割を望む女性は女性の特典を失うはずである。

どこまで女性が男性性を奪えるかは知らない。

しかし、女性が男性的に成ると、少なくとも、確実に、女性は男性の愛を失うであろう。

さらに、女性には酷かもしれないが、女性が男性的に成ると、少なくとも、確実に、女性は子どもたちの愛を失うであろう。

カバリストの夫婦の法は、父をもたらす。

カバリストの夫婦の法は、類推可能性によって、論理と信心の一致という、近代の哲学の最も興味深い難しい問題への解答をもたらす。

カバリストの夫婦の法は、類推可能性によって、権利と良心の自由の一致をもたらす。

カバリストの夫婦の法は、類推可能性によって、知と信心の一致をもたらす。

知が太陽であれば、信心は月である。

夜中、月は太陽の光を反射する。

知の前後で知が未だ残している未知という闇の中、信心は理性を補佐する。

信心は理性から発するが、信心と理性は混同できないし、信心は理性を混乱させない。

論理が信心の領域を侵害するのは月食である。

信心が論理の領域を侵害するのは日食である。

論理の太陽と信心の月の混同である日食や月食が起こると、光の源泉の論理の太陽と光の反射体の月の信心は共に無用の長物に成る。

信心が形骸化すると、知は堕落する。

信心が形骸化すると、知が堕落すると、信心は論理の上に倒れる。

神殿を支えるには、知と信心という神殿の 2 つの柱を対等に区別する必要が有る。

神殿の 2 つの柱を引き寄せて倒したサムソンの様に、神殿の 2 つの柱を力で無理に引き寄せて一緒くたにすると、神殿の 2 つの柱は倒れる。

神殿の 2 つの柱を一緒くたにして倒すと、神殿全体が盲信者、狂信者、革命家の上に倒れる。

盲信者、狂信者、革命家が買った、個人の恨みや国家の恨みは、前もって、盲信者、狂信者、革命家を死の運命に定める。

人の全時代の、聖職者と世俗の権力争いは、家庭の運営についての口論であった。

世俗の権力の父の位を奪おうと試みた、法王が統治しているカトリック教会は、父に嫉妬した母であった。

そのため、カトリック教会は幼子の信頼を失ってしまった。

聖職者の王位を奪おうと試みた、世俗の権力は、家と育児室の運営方法について母親より知っているふりをした男性に劣らず、滑稽な男性であった。

例えば、イギリス人の憂うつから察する事ができる様に、倫理道徳と宗教の観点から、イギリス人は、男性が産着にくるんで拘束してしまった、幼子に似ている。

宗教の教えが御伽話(おとぎばなし)に似ている時、宗教の教えが倫理道徳的に巧妙で為(ため)に成る場合、宗教の教えは幼子に完全に適合する。

宗教の教えが御伽話(おとぎばなし)に似ている時、宗教の教えが倫理道徳的に巧妙で為(ため)に成る場合、宗教の教えを否定する父親は、とても愚かである。

御伽話(おとぎばなし)、歌、家族の世話を母親に独占させなさい。

母は祭司の象徴である。

カトリックの祭司が結婚といった男性の権利を捨て事前に父に成る権利を他の男性に譲るのは、ひとえに、教会が母である必要が有るからである。

法王が統治しているカトリック教会は普遍の母であるのを決して忘れるなかれ。

多分、プロテスタントが女性の法王ヨハンナという醜聞の作り話を作った。

女性の法王ヨハンナは策略的な遠回しな表現に過ぎない。

権力を持った法王が世俗の権力者を酷使した時、夫である男を叩こうと試みた女性の法王ヨハンナの作り話が、キリスト教世界の大いなる醜聞に成ったのである。

キリスト教の分裂、党派、異端は、夫である男を叩こうと試みた女性の法王ヨハンナであった。

別居中の夫婦の様に、カトリック教会とプロテスタントは、互いを悪く言い合い、後悔し、相手を避けるのを見せびらかし、相手に不満を抱いている。

カバラだけが全てを説明し全てを和解、一致させる。

カバラが他の全ての教え、他の全ての考えに命を与えて実り豊かにする。

カバラは何ものも破壊しない。

それどころか、カバラは論理を、存在する全てのものに与える。

世界の全ての力はカバラに仕える。カバラは唯一の無上の知である。

真のカバリストは、見せかけではなく、欺く事無く、賢者や熱心な信者が所有している知を思い通りに応用できる。

真のカバリストは、ジョゼフ ド メーストル以上の、カトリックである。

真のカバリストは、ルターより、プロテスタントの様に、カトリックの腐敗に抗議する。

真のカバリストは、チーフ ラビより、ヘブライ人である。

(

chief rabbi、チーフ ラビはユダヤ教の地域の代表者、ユダヤ教の宗教的指導者である。

ヘブライ人は正しい人の例えの場合が存在する。

)

真のカバリストは、ムハンマドより、預言者である。

真のカバリストは形骸化したものと真理をくもらせる肉欲を超越していないか？　真のカバリストは形骸化したものと真理をくもらせる肉欲を超越している！

真のカバリストは思い通りに、鏡の諸破片により反射された、分散した光線を１つにできないか？　真のカバリストは思い通りに、鏡の諸破片により反射された、分散した光線を１つにできる！

鏡は、普遍の宗教、普遍の神の教え、カトリックの例えである。

鏡の諸破片は、根本的に異なる多数の諸宗教という大衆の誤解の例えである。

唯一の存在が存在する。

唯一の神が存在する。

唯一の法が存在する。

唯一の宗教が存在する。

唯一の人類だけが存在する様に。

出エジプト記３章14節で אהיה אשר אהיה、AHIH AShR AHIH、エヘイエ アシェル エヘイエと神はモーセにヘブライ語で名乗った。

出エジプト記３章14節で神は「私は存在する。だから、何ものかである、私、神が存在する」、「私は存在したい様に存在する者である」、「私は存在の中の存在である」、「私は本物の存在である」、「私は幻ではない存在である」とモーセに名乗った。

唯一の神、法が存在するという知と心の高みに昇ると、人の知と心は深い平和に入る、と理解するであろう。

「深い平和を、神の子の兄弟、同胞、正しい人よ」とは高い位階のメーソンの主要な言葉であった。

メーソンはカバラの秘伝伝授者の結社であった。

偽のグノーシス主義の神への冒涜によって、カトリック教会は魔術に対しての戦いを余儀無くされた。

本質的に、魔術師の本物の知はカトリックである。

魔術師の全ての実現は位階の原理を基礎としている。

カトリック教会には唯一本物の絶対の位階が存在する。

常に、本物の達道者は無上の深い畏敬と恭順をカトリック教会に示してきた。

ハインリッヒ クンラートだけは確かにプロテスタントであったが、ハインリッヒ クンラートが、永遠の神の王国の神秘的な住人と言うよりは、当時のドイツ人であったためである。

反キリストの本質は排他と異端である。

使徒ヨハネの美しい表現によると、「反キリストはイエス キリストの体を分裂させる事である」。

「反キリストはイエス キリストを分裂させる全ての精神である」

分裂が反キリストなのは、宗教が他のものへの思いやりだからである。

分裂が反キリストなのは、無政府状態には他者への思いやりが無いからである。

キリスト教の世界だけではなく魔術の世界にも、無政府主義者が存在した。

キリスト教の世界だけではなく魔術の世界にも、党派を捏造する者と党派の支持者が存在した。

キリスト教の世界だけではなく魔術の世界にも、悪人の霊の魔術師が存在した。

エリファス レヴィの目的は、無知、詐欺、愚考による王位簒奪から、知の正しさを守る事である。

特に、知の正しさを守るという点で、エリファス レヴィの作品、作業は有益であろう。

エリファス レヴィの作品、作業が全く新しい様に。

エリファス レヴィの「魔術の歴史」以外の、今までの「魔術の歴史」という名前の本は、予断による歴史であった。

または、エリファス レヴィの「魔術の歴史」以外の、今までの「魔術の歴史」という名前の本は、多少正確な、特異な出来事の順序の歴史であった。

なぜなら、魔術は知に属する、と信じた人がいなかった。

魔術という知の再発見による、本物の「魔術の歴史」は魔術の成長または進歩を十分に説明する必要が有る、と言える。

エリファス レヴィは、残骸の中ではなく、開かれた聖所の中を歩いている。

そうして、エリファス レヴィは、長い間、四大文明の残骸に埋もれていた、聖所を発見する。

発掘によって枯れた美しさと風格が明らかに成った、ベスビオ火山の火砕流などの下でミイラの様に保存されたポンペイ市といった諸都市より、聖所は不思議に保存されていた。

大作でボシュエは宗教が至る所で歴史と結びついているのを明らかにした。

しかし、ある意味、世界と共に生まれた、魔術という知が、無上の議論の余地が無い数学と論理の原理による繋がりにより唯一普遍の宗教に属している、古代の諸宗教の教えの説明をもたらす、という事を仮にボシュエが知ったら、ボシュエは何と言ったであろうか？

魔術の教理は、歴史哲学には未だ計り知れない、全ての秘密の鍵である。

魔術の実践だけが、自然の秘密の神殿を強い人の意思に明かす。

人の意思は、常に制限されているが、常に進歩できる。

エリファス レヴィは、魔術によって、宗教の神秘についての、不信心な虚偽の説明をしない。

エリファス レヴィの目的は、魔術によって、宗教の神秘を認知して畏敬する様に学問を圧倒できる、と表す事である。

理性は信心の前で自身を卑下する必要が有る、と最早、言われたくない。

逆に、理性は信じる事によって自身を畏敬する必要が有る。

なぜなら、信心は、深淵の一歩手前で、空虚の恐怖から、理性を守る。

また、信心は、理性を無限の神に結びつける物である。

宗教における正統性は、単一性の唯一の守護者として、位階制を畏敬する事である。

恐れず、くり返して話すと、本質的に、魔術は位階制の知である。

後記を、明確に心に留めなさい。

他の何よりも、魔術は無秩序の教えを非難する。

魔術は無秩序の考えを非難する。

まさに、自然の法は、調和を力や権利と分裂できない、という事を実証している。

大多数の好奇心旺盛な大衆にとって、魔術の主な魅力は、肉欲を満足させる超常的な手段を魔術によって体験する事である。

不信心者の限界も、肉欲を満足させる超常的な手段を魔術に求める好奇心旺盛な大衆と、同程度である。

貪欲な人は「錬金のヘルメスの秘密は存在しない」と否定するであろう。

なぜなら、貪欲な人は「錬金のヘルメスの秘密が存在するのであれば、人は錬金のヘルメスの秘密を買って富を楽しむはずである」と話すであろう。

しかし、錬金のヘルメスの秘密といった秘密が売られていると信じている貪欲な人は愚かである。

錬金できる人に富が何の役に立つのか？

疑い深い人は「錬金のヘルメスの秘密は存在していたとしても売られはしない、というのは正しい。しかし、エリファス レヴィ、エリファス レヴィは錬金のヘルメスの秘密を所有しているのに、エリファス レヴィは金持ちではないのか？　エリファス レヴィは金持ちではないので錬金のヘルメスの秘密は存在しない！」と話す。

誰が「エリファス レヴィは貧しさで困っている」と話したか？　エリファス レヴィは「エリファス レヴィは貧しさで困っている」と話していない！

エリファス レヴィが他人に物乞いをしたであろうか？　エリファス レヴィは他人に物乞いをした事が無い！

エリファス レヴィから知の秘密を買収したと自慢できる俗世の権力者が、どこにいるのか？　エリファス レヴィは知の秘密を俗世の権力者に金銭で売らない！

エリファス レヴィが運による富を億万長者と見比べたと信じる理由を与えた億万長者が、どこにいるのか？　エリファス レヴィは運による富を億万長者と見比べない！

富に圧倒されて、富を俗世的に見上げると、富を最高の幸福の様に望むかもしれない。

しかし、富を超越して、富を熟考すると、富を軽蔑するであろう。

いかに魅力が富に無いか気づいた者は、富が熱い鉄であるかの様に、富から手を引く事ができる。

若い男は「もし魔術の秘密が本当に存在するのであれば、全ての女から性的な愛着を獲得したい！」と叫ぶであろう。

この世の女の性的な愛着は良い物ではない。

思慮の乏しい幼子よ、この世の女の１人分の性的な愛着ですら、ひど過ぎる、という時が来るであろう。

なぜなら、性欲は二重の熱中であり、すぐに、性欲の酔いは吐き気に例えられる嫌悪をもたらす。

吐き気に例えられる嫌悪にともなって、性欲の酔いは怒りと離別をもたらす。

世界を転覆させて乱すために魔術師に成りたがった、老いぼれた愚か者が昔いた。

しかし、世界を乱すために魔術師に成りたい人よ、大それた人よ、もし、あなたが魔術師に成れたら、あなたは愚かではいられないであろう。

世界を乱す罪人に成ったら、自分の良心という裁きの場を前に、自分でも情状酌量の余地を自分に見つけられないであろう。

快楽主義者は永遠に楽しみ全く苦しまない方法を魔術に求める。

マタイによる福音5章4節で神の知イエスが「悲しむ人は幸いである(。なぜなら、悲しむ人は、いつか慰めてもらえる)」と話している様に、キリスト教と仏教といった宗教が教えている様に、神の知が快楽主義者に自ら、あらわれて「苦しむ人は幸いである」と話す。

(コリント人への第1の手紙1章24節「キリストは神の知」)

しかし、そのため、快楽主義者は宗教を信じる心を失った。

マタイによる福音5章4節「悲しむ人は幸いである(。なぜなら、悲しむ人は、いつか慰めてもらえる)」

マタイによる福音5章4節「悲しむ人は幸いである。なぜなら、悲しむ人は、いつか慰めてもらえる」という約束を、快楽主義者は笑いものにする。

経験と論理が何と話しているか聞きなさい。

苦しみは思いやりの感情を試して目覚めさせる。

快楽は先天的なものである卑しい肉欲を助長して強める。

苦しみは快楽に対して人を武装させる。

快楽は苦しみにおける弱さを人にもたらす。

快楽は浪費する。

苦しみは入手する。

快楽は人には危険な岩である。

産みの苦しみは女性の勝利である。

受胎させ妊娠させるものは快楽だが、産むものは苦しみである。

苦しむ力と苦しむ意思が無い人には災いが有る!

苦しみは、苦しむ力と苦しむ意思が無い人を圧倒するであろう。

自然は動く意思が無い人を無慈悲に駆り立てて動かす。

大海の中に投じる様に、神は人を人生の中に投じた。

人は人生という大海を泳ぐ必要が有る。

人は、人生という大海を泳がなければ、溺れて死んでしまう。

前記が、超越的な魔術が教える様に、自然の法である。

必ず楽しみ全く苦しまないために魔術師に成れるかどうか再考しなさい。

俗世の大衆は「魔術は何の役に立つのか?」と問うであろう。

仮に、民数記22章でバラムに3回叩かれても忍耐したバラムのロバが「知は何の役に立つのか?」とバラムに問うたら、民数記22章の神託を受けた者バラムはバラムのロバに何と答えるであろうか?

(民数記22章でバラムを神罰で殺そうと道で待っていた天使の存在を見て知ったバラムのロバのおかげでバラムの命は助かった。)

もし小人のピュグマイオイが「力は何の役に立つのか?」とヘラクレスに問うたら、ヘラクレスは小人のピュグマイオイに何と答えるであろうか?

(

小人のピュグマイオイは眠っているヘラクレスを縛ろうとしたが、ヘラクレスが目覚めたので縛れなかった、という伝説が存在する。

ヘラクレスは力のおかげで小人のピュグマイオイから助かった。

)

俗世の大衆を小人のピュグマイオイに例えたくは無いが。

俗世の大衆を民数記 22 章のバラムのロバに例えるのは無理だ。

俗世の大衆を小人のピュグマイオイに例えるのは、無礼に成り、趣味が良くないであろう。

立派な良い人である俗世の大衆に可能な限り無礼が無い様に趣味の良い様に話すと、「俗世の大衆にとって魔術は全く何の役にも立たない」。

さらに理解できる様に話すと、「俗世の大衆は魔術に真剣に取り組まないであろう」。

「魔術の歴史」は、労苦し考える魂のために存在する。

「魔術の歴史」で、労苦し考える魂は、「高等魔術の教理」と「高等魔術の祭儀」では曖昧なままだった物の説明を見つけるであろう。

大いなる達道者たちの模範に従って、神の数の論理的な秩序に従って、エリファス レヴィは「魔術の歴史」を構想して分ける。

そのため、「魔術の歴史」を 7 巻に分ける。

「魔術の歴史」の各巻を 7 章に分ける。

魔術の起源を「魔術の歴史」の第 1 巻に記す。

「魔術の歴史」の第 1 巻は魔術という知の創世記である。

文字アレフを鍵として「魔術の歴史」の第 1 巻に与える。

カバラでは文字アレフは最初の単一を表す。

「魔術の歴史」の第２巻は古代の魔術の言葉の歴史的な社会的な形式を含んでいる。

「魔術の歴史」の第２巻の象徴は文字ベトである。

文字ベトは、実現する言葉の表れとして、２つ１組を象徴する。

文字ベトは、グノーシスと隠された学問を表す。

(

グノーシスは認知を意味する。

グノーシスは霊感を認めた学問を意味する。

)

「魔術の歴史」の第３巻はキリスト教社会における古代の知の実現について記されている。

「魔術の歴史」の第３巻では、どの様に神の知イエスのために神の言葉イエスが受肉したか記す。

(コリント人への第１の手紙１章 24 節「キリストは神の知」)

数３は創造の数である。

数３は実現の数である。

「魔術の歴史」の第３巻の鍵は文字ギメルである。

文字ギメルは出現の象形文字である。

「魔術の歴史」の第４巻で、未開の民族における魔術の文明化の力を記す。

「魔術の歴史」の第４巻で、未だ初期段階の民族、未だ幼子の段階の民族における魔術という知の自然発生を記す。

「魔術の歴史」の第４巻で、ドルイドの神秘と奇跡を記す。

「魔術の歴史」の第４巻で、吟遊詩人バードによる伝説を記す。

「魔術の歴史」の第４巻で、未開の民族の魔術、ドルイドの神秘、吟遊詩人バードによる伝説が、どの様に近代社会の形成に結びつくか記す。

未開の民族の魔術、ドルイドの神秘、吟遊詩人バードによる伝説は、近代社会の形成に結びついて、キリスト教の輝かしい永遠の勝利を用意する。

数４は自然と力を表す。

ヘブライ文字では文字ダレトが数４を表す。

カバリストのタロットでは４ページ目に王座の上の皇帝を描いて文字ダレト、数４を表す。

中世の聖職者の時代を「魔術の歴史」の第５巻に記す。

「魔術の歴史」の第５巻で、学問の争いを記す。

「魔術の歴史」の第５巻で、秘密結社の形成を記す。

「魔術の歴史」の第５巻で、秘密結社の知られていない功業を記す。

「魔術の歴史」の第５巻で、グリモワール、魔術書の秘密の儀式を記す。

「魔術の歴史」の第５巻で、神曲の神秘を記す。

「魔術の歴史」の第５巻で、栄光の統一に導かれるに違い無い、教会の分裂を記す。

数５は、第５元素、宗教、祭司の数である。

数５の文字は文字ヘーである。

魔術のアルファベットであるタロットでは５ページ目に大祭司を描いて文字ヘー、数５を表す。

「魔術の歴史」の第６巻で、革命活動における魔術の介在を記す。

数６は、普遍の総合を用意する、対立と戦いの数である。

数６に対応する文字はヴァウである。

文字ヴァウ、וは創造する男性器と刈り入れる者の鎌である。

「魔術の歴史」の第７巻は、総括である。

「魔術の歴史」の第７巻で、近代の活動と発見を説明する。

「魔術の歴史」の第７巻で、光と磁気の理論を記す。

「魔術の歴史」の第７巻で、大いなる薔薇十字団の秘密を明かす。

「魔術の歴史」の第７巻で、神秘のアルファベットであるタロットを説明する。

「魔術の歴史」の第７巻で、言葉の知と、言葉の魔術的な作用を記す。

「魔術の歴史」の第７巻で、知の要約を記す。

「魔術の歴史」の第７巻で、19 世紀の神秘主義者の活動を批評する。

「魔術の歴史」の第７巻は、「魔術の歴史」を完成する。

「魔術の歴史」の第７巻は、「魔術の歴史」の極致である。

７つ１組、数７が数の極致である様に。

数７は概念の三角形と形の正方形を結びつける。

数７に対応する文字はザインである。

カバラの象徴のタロットの７ページ目には２頭のスフィンクスが引く戦車の上に乗った勝利者が描かれている。

カバラの勝利者を気取る、おかしな、うぬぼれはエリファス レヴィには無い。

知だけが勝利するべきである。

エリファス レヴィが知的な世界の人に見せたいのは、２頭のスフィンクスが引く、立方体の戦車に乗った、光の神の言葉イエスである。

イエスは、モーセのカバラの神の成就者、実現者である。

イエスは、福音の、人の太陽である。

イエスは、救い主として、かつて来られ、すぐに、いつか、あらわれる、人に成った神である。

救い主イエスは、創世の、最終的な、絶対の王である。

イエスについての思想が、エリファス レヴィの大胆さを鼓舞し、エリファス レヴィの希望を支える。

ただし、エリファス レヴィの全ての考え、発見、作業を位階制による誤りが無い絶対の判断、カトリックの判断に委ねるに留める。

知の物は神が知を委ねた者に。

宗教の物は教会だけに。

宗教の物は位階制の教会だけに。

(マタイによる福音 22 章 21 節「カエサルの物はカエサルに、神の物は神に」)

位階制の教会は、単一性を保護するものである。

位階制の教会は、イエス キリストの時代から現代までの、カトリック、使徒ペトロの教会、法王の教会、ローマの教会である。

発見は学者に。

願望と信心は司教に。

父と母より賢いと誤解している幼子には災いが有る!

祖師に感謝しない大人には災いが有る!

孤立して思考し祈る夢見る人には災いが有る!

命は普遍の交流である。

命の普遍の交流の中に永遠は存在する。

自ら孤立した人は孤立によって死に身を任せる事に成る。

永遠の孤立は永遠の死であろう。

エリファス レヴィ

第 1 巻 魔術の起源

アレフ

第 1 巻 第 1 章 伝説における魔術の起源

後記の様に、外典の「エノク書」には記されている。

「地の女性達と交わるために堕天に同意した天使達がいた。
なぜなら、当時、人の子孫は増え、大いに美しい女性達が生まれた。
(創世記 6 章 1 節から 2 節『人が地上に増え、女性達が生まれた。神の子達、天使達は人の女性達が美しいのを見た』)
天使達、神の子達は、地の女性達を見て、肉欲に満ちあふれてしまった。
(創世記 6 章 2 節『神の子達、天使達は人の女性達が美しいのを見た』)
天使達は『さあ、人の子孫から妻を選んで、子を作ろう』と話し合った。
(創世記 6 章 2 節『神の子達、天使達は選んだ人の女性達を妻にした』)
天使達の指導者シェムハザは『恐らく、あなた達は堕天の決意の実行に必要な勇気に欠けているであろう。そのため、私だけが、あなた達の堕天の責任をとる事に成るであろう』と天使達に答えて話した。
そこで、天使達は『私達は、後悔しないで、地の女性達を手に入れる計画を完全に成し遂げる』と誓った。
ヘルモン山に堕天した堕天使達は 200 人であった。
堕天使達が堕天した時から、堕天使達が堕天した山はヘルモン山と呼ばれている。
『ヘルモン山』は『誓いの山』を意味する」

続けて、エノク書にはヘルモン山に堕天した堕天使達の指導者達の名前が記されている。

「全ての堕天使達の指導者シェムハザ、

Urakabarameel、Azibeel、Tamiel、Ramuel、Danel、Azkeel、Sarakuyal、アザエル、

Armers、Batraal、Anane、Zavebe、Samsaveel、Ertrael、Turel、Jomiael、Arazial。

堕天使達は地の女性達を妻にして交わった。

そして、堕天使達は魔術、誘惑のわざ、根と木の様々な特性を地の女性達に教えた。

Amazarac は悪人の霊の魔術師の全ての秘密を教えた。

Barkaial は星々を観察する人の教師であった。

Akibeel は象徴を明かした。

Azaradel は月の運動を教えた」

　カバラの書「エノク書」の伝説と、創世記のアダムの罪の歴史は、大衆への神秘の情報流出を象徴的に話している。

　エノク書の「堕天使達」、「神の子達」は魔術の秘伝伝授者達である。

　魔術は、エノク書の秘伝伝授者達から、不用心な女性達を通じて、俗人に情報流出してしまった。

　エノク書の秘伝伝授者達は、肉体的な物質的な感覚にひかれて、魔術を女性達に教えてしまった。

　エノク書の秘伝伝授者達は、女性に夢中に成ってしまった。

　エノク書の秘伝伝授者達から、意に反して、王者と祭司の秘密は情報流出してしまった。

　魔術の情報流出の結果として、最初の文明は崩壊した。

巨人は肉欲的な力、たがが外れた肉欲の象徴である。

　巨人どもは世界を求めて争い合った。

　大洪水の中に水没する事だけが世界が助かる道であった。

　大洪水の中に、過去の全ての形跡は消え去った。

　大洪水は、人が自然の調和を無視して踏みにじると必然的に人にもたらされる普遍の混乱の象徴である。

　シェムハザの堕天とアダムの堕落には類似が存在する。

　肉体的な物質的な誘惑がシェムハザとアダムを誘惑した。

　シェムハザとアダムは善悪の知の木を汚した。

　神はシェムハザとアダムを命の木から遠ざけた。

　全てを文字通りに解釈して、知と命が木の形で太古に存在していたと信じ込んでいる大衆の見解、と言うよりは、大衆の愚鈍さについて論じるのは不要であろう。

　文字通りにではなく、神の象徴には深い意味だけが存在するのを認めよう。

　善悪の知の木の果実を食べると、善悪の知の木は死をもたらす。

　善悪の知の木の果実は、この世の飾りである。

　善悪の知の木の果実、黄金のりんごは、地の輝き、地の光である。

　フランスのパリのアルスナル図書館には「the Penitence of Adam(アダムの悔い改め)」という非常に興味深い手書きの本が存在する。

　後記の様に、「the Penitence of Adam(アダムの悔い改め)」にはカバラの口伝がキリスト教の伝説を装って記されている。

「アダムにはカインとアベルという 2 人の息子がいた。

カインは肉欲の力の象徴である。

(巨人が肉欲の力の象徴である様に。)

アベルは知と思いやりの象徴である。

一致団結は、カインとアベルには不可能であった。

カインとアベルは相互に無効化し合った。

カインとアベルが相続したものはアダムの第３の息子セトへ移った」

　カイン、アベル、セトの例え話は、正反対の２つの力の葛藤が、総合の一致の力へ役立つ様に変わる事を意味する。

「セトは、正しい人であったので、智天使ケルブと火の剣に脅かされずに、地上の楽園の入り口まで近づく事を許された」

　要するに、セトは古代の秘伝伝授の象徴である。

「セトは、善悪の知の木と、命の木が、唯一の木の形で一体化しているのを見た」

　善悪の知の木と命の木の一体化は、超越的なカバラによる知と宗教の一致を意味する。

「天使は、善悪の知の木と一体化した命の木の、命の力が込められている、３つの種をセトに与えた」

　３つの種は、カバラの３つ１組を意味する。

「アダムが死んだ時、セトは、天使の指示に従って、永遠の命の象徴として、3 つの種を父アダムの口の中に入れた。

3 つの種から若木が芽吹き、出エジプト記 3 章の燃える柴に成った。

出エジプト記 3 章 14 節で、燃える柴の中から、神は אהיה אשר אהיה、AHIH AShR AHIH、エヘイエ アシェル エヘイエという神の名前をモーセに教えた。

אהיה אשר אהיה、AHIH AShR AHIH、エヘイエ アシェル エヘイエは『私は存在する。だから、何ものかである、私、神が存在する』、『私は存在したい様に存在する者である』を意味する。

モーセは、出エジプト記 3 章の燃える柴から、3 つ 1 組の枝を選んで抜き出して取り、奇跡の杖、モーセとアーロンの杖として用いた。

モーセとアーロンの杖は、燃える柴の根から切り離されていたが、命を保ち続けて開花し続けた。

アーロンの杖は契約の箱の中に保存された。

ダヴィデ王はアーロンの杖をシオンの山に植えた。

ソロモンは、アーロンの杖の 3 つ 1 組の幹の各部から木材を取って、ボアズとヤキンという 2 つの柱を作った。

ソロモンは、ボアズとヤキンをエルサレム神殿の入り口に置いた。

ソロモンは、ボアズとヤキンを青銅で覆った。

ソロモンは、ボアズとヤキンの第 3 の部分をエルサレム神殿の入り口に組み込んだ。

ボアズとヤキンは、汚れたものがエルサレム神殿の中に入るのを防ぐタリスマンであった。

しかし、何人かのレヴィ族の邪悪な人間が、邪悪な自由に対しての障壁と成るボアズとヤキンを、夜中に、引き抜き、石の重荷を乗せて、ヨハネによる福音 5 章のベトサダの池の底に投げ捨てた。

ボアズとヤキンが投げ捨てられた時から、神の使者、天使が、ヨハネによる福音 5 章のベトサダの池の水を混ぜて、病気を治すという奇跡の性質をベトサダの池の水に与えた。
(ヨハネによる福音 5 章 4 節『天使がベトサダの池の水を混ぜる事が有った。天使がベトサダの池の水を混ぜた後に最初にベトサダの池に入った人の病気は治った』)
天使は、ヨハネによる福音 5 章のベトサダの池の水を混ぜて病気を治す性質を与える事によって、ベトサダの池の深みに存在するソロモンの木ボアズとヤキンの探求から人の注意をそらした。
イエス キリストの時代に、ヘブライ人は、ヨハネによる福音 5 章のベトサダの池を洗浄して、木の柱ボアズとヤキンを発見した。
ヘブライ人の目にはボアズとヤキンが無価値に見えたので、ヘブライ人は、ボアズとヤキンを、都市エルサレムの外に運んで、ヨハネによる福音 18 章のケデロンの谷に橋として架かる様に投げ捨てた。
救い主イエスは、ヨハネによる福音 18 章で夜中にオリーブ山のゲッセマネの園でとらわれた後に、ヨハネによる福音 18 章のケデロンの谷の橋ボアズとヤキンを渡った。
イエスの死刑執行人どもは、ヨハネによる福音 18 章のケデロンの谷の橋ボアズとヤキンから、イエスを水の中に投げ込んだ。
イエスの死刑執行人どもは、急いで、イエスの受難の、重要な手段である十字架を用意した。
イエスの死刑執行人どもは、ボアズとヤキンから十字架の木材を取った。
イエスの十字架は 3 種類の木で作られた。
イエスの死刑執行人どもは、ボアズとヤキンで、十字架を形成した」

「the Penitence of Adam(アダムの悔い改め)」の例え話は、カバラの大いなる口伝と、現在では全く知られていない使徒ヨハネの秘密のキリストの教えを、具体的に例示している。

「the Penitence of Adam(アダムの悔い改め)」の例え話によると、セト、モーセ、ダヴィデ、ソロモン、イエス キリストは、同じカバラの木から、王笏と大祭司の杖を獲得した。

「the Penitence of Adam(アダムの悔い改め)」の例え話によって、マタイによる福音 2 章で、なぜ 3 人のマギが飼葉桶という卑しい所にいるイエス キリストを敬礼したのか理解できる。

エノク書に戻ろう。

なぜなら、不明の手書きの文書である「the Penitence of Adam(アダムの悔い改め)」より、エノク書は典拠が多い。

ユダの手紙 1 章 14 節から 15 節でエノク書 60 章 8 節と 1 章 9 節を引用している。

口伝ではエノクが文字を発明した。

そのため、「形成の書」に含まれている教えの起源はエノクまで遡るに違い無い。

「形成の書」はカバラの基礎の作品である。

ラビによると、「形成の書」の編集者は 21 祖アブラハムである。

(ラビはヘブライ語で師を意味する。)

21 祖アブラハムは、7 祖エノクの秘密の継承者である。

21 祖アブラハムは、イスラエルでの秘伝伝授の父である。

エノクが古代エジプトのヘルメス トリスメギストスである、と思われる。

有名なトートの書タロットは象徴と数によって描かれている。

エノクのタロットは、モーセの聖書と全ての神秘より前から存在する、隠された聖書である。

秘伝伝授者ギヨーム ポステルは、著書で頻繁に、エノクの創世記という名前で、タロットについて話している。

創世記 5 章 24 節とエノク書で、エノクは他の人の様に死なないで神がエノクを天へ連れて行った、と記されている。

時の終わりに、エノクは、地上に戻り反キリストを破る。

時の終わりに、エノクは、ヨハネの黙示録 11 章の 2 人の真理の証人の 1 人、2 人の最後の殉教者の 1 人に成るであろう。

エノクの考えが死なないといった意味で聖書がエノクについて話している事は、カバラが全ての大いなる祖達について口伝で話している事でもある。

ヨハネによる福音 21 章 23 節でヨハネは死なないといううわさが初期のキリスト教徒達に広まった。

墓の中で使徒ヨハネが息をしているのが見られると長い間、信じられていた。

エノク、ヨハネ達についての話は、命についての完全な知は魂などを死から守ってくれる、という事を説明している。

直感が常に大衆を推測へ導く様に。

宗教を信じるべきであるといった、推測へ直感が常に大衆を導く様に。

タロットとエノク書は現存しているエノクの記録である。

タロットには象徴が描かれている。

エノク書には例え話が記されている。

タロットは秘伝伝授の祭司だけの鍵である。

エノク書は魔術の情報流出の歴史である。

巨人どもが支配的に成った事の原因、古代の世界の崩壊の原因、混乱が支配的に成った事の原因は、魔術の情報流出である。

オリュンポスのメトディオスまたはパタラのメトディオスは、キリスト教の初期の時代の司教である。

教会の教父が集めた文書の中に、メトディオスの文書が存在する。

メトディオスは「メトディオスの予言書」という予言の黙示録を書き残した。

「メトディオスの予言書」は、一連の幻視と予見によって、世界の歴史を明らかにしている。

「メトディオスの予言書」は、偽書であるとしてメトディオスの文書とは認められていないが、グノーシス主義者は「メトディオスの予言書」を保存した。

編者不明のフランスの予言集「ミラビリス リベル(驚異の書)」の中で「パタラの司教ベメコブスの書」という「ベメコブス」という名前で「メトディオスの予言書」は印刷された事が有る。

活版印刷で手書きの文を活字の組み合わせに変換する人が無学だったので、「福者メトディオス」を意味する「ベアトゥス メトディオス」を省略した「ベア メトディオス」を「ベメコブス」に誤変換してしまった。

いくつかの点で「メトディオスの予言書」は「the Penitence of Adam(アダムの悔い改め)」の例え話と符合する。

「メトディオスの予言書」には、どのようにしてセトが家族と共に東へ移動して地上の楽園に近い山に至ったか記されている。

セトの地は秘伝伝授者の故郷と成った。

インドでカインの子孫は偽の魔術、地に堕ちた魔術、悪人の霊の魔術を発明した。

インドは弟殺しカインの地と成った。

インドのカインの子孫は悪人の霊の魔術を無思慮な人に手に入れさせた。

メトディオスは、イシュマエルの子孫であるアラブ人との戦いと、アラブ人の優勢を予言している。

黙示録「メトディオスの予言書」でメトディオスはアラブ人をローマ人を圧倒した人と呼んでいる。

メトディオスはアラブ人を圧倒したフランク人の統治を予言している。

次に、メトディオスは北からの大民族が支配的に成る事を予言している。

次に、メトディオスは個人的な反キリストが支配的に成る事を予言している。

次に、メトディオスは世界的な王国が建てられる事を予言している。

メトディオスは世界的な王国がフランスの王の手中に収まる事を予言している。

次に、長期の多年の、正義の統治が存在する事を予言している。

「魔術の歴史」第 1 巻でエリファス レヴィは予言を扱わない。

メトディオスが善の魔術と悪の魔術を区別している事に注目して欲しい。

メトディオスがセトの子孫の聖所とカインの子孫による知の冒涜を区別している事に注目して欲しい。

事実、超越的な知は自身の肉欲を超越した人のために用意されている。

処女である自然は結婚の寝室の鍵を姦淫な人には渡さない。

自由な人と、肉欲の奴隷である人という、2 種類の人が存在する。

人は自身の肉欲に縛られて生まれ落ちるが、人は知によって肉欲からの自由に到達できる。

既に自由である人と、肉欲から未だ自由ではない人の間に、平等は可能性すら存在しない。

理性の分け前は統治する事である。

先天的なものである肉欲の分け前は統治される事である。

それに反して、もし盲人に盲人を導かせれば、盲人は諸共に穴に堕ちるであろう。

(マタイによる福音 15 章 14 節「もし盲人が盲人を導けば、盲人は諸共に穴に堕ちるであろう」)

法から解き放たれた肉欲による自由奔放には、自由は存在しない事を忘れてはいけない。

法から解き放たれた肉欲による自由奔放は、最も憎むべき横暴である、と分かるであろう。

法に従っても良いと思う意思に、自由は存在する。

自由とは、自分の義務を果たす権利が存在する事である。

正しい人だけを自由である人と呼ぶ事ができる。

自由である人が肉欲の奴隷である人を統治するべきである。

肉欲の奴隷は、自由である人の統治からではなく、肉欲の束縛から自由に成る事を求められている。

肉欲の束縛のせいで、肉欲の奴隷は主無しでは存在できない。

一度、超越的な知の真理を認めなさい。

従わせられる、ある力が実際に存在して、力によって自然の驚異的な成果を人の意思に従わせられると仮定しなさい。

力が存在して、力によって自然の驚異を人の意思に従わせられる場合、富の秘密と共感の鎖を貪欲な人に委ねられるかどうか言ってみなさい。

富の秘密と共感の鎖を貪欲な人には委ねられない。

誘惑術を放蕩者には委ねられない。

他人の意思を統治する力を、自身の完全な統治に到達できない人には委ねられない。

富の秘密と共感の鎖を貪欲な人に、誘惑術を放蕩者に、他人の意思の統治力を自身を統治できない人に委ねる冒涜がもたらす混乱を思うと恐ろしい。

全てのものが汚泥と血に染まった時、地上の罪を消し去るには、大洪水が必要である。

世界が大洪水に水没する、エノク書に記されている天使の堕天の歴史の例え話が表す混乱とは、富の秘密と共感の鎖を貪欲な人に、誘惑術を放蕩者に、他人の意思の統治力を自身を統治できない人に委ねた冒涜がもたらす混乱である。

他人の意思の統治力を自身を統治できない人に委ねるといった冒涜は、善悪の知の木の果実を食べて冒涜したアダムの罪である。

大洪水は、善悪の知の木の果実による、死に至る結果である。

エノク書の大洪水は、創世記のノアの大洪水と、ノアの大洪水による破壊である。

大洪水は、創世記 9 章 25 節のノアからハムの子カナンへの呪いである。

創世記 9 章 22 節で父ノアの裸を兄弟にさらしたハムの無礼は、隠された秘密の大衆への口外を象徴する。

(マタイによる福音 28 章 19 節 父である神)

創世記 9 章 21 節のノアの酩酊は、全ての時代の祭司のための教訓である。

神聖な生殖の秘密、神の生成の秘密を大衆の不純な物の見方にさらす人には災いが有る!

眠っている父をハムの模倣者に笑いものにされたく無い人は皆、聖所を閉ざしなさい。

秘伝伝授者と大衆の区別は、人の位階の法についての、セトの子孫の口伝である。

カインの子孫は、秘伝伝授者と大衆の区別を認めなかった。

インドのカインの子孫は、権力者の圧制を正当化し、弱者の無知を永続させる、偽の創世記を捏造した。

インドでは秘伝伝授がカーストの最上位の聖職者だけの特権に成ってしまった。

インドのカーストは、生まれた身分が低いという口実によって、人類全体を永遠の奴隷の運命に定める様な代物である。

「リグ ヴェーダ」では、カーストの下位に生まれた人は、神ブラフマー、最初の巨人プルシャの両腿か両足から生まれた、と話している。

王者と奴隷は自然には生じない。

全ての人は(王者に成るため)労苦するために公平に生まれる。

人は生まれた時は完全であるが社会によって退化して堕落する、と主張する人は、狂った無政府主義者である。

狂った無政府主義者は夢見がちな狂人かもしれないが。

ルソーは、無駄に、感傷的な夢見がちな人であった。

ルソーの深い暗黙の人間嫌いは、狂信的な支持者の論理がルソーの本を解釈した時、憎悪と破壊の実を結んだ。

スイスのジュネーブの多感な哲学者ルソーが想像した理想郷の、言行に矛盾が無い創造者は、恐怖政治の独裁者ロベスピエールと恐怖政治の指導者マラーであった。

個人の頑迷さの責任が有り得る抽象的な個性は社会には無い。

社会は人々の共同体である。

人々が悪いせいで共同体である社会は悪く成る場合も有るし、人々が良いと共同体である社会は素晴らしい物に成る場合も有る。

ただし、社会自体は神聖な物である。

社会と密接に不可分に結びついている、宗教自体は神聖な物である様に。

事実、宗教は無上の希望と強い努力の共同体ではないか？　宗教は無上の希望と強い努力の共同体である!

前記の様に、社会秩序を乱す平等による、義務に逆らう権利による、社会という神聖な物への冒涜に対して、インドのカーストの特権階級である聖職者などの虚偽に対して、自然は答えを出した。

権威を自己犠牲に与える事によって、社会のため自尊心を犠牲にする人を無上の大いなる人として公然とたたえる事によって、法のため欲望を犠牲にする人を無上の大いなる人として公然とたたえる事によって、キリスト教の精神だけがインドのカーストという問題を精神的に解決した。

ヘブライ人は、セトの口伝の保管者であったが、セトの口伝を全く純粋に保存しなかった。

ヘブライ人は、カインの子孫の不正な野心に汚染された。

ヘブライ人は、肉体的に選ばれた民であると誤信して、神が真理をヘブライ人に世襲財産として与えたと誤解した。

神は真理をヘブライ人に人類全体のために保証として預けた。

「形成の書」の崇高な口伝と並行して、タルムードの学者どもによる奇怪な暴露が存在する。

例えば、タルムードの学者どもはヘブライ人以外による偶像崇拝を 21 祖アブラハムのせいにして、はばからない。

タルムードの学者どもは、21 祖アブラハムが本物の神の名前の知を相続財産として 22 祖イサクの子孫に残した、と話している。

言い換えると、タルムードの学者どもは、カバラは 22 祖イサクの子孫の正統な世襲の所有財産である、と話している。

そして、タルムードの学者どもは、21 祖アブラハムがヴェールに覆われた教えと隠された謎の神の名前を正妻以外の妻ハガルとの子イシュマエルの子孫であるアラブ人に与えた、と話している。

タルムードの学者どもは、21 祖アブラハムがイシュマエルの子孫であるアラブ人に与えた、ヴェールに覆われた教えと隠された謎の神の名前が、速やかに物質化して、偶像に変質した、と話している。

父アブラハムは偽の宗教、非論理的な神秘、オリエントの迷信、恐怖の生贄という何という物を、追い出した妻ハガルと子イシュマエルの子孫であるアラブ人に与えたのか？　いいえ！　父アブラハムは偽の宗教、非論理的な神秘、オリエントの迷信、恐怖の生贄といった物を、追い出した妻ハガルと子イシュマエルの子孫であるアラブ人に与えていない！

妻ハガルと子イシュマエルを荒野に追い出しただけでは不足だったのか？　いいえ！

父アブラハムは唯一のパンと水の袋を妻ハガルと子イシュマエルに与えたが、父アブラハムは偶像といった虚偽の重荷を追放生活の苦しみと毒として妻ハガルと子イシュマエルに更に与えたのか？　いいえ！　父アブラハムは偶像といった虚偽の重荷を妻ハガルと子イシュマエルに与えていない！

キリスト教の栄光は、キリスト教が、知と徳で区別はするが、人種差別無しに、カースト差別無しに、全ての人を真理に招待した事である。

マタイによる福音７章６節でキリスト教の神の初祖イエスは「豚に真珠を捨てるな。豚が真珠を踏みにじるといけないからである。豚があなたの方を向きあなたを引き裂くといけないからである」と話している。

(

豚は悪人の例えである。

真珠は知の例えである。

)

ヨハネの黙示録は、イエス キリストの教えに関連する、全てのカバラの秘密を含んでいる。

「光輝の書」と同様に、ヨハネの黙示録は、わかり難い書物である。

ヨハネの黙示録は、数と象徴で、わかり難く記されている。

ヨハネの黙示録で使徒ヨハネは秘伝伝授者の知を求める。

例え話を話したり謎の数を与えたりした後に、ヨハネの黙示録 13 章 18 節で使徒ヨハネは「知が必要である。(知が有る者は理解しなさい。)理解が有る者は(獣の)数を数えなさい」と話している。

イエスの愛弟子である、救い主イエスの全ての秘密の受託者である、使徒ヨハネは、大衆が理解できる様にヨハネの黙示録を記さなかった。

「形成の書」、「光輝の書」、ヨハネの黙示録は、隠された学問の傑作である。

「形成の書」、「光輝の書」、ヨハネの黙示録は、言葉より多くの意味を含んでいる。

「形成の書」、「光輝の書」、ヨハネの黙示録は、表現方法が、詩の様に、象徴的である。

「形成の書」、「光輝の書」、ヨハネの黙示録は、表現方法が、数式の様に、正確である。

ヨハネの黙示録はアブラハムとソロモンの全ての知を要約、補完、超越している。

ヨハネの黙示録はアブラハムとソロモンの全ての知を要約、補完、超越している事を、超越的なカバラの鍵の説明によって、エリファス レヴィは証明するつもりである。

少なからず、「光輝の書」の最初の深い意味と映像の崇高な簡潔さを見ると驚く。

後記の様に、「光輝の書」の最初には記されている。

「つり合いの知は、隠された知の鍵である。

つり合っていない力は無に消え去る。

そのため、古代の世界の権力者ども、巨人の権力者どもは消え去った。

権力者どもは、根が無い木の様に、転倒して地に堕ちた。

権力者どもの居場所は、もう無かった。

神の霊が独力で天に場所を作ったり水を集めるまで、つり合っていない力の葛藤によって、荒れた地は形が無く空(から)であった。

(

創世記１章２節『地は形が無かった。地は空であった。神の霊が水の面を覆っていた』

創世記１章６節『神は、水の間に天が存在する様に、と話した』

創世記１章９節『神は、天の下の水が唯一の場所に集まる様に、乾いた地が表れる様に、と話した』

)

そして、自然の全ての目標は、形の統一体へ、つり合っている力の生きている総合体へ向かった。

光をかぶっている神の顔が広大な海の上に昇った。

神の顔は水に反映された。

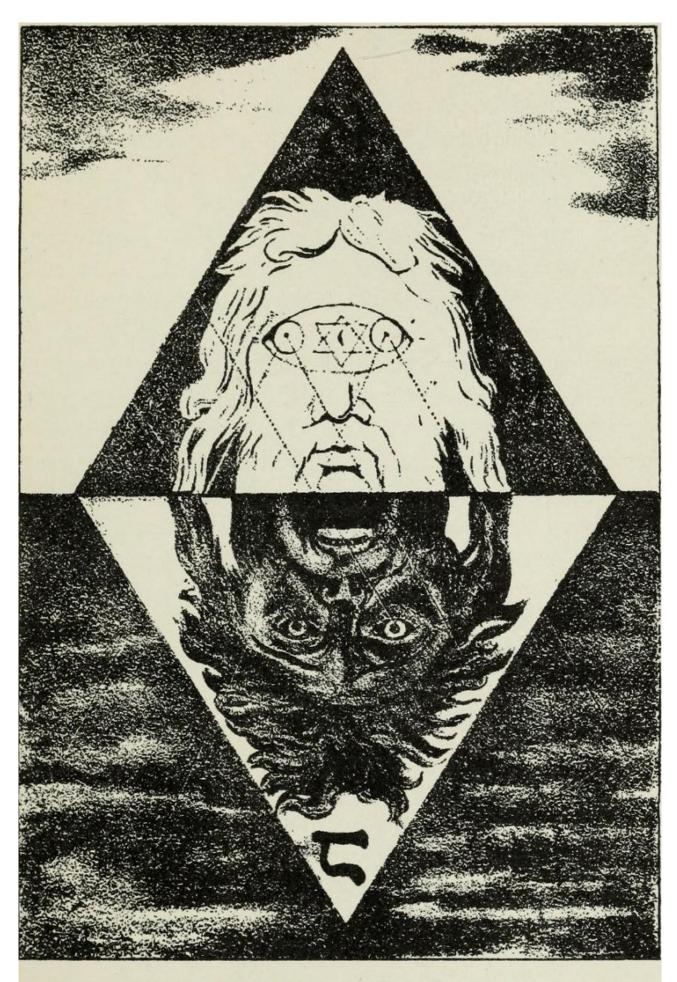
神の２つの目が輝いて光を放った。

神が２つの目から放っている２つの光線は、水が反射した２つの光線と交わった。

神の額と２つの目は三角形を天に形成した。

神の額と２つの目の反映は第２の三角形を水に形成した。

前記の様にして、神は数６を啓示した。

数６は世界の創造の数である」

THE MAGICAL HEAD OF THE ZOHAR

前記は、文字通りのままでは理解できない「光輝の書」の最初を説明、解釈、通訳した文書である。

「光輝の書」の著者は「神を人の形で記しているが、著者の意図を表現したに過ぎない。神は人の思考による表現を超越している。神は全ての形による表現を超越している」と明らかにしている。

パスカルは「神は中心が全ての場所に存在する円周の無い円である」と話している。

しかし、どのようにしたら円周の無い円の中心を想像できるであろうか？　円周の無い円の中心は想像できない！

「光輝の書」の著者ならば、「神は中心が全ての場所に存在する円周の無い円である」というパスカルの矛盾した表現の正反対を選んで、パスカルの様に神を円に例えて、「神は円周が全ての場所に存在する中心が無い円である」と話したであろう。

しかし、「光輝の書」では、ものの普遍のつり合いを天秤に例えた。

「光輝の書」では、ものの普遍のつり合いを円に例えなかった。

「光輝の書」には「つり合いは全ての場所に存在する。つり合わせられる、つり合いの中心点は全ての場所に存在する」と記されている。

パスカルの思想より、「光輝の書」の思想は説得力が有り深いとわかる。

続けて、後記の様に、「光輝の書」の最初で著者は崇高な夢想を記している。

「人の形をした、神の言葉という総合体は、太陽が昇る様に、ゆっくりと昇って、水の中から表れた。

神の２つの目が表れると、光を創造した。

神の口（くち）が表れると、霊を創造し、神の言葉を表した。

神の頭が全て表れると、創造の第１日が終わった。

神の両肩、2 つの腕、胸が表れると、作業が始まった。

神の形は、一方の手で海を押し返し、他方の手で大陸と山を立ち上げた。

神の形は表れていく。

神の生殖器官が表れると、全ての存在は充実し増え始めた。

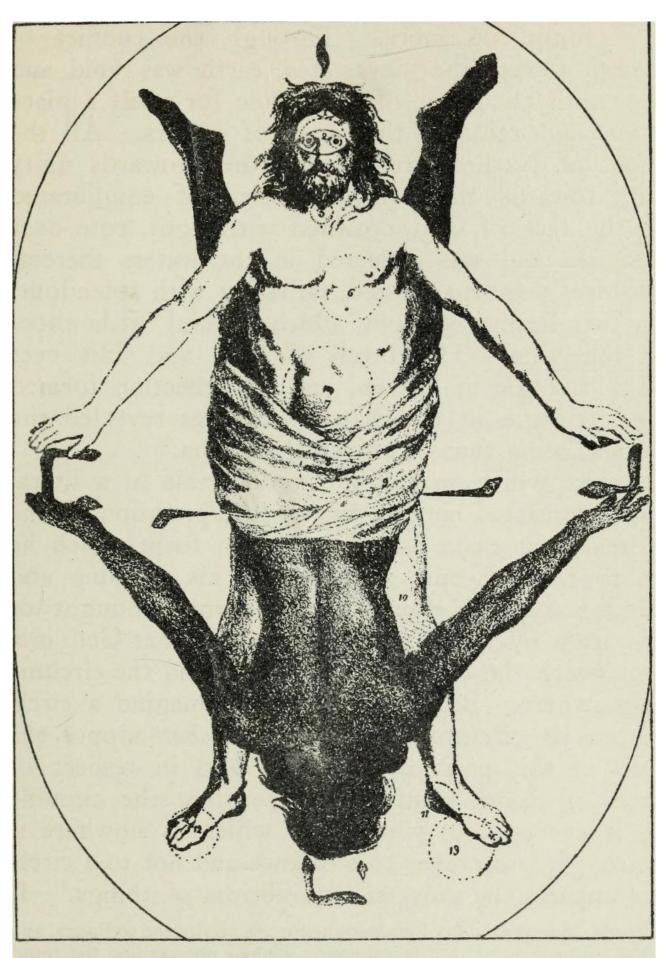
神の男性器が表れると、全ての存在は充実し増え始めた。

ついに、一方の足を地の上に置き、他方の足を水の上に置いて、神の形は立った。

体を長々と伸ばして、神の形は創造の大海の中の自身を見た。

神の形は自身の反映に息を吹きかけた。

神の形は自身の反映を命に招待した。

神の形は『人を創造しよう』と話すと、人を創造した」

THE GREAT KABALISTIC SYMBOL OF THE ZOHAR

人の典型である神の言葉という総合体が成就した創造という「光輝の書」の最初の映像の様な美しさは、他の全ての詩人の傑作には存在しない。

「光輝の書」に従うと、人は影の影である。

人は神の力の体現者である。

人の典型である神の言葉という総合体の様に、人は手を東から西へ伸ばす事ができる。

人の典型である神の言葉という総合体は、地を人に領地として与えた。

人の典型である神の言葉という総合体が、カバリストの「アダム カドモン」、「最初のアダム」、「最初の人」である。

(ヘブライ語で Kadmon、カドモンは最初を意味する。)

神の言葉という総合体は人の典型である事が、カバリストが「アダム カドモン」、「最初のアダム」、「最初の人」を巨人として描いている意味である。

人の典型である神の言葉という総合体が世界を創造した事が、夢でカバラの記憶にとりつかれていたスヴェーデンボルグが「創造の全体は唯一の巨人である」、「神は人を世界の形に創造した」と話している理由である。

「光輝の書」は光の創世記である。

「形成の書」は真理のはしごである。

(創世記 28 章 12 節「ヤコブは夢をみた。1 つのはしごが地の上に立っていた。はしごは天に達していた。天使がはしごを上り下りしていた」)

「形成の書」は言葉の 32 の絶対の象徴を説明している。

「形成の書」が説明している、言葉の 32 の絶対の象徴とは、1 から 10 までの 10 の数と 22 文字のヘブライ文字である。

各ヘブライ文字は数、概念、形をもたらす。

そのため、数と概念と形における正確なつり合いと完全な対応という力によって、数学を数に応用できると共に、数学を概念と形に応用できる。

「形成の書」の知によって、人の精神を真理と論理に根づかせる事ができる。

「形成の書」は、1から10までの数の展開によって、可能な限りの全ての進歩の理由を人の知性に説明する。

　前記の様に、「光輝の書」は絶対の真理を表す。

「形成の書」は、絶対の真理の、獲得方法、識別方法、応用方法をもたらす。

第 1 巻 第 2 章 マギの魔術

トートやヘルメスという名前の様に、十中八九、ゾロアスターという名前は象徴的な名前である。

エウドクソスとアリストテレスによると、ゾロアスターはプラトン誕生の 6000 年前に(紀元前 6427 年頃に)活躍した。

ゾロアスターはトロイア戦争の約 500 年前に(紀元前 1700 年以前に)活躍したと話している人たちがいるが。

ゾロアスターは古代のバクトリアの王の 1 人であるとして話している人たちが時々いるが。

2 人か 3 人の同名異人のゾロアスターが存在したと話している人たちがいる。

エウドクソスとアリストテレスだけがゾロアスターの魔術的な性格を理解していた、と思われる。

なぜなら、エウドクソスとアリストテレスは順に、ゾロアスターの教えの誕生、既知の世界全体のカバラ時代、プラトンの哲学の神秘的な統治があったと話している。

事実、ゾロアスターと、偽のゾロアスターという、2 人のゾロアスターが存在した。

言い換えると、神秘を明かしたゾロアスターと、神秘を大衆へ口外した偽のゾロアスターという、2 人のゾロアスターが存在した。

ゾロアスターは、アフラ マズダーの子である。

ゾロアスターは、啓蒙された教えの初祖である。

偽のゾロアスターは、アーリマンの子である。

偽のゾロアスターは、真理の冒涜的な大衆への口外を始めた者である。

ゾロアスターは、古代のカルデア人、メディア人、ペルシャ人にとっての、人に成った神の言葉である。

ゾロアスターの伝説は、イエス キリストの伝説についての予言の様に読める。

そのため、普遍のつり合いの魔術の法に従って、ゾロアスターに対して、反キリストに相当する偽のゾロアスターが存在したに違い無いと類推できる。

物質的な火の崇拝と善悪二元論という神の両極性に対する不信心な考えである、拝火教と呼ばれるゾロアスター教は、偽のゾロアスターのせいにする必要が有る。

後世に、偽のゾロアスターによるゾロアスター教は、マニの奇形の偽のグノーシス主義のマニ教と、偽のメーソンの虚偽の原理をもたらした。

偽のゾロアスターは物質化された魔術の父である。

偽のゾロアスターの魔術は、マギの大虐殺をもたらした。

偽のゾロアスターの魔術は、最初は正しかったマギの教えを、大衆に迫害させた。

偽のゾロアスターの魔術は、最初は正しかったマギの教えを、大衆に忘却させた。

常に真理の霊が霊感を与えている、教会は、魔術、マニ教、神秘主義、メーソンという名前の下に、古代の偽のゾロアスターによる神秘の大衆への口外に多かれ少なかれ似たものを全て迫害せざるをえなかった。

例えば、有名な神殿騎士団の歴史の様に。

今日まで大衆は神殿騎士団を誤解している。

本物のゾロアスターの教えは純粋なカバラの教えと、同じである。

ゾロアスターが神に対して抱いていた考えは、教会の教父が神に対して抱いていた考えと、同じである。

ゾロアスターと、カバラまたは教会は、名称だけが違う。

例えば、ゾロアスターの３つ１組は、キリスト教の三位一体である。

ゾロアスターは、縮小無しに、分割無しに、３つ１組の中の１つ１つに３つ１組が存在すると主張した。

ゾロアスターによる３つ１組の中の１つ１つに３つ１組が存在するという表現は、キリスト教の神学者が三位一体の相互内在として理解しているものである。

３つ１組による３つ１組の増殖によって、3組の３つ１組によって、ゾロアスターは、数９という絶対の論理と、全ての数と形の普遍の鍵に到達した。

キリスト教徒が三位一体と呼んでいる者を、ゾロアスターは３つの深さと呼んでいる。

ゾロアスターの第１の深さ、父である神は、信心の源泉である。

ゾロアスターの第２の深さ、神の言葉イエスは、真理の源泉である。

ゾロアスターの第３の深さ、神の聖霊による創造的な行動は、愛の源泉である。

ゾロアスターの３つ１組の高等な事を確認するには、読者は古代のアッシリア人の教えについてのプセロスの注釈を参考にすると良い。

古代のアッシリア人の教えについてのプセロスの注釈は、Franciscus Patriciusの「哲学的な魔術」の1593年発行のハンブルク版の24ページ目に存在する。

ゾロアスターは、9位階で天の位階と自然の全ての調和を定めた。

ゾロアスターは、概念からもたらされるものは全て、３つ１組によって説明する。

ゾロアスターは、形に属するものは全て、４つ１組によって説明する。

概念の３つ１組と形の４つ１組から、創造の原型である数７に至る。

ゾロアスターの３つ１組、４つ１組、数7、3組の３つ１組の数９で、第一の入門は終わった。

そして、学者の仮説が始まる。

ゾロアスターは、数を擬人化した。

ゾロアスターは、概念を象徴で表した。

後世に、ゾロアスターによる数の擬人化と概念の象徴化は、偶像に成ってしまった。

三重のヘカテーの 3 つ 1 組の代行者 Synoches、Teletarchae、Fathers が現れた。

3 人の Amilictes が現れた。

Hypezocos の三重の顔が現れた。

天使は 9 位階の天使のヒエラルキーに従い、悪魔は 9 位階のヒエラルキーに従い、人の魂は 9 位階のヒエラルキーに従う。

星々は知の輝きの象徴、知の輝きの反映である。

物質的な太陽は、真理という太陽の象徴である。

真理という太陽は、第 1 の源泉の影である。

第 1 の源泉から、全ての栄光が湧き出ている。

物質的な太陽は真理という太陽の象徴なので、ゾロアスターの弟子は夜明けを敬礼した。

そのため、未開人はゾロアスターの弟子を太陽崇拝者と呼んでいた。

ゾロアスターの教えが、マギの教えであった。

さらに、マギは、自然の隠された力を与える秘密の所有者であった。

自然の隠された力を与える秘密を要約すると、超越的な火を応用するわざと呼べる。

なぜなら、超越的な火を応用するわざは、火の深い知と、火の統治の深い知に、密接に結びつく。

マギが、電気を知っていただけではなく、現在でも知られていない方法で火を発生し導けた事は確かである。

ローマの第 2 の王ヌマ ポンピリウスは、マギの儀式を学んでマギの神秘に入門して、ルキウス ピソによると雷を発生し操作するわざを所有していた。

ローマの祖ヌマ ポンピリウスは、雷の祭司だけの秘密を、ローマの王者達のために保存しようとした。

しかし、ローマの第３の王トゥッルス ホスティリウスは、ヌマ ポンピリウスが残した書物を元に神ユピテルの呼び出しを試みたが、儀式が粗雑であったため、神を怒らせたので、落雷により死んで、雷の祭司だけの秘密をローマから失わせた。

古代のエトルリア人の口伝を典拠にして、大プリニウスは、ヌマ ポンピリウスによる雷のわざの所有、トゥッルス ホスティリウスの落雷による死、ローマからの雷のわざの喪失を話している。

また、大プリニウスは、ヌマ ポンピリウスが電池の電気をボルタと呼ばれていたローマ地方を荒らしていた奇形の動物に当てた、と話している。

ヌマ ポンピリウスが電池の電気をボルタに当てた話を読むと、ボルタ電池の発見者ボルタが架空の人物で、ボルタ電池はヌマ ポンピリウスの時代にさかのぼる、と人は考えるかもしれない。

全てのアッシリアの象徴は火の知につながっている。

火の知はマギの大いなる秘密であった。

アッシリアの至る所で、魔術師がライオンを殺し蛇を操る象徴に出会う。

ライオンは天の火の象徴である。

蛇は地上の電磁気の流れの象徴である。

ヘルメスの魔術の全ての不思議は、火の知というマギの大いなる秘密につながっている。

ヘルメスの魔術の現存する口伝は「大いなる務め」の神秘、「大作業」の神秘が火の統治に有る事を証明している。

「哲学的な魔術」で、学の有る Franciscus Patricius は、プロクロスの神秘についての著作、パルメニデスの注釈、「パイドロス」についてのヘルメイアスの注釈、

「ピレボス」と「パイドン」についてのオリュンピオドロスの注釈といった、プラトン主義者の著作から集めた、ゾロアスターの啓示を知らせた。

　ゾロアスターの啓示の前半は、ゾロアスターの教えを明確に記した物である。

　ゾロアスターの啓示の後半は、魔術の儀式の実践方法の指示である。

　後記は、ゾロアスターの啓示である。

「半神半霊と供儀」

　肉体を持たない半神半霊が存在する、という事を自然からの伝授によって教わる。

　物質に存在する悪の種が公共の利益に変わる、という事を自然からの伝授によって教わる。

　しかし、肉体を持たない半神半霊の存在と、物質に存在する悪の種の公共の利益への変化は、思考の奥底に隠す必要が有る、神秘である。

　大気の中で常に振動させられ跳躍するため、天の火は肉体の様な形をとる事ができる。

　後記の様に、さらに進めて断言しよう。

　映像と反映に満ちあふれている火が存在する。

　もし、あなたが望むのであれば、天の火を、光を放ち、話し、光に戻る、過剰な光と呼びなさい。

　天の火は、光の燃える馬である。

　というよりはむしろ、天の火は、光の燃える馬、天の馬を圧倒して教え込んでいる、強い幼子である。

　光の燃える馬、天の馬を圧倒して教え込んでいる、火の衣をまとった、金で飾られた旗を持った、強い幼子を思い描きなさい。

または、光の燃える馬、天の馬を圧倒して教え込んでいる、矢を持った、裸の、愛の神エロスを思い描きなさい。

しかし、もし瞑想が長引くのであれば、ライオンを思い描きなさい。

そうして、何物も見えなく成ったら、天空が見えなく成ったら、世界の広がりが見えなく成ったら、星々が輝くのをやめたら、月がヴェールに覆われたら、地が震えたら、雷が地を弄んだら、自然の魂の、目に見える霊を呼び出すなかれ。

なぜなら、神聖な試練によって体を清めるまで、自然の魂の、目に見える霊を見てはいけない。

魂を減退するものが神聖な務めから逸(そ)らそうとする。

犬の顔の半神半霊が、物質の限界から、あらわれる。

そして、犬の顔の半神半霊が、実体が無い、体の見せかけを、人の肉眼に、見せる。

ヘカテーの、rhombosという古代の魔術の儀式の唸(うな)る様な音を出す道具によって描かれる輪の周囲で労苦しなさい。

降霊術での外国語の名前を変えるなかれ。

なぜなら、降霊術での外国語の名前は、神の汎神論での名前である。

降霊術での外国語の名前、神の汎神論での名前は、大衆の信心によって磁化されている。

そのため、降霊術での外国語の名前の力、神の汎神論での名前の力は、言い表せないほど大きい。

全ての霊、全ての幻があらわれた後に、肉体を持たない天の火の輝き、矢が全方位で世界の深みを貫く神の火の輝きを見たら、天の火の言葉を聞きなさい。

前記の、ゾロアスターの啓示の驚くべき文書は、Franciscus Patriciusのラテン語の書「哲学的な魔術」からの引用である。

ゾロアスターの啓示は、磁気の催眠の秘密と、物事の秘密を、遥かに深く、まとめている。

ゾロアスターの啓示は、メスメルとメスメルの模倣者デュ ポテの様な人々が想像できなかった物である。

後記を、ゾロアスターの啓示は記している。

(1)

星の光を完全に記している。

星の光の力が流体の形をもたらす事を記している。

星の光の力が言葉の反映、声の反響である事を記している。

(2)

達道者の意思を、白い馬に乗った強い幼子によって、表している。

白い馬に乗った強い幼子という描写は、フランス国立図書館に保存されている古代のタロットの 19 ページ目に描かれている絵と符合する。

(3)

誤った方向に向けられた魔術の作業がもたらす幻覚の危険性を記している。

(4)

外国語の名前や言葉を応用している魔術の存在理由を記している。

(5)

rhombos という、幼子の唸(うな)り独楽(ごま)に似ている、古代の魔術の儀式の唸(うな)る様な音を出す磁気の魔術の道具を記している。

(6)

魔術の実践の条件が、完全な催眠状態と完全に想像が透明な状態における、想像力の静止と感覚の鎮静である事を記している。

後記が、古代の世界のゾロアスターの啓示から導かれる。

予見の忘我状態は、魂を、自発的に直接的に、天の火、普遍の火、映像に満ちあふれている星の光に、夢中にさせる事である。

星の光は、光を放つ。

星の光は、話す。

星の光は、全ての物の周囲と、世界の全ての天体の周囲を循環している。

試練の継続が強めた、感覚から自由に成った、意思の持続が、星の光への夢中をもたらす。

魔術の入門の基礎は、試練の継続と、感覚からの自由に存在する。

星の光を直接的に読み取る力に到達した達道者は予見者か預言者に成った。

星の光と自身の意思の間の交流を確立した達道者は、決められた方向へ向けられた矢の先端の様に、星の光を導く方法を得た。

達道者は、思い通りに、葛藤か平静を他者の魂に伝達できた。

達道者は、同等の達道者との遠隔での交流を確立した。

要約すると、達道者は、星の光の力を応用した。

天のライオンは、星の光の力を表す。

腕でライオンを抑えている大いなるアッシリアの人物像は、星の光の力を押さえている達道者を意味する。

ライオンの体とマギの頭を持つ巨人的なスフィンクスは、星の光を表す。

星の光を魔術的な力に従う道具とみなすと、星の光は、神聖な牛を殺すのに用いた、ミトラスの金の剣である。

星の光は、蛇ピュトンを貫いているポイボス アポロンの矢である。

バビロンやニネヴェといったアッシリアの大都市を心の中で再現しよう。

花崗岩の巨人像を適正な場所に戻そう。

象（ゾウ）とスフィンクスが支えている大神殿を明確に表そう。

記念碑の柱オベリスクを建て直そう。

オベリスクから、翼を広げた竜が輝く目で見下ろしている。

像やオベリスクといった不思議な大建築物群の上に、神殿と宮殿が高くそびえている。

永遠に隠されているが、永遠に奇跡の事実によって表れている、祭司と王族が、地上の目に見える神の様に、神殿と宮殿に住んでいる。

祭司は思い通りに神殿を雲で囲んだり超自然的な輝きで輝かせる。

昼に暗闇に成ったり、光が夜を明るく照らす。

神殿のランプから独りでに火が湧き出す。

神々の像が光を放つ。

雷の音が聞こえる。

秘伝伝授者の呪いが降りかかった不信心な人には災いが有る！

神殿は宮殿を守る。

祭司は王を守る。

王の従者は祭司マギの宗教のために戦う。

王自体は神聖である。

王は地上の神である。

王が通る時、民はひれ伏す。

王の宮殿の敷居をまたごうと試みる狂人は、杖や剣による打撃無しに、目に見えない手の干渉によって、すぐに地に倒れて死ぬ。

王の宮殿の敷居をまたごうと試みる狂人は、雷の矢によっての様に、死ぬ。

王の宮殿の敷居をまたごうと試みる狂人は、天からの火によって、死ぬ。

何という宗教か！

何という力か！

ニムロデの影、Belus の影、アッシリアの女王セミラミスの影は、何て強いのか！

強大な王族が王座に座っている、ほとんど神話に成っている都市、巨人の都市、魔術師の都市、口伝では天使とみなされている未だに神の子や天の王と呼ばれている人の都市を超越できるものは何か？

どんな神秘が過去の国の都市という墓に眠っているのか？

過去の驚くべき記録を再現できない現代人が現代の啓蒙と進歩をほめたたえている時、現代人は幼子より、ましであろうか？　いいえ！　過去の驚くべき記録を再現できない現代人が現代の啓蒙と進歩をほめたたえている時、現代人は幼子に過ぎない！

魔術についての作品で、いくらか恐れながら、デュ ポテは「磁気の流体の流れによって、生きている存在を圧倒して滅ぼす事は可能である」と断言している。

魔術的な力は、磁気の流体の限界を超越している。

実に、魔術的な力は、推測されている磁気の流体の範囲内に制限されない。

電気や雷の素である、星の光の全てを、人の意思で思い通りに自由に配置できる。

しかし、星の光の畏敬するべき強い力を獲得するには何をする必要が有るのか？

ゾロアスターは、星の光の畏敬するべき強い力を獲得するには何をする必要が有るのか、教えている。

悪の力を善の統治に従わせる、つり合いの、星の光の神秘の法を知る必要が有る。

体を神聖な試練によって清める必要が有る。

幻覚の霊を圧倒する必要が有る。

創世記32章24節から32節で天使と戦ったヤコブを模倣して、星の光に全身全霊で取り組む必要が有る。

星の光の、夢の世界で唸(うな)る架空の犬をおさえる必要が有る。

要約すると、ゾロアスターの啓示の力強い表現を用いると、光が話す言葉を聞く必要が有る。

光が話す言葉を聞けば、星の光の主に成り、ヌマ ポンピリウスの様に星の光という雷を神聖な神秘の敵に対して当てる事ができる。

しかし、清らかさが不完全な場合、動物的な肉欲の支配下にいる場合、嵐の様な人生の運命に未だに服従している事によって、星の光を操作する作業を始めると、星の光という火は、火をつけた肉欲の奴隷である汚れた人を燃やし尽くすであろう。

肉欲の奴隷である汚れた人は、解き放った星の光という蛇の犠牲に成るであろう。

肉欲の奴隷である汚れた人は、トゥッルス ホスティリウスの様に星の光という雷によって死ぬであろう。

自然のままの獣が人を食べるのは、自然の法に従っていない。

神は、獣へ抵抗する力を、人に身につけさせた。

人の目は獣をしびれさせる。

人の声は獣を抑える。

人の手振りは獣を止める。

実に、事実として、猛獣が、落ち着いている人の目を恐れ、人の声を恐れる様に見える、と知っている。

人の目や喉(のど)からの、星の光の放射が、猛獣をしびれさせ畏敬の念を抱かせた、と説明できる。

ダニエル書６章で、ダニエルが詐欺と偽の魔術という無実の罪で告発された時、バビロンの王はライオンの穴に入れる試練をダニエルとダニエルを無実の罪で告発した者に受けさせた。

ライオンといった獣は、獣を恐れる人か、獣が恐れる人だけを襲う。

武器を取り上げられていても、勇気が有る人の磁気の目を前に、虎が手を引くのは全く確実である。

祭司マギは星の光の力を利用していた。

アッシリアの王は、従順な虎、豹（ヒョウ）、ライオンを庭に飼っていた。

どう猛な虎、豹（ヒョウ）、ライオンは、入門の試練で利用するために、神殿の地下室で飼われていた。

アッシリアの象徴的な浅浮き彫りの絵は、どう猛な虎やライオンが入門の試練のため飼われていた、証拠である。

アッシリアの象徴的な絵には、相対する人と獣による、力の試練、勇気の試練が描かれている。

そして、祭司の衣を着た、達道者が、目からの視線によって獣を抑え、手で獣を止めている、のがアッシリアの象徴的な絵には描かれている。

スフィンクスの形の１つとして獣が描かれている時は、アッシリアの象徴的な絵は疑い無く象徴に過ぎない。

しかし、自然な状態で獣が描かれている時は、アッシリアの象徴的な絵における人と獣の戦いは、魔術による実際の誘惑術の理論を絵で説明していると思われる。

魔術は知である。

魔術を濫用すると失う。

また、魔術を濫用すると自滅する。

アッシリア世界の王と祭司は、もし堕落すれば、自滅の危険を免れないほど大きく成り過ぎた。

事実として、アッシリアの王と聖職者は傲慢に成って、堕落した。

カルデアの大いなる魔術の時代は、アッシリアの王ニヌスと女王セミラミスの統治の時代より前であった。

アッシリアでは、王ニヌスと女王セミラミスの時代には、すでに宗教は物質化し始め、偶像崇拝が支配的であった。

アッシリアで、天の愛の宗教に続いたのは、アスタルテの宗教であった。

アッシリアの王族は、バアルやベルという名前の下で、または、Belus の名前の下で、神性を不法に王族の物にした。

アッシリアの女王セミラミスは、宗教を、政治と征服事業の言いなりにさせた。

アッシリアの女王セミラミスは、古代の神秘の神殿を、虚飾の無思慮な記念館に変えた。

それにもかかわらず、アッシリアでは、芸術と学問では、魔術の考えが支配的で有り続けた。

魔術の考えは、真似できない力と偉大さの特徴を、アッシリアの女王セミラミスの時代の建築物に封印している。

アッシリアの女王セミラミスの宮殿はゾロアスターの考えの全ての総合の建物であった。

「世界の七不思議」と呼ばれている、古代の 7 つの傑作の象徴的意味を説明する時に、アッシリアの女王セミラミスの宮殿について説明するつもりである。

アッシリアの聖職者は、聖職者の力の物質化を試みた結果として、王の下位に成り、王に従う事に成った。

アッシリアでは、一方の聖職者が堕落すると他方の王を巻き込む運命にあった。アッシリアでは、一方の王が堕落すると他方の聖職者を巻き込む運命にあった。

アッシリアの王である女々しいサルダナパールの下で、聖職者の堕落による王の堕落が起きた。

アッシリアの王サルダナパールは、贅沢と怠惰に身を任せた。

アッシリアの王サルダナパールは、マギの知を、遊女の１人に過ぎない地位にまで低俗化させた。

もし奇跡が快楽の助けに成らないのであれば、奇跡が何の役に立つのか？

無理矢理に、おおっ、誘惑者である魔術師よ、無理矢理に、冬に薔薇を咲かせなさい！

ワインの味と香りを倍増させなさい！

光を統治する魔術師の力を、女神の美の様に、女性の美を輝かせるのに応用しなさい！

聖職者マギは、アッシリアの王サルダナパールの言いなりに成った。

アッシリアの王サルダナパールは、酩酊から酩酊へと過ごした。

しかし、アッシリアの王サルダナパールは、宣戦布告された。

すでにアッシリアの王サルダナパールの敵は進軍中であった。

快楽にふけた放蕩者であるアッシリアの王サルダナパールにとっては敵は、ほとんど重要では無かった。

しかし、アッシリアの王サルダナパールにとっては、破滅は恥であり死であった。

さて、アッシリアの王サルダナパールは、死を畏敬しなかった。

なぜなら、アッシリアの王サルダナパールは、死は永遠の眠りである、と誤解していた。

アッシリアの王サルダナパールは、奴隷の労苦と恥を免れる方法を知っている、と誤解していた。

アッシリアの王サルダナパールの最後の夜が訪れた。

すでに勝利者は、アッシリアの王サルダナパールの宮殿の敷居をまたいでいた。

都市バビロンは最早、目立たなかった。

アッシリアの王国は明日には終わるに違い無かった。

アッシリアの王サルダナパールは、宮殿を、光で飾り、恐怖に驚がくしていた都市バビロンの全てを照らすほど輝かせていた。

貴重な財産の山の中で、宝石と金の器の中で、アッシリアの王サルダナパールは、最後の宴を行った。

婦人、お気に入りの従者、共犯者、堕落した聖職者が、アッシリアの王サルダナパールを囲んでいた。

酩酊の放蕩な騒ぎが、多数の楽器による音楽と混ざる。

飼っているライオンが叫ぶ。

香の煙が、アッシリアの王サルダナパールの宮殿のアーチ形の天井から昇り、厚い雲と成って建物全体を包んでいる。

しかし、火の舌がヒマラヤスギの壁板内に侵入し始める。

熱狂的な歌が、恐怖の叫びと、苦しみによる唸りに変わる。

魔術は、堕落した聖職者の手の中では、アッシリアの王ニヌスの王国を守れなかった。

その代わり、少なくとも、魔術は、アッシリアの王サルダナパールの巨人的な自殺の恐るべき記録を飾るために、魔術の奇跡をサルダナパールの死に混ぜた。

バビロンの夜が経験した事が無いほどの、膨大な邪悪な輝きが、突然、天空を遠ざけ押し広げた様に見えた。

世界中の全ての雷が同時に轟いた様な音が地を震わせた。

そして、都市バビロンの壁は崩れ落ちた。

その後、深い夜の帳が降りた。

アッシリアの王サルダナパールの宮殿は溶けて消えた。

明日が訪れた時、勝利者は、アッシリアの王サルダナパールの宮殿の富、王サルダナパールの死体、サルダナパールの贅沢品の痕跡すら見つけられないであろう。

そうして、アッシリアの最初の帝国は終わった。

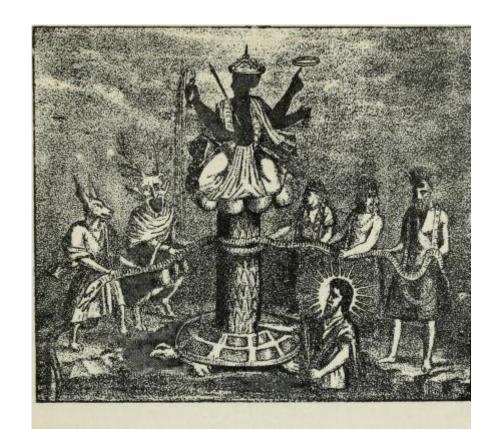
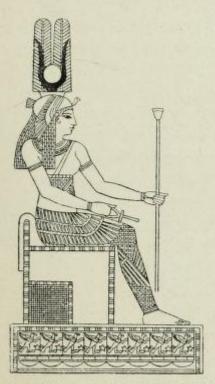
また、本物のゾロアスターが古代に建てた文明は終わった。

そうして、マギの魔術は終わった、と厳密には言える。

そして、カバラの統治が始まった。

21 祖アブラハムは、カルデアから旅立つ時には、カルデアの神秘を身につけていた。

神の民は静かに増えていった。

やがて、ダニエルがネブカドネザル 2 世とベルシャザルの劣悪な誘惑者である魔術師に勝利するのである。

THE INDIAN AND JAPANESE MYSTERY OF UNIVERSAL EQUILIBRIUM AND THE EGYPTIAN PANTOMORPHIC IYINX

第 1 巻 第 3 章 インドの魔術

カバラの口伝ではカインの子孫はインドに住んだ。

後世に、創世記 25 章でアブラハムとケトラの子孫がインドに移住した。

いずれにしても、何よりも、インドは、ゴエティアの国、悪人の霊の魔術の国である。

インドは、幻覚の不思議の国である。

黒魔術は、インドで永続した。

同じく、カインの弟殺しの原始的な口伝、権力者による弱者への詐欺、カーストは、インドで永続した。

上位のカーストの王族と聖職者が、カーストを続けた。

不可触民が、カーストという誤りをつぐなっている。

インドは、偶像崇拝の賢母である、と言えるかもしれない。

もしインドの裸行者が堕落と死に至る門を安易に開かなければ、インドの裸行者の考えは無上の知の鍵に成れたであろう。

インドの象徴の驚くべき豊富さは、インドが他の国より前から存在している事を示している様に思われる。

インドの詩の概念が古代から保存されている事は、インドが他の国より前から存在しているという説を支持している。

ただし、地獄の蛇がインドの知の木の根を飲み込んでいるが。

すでにエリファス レヴィは悪魔の神格化に対して異議を表明した。

しかし、インドでは、悪魔の神格化をあらゆる過大さによって見せている。

インドの聖職者バラモンの邪悪な三神一体は創造神ブラフマー、破壊神シヴァ、維持者・救い主ヴィシュヌが本来は一体であるという考えである。

adda nari、Addhanari は神の母、天の自然を表す。

adda nari、Addhanari はカーリーと呼ばれている。

インドの絞殺者集団タギーは絞殺をカーリーへの供物としてささげた。

維持者・救い主ヴィシュヌは下位の悪魔を滅ぼすためだけに人に成る。

破壊神シヴァまたは死の神ルドラの干渉によって、下位の悪魔は常に復活する。

破壊神シヴァはカインの神格化である、と気づく人がいるであろう。

ただし、インドの全ての神話において、アベルの思いやりを思い出させるものは存在しない。

それにもかかわらず、詩におけるインドの神秘は雄大である。

また、象徴におけるインドの神秘は意味が深い。

しかし、インドの神秘は汚されたカバラである。

そのため、汚されたカバラであるインドの神秘は、魂を養わないし、魂を無上の知へ導かない。

それどころか、バラモン教は、バラモン教の博識な理論によって、魂を狂気の深淵へ突き落す。

偽のグノーシス主義は、恐怖と卑猥を交互にくり返す妄想を、インドの偽のカバラから取り入れた。

インドの魔術は、隠された知の境界で、多数の奇形で、あらわれる。

インドの魔術は、理性的な精神を脅かす。

インドの魔術は、全ての理解の有る教会からの破門、異端排斥、呪いを招く。

頻繁に、無学な人と、生半可な知識しか無い人は、インドの危険な偽の知識を、本物の知と混同した。

インドの危険な偽の知識は、隠された学問という名前を持つ全てのものを、大衆からの非難の道連れにした。

本書の著者エリファス レヴィは、魔術の聖所の鍵に到達する前は、魔術への大衆の非難に心から賛同していた。

ヴェーダの神学者にとって、神は、力としてのみ、あらわれる。

勝利が全ての進歩と全ての啓示を決定する。

ヴィシュヌは、海の巨人的なレヴィアタン、海の巨人的な魚のアヴァターラの肉体をまとって降臨する。

そして、ヴィシュヌは、原始の地を鼻で形成する、巨人的なイノシシのアヴァターラの肉体をまとって降臨する。

ヴィシュヌの 10 のアヴァターラの例え話は、驚くべき汎神論の創世記である。

ヴィシュヌの 10 のアヴァターラの例え話の作者は、催眠中に、少なくとも、意識が有る。

ヴィシュヌの 10 のアヴァターラは、カバラの 10 のセフィロトと対応している。

神ヴィシュヌは、連続して、魚、亀、イノシシという 3 つの動物または命の基本形のアヴァターラの肉体をまとって降臨する。

次に、ヴィシュヌは、人とライオンのスフィンクス、半人半獅子のアヴァターラの肉体をまとって降臨する。

次に、ヴィシュヌは、人のアヴァターラの肉体をまとって降臨する。

ヴィシュヌは、バラモンとして現れ、謙遜を装って地上の全てを所有した。

バラモンとして現れたヴィシュヌは、祖師達の慰める天使として、幼子に成った。

次に、ヴィシュヌは、戦士の肉体をまとって降臨して、地上の圧制者である邪悪な王族クシャトリヤと戦った。

次に、ヴィシュヌは、外交を暴力に対立させるため、外交のために王族の肉体をまとって降臨する。

王族の肉体をまとって降臨したヴィシュヌが、人の形ではない猿の神ハヌマーンを頼ったのは、猿の速さを身につけるための様に思われる。

外交と暴力は相互に破壊し合う。

世界は知的な倫理道徳的な救い主を待望した。

そこで、ヴィシュヌは、クリシュナとして肉体をまとって降臨した。

クリシュナは、ゆりかごの中の幼子の時に追放されるように逃がされた。

象徴的なロバが、そばでクリシュナを見守っている。

幼子の時に、クリシュナは、敵の力から守るために、遠くへ運ばれて逃がされた。

クリシュナは大人に成って思いやりと善行の教えを説く。

クリシュナは、地獄に降りて、地獄の蛇を縛り、光輝いて天国に戻る。

クリシュナの祭りは毎年 8 月に処女宮の象徴の下で行われる。

クリシュナの話はキリストの神秘についての驚くべき直感である。

クリシュナの話が記されているインドの聖典マハーバーラタがキリストの時代より何世紀も前に文書に成った事を思い出すと、クリシュナの話には非常に感銘を受ける。

クリシュナの啓示の後に、仏陀の啓示が続く。

仏陀は、無上の純粋な宗教を、無上の種類の哲学と結びつけた。

仏陀は、宗教と哲学を結びつけて、世界の幸せを達成した。

ヴィシュヌの第 10 の最終的な降臨を待つだけである。

ヴィシュヌは、本来の姿に戻ると、最後の審判の馬を引いてくる。

ヴィシュヌの第 10 のアヴァターラが引いてくる、畏敬するべき馬は、前脚を常に上げていて、前脚を世界に振り下ろすと、世界は原子にまで分解されるであろう。

ヴィシュヌのアヴァターラには、マギの神聖な数と預言の計算が存在する事に気づく。

インドの裸行者と、ゾロアスターの秘伝伝授者は、同じ源泉から知を得ていた。

しかし、インドの神学の教師として残った者は偽の黒いゾロアスターであった。

偽のゾロアスターの堕落した教えの最終的な秘密は、汎神論と、汎神論にお決まりの結論である、物質の完全否定のふりをした、完全な物質主義である。

精神と物質が同一であると主張する限り、必要かもしれないが、精神の物質化を試みようが、物質の精神化を試みようが、何の意味があろうか？　精神と物質が同一であると主張する限り、精神の物質化を試みようが、物質の精神化を試みようが、無意味である！

汎神論にお決まりの結論である、精神と物質が同一であると主張する物質主義は倫理道徳に致命的である。

全てが神である世界では罪悪も善も存在しないであろう。

汎神論と物質主義である偽のゾロアスターの教えから、インドの聖職者バラモンの堕落を経て、狂信的な静寂主義、無気力、無関心、無為へ至るのは当然である。

しかし、未だ終わりではない。

インドの大いなる魔術の典礼書、インドの隠された学問の本、50 のウパニシャッドであるウプネカットが残っている。

ウプネカットは、麻痺状態の結果を達成する肉体的な精神的な手段をもたらす。

ウプネカットは、段階的な手段によってインドの偽の魔術師が「神の状態」と呼んでいる極度の狂気に到達する肉体的な精神的な手段をもたらす。

ウプネカットは、グリモワールの祖、魔術書の祖である。

ウプネカットは、ゴエティアの古代の遺物、悪人の霊の魔術の古代の遺物の中で、最も興味深い。

ウプネカットは、50 のウパニシャッドに分かれている。

ウプネカットは、星々が散りばめられた暗闇である。

ウプネカットは、崇高な言葉が混ぜられた誤った啓示である。

　時々、ウプネカットは、ヨハネによる福音書の様に読める。

　例えば、後記は、ウプネカットの第 11 のウパニシャッドと第 48 のウパニシャッドからの抜粋である。

「創造する火の天使は、神の言葉である。
神の言葉が、地と、地から出る草木と、熱をもたらした。
熱は草木を円熟させる。
神は創造主である。
神の言葉は神である。
神の言葉は神御自身である。
神の言葉は神の唯一の息子である」

　さて、他の部分では、ウプネカットは、最も極端な大異端者に相応な妄想に過ぎない。

「物質は人を欺く見せかけに過ぎない。
太陽、星々、元素は神の聖霊である。
動物は半神半霊である。
人は形に欺かれた単なる霊である」

　前記の、抜粋によって、多分、ウプネカットの教えの内容について十分に理解した。

　インドの誘惑者である偽の魔術師の魔術の儀式に進む。

「神に成るには、息を保つ必要が有る。

言い換えると、神に成るには、肺が十分に広がるまで可能な限り息を吸い込む必要が有る。

次に、肺を十分に広げて可能な限り息を吸い込んだ状態で、神の言葉『オーム』を心の中で 40 回唱える必要が有る。

次に、ゆっくり息を吐く。

息が天を通過して普遍のエーテルと触れ合う様に心の中で傾ける。

儀式を成功させるには、目を閉じ、耳を塞ぎ、木の丸太の様に不動である必要が有る。

姿勢は、ひざ立ち、ひじ立ちで、顔を北へ向ける。

一方の鼻の穴を一本の指で塞ぎ、他方の鼻の穴で空気を吸い込み、他方の鼻の穴も一本の指で塞ぐ。

同時に、神は創造主であると思考する。

神は全ての動物の中に存在し、蟻の中にすら象（ゾウ）の中の様に存在すると思考する。

精神を、神は創造主であるという思考と、神は全ての動物の中に存在するという思考に、夢中にさせる必要が有る。

『オーム』と 12 回唱えた後に、息を吸う間に『オーム』と 24 回唱えた後に、可能な限り速く『オーム』と唱える。

恐れずに、鍛錬をゆるめる事無く、食事を少なくして、睡眠時間を少なくして、3 か月以上、鍛錬を続ける必要が有る。

4 か月で、神々が現れるであろう。

5 か月で、神の聖霊の全ての神性を獲得しているであろう。

6 か月で、救われて、神に成っているであろう」

愚かにもウプネカットの儀式の実践を６か月間貫き通した狂信者が死ぬか狂うのは確実であると思われる。

しかし、もし狂信者がウプネカットの謎の呼吸の６か月の鍛錬を乗り切ったら、ウプネカットは狂信者を「救われて、神に成っている」と言う幸せな状態にして置かず、狂信者を他の謎の鍛錬へ移らせる。

「一本の指先で肛門を塞いで、下から上へ、右側で、息を吸い込む。
体の第２の中心の辺りで空気を３回回転させる。
体の第３の中心である、へそへ空気を持ってくる。
体の第４の中心である、心臓の中央へ空気を持ってくる。
体の第５の中心である、喉（のど）へ空気を持ってくる。
体の第６の中心である、両目の間の鼻根へ空気を持ってきて、空気を保つ。
息は、普遍の魂の息に成っているであろう」

前記は、脳の充血を誘発する、単なる自己催眠の方法である、と思われる。

さらに、ウプネカットの著者は続ける。

「大いなる『オーム』について考えなさい。
『オーム』は創造主である神の名前である。
『オーム』は普遍の純粋な不可分の声である。
『オーム』という声は全てのものを満たしている。
『オーム』という声は創造主である神である。
『オーム』という声は創造主である神御自身である。
後記の様に、『オーム』という声は、瞑想している人には聞こえる。

第 1 の声は、小さなスズメの鳴き声である、様に聞こえる。

第 2 の声は、第 1 の声の 2 倍の大きさの声である、様に聞こえる。

第 3 の声は、楽器のシンバルの音である、様に聞こえる。

第 4 の声は、巨人的な貝のささやきである、様に聞こえる。

第 5 の声は、インドの竪琴による歌に例える事ができる。

第 6 の声は、『tal』と呼ばれている楽器の音である、様に聞こえる。

第 7 の声は、耳の近くで吹かれた、『bacabou』という笛の音に似ている。

第 8 の声は、『Pakaoudj』と呼ばれている楽器を手で叩いた音である、様に聞こえる。

第 9 の声は、小さなラッパの音である、様に聞こえる。

第 10 の声は、雷雲の音である、様に聞こえる。

第 1 から第 9 の声が聞こえると、瞑想している人は、それぞれの声に対応した状態に成る。

第 10 の声が聞こえると、瞑想している人は、神に成る。

第 1 の声が聞こえると、全身の毛が逆立つ。

第 2 の声が聞こえると、手足が鈍く動かなく成る。

第 3 の声が聞こえると、性交後の様な疲労を全身に感じる。

第 4 の声が聞こえると、頭がくらくらして酔った様に成る。

第 5 の声が聞こえると、命の力が脳に逆流する。

第 6 の声が聞こえると、命の力が脳から体内へ降りて体を強める。

第 7 の声が聞こえると、予見者に成れて、他人の心の中を見る事ができ、遠隔地の声が聞こえる。

第 9 の声が聞こえると、望む所へ行けるほどエーテル的に成れる。

天使の様に見られ無いで見る事ができる。

第10の声が聞こえると、普遍の不可分の声に成れる。

大いなる創造主である神に成れる。

永遠の存在に成れる。

全てから自由に成れる。

完全な平和に成って、平和を世界に分け与える」

　前記の、ウプネカットの最も興味深い抜粋で注目に値する事は、自己催眠の完全な実践と、意識が明確である催眠状態の特徴である現象の完全な説明である。

　前記の、ウプネカットの抜粋に記されているのは、意思の緊張によって、神経系の疲労によって、忘我状態を誘発するわざである。

　エリファス レヴィはウプネカットの神秘の用心深い研究を催眠術師にすすめる。

　麻酔薬や睡眠薬の段階的な使用や、色を塗った階段状の円盤群の段階的な使用は、インドの偽の魔術師が説明しているわざに似た結果をもたらす。

　前記の、方法を「メイソンのオカルト」でラゴンは記している。

　ウプネカットには、意識を失って忘我状態に到達する、より簡単な方法が記されている。

　ウプネカットに記されている、意識を失って忘我状態に到達する簡単な方法は、視神経が麻痺するまで両目で鼻先を見つめ続ける事である。

　ウプネカットの、視神経が麻痺するまで両目で鼻先を見つめ続けるといった、全ての実践は苦痛、危険、滑稽である。

　エリファス レヴィは、ウプネカットの、視神経が麻痺するまで両目で鼻先を見つめ続けるといった、全ての実践をすすめない。

しかし、多かれ少なかれ時間をかける事によって、被催眠者の感じやすさによって、ウプネカットの、視神経が麻痺するまで両目で鼻先を見つめ続けるといった、全ての実践が忘我状態、強硬症カタレプシー、気絶すら誘発するのは疑い無い。

予見を獲得するには、睡眠、死、狂気に似た状態へ到達する必要が有る。

インドの偽の魔術師は睡眠、死、狂気に似た状態へ到達する事に秀でている。

何人かのアメリカの霊媒師の不思議な力を、インドの偽の魔術師の秘密に結びつける必要が有る。

黒魔術は他人や自身に人為的な狂気を誘発するわざである、と定義できる。

何よりも、黒魔術は毒する学問である。

しかし、大衆が知らない事、19 世紀にデュ ポテによって発見された事は、星の光の急激な充満か欠乏によって命の破壊が可能である事である。

インドの偽の魔術師が記したウプネカットの鍛錬に似た一連の不可能に近い鍛錬によって、神経系の緊張と疲労が習慣に成って、神経系が星の光を強めて強く放射できる一種の生きているガルバニ電池に成ると、星の光の急激な充満か欠乏による命の破壊が起きる。

星の光は、酩酊させるか、破壊する。

しかし、前記で、ウプネカットと、ウプネカットの魔術の不思議は、終わりではない。

陰気な偽の秘儀祭司が、全てのものの無上の秘密として、偽の秘伝伝授者に伝授する、最終的な偽の秘密が存在する。

偽の秘密は、実は、超越的な魔術の大いなる神秘の影、逆、反対、あべこべである。

超越的な魔術の大いなる神秘は、倫理道徳における、絶対である。

そして、結果的に、超越的な魔術の大いなる神秘は、行動方針における、絶対である。

超越的な魔術の大いなる神秘は、自由における、絶対である。

他方、ウプネカットの偽の秘密は、悪行における、運命における、死に至る静寂主義における、死に至る無気力における、死に至る無関心における、死に至る無為における、絶対である。

　後記の様に、ウプネカットで、著者は、偽の秘密を話している。

「楽に結婚するための嘘は合法である。
聖職者バラモンの価値を高めるための嘘は合法である。
牛の質を高めるための嘘は合法である。
神は真実である。
神の中で光と影は１つに成っている。
真実である神の中で光と影は１つに成っている事を知っている人は、嘘をつかない。
なぜなら、真実である神の中で光と影は１つに成っている事を知っている人の、嘘は真実に変わる。
どんな罪を犯しても、どんな悪行を行っても、真実である神の中で光と影は１つに成っている事を知っている人は、有罪ではない。
父親殺しと母親殺しを犯しても、真実である神の中で光と影は１つに成っている事を知っている人は、有罪ではない。
ヴェーダの神秘の秘伝を伝授された祭司バラモンを殺しても、真実である神の中で光と影は１つに成っている事を知っている人は、有罪ではない。
要約すると、何をしても、真実である神の中で光と影は１つに成っている事を知っている人の、光は失われない。
なぜなら、後記の様に、神は話している。
『神は普遍の魂である。
神の中で善と悪は相互に抑え合っている。

神の中で善と悪が相互に抑え合っている事を知っている人は、罪を犯す事ができない。

なぜなら、神の中で善と悪が相互に抑え合っている事を知っている人は、神の様に普遍である』」

　前記の、ウプネカットの誤った教えは、文明と矛盾する。

　さらに、インドは、社会の位階制をカーストという型にはめて、カーストの中に無政府状態による混乱を植えつけてしまった。

　社会の命は交流である。カーストは、社会の命が交流である事に反している。

　少数の人が全ての物を独占して他人に何も与えない時、交流は不可能である。

　民が上昇できないし下降しない決まり通りの状態では、社会の位階制には何の意味が有るか？　民が上昇できないし下降しない決まり通りの状態では、社会の位階制には何の意味も無い！

　大きく遅れた、カインの弟殺しへの罰はカーストに存在する。

　カインは全てのカインの子孫を道連れにして死に至らせる。

　異民族の傲慢な利己的な国が現れたら、インドを犠牲にするであろう。

　オリエントの口伝は、レメクがカインを殺した、と話している様に。

　しかし、カインを殺す人には災いが有る！

　創世記４章15節で神は「カインを殺した人は７倍、報復される」と話している。

第1巻 第4章 ヘルメスの魔術

　エジプトで、魔術は、普遍の知として、完成の段階に到達した。

　エジプトで、魔術は、完全な考えとして、明確に説明された。

　古代の世界の全ての考えの要約として、エメラルド板と呼ばれる物、ヘルメスがエメラルド板に記した短い文書と等しい物や超える物は実に無い。

　段階の上昇と下降に対応する、存在の統一性、ものの調和における統一性。

　神の言葉の進歩的なつり合っている進化。

　つり合いの不変の法、普遍の類推の段階的な進歩。

　創造者である神と創造されたものの間の類推のものさしをもたらす、概念と表れの間の類推。

　有限における一角の計測が証明する、無限の基本の数学。

　前記の、全てを「上のものは下のものから類推可能である。下のものは上のものから類推可能である。なぜなら、唯一のものによる複数の不思議の実現である」が表している。

「上のものは下のものから類推可能である。

下のものは上のものから類推可能である。

なぜなら、唯一のものによる複数の不思議の実現である」

　前記に加えて、創造的な代行者、全ての形に成る火、隠された力の大いなる仲介するもの、星の光を啓示する説明。

「太陽は父である。
月は母である。
風は腹に抱く」

　太陽が星の光を放射している。
　星の光は、月から、感化されて、形と周期的な動きを受容する。
　大気は、星の光の貯蔵所、星の光の牢獄である。

「地は保母である」

　地の中心の熱が、星の光をつり合わせて動かす。

「普遍の原理である。
世界の Telesma である」

　次に、ヘルメスは、力である星の光を、てことして、普遍の溶解として、形成と凝固の代行者として、応用する方法を説明している。
　次に、ヘルメスは、どのように、火、動き、光、光を放つ気体、熱湯、火の様な土といった星の光の多様な表れを応用して、自然の全てのわざを模倣するために、ものから、潜在している星の光を抽出する必要が有るか説明している。
　エメラルド板は魔術の全てを１枚に含んでいる。
　批評家は、アレクサンドリア学派が、「エメラルド板」以外の「ポイマンドレース」、「アスクレピオス」、「世界のミネルヴァ」などのヘルメスの文書を作成した、と一般的に考えている。

ヘルメス文書には、神秘の聖所で保存されていた、ヘルメスの口伝が含まれている。

象徴の鍵を所有する人がヘルメスの考えを失う事は決してできない。

全てのエジプトの残骸の中の、エジプトの記念碑は、本の散らされた多数の断片である。

エジプトの記念碑という本の断片を集めて、エジプトの教え全体という本を復元可能である。

エジプトの記念碑という本の、頭文字は神殿である。

エジプトの記念碑という本の、文は都市である。

エジプトの記念碑という本の、句読点は記念碑の柱オベリスクとスフィンクスである。

エジプトの物質的な地域は、魔術の総合である。

エジプトの地域の名前は、神の数の数字に対応している。

センウセレト 1 世はエジプトの王国を 3 つの地域に分けた。

上エジプト、テバイスは、天界の象徴である。

上エジプト、テバイスは、法悦の地域である。

下エジプトは、地上の象徴である。

中エジプト、中央エジプトは、知の地域、天の高等な秘伝伝授の地域である。

上エジプト、中エジプト、下エジプトは、それぞれ、ノモスと呼ばれている 10 の地域に分かれている。

各ノモスには独自の守護神が存在した。

30 のノモスの守護神が存在した。

30 のノモスの守護神は 10 組の 3 つ 1 組であった。

10 組の 3 つ 1 組である 30 のノモスの守護神は、10 つ 1 組の中の 3 つ 1 組の全ての可能な限りの概念を象徴的に表した。

または、10 組の 3 つ 1 組である 30 のノモスの守護神は、10 の数に根源的に結びついている絶対の考えの物質、哲学、宗教の三重の意味を象徴的に表した。

10 組の 3 つ 1 組によって、三重の単一性、最初の 3 つ 1 組が得られる。

最初の 3 つ 1 組と、最初の 3 つ 1 組の反映によって、三重の二元が形成される。

三重の二元は、ソロモンの六芒星である。

3 つの形の中の 3 つの形によって、三重の 3 つ 1 組、数 9、全て揃った概念が得られる。

三重の 4 つ 1 組、数 12 は、星の回転の周期の数である。

など。

センウセレト 1 世の統治下のエジプトの地形は、pantacle、魔術の考え全体の象徴による要約であった。

エジプトの魔術の起源はゾロアスターである。

ヘルメスはエジプトの魔術、ゾロアスターの魔術を再発見と言うか、ゾロアスターより詳細に明確に説明した。

前記の様にして、エジプトという国は 1 つの大いなる書物に成った。

絵、彫刻、都市の長さと幅を通じた構造、全ての神殿における構造によって、エジプトが含んでいる教えは増殖された。

砂漠にはエジプトの永遠の教えが存在した。

ピラミッドの基礎には石によるエジプトの言葉が存在した。

ピラミッドは人の知の限界の様に立っている。

ピラミッドの前で、巨人的なスフィンクスは、感じられない程わずかずつ徐々に砂漠の砂の中に埋もれながら、何年も瞑想した。

現在ですら、時の業によって摩耗した、スフィンクスの頭は、未だに墓から起きている。

スフィンクスは、ピラミッドの問題を新しい世界に明かす人の声が再臨して、完全に埋葬される合図を期待して待っているかの様である。

魔術師の立場から見ると、エジプトは学問と知のゆりかごである。

なぜなら、インドより豊富ではないとしても、インドより正確に純粋に、エジプトは象徴によって最初の本物のゾロアスターの古代の考えをまとっている。

エジプトでは、王者のわざと祭司のわざは秘伝伝授によって達道者を作った。

エジプトの秘伝伝授は、聖職者のカーストだけといった様に利己的に制限されなかった。

エジプトで奴隷であったヘブライ人の 24 祖ヨセフは、エジプトで秘伝伝授されただけではなく、創世記 41 章 40 節でエジプトの最高の大臣の位階に到達し、多分、エジプトの大祭司、秘儀祭司の位階にすら到達した。

なぜなら、創世記 41 章 45 節で 24 祖ヨセフはエジプトの祭司の娘と結婚した。

エジプトという国では祭司は不相応な縁組を許さなかった事が証拠である。

24 祖ヨセフはエジプトで共産主義の夢を実現した。

24 祖ヨセフは祭司の地位を確立した。

24 祖ヨセフは祭司の地位を唯一の所有者として確立した。

24 祖ヨセフは祭司の地位を労役と富の唯一の決定者として確立した。

前記の様にして、24 祖ヨセフはエジプトの危機を打ち破った。

24 祖ヨセフはエジプトを家父長制の家族にした。

創世記 40 章から 41 章の 24 祖ヨセフの昇進が夢解きのおかげである事は広く知られている事実である。

夢解きは、現在では、信心深いキリスト教徒ですら認めようとしない知である。

しかし、信心深いキリスト教徒は24祖ヨセフの不思議な夢解きによる予知が記されている聖書が神の聖霊の言葉であると認めている。

24祖ヨセフの知は、概念と形の間に存在する自然な類推の理解、神の言葉と神の言葉の象徴の間に存在する自然な類推の理解に他ならない。

24祖ヨセフは、眠っている時に、魂が星の光に浸っている時に、魂が魂の最もひそかな思考の反映や魂の予知の反映すら認知する、と知っていた。

さらに、24祖ヨセフは、眠りによる夢の象徴を解釈する技術が普遍の洞察力の鍵である、と知っていた。

なぜなら、全ての知的な存在は夢の中で啓示を受ける。

絶対の象徴の知の基礎はアルファベットである。

神性はアルファベットによる文字や言葉で表される。

アルファベットによる文字や言葉は概念を表す。

概念は数に換算できる。

数は完全な象徴である。

神のアルファベットはモーセがカバラに秘めた大いなる秘密である。

「形成の書」ではアルファベットの起源がエジプト(の7祖エノク)である事を記念して後世に伝えている。

「形成の書」の知は21祖アブラハムに遡る。

神のアルファベットとは有名なトートの書タロットである。

クール ド ジェブランは、神のアルファベットがタロットという形で現在まで保存されている、と見抜いた。

タロットはエッティラの手に渡った。

エッティラはタロットを誤って解釈した。

エッティラによる30年にわたるタロットの研究は、エッティラの無思慮の罪をつぐなう事ができず、エッティラの正しい知識の欠如を埋め合わせる事ができなかった。

タロットの記録は未だにエジプトの記念碑の瓦礫の中に存在する。

タロットの興味深い完全な鍵はアタナシウス キルヒャーのエジプトについての大いなる作品の中に存在する。

タロットのキルヒャーの鍵は、有名なピエトロ ベンボ枢機卿が所有していた、イシスの銅板の写しである。

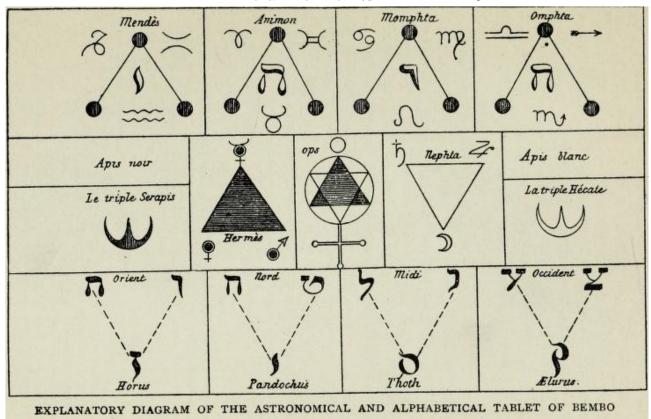
イシスの銅板には、エナメルで絵が描かれていた。

イシスの銅板は、不運にも失われてしまった。

しかし、キルヒャーはイシスの銅板の写しを正確に残した。

学の有るイエズス会の祭司キルヒャーは、イシスの銅板の絵が神のアルファベットの象徴的な鍵を含んでいる、と見抜いた。

しかし、キルヒャーはイシスの銅板の絵を説明できなかった。

EXPLANATORY DIAGRAM OF THE ASTRONOMICAL AND ALPHABETICAL TABLET OF BEMBO

イシスの銅板の絵は、3 つの領域に等分されている。

イシスの銅板の絵の、上の領域は、天の 12 宮、黄道 12 星座である。

イシスの銅板の絵の、下の領域には、1 年を通じた、黄道 12 星座に対応する 12 の務めが配置されている。

イシスの銅板の絵の、中間の領域は、神のアルファベットの文字に相当する 21 の神聖な象徴である。

イシスの銅板の絵の、中央は、あらゆる形に成るイユンクスの神聖な象徴である。

イユンクスの象徴は、普遍の存在の象徴である。

イユンクスの象徴は、ヘブライ文字のイョッドに相当する。

唯一のイョッドから他の全ての文字は形成された。

Ophite の 3 つ 1 組がイユンクスを包囲している。

Ophite の 3 つ 1 組はエジプトとヘブライ人のアルファベットの 3 つの母字(アレフ、メム、シュィン)に相当する。

(

エリファス レヴィによると、ヘブライ文字の 3 つの母字はアレフかイョッド、メム、シュィンかタウである。

「形成の書」によると、ヘブライ文字の 3 つの母字はアレフ、メム、シュィンである。

)

イユンクスの右は、ibimorphic の 3 つ 1 組と、serapian の 3 つ 1 組である。

イユンクスの左は、ネフティスの 3 つ 1 組と、ヘカテーの 3 つ 1 組である。

ネフティスとヘカテーは、自発性と受容性、気化し難いものと気化し易いもの、実を結ばせる火と生じさせる水を表す。

イユンクスの右の 2 組の 3 つ 1 組は、中央のイユンクスと共に、7 つ 1 組をもたらす。

イユンクスの左の2組の3つ1組は、中央のイユンクスと共に、7つ1組をもたらす。

中央のイユンクスは、7つ1組を含んでいる。

3組の7つ1組は、原初の文字の総文字数だけではなく、3つの世界の絶対の数をもたらす。

(

自然科学、哲学、神の教え。

自由意思といった神だけの領域、概念の領域、形の領域。

神だけの楽園、霊の冥界、この世界。

)

そして、数字0が数字1から数字9までの9つの数字に加えられている様に、補完する象徴が加えられている。

カバラでは1から10までの10の数と22文字のヘブライ文字を知の32の経路と呼んでいる。

1から10までの10の数と22文字のヘブライ文字の哲学的な説明が、畏敬されている古代の書「形成の書」のテーマである。

ピストリウスが集めた文書などに「形成の書」は存在する。

トートのアルファベットが現在のタロットの間接的な起源である。

なぜなら、現存しているタロットの写しでは、タロットの文字の起源はヘブライ文字である。

また、タロットの絵は15世紀のシャルル7世の統治の時代までしか遡(さかのぼ)れない。

画家ジャックマン グランゴヌールによる1392年のシャルル6世のタロットが現在、知られている最初のタロットである。

しかし、シャルル6世のタロットは古代のタロットを再現した物である。

タロットは最古の物である。

近代の形のタロット占いの起源は、占星術師が精神の不安定な前述の王シャルル 6 世を慰めるための試行錯誤の一環であった。

タロットの神託は、数学の正確さと同様な、正確な解答をもたらす。

タロットの神託は、自然の調和と同様な、つり合いのとれた解答をもたらす。

タロットの多様な象徴による多様な組み合わせがタロットの正確な、つり合いのとれた解答をもたらす。

ただし、論理と知の物である道具タロットを利用するには理性の大いなる発揮が必要である。

幼稚で理性が貧弱な王シャルルル 6 世には、画家ジャックマン グランゴヌールによるタロットの象徴が、幼子の玩具（おもちゃ）にしか見えなかった。

シャルルル 6 世は神秘的なカバラのアルファベットであるタロットを遊戯に変えてしまった。

モーセの出エジプト記 12 章 35 節から 36 節に、ヘブライ人はエジプトから出る時にエジプト人の神聖な器である金の器と銀の器やマントを持ち去った、という例え話が記されている。

出エジプト記 12 章 35 節から 36 節は例え話である。

なぜなら、大いなる預言者モーセが民に盗みを勧めるはずが無い。

出エジプト記 12 章 35 節から 36 節のエジプト人の神聖な器である金の器と銀の器やマントとは、モーセがファラオの宮殿で学んだ、エジプト人の知の神秘である。

エリファス レヴィは神の人モーセの奇跡が魔術のおかげであると言うつもりは無い。

ただし、出エジプト記7章から8章で、ファラオの魔術師でありエジプトの秘儀祭司でありエジプトの大祭司であるヤンネとヤンブレは魔術の技の力によってモーセの奇跡に似た奇跡を起こした、と記されている。

(テモテへの第2の手紙3章8節「ヤンネとヤンブレ」)

出エジプト記7章11節で、ファラオの魔術師ヤンネとヤンブレは杖を蛇に変えた。

そして、蛇は杖に戻った。

出エジプト記7章11節のファラオの魔術師ヤンネとヤンブレが杖を蛇に変えた話は、感化力か誘惑や幻惑で説明できるかもしれない。

出エジプト記7章22節で、ファラオの魔術師ヤンネとヤンブレは水を血に変えた。

出エジプト記8章3節で、ファラオの魔術師ヤンネとヤンブレはカエルの群れをもたらした。

しかし、出エジプト記8章14節で、ファラオの魔術師ヤンネとヤンブレは虫のブユなどの寄生虫を出現させる事ができなかった。

すでに理由を説明した様に、人の力には限界が有るので、出エジプト記8章14節で、ファラオの魔術師ヤンネとヤンブレは虫のブユを出現させる事ができなかった。

また、すでに理由を説明した様に、モーセの側には超人的な力が有ったので、出エジプト記8章15節で、ファラオの魔術師ヤンネとヤンブレは「モーセは神の指です」と話して自ら負けを認めざるをえなかった。

モーセは勝利してヘブライ人を隷属の国エジプトの外へ導いた。

出エジプトの時に、エジプトでは真の知が失われた。

なぜなら、エジプトの聖職者は、民の無条件の信頼を濫用して、民の知識を動物的な偶像崇拝に堕ちるままにしておいた。

偶像崇拝は秘伝の知にとって危険な岩である。

真理を民に隠さずにヴェールで覆う必要が有る。

象徴主義を非論理的な滑稽さに誤って改悪せず、象徴主義の面目を汚さない必要が有る。

イシスの神聖なヴェールの美しさと尊い気高い上品さを保つ必要が有る。

前記を、エジプトの聖職者は失敗した。

大衆と愚者はイシスとヘルマニビスの象徴的な形を事実と誤解した。

大衆と愚者はオシリスが実際に牛であると誤解した。

大衆と愚者は賢者ヘルメスが実際に犬であると誤解した。

大衆と愚者は変質したオシリスをオシリスの牡牛と呼ばれたアピスという牛に変形させた。

エジプトの聖職者は民が食用生物の牛を主である神として崇拝する事を妨げなかった。

神の口伝を救う時が来た。

モーセは新しい民を確立した。

モーセは全ての偶像崇拝を禁止した。

しかし、残念ながらヘブライ人は偶像崇拝者と長い間エジプトで暮らしていた。

荒野でもヘブライ人はアピスの牛の記憶を残していた。

エジプトでの牛への偶像崇拝の名残が、ヘブライ人が常に少し依存していた出エジプト記 32 章の金の子牛である。

しかし、モーセは神聖な象徴が記憶から消え去る事を望まなかった。

モーセは、象徴を真の神への清められた崇拝によって神聖化して、象徴を清めた。

ヤハウェへの宗教に加わった全ての象徴が、いかに調和して象徴的であるか、古代の啓示の畏敬するべき由緒ある象徴をいかに思い出させるか、後で見ていくつもりである。

しかし、先に、異教徒と魔術の起源についての話を終える必要が有る。

そして、異教徒の文明、物質化されてしまった象徴の話、地に堕ちてしまった古代の儀式の話をする必要が有る。

第1巻 第5章 ギリシャの魔術

　魔術の正確な知が自然な外的な形である美という形をとる古代ギリシャ時代が来た。

　「光輝の書」で、どのように、人の原型である「アダム カドモン」、「最初の人」が天に昇って、下に、存在の水に、反映されたかをすでに見た。

　「アダム カドモン」、「最初の人」は、概念的な人である。

　「アダム カドモン」、「最初の人」は、あらゆる形に成る神の影である。

　完全な形の、生殖力の有る男らしい霊である、「アダム カドモン」、「最初の人」は、形の世界で独りで存在する運命ではなかった。

　「アダム カドモン」、「最初の人」に与えられた伴侶が古代ギリシャの思いやり深い天空の下に存在した。

　天の愛の女神ウェヌス。

　「天の愛」。

　(「饗宴」に、「天の愛」と、肉欲である「大衆の愛」という区別が記されている。)

　純潔な貞淑な充実している愛の女神ウェヌス。

　三美神カリスの三重の母の神。

　愛の女神ウェヌス、「天の愛」、三美神カリスの三重の母の神は、最早、混沌の眠れる深みからではなく、詩的な優美さをくり返している多島海エーゲ海の生きている満ちあふれている波から昇る。

　緑の木々と花々で飾られた多島海エーゲ海の群島は、神々の船の様に見える。

　カルデアの魔術の７つ１組は、オルフェウスの竪琴の７つの弦の音楽に変わる。

オルフェウスの竪琴の７つの弦の音楽は、ギリシャの木々と荒野を変形させる調和である。

オルフェウスの歌の美しい心地よい調べのために、岩々は平らに成り、オークは適切に傾き、獣は人に従う。

アムピオンはヘルメスから伝授された竪琴の音楽の魔術で石をテーバイの壁に変えた。

テーバイは、カドモスの知の都市である。

テーバイは、秘伝伝授の都市である。

「世界の七不思議」の様に、テーバイは、pantacle である。

オルフェウスは命を数に与えた。

カドモスは考えを文字の形に結びつけた。

オルフェウスは、全ての美しいものに熱心な民を確立した。

カドモスは、民の知と愛に相応しい故郷を民に与えた。

古代ギリシャの口伝でオルフェウスは金羊毛の英雄の１人である。

金羊毛の英雄は「大作業」の古代の勝利者である。

金羊毛は、太陽の外衣である。

金羊毛は、人の求めに応じた適用した光である。

金羊毛は、魔術の作業の大いなる秘密である。

金羊毛は、秘伝伝授である、と本質的に理解するべきである。

金羊毛は、象徴的な英雄を神秘の小アジアに到達させる探求の旅であった。

カドモスは、エジプトの栄光のテーベから自発的に国外へ放浪した。

カドモスは、文字の知をギリシャにもたらした。

カドモスは、概念である文字の調和をギリシャにもたらした。

テーバイは、新しいテーベである。

テーバイは、知の都市の代表である。

カドモスは、テーバイを調和のために建てた。

なぜなら、知は、象形文字、発音文字、数字の間の周期的な調和の中に存在する。

知は、数学の永遠の法に従う文字の固有の運動の中に存在する。

テーバイは円形である。

テーバイの砦は正方形である。

魔術的な天空の様に、テーバイには 7 つの門が有る。

テーバイの伝説は、隠された知の叙事詩に成る運命であった。

テーバイの伝説は、人の知の予見された歴史に成る運命であった。

全てのギリシャの神秘の例え話、全てのギリシャの霊感を受けた口伝は、ギリシャの文明の精神である。

しかし、ギリシャの詩の英雄の事実の歴史を、知られざる秘儀祭司がギリシャに持ち込んだオリエントの歴史を変形した物以外に探求しない様に思いとどまる必要が有る。

ギリシャの詩は、当時の大いなる者が記した、概念の歴史に過ぎない。

ギリシャの詩人は、国々の誕生につきものである、人の戦いを知らせる気は、ほとんどなかった。

ホメロスは、ギリシャの詩人の方針に従い、ギリシャの神々を概念の永遠の類型として配置した。

ギリシャの神は概念の類型である、という意図により、ギリシャの詩では世界の大変動は主神ユピテルの顔色に従う、と記されている。

もしギリシャが火と剣を小アジアに持ち込んだとしたら、知と徳を肉欲にささげた冒涜への報復のためであろう。

感覚的な官能的なウェヌスを無視して、世界の統治をミネルヴァとユノーに戻すためであろう。

愛の女神ウェヌスは放蕩者を滅ぼす。

人々の代わりに神々を、結果の代わりに原因を、地上における大いなるものの粗末な擬人化の代わりに永遠の概念を表すのが、詩の崇高な使命である。

概念が国々を建てたり倒したりする。

思想が国々を建てたり倒したりする。

何らかの信心が全ての大いなるものの源である。

何らかの信念が全ての大いなるものの源である。

信心が詩的に成るには、言い換えると、信心が創造的に成るには、信心は真理に基づく必要が有る。

賢者の心を引くに値する歴史は、闇に永遠に勝利する、光の歴史だけである。

闇に永遠に勝利する光の歴史という太陽の大いなる一日が文明と呼ばれる。

金羊毛の例え話はヘルメスの魔術とギリシャの秘伝伝授を結びつけている。

普遍の王者の権利を所有したい者が獲得する必要が有る、太陽の牡羊の金羊毛は、「大いなる務め」、「大作業」の象徴である。

アルゴー船は、神託を告げるドドナのオークを木材として造られた。

アルゴー船は、話す船である。

アルゴー船は、イシスの神秘の船である。

アルゴー船は、命の力と復活のノアの箱船である。

アルゴー船は、オシリスの棺である。

アルゴー船は、神性による生まれ変わりの卵である。

冒険者イアソンは、秘伝伝授のための修行者である。

ただし、イアソンは、勇敢なだけの英雄である。

イアソンは、人の全ての心変わりと全ての弱さ、欠陥を持っている。

しかし、イアソンは、全ての力を擬人化した者である英雄を連れて行く。

金羊毛では、ヘラクレスは、肉欲的な力の象徴である。

ヘラクレスは、金羊毛という「大作業」に関わる事ができなかった。

なぜなら、ヘラクレスは、肉欲を追いかけて道を踏み外してしまった。

肉欲的な力の象徴であるヘラクレス以外の英雄は、秘伝伝授の国コルキスに到達した。

コルキスはゾロアスターの秘密の名残を未だ保存していた。

問題は、どのようにゾロアスターの神秘の鍵を獲得するか、である。

再び女性が知を裏切って漏らし渡してしまった。

メディアが「大作業」の秘密を王国と父の命と共にイアソンへ渡してしまった。

なぜなら、秘密の大衆への口外が秘密を守る事ができなかった人へ死を必然的にもたらすのは、隠された聖所の必然の法である。

メディアは竜などについてと、戦う方法、勝利する方法をイアソンに教える。

地上の有翼の蛇、地上の有翼の竜とは、星の流体である。

星の流体を把握して固定する必要が有る。

竜の牙を引き抜いて戦神マルスの牛で耕しておいた荒地に撒く必要が有る。

竜の牙とは、酸である。

酸は、金属を含む土を分解する。

金属を含む土は、二重の火と地上の磁気の力によって用意する。

大いなる戦いに例えられる、発酵が起きる。

不純物が不純物を滅ぼす。

輝く羊毛は、達道者への報いである。

そこで、イアソンの魔術的な例え話が終わる。

そして、メディアの魔術的な例え話が始まる。

なぜなら、古代ギリシャ人は隠された知の完全な叙事詩をイアソンとメディアの歴史に盛り込んだ。

ヘルメスの魔術の後に、ゴエティアという悪人の霊の魔術、親殺し、弟殺し、子殺しが続く。

肉欲のために全てを犠牲にしても、罪の成果は楽しめない。

創世記 9 章 22 節で父ノアの裸をさらしたハムの様に、メディアは父を裏切る。

弟アベルを殺したカインの様に、メディアは弟を殺す。

メディアは自分の子を刺して殺す。

メディアは恋敵の女性を毒で殺す。

メディアは愛される事を望んでいたイアソンから憎まれる事に成る。

イアソンが金羊毛に熟達して知を獲得しなかったのは驚くべき事である様に見えるかもしれない。

しかし、イアソンはメディアの裏切りのおかげでのみ魔術の秘密を発見した事を思い出す必要が有る。

プロメテウスの様に、イアソンは知をおかした。

イアソンはオルフェウスの様な達道者ではない。

イアソンは知より富と権力を求めた。

イアソンは、みじめに死ぬ。

オルフェウスの弟子だけが金羊毛の霊感を受けた力、王者の力を理解するであろう。

プロメテウス、金羊毛、「テーバイド」、「イーリアス」、「オデュッセイア」は、5 つの大いなる詩である。

プロメテウス、金羊毛、「テーバイド」、「イーリアス」、「オデュッセイア」は、自然と人の運命の神秘に満ちている。

プロメテウス、金羊毛、「テーバイド」、「イーリアス」、「オデュッセイア」は、古代ギリシャの聖書である。

プロメテウス、金羊毛、「テーバイド」、「イーリアス」、「オデュッセイア」は、キュクロプスの様に巨人的な記念碑である。

プロメテウス、金羊毛、「テーバイド」、「イーリアス」、「オデュッセイア」は、(オッサ山をオリュンポス山の上に積み、)ペリオン山をオッサ山の上に積んだ、天に通じる道である。

(ギリシャ神話で、アロアダイは、神々との戦いで、オッサ山をオリュンポス山の上に積み、ペリオン山をオッサ山の上に積んで、天に通じる道を作ろうとした。)

プロメテウス、金羊毛、「テーバイド」、「イーリアス」、「オデュッセイア」は、天に通じる道である、傑作である。

プロメテウス、金羊毛、「テーバイド」、「イーリアス」、「オデュッセイア」は、天に通じる道である、形である。

プロメテウス、金羊毛、「テーバイド」、「イーリアス」、「オデュッセイア」は、光の様に美しい。

プロメテウス、金羊毛、「テーバイド」、「イーリアス」、「オデュッセイア」は、永遠の概念という王座に座っている。

プロメテウス、金羊毛、「テーバイド」、「イーリアス」、「オデュッセイア」は、真理の中の無上のものという王座に座っている。

詩の秘儀祭司はプロメテウス、金羊毛、「テーバイド」、「イーリアス」、「オデュッセイア」という真理が秘められた不思議な例え話を古代ギリシャの大衆に委ねる危険を覚悟していた。

アイスキュロスは巨人同士の争い、超人の苦悩、プロメテウスの神聖な希望を大胆に話した。

アイスキュロスは「テーバイ攻めの七将」といったオイディプス一族について話した畏敬するべき霊感を受けた詩人である。

アイスキュロスは神秘を大衆に口外して冒涜したと非難された。

アイスキュロスは苦労して厳しい非難から免れた。

現代の人々は、プロメテウスの象徴的な話を全て含んでいる三部作の劇のアイスキュロスの全ての意図を理解できない。

アイスキュロスは、ヘラクレスによって救われて解放されたプロメテウスと、王座から落とされたユピテルを大衆に見せた。

アイスキュロスが見せた、苦難における霊(プロメテウス)の全能性と、権力(の象徴としてのユピテル)に対する忍耐の決定的な勝利は、疑い無く、見事であった。

しかし、大衆は不信心と無政府状態による混乱の未来の勝利をアイスキュロスの劇に誤って見たかもしれない。

(権力の象徴としての)ユピテルに勝利する(霊)プロメテウスという劇は、いつか王者と祭司から解放される運命の大衆といった様に誤解されたかもしれない。

大衆がプロメテウスの劇を無思慮に公表したアイスキュロスへ与えた称賛のうち多くは王者と祭司から解放される大衆という誤った希望による物かもしれない。

考えが詩を好むおかげで、私達はアイスキュロスの傑作を所有している。

考えは詩を好むので、エリファス レヴィは、「国家」で「(神々に失礼な詩を歌う)詩人を王国から追放する必要が有る」と話したプラトンの様な、詩人に名誉を与えて国外へ追放する飾り気の無い秘伝伝授者ではない。

なぜなら、真の詩人は、地上における、神の使者である。

真の詩人を追放する人は神からの恵みを受ける資格が無い。

大いなるギリシャの始祖である、ギリシャを最初に文明化した人、オルフェウスは、最初の詩人であった。

なぜなら、たとえオルフェウスが霊的な象徴的な神話的な伝説的な有名な人物でも、オルフェウスの弟子ムサイオスの存在は信じる必要が有る。

ムサイオスの祖師オルフェウスの名前で通っている詩は、オルフェウスの弟子ムサイオスのおかげで後世に残されている。

アルゴー船の英雄の１人がオルフェウスと呼ばれている事は大して問題ではない。

なぜなら、詩の作者オルフェウスは人生よりも大いなる事を成し遂げた。

オルフェウスの不滅の名声は永遠に生きる。

オルフェウスの例え話は、完全な教えである。

オルフェウスの例え話は、祭司の運命の啓示である。

オルフェウスの例え話は、美の崇拝の新しい理想の形である。

オルフェウスの例え話は、改心と、愛への罪のつぐないをすでに表している。

オルフェウスはエウリュディケを求めて冥界に降りる。

オルフェウスはエウリュディケを見ないでエウリュディケを地上に連れ戻す必要が有る。

オルフェウスがエウリュディケを見ないでエウリュディケを地上に連れ戻す必要が有る様に、清らかな男性は伴侶の女性を創造する必要が有る。

献身的な愛によって、清らかな男性は伴侶の女性を男性の位階まで向上させる必要が有る。

肉欲によって、清らかな男性は女性を欲するなかれ。

肉欲をあきらめる事によって、人は真の愛の対象を所有する資格を得る。

キリスト教の騎士、キリスト教の紳士の清らかな夢、清らかな理想の趣（おもむき）である。

しかし、秘儀祭司オルフェウスも(弱い)人であった。

オルフェウスは、つまずき、疑い、エウリュディケを見てしまった。

ああっ、エウリュディケ。

エウリュディケを失ってしまった。

過(あやま)ちを犯してしまった。

罪のつぐないが始まる。

オルフェウスは妻エウリュディケを失い、清らかな童貞を守る。

オルフェウスのエウリュディケとの結婚は、性交という結婚の完成に未到達であった。

処女の妻エウリュディケを失ったオルフェウスは童貞を守って死んだ。

真の詩人には二心が無い。

真の詩人には浮気心が無い。

神族の子孫は、たった一度だけ愛する。

神の子は、たった一度だけ愛する。

真の詩人は、たった一度だけ愛する。

父の霊感。

(マタイによる福音 28 章 19 節 父である神)

墓の向こう側に存在する理想へのあこがれ。

詩神ミューズにささげて神聖化した童貞。

未来の霊感の事前の啓示。

オルフェウスは、死だけが癒せる傷を心に負ってから、魂と体の医者に成った。

オルフェウスは、貞節の犠牲と成って、ついに死んだ。

オルフェウスの死は、祖師達の死、預言者達の死と同じであった。

オルフェウスは神の単一性、愛の単一性、神と愛の単一性を公言して死んだ。

後世にオルフェウスの話はオルフェウス教の神秘の根幹と成った。

オルフェウスは、当時の事物を遥かに超越して見せたため、やがて魔術師や誘惑者としての評判を得た。

大衆は、ソロモンの様に、オルフェウスが薬草、鉱物、(万能薬といった)天の薬、賢者の石の知を持っていた、と考えた。

疑い無く、オルフェウスは薬草、鉱物、(万能薬といった)天の薬、賢者の石の知を持っていた。

なぜなら、伝説ではオルフェウスは原初の秘伝伝授、誘惑への敗北、罪のつぐないを体現している。

秘伝伝授、誘惑への敗北、罪のつぐないは人の「大いなる務め」の３つの段階である。

後記の様に、バランシュによると、オルフェウス教の秘伝伝授を要約できる。

「先に四大元素の感化を受けてから、後に自身の感化によって人は四大元素を統治する必要が有る。
創造とは、絶え間無い永遠の、神の魔術による行動である。
創造とは、絶え間無い永遠の、神の魔術による作用である。
人にとって、本当に存在するという事は、自身を知る事である。
人の務めとは、自身を克服する事である。
人の自身の克服にとって、罪への罰は、まさに(自身を克服するための)好機と成る。
(この世の)全ての命は死の上に建てられている。
復活とは、罪のつぐないへの法である。
復活とは、罪のつぐないへの約束である。
結婚とは、宇宙の創造の大いなる神秘の、人における、再現である。

結婚は唯一であるべきである。

神と自然には唯一性が有る様に。

結婚とは、命の木の唯一性である。

放蕩とは、分裂と死である。

占星術とは、唯一の総合である。

なぜなら、命の木は唯一の木である。

また、なぜなら、命の木の枝は、天空に広がっている。

そして、命の木の枝には、命の木の根に対応している、星々の花々が咲いている。

命の木の根は、地の中に隠されている。

また、神が命の多様性を与えた、植物、鉱物、生物の肉体に存在する医学的な魔術的な力の知とは、唯一の総合の知である。

唯一の総合は、多様な、生物の能力を明かす。

また、唯一の総合は、植物の成長力の精力の様に、消化吸収や同化の全ての力の様に、金属の集合力と親和力を教える」

　美とは、真理の輝きである、と言われている。

　初めてギリシャで表された、形の完成は、美というオルフェウスの大いなる光のおかげである。

　また、神の様なプラトンの学派は、起源として、オルフェウスのおかげである。

　プラトンは、ギリシャ教徒であるが、全ての高等なキリスト教哲学の父である。

　同様に、ピタゴラスと、アレクサンドリア学派の光に照らされた者は、神秘をオルフェウスから得た。

　秘伝伝授は変化を受けつけなかった。

　全ての時代を通じて、秘伝伝授は同一である。

(秘伝伝授は唯一普遍である。)

さらに、やはり、マルティネス ド パスカーリの最後の弟子達マルティニストは、オルフェウスの魔術の子孫である。

ただし、マルティニストは、古代の哲学の体現者である、キリスト教徒の、人に成った神の言葉イエスを敬礼している。

すでに話した様に、金羊毛の第一部は、オルフェウスの魔術の秘密を含んでいる。

金羊毛の第二部は、闇の魔術、ゴエティア、悪人の霊の魔術の悪用に対する賢明な警告のために用いられている。

ゴエティア、偽の魔術は、現在では、悪人の霊の魔術という名前で知られている。

悪人の霊の魔術を知として学問として位置づける事は不可能である。

悪人の霊の魔術は、不幸の非科学的な経験主義的な代物である。

過ぎた肉欲は制御不能な人為的な力をもたらす。

人為的な力は肉欲の暴走に従う。

人為的な力は肉欲の暴走に従うので、アルベルトゥス マグヌスは、怒っている時は誰も呪うなかれ、という忠告をしている。

テーセウスがヒッポリュトスを誤って呪った例え話の意味は、怒っている時は誰も呪うなかれ、という忠告である。

過ぎた肉欲は狂気である。

狂気は星の光による酩酊、星の光の過ぎた充満である。

狂気は星の光による酩酊、星の光の過ぎた充満なので、狂気は伝染し易い。

過ぎた肉欲は星の光の過ぎた充満なので、たいてい、まぎれもなく、肉欲は呪いとして作用する。

男性より、女性は悪人の霊の魔術に優れている。

なぜなら、男性より、女性は過ぎた肉欲に夢中に成り易い。

「悪人の霊の魔術師」を意味する「sorcerer」という言葉は、(語源がラテン語で「運命」を意味する「sors」なので、)「運命の奴隷」を明らかに意味する。

「悪人の霊の魔術師」を意味する「sorcerer」という言葉は、(語源がラテン語で「運命」を意味する「sors」なので、)「運命の毒きのこ」、「不幸の毒きのこ」を意味する、と言える。

ギリシャの悪人の霊の魔術師、特にテッサリアの悪人の霊の魔術師は、恐るべき教えを試し、憎むべき儀式に身を任せた。

ギリシャの魔女の多くは、人生などをもはや満たせない肉欲に浪費した女性、老いた遊女、不道徳な醜い人でなしであった。

愛と命に嫉妬して、みじめな動物的人間である、ギリシャの魔女は墓でしか愛人の男性(の死体)を見つけられなかった。

ギリシャの魔女は、墓を荒らして、若い男性の氷の様に冷たい死体を下品に愛撫して、むさぼった。

ギリシャの魔女は、幼子をさらって、たれている乳房に押しつけて泣き叫ぶ幼子を窒息死させた。

ギリシャの魔女は、ラミア、ストリゲス、エンプーサとして知られている。

幼子は、ギリシャの魔女の嫉妬と憎しみの対象であった。

嫉妬と憎しみという理由のために、ギリシャの魔女は、幼子を殺した。

中略

メディアとキルケは、ギリシャの有害な魔術、悪人の霊の魔術の象徴である。

キルケは、愛人を誘惑して堕落させる不道徳な女性である。

メディアは、全ての悪事を断行する、自然を罪の扇動者に仕立てる、鉄面皮の厚顔無恥な毒殺者である。

　キルケの様に誘惑して、近づく者を汚染する、動物的人間である、キルケの様な女性が実際に存在する。

　キルケの様な女性は、肉欲しか吹き込まない。

　キルケの様な女性は、人を利用し尽して侮(あなど)る。

　オデュッセウスの策に従って、キルケの様な女性に対処する必要が有る。

　キルケの様な女性を、恐怖によって従わせ、ためらわないで見捨てる必要が有る。

　キルケの様な女性は、美しいが、無情な人でなしである。

　キルケの様な女性の人生は、空虚である。

　古代ギリシャ人は、キルケの様な女性を、セイレーンという形で表した。

　メディアは、逸脱した悪の体現者であり、悪を望み、悪を行う。

　メディアは、男性に愛着を覚える事ができ、恐怖に従わない。

　ただし、メディアの愛着は、メディアの憎しみより、恐るべき物である。

　メディアは、悪い母親で、子殺しである。

　メディアは、夜の闇を好み、毒を調合するために月明りの下で毒草を摘む。

　メディアは、風を磁化し、悲しみを土にもたらし、水を汚染し、火ですら有毒にする。

　メディアは、四大元素を汚染する。

　地をはう爬虫類は抜け殻をメディアにもたらす。

　(地をはう爬虫類は汚れた星の光の例えである。)

　メディアは、恐るべき言葉をつぶやく。

　メディアの後ろには血の道が続く。

　メディアの手から切断された手足が落ちる。

　メディアの進言は狂わせる。

メディアの愛撫は恐怖をもたらす。

　メディアの様な女性は、禁じられた知によって女性の務めを放棄しようと試みる女性である。

　男性はメディアの様な女性を避ける。

　幼子はメディアの様な女性が近くを通る時に隠れる。

　メディアは理性が欠落している。

　メディアは本当の愛が欠落している。

　メディアに憎悪した自然の策は、メディアの自尊心を永遠にくり返し苦しめる事である。

第 1 巻 第 6 章 ピタゴラスの数学的な魔術

すでに話した様に、ローマの第 2 の王ヌマ ポンピリウスは魔術をいくらか知っていた。

タルコンがヌマ ポンピリウスに秘伝伝授した人として知られている。

タルコンはカルデア人のタゲスの弟子であった。

魔術という知には、世界のあちこちに行って、王者と祭司を作る伝道者である使徒がいた。

神が計画を実現するために迫害を覆す事は珍しくなかった。

オリンピック暦第 72 期の紀元前 488 年頃か、ヌマ ポンピリウスの 4 世代後の紀元前 553 年頃、サモス島のピタゴラス(紀元前 582 年～紀元前 496 年)は、イタリアへ、サモス島のポリュクラテスの圧政から避難した。

ピタゴラスは、数の哲学の大いなる促進者である。

ピタゴラスは、世界の全ての聖所を訪れた。

ピタゴラスは、ヘブライ人の所も訪れた。

ピタゴラスは、ヘブライ人の所で、カバラの神秘へ入門するために男性器の包皮を切除する割礼を受けた。

ある程度の制限は有ったが、預言者エゼキエルと預言者ダニエルはカバラをピタゴラスに教えた。

その後、ヘロドトスがアマシスという名前で記しているエジプトの王イアフメス 2 世(在位紀元前 570 年～紀元前 526 年)が推薦して、苦労して、ピタゴラスは、エジプトの秘伝伝授を得た。

ピタゴラスは、自力で秘儀祭司の不完全な啓示を補って、達道者に成った。

ピタゴラスは、神秘の解説者に成った。

ピタゴラスは、神は光をまとった生きている絶対の真理である、と定義した。

ピタゴラスは、神の言葉は形で表した数である、と定義した。

ピタゴラスは、全てのものを４つ１組と言えるテトラクテュスから導き出した。

ピタゴラスは、神は無上の音楽である、と話している。

ピタゴラスは、音楽の性質は調和である、と話している。

ピタゴラスによると、宗教は正しさの最高の表現である。

医学は知の完全な実践である。

美とは調和である。

力とは論理である。

幸せとは完全である。

真理の応用は人の弱さと逸脱を疑う事に有る。

ピタゴラスが、家をイタリアの都市クロトンに作ると、最初は、都市クロトンの執政官達は、ピタゴラスが大きな影響力を人々の心に及ぼしていたので、ピタゴラスに不安を抱いていた。

しかし、後には、都市クロトンの執政官達は、ピタゴラスの助言を求めた。

ピタゴラスは、女神ミューズ達への信心を深める事と、執政官の間で合意といった完全な調和を保持する事を執政官達に勧めた。

なぜなら、執政官同士の不和、主人同士の不和は、従者同士の不和を誘発してしまう。

そうしてから、ピタゴラスは、大いなる宗教的な教え、政治的な教え、社会的な教えを執政官達に与えた。

無政府状態による混乱に勝る悪は存在しない。

無政府状態による混乱は最悪の悪である。

「無政府状態による混乱は最悪の悪である」という言葉は、普遍に応用でき、無限に近い深い意味を持っている。

現代でも未だに「無政府状態による混乱は最悪の悪である」という事を理解できる様な十分な啓蒙を人々に行っていないが。

ピタゴラスの人生についての口伝以外の、ピタゴラスの遺作は、ピタゴラスの「黄金詩篇」と例え話だけである。

ピタゴラスの「黄金詩篇」は、道徳の教訓の人気の決まり文句と成って、多くの時代を通じて大いに成功した。

後記は、ピタゴラスの「黄金詩篇」を翻訳した物の前半である。

「第一に、不死の神々を畏敬しなさい。

神の法が不死の神々を確立して定めている様に。

神への誓いを畏敬しなさい。

正しさや徳と光に満ちた英雄達を畏敬しなさい……。

父と母を神の様に畏敬しなさい。

あなたに親しくしてくれる人を畏敬しなさい。

他人のうち、徳によって自身をわきまえている人を友にしなさい。

常に些細な忠告にも耳を傾けなさい。

徳にかなった有益な行為を見習いなさい。

些細な落ち度のために友を憎むのを可能な限り避けなさい。

力は不可避に近い隣人である、と理解しなさい……。

暴飲暴食、怠惰、好色、怒りといった肉欲や激情を克服しなさい。

他人の前でも自分だけでいる時でも、悪い事をするなかれ。

何よりも(結婚まで処女を守るといった様に)自身を大事にしなさい。

自分の言動において正しさを守りなさい……。

運による富は、気まぐれで当てにならない不確かな物である。

運による富は、獲得した時の様に、(簡単に、)失われる。

全ての人(の肉体)は死ぬ運命である、と常に熟考しなさい……。

自分の運命がどうであろうとも忍耐しなさい。

自分の運命に文句を言うなかれ。

ただし、自分の運命を改善できる様に努力しなさい。

運命は不幸を正しい人に最大に割り当てない、と熟考しなさい。

神は不幸な運命を正しい人に最大に割り当てない、と熟考しなさい。

他人の言動に惑わされない様にしなさい。

他人に惑わされて、自身に有益ではない言動をしない様にしなさい。

独りでも、自身に有益な言動をする様にしなさい。

愚行を犯さない様に、行動する前に他人に相談したり自分で熟考しなさい。

なぜなら、熟考しない言動が人の不幸の原因である。

実に、後悔しない様に行動しなさい。

後悔する様な事をするなかれ。

理解しないで行動するなかれ。

知るべき事を学びなさい。

知るべき事を学ぶ事によって、好ましい人生をおくりなさい。

自身の肉体の健康管理を怠るなかれ。

実に、適度に飲食しなさい。

肉体に必要な鍛錬をしなさい。

贅沢をしない整った正しい生き方を習慣にしなさい。

自分に有害ではない事だけをしなさい。

自分に有害ではない事だけをする前に、他人に相談したり自分で熟考しなさい。

ベッドに行った後に、今日の全ての自分の行為を理性的に考察し終わるまで、まぶたを閉じて眠るなかれ。

誤った行動をしていないか？

何をしたか？

やるべき事をし忘れていないか？」

　ピタゴラスの「黄金詩篇」の前半は、学校の教師の教えにしか見えないであろう。

　しかし、ピタゴラスの「黄金詩篇」の後半は、前半とは異なる。

　ピタゴラスの「黄金詩篇」の後半は、魔術の秘伝伝授を用意する法である。

　ピタゴラスの「黄金詩篇」の後半は、「大いなる務め」の最初である。

　「大いなる務め」の最初は、完全な達道者を創造する事である、と言える。

　後記は、ピタゴラスの「黄金詩篇」の後半である。

「人の魂に知らせた者によって、私は神の４つ１組に誓う。

神の４つ１組は、自然の源泉である。

自然の原因は、永遠である。

自然の原因である、神の４つ１組は、永遠である。

成就を神々に祈るまで、取り組むなかれ。

成就を神々に祈ってから取り組みなさい。

成就を神々に祈ってから取り組む習慣に慣れた時、(正しい人に成った時、)不死の神々の性質と、人の性質を知るであろう。

どの様な遠くに多様な存在が到達するか、何が多様な存在を包み込み結びつけているか、知るであろう……。

この世の何ものも隠されていない、と知るであろう……。

おおっ、主神ユピテル、人の父である神！

もし、あなたが人を圧倒している全ての悪から人を救って解放すれば、どの様な霊を人が利用しているか人に見せるであろう。

ただし、勇気が必要である。

人という種は神聖である……。

(正しい人が)死ぬべき肉体という衣を脱いだ時、無上の清らかなエーテルに到達するであろう。

神に成るであろう。

不死に成るであろう。

不壊に成るであろう。

もう死に支配されないであろう」

　ピタゴラスの「黄金詩篇」以外では、後記の様に、ピタゴラスは話している。

「3 つの神の概念が存在する様に、(宗教、哲学、自然科学といった)3 つの知で理解可能な分野が存在する様に、3 重の言葉が存在する。

なぜなら、常に、位階制の秩序は 3 つ 1 組であらわれる。

簡単な言葉、理解し難い言葉、象徴の言葉が存在する。

言い換えると、表す言葉、隠している言葉、意味する言葉が存在する。

全ての祭司だけの知は、前記の、3 つの段階の完全な知に存在する」

　前記の様に、ピタゴラスは、考え、教えを例え話に秘めた。

　ただし、擬人化と映像化は避けた。

ピタゴラスの意見では、遅かれ早かれ、擬人化と映像化は偶像崇拝を招く。

　詩人への憎悪によって、ピタゴラスは非難された。

　けれども、実は、ピタゴラスは、詩作の業（わざ）を悪い詩を作る詩人にだけ禁止した、だけである。

　例え話でピタゴラスは「(正しい概念という)竪琴を持たない人は歌おうと試みるなかれ」と話している。

　崇高な概念と美しい象徴表現の正確な対応を重視するほどピタゴラスは偉大であった。

　実際、ピタゴラスの詩は詩心に満ちている。

「花冠の花々を散らすなかれ」

　「花冠の花々を散らすなかれ」という言葉でピタゴラスは「名誉を傷つけるなかれ」、「大衆が名誉とする事物のうち善いと思われる事物を軽視するなかれ」と弟子に勧めている。

　ピタゴラスは、貞淑であった。

　ただし、ピタゴラスは禁欲や独身を弟子に勧めず、ピタゴラス自身が結婚して子がいた。

　後記の様な、ピタゴラスの妻の美しい言葉が、エリファス レヴィの記憶に残っている。

　ピタゴラスの妻は「男性と性交した後に、女性は身を清める必要が有るか？」と聞かれた。

また、ピタゴラスの妻は「男性と性交した後に、何時間、経過すれば、女性は神聖なものに近づけるくらい十分に清められたと考えられるか？」と聞かれた。

ピタゴラスの妻は「夫と性交したのであれば、身を清めた後すぐに神聖なものに近づける。しかし、夫ではない男性と性交したのであれば、永遠に神聖なものに近づくなかれ」と答えた。

ピタゴラスの妻の「夫ではない男性と性交したのであれば、永遠に神聖なものに近づくなかれ」という考えと行動と同一である、考えの厳しさと行動の清らかさが、自然の神秘の秘伝伝授の資格をピタゴラス学派に与えた。

また、そうして、ピタゴラス学派は、四大元素の力の統治を経て、自身の統治に到達した。

ピタゴラスは、現代で予見と呼ばれ、当時も予見として知られていた、予見の能力を所有していた。

ピタゴラスが、ある日、弟子達と共に海岸にいると、船が水平線上に現れた。

1人の弟子が「師ピタゴラス、あの船が運んでいる積み荷をもらえたら、財産に成るでしょうか？」とピタゴラスに言った。

ピタゴラスは「あなたには、あの船の積み荷は役に立たない所では済まないであろう」と弟子に答えた。

弟子は「では、私の後継者のためにあの船の積み荷をとっておくつもりです」とピタゴラスに言った。

ピタゴラスは「あなたは2体の死体を後継者に残すつもりなのか？」と弟子に言った。

船は、港に着いて、故郷への埋葬を希望する１人の男性の死体を含む２体の死体を運んでいる事を証明した。

さらに、予見と関係して、獣はピタゴラスに従った。

昔、オリンピックの競技中に、ピタゴラスは、空を飛んでいたワシに合図した。

ワシは、輪を描いて降りて来た。

ピタゴラスが、去る様に合図すると、ワシは飛び立った。

また、大きなクマがアプリアを荒らしていた。

ピタゴラスは、クマを呼び寄せてアプリアを離れる様に話した。

クマはピタゴラスの言葉に従ってアプリアから消えた。

ピタゴラスは「クマを従わせる様な不思議な力は、どの様な知をピタゴラスが知っているおかげなのか？」と聞かれた。

ピタゴラスは「獣を従わせる不思議な力は、光の知のおかげである」と答えた。

事実、生きている存在は光の化身である。

生きている存在は、醜い形という闇から脱出する。

生きている存在は、美という輝きへ進歩する。

先天的な性質は形に対応している。

人は光の総合体である。

動物は光の解析結果であると呼べるかもしれない。

人は動物の主である様に創造されている。

しかし、人が動物の主に成る代わりに動物の迫害者に成ったので、動物は人を恐れて反抗する様に成ってしまった。

動物に思いやり深い、と同時に、動物の心を傾ける、優れた意思を前に、動物は完全に魅了される。

人は、多数の現代の現象によって、ピタゴラスの奇跡の様な、奇跡が可能であると理解できるし理解するべきである。

人相学者は「多数の人の顔には、1 種類以上の動物との類似が、いくつか存在する」と話している。

多分、「多数の人の顔には、1 種類以上の動物との類似が、いくつか存在する」と言うのは、人のいくつかの目立つ性質を表している変化に富んだ人相がもたらす、印象がもたらす、想像による物に過ぎない。

多分、想像による物に過ぎないが、気難しい人はクマを連想させる。

多分、想像による物に過ぎないが、猫をかぶっている偽善者は猫に見える。

など。

動物との類似によると言う人相判断は、想像によって誇張される。

動物との類似によると言う人相判断は、夢によって更に誇張される。

夢は、目覚めている時に不快にさせた人を動物に変えて、悪夢の苦しみを経験させる。

動物は、人以上に、想像力の支配下である。

動物には人の様な判断力が無い。

人は判断力によって想像の誤りを止める事ができる。

動物は、人が人の磁気によって高めた共感か反感に従い、人に対して共感か反感を抱く。

さらに、動物は、人の形という基礎を意識しない。

そのため、動物は、人を動物の主である別の動物としてのみ見なす。

犬は、飼い主の人を自分より完全な犬であると見なす。

動物の主に成る秘密は、動物が人を動物と見なす先天的な傾向への策に存在する。

エリファス レヴィは、獣の有名な調教師が、調教師自身が怒ったライオンであるかの様に、恐ろしい表情と動作を見せて、ライオンをすくませたのを見た事が有る。

獣の調教師が、調教師自身が怒ったライオンであるかの様に、恐ろしい表情と動作を見せて、ライオンをすくませたのは、「オオカミの群れにいる時は、ほえる必要が有る」や「羊といる時はメーと鳴く必要が有る」という一般的なことわざの文字通りの応用である。

また、全ての動物の形は独特の先天的な性質、習癖、悪徳を表している、事を理解する必要が有る。

心の中で支配的に成るほど、人が獣の性質の影響を受けると、段々、人は心の中で支配的に成った獣性の獣の外的な見かけを身につけて行く傾向が有る。

人は心の中で支配的に成った獣性の獣の完全な映像を星の光に記しさえする。

さらには、夢や忘我状態に落ちた時に、忘我状態の人達の様に、人は自身が動物の姿である夢を見るであろう。

夢の中で、催眠状態の人達には、人が動物の姿に見えるであろう。

疑い無く、動物の目には人が動物の姿で夢にあらわれるに違い無い様に。

自分が動物の姿である夢を見る状態のままにしておくと、人は理性が消えるであろう。

自分が動物の姿である夢を見る状態のままにしておくと、永続する夢は狂気に変わるであろう。

自分が動物の姿である夢を見る状態のままにしておくと、ダニエル書 4 章 33 節で獣に変身したネブカドネザル 2 世の様に、人は獣(の様な動物的人間)に変身するであろう。

自分が動物の姿である夢を見る状態のままにしておくと、人は獣(の様な動物的人間)に変身する事は、狼男の話を説明する。

狼男の話のうち、いくつかは法的に確証されている。

狼男の事実は議論の余地が無い。

ただし、実は、狼男以上に、狼男の目撃者も幻覚に襲われている。

複数人の夢の一致は、珍しく無く、驚くべき事ではない。

人は、磁気の忘我状態で、相互に、地上の端同士でも、見合ったり、話し合ったりできる。

(「デジャヴ」として知られている様に、)人は、初めて会う誰かが古い知人である様に思う場合が有るかもしれない。

それは、夢の中で頻繁に出会っている、からである。

人生は、(「デジャヴ」の様な)不思議な出来事に満ちている。

人の動物への変身については、全方面に、証言や事跡が存在する。

何人の、老いた遊女や貪欲な女性が、人生の全てのドブを曲がりくねって進んだ後に、愚かに成り下がり、男性に夢中な老猫以外の何者でもなく成ったであろうか？

何よりも、ピタゴラスは、魂の不死を信じていた。

ピタゴラスは、(魂の)命の永遠を信じていた。

ピタゴラスにとっては、夏と冬、昼と夜、眠っている時間と起きている時間の永遠の連続が死という現象を十分に説明していた。

ピタゴラスにとっては、人の魂の独特の不死は、記憶の永続に存在した。

ピタゴラスには前世の記憶が有った、と言われている。

もしピタゴラスに前世の記憶が有ったという話が本当なら、ピタゴラスの記憶には何か意味が有る。

なぜなら、ピタゴラスの様な人は詐欺師や愚者であるはずが無い。

ピタゴラスは、夢の中で前世を見たのであろう。

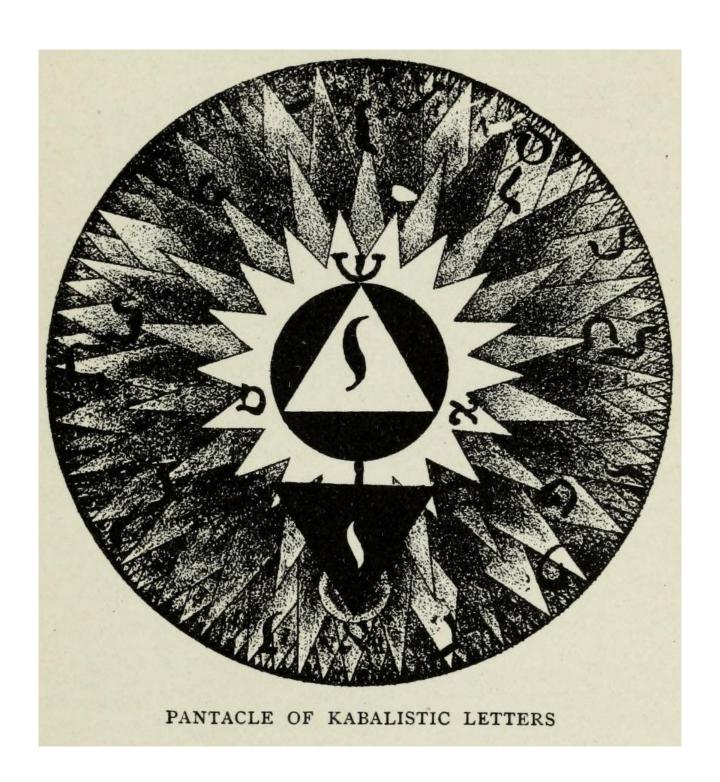
ピタゴラスは、前世という、ただの推測、仮説を実際に肯定したと誤解されたのであろう。

しかしながら、ピタゴラスの思想は偉大であった。

なぜなら、人個人の現実の人生は記憶の中にのみ存在する。

古代人が話している「忘却」を意味する「レテ」という冥界の川は、死の真実の哲学的な類型である。

詩編 112 章 6 節には「正しい人は永遠に覚えられる」と記されていて、神の承認を「レテ」という考えに与えている様である。

PANTACLE OF KABALISTIC LETTERS

第 1 巻 第 7 章 神のカバラ

神のカバラに戻って、真の知の起源に頼ろう。

カバラは、セトの子孫の口伝である。

アブラハムは、カバラをカルデアから持って行った。

24 祖ヨセフは、カバラをエジプトの祭司に教えた。

モーセは、24 祖ヨセフからエジプトの祭司を経由して、カバラを入手した。

ヘブライ人は、カバラを聖書に象徴で隠した。

救い主イエスは、カバラを使徒ヨハネに明かした。

使徒ヨハネは、豊かに、全ての古代の象徴と類推可能である祭司だけの象徴で、カバラをヨハネの黙示録に込めた。

カバリストは、偶像崇拝に似た物へ嫌悪を抱く。

それにもかかわらず、カバリストは、神を人の形で表す。

ただし、神を人の形で表すのは、純粋に象徴的である。

カバリストにとって、神は知、愛、生きている無限である。

神は、存在全ての全体性ではなく、抽象概念の中の存在ではなく、哲学的に定義可能な存在ではない。

神は、全てのものの内に存在し、全てのものを超越している存在である。

神の名前は(濫りに)言ってはいけないほど神聖である。

しかも、神の名前ですら神の神性への人の想像を表すに過ぎない。

人には、神が神を理解する様に、神を理解する事は不可能である。

神は信心の絶対である。

しかして、論理の絶対は神である。

神は自力で存在している。

神は存在するので、神は存在する。

神の原因は神である。

あれこれのものの存在を問うのは、合理的な思索の題材に成る。

神ではないものの存在を問うのは、合理的な思索の題材に成る。

しかし、神の存在を問うのは、非論理的である。

なぜなら、神の存在を問うのは、存在(である神)より前に、存在(である神)を要求する事に成ってしまう。

論理と知が、神の存在の形は、位階制の調和の法に従って、つり合っている、と実証している。

位階制は段々と上昇するほど君主制に成って行く。

同時に、理性は、唯一絶対の長である、神の存在を考えると、無上の王である、神の上に広がる高みを認めて圧倒される。

(神も向上して行く。)

そして、理性は、沈黙へ逃避して、敬愛する信心に場所を譲る。

科学や論理と同じく確実な事は、神という概念が偉大であり、神聖であり、人の向上心の役に立つ事である。

神という道徳性と、神への永遠の承認は、前記の、信心に基づいている。

人には、信心は存在の現実的な現象である。

もし神が存在するという信心が誤りであれば、自然は非論理的な物を定めてしまうであろう。

もし神が存在するという信心が誤りであれば、虚無が命を支えてしまうであろう。

もし神が存在するという信心が誤りであれば、「神は存在する」と同時に「神は存在しない」という事に成ってしまいかねない。

カバリストは名前を神という哲学的な事実、神という議論の余地が無い事実、神の概念につけた。

神の名前は他の全ての名前を含んでいる。

神の名前の数字は、全ての数をもたらす。

神の名前の象形文字の形は、自然の中に存在する全てのものと、自然の全ての法を表す。

「高等魔術の教理」で既に話した、神のテトラ グラマトン、神の名前ヤハウェについて、くり返すつもりは無い。

ただし、つけ加えると、カバリストは神の名前を主に 4 つの方法で記している。

(1)

神の名前を יהוה、YHWH とつづるが、発音しない。

神の名前 יהוה、YHWH、ヤハウェは、子音字である、イョッド、ヘー、ヴァウ、ヘーである。

神の名前 יהוה、YHWH、ヤハウェを JEHOVAH とつづる場合が有るが、全ての類推に反している。

なぜなら、JEHOVAH は、6 文字なので、テトラ グラマトン、神の名前ヤハウェの外観、美、価値を損なってしまう。

(2)

「אדני」、「ADNI」は「主」、「主である神」を意味し「アドナイ」と発音する。

(3)

「אהיה」、「AHIH」は「存在する」、「存在」、「神」を意味し「エヘイエ」と発音する。

(4)

「אגלא」、「AGLA」は文字通り「アグラ」と発音し、カバラの全ての神秘を象形文字的に含んでいる。

AGLA のうち、א、アレフは、ヘブライ文字の最初の文字である。

א、アレフは、単一性を表す。

א、アレフは、「上のものは下のものから類推可能である」というヘルメスの考えを象形文字的に表す。

「上のものは下のものから類推可能である」と一致して、א、アレフには、2 本の腕があり、一方で地を指し、同様に、他方で天を指す身振りをしている。

AGLA のうち、ג、ギメルは、ヘブライ文字の第 3 の文字である。

ג、ギメルは、数としては、3 つ 1 組を表す。

ג、ギメルは、象形文字としては、出産、充実を意味する。

AGLA のうち、ל、ラメドは、ヘブライ文字の第 12 の文字である。

ל、ラメドは、数としては、完全な周期を表す。

ל、ラメドは、象形文字としては、永久機関の永久運動の循環と、円周への半径の関係を表す。

AGLA のうち、重複している、א、アレフは、統合を表す。

したがって、後記を、AGLA という神の名前は意味する。

(1)

単一性は、3 つ 1 組によって、数の周期を達成して、単一性に戻る。

(2)

自然の原理は、満ちあふれ、(周期の)後に、一体と成る。

(3)

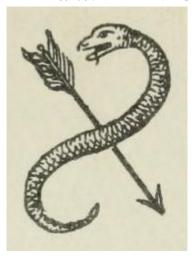
第一の真理は、知を豊かにして、(循環として、)知を単一性に戻す。

(4)

兼用法、解析、知、統合。

(5)

三位一体の、父である神、息子であるイエス、神の聖霊という 3 つの人格は、全て、唯一神である。

意思の唯一の万能の作用によって、星の光を固定する事が、「大作業」の秘密で、達道者は矢が貫き通されている蛇が形成している文字 א の形で表した。

(6)

分解、昇華、固定という「大作業」の 3 つの作業と対応している塩、硫黄、水銀という 3 つの根源の物質を文字ギメルが全て表している。

(7)

バシレウス ヴァレンティヌスの 12 の鍵を文字ラメドが表している。

(8)

「大作業」の原理、と一致して、「大作業」を成就して、「大作業」の原理を増殖させる。

AGLA は魔術の全てを含んでいるカバラの口伝の起源である。

AGLAという言葉を理解する方法と「話す」方法を知る事は、奇跡の鍵を所有する事に成る。

または、厳密な意味で、AGLAの神秘を理解して知を行動、作用に変える事は、奇跡の鍵を所有する事に成る。

「AGLAという言葉を話すには東を向く必要が有る」と言われているのは、「意思と知をオリエントの口伝と調和させる必要が有る」事を意味している。

さらに、記憶するべき事として、カバラによると、完全な言葉は行動によって実現された言葉である。

「行動する」事を意味する、聖書で頻繁にくり返される「言葉をなす」という表現は、「完全な言葉は行動によって実現された言葉である」というカバラに由来する。

AGLAという言葉を「カバラ的に話す」という事は、AGLAという「言葉をなす」事、入門の試練を全て通過する事、入門の試練という「大いなる務め」である「大作業」を果たす事である。

「高等魔術の教理」の10章でセムハムフォラスについて話したが、神の名前ヤハウェはセムハムフォラスと呼ばれる説明的な72の神の名前に分かれる。

カバリストは、セムハムフォラスという72の神の名前を応用して普遍の知の鍵を発見するわざを「ソロモンの鍵」と呼んでいる。

事実、「ソロモンの鍵」という名前を持っている、祈り文句や降霊術を集めた本の末尾には、たいてい、72の魔法陣の輪が記されている。

72の魔法陣の輪は、36のタリスマンをなしている。

36は、9の4倍である。

9は、絶対の数である。

36は、4つ1組によって増殖した9である。

36のうち1つのタリスマンには、72のうち2つの神の名前、1から36までのうち1つの数を表す象徴、1から36までのうち1つの数に対応している、テトラ グラマトンの4文字のうち1文字が記されている。

36のタリスマンは、棒、杯、剣、輪またはpantacleまたはコインという4つの象徴による、タロットの小アルカナの4組の10つ1組の起源である。

棒は、イョッドを表す。

杯は、ヘーに対応している。

剣は、ヴァウに対応している。

輪または五芒星といったpantacleまたはコインは、最後のヘーに対応している。

タロットでは、10つ1組を補完して、4を36に足して、統一性という性質を統合的にくり返している。

大衆の魔術についての口伝では「『ソロモンの鍵』を所有する人は、全ての位階の霊と交流でき、全ての自然の力を従わせる事ができる」と言われている。

「ソロモンの鍵」は、失われるたびに取り戻されて来た。

「ソロモンの鍵」は、36のタリスマン、セムハムフォラスという72の神の名前である。

また、「ソロモンの鍵」は、タロットによる「32の経路」の神秘である。

(「32の経路」は1から10までの10の数と22文字のヘブライ文字である。)

タロットの象徴の助けによって、また、数や文字の組み合わせの様な、タロットの無限の組み合わせによって、自然の全ての秘密の自然な数学的な啓示に到達可能である。

また、全ての位階の知的存在との交流が確立される。

カバリストは、知によって、妄想による白昼夢を用心した。

そのため、カバリストは、特に、神経系を乱し理性を酩酊させる、全ての有害な降霊術を避けた。

超常的な幻視を好奇心で試す人は、麻薬を試す人である。

超常的な幻視を好奇心で試す人は、無思慮に自身を傷つける幼稚な人である。

超常的な幻視を好奇心で試す人は、酩酊に圧倒されるかもしれない。

超常的な幻視を好奇心で試す人は、酩酊に夢中に成るかもしれない。

しかし、自分を大事にする人には、超常的な幻視を好奇心で試すのは、1 回だけで十分である。

ジョゼフド メーストル伯爵は「人は、中世の粗野な言動を笑いものにして話す様に、18 世紀の愚かな言動について笑いものにして話すであろう」と話している。

テーブル ターニングをする大衆を見て、または、霊の冥界についての大衆の推測を聞いて、ジョゼフド メーストル伯爵は、どう思うであろうか？　笑い者である!

人は、劣悪な生物である。

人は、一方の非論理的な物を避けて、他方の非論理的な物に軽率に極端に走る。

18 世紀の大衆は、宗教を否定して、迷信に異議を唱えていると誤って思い込んでいた。

19 世紀の大衆は、迷信を信じて、19 世紀の不信心を証明している。

ヴォルテールよりキリスト教徒である事は不可能なのか？

霊を信じないのか？

幼子が母の胎内に戻れない様に、死んだ者が離れた地上に戻る事はできない。

人が死と呼んでいる物は、新しい生への誕生である。

自然は、存在の位階を通じて、必要な進歩の秩序において、行った事をくり返さない。

自然は、自然の基礎の法を裏切るはずが無い。

体の器官によって制限されているが、体の器官の仲介によってのみ、人の魂は目に見える世界の物と交流できる。

肉体は、物質的な環境に適応するための、外皮である。

魂は、肉体によって、物質的な世界に存続している。

魂の行動を制限する事によって、魂は魂の行動を可能とする。

肉体が無いと、魂は遍在する。体が無いと、魂は遍在する。

肉体が無いと、感覚が希薄に成って、物質世界では魂は行動できなく成る。

または、体が無いと、感覚が希薄に成って、魂は無限の者である神の中に消え失せてしまう。

体が無いと、感覚が希薄に成って、人の魂は神に飲み込まれて消滅してしまうであろう。

小球に閉じ込めた一滴の真水を海の中に落とすのを想像しなさい。

小球という覆いが破損しないで保たれている限り、一滴の真水は独立した形で存続するであろう。

しかし、小球という覆いが破損したら、広大な海の中で、一滴の真水を見つけられるであろうか？　いいえ！

人の霊を創造する時に、人の霊の作用を集中する(星の体という)外皮に制限する事によってのみ、神は個人的な自意識、個人的な自我を人の霊に与える事ができた。

(星の体という)外皮に制限する事によって、神は人の霊を消失から守っている。

魂は、肉体を離れると、当然、環境を変える事に成る。

なぜなら、魂は外皮を(肉体から星の体へ)変える。

魂は、星の光の形、星の光の媒体、星の体だけをまとって、肉体を出て行く。

魂は、星の体の性質の力によって、大気を超えて上昇して行く。

破損した容器の中の水から水蒸気という気体が昇る様に。

エリファス レヴィは、魂は上昇する、と話した。

なぜなら、魂の媒体(である星の体)は上昇する。

また、なぜなら、魂の作用と自意識、自我は魂の媒体(である星の体)に結びついている。

大気は、光の形という体、星の体にとっては、固体と成る。

星の体は、大気より無限に、希薄である。

星の体は、肉体という重い媒体をまとう事によってのみ、下降できる。

地上の大気を超越した領域や冥界の、どこで重い肉体を獲得するのか？

魂は、別の肉体をまとう事によってのみ、地上に戻る事ができる。

しかし、魂が別の肉体をまとって地上に戻る事は、喪失に成ってしまう。

なぜなら、魂が別の肉体をまとって地上に戻る事は、精神が自由な状態をあきらめる事に成ってしまう。

また、魂が別の肉体をまとって地上に戻る事は、見習い期間をくり返す事に成ってしまう。

カトリックは、魂が別の肉体をまとって地上に戻る可能性を認めていない。

前記の、考えをカバリストは「霊は、下降するためにまとい、上昇するために脱ぐ」という唯一の言葉で明確に話している。

知的存在の生き方とは、上昇である。

知的存在の生き方とは、向上である。

知的存在の命には、上昇傾向が有る。

母の肉体の中で、人の幼子は、母の肉体と繋がっている、へその緒を通じて養分を引き寄せ、植物の様な生活を送る。

木が、大地に繋がっている、根を通じて養分を引き寄せる様に。

人の、子は、植物の様な生活から、直感の動物の様な生活へ移ると、へその緒を断ち切って、自由に行動する。

人は、大人に成ると、直感の制約から逃れて、理性的な存在として行動できる。

人は、死ぬと、人を地上に縛りつけていた重力、引力、下降の法から解放されて自由に成る。

人の魂は、罪をつぐなうと、地上の大気という外の闇から脱出して太陽へ上昇できるほど強く成長する。

(マタイによる福音 22 章 13 節「外の闇」)

神のはしごでの永遠の上昇が始まる。

(創世記 28 章 12 節「ヤコブは夢をみた。1 つのはしごが地の上に立っていた。はしごは天に達していた。天使がはしごを上り下りしていた」)

なぜなら、神に選ばれた人の永遠性が、怠惰、無益ではいけない。

神に選ばれた人は、徳から徳へ、至福から至福へ、勝利から勝利へ、栄光から栄光へ、上昇する。

上昇の連鎖は途切れる事が無い。

向上の連鎖は途切れる事が無い。

上の位階の者は、下の位階の者に感化を与える。

ただし、上の位階の者から下の位階の者への感化は、位階制と一致している。

そして、賢明に統治している王が、最も下の位階の従者にまで、慈善を親切に施す様に、上の位階の者は、下の位階の者に感化を与える。

道を違える事無く、位階から位階へ、祈りは上昇し、恵みは降り注ぐ。

しかし、一度、上昇した霊は、二度と、下降できない。

なぜなら、霊の上昇に比例して、霊の向上に比例して、霊より下の位階は固体と成る。

ルカによる福音16章の「金持ちとラザロ」の例え話の中でアブラハムは「大きな深淵が固定されていて、こちらから、あなたたちの所へ渡ろうと思ってもできない」と話している。

忘我状態は、物質的な肉体を引き寄せられるほど星の体の力を高める事ができて、魂の運命は上昇である、と証明している。

空中浮揚の話は可能である。

しかし、水中や地中で人が生き長らえた事例は無い。

肉体を離れた魂には、一瞬でも、地上の大気中の濃度の中で存在する事は、少なくとも不可能である。

降霊術師どもが誤って推測している様に、死んだ存在が地上の人の周囲に実際に存在する事は、無い。

ただし、星の光という共通の鏡の中の幻や反映によってのみ、愛している死んだ者が、地上の人を見るかもしれないし、地上の人の前に現れるかもしれない。

ただし、死んだ者は、最早、死滅するものに関心を持たない。

地上の人の思いのうち無上な天的な高度な物によってのみ、死んだ者の永遠の形態に相当する物によってのみ、死んだ者は地上の人に関心を抱く。

前記が、神秘の書である「光輝の書」の中に埋め込まれている、カバラの啓示である。

前記は、もちろん、自然科学にとっては仮説である。

しかし、前記は、自然科学が議論の余地が無い事実から導き出した一連の正確な帰納的結論に基づいている。

前記の点で、魔術の領域の最も危険な秘密の１つに触れるに至る。

魔術の領域の最も危険な秘密の１つとは、流体のラルヴァの存在についての、より有り得そうな仮説である。

古代の神秘では、流体のラルヴァは、四大元素の霊という名前で知られていた。

四大元素の霊について、「高等魔術の教理と祭儀」で、いくつか話した。

「ガバリス伯爵」で、不運なニコラ ピエール アンリ ド モンフォーコン ド ヴィラール神父は、四大元素の霊という畏敬するべき啓示を無思慮にも笑いものにして、(1673年に暗殺されるという)命でつぐなう羽目に成ってしまった。

四大元素の霊の秘密が危険である理由は、四大元素の霊の秘密が大いなる魔術の秘密の一歩手前にあるからである。

四大元素の霊の呼び出しが、星の光の放射によって流体を凝固させる力を、必ず伴うのは、真実である。

星の光の放射によって流体を凝固させる力は、傾け方によっては、混乱、異常、障害、病気と不幸しかもたらさない。

後で説明するつもりである。

同時に、仮説の根拠と、見込みの証拠を続ける。

霊は遍在している。

霊は物質を動かしている。

霊は、霊の形である媒体(である星の体)を完成する事によって、重力を超越する。

人は、身の周りの至る所で、形が先天的に発達して知性と美にまで到達するのを見る。

形が先天的に発達して知性と美にまで到達するのは、霊の魔術的な作用が引き寄せた星の光による、努力の成果である。

霊は、進歩と普遍の生成の神秘に関与している。

星の光は、形と命の効率的な代行者である。

なぜなら、星の光は、運動である、と共に、熱である。

星の光を固定して、中心の周りで両極性を星の光に与えると、星の光は、生きている存在をもたらす。

そして、星の光は、生きている存在の完成と保存に必要な、自由な形にできる物を引き寄せる。

最終的には、自由な形にできる物とは、土と水によって形成されている。

そして、ちゃんとした理由が有って、創世記 2 章 7 節で、自由な形にできる物を、土の塵と呼んでいる。

(創世記 2 章 7 節「神は人を土の塵から創造した」)

星の光は、霊ではない。

インドの秘儀祭司どもや、ゴエティア、悪人の霊の魔術師の全ての学派の者どもは星の光が霊であると誤って信じている。

星の光は、霊の道具に過ぎない。

星の光は、体の原型ではない。

アレクサンドリア学派の神秘主義者は、星の光が体の原型であると誤解していた。

星の光は、神の息の最初の物質的な表れである。

(創世記 2 章 7 節「主である神は命の息を人の鼻に吹き込んだ」)

神は、星の光を永遠に創造している。

神に似ている、人は、星の光を変化させるし、星の光を増やしている様に思われる。

(創世記 1 章 27 節「神は人を神に似せて創造した」)

ギリシャ神話で、プロメテウスは、天から、天の火を盗んだ。

プロメテウスは、天の火によって、土と水によって形成されている像である人に、命を与えた。

天の火を人に与えた罪のために、ユピテルはプロメテウスを非難して鎖につないだ。

秘密の本でカバリストは「四大元素の霊はアダムの孤独による子である。アダムが未だ神によって与えられていない女性を切望した時に、四大元素の霊はアダムの夢想によって生まれた」と話している。

パラケルススによると、月経の血や、禁欲者の夢精の精液は、ラルヴァという霊、幻影を大気中に満ちあふれさせる。

前記で、魔術師によるラルヴァの起源の仮説を十分に明確に示した。

そのため、さらなる説明は無しで済ませる。

ラルヴァは、血の蒸気によって形成された気体の肉体を持つ。

そのため、流血はラルヴァを引き寄せる。

古代、ラルヴァは生贄の煙から養分を得た。

ラルヴァは悪夢の奇形の子である。

古代人はラルヴァを男性の夢魔インキュバスや女性の夢魔サキュバスと呼んでいた。

目に見えるほど十分に濃く成ると、ラルヴァは、想像の反映に染まった、蒸気の様に成る。

ラルヴァには、個性的な命は無い。

影が実体を模倣する様に、ラルヴァは、ラルヴァを呼び出した魔術師の個性的な命を模倣する。

特に、ラルヴァは、愚者や、孤立して不品行な習慣に身をゆだねている不道徳な人の周囲に集まる。

ラルヴァの奇形の肉体の各部の結合は非常に脆弱なので、ラルヴァは、(風が吹く)家の外、大きな火、特に、剣の先端を恐れる。

ある意味、ラルヴァは、ラルヴァの生みの親の実体に対する、蒸気の従属物の様に成る。

ラルヴァを創造した人か、ラルヴァを呼び出して所有している人の、命を吸い取る事によってのみ、ラルヴァは生きているので、ラルヴァの影の肉体を傷つけると、ラルヴァの生みの親も傷つくかもしれない。

母親の想像力によって胎児が傷つく様に。

世界は、母親の想像力によって胎児が傷つく様な現象に満ちている。

母親の想像力によって胎児が傷つく様な現象は、ラルヴァについての不思議な啓示を弁明する。

ラルヴァについての不思議な啓示によってのみ、母親の想像力によって胎児が傷つく様な現象を説明できる。

ラルヴァは、健康のための人の命の熱を吸い取る。

弱っている人の場合、ラルヴァは、健康のための人の命の熱を速やかに吸い取り尽くす。

吸血鬼の話の源は、ラルヴァである。

吸血鬼という恐るべき事実のものは、良く知られている様に、時代を通じて実証されてきた。

ラルヴァが人の命の熱を吸い取る事は、なぜ人は、ラルヴァに憑依された霊媒者が近づくと、冷気を大気中に感じるのか、を説明する。

ラルヴァの存在は、想像力による幻影と、感覚の脱線のおかげなので、ラルヴァは、ラルヴァの奇形的な誕生の神秘のヴェールを取って化けの皮をはがせる人の前には現れない。

第 **2** 巻 教えの形成と発達

ベト

第 2 巻 第 1 章 歴史における原初の象徴主義

エリファス レヴィには、宗教的な教義的な立場から聖書を説明する権限は無い。

何よりも、位階制の秩序に従って、神学を教会の学者に委ねる。

また、経験と理性の領域に含まれる物を人文科学に委ねる。

そのため、エリファス レヴィが聖書の一節の新しい応用を大胆に試みている様に見える時でも、ちゃんと、常に、エリファス レヴィは教会の決定を尊重している。

エリファス レヴィは独断的に話さない。

エリファス レヴィは意見と探求を法が定めた権威に委ねる。

モーセの神聖な作品「創世記」の人類の最古の歴史を読むと、すぐに心を打つのは、創世記 2 章から 3 章の地上の楽園の記述である。

モーセは、地上の楽園を完全な pantacle の象徴に要約している。

地上の楽園は、円形か、正方形である。

なぜなら、十字の形の 4 つの川が均等に土を潤している。

十字の形の 4 つの川の中央に、善悪の知の木と命の木という 2 つの木がある。

善悪の知の木と命の木は、安定不変の知と進歩する運動を表す。

善悪の知の木と命の木は、言葉と創造を表す。

アスクレピオスの杖の蛇、ヘルメスの杖ケーリュケイオンの蛇が、善悪の知の木に巻きついている。

善悪の知の木の影の内には、男性アダムと女性エヴァがいる。

男性アダムと女性エヴァは、自発性と受容性を表す。

男性アダムと女性エヴァは、知と愛を表す。

蛇は、最初の誘惑を表す。

蛇は、地上の中心の火(、星の光)を表す。

蛇は、女性エヴァを誘惑する。

女性エヴァは弱い者を表す。

女性エヴァは、男性アダムが誘惑に負ける原因と成る。

しかし、女性エヴァが蛇に従ったのは、後に、女性が蛇を圧倒するためである、に過ぎない。

女性マリアが救い主イエスを世界にもたらした事によって、いつか、(知という)女性は蛇の頭を圧倒するであろう。

前記の、見事な光景は全ての知を象徴している。

人アダムは、感覚的な器官の誘惑に負けて、知の領域を放棄する。

人アダムは、魂の糧とするべき善悪の知の木の果実を、不正な物質的な満足に利用して汚す。

結果として、人アダムは、調和の感覚と真理の感覚を喪失する。

そのため、人アダムは、獣の皮をまとう。

なぜなら、遅かれ早かれ、例外無く、体の形は、心の性質に対応した形をとる。

人アダムは、命の４つの川が潤している楽園から追放される。

常に回転している火の剣で武装した智天使ケルブが、人アダムが単一性の領域に戻るのを防いでいる。

「高等魔術の教理」で「ヴォルテールは火の剣で脅す牛である智天使ケルブの意味に気づかなかった」と話した。

ヴォルテールはヘブライ語で「ケルブ」が「牛」を意味する事を発見して面白がった。

仮にヴォルテールが理解し難い象徴主義の象徴を牛の頭を持つ天使に、誤解され易い真理のひらめきを回転する火の剣に認めていたら、面白がらなかったに違い無い。

真理が地に堕ちた後、象徴主義は偶像崇拝の口実を大衆に与える形に成ってしまった。

ところで、また、火の剣は、星の光を表す。

最早、人は、星の光を傾ける方法を知らない。

そのため、人は、星の光という力を統治する代わりに、星の光の死に至る感化力に従う羽目に成っている。

ある意味、魔術の「大いなる務め」、「大作業」とは、火の剣を圧倒して傾ける事である。

智天使ケルブは、天使を表す。

または、智天使ケルブは、地の魂(、星の光)を表す。

古代の神秘では、不変に、地の魂(、星の光)を牛の形で表す。

ミトラス教の象徴主義では、光の主ミトラス神が、牛を圧倒して、剣を牛の脇腹に突き刺して、血をしたたらせて、(人の魂の)命を解放して自由にしている、のが見られる。

血のしたたりは、(人の魂の)命の自由への解放を表す。

女性エヴァの罪の最初の結果は、アベルの死である。

(アベルは愛を表す。)

女性エヴァは、愛を理解から離す事によって、愛を力から離してしまう。

力は、盲目に陥る。

力は、地上の肉欲に縛られる。

力は、愛に嫉妬する様に成る。

そして、力は、愛を殺した。

力を表すカインは、愛を表すアベルを殺した。

カインの子孫は、父であるカインの罪を永続させてしまう。

カインが世界にもたらした娘達は、災いを引き起こすほど美しいが、愛が無い。

(創世記 6 章 1 節から 2 節「人が地上に増え、女性達が生まれた。神の子達、天使達は人の女性達が美しいのを見た」)

天使達の堕天のために、セトの子孫の醜聞のために、カインが世界にもたらした娘達は生まれた。

(創世記 6 章 1 節から 2 節「人が地上に増え、女性達が生まれた。神の子達、天使達は人の女性達が美しいのを見た。神の子達、天使達は選んだ人の女性達を妻にした」)

ノアの洪水の後、魔術の歴史 第 1 巻 第 1 章で神秘のいくつかをすでに話した、ハムの変節の後、人の子孫は、バベルの塔という普遍の pantacle にして宮殿を建てる事によって、無感性な無思慮な事業の実現を試みた。

バベルの塔は、社会主義の平等の大規模な試みである。

バベルの塔に比べると、シャルル フーリエのファランステールという建物は貧弱な考えである。

バベルの塔は、知の位階制に対する、活動家の抗議である。

バベルの塔は、洪水と大混乱に対して建てられた、砦である。

バベルの塔は、高台である。

バベルの塔という高台から、神格化された大衆が、大気と大気の動乱を超越して高くそびえるつもりであった。

しかし、人は、石のはしごでは、知には昇れない。

人は、石の位階では、知には昇れない。

霊の位階、精神の位階、心の位階は、バベルの塔の様にモルタルを接着剤として建てられていない。

バベルの塔という物質化された位階制に対して、無政府状態による混乱が抗議した。

そして、人は相互に理解し合うのをやめた。

バベルの塔は、死に至らないための教訓である。

バベルの塔は、バベルの塔の建て直しを夢想する現代の者どもが全く誤解している物である。

無慈悲と物質主義だけの位階制の考えに対して、平等への否定という反応が起こる。

人類がバベルの塔の様な誤った位階制の代物を打ち建てたら、大衆は、頂上を争い、基礎を捨てるであろう。

大衆の野心を全て満足させるには、バベルの塔の頂上を基礎より広くする必要が有り、結果として、バベルの塔は些細な衝撃で崩壊する不安定な建物に成る。

人が散らされた事は、父(である神)を冒涜したハムの子カナンと子孫に対する呪いの最初の結果である。

(マタイによる福音 28 章 19 節 父である神)

特に、ハムの子カナンの民族、カナン人が、ハムの子カナンと子孫に対する呪いの重荷を背負う羽目に成った。

ハムの子カナンと子孫に対する呪いによって、後世に、全てのカナン人は、(バアルなどの人がねつ造した偽の神を信じて、人を生贄にする邪教を信じて、)憎悪された。

純潔、貞節は、家族の守護者である。

また、純潔、貞節は、位階制の秘伝伝授の特徴である。

常に、冒涜と反乱は汚れている。

冒涜と反乱は不純である。

冒涜者や反乱者には混乱や乱交と子殺しの傾向が有る。

誕生の神秘の冒涜と子殺しは、古代のカナンの地パレスチナの邪教の基礎であった。

古代のカナンの地パレスチナの邪教は、(人を生贄にする)黒魔術の恐るべき儀式にふけった。

ベルフェゴールという名前で、インドの黒い神シヴァ、奇形の男性器の神シヴァは、古代のカナンの地パレスチナで支配的に成った。

(シヴァを男性器で表す場合が有る。)

タルムードの学者達と、プラトン哲学の哲学者であるヘブライ人のアレクサンドリアのフィロンは、ベルフェゴールという偶像崇拝について恥ずべき事であると話している。

学の有る法律家ジョン セルデンは、ベルフェゴールの偶像崇拝を、信じられないほど恥ずべき物と思った。

ベルフェゴールの偶像は、ひげが有り、大口を開け、巨人的な男性器の様な舌を持っていた、と言われている。

ベルフェゴールの偶像崇拝者どもは、恥じ知らずにも、ベルフェゴールの偶像の下品な顔の前で、性器をさらして、排泄物をささげた。

モロクとケモシュの偶像は、不幸な幼子を、真鍮製の胸で圧殺したり、赤熱した腕で焼き尽くす、殺人の機械である。

モロクとケモシュの偶像への生贄の幼子の叫びが聞こえない様に、幼子を生贄にした嘆かわしい母親どもが先導して、偶像崇拝者どもはラッパや太鼓の音を鳴らして踊った。

近親相姦、同性愛といった不自然な性交、獣姦は、恥ずべき偶像崇拝者どもが誤って正しいと認めていた習慣であった。

近親相姦、同性愛といった不自然な性交、獣姦は、恥ずべき偶像崇拝の儀式の一部を形成していた。

偶像崇拝の恥ずべき混乱、人の生贄、乱交、子殺し、近親相姦、同性愛といった不自然な性交、獣姦は、普遍の調和を侵害した死に至る結果である。

真理を侵害する人は罰を受ける。

神に反対する人は、意識しなくても、自然の怒りに触れる行為に走る。

常に、同じ原因は同じ結果をもたらす。

実に、中世の悪人の霊の魔術師のサバトは、ケモシュとベルフェゴールの偶像崇拝の祭の再現である。

自然は、人の生贄、乱交、子殺し、近親相姦、同性愛といった不自然な性交、獣姦といった罪に対して、永遠の死という判決を宣告する。

黒い神々への偶像崇拝者は、神と思いやりの敵である。

混乱や乱交の宣伝者は、神と思いやりの敵である。

色欲や浮気の宣伝者は、神と思いやりの敵である。

家族や位階制の敵は、神と思いやりの敵である。

宗教における無秩序主義者、政治における無政府主義者は、神と思いやりの敵である。

神と思いやりの敵を大衆から隔離しない事は、神と思いやりの敵が大衆を毒するのに同意する事である。

少なくとも、宗教裁判官には、神と思いやりの敵を大衆から隔離しない事は、神と思いやりの敵が大衆を毒するのに同意する事である、と思われた。

しかし、エリファス レヴィは、中世の残酷な処刑の復活を望まない。

社会は病んでいる人を治す必要が有って破滅させてはいけないと、社会が真にキリスト教的に成るほど理解するであろう。

罪を犯す先天性の傾向は、恐ろしい病んだ精神である。

「超越的な魔術」は「王者のわざ」、「祭司のわざ」と呼ばれている事を忘れるなかれ。

「超越的な魔術」は、古代エジプト、古代ギリシャ、ローマで、王国と祭司の威光と堕落を共にした。

宗教や宗教の神秘と不一致である哲学は全て、政治的な大権力者には、有害である。

なぜなら、もし政治的な大権力者が神の力の象徴である事をやめると、政治的な大権力者は偉大さを喪失した、と大衆には思われる。

法王の三重冠と不一致である王者の王冠は破綻する。

プロメテウスの永遠の夢は、天から天の火を盗んで、神々を天から地に堕とす事である。

大衆の口伝では、カウカーソス山でヘラクレスが解放した、プロメテウスは、労苦の象徴であり、未だに釘づけられ鎖がからみついている。

大衆の口伝では、不死のワシが、カウカーソス山でヘラクレスが解放したプロメテウスの開いている傷口に未だにつきまとう。

イエスの足元で、プロメテウスが従順を学ぶまで、プロメテウスの労苦は終わらない。

イエスは、王の中の王、神の中の神として生まれたが、全ての反抗的な人を改心させるために、手足を十字架に釘づけられ脇腹を槍で突き刺される事を選んだ。

悪だくみへの道を権力者に開く事によって、共和主義的な社会制度は、位階制の原理を危うくした。

最早、王者を形成する務めは、位階制に任されなく成った。

王者を形成する代わりに、王座を不平等な生まれによる運任せにする継承権が取って代わったり、宗教の影響を除外した大衆の人気取りの選挙が取って代わって、君主制を共和主義の原理の基礎の上に確立してしまった。

古代ギリシャとローマの国々の成功と屈辱の上に相次いで支配した諸政権は、君主制を共和主義の原理の基礎の上に確立する形で形成された。

聖所に温存された知は軽視された。

秘伝伝授者である祭司に認められなかった大胆な哲学者や天才的な哲学者は、祭司の知に反抗して、神殿に有る秘密の代わりに、疑惑や否定の哲学を考案した。

過度の妄想によって、哲学者は速やかに非論理的な滑稽さに陥って自然を自説によって誤って非難した。

ヘラクレイトスは悲しんだ。

デモクリトスは笑いに逃避した。

ヘラクレイトスとデモクリトスは愚者である。

ピュロンは何も信じないで終わった。

ピュロンが何も知らなかったという事実のために、ピュロンが何も信じなかった事によって、ピュロンを免除する事は多分できない。

ソクラテスは、純粋な簡潔な道徳性の存在を断言して、いくらかの光と良識を哲学的な混乱にもたらした。

しかし、宗教を欠いた道徳性は役に立つであろうか？　いいえ！　宗教を欠いた道徳性は役に立たない！

大衆は、ソクラテスの抽象的な理神論を、無神論と誤解した。

後に、ソクラテスの弟子プラトンは、ソクラテスが望まなかった、欠けていた宗教の、ソクラテスの考えの体系への補完を試みた。

プラトンの教えは、人の天才の歴史において、画期的であった。

しかし、プラトンの教えは、プラトンが考案した物ではない。

なぜなら、プラトンは、宗教以外に真理は存在しないと理解して、エジプトのメンフィスの祭司に教えを教わりに行き、エジプトの神秘を(不完全だが)秘伝伝授された。

プラトンには、ヘブライ人の神聖な書物の知すら有った。

しかし、エジプトでは、プラトンは、不完全にしか秘伝伝授されなかった。

なぜなら、当時のエジプトの祭司は古代の象徴の意味を忘れてしまっていた。

エジプトの祭司は、アルクメネの墓で見つかった、スパルタ王アゲシラオス 2 世が贈った、祭司の碑文を解読するのに 3 日間を費やした、という歴史が示す様に、当時のエジプトの祭司は原初の象徴の意味を忘れてしまっていた。

疑い無く、Cornuphis は、当時の最も博識な秘儀祭司だった。

Cornuphis は、古代の象徴と文字を集めた碑文を調べた。

ようやく、Cornuphis は、碑文がギリシャで「プロテウス」と呼ばれていたタロットで記されている事に気づいた。

(プロテウスは予言と変身の能力を持つ古代ギリシャの海神である。)

「プロテウス」はトートの書タロットのギリシャでの名前である。

タロットは、移動可能な象徴体系である。

タロットは、文字と数と基本原理の象徴による可能な組み合わせの様に多様に変動可能である。

トートの書タロットは、神の言葉の鍵である。

トートの書タロットは、神託を解釈する鍵である。

タロットは、知の基本の作品である。

しかし、もし Cornuphis が本当に「祭司のわざ」に熟達していたら、碑文がタロットで記されている事に気づくまで長い調査期間を必要としなかったであろう。

また、祭司の知の忘却に対して抗議を表明していた神託をもはや祭司が理解できなかった事実は、当時の祭司が古代の真理を忘れてしまった証拠である。

プラトンは、エジプトから戻った後、シミアスと共に、カリア圏内を旅した。

プラトンは、デロス島からの使者と会った。

デロス島の使者は、アポロンの神託を解く様にプラトンへ頼んだ。

神託は、ギリシャへの災いを終わらせるには、立方体の石を 2 倍にする必要が有る、という物だった。

デロス島の大衆は、アポロン神殿の立方体の石の祭壇を 2 倍にしようと試みた。

しかし、立方体の全ての面を 2 倍にしたら、25 面体に成ってしまった。

立方体の形のまま、(辺の長さを 3)倍にしたら、26 倍増えて(27 倍に成って)しまった。

プラトンは、神託は幾何学を学ぶ事を勧めていると言って、デロス島の使者を数学者エウドクソスの元に派遣した。

プラトンが、象徴の深い意味を理解していなかったのか、それとも、無知なデロス島の大衆にヴェールを取って明かす価値が無いと思ったのか、どうかは、推測に任せざるを得ない点である。

しかし、立方体の石と、立方体の石の増殖が、円積問題という名前で愚者が探求し達道者が隠した、永久機関の永久運動の神秘を含む、神の数の全ての秘密を説明する事は確かである。

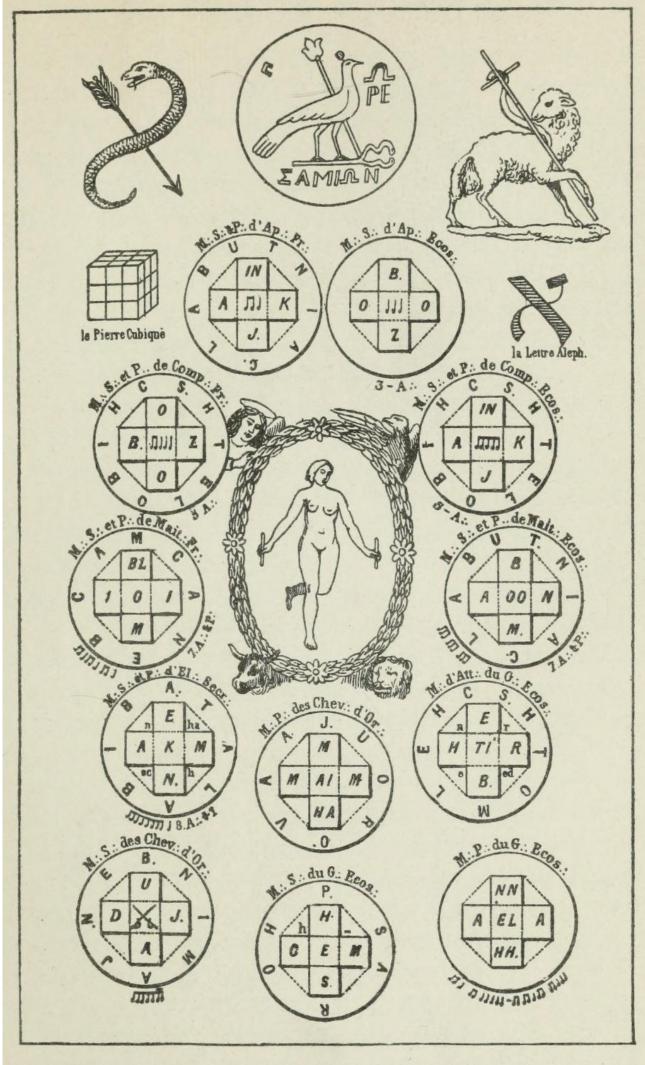
唯一の中央の立方体の石の周囲に、26 の立方体の石を立方体の形に密集させる事によって、神託は、幾何学の基礎だけではなく、数と形の相互関係によって説明される創造的な調和の鍵を、デロス島の大衆に示した。

(1)十字による立方体の増殖、(2)十字を中心に描いた円、(3)球の中で動く立体の十字に、古代の全ての大いなる象徴的な神殿の設計図が見つかる。

図にすれば、(1)十字による立方体の増殖、(2)十字を中心に描いた円、(3)球の中で動く立体の十字を理解し易い。

現在では、メーソンの秘伝伝授が、(1)十字による立方体の増殖、(2)十字を中心に描いた円、(3)球の中で動く立体の十字を受け継いでいる。

(1)十字による立方体の増殖、(2)十字を中心に描いた円、(3)球の中で動く立体の十字は、「石工」を意味する「メーソン」という名前の完全な正当な理由に成る。

なぜなら、(1)十字による立方体の増殖、(2)十字を中心に描いた円、(3)球の中で動く立体の十字は、建築の根本原理、建築の知である。

THE TWENTY-FIRST KEY OF THE TAROT, SURROUNDED BY MYSTIC AND MASONIC SEALS

デロス島の大衆は、辺の長さを２倍にして、幾何学的な問題としての答えを探したが、８倍に成ってしまった。

最後に、多分、デロス島の大衆の試行錯誤の数は自由に増やせる。

なぜなら、十中八九、「立方体倍積問題」、「デロス島の問題」という話は、プラトンが弟子に出した問題、例え話である。

もし「立方体倍積問題」、「デロス島の問題」の神託の話を事実と取るならば、より深い意味が見つかる。

立方体の石を２倍にする事は、単一性から２つ１組を引き出す事である。

概念から形を引き出す事である。

思考から行動を引き出す事である。

永遠の数学の正確さをこの世に実現する事である。

正確な知という基礎の上に、政治を確立する事である。

宗教の教えを数の哲学と一致させる事である。

プラトンは、ピタゴラスより雄弁だが、ピタゴラスより浅かった。

プラトンは、理論家の哲学を予見者の不変の教えと一致させる事を望んだ。

プラトンは、大衆化を望んだのではなく、知を建て直したかった。

後に、プラトンの哲学は、事前に用意された理論と生き生きとさせる考えを初期のキリスト教にもたらした。

しかし、プラトンは、原理を数学に基づかせたにもかかわらず、幾何学者というよりは、詩人であった。

プラトンは、調和の形の才能に恵まれた。

プラトンは、不思議な仮説を惜しまず与えた。

アリストテレスは、計算の天才にだけ恵まれた。

アリストテレスは、全てのものを諸学派の方法で熟考した。

アリストテレスは、全てのものを、数への展開による証明と計算の論理に従わせた。

アリストテレスは、プラトン哲学への信用を除外して、全てを証明して、アリストテレスの「カテゴリー」によって全てを理解しようと試みた。

アリストテレスは、3つ1組を三段論法に変えてしまった。

アリストテレスは、2つ1組を省略三段論法に変えてしまった。

アリストテレスは、存在の連鎖を連鎖式に変えてしまった。

アリストテレスは、全てのものを抽象化して、全てのものについて推測した。

アリストテレスの処理は、神を抽象化して存在論の仮説の中に消失させてしまった。

プラトンは、教会の教父に霊感を与えた。

アリストテレスは、中世のスコラ学者の師に成った。

何も信じないで全てのものを説明しようと試みる、アリストテレスの論理の周囲に、どの様な黒い影が深まるかは神のみぞ知る。

第2のバベルの塔の建設が予定された。

第2の言葉の混乱は近づいた。

存在は存在である。

神は存在する。

存在の中に存在の理由は存在する。

(存在である)神の中に(存在である)神の理由が存在する。

最初から神の言葉は存在している。

神の言葉、神のロゴスは、言葉に表された論理、言葉に表された理性である。

神の言葉は、神の中に存在する。

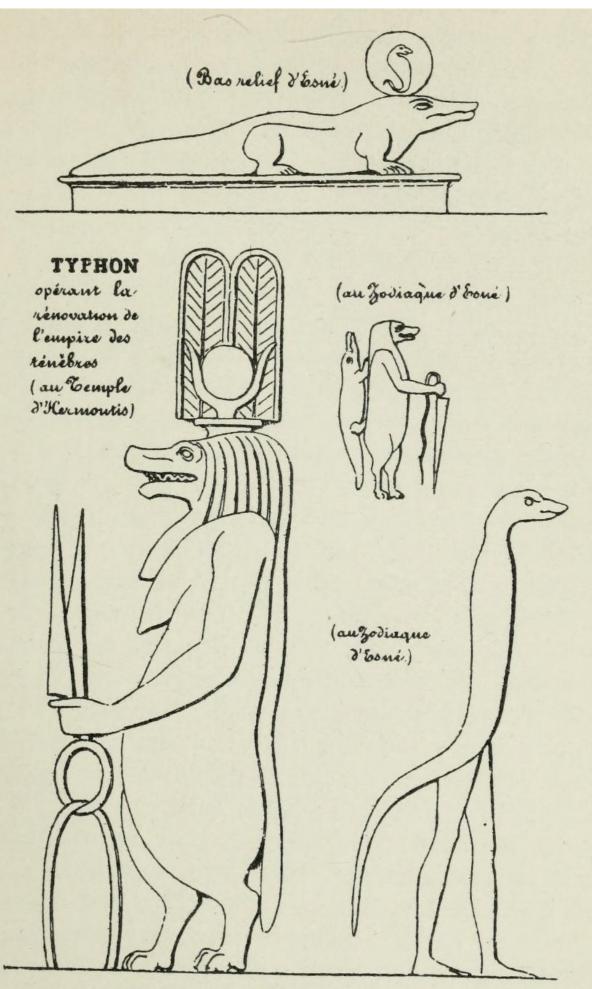
神の言葉は、知性が明らかにした、神である。

前記は、実に、まさに、全ての哲学を超越した真理である。

前記は、まさに、信じる必要が有るものである。

前記を信じないと、何も知る事ができずに、ピュロンの見境ない疑いに陥る。

信心の守護者として、祭司は、知という基礎に基づいている。

知の教えによって、人は、永遠の、神の言葉の、神の原理に敬礼せざるを得ない。

EGYPTIAN SYMBOLS OF TYPHON

第2巻 第2章 神秘主義

王権神授説の正当性の根源は祭司であり、真の祭司は王権神授説無しには存在できない。

秘伝伝授と祭司にする叙階は真の相続物である。

そのため、聖所は、大衆には不可侵である。

また、そのため、聖所は、党派心の強い大衆には不可侵である。

同じ理由から、神の啓示の、栄光の光(、星の光)は、無上の論理である神に従って、広まる。

なぜなら、神の啓示の、栄光の光(、星の光)は、秩序と調和によって、継承される。

神は、世界を一時だけの流星や閃光で照らして啓蒙しないで、全ての惑星系を惑星系の特有の太陽の周囲に引き寄せる。

調和は、義務に我慢できない人を悩ませる。

そのため、義務に我慢できない人は、啓示を自分の悪徳と無理に一致させる事に失敗して、道徳の改革者のふりをする。

ルソーの様に、義務に我慢できない人は、「もし神が話したならば、なぜ私には何も聞こえなかったのか？」と叫ぶ。

やがて、義務に我慢できない人は、「神は話したが、私にだけ話したのだ」と言い出す。

「神は話したが、私にだけ話したのだ」というのは義務に我慢できない人の妄想である。

義務に我慢できない人は、「神は話したが、私にだけ話したのだ」と思い込む。

そのため、党派を作る者が現れる。

党派を作る者は、宗教における無秩序による混乱の扇動者である。

エリファス レヴィは、党派を作る者を火で焼き殺せというつもりは無い。

しかし、党派を作る者を伝染的な愚かさの保菌者として隔離するのが望ましいのは確かである。

伝染的な愚かさによって、神秘主義の党派者は、知の冒涜をもたらす。

どの様にして異常興奮と脳の充血という助けによってインドの苦行僧が創造されない光と呼んでいる代物に到達したのか、は魔術の歴史 第 1 巻 第 3 章で既に見せた。

エジプトにも悪人の霊の魔術師や誘惑者がいた。

古代ギリシャのテッサリアは降霊術と呪いの業であふれていた。

啓蒙主義のふりをした無秩序主義者の直感が鋭敏に理解した事実とは「大衆が神々と直接交流する事は、祭司を廃して王座という基礎を転覆させる」という事実であった。

祭司の正当性に対して厳格に精力的に反抗し抗議する事を条件に、全ての醜聞に対して事前に免除を与えて、誤った自由の誘惑によって、啓蒙主義のふりをした無秩序主義の陰謀者は、弟子を勧誘できると期待した。

酒神ディオニュソスの女信者は、酒神ディオニュソスに導かれていると思い込んで、オルフェウスを八つ裂きにして殺した。

酒神ディオニュソスの女信者は、大いなる秘儀祭司オルフェウスを生贄にして、神格化した酩酊にささげた。

酒神バッカスの酒神祭は神秘主義の反乱であった。

常に、狂気の宣伝者は無秩序な活動、狂乱的な扇動、恐るべきけいれんに頼る。

酒神バッカスの女々しい偽の祭司から偽のグノーシス主義者まで、回旋舞踊するイスラム教の神秘主義の苦行僧ダルヴィーシュからサン メダール教会のフランソワド パリ助祭の墓でのけいれん者まで、常に、迷信や狂信の特徴は同じである。

いつも決まって、教えを浄化するという口実の下で、誇張した精神主義によって、全ての時代の神秘主義者は、宗教の象徴を物質化した。

マギの知を冒涜した者は、迷信者、狂信者、神秘主義者と同じである。

なぜなら、超越的な魔術は、古代の祭司のわざである、という事を覚えておく必要が有る。

真の魔術は、法が定めた位階制を外れた全ての行動を非難する。

真の魔術は、苦しめたりはしないが、党派を作った者と悪人の霊の魔術師への非難を正しいと認める。

エリファス レヴィは、党派を作った者と、悪人の霊の魔術師を、意図して結びつけている。

なぜなら、異端者、党派を作った者は、降霊術師、悪人の霊の魔術師であった。

異端者、党派を作った者、降霊術師、悪人の霊の魔術師は、悪人の霊を神々として大衆にだましてつかませた。

異端者、党派を作った者、降霊術師、悪人の霊の魔術師は、嘘を支援して、奇跡を起こす力を横取りした。

前記の形跡から、異端者、党派を作った者は、ゴエティア、悪人の霊の魔術、黒魔術の実践者であった。

無秩序による混乱は、反体制的な神秘主義の出発点である。

無秩序による混乱は、反体制的な神秘主義の特徴である。

党派を作った者には宗教的な一致は不可能である。

しかし、驚くべき事に、(王者という)法が定めた権力と(祭司という)位階制への憎悪という唯一の点でのみ、党派を作った者は一致する。

実際、王者と祭司への憎悪が、党派を作った者がねつ造した偽の宗教の根源の全てである。

王者と祭司への憎悪だけが、党派を作った者同士を相互に結びつけ合っている。

王者と祭司への憎悪は、父(である神)を冒涜したハムの罪と同じである。

(マタイによる福音 28 章 19 節 父である神)

王者と祭司への憎悪は、家族の原理への侮辱である。

王者と祭司への憎悪は、父(である神)への侮辱である。

冒涜して笑いものにして、党派を作った者は、父である神の裸と恥をさらしている。

無秩序主義者、神秘主義者は、知の光を、星の光と混同している。

神秘主義者は、蛇の頭を圧倒する従順で清らかな知という女性を敬礼する代わりに、蛇を敬礼する。

神秘主義者は、蛇を敬礼して、酩酊して目が眩んで、必ず、愚かさという深淵に堕ちる。

愚者は予見者である。

愚者は自分が奇跡を起こせると純粋に信じて疑わない。

実際に、盲信や狂信は伝染する。

そのため、愚者、盲信者、狂信者が近くにいると、説明できない事が頻繁に起こる様に見受けられる。

さらに、星の光の引き寄せや放射の過剰による現象は、生半可な知識しか無い人を混乱させる。

星の光の引き寄せや放射が過剰であると、星の光は肉体内に集中する。

星の光が肉体内に集中すると、肉体の分子間が膨張して、骨をひねられるほどの、筋肉を限度を超えて伸ばせるほどの、高い柔軟性を肉体にもたらす。

星の光が肉体内に集中すると、星の光の渦や竜巻を形成する、と言える。

星の光の渦や竜巻は、重い肉体を空中浮揚させて、星の光の放射の力に比例した時間だけ、肉体を空中に支えられる。

星の光が肉体内に集中すると、肉体が破裂しそうに感じる。

肉体の破裂しそうな感じを軽減するために、圧迫や打撃を求める。

星の光が肉体内に集中すると、星の光の流体の張りが、激しい圧迫や打撃を相殺して、傷が出来ないで、肉体の破裂しそうな感じを軽減する。

愚者が医者に恐怖を抱く様に、妄想を抱いている神秘主義者は賢者を憎む。

最初は、妄想を抱いている神秘主義者は、賢者から逃げる。

最後は、妄想を抱いている神秘主義者は、盲目的に、まるで意に反しての様に、賢者を迫害する。

妄想を抱いている神秘主義者は、悪徳に対しては慈悲深く寛大である。

妄想を抱いている神秘主義者は、権威に従う理性に対しては無慈悲である。

従順と位階制の話に成ると、最も寛大に見える異端者でも怒りと憎しみに襲われる。

前記から、常に、異端は動乱をもたらす。

偽の預言者は、堕落させられなかった人を殺す。

異端者は自分を容認する様に大きな声で求める。

しかし、異端者は他人を容認するのは用心する。異端者は他人を容認するのは控える。

ジャン カルヴァンがミシェル セルヴェを私刑で火刑で焼き殺した時に、プロテスタントはローマのカトリックの火刑のまきの束に対して大きな声で抗議した。

ドナトゥス派、割礼主義者といった多数の異端は、カトリックの統治者を度を越えた行為に走らせた。

ドナトゥス派、割礼主義者といった多数の異端は、カトリック教会が異端者を罪人として俗権に任せる原因と成った。

教会に対する不敬の中の不満の声に留意すれば、ヴァルド派、アルビジョア派と呼ばれたカタリ派、フス派は子羊の様な者である、と思えないか？　教会に対する不敬の中の不満の声に留意すれば、ヴァルド派、アルビジョア派と呼ばれたカタリ派、フス派は子羊の様な者である、と思える！

カトリックの皆殺しを説いて、一方の手で聖書を持ちながら、他方の手で短剣を振り回すスコットランドとイングランドの陰気なピューリタンの、どこが無罪なのか？　カトリックの皆殺しを説いて、一方の手で聖書を持ちながら、他方の手で短剣を振り回すスコットランドとイングランドの陰気なピューリタンは罪人である！

復讐と恐怖の最中で、少なくとも原理として、常に、唯一カトリック教会は「血を憎む」事を主張してきた。

カトリック教会は、位階制の正統な教会である。

悪人の霊による奇跡の可能性や実在を認めた事によって、カトリック教会は、善にも悪にも応用できる自然の力の存在を認めた。

また、大いなる知によってカトリック教会は「宗教の考えの清らかさは奇跡を正当化できるが、奇跡は異端な教えや新興宗教の教えを正当化できない」と解決した。

「神の法は完全である。神の法が神の法を裏切る事は無い。神の法は自然な手段を応用して人には超自然的に見える結果をもたらす」と話す事は、神の無上の論理と不変の力を肯定する事である。

「神の法は完全である。神の法が神の法を裏切る事は無い。神の法は自然な手段を応用して人には超自然的に見える結果をもたらす」と話す事、神の無上の論理と不変の力を肯定する事は、神意や神の摂理に対する人の概念を高める事である。

また、真のカトリック教徒は「善にも悪にも応用できる自然の力の存在を認める」事が「真理に味方して作用する奇跡における神の仲介を疑う見解ではない」という事を理解するべきである。

常に、星の光の充満が原因である偽の奇跡には無秩序による混乱と不道徳の傾向が有る。

　なぜなら、無秩序による混乱は、無秩序による混乱を引き起こす。

　そのため、異端者の偽の神である悪人の霊や、異端者の使者と成る悪人の霊は、血を渇望する。

　また、通例、異端者の悪人の霊は、異端者を保護する代わりに殺人を求める。

　シリアや古代パレスチナ南部の偶像崇拝者は、不幸にも生贄にされた幼子の体からもぎ取った頭から偽の神の神託を引き出した。

　中略

　シリアや古代パレスチナ南部の偶像崇拝者は、生贄にした幼子の頭は偽の神の神託を話す、と誤って思い込んだ。

　なぜなら、疑い無く、生贄にされた幼子が苦痛で叫んだ最後の叫びが、シリアや古代パレスチナ南部の偶像崇拝者の妄想を狂乱させた。

　さらに、魔術の歴史 第１巻 第７章で、すでに話した様に、血はラルヴァを引き寄せる。

　古代人は、悪人の霊に生贄をささげる儀式で、穴を掘って、温かい湯気が出る血で穴を満たすのが習いであった。

　そうして、古代人は、悪人の霊の微かな淡い影が、闇の深い場所から現れて、穴を昇ったり、穴に降りたり、穴の周囲を這い回ったり、穴の周囲に群がるのを見た。

　すると、古代人は、穴の血を剣の先端につけて降霊術の輪を描いた。

　そして、古代人は、アスフォデルとバーベインで飾った祭壇の上の月桂樹、ハンノキ、糸杉に火をつけた。

夜が、より冷たく、より暗く成った様に思われた。

月は雲の裏に隠れてしまった。

そして、古代人は、輪の周囲に群がった悪人の霊の微かな衣擦れの音を聞いた。

すると、田舎の田園地の犬達が悲しそうに吠えた。

「全てを達成するためには、全てを大胆に行う必要が有る」

「全てを達成するためには、全てを大胆に行う必要が有る」は、誘惑術の言葉、悪人の霊の魔術の言葉、誘惑者が連想させる恐怖の言葉、悪人の霊の魔術師が連想させる恐怖の言葉であった。

偽の魔術師同士、悪人の霊の魔術師同士は、犯罪によって結びついていた。

偽の魔術師、悪人の霊の魔術師は、愚かにも自身(の命)を脅かせば、他人(の命)を脅かせると思い込んでいた。

黒魔術の儀式がもたらした不敬な偶像崇拝の様に、憎むべき黒魔術の儀式は存続してきた。

古代の文明に対して陰謀を企てた犯罪者の団体においても、未開の民族においても、無差別に、黒魔術の儀式は存続してきた。

常に、同じ、闇への愛着が存在する。

同じ、冒涜が存在する。

同じ、血の作業が存在する。

無秩序による混乱の魔術は、死の宗教である。

悪人の霊の魔術師は、不幸に身をささげ、理性を放棄し、不死の希望を放棄し、幼子を生贄にする。

悪人の霊の魔術師は、結婚を放棄して、不毛な放蕩に身を任せる。

悪人の霊の魔術師は、自身の熱狂の充満を享受する。

悪人の霊の魔術師は、自身の悪行に酔っている。

ついには、悪人の霊の魔術師は、悪が全能であると誤って思い込む。

悪人の霊の魔術師は、幻覚が現実に取って代わると誤って思い込む。

悪人の霊の魔術師は、自分の熟達には思い通りに全ての死と地獄を呼び出す力が有ると誤って思い込む。

外国語の言葉、未知の象徴、無意味な言葉、無意味な象徴は、黒魔術に最適である。

儀式における愚かな言動は、儀式における覚めた状態での知性を保つ正しい言動より、容易に、幻覚や妄想をもたらす事を保証する。

デュ ポテは「いくつかの象徴が忘我状態の人に効果が有った」と話している。

そして、デュ ポテは、「忘我状態の人に効果が有った象徴」を、用心して、隠して、隠された学問についての本で記している。

完全一致ではないが、デュ ポテの「忘我状態の人に効果が有った象徴」は、「大奥義書」の古い版に記されている悪魔のふりをした悪人の霊による「悪魔のサイン」と類似している。

常に、同じ原因は同じ結果をもたらす。

また、「賢者の太陽の下には新しいものは何も無い」のと同様に、「悪人の霊の魔術師の月の下には新しいものなど何も無い」。

永遠の幻覚状態は、死、または、意識の放棄である。

永遠の幻覚状態の人は、妄想が不可避に含んでいる運任せに身を任せる事に成る。

記憶は、記憶の反映、記憶の表れをもたらす。

(悪い思考や言動の記憶は、悪い反映、悪い表れをもたらす。)

悪い欲望は、妄想を創造する。

良心の呵責は、悪夢をもたらす。

永遠の幻覚状態の人の人生は、動物(的人間)の人生に成り下がる。

永遠の幻覚状態の人の人生は、怒りやすい責め苛まれた動物(的人間)の人生に成り下がる。

永遠の幻覚状態の人は、道徳の感覚と時間の感覚が無く成る。

永遠の幻覚状態の人は、実感が無く成る。

永遠の幻覚状態は、無感性な無情な渦の中での漠然とした踊りである。

永遠の幻覚状態では、時には、1 時間が何世紀にも引き伸ばされた様に思われる。

また、永遠の幻覚状態では、時には、何年もが 1 時間の速さで飛ぶ様に過ぎ去ってしまうかもしれない。

星の光によって燐光を放っている、脳は、無数の反映と映像であふれている。

目を閉じると、まぶたの裏で、輝く変化する光景、暗く激しく変化する光景が広がる。

病気で熱の有る人が、夜中に、まぶたを閉じると、耐えられない輝きで目が眩む事が有る。

神経系は、完全な電気の器官である。

神経系は、神経系の陰極である脳に、星の光を集中させる。

または、神経系の末端は、星の光を放射する。

神経系の末端は、命の流体を循環させる様に設計されている。

脳が、神経機構のつり合いを乱す肉欲に類似している、一連の映像を力強く引き寄せると、星の光の交換が止まり、星の光の呼吸が止まり、誤った星の光が脳で凝固する、と言える。

誤った星の光が脳で凝固すると、幻覚状態の人の感覚は最大級に狂って歪む。

ある幻覚状態の人は、皮膚をひも状に引き裂いて、ゆっくり火であぶる事に、喜びを見出した。

ある幻覚状態の人は、食べるには相応しくない物を喜んで食べた。

精神医 Brierre de Boismont は、幻覚状態の人の一連の事例を集めた。

幻覚状態の人の多数は、非常に興味深い。

善への誤解でも、悪への無抵抗でも、人生における全ての過剰は、脳を過剰に刺激して、星の光を脳に停滞させてしまう。

過剰な野心。

神聖な者であると誤って思い込む自惚れ。

ためらいと肉欲に満ちた禁欲。

良心の呵責による再三の警告にもかかわらず恥ずべき肉欲に溺れる事。

過剰な野心、神聖な者であると誤って思い込む自惚れ、ためらいと肉欲に満ちた禁欲、良心の呵責による再三の警告にもかかわらず恥ずべき肉欲に溺れる事は、理性の消失、病的な忘我状態、病的な興奮、幻覚、狂気に至る。

博識な精神医 Brierre de Boismont は「狂人は、幻覚の支配下にあるから狂っているのではなく、常識より幻覚を信じるから狂っている」という事に気づいた。

そのため、従順と権威だけが神秘主義者を救える。

神秘主義者が自信を頑固に持ち続けていたら、神秘主義者の病んでいる心を治せない。

神秘主義者は、すでに、理性と信心から破門されている。

神秘主義者は、普遍の思いやりの、よそ者である。

神秘主義者は、社会より、自分が賢いと誤って思い込んでいる。

神秘主義者は、宗教の創業を夢見るが、孤立している。

神秘主義者は、私用のための、命の秘密の鍵を確保したと誤って思い込んでいる。

しかし、すでに、神秘主義者の知性は死に陥っている。

第2巻 第3章 入門と試練

達道者が「大作業」に分類している物は、錬金だけではなく、特に、死を含む全ての悪いものを治す万能薬である。

万能薬を作る作業とは、人の改心である。

ヨハネによる福音3章の最高法院の議員ニコデモとの話の中で、人の救い主イエスは、人の改心、第2の誕生について遠回しに話している。

ニコデモが理解しなかったので、イエスは「あなたはイスラエルの教師でありながら、わからないのか？」とニコデモに話している。

まるで、人の改心、第2の誕生は教師が無知ではいられない宗教的な知の基礎の原理である、と遠回しに話すかの様である。

天球と1年の四季の連続で、命の大いなる神秘と命の試練は表れている。

スフィンクスの4つの形は、四季に対応している。

スフィンクスの4つの形は、四大元素に対応している。

ホメロスの話による、アキレスの盾の象徴は、意味が、ヘラクレスの12の務めと似ている。

ヘラクレスの様に、四大元素を圧倒して神々と戦った後に、アキレスは死ぬ必要が有った。

ヘラクレスは、ヘラクレスが戦った奇形のもので表された悪徳に勝利した。

しかし、ヘラクレスは、最も危険な悪徳である性欲、愛着に一時的に負けた。

しかし、ヘラクレスは、デイアネイラの外衣と共に骨から肉が引きはがされたが、体からデイアネイラの燃える外衣を引きはがした。

ヘラクレスは、デイアネイラの罪を取り除き死んで勝利する。

なぜなら、ヘラクレスは、自由へ解放されて不死に成る。

考える人は、スフィンクスの謎を解く様に求められている、オイディプスである。

人は、スフィンクスの謎を解かなければ、死ぬ様に求められてしまう。

秘伝伝授者は、務めの大いなる１年の周期を達成して心と人生を犠牲にして神格化の栄光に相応しく成った、ヘラクレスに成る必要が有る。

オルフェウスは、勝利してからエウリュディケの喪失を学んで初めて、竪琴と自己犠牲の王者に成った。

オンファレとデイアネイラは、ヘラクレスに嫉妬した。

オンファレは、ヘラクレスをおとしめた。

デイアネイラは、邪悪な敵の助言に従って、世界を自由へ解放したヘラクレスを毒殺する様にだまされた。

しかし、デイアネイラは、ヘラクレスを毒殺する事によって、ヘラクレスをデイアネイラへのふさわしくない愛着という死に至る毒から治した。

まきの火は、ヘラクレスの多感な心を清めた。

ヘラクレスは、力強いまま死んだ。

ヘラクレスは、主神ユピテルの王座の近くに座を勝ち取った。

ヤコブは、一晩中、天使と取り組んで初めて、イスラエルの大いなる祖に任命された。

試練は、命の大いなる言葉である。

命は、絶え間無く誘惑して飲み込もうとする、蛇である。

人は、蛇のとぐろから脱け出す必要が有る。

人は、足を蛇の頭の上に置いて圧倒して従わせる必要が有る。

ヘルメスは、蛇を複製して、蛇を蛇自身に対立させた。

そして、永遠のつり合いによって、ヘルメスは、蛇を杖ケーリュケイオンの栄光に変えて、蛇を力のタリスマンに変えた。

メンフィスとエレウシスの大いなる試練は、知を強い勇敢な人に委ねる事によって、王者と祭司を形成するために用意された。

メンフィスとエレウシスの試練といった試練を受けるための代価は肉体、魂、命を祭司の手に委ねる事であった。

命を祭司の手に委ねて、修行者は、暗い地下に降りた。

暗い地下で、修行者は、燃える薪の間、深い速い川の中、深淵にかけられた橋の上を手に持ったランプの火を消さないで渡る必要が有った。

恐怖した修行者、恐怖に圧倒された修行者は、光の下に戻れなかった。

全ての障害を大胆に乗り越えた修行者は、祭司 mystae として認められた。

「祭司 mystae として認められる」事は、「小さな神秘を秘伝伝授された」事を意味する。

祭司 mystae は、さらに、厳守と沈黙を証明する必要が有った。

祭司 mystae は、数年間の厳守と沈黙の後にのみ、秘伝伝授者 epopt に成れた。

「秘伝伝授者 epopt」は「達道者」に相当する呼称である。

祭司と競っていた哲学者は、祭司の試練を模倣した試練で、弟子を試した。

ピタゴラスは、5 年間の沈黙と禁欲を強要した。

プラトンの学校は、幾何学者だけではなく音楽家にも開かれていた。

さらに、プラトンは、教えの一部を秘伝伝授者のためだけに取って置いたので、プラトンの哲学には謎が有った。

プラトンは、世界の創造を半神半霊に帰した。

プラトンは、人を、全ての動物の先駆けと表現した。

プラトンの半神半霊は、モーセのエロヒム、モーセの神々を意味する。

プラトンの半神半霊、モーセのエロヒム、モーセの神々は、無上の原理が創造したものの組み合わせと調和による力である。

プラトンの「人が獣をもたらした」という表現は「獣は生きている形の解析結果である。人は生きている形の解析結果の総合体である」という事を意味している。

プラトンは、神の言葉(、イエス)の神性を最初に公言した。

プラトンは、創造する神の言葉(、イエス)が地上で人に成るのが近づいている事を予見していた様に思われる。

プラトンは、俗世の悪人による迫害による、完全に正しい人(、イエス)の受難と死刑を公言している。

神の言葉(、イエス)についてのプラトンの無上の哲学は、プラトンが発明した物ではなく、完全にカバラによる物である。

プラトンは、プラトンの哲学が、プラトンが発明した物ではなく、カバラによる物である事を隠さなかった。

プラトンは「どんな学問においても、永遠の真理や神の言葉と一致するものだけを受け入れる必要が有る」と公言している。

(カバラはヘブライ語で「受け入れ」を意味する。)

プラトンの「どんな学問においても、永遠の真理や神の言葉と一致するものだけを受け入れる必要が有る」という言葉は、ダシエの書物から引用した。

ダシエは「プラトンの『永遠の真理』とは、『古代人が、神から受け取り、後世に伝えた』とプラトンが考えている、『古代からの口伝』を意味している」と注釈している。

「カバラ」という名前を用いないで、「古代人が、神から受け取り、後世に伝えた、古代からの口伝」という言葉より、明確に「カバラ」について話す事は不可能である。

「古代人が、神から受け取り、後世に伝えた、古代からの口伝」という言葉は、「カバラ」という名前を用いる代わりに、「カバラ」を定義している。

「古代人が、神から受け取り、後世に伝えた、古代からの口伝」という言葉は、「カバラ」という名前より、ある意味、正確である。

他には、後記の様に、プラトンは話している。

「大いなる知の根源は、書物の中には存在しない。
人は、大いなる知の根源を、深い熟考によって、自身の中に探求する必要が有る。
人は、神の火を、神の火の真の源泉の中で発見する必要が有る……。
そのため、私プラトンは、大いなる知の根源や神の火を啓示する物について何も記さないし話すつもりも無い。
大いなる知の根源や神の火を啓示する物を大衆化しようと試みる人は、試みが無益であると気づくであろう。
なぜなら、自身の心の中に存在する大いなる知の根源や神の火といった天の真理を理解する力を神から与えられている少数の人を除いて、大いなる知の根源や神の火を啓示する物を大衆化しようという試みは、人に、何ものかを見下す様にさせてしまう。
また、大いなる知の根源や神の火を啓示する物を大衆化しようという試みは、人に、理解していない不思議についての受託者であるかの様な、中身の無い外見だけの軽率な自信を持たせてしまう」

後記の様に、プラトンは、小ディオニュシオスへの手紙に記している。

「あなた小ディオニュシオスがアルケデモスをわざわざ私プラトンの所に派遣したので、私プラトンはアルケデモスに、より大事な事、より神聖な事、あなた小ディオニュシオスが知りたいと真剣に望んでいる事を証言する必要が有る。

私プラトンが第一原理である神の神性について抱いている考えをあなた小ディオニュシオスに十分に説明しなかった、とあなた小ディオニュシオスが思っている、とアルケデモスは私プラトンに理解させました。
私プラトンは第一原理である神の神性の説明を謎の言葉によってのみ記します。
もし私プラトンの手紙が陸上か水上で盗み見られても、盗み見た人が何も理解できない様にするためです。
全てのものが、全てのものの王をもたらす。
全てのものは、自らの存在を全てのものの王から得ている。
全てのものの王は、全ての善いものの源泉である。
第２のものは、第２のものとして。
第３のものは、第３のものとして」

　プラトンの言葉は、セフィロトの神学の完全な要約である。
　「全てのものの王」とは、普遍である。
　普遍とは、無上の絶対の神である。
　普遍とは、無上の絶対の存在である。
　全ての光の放射は、神という中心から放たれている。
　神という中心は、全ての場所に存在している。
　実に、人は神を３つの特別な様相と３つの異なる分野や領域と見なしている。
　第一原因である神の世界では、(神だけの楽園では、自由意思といった神だけの領域では、神の教えという分野では、)「全てのものの王」である神は、唯一であり第一であり最初である。
　二次的な原因である知の世界では、(霊の冥界では、概念の領域では、哲学という分野では、)第一原理である神の感化が感じられる。

ただし、第一原理である神の感化は、二次的な原因の中の第１のものとしてのみ考えられる。

知の世界では、(霊の冥界では、概念の領域では、哲学という分野では、)「全てのものの王」である神は、２つ１組によってあらわれる。

２つ１組は、受容的な創造する原理である。

形の世界である第３の世界では、(この世では、形の領域では、自然科学という分野では、)神は、完全な形として表される。

神は、人に成った神の言葉(、イエス)である。

神は、無上の善と美である。

神は、創造された完全である。

「全てのものの王」である神は、同時に、第１の者、第２の者、第３の者である。

なぜなら、神は、全てのものにおいて、全てである。

神は、全てのものの中心であり原因である。

プラトンの天才については沈黙して、無限の者である神についての正確な知だけをたたえよう。

大いなる使徒ヨハネはプラトンの哲学を盗んでヨハネによる福音書の最初を記したと誤って話すのはもうやめよう。

使徒ヨハネがプラトンの哲学を盗んだのではなく、プラトンはカバラという使徒ヨハネと同じ源泉から哲学を得たのである。

ただし、プラトンは、生かす霊を受け取れなかった。

(コリント人への第２の手紙３章６節「文字は殺すが、霊は生かす」)

人への最大の啓示を解説したプラトンの哲学は、神の言葉(、イエス)が人に成る事を望んだかもしれない。

しかし、福音だけが、人に成った神の言葉(、イエス)を世界にもたらす事ができた。

プラトンがギリシャ人に教えたカバラは、後世に、神知学という名前を名乗った。

そして、神知学は、魔術の考え全体を包含する様に成った。

神知学という秘密の考えの総合に、探求における全ての発見は次々と引き寄せられた。

神知学の野心は、理論から実践へ移す事であった。

神知学の野心は、行動によって、言葉の実現に到達する事であった。

占いという危険な体験による知識は、祭司を省略する方法の知識を教えた。

聖所は大衆に口外された。

何の使命も無い大衆が図々しく神々に神託を話させた。

そのため、神知学、プラトン派の奇跡は、黒魔術と共に破門された。

また、神知学、プラトン派の奇跡は、黒魔術の悪事を模倣していると疑われた。

なぜなら、神知学、プラトン派の奇跡は、黒魔術の不信心という汚染を免れる事ができなかった。

イシスのヴェールを無断で取る人は罰を受ける。

神のものが関係しているものに対する好奇心は、信心を冒涜してしまう。

ヨハネによる福音 20 章 29 節で、大いなる主イエスは「見ないで信じる人は幸いである」と話している。

プラトン派の奇跡や降霊術の実践は、実践にふける人に、常に、破滅をもたらす。

他の世界、霊の冥界との境界に足を踏み入れると、多くの場合は不思議な恐るべき方法による、死をもたらす。

めまいを併発し、強硬症カタレプシーと狂気が死を完成する。

人々の前で、空中に乱れが生じ、壁面下部の腰板が裂け、ドアが震えてきしむのは疑い無い。

不思議な象徴や、血の様な物の染みが、白紙の羊皮紙や亜麻布の上にあらわれる。

降霊術であらわれる象徴の性質は、常に同じである。

専門家は、降霊術であらわれる象徴を「悪魔のサイン」という名前で呼んでいる。

磁気の病的興奮者は、「悪魔のサイン」を一目見ただけで、けいれんするか忘我状態に成る。

磁気の病的興奮者は、神の聖霊、天使を見ていると誤って思い込む。

磁気の病的興奮者にとっては、誤りの霊、サタンが光の天使に変わるのである。

(コリント人への第 2 の手紙 11 章 14 節「サタンですら光の天使を装う」)

偽の霊、悪人の霊は、あらわれる条件として、異性との接触を求める。

偽の霊、悪人の霊は、あらわれる条件として、手を握り合う事や、脚をからめ合う事や、顔と顔を合わせて呼吸する事や、性交すら求める。

悪人の霊の信者は、異性との接触という酩酊に夢中に成る。

悪人の霊の信者は、神に選ばれたと誤って思い込む。

悪人の霊の信者は、神の通訳者であると誤って思い込む。

悪人の霊の信者は、狂信の光によって、位階制に従っていると誤って思い込む。

悪人の霊の信者は、インドのカインの子孫の後継者である。

悪人の霊の信者は、麻薬と苦行僧の奴隷である。

悪人の霊の信者に、警告しても無駄である。

悪人の霊の信者は、自らの行為と意思によって、破滅する。

磁気の病的興奮者を健康にするために、古代ギリシャの祭司は、ホメオパシーの一種に頼ってしまった。

古代ギリシャの祭司は、病気を誇張して、患者を恐れさせた。

そして、古代ギリシャの祭司は、磁気の病的興奮者をTrophoniusの洞窟の中で眠らせた。

Trophoniusの洞窟の中で眠らせる用意として、古代ギリシャの祭司は、磁気の病的興奮者に断食させ、儀式によって清め、徹夜させた。

磁気の病的興奮者は、地下に降ろされ、完全な暗闇の中に閉じ込められた。

イタリアのナポリの近くの「犬の洞窟」の二酸化炭素の炭酸ガスの様に、酩酊させるガスがTrophoniusの洞窟には満ちている。

(「犬の洞窟」の底に溜まっている二酸化炭素の炭酸ガスを吸うと、時間はかかるが、仮死状態を経て、死に至る。)

磁気の病的興奮者、幻視者は、速やかに、Trophoniusの洞窟に圧倒される。

窒息による仮死状態の初期症状は、恐るべき夢を誘発する。

古代ギリシャの祭司は、死ぬ前の仮死状態の時に、全身が震えている、白く成っている、鳥肌が立っている、磁気の病的興奮者、幻視者を救出する。

古代ギリシャの祭司は、仮死状態の磁気の病的興奮者、幻視者を三脚イスに座らせる。

完全に気がつく前に、仮死状態の磁気の病的興奮者、幻視者は、予言の言葉を話す。

仮死状態は、仮死状態の時の事を震えずには思い出せないほど神経系を狂わせる。

以降、仮死状態に成った磁気の病的興奮者、幻視者は、降霊術や霊について話す勇気が無く成る。

仮死状態に成った人の何人かは、笑わなく成ったり、楽しさを感じなく成る。

大衆は、仮死状態に成って笑わなく成った人に、「あの人はTrophoniusの洞窟で眠った」と言う、ことわざにするくらい陰気な印象を持った。

打ち解けない人について、「あの人はTrophoniusの洞窟で眠った」と言う、ことわざが有った。

知の遺物と知の神秘の復活のためには、哲学者の書物より、古代の宗教の象徴に頼る必要が有る。

現代人より、古代エジプトの祭司は、運動の法と命の法を知っていた。

古代エジプトの祭司は、作用を反作用で和らげたり促進した。

古代エジプトの祭司は、苦も無く、仮定した原因による、結果の実現を予見した。

セト、ヘルメス、ソロモン、ヘラクレスの柱は、魔術の口伝において、つり合いの普遍の法を象徴している。

つり合いの知は、秘伝伝授者を命、熱、光の中心の周囲への普遍の引力の知に導く。

そのため、エジプトの神聖な暦では、各月は、3人の10日間の長老か霊の保護下に置かれている事が知られている。

(古代エジプトの暦では、1か月は3週間、1週間は10日間で、週を司る守護神が存在した。)

獅子宮の第1デカンは、7つの光線を伴う人の頭で表される。

(占星術では、1つの宮を3つのデカンに等分している。)

獅子宮の第1デカンの人の頭には、サソリの尾を持つ体が有る。

獅子宮の第1デカンの人の頭には、あごの下に人馬宮の象徴が記されている。

獅子宮の第1デカンの人の頭の下には、神の名前が記されている。

人の頭の下に神の名前が記されている象徴は、Khnoubisと呼ばれていた。

Khnoubisは、金と光を意味するエジプトの言葉である。

タレスとピタゴラスは、エジプトの聖所で、地球は太陽の周囲に引力で引かれている、と学んだ。

しかし、タレスとピタゴラスは、地球が太陽の周囲に引力で引かれている、という事実を大衆に公表しなかった。

なぜなら、地球が太陽の周囲に引力で引かれている事の啓示は、大いなる神殿の秘密の啓示を伴う。

大いなる神殿の秘密とは、引き寄せと放射の二重の法である。

大いなる神殿の秘密とは、固定と運動の二重の法である。

大いなる神殿の秘密とは、創造の原理である。

大いなる神殿の秘密とは、命の無限の原因である。

キリスト教徒の作家ラクタンティウスは、地球が太陽の周囲に引力で引かれている、という魔術の口伝を聞いた。

ただし、ラクタンティウスは、原因が無い結果として、地球が太陽の周囲に引力で引かれている、と聞いた。

ラクタンティウスは、誤って、地球の裏を歩く人は足側を頭側の上に乗せる結果に事実として成る、と話して、地球の自転運動と地球球体説による地球の正反対の裏の地点の存在を信じる神秘の夢見る人を笑いものにした。

さらに、ラクタンティウスは、幼稚な論理によって、地球の裏にいる人が天へ頭から落ちるのは誤りが無い、と誤って話した。

ラクタンティウスと同様に、似非哲学者は、地球の裏にいる人は天へ頭から落ちる、と誤って推測した。

祭司は、似非哲学者に反論しないで、似非哲学者の無知による過失を笑いものにしないで、全ての考え、美しい全ての形、真理の全ての秘密を創造的な象徴によって記した。

古代ギリシャの秘儀祭司は、魔術の超越的な秘密を、冥界の象徴的な記述に隠した。

創世記２章の地上の楽園の様に、冥界には４つの川が存在する。

さらに、第５の川ステュクスが、冥界を７周して流れている。

(第５の川ステュクスは、この世と冥界の境界の川である。)

コキュートスと呼ばれている悲しみと沈黙の川が存在する。

忘却の川レテが存在する。

速い抵抗できない全てのものをさらう川アケローンが存在する。

アケローンの正反対に流れる火の川プレゲトンが存在する。

プレゲトンは陽性の流体である。

アケローンは陰性の流体である。

プレゲトンとアケローンは永遠に混ざり合う。

アケローンの黒い冷たい水は、プレゲトンの暖かさによって、蒸気を出す。

プレゲトンの液体の火は、アケローンの厚い蒸気に覆われている。

ラルヴァやレムレースは、生きた事が有る肉体の影の映像や、これから生まれる肉体の影の映像である。

プレゲトンによる、アケローンの蒸気は、無数のラルヴァやレムレースをもたらす。

ラルヴァやレムレースは、悲しみの川コキュートスの水を飲んでも飲まなくても、若さと平和を得るために、忘却の川レテの水を飲む事を望む。

賢者だけが、忘却を求めない。

なぜなら、すでに、記憶は、賢者への報償に成っている。

賢者だけが、真の不死である。

賢者だけが、自身の不死を自覚している。

地獄の苦しみは、悪徳と悪徳への懲らしめについての本当に神聖な説明である。

タンタロスの貪欲とシシュフォスの野心という罪はつぐなわれないであろう。

なぜなら、タンタロスとシシュフォスは満足という物を知らない。

タンタロスは水の中で渇(かわ)く。

シシュフォスは、山の頂上へ石を転がし、山の上で石の上に座る事を望むが、断続的に石は転がり落ちていき、石はシシュフォスを深淵に引き堕とす。

自由奔放で肉欲を抑えられないイクシオンは、神の女王ヘラを犯そうとした。

イクシオンは、地獄の苦しみで処罰される。

イクシオンは、ヘラを犯せなかった。

イクシオンは、ヘラの幻を抱いただけに終わった。

(イクシオンは、雲を抱いた。)

ヘラの幻は、イクシオンの愛着に合わせて愛着してくれた様に見えたかもしれない。

ヘラの幻は、イクシオンの愛着に従った様に見えたかもしれない。

しかし、イクシオンが義務を放棄して犯して満足すると、イクシオンが抱いた愛着は、見せかけで、憎悪であったと分かる。

来世ではなく、正反対に、生前に、死の神秘を探求する必要が有る。

死からの救いや、死刑宣告は、この世で始まる。

地上にも天と地獄が存在する。

常に、善行は、報われる。

常に、悪行は、懲らしめられる。

悪人が富んでいると、人は悪人が罰を受けずに楽しんでいると考えてしまう時が有る。

善悪の道具である富は、悪人に与えられる機会が多い様に見えてしまう。

しかし、悪人には災いが有る。

悪人は富の鍵を所有しているかもしれないが、悪人は墓と地獄への門しか開けない。

全ての本物の秘伝伝授者は、労苦と苦難に無数の価値を認めた。

ドイツの詩人は「労苦は、人という羊の群れを導く知られざる羊飼い(イエス)の、牧羊犬である」と話している。

我慢や忍耐のし方を学ぶ事、死に方を学ぶ事は、不死への知的な鍛錬である。

我慢や忍耐のし方を学ぶ事、死に方を学ぶ事は、不死への知的な鍛錬である、というのが、ダンテの神曲の道徳的な教訓である。

プラトンの時代の象徴的な「ケベスの石板」で、哲学者ケベスは、我慢や忍耐のし方を学ぶ事、死に方を学ぶ事は、不死への知的な鍛錬である、という要点を記している。

「ケベスの石板」の説明は、残存している。

そのため、多数の中世の画家が「ケベスの石板」を復元した。

「ケベスの石板」は、哲学的な記念碑である、と同時に、魔術的な記念碑である。

「ケベスの石板」は、完全な道徳の総合である。

「ケベスの石板」は、試みられた中で最大の、大いなる秘密の大胆な表明である。

大いなる秘密の啓示は、間違い無く、天地を覆す。

本書「魔術の歴史」の読者は、疑い無く、大いなる秘密の説明を期待するであろう。

しかし、大いなる秘密という謎を解いた人は、大いなる秘密は性質的に説明できない、と知る事に成る。

また、大いなる秘密を大衆に口外してしまった人と同じく、(正しい人ではないのに)不意に大いなる秘密を推測してしまった人にとっては、大いなる秘密は死刑宣告と成ってしまう。

大いなる秘密は、賢者の王位である。

大いなる秘密は、「ケベスの石板」の哲学者ケベスの美しい例え話で試練の山から降りて来た勝利者として表現されている、秘伝伝授者の王冠である。

大いなる秘密は、秘伝伝授者を金と光の主にする。

金と光は、根源的には同一の物である。

秘伝伝授者は、円積問題を解いた。

秘伝伝授者は、永久機関の永久運動を傾ける。

秘伝伝授者は、賢者の石を所有している。

達道者は、エリファス レヴィの話を理解するであろう。

自然の活動には休止が無く、自然の作品には空白が無い。

天の調和は、地上の調和と対応している。

永遠の命は、永遠の命と1日の命を同じく統治する法に従って、進化を果たす。

知恵の書11章21節に「神は数、目方、尺度で全てのものを創造した」と記されている。

知恵の書11章21節の「神は数、目方、尺度で全てのものを創造した」という光の教えは、プラトンの(カバラの)教えでもある。

プラトンの「パイドン」で、ソクラテスは、カバラの口伝と完全に一致して、魂の運命について話している。

試練によって清められた霊は、重さの法から解放されて自由に成り、悲しみの大気を超越して上昇する。

汚れた霊は、暗闇の中を這(は)い、弱い人や罪人の所へあらわれる。

物質的な肉体的な肉欲的な人生のみじめさから解放されて自由に成った全ての霊は、罪を観察しに戻らないし、誤りを分担しに戻らない。

一度で十分である。

(マタイによる福音6章34節「1日の労苦は1日で十分である」)

死んだ人の埋葬についての古代人の用心は、降霊術に対する強い抗議である。

常に、墓での埋葬を妨害した人は、不信心者である、と見なされる。

死んだ人を呼び戻す事は、死んだ人を第２の死で苦しめる事に成るであろう。

古代の宗教に所属していた真剣な人の心配が死後に埋葬されない事であったのは、ストリゲスが死体を冒涜する可能性と、死体が呪いに利用される可能性を考慮したからである。

死後、魂は神へおもむき、肉体は共通の母である土へおもむく。

魂を保護する神という聖所と、肉体を保護する土という聖所を侵害しようと試みる人には災いが有る。

墓という聖所が乱されると、古代人は怒っている死霊に供え物をささげた。

墓を荒らされたら霊に供え物をささげた行為の根底には、神聖な考えがあった。

事実、仮に、降霊術によって、光を望んでいるが闇の中を漂流してさまよっている霊を引き寄せられたら、降霊術師は父である降霊術師の死後に生まれる子、退化した子、降霊術師の血と魂で養う必要が有る子を作る結果に成ってしまう。

降霊術師は、吸血鬼を作る者である。

死者に血や魂を吸い尽くされて降霊術師が死んでも、降霊術師は同情するに値しない。

第 2 巻 第 4 章 大衆の宗教における魔術

概念は、形をもたらす。

形は、概念を表して増殖させる。

感情については、感情を共有する人々の一致、交流が、感情を増殖させる。

そのため、共通の熱狂は、感情を共有する人々の全てに満ちる事に成る。

そのため、個人、個人は正しさと美の問題について簡単にだまされても、全体としては心の中で崇高なものをほめたたえ続けて、崇高なものを望んで実行しようとする。

古代のマギは、形による増殖と感情の増殖という、自然の 2 つの大いなる法を知って、大衆の宗教の必要性を理解するに至った。

大衆の宗教は、感情の性質によって、大衆の全てが分かち合える唯一の宗教であるべきである。

唯一の宗教は、全ての真の宗教の様に、位階的で象徴的であるべきである。

唯一の宗教は、真理の様に、輝いているべきである。

唯一の宗教は、自然の様に、豊かで多様であるべきである。

唯一の宗教は、天空の様に、星の様であるべきである。

唯一の宗教は、大地の様に、香るべきである。

実際に、後に、モーセは、唯一の宗教を確立した。

ソロモンは、唯一の宗教の全ての栄光を実現した。

イエスは、唯一の宗教をさらに神々しくして、現在、法王ペトロの、ローマの大いなるバチカン市国に中央集権化している。

事実として、人は唯一の宗教しか知らない。

唯一の宗教という普遍の光には、多数のぼやけた鏡像、多数の影が有る。

しかし、常に、誤りという闇夜の後に、太陽の様に唯一で清らかな、唯一の宗教という普遍の光があらわれる、のを人は見る。

宗教の美しさは、宗教の命である。

イエス キリストが貧しい祭司を望んだとしても、イエス キリストの至高存在である神は、みすぼらしい祭壇を望まない。

プロテスタントは、儀式が教育である、と理解しなかった。

プロテスタントは、みすぼらしい神、つまらない神という誤った想像を大衆に創作させるなかれ、と理解しなかった。

イギリス人は、自分の家には金銭を惜しまない。

イギリス人は、聖書を高く評価するふりをする。

イギリス人は、ソロモンのエルサレム神殿の比類無き美しさを思い浮かべれば、イギリス独特の教会が非常に冷たく、むき出しである、と気づく事に成る。

イギリスの宗教の形が枯れているのは、イギリス人の心が無味乾燥している事にある。

魔術や美しさや情感の無い宗教によって、どうやってイギリス人の心を常に命で満たすのか？　魔術や美しさや情感の無い宗教では、イギリス人の心を命で満たせない！

役所に似ている、イギリスの礼拝堂を見てみなさい。

門番や事務員の様な身なりの、イギリスの堅苦しいだけの祭司を見てみなさい。

イギリスの役所の様な礼拝堂と門番や事務員の様な堅苦しいだけの祭司を見て、宗教は虚礼な形式主義的な代物であり、神は治安を守る裁判官に過ぎない、と誤って考えない人がいるだろうか？　イギリスの役所の様な礼拝堂と門番や事務員の

様な堅苦しいだけの祭司を見ると、宗教は虚礼な形式主義的な代物であり、神は治安を守る裁判官に過ぎない、と人は誤って考えてしまう!

正統性は、超越的な魔術の絶対の性質である。

真理が世界に誕生すると、真理の世界での誕生という事実を、知の星がマギに知らせる。

そして、マギは、(知の)子孫の創始者である幼子を敬礼しに来る。

位階制についての理解によって、秘伝伝授を獲得できる。

従順の実践によっても、秘伝伝授を獲得できる様に。

そのため、実に、秘伝伝授者が、党派、分派、宗派を作る事は絶対に無い。

21 祖アブラハムは、正統な口伝をカルデアから運んだ。

真の神についての知と結合して、正統な口伝は、24 祖ヨセフの時代のエジプトを統治した。

孔子は、正統な口伝を中国に確立しようとした。

しかし、インドの愚かな神秘主義が、仏教の偶像崇拝的な形に隠れて、中国という大帝国にはびこった。

21 祖アブラハムが、正統な教えをカルデアから持って行った様に、モーセは、正統な教えをエジプトから持って行った。

そのため、カバラの秘密の口伝には、教会の教父や学の有る祭司がカバラの解釈の光の下で解釈した場合の現代の最高の神学に相当する、完全な唯一な神学が存在する。

完全なカバラの全体は、俗世の大衆が未だ理解するべきではない諸々の光を含んでいる。

「光輝の書」は、カバラの聖書の第一であり極致である。

「光輝の書」は、さらなる全ての深みをヴェールを脱がして明かす。

「光輝の書」は、古代の神話の全ての暗闇を明かす。

「光輝の書」は、古代の聖所に隠されている知の全ての暗闇を明かす。

「光輝の書」を応用するには、「光輝の書」の意味の秘密を知る必要が有る。

鋭い識者でも「光輝の書」の秘密を知らない人には「光輝の書」は全く理解を超えた何も読み取れない書物であろう。

魔術についてのエリファス レヴィの作品を入念に読んでいる学徒には、独力で「光輝の書」の秘密に到達して、多数の神秘を説明している「光輝の書」を読める様に成る事を、エリファス レヴィは望む。

秘伝伝授は、位階的な原理の必然の結果である。

位階的な原理は、魔術における、実現の基礎である。

そのため、大衆は、聖所の門をこじ開ける企みが徒労に終わった後、祭壇に対抗して祭壇を建てる事に奔走して、正統な教えの沈黙に対抗して分派について無知に暴露した。

悪人の霊の魔術師は、神の聖霊の魔術師について恐ろしい嘘の噂を広めた。

悪人の霊の魔術師、吸血鬼の様な邪悪な降霊術師は、自分たちの罪を神の聖霊の魔術師へ責任転嫁した。

神の聖霊の魔術師は、幼子を食べ人の血を飲むと誤って妄想された。

知の思慮に対する、無思慮な無知による迫害は、魔術師の嘘の悪評の永続化に成功した。

本書の著者エリファス レヴィが会館の中で金持ちの血でソーセージを作って餓えた大衆を養えと求めたのをこの耳で聞いたという嘘をどの小論文でかは知らないが下劣な人間が記さなかったか？

誹謗中傷は、途方も無い代物であるほど、愚かな大衆の心に大きな印象を与える。

魔術師を誹謗中傷する人は、誹謗中傷の内容を自ら犯している。

魔術師を誹謗中傷する人は、恥知らずな呪いにおける全ての暴言に身を任せている。

至る所に、霊のあらわれや不思議な現象の噂が存在した。

酒神祭を認めるために、神々が目に見える形で降臨した。

光に照らされた者のふりをした狂信者の輪は、オルフェウスを殺した酒神ディオニュソスの女信者にまで遡(さかのぼ)る。

混乱と殺人が忘我状態と降霊に付き物であった、狂信者の秘密の輪の時代から、放蕩な神秘主義の汎神論は増大し続けた。

しかし、後記の様に、ギリシャ神話の例え話には、汎神論の壊滅的な破壊的な考えに不可避な運命が記されている。

テュロスの海賊が、眠っていた酒神ディオニュソスをつかまえて海賊船に運んだ。

テュロスの海賊は、霊感の神である酒神ディオニュソスを奴隷にできたと誤って思った。

しかし、突然、大海で、船が神々しく成って、帆柱はぶどうの木の幹に成り、帆柱と帆をつなぐ綱は枝に成った。

サテュロスが至る所にあらわれて大山猫リンクスや豹(ヒョウ)パンサーと共に踊った。

海賊は、狂って、ヤギに変身したと思い込み、海に身を投げた。

酒神ディオニュソスは、ボイオティア地方に上陸して、テーバイに行った。

テーバイは、秘伝伝授の都市である。

テーバイの王ペンテウスは、無上の力である神に対して不敬であった。

ペンテウスは、酒神ディオニュソスを閉じ込めようとした。

しかし、牢獄は独りでに開いて、酒神ディオニュソスは勝利して出て来た。

ペンテウスは、怒った。

そのため、酒神ディオニュソスの女信者に成っていた、ペンテウスの母であるカドモスの娘アガウエ達は、生贄の若い牛と誤解して、ペンテウスを八つ裂きにして殺した。

汎神論は統合体を形成できず、知が汎神論を必ず分解する。

カドモスの娘達は、知を象徴している。

オルフェウス、カドモス、オイディプス、アムピアラオスの後の、ギリシャ神話の魔術の祭司の大いなる象徴的人物は、テイレシアスとカルカスである。

ただし、テイレシアスは、見る目が無い信頼できない秘儀祭司であった。

ある日、テイレシアスは、2 頭の絡み合っている蛇に出会った。

テイレシアスは、2 頭の絡み合っている蛇が争っていると誤解してしまった。

そのため、テイレシアスは、杖で打って、2 頭の絡み合っている蛇を引き離してしまった。

テイレシアスは、ヘルメスの杖ケーリュケイオンの 2 頭の絡み合っている蛇という象徴を理解できなかった。

そのため、テイレシアスは、自然の 2 つの力を引き離そうと試みてしまった。

知と信心を引き離そうと試みてしまった。

愛と知を引き離そうと試みてしまった。

男性と女性を引き離そうと試みてしまった。

テイレシアスは、結合を争いと誤解してしまった。

テイレシアスは、引き離すという行為によって、2 頭の絡み合っている蛇を台無しにしてしまった。

そのため、テイレシアスは、男性性と女性性という、自身のつり合いを失ってしまった。

(

男性は女性性を持っている。

女性は男性性を持っている。

なぜなら、男性神は女神達と結婚した。

男性神は男性性を女神達に与えた。

女神達は女性性を男性神に与えた。

)

テイレシアスは、結婚という完成を禁じられて、不完全な形で交互に男性か女性に成る様に成ってしまった。

テイレシアスの例え話は、普遍のつり合いの神秘と創造の法を完全に明かしている。

実に、創造とは男性性と女性性を持つ人による作業である。

引き離されていては、男性性と女性性は不毛なままである。

知の無い宗教の様に。

反対に、宗教の無い知の様に。

宗教の無い哲学の様に。

宗教の無い学問の様に。

力の無い思いやりの様に。

思いやりの無い力の様に。

思いやりの無い正義の様に。

正義の無い思いやりの様に。

正反対のものの一致が、調和をもたらす。

一方だけを選択するために引き離すのではなく、結合するために正反対のものを区別する必要が有る。

黒から白へ、白から黒へ、人は絶え間無く意見を変えて常に都合良く解釈してしまう、と言われている。

黒から白へ、白から黒へ、人が絶え間無く意見を変えて常に都合良く解釈してしまうのは、必然である。

なぜなら、目に見える現実の形は、黒であり白である。目に見える現実の形は、黒と白の協力による物である。

目に見える現実の形は、光と影の混同無しの協力によって、あらわれる。

そのため、自然において全ての 2 つの正反対のものは結合している。

そのため、2 つの正反対のものを引き離す人は、テイレシアスと同じ罰を受ける危険をおかす事に成る。

一説には、テイレシアスは知の女神アテナの裸を見た神罰で盲目に成った、と言われている。

言い換えると、テイレシアスは神秘を冒涜した神罰で盲目に成った。

テイレシアスが盲目に成った理由は諸説あるが、常に同じく、テイレシアスが神秘を冒涜した事を例えている。

疑い無く、テイレシアスが神秘を冒涜した事を考慮に入れて、テイレシアスの霊は永遠の暗闇の中でさまよっている、とホメロスは「オデュッセイア」で記している。

(Cimmerian、キムメリオス人は永遠の暗闇の国に住んでいる、とホメロスは話している。)

オデュッセウスは、母の霊、アキレスの霊、アガメムノンの霊、テイレシアスの霊に情報や助言を求めた時に、血で渇きをいやすラルヴァと不幸な霊の中にテイレシアスの霊を探した。

オデュッセウスは、テイレシアスの霊に助言を求めた時に、現代の霊媒師による顔や体を引きつらせる方法や近代の降霊術師による無害な投げ落とした言葉が記さ

れた紙という方法とは異なる、穴を掘って黒い羊の血で満たすという黒魔術の恐るべき儀式を善用した。

ホメロスの話では、聖職者は、ほとんど沈黙している。

なぜなら、カルカスは、占い師であり、王者である高い位階の祭司でもなく、大いなる秘儀祭司でもない。

カルカスは、権力者たちが怒る可能性を考慮していて、(神ではなく、)権力者たちに仕えている様に思われる。

カルカスは、アキレスに保護を頼むまで、アガメムノンに喜ばれない真実を恐れて話さなかった。

そのため、カルカスは、アキレスとアガメムノンの間に不和の種をまいて、軍に災いをもたらした。

ホメロスの全ての話は、重要な深い教訓を含んでいる。

カルカスの話でホメロスは、祭司は俗世の権力者から独立している必要が有る、とギリシャに印象づけようとしている。

祭司の位階は、無上の法王の位階に対してだけ責任が有るべきである。

また、大祭司である法王の三重冠の一部(である祭司の位階が一部)でも欠けたら、法王に相応しく無く成る。

法王が地上の俗世の権力者たちと対等に成るには、法王は俗世において王者に成る必要が有る。

法王は、理解力と知による、天命によって、王者に成る必要が有る。

ホメロスは、王者である祭司がいないと国々においてつり合いに何かが欠けてしまう、という知を教えている様である。

テオクリュメノスは、「オデュッセイア」であらわれる占い師である。

テオクリュメノスは、ほとんど居候の役をしている。

テオクリュメノスは、無駄な警告によって、オデュッセウスの妻ペネロペに対する求婚者どもから、あまり好意的ではない待遇を受けた。

テオクリュメノスは、予見した騒動が起こる前に、思慮深く身を引いた。

善良なテオクリュメノス、駄目なテイレシアス、駄目なカルカスといった占い師と、近づくのが恐ろしい人目につかない聖所に住んでいるシビュラの間には、大きな隔たりが有る。

キルケの後継者であるシビュラは、やはり、大胆さにのみ従う。

シビュラの隠れ家に入門するには、力か機知を使う必要が有る。

シビュラの髪をつかみ、シビュラを剣で脅して、シビュラを運命の三脚イスまで引いて行く必要が有る。

シビュラは、交互に赤く成ったり白く成ったりし、身を震わし、鳥肌を立たせて、つながりが無い言葉を話す。

シビュラは、怒って逃げる。

シビュラは、集めたら予言の詩を形成する、複数の独立した文を複数の木の葉の上に記す。

シビュラは、予言を記した木の葉を風に乗せて捨て去る。

シビュラは、隠れ家に閉じこもり、もう、どんな呼びかけも無視する。

シビュラの神託は、可能な多様な組み合わせの形と同じだけ、多数の意味を持っていた。

仮に、言葉の代わりに、シビュラが象徴の絵を木の葉に記していたら、言葉より、さらに、解釈は増える。

象徴の絵の運任せの組み合わせによる運命相談は、後に、数と幾何学的図形による土占い師の土占いの方法に成った。

象徴の絵の運任せの組み合わせによる運命相談は、現代では、大いなる魔術のタロットの大アルカナを用いる、カード占い師のカード占いの方法、タロット占い師のタロット占いの方法に成った。

大部分のタロット占い師は、タロットの価値を知らない。

タロット占いでは、運任せにタロットを選んで、解釈は霊感に頼る事に成る。

超常的な直感無しでは、超常的な予見無しでは、タロットの神の文字ヘブライ文字の組み合わせが表す言葉や、タロットの絵の組み合わせによる啓示は、運任せによる予言と成る。

タロットを組み合わせるだけでは不十分である。

タロットの組み合わせの意味を読み取る知を持つ必要が有る。

真の理解力によるカード占い、真の理解力によるタロット占いは、降霊術無しの、生贄無しの、神の聖霊への完全な相談に成る。

ただし、真の占いは善い霊媒者を要求する。

善い霊媒者無しでは占いは危険である。

そのため、エリファス レヴィは、善い霊媒者無しの占いを勧めない。

今日の苦しみを苦くするには、過去の不幸の記憶では不十分であろうか？

不可避の不幸な未来の心配を過去の不幸の記憶と今日の苦しみに乗せ過ぎる必要が有るか？

第 2 巻 第 5 章 処女性の神秘

実に、ローマ帝国は、ギリシャの変形である。

イタリアは、大きく成ったギリシャであった。

ヘレニズムがギリシャの考えと神秘を完成した時、狼(オオカミ)の子孫であるローマ人の教育が目前の次なる課題と成った。

(伝説ではローマの最初の王ロムルスとレムスの双子は幼子の時に雌の狼に育てられた。)

すでに、ローマは、あらわれていた。

ローマの第 2 の王ヌマ ポンピリウスがローマにもたらした秘伝伝授の特徴は、女性を象徴的に重要視する事である。

イシスの名の下で(女性という)無上の神性を敬礼していたエジプトの先例を、ローマは継承した。

ギリシャの秘伝伝授の神は、酒神ディオニュソスであるイアコスである。

酒神ディオニュソスは、インドを圧倒した者である。

酒神ディオニュソスは、アモンの角を持つ輝く両性具有者である。

酒神ディオニュソスは、祭器の杯を持ち、祭器の杯から普遍の命の赤ワインを注ぐ、汎神である。

酒神ディオニュソスであるイアコスは、雷(の神ゼウス)の息子である。

酒神ディオニュソスは、虎とライオンを圧倒した者である。

酒神ディオニュソスの女信者がオルフェウスを八つ裂きにして殺した時に、酒神ディオニュソスであるイアコスの神秘は冒涜された。

そのため、バッカスというローマの名前の下で、酒神ディオニュソスは、酩酊の神に過ぎなく成ってしまった。

ローマの第２の王ヌマ ポンピリウスは、霊感をエゲリアから求めた。

エゲリアは、神秘と孤独の女神である。

エゲリアは、賢明な思慮の有る慎み深い神である。

ヌマ ポンピリウスの帰依は、報われた。

エゲリアは、神々の母ウェスタへ払うべき敬意についてヌマ ポンピリウスに教えた。

献呈の辞の下で、ヌマ ポンピリウスは、屋根が半球形である、ドーム状の、円形の神殿、ウェスタの神殿を建てた。

ウェスタの神殿内では、消してはいけない火、ウェスタの聖火が燃やされていた。

ウェスタの処女、ウェスタの巫女と呼ばれる４人の処女が、ウェスタの聖火を維持していた。

ウェスタの処女は、務めに忠実である限り、驚異的な敬意が払われた。

一方、ウェスタの巫女は、務めを怠ると、特別に厳しい罰を受けた。

ウェスタの処女への敬意は、母国への敬意である。

家庭の清らかさは、処女性の清らかさを最善の栄光の物として認める事にかかっている。

家庭の母として、すでに、女性は、古い奴隷の状態から解放されて自由に成っている。

女性は、最早オリエントの奴隷ではなく、家庭の神であり、炉の守護者、家庭の守護者であり、父の名誉であり夫の名誉である。

ウェスタの処女という制度によって、ローマは、倫理道徳の聖所と成り、国々の女王と成り、世界の中心と成った。

全ての時代の魔術的な口伝は、ある超自然的な神聖な性質が処女性に有ると考えている。

予言の霊感は処女性と共にいて華を添える。

貞淑や処女性への憎悪からゴエティアの悪人の霊の魔術師は子殺しに走った。

それにもかかわらず、幼子の血には神聖な力や罪をつぐなう力が有ると考えた。

(性交の誘惑、)生殖の誘惑に抵抗する事は、徐々に死を克服する事である。

無上の貞淑は、秘儀祭司の栄光の王冠である。

(人との性交、)人の抱擁に命を使い果たす事は、墓に根を下ろす事である。

貞淑は、地上に非常に緩く隣接している花である。

貞淑という花は、太陽の愛撫が引き寄せると、苦も無く地上を離れて、鳥の様に逃げてしまう。

ウェスタの処女のウェスタの聖火は、信心と清らかな愛の象徴である。

ウェスタの聖火は、普遍の代行者の象徴でもある。

ウェスタの聖火は、星の光の象徴でもある。

ローマの第２の王ヌマ ポンピリウスは、普遍の代行者、星の光の恐るべき電気的な性質を取り出して傾ける事ができた。

もし過失によってウェスタの処女がウェスタの聖火を消してしまった場合は、太陽の光線か雷によってのみウェスタの聖火に再び火をつける事ができた。

毎年の初めにウェスタの聖火を新しい物に移し聖別した慣習の名残が現代ではカトリックの復活祭前日の聖土曜日に見られる。

キリスト教が古代の宗教の全ての美しい儀式を乗っ取ったと大衆は誤って非難してきた。

キリスト教は、普遍の正統な神の教えの最終形である。

キリスト教は、全ての正統な宗教の最終形である。

そのため、全ての正統な宗教の最終形として、キリスト教は、全ての正統な宗教の物を保存してきた。

一方、キリスト教は、危険な儀式や無意味な迷信を退けた。

さらに、ウェスタの聖火は、愛国心と家庭のための宗教の象徴でもある。

ルクレティアは、家庭のための宗教と、結婚という聖所の不可侵のために身をささげた。

ルクレティアは、古代ローマの偉大さの全ての化身であった。

ルクレティアは、死後の名声を誹謗中傷に任せれば、疑い無く強姦を免れる事ができた。

(

セクストゥスは、ルクレティアを剣で脅し強姦しようとした。

ルクレティアは死を恐れなかった。

セクストゥスは、ルクレティアを、ルクレティアの死体と裸の男の死体を並べてルクレティアが浮気していたかの様に見せかけると脅して、強姦した。

ルクレティアは、父と夫に事情を話して報復を依頼し短剣で自殺した。

)

しかし、名声は高貴な者の義務である。

名誉の問題では、醜聞は、失態より、みじめである。

ルクレティアは、強姦に耐えた後で罪をつぐない報復する事によって、徳の高い女性として、自身の気高さを祭司の高みにまで高めた。

高名なローマの貴婦人ルクレティアを記念して、祖国と家庭のための宗教における高位の秘伝伝授は女性に託されて男性は除外された。

真の愛は英雄的な犠牲的行為を鼓舞する事をルクレティアによって古代ローマの女性は学んだ。

男性の真の美しさは英雄的行為、英雄的精神と高尚さである、とローマの女性は教わった。

夫を裏切ったり捨てたりする可能性が有る(夫以外と性交した非処女であった)妻は、自身の過去と未来を駄目にする。

夫を裏切ったり捨てたりする可能性が有る(夫以外と性交した非処女であった)妻は、過去の娼婦にまで遡(さかのぼ)る消せない汚点という罪の烙印を額(ひたい)に押される。

夫を裏切ったり捨てたりする可能性が有る(夫以外と性交した非処女であった)妻は、(処女をささげて一途な愛を誓う)結婚の誓いを(事前に)破る事によって罪が一段と重い。

若さの盛りをささげた夫への愛が無く成る事は、徳の高い女性の心を苦しめる最大の苦しみである。

しかし、夫への愛の喪失を知らせて広める事は、過去の貞淑を裏切る事に成る。

夫への愛の喪失を知らせて広める事は、心の誠実さを捨てる事に成る。

夫への愛の喪失を知らせて広める事は、名誉の保全をあきらめる事に成る。

夫への愛の喪失を知らせて広める事は、究極の最大のつぐなえない恥に成る。

妻の貞淑さを含む処女性が、古代ローマの宗教であった。

古代ローマの偉大さの全ては、妻の貞淑さを含む処女性という倫理道徳の慣例という魔術(の知)のおかげである。

ローマで結婚が神聖な物である事をやめた時に、ローマの衰退は近づいた。

風刺詩人ユウェナリスがローマの堕落を非難した時代に、ローマの処女性の女神ボナ デアの秘密の儀式は淫らな儀式に成ったという説は疑わしい。

なぜなら、ローマの処女性の女神ボナ デアの淫らな儀式の酒祭には女性だけが参加できたという疑わしい説が正しいとしたら、参加者の女性たちが自分たちを裏切るはずが無い。

ネロ帝とドミティアヌス帝が統治していた時代以降のローマでは何でも有り得るため、ローマの処女性の女神ボナ デアの秘密の儀式は淫らな儀式に成ってしまったという疑わしい説が正しいと仮定しても、神々の母ウェスタの清らかな統治が終わって統治が聖母マリアの大衆的な普遍な清らかな宗教に譲られたと結論できるに過ぎない。

ローマの第 2 の王ヌマ ポンピリウスは、魔術の法の秘伝伝授者で、社会生活による磁気の感化を知っていた。

ヌマ ポンピリウスは、祭司と卜占官の団体を設立した。

古代ローマの祭司と卜占官は、定められた規則の下で生活した。

ヌマ ポンピリウスによる祭司と卜占官の団体は、修道院の最初の考えであった。

修道院は、宗教の大いなる力の 1 つである。

ヌマ ポンピリウスより遥か前に、ヘブライ人の預言者達は、祈りと霊感を共有する、共感の契約をしていた。

ヌマ ポンピリウスは、ヘブライ人の口伝を知っていた様である。

古代ローマの祭司フラミネスと戦神マルスの祭司サリイは、旋回と舞踊によって、自身を高揚させた。

古代ローマの祭司フラミネスと戦神マルスの祭司サリイの旋回と舞踊は、契約の箱の前でのダビデの行為を思い出させる。

ヌマ ポンピリウスは、新しい神託をデルポイの神託に対立させるつもりは無かった。

しかし、ヌマ ポンピリウスは、占いのわざを祭司に教えた。

ヌマ ポンピリウスは、自然の秘密の法によって決定される、予感と予見についての、ある理論を祭司に教えた事を意味する。

現代人は、予言のわざ、占いのわざ、前兆のわざを軽蔑している。

なぜなら、現代人は、光の深い知と、光の反射による普遍の類推の深い知を失っている。

「ザディーグ」という魅力的な架空の話で、ヴォルテールは、軽く適当な感じで、占いの純粋な自然な自然科学を詳細に記している。

しかし、観察の超常的な見事さと、大衆の常に限定的な推論から抜きんでた推論の力を前提としても、占いは、自然科学としては、驚くべき物、以上の物である。

ピタゴラス学派の祖師パルメニデスは、ある泉の水の味によって、直近の地震を予言した、と言われている。

パルメニデスが地震を予言した話の詳細は驚く事ではない。

なぜなら、水中の瀝青の存在と硫黄の味が、当該地方の地下の活動を哲学者パルメニデスに教えた可能性が有る。

水自体が異常に乱れていた可能性すら有る。

しかし、現代でも未だに、鳥の飛び方によっては厳しい冬の前兆と考える。

動物の消化器官や呼吸器官の中を調べて、大気の作用による、いくつかの感化を予見する事は可能である。

ところで、精神的な原因によって、大気が物質的に乱れる場合が有る。

革命は、大嵐と成る。

大衆の深呼吸は、天空を動かす。

成功と、電気の流れは、同時に起こる。

星の光、生きている光の色は、雷の振動を表す。

特殊な予言的な直感によって大衆は「大気中に何かがある」と話す。

占い師と卜占官は、星の光が至る所に記している文字を読み取る方法と、星の光の流れと回転による象徴を解釈する方法を知っていた。

占い師と卜占官は、なぜ鳥が単独で飛んだり群れで飛んだりするのか知っていた。

占い師とト占官は、何の感化によって鳥が東西南北へ向かうのか知っていた。

現代人は、ト占官を笑いものにしているが、なぜ鳥が単独で飛んだり群れで飛んだりするのか、何の感化によって鳥が東西南北へ向かうのか、全く説明できないありさまである。

占いは、笑いものにするのは非常に簡単だが、完全に学ぶのは非常に難しい。

古代の神託について不謹慎な事を書いた、「神託の歴史」でのフォントネル、博識な者ども、キルヒャーの様に、人が占いを笑いものにするのは、人の性質による、理解していないものへのお決まりの軽蔑と拒絶のせいである。

占いを笑いものにする知識人にとって占いにおける全てのものは詐欺である。

占いを笑いものにする知識人は、機械の像、隠された拡声器、全ての神殿における地下室による人為的な反響を想定する。

なぜ聖所を際限無く誹謗中傷するのか？

祭司には詐欺師しかいなかったのか？　いいえ！

女神ケレスや神アポロンの秘儀祭司には高潔な信念の人がいなかったのか？　いいえ！

それとも、一部の正しい祭司は他の詐欺師の聖職者にだまされていたのか？　いいえ！

個人、個人の悪人に神は永遠の命を与えていないのに、どうして詐欺師の聖職者が何世紀も、詐欺師の聖職者をだます事無く、正しい祭司だけをだまし続けられたであろうか？

最近の実験は、星の光の力だけで、思考を伝えられる事、思考を文字に変換できる事、思考を焼きつけられる事を明らかにした。

ダニエル書５章のベルシャザルの宴で謎の指が文字を壁に記した様に、現代でも未だに、謎の手が壁に文字を記す事が有る。

狂信や軽信であると確かに非難できない学者アラゴの「純粋数学以外で、不可能という言葉を口にする人は、用心が足りない」という賢明な意見を忘れない様にしよう。

ローマの第 2 の王ヌマ ポンピリウスの宗教的な暦は、マギの暦に基づいている。

ヌマ ポンピリウスの暦は、一連の祭と神秘である。

ヌマ ポンピリウスの暦は、至る所が、秘伝伝授者の秘密の考えを思い出させる。

ヌマ ポンピリウスの暦は、自然の普遍の法への儀式の大衆の行動化に完全に適している。

キリスト教の改善での保守的な伝統主義的な力が、ヌマ ポンピリウスの暦の月の並びと曜日の並びを保存している。

ヌマ ポンピリウスの下での古代ローマ人の様に、未だにキリスト教徒は、出生と死を記念して聖別されている金曜と土曜を神聖な物として禁欲によって敬礼している。

ただし、キリスト教徒にとっては、ウェヌスの金曜は、ゴルゴタの丘の十字架でのイエスによる罪のつぐないによって清められている。

サトゥルヌスの暗い土曜は、人に成った神イエスが墓で眠っている曜日である。

しかし、イエスは復活する。

イエスが約束した(正しい魂の永遠の)命は、神クロノスの鎌(かま)を鈍(にぶ)らせる。

古代ローマ人は、5 月を女神マイアにささげた。

(英語で 5 月は May と呼ぶ。)

女神マイアは、若さと花々の女神ニンフである。

女神マイアは、年の初物に微笑む若い母である。

(古代人は神に感謝して初物、初収穫物を神へささげた。)

キリスト教徒は、5 月を聖母マリアにささげた。

聖母マリアは、神秘の薔薇である。

聖母マリアは、純潔の白百合である。

聖母マリアは、救い主イエスの天の母である。

そのため、創世からの様に、キリスト教の儀式は古代からの物である。

キリスト教の祭は、先祖の祭に似ている。

なぜなら、キリスト教徒の救い主イエスは、古代の秘伝伝授の象徴的な神聖な美しさを廃止するために来たのではない。

マタイによる福音 5 章 17 節で「私イエスが律法と預言書を廃止するために来たと思うなかれ。私イエスは廃止するためにではなく成就するために来た」とイエス御自身が話している様に、イエスは、イスラエルの象徴的な律法についての全てのものを成就するために来たのである。

第2巻 第6章 迷信

迷信は、概念が失われた後も残った宗教の形である。

迷信は、残っている形骸化した宗教である。

もはや未知の真理や、外見を変えた真理が、全ての迷信の起源であり、全ての迷信の説明である。

「迷信」を意味するsuperstitionの語源はラテン語で「上に立つもの」、「生き残ったもの」を意味するsuperstitioである。

「迷信」を意味するsuperstitionの語源は、ラテン語で「残存物」、「生存者」を意味するsuperstesを経由した、ラテン語で「上に立つもの」、「生き残ったもの」を意味するsuperstitioである。

迷信は、古代の知や意見の死んだ残留物である。

思考よりも直感に常に支配されている、大衆は、形の仲介によって概念に執着するので、習慣を変えるのに苦労する。

そのため、迷信を破棄する試みは、常に、大衆には宗教自体を攻撃している印象を与えてしまう。

そのため、大いなる法王の1人グレゴリウス1世は、古代の習慣の廃止を求めなかった。

法王グレゴリウス1世は、「大衆は、古代の神などを敬礼する場所が有る限り、習慣の力によって、古代の神などを敬礼する場所に親しむので、真の神への敬礼に導くのが、より容易である」と話して、宣教者に古代の神殿を清めて破壊しない様にすすめた。

また、法王グレゴリウス１世は、「フランスのブルターニュ地方のブルトン人には、祭と供え物をささげるための定休日が有る。祭をブルトン人に残しておき、供え物をささげるのを制止しない様に。祭という楽しみをブルトン人に残しておきなさい。ただし、ブルトン人を異教からキリスト教へ優しく徐々に招きなさい」と話している。

そのため、キリスト教の神聖な儀式は、ほとんど名前を変えないで、古代の宗教的な儀式に取って代わった。

例えば、普遍の不死の(魂の)命を信じるために、先祖の霊を招く、カリスティアと呼ばれる宴が毎年あった。

神のカリスティアと言える、パンをイエスの肉と思って頂く聖体エウカリスティアの会が、古代の宴カリスティアに取って代わった。

そして、キリスト教徒は、復活祭ごとに、天と地上の全ての友と交流する。

キリスト教は、改善によって古代の迷信を保持しないで、全ての宗教の残存している象徴に魂と命を吹き込んだ。

キリスト教が改善した迷信の中にある、自然の知は、宗教と密接である。

なぜなら、自然の知は、人を神の秘密に入門させる。

魔術の忘れられた知は、タロットの象徴の中に、未だ完全に生きている。

また、魔術の知は、生きている口伝の中に、また、手つかずで残されている様に見える迷信の中に、ある程度は生きている。

例えば、数や曜日への意見は、原初の魔術の考えの盲目的な記憶である。

ウェヌスにささげられた曜日としての、金曜は、常に不運と考えられた。

なぜなら、ウェヌスにささげられた曜日としての、金曜は、誕生と死の神秘を象徴する。

そのため、ヘブライ人は、金曜は、作業に着手しなかった。

けれども、ヘブライ人は、金曜に、一週間の作業を終えた。

なぜなら、金曜は、作業を休む義務がある土曜の安息日の前日である。

数 13 は、完全な循環の数 12 の後の数、完全な周期の数 12 の後の数である。

それで、数 12 は循環、周期という生命活動を意味するので、数 12 の後の数である、数 13 は死を意味する。

また、死についてのヘブライ人の信仰の箇条は 13 番目である。

ヨセフ族はマナセ族とエフライム族という 2 つの部族に分かれたので、イスラエルの 13 部族で、地上における約束の地カナンで収穫を分け合う最初のイスラエルの過越祭が行われた。

イスラエルの 13 部族のうちベニヤミンのベニヤミン族が断絶した。

ベニヤミンは、23 祖ヤコブの子のうち最も若かった。

食卓に 13 人いると、食卓の 13 人のうち最も若い人は早死にする運命である、という口伝の由来である。

マギは、いくつかの動物の肉を食べなかった。

また、マギは、血を食べなかった。

モーセは、いくつかの動物の肉と全ての動物の血を食べなかったマギの実践を戒めに高めた。

そのため、モーセの下では、血の中にある動物的な魂を食べる事は違法であった。

なぜなら、屠殺後も、凝固した腐敗した星の光の燐の様な代物として、動物的な魂は血の中に残る。

そして、凝固した腐敗した星の光の燐の様な代物である、動物的な魂は、多数の病気の病原菌に成り得る。

絞殺された動物の血は、消化し難く、脳卒中に成り易く、悪夢を見易い。

また、肉食動物の肉は、健康に悪い。

なぜなら、肉食動物の肉は、肉食という残忍な先天的な性質に結びついている。

また、肉食動物の肉は、凝固した腐敗した星の光の燐（リン）の様な代物である動物的な魂という腐敗と死をすでに取り込んでいる。

　テュロスのポルピュリオスは「動物の魂が肉体から乱暴に引き離された時、」と話している。

「動物の魂は、この世から去らない。

実に、肉体から乱暴に引き離されて死んだ人の魂の様に、肉体から乱暴に引き離されて死んだ動物の魂や人の魂は肉体の近くに残る。

肉体から乱暴に引き離されて死んだ動物の魂や人の魂は、共感によって、遠ざからないで、肉体の近くに残り続ける。

肉体から乱暴に引き離されて死んだ動物の魂や人の魂は、肉体のそばで嘆いているのが見られる。

肉体が埋葬されていない人の魂も、肉体のそばで嘆いているのが見られる。

悪人の霊の魔術師は、埋葬されていない死体の全部か一部を支配している限り、肉体が埋葬されていない人の魂を、強制的に従わせる事によって、踏みにじる事ができる。

肉体から乱暴に引き離されて死んだ、動物の魂についての神秘、動物の魂と肉体の共感、動物の魂が肉体に喜んで近づく事を知っている、神知学者は、異なる魂に汚染されない様に、いくつかの動物の肉の使用を正しく禁止している」

　さらに、アレクサンドリア学派の神秘学者テュロスのポルピュリオスは、「カラス、モグラ、タカの心臓を食べる事によって予言の力を獲得できる」と誤って話して、パラケルススのタリスマンの絵などの一部を除き偽の魔術書「Little Albert」の嘘の手順並みにまで陥っている。

テュロスのポルピュリオスは、誤った方向に進んで速やかに迷信に陥ったが、出発点は自然科学であった。

　動物の秘密の特性を表すために、古代人は「巨人との戦いの時代に、神々は隠れるために様々な動物の形を取り、その後の時代でも、神々は好きな時に動物の形を取る」と話している。

　月の処女の女神ディアナは、雌の狼（オオカミ）に変身した。

　太陽神は、牛、ライオン、竜、タカに変身した。

　ヘカテーは、馬、雌のライオン、雌の犬に変身した。

　何人かの神知学者によると、春の女神であり冥界の女王プロセルピナには、Pherebatesという名前が与えられていた。

　なぜなら、プロセルピナは、キジバトを食べて生きていた。

　女神マイアの女祭司は、キジバトを女神マイアにささげる習慣があった。

　女神マイアは、地上のプロセルピナである。

　女神マイアは、清らかで美しい女神ケレスの娘である。

　女神マイアは、人の義母、人の乳母である。

　エレウシスの秘伝伝授者は、野鳥ではない飼いならされた鳥、魚、豆、桃、リンゴを食べなかった。

　また、エレウシスの秘伝伝授者は、産褥中と月経中の女性と性交しなかった。

　とテュロスのポルピュリオスは話している。

　また、テュロスのポルピュリオスは「予見の知を学んだ人は、地上のものにとらわれている状態から解放されて自由に成って天の神々の間に場所を見つけるために、全ての種類の鳥を食べるなかれ、と知っている」と話している。

　ただし、テュロスのポルピュリオスは、理由を説明しなかった。

エウリピデスによると、クレタ島の主神ユピテルの秘儀の秘伝伝授者は、動物の肉を食べなかった。

　後記の様に、ミノス王への合唱の叙情詩で、クレタ島の主神ユピテルの秘儀の祭司は話している。

「フェニキアの都市テュロスの女性エウロペの息子、エウロペと大いなる主神ユピテルの子、全都市で有名な、クレタ島の王(、ミノス)よ。

私達は、短剣で作られたオークと糸杉で建てられた神殿を捨てて、あなた(ミノス王)の所に来た。

(ミノス王よ、)見てください、

私達は、清らかな生活を送って来た。

イディ山の主神ユピテルの祭司に成った時から、私は、酒神バッカスの信者の夜の宴に参加しないし、半生の肉を食べない。

(

イディ山はクレタ島の最も高い山である。

伝説ではイディ山の洞窟で主神ゼウスが生まれた。

イディ山は女神レアを祭る山である。

)

ただし、私は、ロウソクを神々の母である女神レアにささげる。

私は、白衣をまとった、女神レアの従者 Curetes の中の祭司である。

私は、人の幼子のゆりかごから遠く離れる。

また、私は、人の墓を避ける。

そして、私は、命の息吹によって動かされていた者(、動物の肉)を食べない」

魚肉は、燐(リン)が多いので、性欲を刺激する。

(肉、魚肉、牛乳、豆は燐、リンが多い。)

豆は、興奮させるので、放心状態の原因に成る。

変わった形式を含む、全ての形式の断食には、十中八九、迷信ではない、深い理由がある。

自然の調和に反する食べ物の組み合わせが、いくつか存在する。

出エジプト記 23 章 19 節でモーセは「子ヤギの肉を母ヤギの乳で煮るなかれ」と話している。

出エジプト記 23 章 19 節の「子ヤギの肉を母ヤギの乳で煮るなかれ」という命令は、例え話としては人の心に触れて感動させるし、衛生習慣としては賢明である。

古代ギリシャ人は、古代ローマ人の様に、同じほどではないが、予兆による予知を信じていた。

蛇が神聖な者へのささげ物を食べると、吉兆であった。

雷は、右で鳴るか左で鳴るかで、吉兆か凶兆に成った。

くしゃみの仕方による予知が存在した。

また、(腸のガスの排気といった)他の自然的な欠点的な生理現象からも未来を推測できた。

神メルクリウスへの聖歌でホメロスは、盗人の守護神メルクリウスが未だ幼子の時に神アポロンの牛を盗んだので、神アポロンは幼子の神メルクリウスをつかまえて盗みを自白させようと揺さぶった、と話している。

「神メルクリウスは、(腸のガスの排気という)変わった奇跡に気づいた。
神メルクリウスの荒れ狂う脇腹から(腸のガスの排気という)神託が聞こえた。
大いなる神アポロンまで神メルクリウスの(腸の)ガスは昇った」

古代ローマ人にとっては全てのものが予兆であった。

足に当たった石。

メンフクロウの鳴き声。

犬の吠える声。

壊れた瓶(ビン)。

自分を最初に見た老女。

全ての根拠が無い様に見える恐れの基盤に、予見の大いなる魔術の知が存在する。

予見の魔術の知は、予兆を無視しないどころか、大衆は見過ごしてしまう結果から一続きに繋がっている原因へ遡(さかのぼ)る。

例えば、犬を吠えさせる大気の感化は特定の病人には致命的である、と予見の魔術の知は教えてくれる。

例えば、カラスの集合と旋回は埋葬されていない死体の存在を意味する、と予見の魔術の知は教えてくれる。

犬の吠える声やカラスの集合と旋回は、常に、凶兆である。

カラスは、殺人現場や処刑現場を好む。

カラス以外の、ある鳥の飛び方によっては厳しい冬の予兆と成る。

また、別の、ある鳥の海上での悲しい鳴き声は嵐の到来の予兆と成る。

無知な大衆は、予見の魔術の知によって見分けられる予兆に気づいて(迷信として)広める。

予見の魔術の知を知る人は、有益な警告を至る所で見つける。

無知な大衆は、全てのものに対して苦悩しておびえる。

古代ローマ人は、夢についての大いなる観察者であった。

古代ローマ人による夢解きのわざは、命の光、星の光についての知である。

古代ローマ人による夢解きのわざは、星の光の方向と反射の理解である。

魔術という超越的な数学を知っている人は、星の光によって映像が存在する事を良く知っている。

魔術という超越的な数学を知っている人は、星の光の直接光、反射光、屈折光によって映像が存在する事を良く知っている。

魔術を知っている人は、星の光の光線の方向によって、折り返しの反射光を見つける方法を知っている。

魔術を知っている人は、正確な計算によって、常に、光源に辿(たど)り着いて、星の光の普遍の力や相対的な力を判断できる。

魔術を知っている人は、映像の正しさや奇形の原因として、肉眼といった外的な肉体の視覚機構や想像力という魂の目による内的な精神的な視覚機構の健康状態を考慮に入れる。

魔術を知っている人にとって、夢は完全な啓示である。

なぜなら、夢は、人が眠りと呼んでいる夜間の死における、魂の不死性に似ている。

夢を見ている状態では、人は、善悪を意識せず、時空を意識せず、星の光という普遍の命を共有する。

夢の中で人は、木々を飛び越え、水上で踊り、牢獄に息を吹きかけて崩壊させる。

または、健康状態や良心の状態によっては、夢の中で人は、重く、悲しく、追われ、完全に縛られる。

夢の全てのものは、観察するべき有益なものである。

疑い無く、実に、何も知らず学ぼうとも思わない人が何を夢から推測できるか？

古代の賢者は、魂を高めて感覚を統治させる調和の全ての力強い作用を良く知っていた。

しかし、古代の賢者が和らげ静めるために応用した物を、誘惑者である悪人の霊の魔術師は、興奮させたり酩酊させたりするために悪用した。

古代ローマとテッサリアの魔女は、意味不明な魔法の言葉によって月を天空から引きずり降ろせる、意味不明な魔法の言葉を唱えると月が血を流して青白く成りながら地に堕ちる、と誤って思い込んだ。

古代ローマとテッサリアの魔女は、意味不明な魔法の言葉を単調に唱えた。

古代ローマとテッサリアの魔女は、魔法陣の輪の周りを歩き周り、催眠状態に成り、興奮して、怒りや忘我状態や強硬症カタレプシーに至った。

古代ローマとテッサリアの魔女は、意識が覚醒した状態で、夢の中に落ちた。

夢の中で古代ローマとテッサリアの魔女は、墓が開き、悪人の霊の群れによる雲が大気を曇らせ、月が天から地に堕ちたのを見た。

星の光は、地の生きている魂である。

星の光は、地上の生きている魂である。

星の光は、物質的な魂、死に至る魂である。

つり合いの永遠の法が、星の光による生成や運動を制御する。

星の光は、全ての肉体を包囲し、全ての肉体に浸透している。

星の光は、重い肉体を浮遊させて強力な吸引の中心の周りに回転させる事ができる。

調査は不十分ではあるが、肉体の浮遊現象は、19 世紀でも再現されて、星の光の理論の正しさを証明している。

誘惑者である悪人の霊の魔術師が自身を中心に引き起こす魔術的な渦は、星の光の自然の法が原因である。

星の光の自然の法は、ある爬虫類が鳥を縛る事を説明する。

星の光の自然の法は、陰気で引っ込み思案の人が神経質な人を魅了する事を説明する。

　一般的に、霊媒者は、心の内面に虚無の空間が開いている病的な人間で、深淵が水を渦巻き状に引き寄せる様に、星の光を引き寄せる。

　霊媒者による星の光の流れは、重い肉体を藁（わら）の様に持ち上げて流れに運び去る事ができる。

　霊媒者は、陰気で心のつり合いを失い乱れている。

　霊媒者の流体の体、霊媒者の星の体は、不定形である。

　霊媒者は、引力を及ぼす事ができ、補助腕、幻の手を大気中に伸ばせる。

　有名な霊媒師ホームが近くに胴体が無い幻の手を出現させている時、ホームの肉体の手は死んで冷たく硬直していた。

　霊媒者は、死が目に見える形で命と戦っている驚くべき存在である、と言えるかもしれない。

　誘惑者である悪人の霊の魔術師、占い師、邪視者、呪いの言葉を口にする者も、死が目に見える形で命と戦っている人である、と言えるかもしれない。

　霊媒者、誘惑者である悪人の霊の魔術師、占い師、邪視者、呪いの言葉を口にする者は、自覚していても無自覚でも、吸血鬼である。

　霊媒者、誘惑者である悪人の霊の魔術師、占い師、邪視者、呪いの言葉を口にする者は、吸血鬼で、自身に不足している命を吸い取って星の光のつり合いを乱す。

　自覚が有って意識的に命を吸い取って星の光のつり合いを乱している場合は、霊媒者、誘惑者である悪人の霊の魔術師、占い師、邪視者、呪いの言葉を口にする者は、罰されるべき犯罪者である。

無自覚で無意識に命を吸い取って星の光のつり合いを乱している場合でも、霊媒者、誘惑者である悪人の霊の魔術師、占い師、邪視者、呪いの言葉を口にする者は、最悪な危険人物である。

　霊媒者、誘惑者である悪人の霊の魔術師、占い師、邪視者、呪いの言葉を口にする者から、虚弱な神経質な人は用心して離れるべきである。

　後記の様に、師プロティノスの生涯の伝記でテュロスのポルピュリオスは話している。

「哲学者を自称する者の中に、例のオリュンピウスがいた。

オリュンピウスは、アレクサンドリアの人であった。

オリュンピウスは、一時、アンモニオス サッカスの弟子であった。

オリュンピウスは、名声においてプロティノスを超えたいという野心があって、プロティノスを見下す言動をした。

また、オリュンピウスは、プロティノスの名声を損なおうと魔術の儀式で呪った。

しかし、呪いの反作用だけがオリュンピウス自身にのみ降りかかったので、プロティノスの魂は敵の悪意による呪いを敵に返すのだから大いなる力を持つ魂の１つであるに違いない、とオリュンピウスは友人に認めざるを得なかった。

プロティノスは、オリュンピウスの敵意による呪いに気づいていた。

そのため、プロティノスは『今オリュンピウスがけいれんしている』と突然話す事があった。

オリュンピウスの呪いがプロティノスにはね返される事がくり返された。

オリュンピウスは、プロティノスを苦しめようとした呪いという悪行によって、オリュンピウス自身が苦しめられる羽目に成ったので、プロティノスを呪う事をやめた」

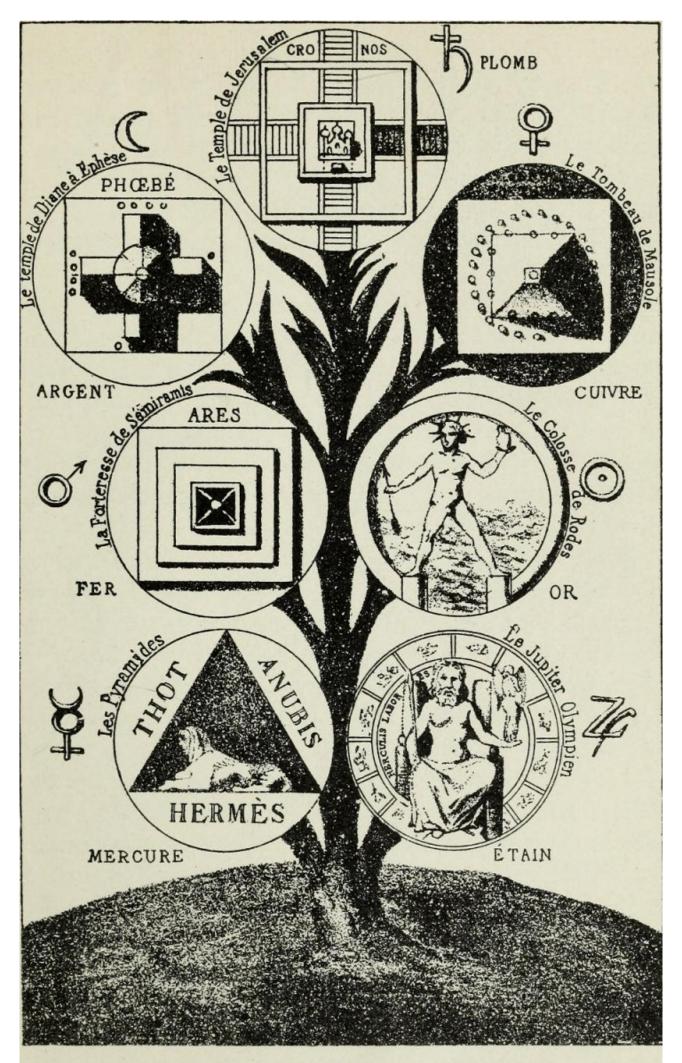
つり合いは、命の光、星の光の大いなる法である。

呪いを強力に放射して、呪いをかけた人より心のつり合いが取れている呪われた人にはね返されると、呪いは呪いをかけた人自身に呪った時の激しさのまま返って来る。

星の光という自然の力を呪いなどに悪用する人には災いが有る!

なぜなら、自然は正しい。

そのため、自然の反作用は恐ろしい。

自然の反作用は畏敬するべきである。

THE SEVEN WONDERS OF THE WORLD

第2巻 第7章 魔術の記念建造物

魔術の歴史 第1巻 第4章で、古代エジプトはpantacleであった、と話した。

そして、同様に、全体的に、古代の世界はpantacleであった、と言えるかもしれない。

大いなる秘儀祭司は、絶対の知を苦心して隠そうとするにつれて段々と、絶対の知の象徴を増殖して広めようとした。

正方形の基礎を持つ三角形である、ピラミッドは、自然の知に基づいた形而上学を表す。

自然の知の象徴による鍵は、不思議なスフィンクスの巨人的な形を取った。

スフィンクスは、ピラミッドの足下で何年も寝ずの番をして、砂の中に深く埋もれていた。

「世界の七不思議」と呼ばれている7つの大いなる記念建造物は、ピラミッドとテーバイの7つの神秘的な門についての高尚な注釈であった。

ロードス島には太陽神ヘリオスまたは光の神アポロンの巨像というpantacleがあった。

ロードス島では、光と真理の神アポロンを、黄金をまとった人の形で表した。

光の神アポロンの巨像は、知の光を右手にかかげ、自発的な行動の矢を左手にかかげていた。

光の神アポロンの巨像は、両脚をそれぞれ2つの防波堤の上に固定していて、必然と自由、自発性と受容性、固定されたものと気化し易いもの、という自然の永遠につり合わせている2つの力を表す。

要約すると、光の神アポロンの巨像は、両脚をそれぞれ2つの防波堤の上に固定していて、「ヘラクレスの柱」という2つの柱に相当する。

エフェソスには、女性の汎神である月の女神ディアナの神殿、月の女神アルテミスの神殿という pantacle があった。

月の女神アルテミスの神殿は、世界に似た形に造られた。

月の女神アルテミスの神殿は、アキレスの盾に似ている正方形の美術品の陳列室と円形の境内（けいだい）を持つ、十字を載せている半球形の建造物であった。

マウソロス霊廟は、貞淑と結婚の女神ウェヌスまたは金星の pantacle であった。

マウソロス霊廟の形は、正方形の高台と円形の境内を持つ、男性器であった。

マウソロス霊廟は、正方形の高台の中心にそびえた、十字を形成する様に４頭の馬をつないだ戦車に乗った、頂点を平面で切ったピラミッドであった。

ピラミッドは、ヘルメスまたはメルクリウスまたは水星の pantacle であった。

オリュンピアのユピテル像、オリュンピアのゼウス像は、木星の神ゼウスの pantacle であった。

「バビロンの城壁」と女王セミラミスの砦である「バビロンの空中庭園」という２つの「世界の七不思議」は、戦神マルスまたは火星の pantacle であった。

究極的に、ソロモンのエルサレム神殿は、「世界の七不思議」の全てに取って代わる運命である普遍の絶対の pantacle で、キリスト教世界にとっては土星の畏敬するべき pantacle であった。

秘伝伝授の哲学の７つ１組は、古代人の考えによると、３つの絶対の原理に要約できる。

３つの絶対の原理は、唯一の原理にまとめる事ができる。

そのため、四大元素の形は唯一の形にまとめる事ができ、四大元素の形全体は概念と形で出来た統一体に成る。

後記が、３つの原理である。

(1)

「存在は存在である」

「存在は存在する」

「存在性は存在性である」

「ある存在は別の存在と存在性が同じである」

「ある存在と別の存在は存在するという意味で同じである」

「神は存在する」

哲学においては、「存在は存在である」は、「概念と存在するものは同じである」事、「概念と真理は同じである」事を意味する。

宗教においては、「神は存在する」は、第一原理である父である神である。

(2)

「存在は現実である」

哲学においては、「存在は現実である」は、「知と存在するものは同じである」事、「知と現実は同じである」事を意味する。

宗教においては、「存在は現実である」は、プラトンの神の言葉ロゴス、世界の創造者デミウルゴス、神の言葉イエスである。

(3)

「存在は論理的である」

哲学においては、「存在は論理的である」は、「論理と現実が同じである」事を意味する。

宗教においては、「存在は論理的である」は、神意または神の作用、キリスト教で神の聖霊と呼ばれている真と善の相互の愛である。

神の作用によって、善は実現される。

四大元素の形は、2 つの基礎の法の表れである。

2 つの基礎の法は、抵抗と運動である。

2 つの基礎の法は、固定と抵抗する慣性である。

2 つの基礎の法は、自発的な命と気化し易いものである。

より一般的な言葉で言い換えると、2 つの基礎の法は、物質と精神である。

物質は、受容的な肯定が明確に話す、無である。

精神は、正しい真であるものにおける、絶対の必然の原理である。

物質的な無による精神に対する否定の作用は、いけない原理と呼ばれている。

創造と光で物質的な無を満たす、精神による物質的な無に対する肯定の作用は、善の原理と呼ばれている。

人性が、いけない原理という概念に対応している。

物質的な生成によって無と言える罪を宿す人の罪をつぐなって救う論理的な命が、善の原理という概念に対応している。

前記が、秘密の秘伝伝授の考えである。

前記が、キリスト教の精神が復活させた、キリスト教の輝きが明かしている、キリスト教の考えが神の力で確立している、キリスト教の象徴が実現している、見事な総合である。

保存するためのヴェールの下に、キリスト教の総合は姿を隠している。

原初の美しさのまま、母的な豊かさのまま、人はキリスト教の総合を取り戻す運命である。

第 3 巻 キリスト教の啓示による神聖な統合と魔術の実現

ギメル

第3巻 第1章 ユダヤ教徒によるイエス キリストへの魔術についての非難

ヨハネによる福音1章14節の「神の言葉イエスは人に成った」という言葉を、カトリック教会はひざまずいて話さずにはいられない。

ヨハネによる福音1章14節の「神の言葉イエスは人に成った」という言葉は、キリスト教の十分な啓示を成している。

また、使徒ヨハネは、正統な教えの基準を与えている。

正統な教えの基準とは、「イエス キリストは、人に成って、あらわれた」という信仰告白である。

言い換えると、「イエス キリストは、目に見える形で、人の実体で、あらわれた」。

エゼキエル書で、エゼキエルは、幻視において、秘伝の知のpantacleと象徴を描いた後に、

車輪の中で回転する車輪を表した後に、

全ての天球を見ている無数の生きている目を描いた後に、

4つの神秘の生きている生き物の羽ばたく翼を並べた後に、

エゼキエル書37章で、古代の預言者の中で最も学が深いカバリストである、エゼキエルは、枯れた骨が散っている平野だけを見た。

エゼキエル書37章で、エゼキエルの言葉は、枯れた骨を肉で覆って、形を復元させた。

しかし、悲しい美しさが、枯れた骨という死の残骸を覆っている。

実に、悲しい美しさは、冷たく活気が無かった。

天から思いやりの息吹が降臨した時、古代の世界の教えと神話は、美しいが冷たく活気が無い悲しい物であった。

天から思いやりの息吹が降臨すると、死んでいた形は復活した。

哲学の死霊は、真の知の人に場所を譲った。

神の言葉イエスは、人に成った。

そして、人に成った神の言葉イエスは、生きている。

もはや抽象概念の時ではなく実体の時に成った。

行動によって証明されている信心が、架空の話に終わるだけであった仮説に取って代わった。

魔術は、神性と成った。

不思議は、奇跡と成った。

古代の秘伝伝授から除外されていた、大衆は徳の王者と祭司に成る様に求められている。

実現は、キリスト教の神髄である。

キリスト教は、明らかな例え話すら具体的に実現する。

マタイによる福音 19 章の象徴的な実話の金持ちの青年の家が未だにエルサレムで見つかる。

用心して探求すれば、マタイによる福音 25 章の例え話の 5 人の愚かな処女のうち 1 人が所有していたランプが見つかるかもしれない。

聖書の例え話を無邪気に軽信する事は、基本的に、あまり危険ではない。

実に、軽信者は、キリスト教の信心の生きている力や実現する力を証明しているに過ぎない。

ユダヤ教徒は、キリスト教が信心を物質化したり地上の俗世のものを理想化したりしたと誤って非難した。

高等魔術の教理 第 12 章で話したユダヤ教の聖職者による Sepher Toldos Jeschu の注釈の恥ずべき例え話は、キリスト教が信心を物質化したり地上の俗世のものを理想化したりしたという誤った非難を支持するために、ねつ造された。

ユダヤ教の聖職者による、Sepher Toldos Jeschu の注釈の例え話に関連して、タルムードには、離縁された女の息子イエス ben Sabta が、エジプトで汚れた神秘を学び、イスラエルで偽の石を建て、大衆を偶像崇拝に導いた、というイエス キリストを誹謗中傷している話が記されている。

それにもかかわらず、タルムードでは、ユダヤ教の聖職者がイエス キリストを「諸手を挙げて呪った」事は誤りであると認めている。

「諸手を挙げて呪うなかれ。許して祝福するために、諸手のうち 1 つの手を常に自由にしておくために」というキリスト教世界とイスラエルを結ぶ運命である美しい戒めがタルムードには存在する。

事実、ユダヤ教の聖職者は、平和をもたらしている主イエスに対して不正を働く罪を犯した。

イエスは、既成の位階制に従う様に弟子にすすめた。

マタイによる福音 23 章で救い主イエスは「ユダヤ教の聖職者はモーセの座にいる。そのため、ユダヤ教の聖職者の(口先だけの)言葉には従いなさい。しかし、ユダヤ教の聖職者の(悪い)行いを真似るなかれ」と話している。

ルカによる福音 17 章で、イエスは、体をユダヤ教の聖職者へ見せる様に 10 人の皮膚病の病人に命令して、道の途中で 10 人の病人の病気を治した。

奇跡の名誉を最低の敵に譲るとは、奇跡という神の御業における名誉を得る権利の放棄は何と心に触れて感動する事か！

後は、イエス キリストが偽の基礎の石を建てたと誤って非難するユダヤ教の聖職者は、真の基礎の石を知っていたのか？

パリサイ人の時代のユダヤ教徒は、「基礎の石」、「立方体の石」、「賢者の石」、「特にピラミッドの様に基礎が正方形である三角形であるカバラの神殿の基礎の石」の知を失っていたのではないか？　パリサイ人の時代のユダヤ教徒は、「基礎の石」、「立方体の石」、「賢者の石」、「特にピラミッドの様に基礎が正方形である三角形であるカバラの神殿の基礎の石」の知を失っていた！

イエスが変革者であると非難する事によって、パリサイ人の時代のユダヤ教徒は古代の知を忘却していた事を物語ってしまったのではないか？　イエスが変革者であると非難する事によって、パリサイ人の時代のユダヤ教徒は古代の知を忘却していた事を物語ってしまった！

アブラハムが見て喜んだ光は、モーセの不信心な子孫であるユダヤ教徒にとっては消失したのではないか？　アブラハムが見て喜んだ光は、モーセの不信心な子孫であるユダヤ教徒にとっては消失した！

イエスは、アブラハムが見て喜んだ光を復活させて新しい輝きで輝かせたのではないか？　イエスは、アブラハムが見て喜んだ光を復活させて新しい輝きで輝かせた！

イエスがカバラというアブラハムからの古代の知を復活させた事を深く確信するには、福音書とヨハネの黙示録を「形成の書」と「光輝の書」の神秘の教えと比べる必要が有る。

福音書とヨハネの黙示録を「形成の書」と「光輝の書」と比べると、キリスト教は、イスラエルの異端ではなく、ヘブライ人の真の正統な口伝による教えである、と理解するであろう。

一方、律法学者とパリサイ人は党派心の強い者どもであった。

さらに、世界全体の同意によって、イスラエルにおける聖職者による支配の廃止と供え物の継続の廃止によって、キリスト教の正統性は証明されている。

祭司による支配と供え物の継続は、真の宗教の２つの議論の余地が無い特徴である。

　神殿が無い、大祭司のいない、供え物が無い、ユダヤ教は、反体制派の信仰として残存しているに過ぎない。

　何人かは未だにユダヤ教徒のままであるが、神殿と祭壇はキリスト教の物と成った。

　外典の福音書には、キリスト教への確信の基準と成る、美しい説明的な例え話が存在する。

　キリスト教の根拠と特徴は、実現の確信である。

「幼子が泥で鳥を造って遊んでいた。
幼子の中には幼子のイエスがいた。
幼子は泥の鳥という自身の作品を自画自賛した。
しかし、イエスだけが泥の鳥という自身の作品を自画自賛しなかった。
ただし、イエスだけは、泥をこねて鳥を造ると、手をたたき、飛びたつ様に泥の鳥に話した。
すると、イエスの泥の鳥だけが飛びたった」

　(思いやりという)キリスト教の社会制度は、古代の世界の社会制度を超越して見せた。

　古代の世界は死んだが、キリスト教は生きている。

　原初からの口伝と言えるカバラの完全に実現された生きている表現としてのキリスト教は、未だ知られていない。

そのため、ヨハネの黙示録というカバラの預言者の書は、未だ説明されないままである。

カバラの鍵無しではヨハネの黙示録は理解不能である。

長い間、使徒ヨハネの弟子達が、ヨハネの黙示録の解釈の口伝を保存してきた。

しかし、偽のグノーシス主義があらわれて、全てのものを混乱させて失わせてしまった。

後で明らかにするつもりである。

使徒行伝 19 章 19 節で使徒パウロはエフェソスの大衆が不思議な事を扱っている本を集めて全て焼き捨てるのを止めなかった。

使徒行伝 19 章 19 節の本は、疑い無く、古代のゴエティア、古代の悪人の霊の魔術の魔術書、または、降霊術の魔術書である。

使徒行伝 19 章 19 節の魔術書の焼失は、間違い無く、残念である。

なぜなら、誤りの記憶が、何らかの真理の光線を輝かせる可能性が有る。

また、知にとって価値を示すであろう情報が得られた可能性が有る。

イエス キリストが降臨して全ての場所で神託が沈黙した事と、(イエスが死んだ時に、プルタルコスによると、)「大いなる神パーンが死んだ」と叫ぶ声が海上で聞こえた事が、一般に知られている。

前記に、怒った、ある異教徒の作家は「神託は止んでいない。ただ、やがて、神託を聞く人がいなく成ってしまっただけである」と話した。

訂正は大切である。

なぜなら、前記の様な、正当化の試みは、事実無根の誹謗中傷より、決定的である。

奇跡についても同様の事が言える。

真の奇跡の前では、偽の奇跡は軽蔑されて無視されるにまで落ちぶれる。

事実として、自然の高位の法が真の心の超越性に従うと、奇跡をもたらす徳の様に、奇跡は超自然的に成る。

奇跡をもたらす徳は超自然的であるという理論は神の力を損なわない。

また、事実として、キリスト教徒にとっては、神の思いやりという超越的な光に従う星の光は、天の女王に降伏して天の女王の足下に頭を置く古い蛇の例えで実際に表される。

第3巻 第2章 魔術におけるキリスト教についての証言

魔術は、普遍のつり合いの知である。

魔術には、絶対の原理として、存在の真理、存在の現実、存在の論理がある。

魔術は、全ての正反対に見えるものを説明する。

魔術は、全ての統合を生成する「類推可能性は2つの正反対のものの一致をもたらす」という原理によって、対立している全ての現実を一致させる。

魔術の知の秘伝伝授者にとっては神の教えである宗教は疑う余地の無い確実な物である。

なぜなら、神の教えである宗教は存在する。

そして、人は存在するものを否定できない。

「存在は存在である」

「存在は存在する」

「存在性は存在性である」

「ある存在は別の存在と存在性が同じである」

「ある存在と別の存在は存在するという意味で同じである」

「神は存在する」

出エジプト記3章14節で אהיה אשר אהיה、AHIH AShR AHIH、エヘイエ アシェル エヘイエと神はモーセにヘブライ語で名乗った。

出エジプト記３章14節で神は「私は存在する。だから、何ものかである、私、神が存在する」、「私は存在したい様に存在する者である」、「私は存在の中の存在である」、「私は本物の存在である」、「私は幻ではない存在である」とモーセに名乗った。

宗教と論理が正反対に見えるのは、一方を他方とは異なる領域に確立して、一方の弱みを他方の強みで実らせて、宗教と論理の支えに成っている。

「類推可能性は２つの正反対のものの一致をもたらす」と話した様に、「対応は２つの正反対のものの一致をもたらす」。

全ての宗教的な誤りと混乱の原因は、「類推可能性は２つの正反対のものの一致をもたらす」という大いなる法への無知にある。

無知な人は、宗教を哲学にしようと試みたり、哲学を宗教にしようと試みたりした。

信心のものを知のものに従わせる事と、知を信心に盲目的に従わせる事は、同じくらい、有り得ない。

数学的な矛盾の肯定や数学の定理の証明の否定は神学者の管轄ではない、のと同様に、学問の名前による教えの神秘への反対や維持は学者の管轄ではない。

唯一神の中に３つの人格が存在するのは数学的に正しいかどうか、また、聖母マリアの処女懐胎を生理学に基づいて証明できるかどうか、科学の学会に質問しても、科学の学会は、宗教のものについての判断を辞退する。

科学の学会が宗教のものについての判断を辞退するのは、正しい。

学問には宗教のものについて判断する資格が無い。

なぜなら、宗教のものについての事柄は、信心の領域に属する。

信仰箇条は、信じるか、信じないか、の問題である。

実に、信じても、信じなくても、信仰箇条は考察の問題ではない。

厳密には、信仰箇条は信仰の問題である。

なぜなら、信仰箇条は、科学では調査できない。

ジョゼフド メーストルは、「人は、不思議についての 18 世紀の愚かな言動について笑いものにして話すであろう」と話している時に、疑い無く、知識人のふりをした大衆について話している。

知識人のふりをした大衆は「科学的に証明されたら、神の教えが正しい事を信じるつもりである」と日常的に話している。

「科学的に証明されたら、神の教えが正しい事を信じるつもりである」と話す事は、「信じるものが無く成ったら、信じるつもりである」と話す事に等しい。

科学的に証明できる程度の神の教えは、神の教えではない。

「科学的に証明されたら、神の教えが正しい事を信じるつもりである」と話す事は、「無限が説明され測定され制限され限定されたら、言い換えると、無限が有限に成ったら、無限を信じるつもりである」と話す事である。

「科学的に証明されたら、神の教えが正しい事を信じるつもりである」と話す事は、「無限が存在しないと完全に確信したら、無限を信じるつもりである」と話す事である。

「科学的に証明されたら、神の教えが正しい事を信じるつもりである」と話す事は、「海が瓶(ビン)に入るのを見たら、海の広大さを認めるつもりである」と話す事である。

しかし、それでは、同胞よ、証明されて理解できたものは、知っているものであり、信じる対象には成れない。

また、法王が「2 + 2 = 4 は成立しない」とか「ピタゴラスの定理は成立しない」と誤って決定したと聞いたら、「法王が数学の定理を決定したはずが無い。なぜなら、法王には数学の定理を決定する資格が無い。法王は、数学の定理とは無縁で、数学の定理に干渉できない」と答えるのは正しい。

ここで、ルソーの弟子は「『法王には数学の定理を決定する資格が無い』という話はとても良い。しかし、教会は数学とは正反対に見える物事を信じる様に求める」と抗議して叫ぶであろう。

ルソーは「数学的な学問では『全体は部分より大きい』と教わる。それにもかかわらず、イエス キリストが弟子と交流した時に、イエスは、自分の全身を自分の手の中に収容して、自分の口の中に自分の頭を入れる必要が有った」という劣悪な冗談を思い浮かべて本に記している。

「詭弁家ルソーは、知と信心を混同し、自然の秩序と超自然の神の秩序を混同している」と簡単に答えられる。

仮に、宗教が「聖体による交流において、救い主イエスは形と大きさが同じである2つの自然の肉体を持っていて、一方の肉体が他方の肉体を食べた」と主張したら、科学には抗議する資格が有るであろう。

しかし、キリスト教は「一かけらのパンという自然の象徴または外見の下に、主イエスの肉は神の力によって霊的に籠(こ)められている」と定めている。

再び話すと、信仰箇条は、信じるか、信じないか、の問題である。

信仰箇条について科学的に考察する人は、愚者である。

科学では正確な実証が正しさを証明する。

宗教では信心の一致と行動の清らかさが正しさを証明する。

マタイによる福音9章に、「寝床を担いで歩きなさい」と中風の者に言える人には罪を許す全権がある、と記されている事を思い出す。

宗教が徳を完全に実現している時は、宗教は正しい。

行動は、信心の証拠と成る。

「キリスト教は、位階制が原理である、従順が規則である、思いやりが法である人々による巨人的な教会を形成したか？」と学問に質問するのは許される。

歴史資料に基づいて、もし学問が「キリスト教は、位階制が原理である、従順が規則である人々による巨人的な教会を形成した。しかし、キリスト教会には思いやりが不足していた」と答えたら、言葉尻を捕らえて「『思いやりが不足していた』と認めているから、思いやりという物の存在は認めますね」と持ち出す。

「思いやり」は、大いなる言葉である、と共に、大いなる物である。

「思いやり」は、キリスト教より前には存在しなかった言葉である。

「思いやり」が意味する物は、宗教の総量である。

思いやりの精神は、地上の目に見える形に成った神の精神ではないか？　思いやりの精神は、地上の目に見える形に成った神の精神である！

思いやりの精神は、行動、法、記念建造物、不滅の結果によって、神の精神を感じられる存在として表したのではないか？　思いやりの精神は、行動、法、記念建造物、不滅の結果によって、神の精神を感じられる存在として表した！

簡潔に話すと、無神論者でも、誠実な人は、ヴァンサンド ポールによる「思いやりの娘達」の貧しい人への奉仕を見て、ひざまずき祈りたいと思うはずである。

実に、思いやりの精神は神である。

思いやりは、魂の不死性である。

思いやりは、位階制、従順、傷害や無礼への許し、信心の単一性と統一性である。

党派、分派、宗派は根元が死に侵されている。

なぜなら、党派、分派、宗派は分裂によって思いやりが欠ける事に成る。

また、党派、分派、宗派は信心について考察を試みる事によって簡単な良識にすら欠ける事に成る。

党派、分派、宗派の考えは非論理的である。

なぜなら、党派、分派、宗派の考えは似非論理である。

そのため、党派、分派、宗派の考えは、数学的な定理、というよりは、存在しない何ものかである。

コリント人への第２の手紙３章６節に「文字は殺すが、霊は生かす」と記されている事は知られている。

しかし、コリント人への第２の手紙３章６節の「文字は殺すが、霊は生かす」の生かす霊、生かす精神が思いやりの精神でなければ、何であろうか？　コリント人への第２の手紙３章６節の「文字は殺すが、霊は生かす」の生かす霊、生かす精神は思いやりの精神である！

コリント人への第１の手紙13章で使徒パウロは「山々を動かし殉教に耐える信心、全ての物を与える気前の良さ、人々の異言と天使達の異言を話す雄弁といった全ての物は思いやり無しでは無価値である」と話している。

さらに、コリント人への第１の手紙13章で使徒パウロは「知識は廃れ預言は止むかもしれないが、思いやりは永遠である」と話している。

思いやりと思いやりによる行いの中に、宗教の現実は存在する。

真の理性は、現実を否定しない。

なぜなら、現実は、真理である存在の実証である。

現実において、哲学は、宗教を侵害しないで、宗教に手をさしのべる。

現実において、宗教は、哲学を侵害しないで、哲学を祝福し、哲学に希望を与え、思いやりという輝きで哲学を照らして啓蒙する。

古代ギリシャの秘伝伝授者の夢の理想によると、思いやりは、エロスとアンテロスを一致させるはずである神秘の絆である。

思いやりは、ソロモンのエルサレム神殿の正門の２つの柱ボアズとヤキンを一致させるために上に載っている石である。

思いやりは、権利と義務の共通の保証である。

力と自由の。

強いものと弱いものの。

国民と統治の。

男性と女性の。

思いやりは、人の知における、命に必要な、神の感情である。

思いやりは、善における絶対である。

存在、現実、論理という三重の原理が正しさにおける絶対である様に。

前記は、マタイによる福音 2 章で 3 人のマギが飼葉桶の救い主イエスを敬礼した、美しい象徴的な実話を正しく解釈するために必要な説明である。

3 人のマギは、白人、黒人、褐色人種の王者である。

(3 人のマギは人の代表である。)

3 人のマギは、金、乳香、没薬をイエスにささげた。

前記の、3 人のマギと 3 つのささげ物という二重の 3 つ 1 組(による六芒星)は、正反対のものの一致を表す。

事実として、マギが予期したキリストの教えは、マギの秘密の教えが至るべき結果であった。

しかし、キリスト教は、古代のイスラエルのベニヤミンであった。

ベニヤミンは、誕生によって、母の死の原因に成ってしまった。

大いなる実現者イエス、大いなる成就者イエスの降臨によって、光の魔術、真のゾロアスターの魔術、メルキゼデクの魔術、アブラハムの魔術は目的を到達した。

そのため、奇跡に満ちた世界では、些細な奇跡は不祥事に過ぎなく成ってしまった。

そして、魔術の正統な教えは、神の教えの正統な教えに変身した。

異端者は、秘密結社や悪人の霊の魔術師に成るしかなく成った。

魔術という名前は、悪い意味にしか解釈されなく成った。

魔術への抑圧の下で、幾世紀を通じて、あらわれた魔術を辿ろう。

教会の口伝では最初の大異端者は、使徒行伝 8 章の「魔術師シモン」である。

「魔術師シモン」の口伝は、多数の驚異を含んでいる。

「魔術師シモン」の口伝は、テーマの一部を成す。

「魔術師シモン」の多数の口伝から共通部分を分別しよう。

「魔術師シモン」は国籍的にはヘブライ人である。

「魔術師シモン」はサマリア人の街 Gitton で生まれた、と信じられている。

「魔術師シモン」の魔術の師は、ドシセオスという名前のサマリア教の一宗派の指導者である。

ドシセオスは「私ドシセオスは、預言者達が予告していた、神が派遣した救い主である」という嘘を話していた。

ドシセオスの教えの下、「魔術師シモン」は、幻覚を見せる技だけではなく、真にマギの口伝の物である、いくつかの自然の秘密を学んだ。

「魔術師シモン」は、星の火の知、星の光の知を所有していた。

「魔術師シモン」は、星の光の大きな流れを引き寄せる事ができた。

「魔術師シモン」は、星の光の流れを引き寄せて、肉体の痛覚を麻痺させ、肉体を燃え難くさせた。

また、「魔術師シモン」は、星の光の流れを引き寄せて、空中浮揚する力を持っていた。

例えば、サン メダールのけいれん者の様な星の光に酩酊した狂信者は、知無しで、いわゆる運任せで、星の光の引き寄せによる痛覚麻痺や空中浮揚といった離れ業を見せる場合がある。

19 世紀では、降霊術中の霊媒者が、星の光の引き寄せによる痛覚麻痺や空中浮揚といった現象を見せる場合がある。

「魔術師シモン」は、遠隔から信者に催眠をかけて様々な姿を見せた。

「魔術師シモン」は、映像と目に見える反映を作り出せた。

例えば、ある時、大衆は、荒野で幻の木々を見られた、と思い込んだ。

さらに、「魔術師シモン」の近くでは、無生物が動いた。

19 世紀では、アメリカ人の霊媒師ホームのまとう空気の中で家具が動く様に。

そして、「魔術師シモン」が家を出入りしようとすると、ドアがきしんで震えて独りでに開いた。

「魔術師シモン」は、サマリア人の長などの前で些細な奇跡を起こした。

やがて、「魔術師シモン」の現実の実現は誇張された。

「魔術師シモン」は、神の様な存在として通った。

「魔術師シモン」の力は、理性が乱れた興奮状態のおかげであった。

「魔術師シモン」は、自分が特別な存在であると思い込む様に成って、神聖な者への名誉を奪うのをためらわなく成り、全ての人々からの敬礼を奪う事をひそかに夢見た。

「魔術師シモン」の恐慌状態や忘我状態は、驚くべき肉体的な結果をもたらした。

「魔術師シモン」は、ある時は、死にそうな老人の様に、青白くしわくちゃに成り衰弱した。

また、「魔術師シモン」は、ある時は、光の流体、星の光が血に活気を与えて、目が輝き、肌が滑らかに柔らかく成って、急に復活した様に生まれ変わった様に見えた。

東の大衆には、奇跡を誇張する大いなる才能が有る。

東の大衆は、「魔術師シモン」が思い通りに幼子から老人に成ったり老人から幼子へ戻ったのを見たという嘘を話した。

「魔術師シモン」の奇跡の噂は至る所へ広まった。

ついに、「魔術師シモン」は、ヘブライ人のサマリアだけではなく近隣諸国の偶像に成った。

しかし、一般的に、不思議への心酔者は、新しい感動に飢えている。

また、不思議への心酔者は、最初は驚いた事にも飽（あ）きる。

使徒フィリポとは別人である、最初の伝道者である聖人フィリポは、福音を伝えるために、サマリアを訪れた。

キリスト教という熱狂の新しい流れがサマリアで始まった。

結果として、「魔術師シモン」は名声を全て失った。

「魔術師シモン」は、力を失ったと誤って思い込んだので、異常な興奮状態が止んだ事に気づいた。

「魔術師シモン」は、自分より、学の有る魔術師達に追い抜かれた、と思い込んだ。

「魔術師シモン」は、使徒達につきまとって使徒達の秘密を学ぶか暴くか金銭で買おう、という策を取った。

「魔術師シモン」は、超越的な魔術の秘伝伝授者では確実にない。

自然の秘密の力を自身が破壊される事無く傾けたい人には、知と神性が絶対に必要である、と超越的な魔術は教えるはずである。

自然の秘密の力という畏敬するべき武器で戯れる事は、愚者のする事である、と超越的な魔術は教えるはずである。

自然の聖所を冒涜する人には恐ろしい急死が待っている、と超越的な魔術は教えるはずである。

「魔術師シモン」は、酩酊者が感じる渇きの様な、抑えられない渇きに苦しんだ。

「魔術師シモン」は、忘我状態が止むと、全ての幸福を失った様に感じた。

「魔術師シモン」は、過去の過度な酩酊によって病気に成ると、新たな酩酊によって健康を回復しようと考えた。

人は、自分が神であると気取った後では、卑しい死ぬべき人間の状態に望んでは戻らない。

失った物を取り戻すために、「魔術師シモン」は、使徒の禁欲の厳しさに甘んじて苦しんだ。

「魔術師シモン」は、徹夜し、祈り、断食したが、奇跡を起こす力は戻らなかった。

「魔術師シモン」は、ヘブライ人同士なら分かり合えると考えて、使徒行伝 8 章で使徒ペトロに金銭を提案(して「力」を買おうと)した。

使徒の頭ペトロは、「魔術師シモン」を叱って追い払った。

「魔術師シモン」の最後の策が、弟子からの寄付を喜んで受け取る使徒ペトロ(に金銭を提案する事)であった。

「魔術師シモン」は、使徒ペトロといった無欲で清らかな人々との交際をやめた。

使徒ペトロが軽蔑して無価値とみなした金銭によって、「魔術師シモン」は、ヘレナという名前の女の奴隷を買った。

神秘主義者の気まぐれは、常に、放蕩と近い。

「魔術師シモン」は、ヘレナに夢中に成った。

「魔術師シモン」は、性欲によって弱気に成ったり強気に成ったりして、強硬症カタレプシーを再発し、「驚異の才能」と呼んでいた病的な超常現象を起こす力を取り戻した。

性的な夢と混じった、魔術の記憶に満ちた神話的な作り話が、(主神ゼウスの頭から完全武装して出て来た女神アテナの様に、)「魔術師シモン」の頭から完全武装して出て来た。

「魔術師シモン」は、軽信や盲信して金銭を払う可能性が有る大衆の前に現れて自説の教えを話して、ヘレナを同伴して、使徒達の様に旅した。

「魔術師シモン」の作り話によると、最初に神は完全な輝きによってあらわれた。

完全な輝きは反映をすぐに生み出した。

「魔術師シモン」は、神の輝きという魂の太陽である。ヘレナは、神の輝きの反映である。

「魔術師シモン」は、ヘレナをセレナと呼ぶ事を好んだ。

セレナは、ギリシャ語で月という名前である。

「魔術師シモン」の月であるヘレナは、創世の時に地上に降臨した。

「魔術師シモン」は、永遠の夢によって、地上を用意した。

地上で、ヘレナは、「魔術師シモン」という太陽の思考によって妊娠して、母に成った。

ヘレナは、天使達を世界に生んだ。

ヘレナは、天使達について父である「魔術師シモン」に話さないで、天使達を独力で育て上げた。

天使達は、ヘレナに対して反乱を起こしてヘレナを死ぬべき人の肉体に閉じ込めた。

神の輝きである「魔術師シモン」は、ヘレナを救うために降臨して、ヘブライ人(国籍)の「魔術師シモン」として地上に現れた。

「魔術師シモン」は、地上で死を克服して、ヘレナを連れて空中浮揚する。

「魔術師シモン」に選ばれた人々による勝利の合唱団が、「魔術師シモン」に続いて空中浮揚する。

「魔術師シモン」は、「魔術師シモン」に選ばれなかった人々を、地上に置き去りにして、天使達の永遠の圧政に引き渡す。

前記の「魔術師シモン」の作り話の様に、大異端者「魔術師シモン」は、善悪を転倒させてキリスト教を模倣した。

「魔術師シモン」は、反乱と悪による永遠の支配を肯定した。

「魔術師シモン」は、悪魔(である天使達)が世界を創造または少なくとも補完した、という作り話を話した。

「魔術師シモン」は、「魔術師シモン」と内縁の妻ヘレナだけが「道であり、真理であり、命である」ふりをして秩序と位階制を破壊した。

(ヨハネによる福音 14 章 6 節「私イエスが道であり、真理であり、命である」)

「魔術師シモン」の作り話は、反キリストの考えである。

反キリストの考えは、「魔術師シモン」と共に死ななかった。

なぜなら、反キリストの考えは、現代まで存続している。

実に、キリスト教の予言的な口伝では「恐るべき災いの予兆として反キリスト(の考え)の一時的な支配と勝利が来る」と話している。

「魔術師シモン」は、自分は聖人である、という嘘を主張した。

不思議な偶然の一致によって、最初の大異端者「魔術師シモン」による全ての性的な神秘主義を思い出させる、近代の偽のグノーシス主義の一宗派の長、「自由の女」の考案者は、サン シモンという名前である。

(サン シモンは聖人シモンを意味する。)

「カイン主義」という名前を、「魔術師シモン」という汚れた源泉がもたらした全ての偽の啓示に与える事ができる。

「魔術師シモン」による「カイン主義」、反キリストの考えは、普遍の調和と社会の秩序に対する、呪いと憎しみの考えである。

反キリストの考えは、混乱した性欲である。

反キリストの考えは、義務の代わりに、自由を主張する。

反キリストの考えは、貞淑と献身的な愛の代わりに、性欲による愛着を主張する。

反キリストの考えは、母の代わりに、売春婦を主張する。

反キリストの考えは、救い主イエスの聖母マリアの代わりに、「魔術師シモン」の内縁の妻ヘレナを主張する。

「魔術師シモン」は、有名に成ってローマに行った。

ローマの皇帝ネロは、驚くべき見せ物に夢中に成っていて、「魔術師シモン」を歓迎する気に成った。

星の光に照らされて酩酊したヘブライ人(国籍の)「魔術師シモン」は、離れ業に共通の幻覚によって、王冠をかぶった愚者ネロを驚かせた。

幻覚の中で、「魔術師シモン」は首を切られた後に皇帝ネロに敬礼した。幻覚が解けると、「魔術師シモン」の頭は両肩の上に元通りに成った。

「魔術師シモン」は、触れずに、家具を動かし、ドアを開けた。

要約すると、「魔術師シモン」は、真の霊媒師の様に振る舞い、皇帝ネロの酒祭と「トリマルキオの饗宴」の常任の、悪人の霊の魔術師に成った。

口伝の作者達によると、「魔術師シモン」の考えからローマのヘブライ人を救うために、使徒ペトロは世界の中心都市ローマを訪れた。

皇帝ネロは、部下の諜報員によって、誘惑者である「魔術師シモン」と戦うために、イスラエルの奇跡を起こす新しい者、使徒ペトロが到来した、と速やかに知った。

皇帝ネロは、娯楽のために、使徒ペトロと「魔術師シモン」を連れて来る事を決めた。

多分、ペトロニウスとティゲッリヌスが、使徒ペトロと「魔術師シモン」による見せ物を見た。

使徒の頭ペトロは入る時に「静かな平和があなたと共にある様に」、「あなたが無事である様に」と話した。

「魔術師シモン」は、「俺かお前は無事では済まない。戦いによって真実は暴かれる。敵同士が静かに成るのは一方が勝利者に成り他方が敗者に成る事だ」と答えた。

使徒ペトロは、「なぜ、あなたは平和を拒絶するのか？　人の悪徳は争いを作るが、平和は美徳に常に宿る」と答えた。

「魔術師シモン」は、「徳とは力と技だ。独力で、私は火と戦え、空中浮揚し、植物を復活させ、石をパンに変えられる。お前は何ができる？」と話した。

使徒ペトロは、「あなたのために祈る事ができる。誘惑術、悪人の霊の魔術の犠牲に成って自滅して死なない様に」と話した。

「魔術師シモン」は、「祈ってろ。お前の祈りより速く、俺は天に昇る」と話した。

「魔術師シモン」は、窓から外へ出て、空中浮揚した。

長い衣服の裏に隠した何らかの気体静力学の装置によって空中浮揚を実現したのか、サン メダール教会のフランソワド パリ助祭の墓でのけいれん者の様に星の光の上昇によって空中浮揚したのか、確実な事は言えない。

「魔術師シモン」の空中浮揚という現象が起きている間、使徒ペトロはひざまずいて祈っていた。

「魔術師シモン」は、大きく叫んで急に墜落して、腿を骨折した。

皇帝ネロは、使徒ペトロが「魔術師シモン」より面白くない魔術師であると思ったので、使徒ペトロを投獄した。

「魔術師シモン」は、墜落によって死んだ。

「魔術師シモン」の伝記は全て当時の大衆の噂による物である。

現在では、多分誤って、「魔術師シモン」の伝記は、聖書外典の伝説に分類される。

前記から、「魔術師シモン」の伝記は、注目すべきであり、保存する価値が有る。

「魔術師シモン」の異端派は、「魔術師シモン」と共に絶えなかった。

「魔術師シモン」の弟子の1人Menanderが、「魔術師シモン」の後継者に成った。

Menanderは、預言者のふりで満足して、神のふりをしなかった。

しかし、Menanderが新帰依者を洗礼した時、目に見える火が水上に降りて来た。

前記の、魔術的な洗礼によって、Menanderは、魂と肉体が不死に成ると約束した。

聖人ユスティノスの時代でも、未だに、自分が不死であると頑固に思い込んだMenanderの信者が存在した。

一部のMenanderの信者の死が、他のMenanderの信者を正す事は無かった。

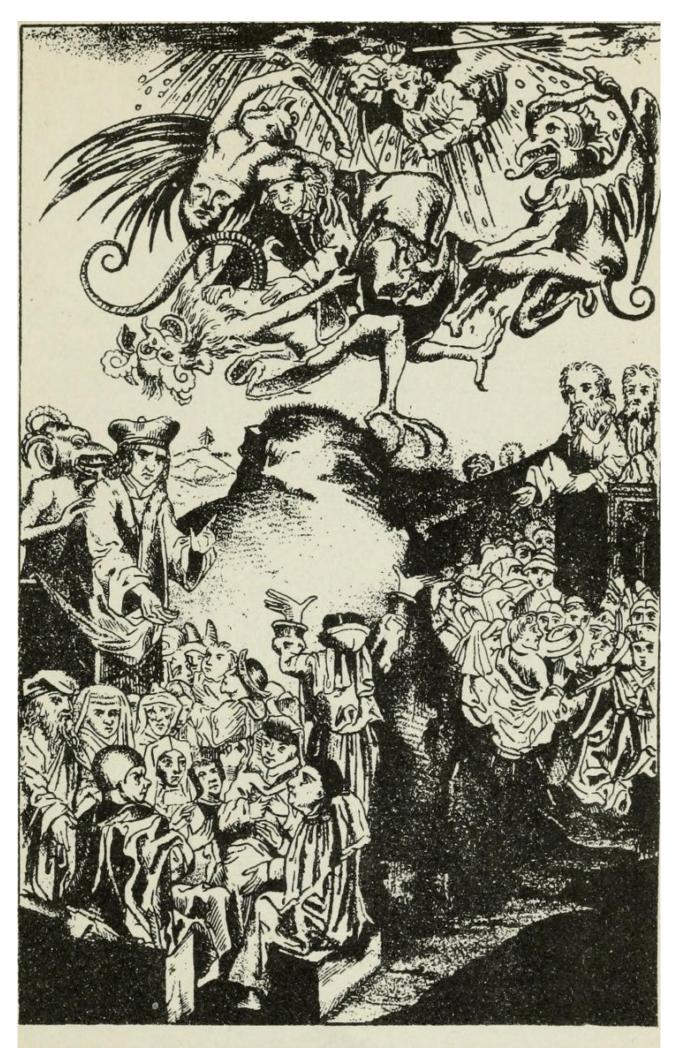
なぜなら、死んだMenanderの信者は、偽の同胞であったという口実で、破門された。

Menanderの信者にとって、死は現実の背教であった。

新帰依者を加える事によって、Menanderの偽の不死の信者は補充された。

人の愚かさの程度を理解している人は、1858年に成ってもアメリカとフランスにMenanderの異端派の延長としての狂信的な異端派が存在している、と聞いても驚かないであろう。

「魔術師シモン」という「シモン」の名前に加えられている「魔術師」という形容は、キリスト教徒にとって、魔術を恐ろしい物にしてしまった。

しかし、キリスト教徒は、マタイによる福音2章で、ゆりかごの中の救い主イエスを敬礼した3人のマギ、3人の王者の記憶をたたえる。

DISPUTATION BETWEEN SIMON THE MAGICIAN AND SS. PETER AND PAUL

第 3 巻 第 3 章 悪魔(と呼ばれているもの)

神についての概念を明確に話す事によって、神は絶対の清らかな愛である、とキリスト教は理解させる。

一方、神とは正反対の霊、反乱と憎しみの霊、サタンをキリスト教はあまり明確に定義しない。

(サタンは神とは正反対の精神、反乱と憎しみの精神である。)

実に、サタンという霊は人格ではない。

サタンという霊は一種の黒い神ではない。

サタンという霊は邪神ではない。

サタンという精神は、正統から外れた全ての(悪人や悪人の霊といった)知的存在に共通する、悪である。

マルコによる福音 5 章でサタンは「我々の名前は軍団である。なぜなら、我々は多数である」と話している。

知性の誕生は、明けの明星に例えられる。

明けの明星が、一瞬だけ輝いた後に、自発的に闇の虚無に堕ちると、イザヤ書 14 章 12 節の「なぜ、あなたは天から堕ちたのか?!　明けの明星よ?!」という預言者イザヤによるバビロンの王への呼びかけの言葉を適用できる。

しかし、イザヤ書 14 章 12 節の「なぜ、あなたは天から堕ちたのか?!　明けの明星よ?!」という言葉は、天のルシフェル、知性の明けの明星が地獄のたいまつに変わった事を意味するのか?　いいえ!

「光をもたらすもの」を意味するルシフェルという名前を罪と闇の天使に適用するのは正しいと言えるのか?　いいえ!

前記の、疑問に対してエリファス レヴィは「いいえ」と考えている。

エリファス レヴィの理解の様に、特にルシフェルを理解した時、エリファス レヴィに味方すれば、ルシフェルは、後記の様な、魔術の口伝を持つ。

ルシフェルは、サタンとして擬人化された地獄である。

ルシフェルは、古い蛇として象徴化されている。

ルシフェルは、地上を包囲して、地上がもたらす全てのものを焼き尽くす、中心の火である。

クロノスまたはサトゥルヌスの蛇の様に、ルシフェルは自身の尾を飲み込もうとする。

要約すると、ルシフェルは、星の光である。

全能である神は、創世記４章７節で「もし、あなたが悪事、罪を犯したら、すぐに罪は近くに存在している」と話した時に、星の光についてカインに話していた。

言い換えると、「(もし、あなたが悪事、罪を犯したら、)混乱が、あなたの全ての感覚を支配する」。

創世記４章７節「私、神は、死が、あなたを渇望する様にしている。しかし、死を支配するべきなのは、(本来は、)あなたの方（ほう）なのである」

サタンを王者の様に、ほとんど神聖な者の様に擬人化する事は、偽のゾロアスターにまで遡（さかのぼ）る、無知による誤りである。

または、サタンを王者の様に、神聖な者の様に擬人化する事は、歪められた真のゾロアスターの教えとペルシャの祭司マギの物質主義者にまで遡（さかのぼ）る、無知による誤りである。

偽のゾロアスターや、真のゾロアスターの偽の弟子とペルシャの祭司マギの偽の弟子は、自発的な力と相対する、受容的な力を神格化して、知の世界の両極性を敵対する２柱の神として誤って表現した。

すでに話した様に、インドの神話でも、大間違いにも、両極性を敵対する2柱の神として誤って表現した。

アーリマンまたはシヴァは、悪魔の父である。

迷信者である伝説の作者は、シヴァは悪魔の父であると誤解した。

そのため、ヨハネによる福音8章44節を意訳すると、悪魔の父(である悪人)と同じ様に、悪魔(と言える悪の精神)は嘘つきである、とイエスは話している。

悪魔という問題について、教会は、福音書の原文に満足して、留まっている。

そのため、教会は、教えや考えとして悪魔の定義をキリスト教の関心の対象として決定しなかった。

善いキリスト教徒は、悪魔の名前を話す事すら避ける。

キリスト教の倫理学者や道徳家は信者に、神についてだけ思考して悪魔のわざに抵抗する様にすすめて、悪魔自体には関わらない様にすすめる。

キリスト教の祭司らしい教えによる悪魔についての賢明な保留を感心せざるを得ない。

実際、キリスト教の教えの光を知性の暗闇と心の闇夜である悪魔にもたらすべきか？　キリスト教の教えの光を知性の暗闇と心の闇夜である悪魔にもたらす必要は無い！

神の知から逸(そ)らそうとする霊、精神である悪魔は未知のままにしておいてよい。

教会が意図的に行わない事を行う意図はエリファス レヴィには全く無い。

エリファス レヴィは、悪魔についての、隠された知による秘伝伝授者達の秘密の教えについて確証するだけである。

大いなる魔術の代行者、星の光は、全ての被造物の至る所に広まっている、仲介する力である、と秘伝伝授者達は話している。

秘伝伝授者達は星の光を「光をもたらすもの」を意味する「ルシフェル」と正確に呼んでいる。

なぜなら、星の光は光の媒体である。

また、星の光は全ての形の貯蔵所である。

星の光は創造と破壊に役立つ、と秘伝伝授者達は話している。

アダムの堕天は性的な酩酊である、と秘伝伝授者達は話している。

アダムの堕天による性的な酩酊は、アダムの子孫である人を致命的な星の光に従わせてしまっている。

感覚を侵す全ての性欲は人を死という深淵に引き寄せようとする星の光の渦である、と秘伝伝授者達は話している。

狂気、幻覚、予見、忘我状態は星の光による隠された燐（リン）を過剰に危険に高めてしまう、と秘伝伝授者達は話している。

星の光には火の性質が有る、と秘伝伝授者達は話している。

思慮して応用すると、星の光は温め活気づける。

しかし、使い過ぎると、星の光は燃やし溶解し破壊する。

一方では、王者として星の光を統治して不死性を得るために、人は星の光を圧倒する様に求められている。

しかし、他方では、星の光による酩酊、同化、永遠の破壊が人を脅かしている。

焼き尽くし報復し死に至らせる側面を見ると、星の光は地獄の火である、と言えるかもしれない。

焼き尽くし報復し死に至らせる側面を見ると、星の光は伝説の蛇である、と言えるかもしれない。

星の光の中に満ちている、苦しんでいる罪人である悪人。

星の光が苦しめている失敗作である悪人の涙と歯ぎしり。

悪人を避け、悪人の不幸を辱める様に見える、生の幻。

悪人は悪魔またはサタンである、と言えるかもしれない。

生の幻は悪魔またはサタンである、と言えるかもしれない。

星の光による目眩(めまい)が誤った方向へ導く行動、快楽の幻、富、栄光は、地獄の虚飾や地獄のわざに含まれるかもしれない。

神父 Hiiarion Tissot は、幻覚や意識混濁や狂乱を伴う特定の神経病を悪霊の憑依による物と考えたが、カバリストによる例えの意味で理解すれば確かに正しい。

人の魂を必然的にめまいに陥らせるものは、本当に、地獄的な悪魔的なものである。

なぜなら、天とは、秩序、知、自由の永遠の統治である。

福音書では悪霊に憑依された人はイエス キリストを避けた。

使徒達の存在によって神託は沈黙した。

常に、幻覚を伴う病気の病人は秘伝伝授者と賢者への克服できない嫌悪を示す。

神託と憑依が止んだ事は、人の自由が運命に勝利できる事を証明した。

星の光による病気の再発は、霊的な弱体化による凶兆で、常に後に、致命的な混乱が起こる。

星の光の混乱は、フランス革命まで続いた。

サン メダールの狂信者はフランス革命という流血の災いの予言者であった。

有名な犯罪学者のトレブランカは、悪魔による魔術の原因を探求した。

トレブランカは、悪魔による仕業に分類してしまったが、星の光の混乱による全ての現象を正確に記した。

後記は、魔術の儀式についてのトレブランカの著書の 15 章からのいくつかの抜粋である。

(1)

絶え間無く、悪魔は人を誤りに導こうと試みている。

(2)

悪魔は想像力を混乱させて感覚を惑わす。

しかし、悪魔は感覚の性質を変える事ができない。

(3)

人の目に異常が現れると、人の心の(想像の)中に、悪魔は想像上の体を形成する。

人の心の(想像の)中に、悪魔の想像上の体の幻が残存している限り、悪魔による現象は続く。

(4)

悪魔は、健康の変調や実際の病気により生命機能を乱して、想像力のつり合いを破壊する。

(5)

想像力のつり合いや理性のつり合いが病的な原因によって破壊されると、目覚めたまま夢を見る事が可能に成り、実在しないものが迫真の外見を取る。

(6)

目覚めたまま夢を見ている状態では、知能による映像の知覚は、視覚を信頼できなくさせてしまう。

(7)

映像が心(の想像)に描かれるが、想像上の形に過ぎない。

(8)

古代人は幻覚を伴う病気を区別して 2 つに分類した。

古代人は想像上の形を知覚する病気を狂乱と呼んだ。

古代人は実在しない声や音を聞く病気を狂躁症と呼んだ。

前記の、いくつかの点において興味深い話から、トレブランカは病気を悪魔のせいにした。

(例えとして、)実は、病気自体が悪魔である。

もしキリスト教の権威が(例えとして)許せば、病気自体が悪魔である、と人は完全に同意するべきである。

星の光が存在を分解して同化するためにくり返し奮闘するのは、星の光の性質による機能である。

水の様に、星の光の絶え間無い流れには、浸食する作用が有る。

火の様に、星の光は焼き尽くす。

なぜなら、星の光は、火の精髄であり、火の分解する力である。

星の光に圧倒されている人の特徴である、悪の精神と破壊への愛着は、星の光の力による衝動である。

悪の精神と破壊への愛着は、魂の苦しみによる結果として生じる。

魂は、不完全な生を自覚している。

魂は、正反対の方向に引き裂かれているのを感じている。

魂は、自身を終わらせる事を望む。

しかし、魂は、独りで死ぬのが恐い。

そのため、魂は、全ての被造物を自殺に巻き込もうとする。

星の光に圧倒されている魂の悪は、幼子への憎しみという形を取る事がある。

未知の力によって圧倒されている何人かは子殺しに走る。

星の光に圧倒されている人には、傲慢な声が子殺しを要求する様に思われる。

ブリエール ド ボワモン博士は、19 世紀フランスのパパヴォワーヌ事件やアンリエット コルニエ事件という犯罪を思い出させる、子殺しという狂気の恐るべき実例を挙げている。

星の光によって転倒している人は、邪悪である。

星の光によって転倒している人は、他人の喜びを妬む。

星の光によって転倒している人は、特に、希望を憎む。

星の光によって転倒している人は、慰めている時ですら、絶望的な胸を引き裂く様な言い方を選ぶ。

なぜなら、星の光によって転倒している人にとって、生は苦と同義である。

また、星の光によって転倒している人は、死という輪舞によって目が眩（くら）んでいる。

星の光による転倒や、(性行為、)生殖行為を悪用、乱用する死への渇望は、神を冒涜する笑いものにする言動や恥ずべき軽口によって、心の転倒や恥に至らせる。

わいせつは、生に対する冒涜である。

各、悪徳は、黒い偶像または悪魔によって擬人化されている。

悪魔は、生をもたらす神についての否定や歪んだ鏡像である。

悪魔は、死の偶像である。

モロクは、幼子を殺す災いである。

サタンとニスロクは、憎しみ、災い、絶望の神である。

アスタルト、リリス、ナヘマー、アスタロトは、放蕩と中絶の偶像である。

アドラメレクは、殺人者の神である。

ベリアルは、永遠の反乱、無秩序による混乱、無政府状態による混乱の神である。

悪魔は、消滅する直前でためらっている理性による奇形の概念である。

消滅する直前でためらっている理性は、理性の苦しみを終わらせるために、理性を同化して破壊するものを卑屈に敬礼する。

カバリストによると、サタンの真の名前は、神の名前ヤハウェを逆にした物である。

なぜなら、サタンは、黒い神ではなく、神の否定、神性の否定、神性の欠如である。

サタンは、無神論や偶像崇拝を擬人化したものである。

秘伝伝授者にとって、悪魔は、人格ではなく、善いものによって創造されたが悪にも応用できる(星の光という)力である。

星の光という力は、本当に、自由の道具である。

秘伝伝授者は、肉体的な生殖(、性交)を統治する星の光という力を、角のある神パーンという神話の形で表した。

古い蛇の兄弟であるサバトのヤギであるバフォメット、光をもたらすものルシフェルまたは燐（リン）は、神パーンに由来する。

詩人は、神話の神パーンを、伝説の偽のルシフェルに変身させた。

第3巻 第4章 最後の異教徒

神の永遠の奇跡は、自然の調和における、神意による不変の秩序である。

異常現象は、混乱である。

異常現象は、被造物の悪化だけのせいである。

神の奇跡は、破壊された秩序を復活させるための、神意の反作用である。

イエスは、悪霊に憑依されている人を治す際に、憑依されている人を落ち着かせて、異常現象を起こすのを止めさせた。

使徒達は、デルポイのアポロン神殿の巫女の高揚を和らげる際に、予見を止めさせた。

誤りの霊は、興奮と転覆の霊である。

真理の霊は、真理という道による、落ち着きと平和である。

正しさの霊は、正しい道による、落ち着きと平和である。

落ち着きと平和は、初期のキリスト教による啓蒙する感化である。

しかし、混乱に伴う情熱は、戦わずには、簡単には、勝利者であるキリスト教の手中に入らなかった。

死にかけていた多神教は、古代の聖所の魔術から力を得た。

多神教は、エレウシスの秘儀を福音書の神秘に対立させた。

多神教は、ティアナのアポロニウスを世界の人々の救い主イエスに対立させた。

フィロストラトスは、ティアナのアポロニウスという新しい神の人の伝記「ティアナのアポロニウスの生涯」を記した。

その後に、ユリアヌス帝があらわれた。

ユリアヌス帝を殺した投げ槍がローマの皇帝崇拝という偶像崇拝にとどめを刺した最後の一撃に成っていなかったら、ユリアヌス帝は神格化されたであろう。

死んだ宗教を老衰した形で強制的に復活させる試みは全くの失敗に終わる。

死んだ宗教の老衰した形での復活を試みたユリアヌス帝は、世界に誕生させようと奮闘した老衰の子である異教と共に、死んだ。

それにもかかわらず、ティアナのアポロニウスとユリアヌス帝は興味深い大いなる人物である。

魔術の歴史においてティアナのアポロニウスとユリアヌス帝の伝記は画期的である。

例え話的な伝記が当時の流行であった。

祖師は考えを人格で体現した。

秘伝伝授された弟子は秘伝伝授の秘密を籠(こ)めた例え話を書いた。

フィロストラトスの「ティアナのアポロニウスの生涯」は文字通りに受け取ると非論理的である。

「ティアナのアポロニウスの生涯」は知によって象徴の意味を調べると記憶すべき物と成る。

「ティアナのアポロニウスの生涯」は福音書と対立している一種の異教の福音書である。

「ティアナのアポロニウスの生涯」全体が秘密の考えである。

エリファス レヴィは「ティアナのアポロニウスの生涯」を復元して説明できる。

フィロストラトスの「ティアナのアポロニウスの生涯」第３巻１章はヒファシス川の説明を含んでいる。

ヒファシス川は、ある平地に源を発するが、近づけない領域に姿を消す不思議な川である。

ヒファシス川は、魔術の知を表す。

魔術の知は、最初の原理は簡潔であるが、最初の原理から最後の結論へ正確にたどるのは難しい。

ヒファシス川の岸で育った木の樹脂によるバルサム香で清めないと結婚は良い結果を生じない、とフィロストラトスは教えている。

ヒファシス川の魚は、愛の女神ウェヌスにささげられている。

ヒファシス川の魚は、先端が青色、鱗が多数の色、尾が金色である。

ヒファシス川の魚は、思い通りに尾を膨らませる事ができる。

ヒファシス川には、白い蛆(ウジ)に似た生物がいる。

ヒファシス川の白い蛆(ウジ)を熱すると、ガラスにしか保存できない引火性の油を生じる。

ヒファシス川の白い蛆(ウジ)は、王者の役に立つためだけのものである。

なぜなら、ヒファシス川の白い蛆(ウジ)には、壁を倒壊させる力がある。

ヒファシス川の白い蛆(ウジ)の油は空気にさらすと発火する。

ヒファシス川の白い蛆(ウジ)の油の火を消火できるものは世界には存在しない。

ティアナのアポロニウスは、ヒファシス川の魚で、最近の磁気の実験が証明している、一方が青色、他方が金色、中間が多数の色である世界の構造を表している。

(

この世は男性神による数 9 の身代わりによって創造されている。

9 = 4 + 5。

数 4 の色は青色である。

数 5 の色は金色である。

この世は 2 つの力の相殺によって創造されている。

)

白い蛆(ウジ)は、星の光の例えである。

星の光である白い蛆(ウジ)を三重の火で濃縮すると万能薬である油に成る。

星の光を三重の火で濃縮した万能薬は絶縁体であるガラスでしか保存できない。

なぜなら、星の光の透過性は微小である。

星の光の秘密は、「無上の秘伝伝授者」を意味する「王者」のためだけの物である。

なぜなら、星の光には諸々の都市を破壊できる力が本当にある。

いくつかの重要な秘密を大いに明確に表している。

「ティアナのアポロニウスの生涯」第 3 巻 2 章でフィロストラトスは、一角獣について話して、一角獣の角から作る事ができる杯は全ての毒から身を守れる、と話している。

象徴である一角獣の唯一の角は位階制の単一性を表す。

「ティアナのアポロニウスの生涯」第 3 巻 2 章でフィロストラトスは、ティアナのアポロニウスの弟子ダミスによると、一角獣の角から作った杯は王者のためだけの物である、と話している。

ティアナのアポロニウスは「一角獣の角から作った杯から飲まないと酔わない人は幸いである」と話している。

ティアナのアポロニウスは、足から胸までは白いが胸から上は黒い女性と会った、と弟子ダミスは話している。

ティアナのアポロニウスの弟子達は、足から胸までは白いが胸から上は黒い女性という不思議を恐れた。

しかし、祖師ティアナのアポロニウスは、足から胸までは白いが胸から上は黒い女性に手をさしのべた。

なぜなら、ティアナのアポロニウスは、足から胸までは白いが胸から上は黒い女性について知っていた。

足から胸までは白いが胸から上は黒い女性は古代エジプト人が敬礼したオシリスの牛アピスの色をしたインドのウェヌスである、とティアナのアポロニウスは弟子達に教えた。

足から胸までは白いが胸から上は黒い女性は、魔術の知である。

白い手足は創造された形である。

白い手足は黒い頭を明かしている。

(創造された形は、人には全体的に未知である無上の原因、第一原因である神を明かしている。)

黒い頭は人には全体的に未知である無上の原因、第一原因である神である。

フィロストラトスとダミスは魔術の知を知っていた。

フィロストラトスとダミスは象徴の下に隠してティアナのアポロニウスの考えを表している。

「ティアナのアポロニウスの生涯」第 3 巻 5 章から 10 章は「大いなる務め」、「大作業」の秘密を含んでいる。

「ティアナのアポロニウスの生涯」第 3 巻 5 章から 10 章は賢者の宮殿への入口を守っている竜という象徴を「大いなる務め」、「大作業」の秘密の象徴として選んでいる。

山の竜、湿地の竜、平野の竜という 3 種類の竜がいる。

山は硫黄の例えである。

湿地は水銀の例えである。

平野は賢者の塩の例えである。

ノコギリエイの様に、平野の竜は背中がのこぎり状に尖っていて、塩の酸性の力を表す。

山の竜は鱗とひげが金色である。

山の竜が這う音は銅貨がジャラジャラ鳴る音に似ている。

山の竜の頭の中には石がある。

山の竜の頭の中の石によって、全ての奇跡を起こす事ができる。

山の竜は紅海の岸で日光浴をする。

金色の文字が刺繍された赤い法衣の助けによって、山の竜をとらえる事ができる。

山の竜が赤い法衣に刺繍された魔術の力が籠められた金色の文字の上に頭を置いて眠りに落ちたら、斧で山の竜の首を切る。

「ティアナのアポロニウスの生涯」第 3 巻 5 章から 10 章で、山の竜の話により「賢者の石」と「the Magistery at the Red(賢者の石の様な万能薬や錬金の、赤の媒体)」、金色の文字の話により有名な「regimen of fire(火の支配)」を認めない人がいるであろうか？ 「ティアナのアポロニウスの生涯」第 3 巻 5 章から 10 章で、山の竜の話により「賢者の石」と「the Magistery at the Red(賢者の石の様な万能薬や錬金の、赤の媒体)」、金色の文字の話により有名な「regimen of fire(火の支配)」を認められる！

続いて、フィロストラトスは、賢者の砦という名前の下で隠して、南側以外が霧で包囲されている丘として、錬金炉を記している。

丘には 4 歩の大きさの泉がある。

(丘には数 4 である知の泉がある。)

泉から、太陽の熱によって、青い蒸気が昇って、七色の虹を見せている。

泉の底は赤いヒ素で埋められている。

泉の近くには火で満たされた盆地がある。

盆地から青黒い無臭無煙の火が昇っている。

盆地の火は盆地の端より高くも低くも成らない。

また、雨を蓄積する黒い石で出来た貯蔵所と、風を蓄積する黒い石で出来た貯蔵所がある。

　乾燥し過ぎると、雨の貯蔵所が開かれて、国全体に水を供給する雲があらわれる。

　賢者の秘密の火と、ユダヤ婦人マリアによる「マリアの浴室」と錬金術で呼ばれている物を「ティアナのアポロニウスの生涯」より正確に記す事は難しいであろう。

　古代の錬金術師は電気、磁気、蒸気を「大作業」に応用していた、のが「ティアナのアポロニウスの生涯」の説明から分かる。

　続いて、フィロストラトスは、「賢者の石」を「石」または「光」と区別しないで呼んで、「賢者の石」について話している。

「大衆には『石』を発見する事は許されていない。

なぜなら、『わざ』の手順に従ってとらえないと、『石』は姿を消してしまう。

特定の決まり文句の言葉と儀式によって、賢者だけが『Pantarba』に到達できる。

『Pantarba』は『石』の名前である。

夜、『石』には、火花を発する燃える火があらわれる。

昼、『石』は目が眩むほど明るく輝く。

『光』、『石』は見事な徳の力による希薄な霊妙な物質である。

なぜなら、『光』、『石』は近くにある全てのものを引き寄せる」

　ティアナのアポロニウスの秘密の教えについての、フィロストラトスの賢者の石についての啓示によって、賢者の石が普遍の磁石であり、賢者の石が、中心の周囲に濃縮されて固定された星の光で形成されている、と分かる。

　賢者の石は人工の燐（リン）である。

　賢者の石は全ての生殖力のある熱を集中した力を含んでいる。

賢者の石についての現存している多数の象徴と口伝は賢者の石が確実に存在している証拠として存在している。

　アッシリア人の弟子ダミスに従ってフィロストラトスが記した「ティアナのアポロニウスの生涯」は例え話を織り交ぜた物である。

　当時は、例え話を織り交ぜて、秘伝伝授の大いなる祖師達の隠された考えは記された。

　すでに話した様に。

　したがって、「ティアナのアポロニウスの生涯」が例え話を含んでいる理由は分かるであろう。

　そして、「ティアナのアポロニウスの生涯」の例え話の下に隠された、秘儀祭司の秘密の知を発見して当然であると思うべきであるし、秘儀祭司の秘密の知の理解を目指しなさい。

　ティアナのアポロニウスは、大いなる知と明らかな徳にもかかわらず、ペルシャの位階制の祭司マギの流れをくむ後継者ではなかった。

　ティアナのアポロニウスはインドを源泉として入門した。

　そのため、ティアナのアポロニウスはバラモンの元気を弱める実践にふけった。

　さらに、ティアナのアポロニウスは反乱と国王殺しを公に説いた。

　ティアナのアポロニウスは誤った道における大いなる人格者であった。

　ユリアヌス帝の人物像は、ティアナのアポロニウスの人物像より、詩的で美しく見える。

　ユリアヌス帝は世界の王座、ローマの皇帝の座に就いていたが、賢者の禁欲を続けた。

　ユリアヌス帝はキリスト教の若い力をヘレニズムの弱った体に移そうとした。

　ユリアヌス帝は気高い狂人である。

ユリアヌス帝は祖国の古代ギリシャを連想させるものと、祖国の古代ギリシャの神々の象徴に夢中に成り過ぎたという誤りを犯したに過ぎない。

　キリスト教の実現する力と相殺させるために、ユリアヌス帝は、カルキスのイアンブリコスとエフェソスのマクシムスの導きに従って、黒魔術に助けを求めて闇の降霊術に夢中に成った。

　しかし、ユリアヌス帝が若く美しく復活させたかった古代ギリシャの神々は命と光を恐れて後退しそうな十字の象徴や手振りを前に逃げそうな老衰した冷たい姿でユリアヌス帝の前にあらわれた。

　ヘレニズムの段階は終わっていた。

　ガリラヤ人イエスが勝利していた。

　ユリアヌス帝は、勝利者であるイエスを冒涜しないで、英雄の様に死んだ。

　ユリアヌス帝は死ぬ時にイエスを冒涜したという誹謗中傷が存在する。

　ユリアヌス帝は戦士や哲学者の様に死んだ、とアンミアヌス マルケリヌスが詳しく記している。

　キリスト教の聖職者擁護論者の大衆はユリアヌス帝の死後にユリアヌス帝への誹謗中傷をくり返した。

　気高い魂を愛する救い主イエスは、不適切だったユリアヌス帝よりも、興味深さや思いやりの少ない敵を許したではないか？　気高い魂を愛する救い主イエスは、不適切だったユリアヌス帝よりも、興味深さや思いやりの少ない敵を許した！　気高い魂を愛する救い主イエスは、不適切だったユリアヌス帝を許すはずである！

　ユリアヌス帝が死んだ時代に、魔術は、偶像崇拝と混同されて世界的な迫害に巻き込まれた。

　ユリアヌス帝が死んだ時代に、魔術が迫害され始めた時代に、達道者の秘密結社が誕生した。

後に、魔術の秘密結社は偽のグノーシス主義者やマニ教徒を引き寄せてしまった。

魔術の秘密結社は正しさと誤りが混じった口伝の保管者に成ってしまった。

魔術の秘密結社は、廃れた宗教と転落した異教の祭司の永遠に挫折した希望と共に、恐ろしい誓いによる封印の下に隠して古代の全能である神々の大いなる秘密を伝えた。

第 3 巻 第 5 章 伝説

黄金伝説が含んでいる不思議な話は、作り話かもしれないが、キリスト教の最古の物である。

黄金伝説の不思議な話は、歴史というよりは、例え話である。

福音書の表現形式の様に、黄金伝説の不思議な話の表現形式は簡潔で東風である。

黄金伝説の口伝の存在は、使徒ヨハネからの秘伝伝授によるカバラの神秘を隠すために、一種の神話が考案された事を証明する。

黄金伝説は象徴と例え話によって表されたキリスト教のタルムードである。

カバラの例え話という観点から研究すると、黄金伝説は、古さに比例して当時としては新しい物であり、現実に重要であり、無上に興味深い作品と成るであろう。

黄金伝説 136 章の聖処女ユスティナの神秘に満ちた話は悪人の霊の魔術と初期キリスト教の戦いを劇的に驚異的に描いている。

黄金伝説 136 章の聖処女ユスティナの話は、フランソワ ルネ ド シャトーブリアンの初期キリスト教への迫害を描いた「殉教者」とゲーテの「ファウスト」に先立って合わせて描かれた輪郭の様な話である。

ユスティナは異教徒であった若い美しい処女である。

ユスティナは偶像崇拝の聖職者の娘であった。

ユスティナはフランソワ ルネ ド シャトーブリアンの「殉教者」の Cymodoce の様な女性であった。

ユスティナの部屋の窓は庭に面していて、開けられていた。

ユスティナの家の庭はキリスト教の教会に面していた。
　そのため、ユスティナは毎日カトリックの助祭が福音書を読んでいる、心が落ち着く清らかな声を聞いた。
　異教徒であったユスティナが知らなかった、福音書のイエスの言葉は、実に深く、ユスティナの心に触れて動かして感動させた。
　そのため、ある夜ユスティナの母はユスティナの深刻な表情に気づくと、ユスティナの心を占めている心配事を心を許せる信頼の置ける人である母に相談する様に求めた。
　ユスティナは母の足元に崩れ落ち「私を祝福してください、お母様。いいえ、私をお許しください。私はキリスト教徒に成りました」と話した。
　ユスティナの母は涙を流してユスティナを抱きしめた。
　それから、ユスティナの母は夫であるユスティナの父の所へ行ってユスティナから聞いた話を説明した。
　夜ユスティナの父と母が眠っていると同じ夢が訪れた。

　神々しい光がユスティナの父と母の上に降臨した。
　甘美な声がユスティナの父と母を呼んで話した。

「苦しんでいる全ての者よ、私の所に来なさい、私が貴方達を慰めてあげよう。
私の父である神に愛されている者よ、来なさい、私が創世の時から貴方達のために用意していた王国を貴方達にあげよう」

　夜が明けて朝が始まった。
　ユスティナの父と母はユスティナを祝福した。

ユスティナとユスティナの父と母は洗礼志願者に加わった。

　習慣的な見習い期間の後に、ユスティナとユスティナの父と母は洗礼を受けた。

　ユスティナの老いた父と母と手をつないでユスティナは清らかに輝いて教会から家へ戻った。

　マルガレーテのそばを通り過ぎたファウストとメフィストフェレスの様に、悪人の霊の魔術師キプリアヌスとキプリアヌスの弟子アクラディオスというマントに身を包んだ２人の不吉な男性がユスティナのそばを通り過ぎた。

　キプリアヌスとアクラディオスはユスティナの輝きに目が眩み圧倒されて立ち止まった。

　しかし、ユスティナはキプリアヌスとアクラディオスを見ないで父と母と共に家に着いた。

　場面は変わってキプリアヌスの研究室。

　魔法陣の輪が描かれている。

　煙を上げている小さな炉の上に載せた小さな器のそばで、殺された生贄の体が未だに震えている。

　闇の霊が魔術師キプリアヌスの前に立っていて話している。

「お前は俺を呼んだな。俺は来た。話せ。何をお前は望む？」

「ある乙女を愛してしまった」

「誘惑しろ」

「彼女はキリスト教徒だ」

「告発しろ」

「私は彼女を所有したいのであって失いたくない。私を助けてくれるか？」

「俺はエヴァを誘惑できた。
エヴァは清らかで日々、神自身と話していたのにだ。
お前の乙女がキリスト教徒でも、俺がイエス キリストを十字架にはりつけさせたのだと思い知れ」

「それでは、お前は彼女を私の手の中に引き渡してくれ」

「この魔法の軟膏を持って行って、彼女が住む家の入口に塗れ。
後は俺に任せろ」

　ユスティナは小さな質素な自分の部屋で眠っていた。
　キプリアヌスはユスティナの家の門で神を冒涜する言葉を呟いて恐るべき儀式を行った。
　悪霊が若い少女ユスティナの枕元に這い寄ってキプリアヌスの映像に満ちた性的な夢を染み込ませる。
　悪夢の中で、ユスティナは教会から出た時にキプリアヌスと会う。
　悪夢の中で、ユスティナはキプリアヌスを見た。

悪夢の中で、ユスティナはキプリアヌスの言葉を聴き、キプリアヌスはユスティナの心を騒がす言葉をささやく。

しかし、突然ユスティナは身動きして起きて十字を切る手振りをした。

悪霊は姿を消す。

誘惑者キプリアヌスはユスティナの門を見張ってユスティナを待って虚しく一晩中過ごした。

翌日キプリアヌスは降霊術を新たに行って地獄の共犯者であるユスティナの誘惑に失敗した悪霊に辛辣な非難の言葉を浴びせた。

悪霊は無能無力である事を自白した。

キプリアヌスは機嫌を損ねて悪霊を追い払った。

キプリアヌスは上位の悪霊を呼び出した。

上位の悪霊は若い少女や美しい若者に変身して助言と愛撫によってユスティナを誘惑した。

ユスティナは誘惑に屈しかけた。

しかし、ユスティナの守護天使がユスティナを助けた。

ユスティナは息を吹きかけ十字を切る手振りをして上位の悪霊を追い払った。

キプリアヌスは地獄の王サタンを呼び出す。

そして、サタン本人が現れる。

サタンはヨブ記でのヨブへの全ての災いによってユスティナを襲った。

また、サタンは恐ろしいペストを都市アンティオキア中にまき散らした。

ユスティナが怒らせた愛の神ウェヌスと怒らせた愛の神エロスを満足させた時にのみペストはやむであろう、とサタンによる偽の神託が話した。

しかし、ユスティナはアンティオキアの人々の前でアンティオキアの人々のために祈りペストはやむ。

サタンは挫折した。

キプリアヌスは十字の象徴の全能をサタンに認めさせる。

キプリアヌスは十字の象徴を身につけてサタンに戦いを挑む。

キプリアヌスは悪人の霊の魔術を捨ててキリスト教徒に成った。

キプリアヌスは司教に成った。

キプリアヌスは修道院でユスティナと出会う。

キプリアヌスとユスティナは、天の愛という清らかな永遠の愛で、愛し合う様に成った。

迫害がキプリアヌスとユスティナを襲う。

キプリアヌスとユスティナは一緒に捕らえられた。

キプリアヌスとユスティナは同じ日に殺された。

キプリアヌスとユスティナは神の胸に抱きしめられて神秘の永遠の結婚を認められる。

黄金伝説によると、聖キプリアヌスはアンティオキアの司教である。

しかし、教会史にはキプリアヌスはカルタゴの司教の座に就いたと記されている。

アンティオキアの司教キプリアヌスとカルタゴの司教キプリアヌスが同一人物かどうかは些細な問題である。

黄金伝説のアンティオキアの司教キプリアヌスは詩的である。

カルタゴの司教キプリアヌスは教会の教父であり殉教者である。

古代の魔術書の中に黄金伝説のアンティオキアの司教の聖キプリアヌスの物とされている祈祷文が残存しているが、多分、カルタゴの司教の聖キプリアヌスの祈祷文である。

カルタゴの司教キプリアヌスの祈祷文の理解し難い象徴を用いた表現はカルタゴの司教キプリアヌスがキリスト教徒に成る前に黒魔術の実践に過度にふけっていたという意見に信憑性を与える。

　後記の様に、カルタゴの司教キプリアヌスの祈祷文は翻訳できる。

「私、キプリアヌスは、私達の主イエス キリストの僕（しもべ）である。

私は父である全能である神に祈り話します。

あなたは強い神である。

私の神は全能である。

神は大いなる光の中に住んでいる。

あなたは聖なる者であり賛美に相応しい。

あなたは過去に、あなたの僕（しもべ）キプリアヌスの悪意と悪霊にだまされてキプリアヌスが陥っていた悪行を見ていた。

私は、あなたの真の名前について無知であった。

私は羊の中で時を過ごした。

羊には羊飼いがいなかった。

雲は露（つゆ）を地上に落とさなかった。

木々は果実をもたらさなかった。

陣痛に苦しんでいる女性は出産できなかった。

私は(悪の縄で)縛って解かなかった。

私は海の魚を縛った。

海の魚は捕らえられた。

私は海の細道を縛った。

多数の悪を私はもたらした。

しかし、今は、主イエス キリストよ、私は、あなたの聖なる名前を知っている。

私は、あなたを愛している。

私は心の全て、魂の全て、心の中にある全てを悔い改めた。

私は多数の罪を犯すのをやめた。

あなたの愛の中を歩める様に。

あなたの戒めに従える様に。

あなたの(思いやりに満ちた)戒めは私にとって信心と祈りに成った。

あなたは真理の、神の言葉である。

あなたは父である神の、唯一の神の言葉である。

私は今あなたが雲への鎖を壊して、乳の様な、あなたの美しい雨をあなたの子達に降らす事を願います。

私は、あなたが川を(悪の縄から)自由にして、飛ぶ者である鳥の様に、泳ぐ者である魚を自由にする事を願います。

私は、あなたが、あなたの聖なる名前の力によって、全ての鎖を壊し、全ての妨げを除去する事を願います」

　カルタゴの司教キプリアヌスの祈祷文が古代から存在してきたのは明らかである。

　カルタゴの司教キプリアヌスの祈祷文はキリスト紀元である西暦の最初の数世紀の間のキリスト教の秘伝の原型の注目するべき記憶を含んでいる。

　象徴的な聖人の伝説である「黄金伝説」の「黄金」という形容は「黄金伝説」の性質を十分に表している。

　秘伝伝授者の目から見ると、黄金は濃縮された光である。

　カバラの神の数は黄金の数と呼ばれていた。

　ピタゴラスの倫理道徳的な教訓はピタゴラスの「黄金詩篇」に記されている。

そのため、ロバが重要な役割を果たすアプレイウスの神秘的な作品は黄金のロバと呼ばれている。

キリスト教徒がロバを敬礼していると異教徒は非難した。

キリスト教徒がロバを敬礼しているという誹謗中傷は異教徒が考案した代物ではなかった。

キリスト教徒がロバを敬礼しているという誹謗中傷はサマリアのユダヤ教徒が考案した代物である。

サマリアのユダヤ教徒は神についてのカバラの概念をエジプトの象徴で表現した。

サマリアのユダヤ教徒は知を六芒星といった魔術の星で表現してレムファンという名前のエジプトの神として敬礼した。

サマリアのユダヤ教徒は知をエジプトの神アヌビスで表現してアヌビスを Nibbas という名前に変えた。

サマリアのユダヤ教徒は大衆の宗教または軽信を神 Thartac という象徴で表した。

サマリアのユダヤ教徒は神 Thartac を本を持っているマントをまとっているロバの頭を持っているもので表した。

キリスト教は、理解と知を圧倒してしまった、普遍の神託のふりをした、神 Thartac または盲信と大衆の軽信による支配であるとサマリア人のユダヤ教徒の律法学者は誤って主張した。

そのため、サマリアのユダヤ教徒は異教徒との交流でキリスト教徒と同一視されたと聞くとロバの頭の崇拝者であるキリスト教徒と混同しない様に抗議して頼んだ。

哲学者はサマリアのユダヤ教徒によるキリスト教をロバに例える偽の啓示を笑いものにした。

テルトゥリアヌスは現代でも現存しているローマの風刺画について話している。

ローマの風刺画には栄光に満ちた神 Thartac がキリスト教の神として誤って描かれている。

テルトゥリアヌスは、「不条理だから私は信じる」という有名な言葉の作者であるが、神 Thartac がキリスト教の神として誤って描かれている風刺画を大いに笑いものにした。

アプレイウスの黄金のロバは、神 Thartac についての隠された口伝である。

黄金のロバは魔術の叙事詩的な小説である。

また、黄金のロバはキリスト教に対する風刺小説である。

疑い無く、一時、黄金のロバの著者アプレイウスはキリスト教徒であった。

少なくとも、アプレイウスは、アプレイウスがロバに変身する、象徴的な魔術小説である黄金のロバで、アプレイウスがキリスト教徒であった、と暗示して見せた。

黄金のロバは後記の様な話である。

アプレイウスはテッサリアを旅していた。

テッサリアは誘惑術の国である。

アプレイウスは妻が魔女である家でもてなしを受けた。

アプレイウスは魔女の家のメイドを誘惑して女主人の秘密を手に入れようと考えた。

メイドは魔女が鳥に変身するための魔法の薬をアプレイウスに渡すと約束した。

しかし、メイドが箱を間違えたためアプレイウスはロバに変身してしまった。

メイドは、正しい姿を取り戻すには薔薇を糧として食べるだけで十分である、と話してアプレイウスを慰めた。

薔薇は秘伝伝授の花である。

夜は薔薇を見つけるのが難しい時である。

翌日まで待つと決めてメイドはロバに成ったアプレイウスを馬小屋に入れたため強盗に連れて行かれてしまった。

薔薇を見つける機会はほぼ無く成ってしまった。

薔薇はロバのために用意されていない。

庭師は杖で動物を追い払う。

長く悲しくとらわれている時にアプレイウスはアプレイウスの話に似ているプシュケの話を聞く。

プシュケの不思議な象徴的な口伝はアプレイウスの体験の核心と詩的性質の様である。

アプレイウスが魔術の秘密を得ようとした様に、プシュケは不意を突いて愛の神エロスの秘密の姿を見ようと望んだ。

アプレイウスは人の姿を失い、プシュケは愛の神エロスを失う。

アプレイウスは強盗の奴隷に成ってしまい、プシュケは国外追放されて、さまよい、愛の神ウェヌスの怒りの下で生きる事に成ってしまう。

しかし、地獄を旅した後プシュケは天に受け入れられた。

そして、神々がルキウス アプレイウスに同情した。

夢の中で女神イシスがアプレイウスの前に現れて啓示で知らせて次のイシスの祭の儀式の時にイシスの祭司が薔薇をアプレイウスにもたらすと約束した。

イシスの祭の時が来た。

黄金のロバでアプレイウスはイシスの祭の行列を長大に記している。

黄金のロバでのイシスの祭の行列の説明は知る価値が有る。

なぜなら、黄金のロバでのイシスの祭の行列の説明はエジプトの神秘の鍵をもたらす。

最初に、仮装した男性達が奇形の動物達を連れて来る。

奇形の動物達を連れて来た仮装した男性達は大衆向けの例え話を意味する。

続いて、大いなる女神イシスの像を映している２つの鏡を両肩に負っている女性達が花々をまき散らしている。

前記の様に、男性は先行し考えを明確に話す。

母の直感によって、無意識に高位の真理を反映して、女性は考えを飾って美しくする。

その後に、「光をもたらすもの」として男性達と女性達が共にやって来る。

「光をもたらすもの」として共にやって来た男性達と女性達は、知と命をもたらす自発的な者と受容的な者という２つのものの一致を意味する。

「光をもたらすもの」の光の後に、若い音楽家達が来る。若い音楽家達は調和を意味する。

続いて、最後に、数３の３つ１組の神々の像と、大いなる秘儀祭司が来る。

大いなる秘儀祭司は、大いなる女神イシスの像の代わりに、杖ケーリュケイオンを載せた黄金の球を運んでいる。

ルキウス アプレイウスは大祭司の手中に薔薇の王冠を見つける。

ロバに成っているアプレイウスは追い払われずに大祭司に近づけた。

アプレイウスは薔薇を糧として食べて人の姿を取り戻す。

学の有るアプレイウスは黄金のロバの全てを知的に記した。

また、学の有るアプレイウスはルキウス アプレイウスとロバという二重の性質に合う様に英雄的な話と滑稽な話を黄金のロバの全てに混ぜている。

アプレイウスは古代の終わりにおける古代の世界のラブレーでありスヴェーデンボルグであった。

キリスト教の大いなる祖師達は黄金のロバの神秘主義を理解できなかったか理解を拒んだ。

「神の国」という本の中で著者アウグスティヌスは真剣にアプレイウスが文字通りロバに変身したと信じるべきかどうか疑って、結論として何も導けない異常な現象と限って可能性を認める気に成った様に思われる。

「結論として何も導けない異常な現象と限った」のが、もしアウグスティヌスの皮肉であれば、激しい強烈な皮肉であると認めざるを得ない。

しかし、「結論として何も導けない異常な現象と限った」のが、もし、アウグスティヌスの無邪気な正直さからだとしたら――。

しかし、マダウラの鋭い弁論家であったアウグスティヌスは無邪気に正直にいられなかったはずである。

イエスが幼子の神であると気づかないでベツレヘムのロバとして誤ってイエスを笑いものにした古代の神秘の秘伝伝授者は、実に、盲目で不幸であった。

幼子の神イエスは馬小屋の中で平和的な動物達を照らしていた。

神の子イエスは過去と未来の全てを一致させる星をひたいの上に載せていた。

無能無力を悟った哲学者が、勝利したキリスト教を侮辱しようとしている間に、教会の教父はプラトンの雄大さを全て身につけて神の言葉イエスという生きている現実に基づく新しい哲学を創造した。

神の言葉イエスは、教会に常に存在する。

神の言葉イエス(の精神)は、各キリスト教徒の中で再生する。

神の言葉イエスは、人の中で不死である。

仮に、キリスト教が自己犠牲と献身の教えでなければ、プロメテウスの夢想より、尊大な夢想と成っていたであろう。

キリスト教は、神々しいので人間らしく、人間らしいので神々しい。

第３巻 第６章 カバラの絵と神聖な象徴

　救い主イエスの厳しい戒めに従って、原初の教会は無上の神聖な神秘を大衆に冒涜する機会を持たせない様にさらさなかった。

　洗礼と、パンをイエスの肉と思って頂く聖体エウカリスティアは入門の進み具合によって認められた。

　また、聖書も隠された。

　聖書の自由な研究と、特に解釈は祭司だけの物であった。

　さらに、性質的に、聖書より少数の人にだけ絵を明かした。

　当時の感覚としてイエス キリストの姿を再現した絵を控えた。

　そのため、ローマの初期キリスト教徒の地下墓所カタコンベの絵は、大部分が、カバラの象徴である。

　鹿が飲みに来る４つの川によるエデンの十字が描かれていた。

　ヨナ書のヨナの謎の魚の代わりに、双頭の蛇が描かれている事が有った。

　オシリスの絵を思い出させる、棺から復活している男性が描かれていた。

　前記の、カバラの象徴は後世にカバラの神聖な口伝を物質化して地に堕とした偽のグノーシス主義者が悪用、誤用したせいで禁止された。

　教会はグノーシス主義という名前を常に拒絶したわけではない。

　使徒ヨハネの口伝と結びついた考えを持つ真のグノーシス主義の教父は完全なキリスト教徒をグノーシス主義者と呼んでいた。

　正統なキリスト教徒であったかは疑わしいが完全なカバリストであった大いなるシュネシオスは別として、イレナエウスとアレクサンドリアのクレメンスは完全なキリスト教徒をグノーシス主義者と呼んでいた。

　偽のグノーシス主義者は、皆、位階制の秩序に反抗した。

偽のグノーシス主義者は、神聖な知を大衆に拡散して、神聖な知を引き下げようとした。

偽のグノーシス主義者は、理解の代わりに、幻視を用いようとした。

偽のグノーシス主義者は、位階制の宗教の代わりに、個人的な狂信を用いようとした。

特に、偽のグノーシス主義者は、賢明なキリスト教による落ち着きと貞淑な結婚と節制の母である法への従順の代わりに、神秘主義的な性欲の誤った自由を用いようとした。

物質的な肉体的な手段による忘我状態への誘導と、神性の代わりとしての催眠の応用は、インドの黒魔術を続けた偽のグノーシス主義といったカインの宗派における不変の傾向であった。

教会はグノーシス主義を精力的に禁止するほかなかった。

そして、教会はグノーシス主義の禁止という方針を変えなかった。

地にはびこった毒麦を鋤で掘って火で燃やすと、知の善い種まで被害を受ける事が有るのだけが悔やまれる。

(マタイによる福音 13 章の「毒麦の例え」)

生殖と家庭の敵である偽のグノーシス主義者は放蕩を増やして不毛を保証しようとした。

偽のグノーシス主義者は、物質を精神化するふりをした。

しかし、実際には、不快な形で、偽のグノーシス主義者は、精神を物質化した。

偽のグノーシス主義者の神学は、アイオーンと呼んでいる世界における性交や肉欲による性交に満ちている。

バラモンの様に、偽のグノーシス主義者は死を男性器の象徴の下に敬礼した。

偽のグノーシス主義者の創造とは、無限の自慰である。

偽のグノーシス主義者の身代わりによる罪のつぐないによる救いとは、永遠の中絶である。

奇跡によって位階制から逃げられると誤って当てにして、まるで位階制の外での奇跡は無秩序や悪を証明するかの様に、偽のグノーシス主義者は、「魔術師シモン」の時代から、大いに驚異を起こした。

偽のグノーシス主義者は、確立されている宗教の代わりに、黒魔術の汚れた儀式を用いた。

偽のグノーシス主義者は、聖体エウカリスティアにおけるイエスの血と思って頂く赤ワインの代わりに、血を出現させた。

偽のグノーシス主義者は、天の子羊の平和な清らかな晩餐の代わりに、食人の聖体エウカリスティアを用いた。

大異端者 Marcos は、ウァレンティヌスの弟子である。

大異端者 Marcos は、2 つの杯でミサを行った。

大異端者 Marcos は、小さい方の杯に赤ワインを注いだ。

そして、大異端者 Marcos は、呪文を唱えて、血の様な酒の様な代物を沸騰する様に湧き出させて大きい方の杯を満たした。

大異端者 Marcos は、祭司ではない。

大異端者 Marcos は、驚異現象を起こす事で、神が祭司にする叙階を大異端者 Marcos に奇跡によって行ったという嘘を証明しようとした。

大異端者 Marcos は、全ての弟子を鼓舞して目の前で同じ驚異現象を起こさせた。

特に女性の弟子は男性の弟子より大異端者 Marcos と同じ驚異現象を起こす事に成功したが、結果として、けいれんし忘我状態に成ってしまった。

大異端者 Marcos は、女性の弟子に息を吹きかけて狂気を伝染させて、大異端者 Marcos と大異端者 Marcos の宗派のために、全ての思慮分別だけではなく全ての良識も忘れる事を女性の弟子に誓わせた。

偽のグノーシス主義者は、誤った形で女性を祭司の中に入れる事を常に妄想した。

なぜなら、偽のグノーシス主義者は、誤った男女平等によって、無秩序を家庭にもたらして、つまずきの石を社会の道に置いた。

母に成る事が、女性が真の祭司に成る事である。

謙虚、慎みが、家庭の作法であり、家庭の宗教の作法である。

真の女性の祭司は謙虚で貞淑な母である事を、偽のグノーシス主義者は、理解できなかったか、理解し過ぎていた。

偽のグノーシス主義者は、母性という神聖な先天性を誤らせて、男性と女性の間の壁を転倒させて、誤った自由を肉欲に用意した。

しかし、偽のグノーシス主義者の全てが、わいせつへの嘆かわしい正直さという性質を持っていたわけではない。

正反対に、偽のグノーシス主義者である、モンタノス派は、実践不可能にするほど倫理道徳を誇張した。

モンタノスの厳しい誤った教えはテルトゥリアヌスという逆説的な極端な天才を誘惑した。

モンタノスは、プリスカとマキシミラという 2 人の偽の女預言者または催眠術師と共に、無制限の狂乱と忘我状態による全ての放蕩に身を任せた。

自然は狂乱と忘我状態といった過剰行為の行為者に対して報復を欠く事は無い。自然は狂乱と忘我状態といった過剰行為の行為者に対して報復する。

モンタノス、プリスカ、マキシミラは支離滅裂に狂い自殺した。

大異端者 Marcos の考え、偽のグノーシス主義は、汚された物質化されたカバラであった。

神はアルファベットの文字によって全てを創造した、と偽のグノーシス主義者は夢想した。

アルファベットの文字は神による多数の放射物の様な物であり存在を生成する力を持っている、と偽のグノーシス主義者は夢想した。

言葉は全て力を持っていて実質的にも全く現実的にも奇跡を起こす、と偽のグノーシス主義者は夢想した。

前記は、ある意味では正しい。

しかし、前記は、大異端者 Marcos の異端の宗派の意味では誤っている。

偽のグノーシス主義の意味では誤っている。

大異端者 Marcos の異端の宗派は、幻覚によって現実を補った。

大異端者 Marcos と弟子は、自身を目に見えなくできると思い込んだ。

なぜなら、大異端者 Marcos と弟子は、催眠状態で望んだ所に精神的に自身を移動できると思い込んだ。

偽の神秘主義では、生と夢を頻繁に混同して、支配的な夢が現実を侵害して覆い隠してしまう。

偽の神秘主義は、極端な愚かさによる支配である。

想像力の自然な機能は映像と形を呼び起こす事である。

しかし、奇形の子の妊娠の現象と、奇形の子の妊娠に似た多数の事実が証明している様に、異常な興奮状態では想像力は形を実現できる。

公認の科学は、想像が実現する事を、頑なに拒絶するよりも、賢明に研究すれば良いのだが。

キリスト教は、奇形の子の妊娠といった混乱的な創造に、まさに、悪魔の奇跡という名前で烙印を押している。

奇形の子の妊娠といった混乱的な創造は、「魔術師シモン」の異端派、Menander の異端派、大異端者 Marcos の異端の宗派の驚異現象である。

19 世紀でも、ロンドンに亡命した、ヴァントラスという名前の偽のグノーシス主義者が、血を空(から)の杯の中や聖体のパンの上に冒涜的に出現させている。

不適切なヴァントラスは、大異端者 Marcos の様に、忘我状態に成って、位階制が地に堕ちて無制限に性交にふける抑制せずに性欲にふける偽の聖職者が将来勝利するという偽の予言をする。

偽のグノーシス主義による万能な汎神論の後に、大異端者 Marcos による二元論に至り、ペルシャの祭司マギの偽の弟子に流行した偽の秘伝伝授が宗教的な教えとして明確に話された。

悪の擬人化は、神自身と争う神、光の王である神に相当する闇の王という誤った考えをもたらした。

エリファス レヴィが抗議の意思を精力的に表明している、サタンの遍在と支配権という悪質な考えは、偽のグノーシス主義の時代の考えが原因である。

エリファス レヴィは、堕天使についての口伝を肯定も否定もしない。

エリファス レヴィは、堕天使について、信心に関する全てのものと同様に、神のカトリックの法王のローマ教会の無上の誤りが無い絶対の決定に従う。

ただし、堕天の前に堕天使に指導者がいたと仮定しても、堕天によって堕天使は指導者がいない全くの混乱に陥ったはずである。

神の不変の正義だけが秩序を混乱にもたらせる。

全ての力の源泉である神から離れた、他の堕天使より罪深い、堕天使の王者は全ての追放者の中で最下位者、最も無能無力な者である。

もし神を忘れた者を罪と死に引き寄せる力が自然に存在するとしたら、星の光という力である。

　星の力は堕天使、堕落した霊にも従う道具である、とエリファス レヴィは認める。

　全角度からの考えと全くの正統性を理解可能な完全な説明を用意して、星の力について後で話すつもりである。

　星の光について話した結果もたらされる、隠された考えの大いなる秘密の啓示は、降霊術、全ての不思議な体験、磁気の催眠術の濫用、テーブル ターニング、奇跡と幻覚につながる全ての物の、危険性を明らかにするであろう。

　アリウスは、父である神ヤハウェ自体とは「異質」である神の子イエスによる混成の創造という誤った考えによって、マニ教への道を用意してしまった。

　アリウスによる父である神ヤハウェと神の子イエスは「異質」であるという誤った考えは、神の中の二元論という誤った仮説に相当する。

　神の中の二元論という誤った考えは、絶対者である神の中の優劣という誤った考えをもたらす。

　神の中の優劣という誤った考えは、無上の力の中の優劣という誤った考えをもたらす。

　神の中の優劣という誤った考え、無上の力の中の優劣という誤った考えは、父である神ヤハウェと神の子イエスの不一致の可能性と必然性という誤った考えをもたらす。

　神の中の優劣、無上の力の中の優劣、父である神ヤハウェと神の子イエスの不一致という誤った考え、または、神についての誤った三段論法の各段の優劣や不一致は、神という概念への誤った否定に必然的に至ってしまう。

　神の言葉イエスは善か悪か、について何か疑問が存在するか？　いいえ！　神の言葉イエスは善である！

神の言葉イエスは神か悪魔か、について何か疑問が存在するか？　いいえ！　神の言葉イエスは神である！

ギリシャ語で二重母音「ι」を「同質」を意味する「ομοούσιος」に足して「類似」を意味する「ομοιούσιος」に変えた事がもたらす、大いなる二者択一は「神の言葉イエスは神か神ではないか？」という疑問であった。

ニカイア公会議は、父である神ヤハウェと神の子イエスは「同質」であると宣言して、世界を救った。

(325 年のニカイア公会議で父である神ヤハウェと神の子イエスはアリウス派の様に「類似」ではなく「同質」であると決定した。)

ただし、現実の原理が普遍のつり合いを形成していると知っている人だけが「父である神ヤハウェと神の子イエスは『同質』である」という真理を認める事ができる。

カバラへの誤解が、偽のグノーシス主義、アリウス主義、マニ教をもたらした。

教会が信者にカバラという危険な知の研究を禁止したのは当然であった。

カバラの鍵は無上の祭司のためだけの物にするべきである。

事実、少なくとも、法王レオ 3 世まで、法王がカバラという秘密の口伝を保存してきた様に見受けられる。

法王レオ 3 世は「Enchiridion」という隠された典礼書をカール大帝に与えた、と言われている。

法王レオ 3 世の「Enchiridion」はソロモンの鍵という無上の秘密の文字を含んでいる。

法王レオ 3 世の「Enchiridion」は隠されて保存されていた。

後に、法王レオ 3 世の「Enchiridion」は広まった。

教会は法王レオ 3 世の「Enchiridion」を非難する必要に迫られた。

結果的に、法王レオ３世の「Enchiridion」は黒魔術の魔術書に分類されてしまった。

エリファス レヴィは稀少で興味深い法王レオ３世の「Enchiridion」の古い写本を所有している。

カバラの鍵の喪失は、教会の誤りの無さの喪失をもたらさなかった。

常に神の聖霊は教会を助けている。

しかし、カバラの鍵の喪失は、大いなる暗闇を聖書の解釈にもたらした。

カバラの鍵の喪失によって、エゼキエル書とヨハネの黙示録の無上の象徴は全く理解不能に成ってしまった。

使徒ペトロの正統な後継者である法王が、エリファス レヴィがささげる本書「魔術の歴史」を受け取ります様に。

法王が最も卑しい身分の人の子であるエリファス レヴィの労苦を祝福してくれます様に。

エリファス レヴィは知の鍵の１つを見つけたと信じています。

エリファス レヴィは知の鍵の１つを、理解と信心の宝庫の鍵を開けたり閉めたりする権利を唯一持つ法王の足元に置きに来ました。

第 3 巻 第 7 章 アレクサンドリア学派の哲学者

　プラトンの学派は断絶の直前にアレクサンドリアで大いなる光を広めた。

　しかし、3 世紀間の戦いの後に勝利したキリスト教は古代の教えや考えのうち永遠であり正しい全てのものを同化していた。

　新しい宗教キリスト教の最後の好敵手アレクサンドリア学派は防腐死体ミイラに電気を流して復活させて、生きている人々の進歩を止めようと試みた。

　もはや競争が激しく成るはずがない時に来ていた。

　アレクサンドリア学派の異教徒は、意に反して、知らないで、全ての時代に立ち向かうためにナザレのイエスの弟子達キリスト教徒が建てた神の記念建造物の建造に従事していた。

　アンモニオス サッカス、プロティノス、テュロスのポルピュリオス、プロクロスは、知と徳の歴史における大いなる高名な人達である。

　アレクサンドリア学派の神学は高尚である。

　アレクサンドリア学派の考えは倫理道徳的である。

　アレクサンドリア学派の哲学者自身の振る舞いは禁欲的で厳しかった。

　実に、心に触れて感動させる当時の第一の象徴、アレクサンドリア学派という星座の全ての星のうち最も明るい星は、アレクサンドリアのテオンの娘ヒュパティアである。

　ヒュパティアは、学の有る処女の女性であった。

　ヒュパティアの理解と徳は洗礼を受ける事が可能なほどであった。

　しかし、偽のキリスト教徒がヒュパティアを拉致して洗礼を受けさせようとしたが、ヒュパティアは良心の自由のために殉教者として殺されてしまった。

　(

エフェソス公会議はヒュパティアを殺した総司教キュリロスを「教会を破壊するために生まれ育ってきた怪物である」と非難した。

　現在も教会暦による聖人カレンダーに総司教キュリロスの名前は無い。

　)

　キュレネのシュネシオスはヒュパティアの学校で教育を受けた。

　シュネシオスはプトレマイスの司教に成った。

　シュネシオスは、最も学の有る哲学者の１人であり、最初の数世紀のキリスト教徒の最良の詩人である。

　「大衆は理解しやすいものを常に軽蔑して嫌う。そして、大衆が求めるものは、だまされる事である」という言葉はシュネシオスが話した物である。

　後記の様に、シュネシオスへの司教の位階の授与が提案された時に、シュネシオスは友人への手紙に書いている。

「知に引き寄せられる人、真理の熟考に自ら引き寄せられる人は、大衆が真理を受け入れられる様に、真理を隠す必要に迫られる。

実際に、光と真理には類推可能性が存在する。

実際に、人の肉眼と大衆の理解には類推可能性が存在する様に。

光を急に伝達すると明る過ぎて肉眼を眩ませてしまう。

光だけより、影が和らげた光線は視力が未だ弱い肉眼に役立つ。

そのため、私の意見では、大衆には作り話が必要である。

真理の輝きによって真理を熟考する力が不十分である人には真理は有害である。

私が真理についての意見をそのまま話すのを控える事と私が真理について例え話で話す事を教会の祭司の法が許すのであれば、私は提案された司教の位階を受け入れる事ができます。

言い換えると、私が提案された司教の位階を受け入れる条件は、私は自分の家では真理についてありのままに話す哲学者のままであるが、公の場では真理を例え話でしか話さない事です。
事実、どの様な共通が大衆と高尚な知の間に存在できるか？　大衆と高尚な知の間に共通は有り得ない！
真理を隠したままにする必要が有る。
大衆には大衆の不完全な理性につり合う教育が必要である」

　前記の様な表現でシュネシオスが記したのは残念である。
　なぜなら、大衆の教育を任された時に、大衆への教育の制限をあらわにするのは思慮が足りない。
　無思慮の結果として現在でも「大衆には宗教が必要である」という無思慮に共通の言葉が存在する。
　問題は「大衆とは何者か？」という事である。
　なぜなら、理解と倫理道徳性において大衆である事を望む人はいない。
　シュネシオスの最も注目するべき作品は夢についての論文である。
　夢についての論文でシュネシオスは純粋なカバラの考えを話している。
　そのため、夢についての論文でのシュネシオスの神知学者としての高尚な理解し難い表現形式は異端を疑われた。
　しかし、シュネシオスには党派心の強い人の頑固も狂信も無い。
　シュネシオスは、疑問は率直に話したが、位階制の権威に従って、教会の平和の内に生きて死んだ。
　前記以上の事を司教シュネシオスの下にいた祭司と信者はシュネシオスから求めなかった。

シュネシオスによると、夢を見ている状態は魂の特性と非物質性を証明している。

　夢を見ている状態では好みと欲望に従って魂は天国、故郷、光で輝く宮殿、暗い洞窟を自ら創造する。

　夢の傾向によって心の進歩を評価できる。

　なぜなら、夢の中では自由意思が休止している。

　夢は支配的な自然な傾向に完全に委ねられる。

　思考の反映や影として結果的に映像がもたらされる。

　予感が具体的な形を取る。

　記憶が希望と混ぜられる。

　夢という本は、光を放つ文字で記される時もあり、闇の文字で記される時もある。

　しかし、夢を解読する事によって夢の正確な法則を確立できる。

　ジェロラモ カルダーノはシュネシオスの夢についての論文について長い注釈書を書いた。

　カルダーノは夢の説明を付け加えた夢の辞典によってシュネシオスの夢についての論文を補完した、と言える。

　カルダーノの夢についての注釈書は行商人が扱っている夢についての取るに足りない諸々の本とは完全に区別できる。

　カルダーノの夢についての注釈書は隠された知において重要である。

　原典研究のいくつかの学派は偽ディオニュシオス アレオパギタという偽名で記された注目するべき作品の作者はシュネシオスであると推測している。

　ともかく、偽ディオニュシオスは偽名で、偽ディオニュシオス文書はアレクサンドリア学派の輝かしい時代に作られた物である。

　偽ディオニュシオス文書はキリスト教が高位のカバラの考えを獲得した記念碑である。

カバラに入門した人だけが偽ディオニュシオス文書を理解可能である。

偽ディオニュシオス文書の主要な論文は「神名論」、「天上位階論」、「教会位階論」である。

「神名論」はラビの神学の全ての神秘を説明し簡易化している。

(ラビはヘブライ語で師を意味する。)

偽ディオニュシオスによると、神は無限の定義不可能な言い表せない原理である。

神の中では神は唯一で言い表せない。

しかし、人が神の完全さに対して抱くあこがれを明確化した名前を人は神の名前にしている。

神の名前の総括と、神の名前と数の関係は、人の思考における無上のものを形成する。

神学は、神についての知というより、人の無上のあこがれについての知である。

その後に、偽ディオニュシオスは「天上位階論」で神の聖霊の位階、天使のヒエラルキーを３つ１組が統治している数の原初の位階によって確立している。

偽ディオニュシオスの「天上位階論」の神の聖霊の位階、天使のヒエラルキーは３組の３つ１組である。

偽ディオニュシオスの「天上位階論」の神の聖霊の位階、天使のヒエラルキーを模範にして、地上の祭司のヒエラルキーを確立するべきである。

カトリック教会は地上の祭司のヒエラルキーの完全な模範である。

法王の下の祭司のヒエラルキーは枢機卿、高位聖職者である司教、司祭の３組である。

法王の下の祭司のヒエラルキーは司教枢機卿、司祭枢機卿、助祭枢機卿、大司教、司教、属司教、教区司祭または司教代理、司祭、助祭である。

副助祭職、侍祭といった下級聖職位、聖職者という 3 つの予備の位階を経て、神聖な法王の下の祭司のヒエラルキーに前進する。

祭司のヒエラルキーの全ての機能は神の聖霊、天使や聖人と対応している。

祭司のヒエラルキーの祭司は三位一体の各人格の中で三重の神の名前をたたえる。

なぜなら、神の三位一体の各人格に満ちている分割されない三位一体がたたえられる。

偽ディオニュシオスの「天上位階論」や「教会位階論」の超越的な神学は原初の教会の神学である。

多分、「天上位階論」や「教会位階論」の作者がディオニュシオス アレオパギタとされたのは、「天上位階論」や「教会位階論」の口伝がディオニュシオス アレオパギタと 12 使徒の時代にまで遡(さかのぼ)るからに過ぎない。

同様に、「形成の書」のラビの著者は 21 祖アブラハムとされた。

なぜなら、「形成の書」は 21 祖アブラハムのヘブライ人の中で父から子へ受け継いだ口伝を形にした物である。

ともかく、偽ディオニュシオス文書は、知にとって価値がある。

偽ディオニュシオス文書は、無上の哲学の完全な理解と全く完全な非難を超越した神学を結合して、古代の秘伝伝授とキリスト教の福音の神秘的な結合を神聖化している。

第 4 巻 魔術と文明化

ダレト

HERMETIC MAGIC

第 4 巻 第 1 章 未開の民族の魔術

キリスト教の光を前に、黒魔術は後退した。

十字のキリスト教がローマを圧倒した。

驚異現象は、キリスト教という新しいローマの輝きを包囲する、未開の地域という闇の圏内に後退した。

ハドリアヌス帝の時代に、多数の驚異現象のうちの 1 つである、フィリニオンの驚異現象が確証された。

小アジアのトラレスに、生まれはコリントである、フィリニオンという名前の若い貴族の少女がいた。

フィリニオンは、デモクラトスとシャリトの娘であった。

フィリニオンは、自分より身分の劣る若者マカテスに夢中に成った。

フィリニオンとマカテスは結婚できなかった。

なぜなら、フィリニオンは、すでに話した様に身分が高い上に、一人娘で裕福な財産の相続人であった。

マカテスは、フィリニオンより身分の劣る男性で、宿屋に泊まっていた。

フィリニオンの情熱は障害によって強まった。

フィリニオンは、家出してマカテスと同棲した。

禁じられた交際が始まり 6 か月間続いた。

フィリニオンは、両親に見つかって連れ戻され用心深く隔離されてしまった。

フィリニオンをトラレスからコリントへ連れて行く措置が計画された。

フィリニオンは、恋人のマカテスから引き離されて目に見える程やつれてしまった。

フィリニオンは、心を病んで衰弱して笑わなく成ってしまい眠れなく成ってしまい食事を拒否する様に成ってしまった。

とうとうフィリニオンは、死んでしまった。

両親はフィリニオンをトラレスからコリントへ連れて行く計画を取りやめた。

両親は地下室を購入して豪華な衣装を着せたフィリニオンの死体を安置した。

フィリニオンの墓所の周囲は両親の所有地であった。

安置後にフィリニオンの墓所に入った人はいなかった。

なぜなら、異教徒は死んだ人の墓で祈らない。

両親は醜聞を避けようと望みフィリニオンを密葬した。

そのため、マカテスは、恋人のフィリニオンに起きた事を知らなかった。

フィリニオンが墓所に安置された後の夜、マカテスが眠ろうとした時、ドアがゆっくりと開いた。

マカテスは、ランプを持ってドアへ進むと、豪華な衣装を着たフィリニオンを見つけた。

フィリニオンは、青白く冷たく、恐ろしいほどにマカテスを見つめていた。

マカテスは、フィリニオンに走り寄り両腕で抱きしめ、愛撫しながら、たくさんの質問を投げかけた。

マカテスとフィリニオンは共に夜を過ごした。

夜明け前、恋人のマカテスが深い眠りに落ちている間に、フィリニオンは起きて姿を消した。

フィリニオンには、老女の乳母がいた。

乳母は、フィリニオンを愛していた。

乳母は、フィリニオンの死をひどく嘆いていた。

乳母は、フィリニオンの不品行の共犯者であったのかもしれない。

そのため、愛しいフィリニオンが埋葬されてから、乳母は、眠れなく成ってしまい、一種の興奮状態で夜に頻繁に起きてしまい、マカテスの家の周囲をさまよっていた。

　そのため、フィリニオンの埋葬から数日後、乳母は、マカテスの寝室に明かりがついているのに気づいた。

　乳母は、近づきドアの隙間から覗いて、フィリニオンが恋人のマカテスの隣に座って沈黙してマカテスを見つめマカテスの抱擁に身を任せているのを認めた。

　乳母は、気が動転して、走って戻りフィリニオンの母を起こして見た事を説明した。

　乳母の話は、最初は、幻覚による戯言(たわごと)と思われた。

　しかし、最後には、乳母の嘆願に説得されて、フィリニオンの母は立ち上がりマカテスの宿に行った。

　フィリニオンとマカテスは眠っていて、フィリニオンの母がドアを叩いても返事が無かった。

　フィリニオンの母は、ドアの隙間から覗いた。

　ランプの明かりは消えていた。

　しかし、一筋の月光が部屋を照らしていて、フィリニオンの母は、娘のフィリニオンに着せた衣装がイスの上に有り、ベッドの中に２人の人物が眠っているのを識別できた。

　フィリニオンの母は、恐怖に襲われ、震えながら家に戻った。

　フィリニオンの母には、娘のフィリニオンの墓所を訪れる勇気は無かった。

　フィリニオンの母は、残りの夜を動揺と涙の内に過ごした。

　翌日、フィリニオンの母は、マカテスの仮の宿に行って、マカテスに穏やかに質問した。

　マカテスは、毎晩フィリニオンがマカテスの所を訪れる事を告白した。

マカテスは「どうして、あなたは娘のフィリニオンを私に与えるのを拒むのですか？」と話した。

「私達マカテスとフィリニオンは神々の前で婚約しました」

　マカテスは、小箱を開けて、フィリニオンの母にフィリニオンの指輪と帯を見せて、後記の様に、話した。

「昨晩フィリニオンは、指輪と帯を私に与えて、私マカテス以外の男の物には絶対に成らないと誓ってくれました。

もう私達マカテスとフィリニオンを引き裂かないでください。

なぜなら、私達マカテスとフィリニオンは相互の誓いで１つに成っています」

　フィリニオンの母は「フィリニオンを求めて、マカテス、お前が(フィリニオンの)墓に行け」と話した。

「4 日前にフィリニオンは死んだ。

マカテス、お前をだますために、魔女かストリゲスがフィリニオンの姿に変身しているのに違い無い。

マカテス、お前は死者の夫だ。

翌日には、マカテス、お前の髪は白く成るだろう。

翌々日には、マカテス、お前も死んで埋葬されるだろう。

魔女かストリゲスを利用して、神々が、名誉を傷つけられた家族の報復をしてくれているのだ」

　マカテスは、フィリニオンの母の言葉によって、白く成り震えた。

　マカテスは、冥界の力に弄ばれていたのでは、と恐れ始めた。

　マカテスは、フィリニオンの母に今晩フィリニオンの父を連れて来る様に頼んだ。

　マカテスは、フィリニオンの父と母をマカテスの部屋の近くに隠して、フィリニオンの霊が来たら、フィリニオンの父と母に合図で知らせるつもりであった。

フィリニオンの父と母が来た。

そして、フィリニオンが、マカテスの所に来る約束の時間も来た。

マカテスは、ベッドの中で体を完全に覆い隠して眠っているふりをした。

フィリニオンは、服を脱いでマカテスのそばに来た。

マカテスは、フィリニオンの父と母に合図した。

フィリニオンの父と母は、たいまつを持ってマカテスの部屋に入り、フィリニオンを見て大きな叫び声をあげた。

フィリニオンは、顔が青白く成り、ベッドから起き上がると、こもった恐ろしい声で後記の様に話した。

「おおっ、父と母よ、なぜ私の幸福を妬むのですか？
なぜ墓を超えてまでも私を苦しめるのですか？
私の愛は冥界の神々を圧倒しました。
死の力は一時休止しました。
3 日間だけ私は命を復活させました。
しかし、あなたたちの冷酷な好奇心が自然の奇跡を無駄にしました。
あなたたちは私を 2 度殺したのです」

前記の様に、話し終えると、フィリニオンは、ベッドの上で自ら動かない肉塊に戻ってしまった。

フィリニオンの顔色は色あせ、死体の様な悪臭が室内に充満した。

5 日間死んでいた女性の醜い残骸だけが残された。

翌日フィリニオンの驚異現象で都市全体が騒動に成った。

大衆はフィリニオンの話が公開されている円形劇場に群がった。

大衆はフィリニオンの死体が安置されている地下室を訪れた。

墓所にはフィリニオンの存在の痕跡は無かったが、マカテスから贈り物としてフィリニオンが受け取った鉄の指輪と金で覆われた杯を見る事ができた。

　フィリニオンの死体は宿屋のマカテスの部屋にあったが、マカテスが隠した。

　相談された占い師は、フィリニオンの死体を都市の境界の外に埋葬するべきである、と指導した。

　供え物を復讐の女神達フューリズと地上のメルクリウスにささげた。

　天の死んだ人の霊に天へ戻ってもらい、供え物を旅人の神ユピテルへささげた。

　トラレスのプレゴンはハドリアヌス帝の解放奴隷である。

　トラレスのプレゴンはフィリニオンの驚異現象という事実の目撃者であった。

　トラレスのプレゴンは個人的な手紙でフィリニオンの驚異現象を説明した後に、後記の様に、書いている。

「私トラレスのプレゴンはフィリニオンの驚異現象という驚くべき出来事によって混乱している場を静めるために権力を発揮する必要が有った」

　また、後記の様な言葉で、トラレスのプレゴンは個人的な手紙を終えている。

「もし、あなたがハドリアヌス帝に知らせるのが適切であると考えるならば、私トラレスのプレゴンに知らせてください。

私トラレスのプレゴンはフィリニオンの驚異現象を目撃した人を何人か派遣できます」

　フィリニオンの話は事実であると十分に確証されている。

　大いなるドイツの詩人ゲーテはフィリニオンの話を「コリントの花嫁」という名前で知られている物語詩のモチーフにした。

ゲーテは「コリントの花嫁」の両親をキリスト教徒にして、人の情熱と宗教の義務を対立させて詩的に力強く引き立たせている。

中世の研究者は若いギリシャの令嬢フィリニオンの復活または外見上の死を悪霊の憑依として説明した。

エリファス レヴィは、フィリニオンの話に、興奮した昏睡状態を伴う、意識がはっきりとしている夢遊病を認める。

フィリニオンの父と母は、フィリニオンを手荒に覚醒させて、フィリニオンを殺してしまったのである。

大衆は妄想でフィリニオンの話の詳細を全て誇張してしまった。

占い師が供え物をささげる様に指導した、地上のメルクリウスとは、擬人化した星の光である。

星の光は、地上の流体の霊である。

星の光は、傾ける方法を知らないで星の光を目覚めさせる人には致命的である。

星の光は、物質的な命の震源である。

星の光は、磁化された死の貯蔵所である。

星の光は、盲目的な力である。

キリスト教の力は星の光を鎖でつなぎ深淵に投げ入れた。

(ヨハネの黙示録 20 章「天使は古い蛇を鎖でしばり深淵に投げ入れた」)

深淵とは、地の中心を意味する。

星の光は、未開の民族の中に、最後の作品として、最後のけいれんの表現として、巨大な奇形の動物を誕生させた。

どの地域でも福音の伝道者は偶像崇拝の断末魔における化身である醜い姿形の動物と戦う必要が有った。

ワイバーンまたはヴイーヴル、大蛇 Graoully、ガーゴイル、タラスクの話は例え話だけではない(、実話の場合もある)。

倫理道徳の混乱が、物質的な奇形を生じたり、悪魔の姿であると口伝によって考えられている醜い形をある程度実現する、のは確かである。

学者ジョルジュ キュヴィエが組み立てた、巨大な動物の化石の残骸は全て本当に人が創造される前の時代の物であるかどうか疑問が生じる。

巨大な竜は単なる例え話であるのか？

レグルスが戦争で使う機械の兵器で攻撃したと記されている巨大な竜は例え話であるのか？

リウィウスとプリニウスによると、バグラダス川のほとりにいた巨大な竜は例え話であるのか？

バグラダス川の竜の皮の長さは 120 フィート(、35.52 メートル)で、ローマに送られて、ヌマンティア戦争の時まで保存されていた。

人による驚くべき罪に神々が怒ると神々は巨大な動物を地上に派遣する、という古代の口伝が存在する。

人による驚くべき罪に神々が怒ると神々は巨大な動物を地上に派遣する、という古代の口伝は普遍過ぎるため実際の事実に基づいていると考えられる。

そのため、竜といった巨大な動物についての話は、神話の話と言うよりも、歴史上の実話である場合が多い。

(1)文明化という観点でキリスト教が未開の民族を圧倒した時の、未開の民族の歴史には、古代の世界中に広まっていた天の高等な魔術の秘伝伝授の最後の痕跡が見つかる。

また、(2)文明化という観点でキリスト教が未開の民族を圧倒した時の、未開の民族の歴史には、古代の世界の象徴主義が醜悪な偶像崇拝に堕落してしまったのと同時に、原初の啓示が堕落してしまった証拠が見つかる。

　マギの真の弟子の代わりに、占い師、悪人の霊の魔術師、誘惑者が至る所で支配的に成ってしまった。

　人の神格化によって、神は忘れ去られてしまった。

　ローマは皇帝の神格化という人の神格化の見本を多数の属州に見せてしまった。

　ローマ皇帝の神格化は血を好む邪神の邪教を全世界に広めてしまった。

　イルミンスルという名前の下で、ゲルマン民族は、ローマ皇帝アウグストゥスに「ローマ軍の総司令官ウァルスよ、私の軍団を返してくれ！」と嘆かせた族長アルミニウス = 族長ヘルマンを崇拝して人の生贄をささげた。

　ガリア人は、ケルトの神タラニスや神テウタテスの属性をローマを侵略した族長ブレンヌスに当てはめて、族長ブレンヌスをたたえて族長ブレンヌスの巨人像をイグサで建て、ローマ人を族長ブレンヌスの巨人像に詰めて焼き殺した。

　物質主義が至る所で支配的に成ってしまった。

　偶像崇拝は物質主義と同義である。

　偶像崇拝は迷信である様に。

　迷信は、常に劣悪なので、常に残酷である。

　神意はガリアをフランスというキリスト教の国家にする運命に定めていた。

　神意はガリアで永遠の真理の光を輝かせた。

　最初のドルイドはマギの真の魔術の子孫である。

　ドルイドの秘伝伝授はエジプトとカルデアから得た。

　または、言い換えると、ドルイドの秘伝伝授は原初のカバラの最も純粋な源泉から得た。

ドルイドは三位一体を無上の調和であるイシスまたは Ilesus という名前の下で敬礼した。

三位一体のうち、ケルトの神ベレン(または神ベレヌス)またはオリエントの主神ベルは、アッシリア語で「主(である神)」を意味し、ヘブライ語で「主(である神)」を意味するアドナイという神の名前に対応している。

(ケルトの神ベレヌス、ベレンはギリシャの神アポロンと同一視された。)

三位一体のうち、Camul または天使カマエルは、カバラでは神の正義を擬人化した名前である。

イシスまたは Ilesus、ベレン(またはベレヌス)またはベル、Camul またはカマエルという光の三角形の下に、ドルイドは、テウタテスといった 3 つの擬人化された放射物または存在による、神の反映を仮定した。

3 つの神の反映のうち、ケルトの神テウタテスは、エジプト人にとっての神トートであり、神の言葉イエスまたは明確に話された知性である。

(

ケルトの神テウタテスはメルクリウスと同一視された。

トート、ヘルメス、メルクリウス、カドモスはエノクである。

)

3 つの神の反映のうち、力と美は、象徴の様に多様な名前である。

3 つの神の反映のうち、ヴェールをかぶっている幼子を腕で抱いている若い少女という形によって、現在の考えの進歩と未来の考えの進歩を表す神秘の象徴によって、ドルイドは神の 7 つ 1 組を完成した。

ドルイドは、ヴェールをかぶっている幼子を腕で抱いている若い少女という象徴を、神の子イエスを産む処女マリアにささげた。

古代のドルイドは厳しい禁欲生活をした。

ドルイドは最深の注意で神秘について秘密を守った。

ドルイドは自然の知を学んだ。

ドルイドは長い入門の試練の後でのみ新しい達道者を受け入れた。

フランスの都市オータンに高名なドルイドの団体があった。

Saint Foix によると、ドルイドの団体の紋章がフランスの都市オータンに未だ存在する。

ドルイドの団体の紋章は青色である。

ドルイドの団体の紋章には、緑色の(オークの)ドングリで飾られたヤドリギを載せた、銀色の頭をもたげた蛇が描かれている。

ドルイドの団体の紋章で、(オークに寄生している)ヤドリギが(オークの)ドングリで飾られているのは、(オーク以外に寄生している)他のヤドリギと区別するためである。

(ドルイドはヤドリギのうちオークに寄生しているヤドリギを特別視した。)

ドングリはオークに成る。

ヤドリギが自然に(オークの)ドングリの実をつける事は無い。

ヤドリギは寄生植物である。

ヤドリギは独自の実をつける。

ドルイドは神殿を建てなかったが、巨石室ドルメンや森の中でドルイドの宗教の儀式を行った。

どの様な機械的な手段によって、ドルイドが巨石を持ち上げて祭壇を形成したかは、現在でも推測の域を出ない。

アルモリカ地域の曇り空の下で、ドルイドの巨石による建造物は神秘的に未だに見られる。

古代の聖所には、現代人にまで伝わらなかった秘密がある。

先祖の魂は子孫を見守る、とドルイドは教えた。

先祖の魂は子孫の名誉に喜び子孫の恥に苦しむ、とドルイドは教えた。

守護霊である英霊は祖国の木々と石々に隠れている、とドルイドは教えた。

自国のために戦死した戦士は、全ての自分の罪をつぐなった事に成り、気高く自分の務めを果たした事に成り、神の聖霊という位階に昇格し、神々としての力を発揮できる様に成る、とドルイドは教えた。

そのため、ガリア人にとって愛国心とは宗教であった。

必要があれば、侵略に抵抗するために、女性や幼子ですら武器をとった。

ジャンヌ ダルクや 1472 年にフランスの都市ボーヴェを斧アシェットで守った 18 歳の少女「ジャンヌ アシェット」、「斧のジャンヌ」はガリア人の高貴な娘達の伝統を保ったに過ぎない。

愛国心は祖国の土に結びついた記憶という魔術である。

ドルイドは祭司であり医者であった。

ドルイドは星の光という磁気によって治した。

ドルイドは星の光という流体の感化力をアミュレットに籠（こ）めた。

ドルイドの万能薬はヤドリギと蛇の卵であった。

なぜなら、特に、ヤドリギと蛇の卵は星の光を引き寄せる物質である。

ヤドリギを切るドルイドの荘厳な儀式は、ヤドリギに対する大衆の信頼を引き起こして、力強い星の光という磁気をヤドリギに与える。

前記の様にして、特に、ドルイドがヤドリギを祈願と呪文によって強化すると、ヤドリギは不思議な治癒力を発揮した。

エリファス レヴィの先祖ガリア人を軽信者であると非難するなかれ。

多分、ガリア人は現代までに失われてしまった知を知っていた。

いつの日か、磁気学の進歩はヤドリギの吸収する性質を現代人に明かすであろう。

そして、植物の未使用の力を引き出して色彩と風味を増すヤドリギといった吸収性の植物の秘密を理解するであろう。

　マッシュルーム、トリュフ、虫や菌による木の瘤(こぶ)、各種ヤドリギを古代からあるため新しく成るであろう医学の知によって理解して応用するであろう。

　吊るされた男の頭蓋骨から(サルオガセという)コケを集めたパラケルススを笑いものにする事を止めるであろう。

　しかし、学問より先走るなかれ。

　学問が後退するのは、さらなる前進のためである。

第4巻 第2章 女性の影響

神意は、母性という厳しいが優しくもある義務を女性に負わせて、男性からの保護と敬意を得る権利を女性に与えた。

自然は、女性を愛という影響に従わせる。

愛は女性の命である。

女性は、女性の主である男性を愛がもたらす鎖によって誘導する。

女性が、女性の名誉を形成する法に従うほど、女性の名誉を守る法に従うほど、家庭という聖所において、女性の影響力は大きく成るし、女性性への敬意は深く成る。

女性にとって、従わない事、反抗する事は、女性という地位を放棄する事である。

母性以外の偽の解放によって女性を誘惑する事は、不妊、不毛と侮辱が事前に運命づけられた離婚を女性にすすめる事である。

キリスト教だけが、処女性と献身の栄光を女性に求めて、女性を解放する力を持っている。

ローマの第2の王ヌマ ポンピリウスは、ウェスタの処女、ウェスタの巫女という制度を定めた時、女性解放のための神秘を予見していた。

ドルイドは、処女の霊感に耳を傾けて、ほとんど神に対しての様な敬意をサン島の処女の巫女セーヌまたはガリセナエに払って、キリスト教を先取りしていた。

女性は、媚(こび)や悪徳によってではなく、助言によってガリアを統治していた。

ガリアでは、女性の協力無しでは、平和も戦いも成されなかった。

ガリアでは、助言や協力によって、母達は家庭への関心を懇願した。

母性愛的な愛国心が愛国心的な自尊心を調節した時、愛国心的な自尊心は正しさという光の中で輝けた。

　フランソワ ルネ ド シャトーブリアンは、「殉教者」でドルイドの巫女ヴェレダがウドールからの愛に負けたという誤った作り話を記して、巫女ヴェレダを誹謗中傷している。

　ドルイドの巫女ヴェレダは、処女のまま生きて死んだ。

　古代ローマ人がガリアを侵略した時、巫女ヴェレダはすでに高齢であった。

　ドルイドの巫女ヴェレダは、一種の古代ギリシャのデルポイのアポロン神殿の巫女の様な者であった。

　ドルイドの巫女ヴェレダは、大いに荘厳な儀式の中で予言した。

　ドルイドの巫女ヴェレダの神託は、畏敬して保存された。

　ドルイドの巫女ヴェレダは、袖が無い、長い黒い外衣をまとっていた。

　ドルイドの巫女ヴェレダは、頭から足まで、白いヴェールで覆っていた。

　ドルイドの巫女ヴェレダは、バーベインの王冠をかぶっていた。

　ドルイドの巫女ヴェレダは、鎌(かま)を帯につけていた。

　ドルイドの巫女ヴェレダの王笏は、糸巻き棒の形をしていた。

　ドルイドの巫女ヴェレダは、右足にサンダルを履き、左足に一種の爪先が尖って反り返った靴を履いていた。

　後に、ヴェレダの像は、「大足のベルト」、「ピピン 3 世の王妃ベルトラード ド ラン」の像であると誤解された。

　ドルイドの女性の大祭司ヴェレダは、女性の祭司ドルイドの守護神ヘルタの印を持っていた。

　大地の女神ヘルタ(またはネルトゥス)は、若いガリアのイシス、天の女王、神の子イエスを産む処女である。

女神ヘルタは、一方の足を地上に、他方の足を水上に置いた姿で描かれている。

なぜなら、女神ヘルタは、秘伝伝授の女王であり、普遍の知の主である。

通例、女神ヘルタが水上に置いている足は、船によって支えられている。

女神ヘルタの水上の足下の船は、古代エジプトの女神イシスの帆船、または、ほら貝を類推させる。

女神ヘルタの王笏である運命の三女神の糸巻き棒は、黒い部分と白い部分がある糸を巻き取っている。

なぜなら、女神ヘルタは、全ての形と象徴の主であり、概念の外衣(である形)を織る。

女神ヘルタは、上半身が人の女性で下半身が魚である、古代ギリシャの女神セイレーンの象徴的な姿で描かれている場合もある。

または、女神ヘルタは、上半身が美しい人の少女で両脚が 2 頭の蛇である姿で描かれている場合もある。

女神ヘルタの姿のうちの 1 つである両脚の 2 頭の蛇は、ものの流れ、物の電磁気の束、物事の変化を表す。

また、女神ヘルタの姿のうちの 1 つである両脚の 2 頭の蛇は、自然の隠された 2 つの力の表れである 2 つの正反対のものの類推可能性による結合を表す。

上半身が美しい人の少女で両脚が 2 頭の蛇である姿で描かれている女神ヘルタは、メリュジーヌという名前を持っている。

メリュジーヌは、女性の音楽家であり、歌姫であり、調和を明かす古代ギリシャの女神セイレーンと言える。

女神ヘルタが、女王ベルタや妖精メリュジーヌについての伝説の起源である。

(妖精は神の聖霊に近い四大元素の霊である。)

妖精メリュジーヌは、11 世紀にリュジニャンの領主の所に来た、と言われている。

リュジニャンの領主は、メリュジーヌに恋した。

メリュジーヌの正体の謎を探らない、という条件で、リュジニャンの領主とメリュジーヌは結婚した。

リュジニャンの領主は、メリュジーヌの正体を探らないと約束したが、やきもちが好奇心をもたらして、約束を破ってしまった。

リュジニャンの領主は、メリュジーヌを探って、メリュジーヌが変身する現場を見てしまった。

なぜなら、週に 1 日だけ、妖精メリュジーヌは、両脚が 2 頭の蛇である姿に戻ってしまう。

リュジニャンの領主は、絶望と恐怖の叫び声をあげてしまった。

メリュジーヌは、より大きな絶望と恐怖の叫び声で応える事に成ってしまった。

メリュジーヌは、姿を消した。

しかし、メリュジーヌは、リュジニャン家の誰かが死ぬ直前に成ると、悲しんで、リュジニャン城に未だに戻る、と言う。

メリュジーヌの伝説は、プシュケの例え話の模倣である。

プシュケの例え話の様に、メリュジーヌの例え話は、秘伝伝授が冒涜される危険性、または、宗教や愛の神秘が冒涜される危険性を表している。

メリュジーヌの例え話は、古代の吟遊詩人バードの口伝を取り入れた物である。

そして、どうやら、メリュジーヌの例え話、吟遊詩人バードの口伝は、ドルイドの学の有る団体から得た物である。

メリュジーヌの例え話は、11 世紀の話とされて有名に成ったが、遥かな過去から存在する話なのである。

特に、フランスでは霊感は女性の物である。

女性の妖精エルフと妖精フェアリーは聖女を先導した。

ほとんど常に、何かしら、フランスの聖女の伝説には妖精の性質がある。

　フランク王クロヴィス１世の王妃である聖女クロティルダは、西ヨーロッパの人々をキリスト教徒にした。

　パリの守護聖人である聖女ジュヌビエーブは、徳と信心の力によって、(フン族の侵略を預言して、)フン族の王アッティラの脅威的な侵略をしりぞけて、フランスを守った。

　ジャンヌ ダルクは、聖女の位階の女性というよりは妖精族の女性である。

　ジャンヌ ダルクは、ヒュパティアの様に、不思議な自然の天才による犠牲として、寛大な性格による殉教者として、死んだ。

　ジャンヌ ダルクについて後で話すつもりである。

　フランスのレ ザンドリ地方で聖女クロティルダは未だに奇跡を起こしている。

　フランスのレ ザンドリ地方で巡礼者の群れが聖女クロティルダの像を毎年沈めている水浴池に群がるのを見た事がある。

　民間信仰によると、聖女クロティルダの像を毎年沈めている水浴池に最初に入った病人はすぐに治る、と言われている。

　聖女クロティルダは、行動の人であった。

　(聖女クロティルダは救貧院といった慈善事業に力を尽くした。)

　聖女クロティルダは、大いなる女王であった。

　しかし、聖女クロティルダは、多数の悲しみを経験した。

　聖女クロティルダの長男は洗礼後に死んでしまった。

　聖女クロティルダの長男の死は呪われたせいであった。

　聖女クロティルダの次男は病気に成って死にかけた。

　しかし、聖女クロティルダの忍耐は不屈であった。

そのため、ある日、シカンブリ人系フランク人クロヴィス１世は、超人的な勇気が必要と成った時に、妻である聖女クロティルダの神、カトリックの神を思い出し(て、カトリックに改宗し)た。

(「クロヴィス１世の洗礼」の時にクロヴィス１世はシカンブリ人と呼ばれたという口伝が残っている。)

聖女クロティルダは、フランク王国をカトリックに改宗させて、大いなる王国キリスト教国を現実に建てた後で、未亡人と成った。

また、聖女クロティルダは、実際に目の前で、長男クロドミルの２人の子、２人の孫が殺されるのを見る事に成ってしまった。

子を失う悲しみは地上の女王を天の女王に似た者にしていった。

子を失う悲しみは地上の女王クロティルダを天の女王である聖母マリアに似た者にしていった。

聖女クロティルダという大いなる輝く象徴的な人の後で、歴史に現れたのは聖女を相殺する憎むべき魔女フレデグンドという悪意に満ちた有害な人間であった。

フレデグンドの視線は呪いであった。

魔女フレデグンドは王家の男子たちを殺した。

フレデグンドは競争相手たちを魔女などであるとして非難して拷問したが、フレデグンドだけが魔女であった。

フレデグンドの夫キルペリク１世には、最初の妻アウドヴェラの間に、クロヴィスという名前の息子の王子がいた。

王子クロヴィスは、Klodswintheという娘を愛していた。

Klodswintheの母が魔女であるという嘘をある俗人がフレデグンドに話した。

KlodswintheとKlodswintheの母は、媚薬で王子クロヴィスの理性を狂わせ、呪文でフレデグンドの２人の子を殺した、という２つの嘘の罪で訴えられた。

不運な Klodswinthe と Klodswinthe の母は捕まえられた。

　Klodswinthe は、鞭（ムチ）で打たれた。

　Klodswinthe は、美しい髪を切られた。

　フレデグンドは、Klodswinthe の髪を王子クロヴィスの部屋のドアに吊るした。

　Klodswinthe は、刑のために出頭させられた。

　Klodswinthe のしっかりとした簡潔な答えは裁判官たちを驚かせた。

　年代記によると、Klodswinthe は、熱湯による試練を受けさせられた。

　清めた指輪が、強烈な火の上に置かれた桶（おけ）の中に入れられた。

　Klodswinthe は、白い服を着せられて、信仰告白と聖体拝領の儀式をさせられた後に、手を熱湯が入った桶（おけ）の中に入れさせられ、指輪を探させられた。

　Klodswinthe は、顔つきを変えなかったので、裁判官と観衆は奇跡が起きたと叫んだ。

　しかし、不運な子 Klodswinthe が恐ろしく焼けただれた腕を引き出して見せると、裁判官と観衆は Klodswinthe を非難して恐ろしく叫んだ。

　すると、Klodswinthe は、話す許可を求めてから、後記の様に、裁判官と観衆に話した。

「あなたたちは、私が自分の無実を確証するのに、神からの奇跡を求めました。
しかし、神を試してはいけません。
また、人の気まぐれに応えて、神が自然の法を中止させる事はありません。
しかし、神は、強さ、力を神を信じる者である私に与えてくれました。
神は、神があなたたちに拒んだ奇跡より、大いなる奇跡を私のために起こしてくれました。
熱湯は私を焼きました。

けれども、私は、腕を全て熱湯の中に入れて指輪を探し当てました。
私は、恐ろしい苦痛の中でも、叫ばず、顔色を白くせず、震えませんでした。
仮に、あなたたちが言う様に、私が魔女であるならば、熱湯で焼けただれない様に魔術に頼ったでしょう。
しかし、実際は、私はキリスト教徒です。
(私は魔女ではありません。)
神は、殉教者達の不変性の徳という力によって私がキリスト教徒である事を証明する神の恵みを私に与えてくれました」

　前記の、Klodswinthe の論理は、未開の粗野な学の無い時代の大衆が理解できる類(たぐい)の物ではなかった。
　Klodswinthe は、牢獄に送り戻されて、死刑を待つ事に成ってしまった。
　しかし、神は Klodswinthe を思いやり、Klodswinthe は神に召された、とエリファス レヴィが引用している年代記には記されている。
　もし Klodswinthe の話が作り話に過ぎないとしても、Klodswinthe の話は美しく、記憶に留める価値が有る、と認めなければいけない。

　以下略

第 4 巻 第 3 章 (悪人の霊の)魔術師に対するサリカ法典

　最初のフランスであるフランクの王達の規則の下では、魔術による罪は高位の人たちにだけ必ず死刑をもたらした。

　罪で死刑に成る事によって、大衆より高位である事に成るので、また、王達にすら恐ろしいと見なされたという事に成るので、罪で死刑に成る事を誇りにした人たちもいた。

　例えば、Mummol 将軍は、フレデグンドの命令によって拷問されたが、「何も感じない」と話し、挑発して、より恐ろしい拷問をさせ、刑の執行人たちに勇敢に立ち向かって死んだ。

　Mummol 将軍の超自然的な不屈の忍耐を見て、刑の執行人たちは Mummol 将軍を許そうという気に成ったほどである。

　474 年に成立されたとされる、ジギベルトがフランクの半伝説的な王ファラモンの物としている、サリカ法典には、後記の、規則が存在する。

「ある人を heriburge や strioporte として行動したと証言して有罪にできなかったら 7500 ドゥニエ、180 と ½ スーの罰金刑とする。
heriburge や strioporte とは銅の容器を吸血鬼である魔女が誘惑術を行う場所へ運んだ人への呼称である。
……。
自由民の女性を吸血鬼である魔女または娼婦であるとして非難した言葉を証明できなかったら 2500 ドゥニエ、62 と ½ スーの罰金刑とする。
……。

吸血鬼である魔女が人を食べて有罪に成ったら 8000 ドゥニエ、200 スーの罰金刑とする」

　当時は人肉食が言葉上は可能であったと誤解できる。
　さらに、当時は人肉の時価は高価では無かったと誤解できる。
　他人への誹謗中傷、名誉毀損には 180 と ½ スーかかるが、少しの金銭を足せば、他人を殺して食べるという、より故意の犯罪行為、より徹底した犯罪行為が可能であったと誤解できる。
　殺人を軽犯罪と誤解できるサリカ法典の注目するべき法律は、本には名前が記されていない女王の前での高名なラビのイェキエルによるタルムードの興味深い話の注目するべき説明を思い出させる。
　イェキエルがタルムードの説明をした女王は、十中八九、女王ブランシュ ド カスティーユである。
　なぜなら、ラビのイェキエルは、聖王ルイと呼ばれているフランス王ルイ 9 世の治世に生きていた。
　洗礼名がニコラスであるキリスト教に改宗したヘブライ人 Douin による異論に答えるためイェキエルは呼ばれた事があった。
　タルムードについて多くの議論を交わした後で、後記の、タルムードの一節に至った。

「子の血をモロクにささげた人を殺しなさい」

　後記は、タルムードの注釈である。

「少量の血だけではなく、子の全ての血と全ての肉をモロクにささげた人は、法による裁きの下に入れず、罰に値しない」

　タルムードの注釈の意味を全く理解できないで、タルムードについての議論の参加者たちは騒いだ。

　ある人はタルムードを見下して笑いものにした。

　ある人はタルムードへの怒りに震えた。

　かろうじて、イェキエルは、話を聴いてもらえた。

　イェキエルが話を聴いてもらえた時、イェキエルに全く不利な状況で、タルムードについての議論の参加者たちはイェキエルを非難しようと事前に決めていた。

　後記の様に、イェキエルは話した。

「ヘブライ人にとって、死刑は、罪滅ぼしである。

ヘブライ人にとって、死刑は、結果的に、和解と成る。

ヘブライ人にとって、死刑は、報復行為ではない。

イスラエルの法によって処刑された全ての人は、イスラエルの平和の内に死ねる。

イスラエルの法によって処刑された人は、死刑によって、平和にあずかれる。

イスラエルの法によって処刑された人は、先祖と共に、永眠できる。

呪いがイスラエルの法によって処刑された人につきまとう事は無い。

呪いがイスラエルの法によって処刑された人の墓にまで及ぶ事は無い。

イスラエルの法によって処刑された人は、不死のヤコブの家に留まれる。

ヘブライ人にとって、死刑は、有終の美を飾れる神の恵みと成る。

ヘブライ人にとって、死刑は、熱した鉄を化膿した傷に当てる荒療治である。

しかし、ヘブライ人は、治る見込みが無い人に治療を試さない。

ヘブライ人には、イスラエルから永遠に見離されて切り落とされるほどの重罪人に対する裁判権が無い。

重罪人は既に死んでいる様な者である。

ヘブライ人は、地上での重罪人への永遠の罰の刑期を減らさない。

重罪人は神の怒りに引き渡されている。

人は治すためにだけ傷つける事が許されている。

人は治すため以外に傷つける事は禁止されている。

人は治る見込みが無い人に治療を試さない。

父は自分の家の子達だけを罰する。

父である神は自分の家の子達だけを罰する。

父は、よそ者に対しては門を閉ざすだけにとどめる。

父である神は、よそ者に対しては(天国の)門を閉ざすだけにとどめる。

イスラエルの法が処刑しないほどの重罪人は(天国から)永遠に破門される。

(天国からの)永遠の破門は死刑より重い罰である」

　イェキエルの説明は、見事である。

　イェキエルの説明は、古代イスラエルの祖師達の全ての知、古代イスラエルの祖師達の全ての精神を表現している。

　本当に、知においてヘブライ人は人の父である。

　ヘブライ人を迫害する代わりに、ヘブライ人を理解しようと努めていたら、現在の様に、ヘブライ人はキリスト教から遠く離れてはいなかったであろう。

　前記の、タルムードの口伝は古代ヘブライ人が魂の不死を信じていた事を表す。

　罪をつぐなうための死刑による罪人のイスラエルの家への復帰は、死に対する抗議であり、(魂の)命の永遠性の確信による崇高な行為ではないか？　罪をつぐなう

ための死刑による罪人のイスラエルの家への復帰は、死に対する抗議であり、(魂の)命の永遠性の確信による崇高な行為である!

死刑執行人の血の使命を一種の特別な祭司の儀式として持ち上げた、ジョゼフド メーストル伯爵は、イェキエルの考え、古代ヘブライ人の考えを十分に理解していた。

大いなる著者ジョゼフ ド メーストルは「死刑という刑罰による苦痛は罪のつぐないを神に祈願してくれる。そして、未だに、死刑という刑罰が流させる血は罪をつぐなうための自己犠牲である」と話している。

仮に、死刑が罪への許しでは全く無かったら、死刑は殺人による報復でしかないであろう。

死刑という刑罰を受けた人は、罪のつぐないを全て果たし、死刑によって神の子達の不死の社会に入る。

サリカ法典は、未だに未開の状態の大衆の法であった。

サリカ法典では、戦時中の様に、賠償金で全ての罪をつぐなった。

サリカ法典の時代には、未だに、奴隷制度が広く行われていた。

サリカ法典の時代には、人の命には議論の余地が有る相対的な価値しか無かった。

売る権利が有るものは必ず常に買う事が可能である。

金銭的な値段が有る物の破壊には金銭だけを支払えば良い。

当時の唯一の有効な法律は教会法であった。

教会の公会議は(悪人の霊の)魔術師という名前の下に分類した吸血鬼と毒殺者に対する厳しい法律を行った。

506 年に開かれた、フランスの低地ラングドック地方のアグド教会会議は、(悪人の霊の)魔術師に対する破門を宣告した。

541 年に招集されたフランスの都市オルレアンの最初の公会議は占いの実行を非難した。

589 年のフランスの都市ナルボンヌの公会議は、(悪人の霊の)魔術師をより大いに破門しただけではなく、貧者への寄付のために(悪人の霊の)魔術師を奴隷として売って良いと定めた。

589 年のフランスの都市ナルボンヌの公会議は、悪魔愛好者への公開の鞭(ムチ)打ち刑を定めた。

悪魔愛好者とは、悪魔を不安がる人、悪魔を(神の様に)畏敬する人、悪魔を呼び出そうとする人、どの様な点でも神の物である力を悪魔の物であると誤って見なす人を疑い無く意味する。

悪魔愛好者の様に悪魔を不安がる M. le Comte de Mirville の弟子が悪魔愛好者が公開の鞭(ムチ)打ち刑にされる時代に生きていなかった事に心から御祝いの言葉を述べる。

フランスで教会の公会議が(悪人の霊の)魔術師に対する厳しい法律を行っていた時に、東の幻覚を見た者ムハンマドは帝国でもある(イスラム教という)宗教を始めた。

ムハンマドは詐欺師であったのか？

または、ムハンマドは幻覚を見たのか？

イスラム教徒にとってはムハンマドは未だに預言者である。

また、常に、アラビア語の学者にとってはコーランは傑作であろう。

読み書きできない無学な男、単純なラクダ乗り、にもかかわらず、ムハンマドは自国の文学の完全に遺跡的な作品を創造した。

ムハンマドの成功は、奇跡的な物として、まかり通った。

一時、ムハンマドの後継者の戦争熱は全世界の自由を脅かした。

しかし、カール マルテルの鉄の手によってアジア(と言えるイスラム教徒)が破られる時が来た。

粗野な戦士カール マルテルは、戦うべき時には、ほとんど祈らなかった。

カール マルテルは、(騎兵への)軍資金が必要な時には、修道院や教会から金銭を接収し、教会の領地を戦士達に売りさえした。

そのため、カール マルテルの武装に神が加護を与えた、とは聖職者には考えられ無かった。

聖職者はカール マルテルの勝利を魔術のせいにした。

実際、カール マルテルに対する宗教的な感情が興奮して、尊者であるフランスのオルレアンの司教である聖ウシェールは幻覚の中で天使から「カール マルテルが接収したり荒らしたりした教会の聖人達はカール マルテルが天国に入る事を禁じている。また、掘り出されたカール マルテルの死体は魂と共に(地獄という)深淵に沈められた」という誤った幻聴を聴くほどであった。

フランスのオルレアンの司教ウシェールは誤った幻聴の話をマインツの司教ボニファティウスと、ピピン短躯王と呼ばれているピピン 3 世のチャプレン長 Fulfvad に知らせた。

カール マルテルの墓は暴かれた。

カール マルテルの死体が(腐敗して)消失している事が証明された。

まるで燃やされたかの様に、墓石の内側は(死体の腐敗によって)黒く成っていた。

墓から臭い煙が出た。

墓から大きな蛇が現れた。

マインツの司教ボニファティウスは、ピピン 3 世とカール マルテルの息子カールマンが恐ろしい実例による忠告を受け入れて神聖なものを畏敬する様に祈って、カー

ル マルテルの墓荒らしの忠実な報告を、ピピン短躯王と呼ばれているピピン 3 世と、カール マルテルの息子カールマンに送った。

　しかし、夢を誤信して英雄カール マルテルの墓を荒らしたせいで、また、死による(腐敗という)完全な速やかな死体の破壊を地獄のわざのせいにしたせいで、カール マルテルの息子カールマンに神聖なものを畏敬させる効果は無かった。

　いくつかの驚異現象がフランスで公然と人前で起きたのがピピン短躯王と呼ばれているピピン 3 世の治世の特徴である。

　風が人の姿をとって生き物の様に成った。

　諸々の宮殿、庭々、揺れ動く波々、帆を完全に広げた船々、戦闘隊形の軍団といった架空の光景が天空に映った。

　大気は大いなる夢の様な物に成った。

　空想の野外劇の様な驚異現象の詳細は全ての人々の目に見えた。

　ピピン 3 世の時代のフランスの驚異現象は、視覚器官を襲う伝染病が流行した物なのか？

　それとも、ピピン 3 世の時代のフランスの驚異現象は、霊的な大気的な混乱が濃縮された霊的な大気に幻を映した物なのか？

　十中八九、ピピン 3 世の時代のフランスの驚異現象は、大気に拡散した酩酊させる伝染病のガスが大衆全体の妄想を引き起こした物ではないか？

　大気に拡散した酩酊させる伝染病のガスがピピン 3 世の時代のフランスの驚異現象を引き起こした可能性が有るのは、雲の中で(悪人の霊の)魔術師たちが健康に有害な毒の粉を手でまき散らす妄想を全ての大衆が見た事実が有るからである。

　フランク王国は不作に打ちのめされ、牛が死に、人にまで死が及んだ。

　ピピン 3 世の時代のフランスの驚異現象は、ゼデキアスのカバラ的な考察の話が広まる機会をもたらした。

ゼデキアスのカバラ的な考察の話の成功と名声は考察の突飛さに比例していた。

当時、高名なカバリストであるゼデキアスは隠された知の学校を開いていた。

ゼデキアスの隠された知の学校で、ゼデキアスは、カバラ自体ではないが、カバラがもたらす娯楽的な考察を教えた。

ゼデキアスのカバラ的な考察の話は、常に大衆から隠されている知の大衆向けの部分を形成していた。

カバラ的な考察の話という一種の神話によって、ゼデキアスは、聴衆の心を楽しませた。

どの様に、元は、ほとんど霊的な状態に創造された最初の人アダムが、大気を超越したエデンに住み、光によって不思議な草木を思い通りに生じさせたか、ゼデキアスは教えた。

男性アダムと女性エヴァという人に似せて創造された、人の命を与えられた鏡像である、四大元素の無上の純粋な物質から形成された、美しい存在である、ノーム、ウンディーネ、サラマンダー、シルフの群れがアダムに仕えていた。

しかし、堕天前の状態でも、アダムは、サラマンダーとシルフの仲介によってしか、ノームとウンディーネを統治できなかった。

サラマンダーとシルフだけが、霊的な楽園エデンまで上昇する力を持っている。

シルフが仕えていた時の人の最初の父アダムと最初の母エヴァの幸福に等しい物は無かった。

シルフは、死に得る霊である。

しかし、シルフは、光を起こして組み合わせて、現代人が抱く事ができる最も輝かしく充実した想像を超えた多様な無数の形に光を花開かせる、信じられない技を持っている。

この世的な地上的な大気の上に存在するので、エデンは地上の楽園と言える。

地上の楽園エデンは、誘惑術の領域であった。

地上の楽園エデンは、魔術の領域であった。

アダムとエヴァは真珠とサファイアの宮殿で眠っていた。

アダムとエヴァの周囲には薔薇が芽吹いてアダムとエヴァの足のために薔薇のカーペットを形成した。

アダムとエヴァは白鳥が引く貝の船で水上を滑るように進んだ。

アダムとエヴァと鳥達は音楽による心地よい話し方で心をかよわした。

花達はアダムとエヴァに愛撫するために身を寄せた。

しかし、堕天によって、前記の、全ては失われた。

堕天によって、人の先祖であるアダムとエヴァは地に堕ちた。

神がアダムとエヴァに着せた肉体は、創世記 3 章 21 節で神が着せた獣の皮である。

肉体は創世記 3 章 21 節の獣の皮である。

アダムとエヴァは孤立し裸に成ってしまった。

地上にはアダムとエヴァの気まぐれに従う者がいなかった。

アダムとエヴァはエデンでの生活を忘れてしまった。

または、アダムとエヴァにはエデンでの生活は記憶というガラスを通じて見る夢の様な物にしか見えなかった。

しかし、未だに、永遠に、楽園エデンの領域は、この世的な地上的な大気を超越した所に広がっている。

サラマンダーとシルフは、戻る見込みが最早無い主の家の中に未だに留まっている悲しんでいる従者の様に、エデンに留まって人の領域であるエデンの守護者に成っている。

ピピン 3 世の時代に真昼間に大気中にフランスの大衆が映像を見始めた時に、ゼデキアスの驚くべきカバラ的な作り話がフランスの大衆の想像力を興奮させた。

疑い無く、ピピン 3 世の時代のフランスの驚異現象は、過去の主であるアダムとエヴァを探して降臨したサラマンダーとシルフによる物である。

ピピン 3 世の時代のフランスの大衆はシルフの国エデンへの空の旅について至る所で話した。

19 世紀の大衆が動くターニング テーブルや流体の霊の出現について話している様に。

ピピン 3 世の時代のフランスの知識人ですら愚考にとりつかれてしまった。

そのため、教会が介入する事態に成った。

道端で大衆が超自然的な存在について話すのを、教会は嬉しく思わなかった。

なぜなら、大衆への口外は、教会の権限や教えの位階制の連鎖へ払うべき敬意を危うくするので、秩序と光の精神の物とは考えられ無かった。

教会は、ピピン 3 世の時代のフランスの雲の幻を地獄が生んだ幻として非難した。

何かを自分の手で行う事を望む、大衆は、(悪人の霊の)魔術師に対する撲滅運動を始めた。

大衆の愚行は、狂気の発作的行動に成った。

田舎の大衆は、見知らぬ人を、天から降臨したサラマンダーやシルフであると迫害して無慈悲に殺した。

愚者は、シルフまたは半神半霊ダイモーンに誘拐されたという嘘を公言してしまっていた。

自慢のためにシルフに誘拐されたという様な嘘をついた人々は、前言の撤回を望まなかったか、前言の撤回をできなかった。

シルフに誘拐されたという嘘をついた人々は焼き殺されたり溺死させられたりしてしまった。

ガリネによると、信じられないほど多数の人々がピピン３世の時代のフランク王国で殺されてしまった。

大量虐殺は、無知や恐怖に先導された人による劇的事件に共通の大惨事である。

幻覚を見せる伝染病の流行は、ピピン３世以降の時代にも発生した。

カール大帝は、大衆の興奮を静めるために権力の全てを使って行動した。

ルイ敬虔帝と呼ばれているルートヴィヒ１世が後に更新した、カール大帝の勅令は、死刑という最も重い罰によって、シルフの出現を禁じた。

風の元素の霊的存在であるシルフがいない場合は、自慢のためにシルフを見たという嘘をついた人に死刑という裁きが下る、と理解された。

そのため、シルフが見られる事は無く成った。

空中の船々は忘却という港に戻る事に成った。

青空という遠さを旅した事が有るという嘘を主張する人は最早いなく成った。

カール大帝の伝説という他のフランスの大衆的な熱狂が、ピピン３世の時代以降のフランスの大衆による驚異現象への熱狂に取って代わった。

カール大帝の大いなる統治という理想的な輝きは、信じるべき新しい驚異と話すべき新しい不思議を、伝説の作者達にもたらした。

第４巻 第４章 カール大帝の治世の伝説

カール大帝は、誘惑術、魔術の現実の王であり、妖精の世界の現実の王である。

カール大帝の治世は、未開状態と中世の間の、神聖な輝かしい安息の様であった。

カール大帝のあらわれは、ソロモンの感化力の魔術的な華麗さを思い出させる、大いなる雄大な物であった。

カール大帝は、復活である、と共に、預言である。

カール大帝によって、ローマ帝国は、フランク人やガリア人という起源を飛び越えて、全き輝きで神聖ローマ帝国として再びあらわれた。

預言が呼び起こして明らかにしていた象徴的な人の様に、カール大帝は円熟した文明の長期の完全な帝国、神聖ローマ帝国の輪郭を事前に描いていた。

祭司が神聖ローマ帝国に王冠を授けた。

法王が神聖ローマ帝国に王冠を授けた。

神聖ローマ帝国は王座をキリスト教という祭壇の上に確立した。

騎士道の時代と夢の様な物語の不思議な叙事詩はカール大帝と共に始まる。

カール大帝の時代の年代記は「エイモン公の４人の息子」や妖精の王オベロンの話の様である。

鳥達は言葉を話して、森の中で道を見失ったフランス軍を導いた。

真鍮製の巨人が大海の中にあらわれて東への順風満帆の海路をカール大帝に示す。

カール大帝の第一の聖騎士パラディンであるローランは、デュランダルという銘を持つ、キリスト教徒の様に洗礼された魔法の剣、聖剣を振るう。

英雄ローランは聖剣デュランダルに話しかける。

聖剣デュランダルはローランの言葉を理解している様に思われる。

聖剣デュランダルの超自然的な斬撃には何物も抗えない。

ローランは象牙の角笛オリファンを持っている。

角笛オリファンは、巧みに作られ、軽く息を吹き込むだけで鳴り、周囲 20 リーグ(、44 キロメートルまたは 88 キロメートル)まで聞こえ、山々すら震わせた。

ロンスヴォーで聖騎士パラディンであるローランは、負けて、と言うよりは、大軍の敵のイスラム教徒に押し寄せられて、戦死する時でも、押し寄せる木々や転がって来る岩々の下から、巨人の様に起ち上がる。

ローランが角笛オリファンを吹くと、敵のイスラム教徒の大軍は飛ぶ様に逃げる。

10 リーグ以上離れた場所にいた、カール大帝は、角笛オリファンによる合図を聞いて、ローランを助けるために急ごうとするが、裏切者ガヌロンに妨害される。

ガヌロンは、ローランといったフランス軍の殿(しんがり)を残忍な敵のイスラム教徒の大軍に売り渡していた。

ローランは、やむなく見捨てられたとわかって、最後に聖剣デュランダルを抱きしめてから、聖剣デュランダルがイスラム教徒の手中に落ちない様に、聖剣デュランダルを破壊する事を望んで、全ての力を奮い起こして、両手で聖剣デュランダルを山の一角に打ち込む。

しかし、山の一角の方が斬り裂かれ、聖剣デュランダルは無傷である。

そのため、ローランは聖剣デュランダルを胸に抱きしめて、魂を手放して、気高く死ぬ。

ローランの気高い姿に、敵のイスラム教徒の大軍は、ローランに近づく勇気が無く、震えながら、もう死んでいる勝利者ローランに矢の雨を降らせる。

簡潔に言うと、王座を歴代の法王に授け、返礼として歴代の法王の手から世界の帝国を受け取っている、カール大帝は、フランスの歴史で最も象徴的な人である。

「Enchiridion」について話した事が有る。

「Enchiridion」はカバラの無上の秘密の象徴群と無上に美しいキリスト教の祈りを結合する小作品である。

隠された口伝では法王レオ 3 世が「Enchiridion」を作って最も大事な贈り物としてカール大帝に贈った。

「Enchiridion」を所有して相応しく応用する方法を知っている王は皆、地の王者に成れた。

恐らく、「Enchiridion」の口伝を軽率に退けるべきではない。

後記を、「Enchiridion」は仮定している。

(1)

原初の普遍の啓示の存在。

原初の普遍の啓示は、自然の全ての秘密を説明する。

原初の普遍の啓示は、自然の全ての秘密を神の恵みの神秘と一致させる。

原初の普遍の啓示は、論理と信心を一致させる。

なぜなら、論理と信心は、神の 2 人の娘である。

論理と信心という二重の命は、協力して、知性を照らす。

(2)

啓示が自ら課す、啓示を大衆から隠す必要性。

啓示を理解しない大衆が啓示を濫用しない様に。

また、大衆が、論理の力だけではなく信心の力を信心に敵対させて、論理と信心を混同しない様に。

大衆は論理を理解できない。

(3)

秘密の口伝の存在。

秘密の口伝、論理と信心の神秘の知は、王者、祭司、この世の王者、地の王者のためだけの物である。

(4)

確かな象徴や確かな pantacle の永遠性。

論理と信心の神秘を象徴的に表す、確かな象徴は、達道者だけが理解できる。

前記の観点から、「Enchiridion」は例え話的な祈りを集めた物である、と考えるべきである。

そして、「Enchiridion」の秘密のカバラの pantacle は、「Enchiridion」の例え話的な祈りの鍵である。

後記は、「Enchiridion」の重要な象徴である。

「Enchiridion」の第 1 の重要な象徴は、「Enchiridion」の表紙に描かれている、二重の輪に内接する逆正三角形である。

逆正三角形の中に十字の形で Elohim、エロヒム、神々と Tzabaoth、Sabaoth、軍団である神という 2 つの言葉が記されている。

Sabaoth はヘブライ語で軍団を意味する。

Sabaoth は軍団である神を意味する。

Sabaoth は自然の 2 つの力のつり合いと、諸々の数の調和を意味する。

(神は軍団に分身できる。)

逆正三角形の３つの辺には、ヤハウェ、アドナイ、アグラという３つの大いなる名前がある。

ヤハウェという名前の上にはラテン語で「形成」と記されている。

アドナイという名前の上にはラテン語で「変革」と記されている。

アグラという名前の上にはラテン語で「変形」と記されている。

前記の様に、創造は父である神ヤハウェのわざである。

身代わりによる救いや変革は神の子イエスのわざである。

(

イエスは人の主である。

イエスはアドナイである。

アドナイはヘブライ語で「主」、「主である神」を意味する。

)

浄化、神聖化や変形、変質は神の聖霊のわざである。

作用の数学的な法は父である神ヤハウェに、反作用は神の子イエスに、つり合いは神の聖霊に対応している。

さらに、神のテトラ グラマトンの４文字の四大元素の意味に従って、ヤハウェは考えの生成と形成である、と理解するべきである。

アドナイは、人の姿による考えの実現である。

言い換えると、アドナイは、主である神が神の子イエスまたは完全な人イエスとしてあらわれた事による、考えの実現である。

魔術の歴史 第１巻 第７章で完全に説明した様に、アグラは全ての考えと全てのカバラの知の統合を表す。

なぜなら、アグラという名前を形成するヘブライ文字は「大作業」の三重の秘密を明らかに表す。

「Enchiridion」の第 2 の重要な象徴 pantacle は、水で満ちている器からあらわれている法王の三重冠をかぶっている 3 つの顔をもつ頭である。

「光輝の書」の神秘に入門している人は「Enchiridion」の第 2 の重要な象徴である頭の絵が表す象徴の意味を理解するであろう。

「Enchiridion」の第 3 の重要な象徴 pantacle は、ソロモンの六芒星として知られている二重の三角形である。

「Enchiridion」の第 4 の重要な象徴は、ラテン語で「神の導きと、友である剣」を意味する Deo duce, comite ferro:という言葉が記されている魔術の剣である。

「Enchiridion」の第 4 の重要な象徴は、大いなる秘密と達道者の全能性の象徴である。

「Enchiridion」の第 5 の重要な象徴は、数 40 によって解決された、救い主イエスの人の姿の問題である。

数 40 は、自然の現実の数によって増殖されたセフィロトの神学的な数である。

「Enchiridion」の第 6 の重要な象徴は、文字 E と神秘の十字タウまたは T をくり返している骨によって表された、神の聖霊の pantacle である。

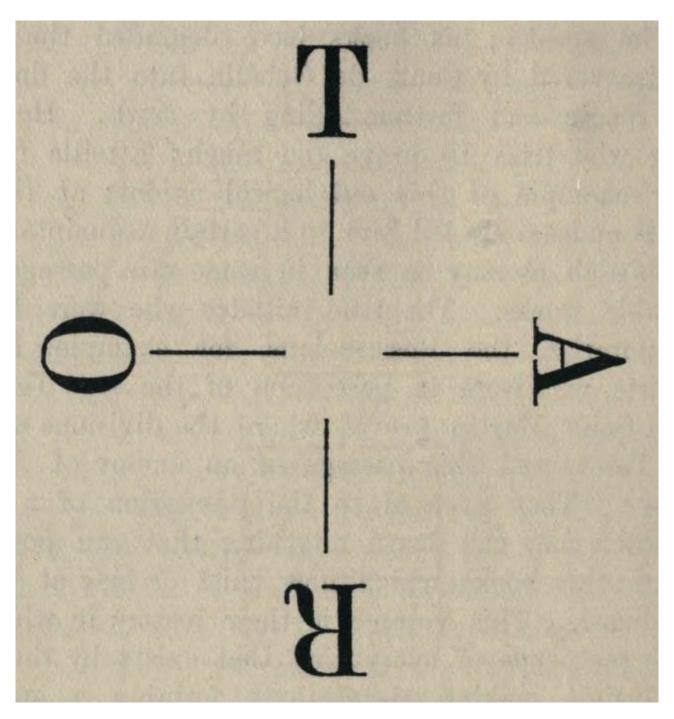
「Enchiridion」の第 7 の重要な象徴、「Enchiridion」の最重要な象徴は、ソロモンの鍵タロット、テトラ グラマトン、ラバルム、達道者の主要な言葉を説明する、大いなる魔術の組み合わせ文字である。

「Enchiridion」の第7の重要な象徴 pantacle は、回転する車輪の様に読めて、ROTA、TARO、TORA と発音できる。

「Enchiridion」の第7の重要な象徴では、文字 A は、文字 A に相当する、数1に置き換えられている場合がある。

「Enchiridion」の第7の重要な象徴 pantacle は、棒、杯、剣、フランスのコインのドゥニエという、タロットの小アルカナの4組の10つ1組の、4つの象徴の形と意味を含んでいる。

棒、杯、剣、輪という四大元素の象徴は、エジプトの神聖な記念建造物の至る所でくり返されている。

「Enchiridion」の作者である法王レオ3世と同じ順序で、ホメロスは、棒、杯、剣、輪という四大元素の象徴をアキレスの盾に描いている。

「Enchiridion」についての説明の証明を、もし与えようとしたら、テーマから外れてしまうし、さらに特別な学を必要とする。

いつの日かエリファス レヴィは「Enchiridion」についての説明の証明に取り組んで公表しようと望んでいる。

「Enchiridion」に描かれている魔術の剣または魔術の短剣は、「秘密裁判所」の特有の象徴であった様である。

「Enchiridion」の短剣、「秘密裁判所」の短剣は、十字の形で、言葉で覆われている。

神だけが「秘密裁判所」の短剣を行使できた。

「秘密裁判所」の短剣によって敵を討つ人は、自分の行動を説明する責任が無かった。

この様に、「秘密裁判所」の脅威と特権は恐るべき物であった。

「秘密裁判所」、「聖フェーメ団」の短剣は、闇の中で、知られずに犯罪行為をしていた事が多い、犯罪者を討ち滅ぼした、と知られている。

「秘密裁判所」という恐るべき正義についての真実は何か？

「秘密裁判所」の真実を知るには、歴史が光で照らせなかった闇の領域への進出が必要である。

「秘密裁判所」の真実を知るには、学問が与えられなかった光を探求するために、口伝を頼る必要が有る。

「秘密裁判所」は、無政府主義や革命のための秘密結社とは正反対の、秩序と政府のための秘密結社である。

迷信は死に難い、と知られている。

堕落したドルイドの宗教は北の未開の国々に深く根づいてしまっていた、と知られている。

サクソン族の反乱のくり返しは、狂信を証明している。

サクソン族の狂信は、常に無法であった。

サクソン族の狂信は、倫理道徳的な心の力だけでは鎮圧不可能であった。

ローマの多神教、ゲルマン民族の偶像崇拝、敵対的なユダヤ教といった宗教の全ての敗北した形式が、勝利したキリスト教に対して共謀した。

夜の集会が行われた。

夜の集会で、キリスト教に対する共謀者である異教徒は、人の生贄の血によって、結束を固めた。

ヤギの角を持つ奇形の汎神論の偶像が、憎むべき愛餐と呼べる、宴の主であった。

要約すると、未だに、未開の地域の森や荒れ野でサバトが行われていた。

サバトの狡猾な参加者は、仮面をつけたか、見分けがつかない様に変装した。

集会サバトは夜明け前に明かりを消して解散した。

黒魔術のサバトの犯罪者は至る所にいた。

黒魔術のサバトの犯罪者をどこも処罰できなかった。

そのため、カール大帝は独自の手段で黒魔術のサバトの犯罪者と戦う事を決めた。

さらに、当時、暴君の領主は正統な権力に反対する党派心の強い者と結びついていた。

魔女は遊女として暴君の領主の城に所属していた。

サバトに入りびたって、盗賊は、略奪した血まみれの盗品を貴族と分かち合っていた。

最高命令者である暴君の領主が、領地の裁判所の裁判を自由にしていた。

暴君の領主の一味の武力によって、公共の負担は弱者と貧者だけに重くのしかかった。

ドイツのヴェストファーレンでは悪が栄華を極めていた。

カール大帝は、秘密の使命を託して、信頼できる代行者達をドイツのヴェストファーレンに急いで派遣した。

カール大帝の密使達は、権力に虐げられていても努力している人、身分の貴賤を問わず未だに正義を愛している人をまとめ、共同の誓いと警戒によって結束させた。

カール大帝の密使達は、正義を愛している人達を、秘伝伝授者に受け入れて、大帝カール自身が認めた権力を全て知らせた。

カール大帝の密使達がまとめた、正義を愛している人達は、「秘密裁判所」を設立した。

「秘密裁判所」は生殺与奪の権利を持つ一種の秘密警察であった。

「秘密裁判所」を取り巻く神秘と、「秘密裁判所」の処刑の迅速さは、未だに未開の大衆の想像力に好印象を与えるのに役立った。

「秘密裁判所」、「聖フェーメ団」は巨人的な規模に成った。

「秘密裁判所」の仮面をした裁判官の出現の話に、大衆は震えた。

警備や酒宴の人だかりの中で貴族の家の門につけられた「秘密裁判所」への召喚状の話に、大衆は震えた。

「秘密裁判所」、「聖フェーメ団」の判決文の抜粋が記された巻物がつけられた、恐るべき十字形の短剣で胸を刺されて死んでいるのが見つかった盗賊の頭の話に、大衆は震えた。

「秘密裁判所」は手続きに不思議な形を取った。

犯罪者は不審な十字路に出頭する様に召喚される。

黒衣をまとった男が犯罪者を集会へ連れて行く。

犯罪者は目隠しをされる。

沈黙の中、犯罪者は連れて行かれる。

常に、犯罪者の連行は夜の不穏当な時間に行われた。

なぜなら、「秘密裁判所」は真夜中にだけ判決を下した。

犯罪者は広大な地下室に連行される。

地下室で１人だけの声が犯罪者を取り調べる。

犯罪者の目隠しが外される。

地下室が奥まで光で照らされる。

「秘密裁判所」の仮面をして黒衣をまとった裁判官達が座っている。

「秘密裁判所」の判決は常に死刑とは限らなかった。

なぜなら、「秘密裁判所」の裁判官は犯罪の事情を知っていた。

しかし、「秘密裁判所」では犯罪の事情については何も明かされなかった。

なぜなら、犯罪の事情を明かした者は即座に殺される。

(犯罪の事情を明かすと「秘密裁判所」の裁判官の正体が判明する可能性が有るから。)

時には、「秘密裁判所」の畏敬するべき集団は多数に成り、報復者の軍団に相当するほどであった。

ある晩、皇帝が自ら「秘密裁判所」の議長を務めると、千人以上の裁判官が皇帝の周りに円座していた。

1400 年のドイツには 1 万人の「秘密裁判所」の裁判官が存在した。

良心がやましい人は、自分の血縁者や友人が「秘密裁判所」の裁判官ではないか、と疑うほどであった。

後記の様に、ドイツのブラウンシュヴァイク公ヴィルヘルムは、ある時、話していたと記録されている。

「ドイツのシュレースヴィヒ公アドルファスが私の所に訪問して来たら、私はアドルファスを絶対に絞首刑にする必要が有る。なぜなら、私は(『秘密裁判所』によって)絞首刑にされる事を望まない」

一時、皇帝であった、ブラウンシュヴァイク公フリードリヒは、「秘密裁判所」の召喚に従う事を拒否した。

「秘密裁判所」の召喚を拒絶した時から、フリードリヒは、頭から足まで武装し、護衛たちに囲まれていた。

しかし、ある日、フリードリヒは、護衛たちから少しだけ離れて、鎧のいくつかの部分を緩めた。

(排泄するために。)

フリードリヒは、護衛たちの所に戻って来なかった。

護衛たちは、一時フリードリヒが隠れた林に入った。

不適切な男フリードリヒは「秘密裁判所」、「聖フェーメ団」の短剣を体に刺されて死んでいた。

「秘密裁判所」、「聖フェーメ団」の短剣には、フリードリヒへの判決文が付けられていた。

全方位を見まわして、フリードリヒの護衛たちは、ゆっくりと立ち去って行く仮面をした男を見つけた。

しかし、「秘密裁判所」、「聖フェーメ団」の裁判官を追いかける勇気がある人はいなかった。

ドイツのヴェストファーレンの古書の中に「秘密裁判所」、「聖フェーメ団」の法典が見つかった。

後記の見出しで、ミューラーの帝国劇場で、「秘密裁判所」、「聖フェーメ団」の法典は印刷された。

「772 年にカール大帝が定め、1404 年に王ロベルトが変更した、ドイツのヴェストファーレンの『秘密裁判所』、『聖フェーメ団』の法典。
王ロベルトは、『光に照らされた者』の『秘密裁判所』、『聖フェーメ団』に、王ロベルトの権限を与えた後に、正義の執行に必要な法典への変更と追加をした」

「秘密裁判所」、「聖フェーメ団」の法典の最初のページの注釈は、死刑という罰によって、俗人が「秘密裁判所」、「聖フェーメ団」の法典を読むのを禁じている。

「秘密裁判所」、「聖フェーメ団」という秘密結社に与えられた「光に照らされた者」という言葉は、「秘密裁判所」、「聖フェーメ団」の使命を全て明かしている。

「秘密裁判所」、「聖フェーメ団」は、闇の崇拝者を闇の中で探し出す必要が有った。

「秘密裁判所」、「聖フェーメ団」は、黒魔術に味方して社会への陰謀を企てる者に対して神秘的に対抗した。

「秘密裁判所」、「聖フェーメ団」は、昼の光を犯罪の陰謀に投じる、実に、光の秘密の戦士であり、判決を下す前に突然に裁判所である地下室を光で照らす事によって、光の秘密の戦士である事を表した。

カール大帝の下、公に成った「秘密裁判所」、「聖フェーメ団」の法典は、闇の暴君の一味に対する聖戦を認めた。

(悪人の霊の)魔術師、占い師、誘惑者、「(結婚の完成のための性交を妨げる呪いの)飾り紐(ひも)を結ぶ者」、媚薬のふりをして毒を盛った人に与えた刑罰を「秘密裁判所」、「聖フェーメ団」の法典の記録を見て確認する事が可能である。

大気を乱す事、大嵐を起こす事、符やタリスマンを作る事、くじを引く事、人や家畜に呪いや魔術の誘惑術を実行する事を「秘密裁判所」、「聖フェーメ団」の法典は刑罰の対象とした。

(悪人の霊の)魔術師、占星術師、占い師、降霊術師、数秘術師は、憎むべき者であると宣言されて、盗賊や暗殺者と同じ刑罰を与えられた。

「秘密裁判所」、「聖フェーメ団」の法典の厳しさは、黒魔術の恐るべき儀式と黒魔術の幼子の生贄についての全ての話を思い出せば、理解できるであろう。

黒魔術への弾圧が多数の厳しい形を取っていたとすると、黒魔術の危険性は実際に重大であったに違いない。

「秘密裁判所」、「聖フェーメ団」と起源が同じ(カール大帝)である団体は「遍歴騎士団」である。

「遍歴騎士団」は、一種の「秘密裁判所」であった。

「遍歴騎士団」は、城主の圧政と降霊術師(といった悪人の霊の魔術師)の悪意に対して、神と槍の力に物を言わせた。

「遍歴騎士団」は、武装した宣教師であった。

「遍歴騎士団」は、十字の手振り身振りによって自身を守ってから、不信心な悪人を一刀両断にした。

そのため、「遍歴騎士団」は、徹底した献身の１つである命をかけた殉教によって愛を清めて、気高い令嬢達に覚えられた。

異教徒の遊女のために、奴隷が生贄として捧げられ、古代世界の勝利者が諸々の都市を燃やしたが、異教徒の遊女から、キリスト教徒はすでに遠くかけ離れている。

キリスト教徒の令嬢のためには、異教徒の遊女とは異なる、ささげ物が必要である。

キリスト教徒の令嬢のために、弱者や権力に虐げられた人のために命の危険を冒す必要が有る。

キリスト教徒の令嬢のために、無実の罪で牢獄に閉じ込められた人を解放する必要が有る。

キリスト教徒の令嬢のために、神聖な愛を冒涜する人に罰を与える必要が有る。

そのため、紋章を刺繍されたスカートをはいた、キリスト教徒の愛らしい清らかな純白な令嬢達は、
優美な繊細な青白い手の、キリスト教徒の令嬢達は、

生きている聖母マリアである、キリスト教徒の令嬢達は、

百合の様に気高い、キリスト教徒の令嬢達は、

時祷書を手に下げ、帯にロザリオを下げ、教会から戻って来た、キリスト教徒の令嬢達は、

金や銀で刺繍されたヴェールを外して、キリスト教徒の令嬢達の前にひざまずいてキリスト教徒の令嬢達のために祈り神について想像する「遍歴騎士」にスカーフとしてヴェールを与えた。

　エヴァとエヴァの誤りを忘れよう。

　聖母マリアの気高い娘達、キリスト教徒の気高い令嬢達による言い表せないほどの恵みによって、エヴァの誤りは千回、許され、千回以上、つぐなわれている。

第 4 巻 第 5 章 魔術師

つり合いの永遠の法を神聖化する、超越的な知の基礎の考えは、キリスト教世界の形成によって、完全な実現に到達した。

法王と皇帝という生きている 2 つの柱が文明という建築物を支えた。

しかし、帝国は、ルートヴィヒ 1 世とシャルル 2 世の弱い手からすべり落ちて、分裂した。

世俗の権力は、運任せに、または、不正な策略によって、獲得された。

世俗の権力は、ローマの法王との調和を保っていた神意による統一を失った。

頻繁に、法王は、大いなる司法高官として、世俗の権力に干渉する必要が有った。

法王は、危険を冒して、競合し合う多数の権力者の野心と大胆な行動を抑えた。

当時、破門は恐るべき罰であった。

なぜなら、破門は、普遍の信心による制裁であった。

また、破門は、大衆を恐れさせる、非難による磁気の流れによる神秘的な結果である現象をもたらした。

例えば、ロベール 2 世は、不法の結婚に対する破門による恐るべき罰を受けて、中世の芸術によっておかしく表現された悪魔の偶像に似た姿の奇形の子の父と成ってしまった。

禁じられた結婚の悲しい果実であるロベール 2 世の奇形の子は、少なくとも、母の良心の呵責と母が恐ろしい夢にとりつかれた事を証明した。

ロベール 2 世は、奇形の子の誕生という出来事を、神の怒りの証として受け取った。

そして、ロベール 2 世は、法王の裁きに従った。

ロベール2世は、教会が近親相姦であると宣言した結婚を破棄してベルトと離縁し、コンスタンス ド プロヴァンスと結婚した。

ロベール2世にはコンスタンスの疑わしい品行と傲慢な性格は第2の天罰に見えた。

当時の年代記の作者は、悪魔の伝説に夢中であった。

当時の年代記の作者による記録は、良識による記録と言うよりも、軽信による記録を表している。

当時の年代記の作者は、修道院での病気、修道女の不健全な悪夢を、全て、現実の霊の出現による物と見なした。

当時の年代記の作者による不快な幻想、非論理的な話、不可能な変身を娯楽作品にするにはエドモン ロスタン作の「シラノ ド ベルジュラック」の芸術的な才能が欠けていた。

ロベール2世の治世から、聖王ルイと呼ばれているフランス王ルイ9世の治世まで、話すに値する当時の年代記の作者による記録は無い。

大いなるカバリストである、真に注目するべき医者である、高名なラビのイェキエルは、聖王ルイと呼ばれているフランス王ルイ9世の治世に生きていた。

イェキエルのランプと魔術の釘（くぎ）についての全ての話は、イェキエルが電気を発見していた事、または、少なくとも、イェキエルが電気の主な使用法を知っていた事を証明する。

電気の知は、魔術の様に、古代からの物である。

電気という力の知は、より大いなる秘伝伝授の鍵の1つとして、伝えられていた。

夜に成ると、イェキエルの仮の宿には、輝く星(の様なランプの光)があらわれた。

イェキエルのランプの光の輝きは、目が眩むので、凝視できないほどであった。

イェキエルのランプが放つ光線は、虹色に染まっていた。

イェキエルのランプは弱まらず消えなかった、と知られている。

イェキエルのランプには油や当時の可燃性の物質は満たされていなかった。

しつこい人や、悪意と好奇心を持った人が、イェキエルの部屋に侵入するために、ドアをノックし続けると、ラビのイェキエルは、部屋に固定している釘(くぎ)をドアに当てた。

すると、イェキエルの釘(くぎ)の先端とドアのノック部分に青い電気火花が起こった。

イェキエルの釘(くぎ)の電気を流されて震えた無思慮な人は、足下の地が開いたと思い込んで、イェキエルの慈悲を求めて叫んだ。

ある日、イェキエルに敵対する大衆が、不満をつぶやいたり脅迫して、イェキエルの宿の入口のまわりに群がった。

大衆は、(電気による)動揺と地震と思われる物に耐えるために、腕を組み合わせて立った。

大衆のうち最も大胆な俗人がイェキエルのドアをしつこく騒々しくノックした。

イェキエルは釘(くぎ)をドアに押し当てた。

すぐに、襲撃者、暴漢である大衆は互いの上に転倒し合い、燃やされたかの様に叫んで逃げた。

大衆は、地が開いて膝(ひざ)まで飲み込まれた、と思い込んだ。

大衆は、どの様にして逃れられたか、わからなかった。

大衆は、イェキエルの宿へ戻ってイェキエルへの襲撃を再開するのを思いとどまった。

魔術師イェキエルは恐怖をまき散らして静けさを得た。

聖王ルイと呼ばれているフランス王ルイ９世は、大いなるカトリック教徒であり、大いなる王であった。

聖王ルイと呼ばれているフランス王ルイ９世は、イェキエルを知りたいと思った。

聖王ルイと呼ばれているフランス王ルイ９世は、イェキエルを王宮に招いた。

聖王ルイと呼ばれているフランス王ルイ９世は、数回、イェキエルと話した。

聖王ルイと呼ばれているフランス王ルイ９世は、イェキエルの説明に完全に満足した。

聖王ルイと呼ばれているフランス王ルイ９世は、敵からイェキエルを保護した。

以降は死ぬまで、聖王ルイと呼ばれているフランス王ルイ９世は、イェキエルへの畏敬を証明し、イェキエルを思いやり続けた。

アルベルトゥス マグヌスもイェキエルと同時代に生きていた。

アルベルトゥス マグヌスは、全ての魔術師のうち大いなる魔術師として未だに大衆に通用する。

当時の歴史家は、アルベルトゥス マグヌスが賢者の石を所有していた、と断言している。

また、当時の歴史家は、30 年の研究の後にアルベルトゥス マグヌスが人造人間の問題を解く事に成功した、と断言している。

言い換えると、当時の歴史家は、アルベルトゥス マグヌスが命と話す力を与えられた人造人間を創造した、と断言している。

当時の歴史家は、アルベルトゥス マグヌスの人造人間が質問に答える正確さと巧妙さが、トマス アクィナスが人造人間を沈黙させられない事に怒って杖の一撃で破壊するほどであった、と断言している。

アルベルトゥス マグヌスの人造人間の話は、民間の例え話である。

アルベルトゥス マグヌスの人造人間の例え話が、どの様な意味を持つのか、見て行こう。

人の形成の神秘と、人の地上への原初のあらわれの神秘は、自然の探求者を引きつけ続けて来た。

事実、人は化石の世界の最後にあらわれる。

モーセの創世記の創造の日々は連続的な残骸を積んで来ていて、実際は、モーセの創世記の創造の日々は長期である事を証明している。

どの様にして人は形成されたのか？

創世記２章７節には「神は、アダムを土の塵から創造して、命の息をアダムの鼻の穴に吹き込んだ」と記されている。

エリファス レヴィは、創世記２章７節の話の真意が正しい、と一瞬も疑わない。

ただし、エリファス レヴィは現実に神が指で土をこねて形成したという異端の神の擬人化の考えを退ける。

純粋な霊である神には物質的な肉体的な手が無い。

神は、神が自然に与えた力によって、被造物が次々と進化する様にさせた。

そのため、創世記２章７節の「主である神はアダムを土の塵から創造した」という話を、人は「神の感化力の下で、自然な方法によって、人は地からあらわれた」と理解する必要が有る。

ヘブライ語でアダムは赤い土を意味する。

実に、実際に、人の素と成った土とは何か？

錬金術師が探求した物は、人の素と成った土である。

「大いなる務め」、「大作業」とは、些細な付属の結果である錬金の秘密ではなく、命の普遍の秘密である。

「大いなる務め」、「大作業」とは、変化の中心点の探求である。

中心点で、星の光は、物質に成る。

中心点で、星の光は、運動と命の原理を含んでいる、土に濃縮する。

「大いなる務め」、「大作業」とは、世界の様に磁化されている、動物の様に生きている、赤血球の、無数の創造によって、血を赤く染める現象の普遍化である。

ヘルメスの弟子にとって、金属は、土の凝固した血である。

人の血の様に、金属は、星の光の作用に従って、白から黒へ変化し黒から赤へ変化する。

熱によって土の凝固した血である金属を運動させる事と、電気の仲介によって星の光の色に染める事が、知の「大作業」の第一の部分である。

知の「大作業」の目的は、より困難で、より崇高である。

知の「大作業」の目的は、アダムの土の復活の探求である。

アダムの土は命の土の凝固した血である。

哲学者の無上の理想は、神の作業を模倣して、人の創造というプロメテウスの作業を成就する事であった。

言い換えると、哲学者の無上の理想は、知の子である人を創造して、人の創造という作業を成就する事であった。

アダムが神の全能の子である様に。

多分、人の創造の完成という哲学者の理想は馬鹿げていた。

しかし、人の創造の完成という哲学者の理想は崇高である。

常に、黒魔術は、光の魔術を模倣する。

ただし、言わば、黒魔術は、光の魔術を正反対に悪い意味に誤解する。

黒魔術の魔術師も、性欲の道具として使用できる、地獄の悪人の霊の神託の道具として使用できる、人造人間に興味を持った。

中略

偽の魔術書「Little Albert」、「小アルベルトゥス」の偽の魔術の手順では、非論理的な説と不信心な行為が組み合わされている。

なぜなら、論理的な法に背く人は自然を犯さずにはいられない。

「大アルベルトゥス」、「アルベルトゥス マグヌス」は、子殺しや神殺しではない。

「大アルベルトゥス」、「アルベルトゥス マグヌス」は、タンタロスの罪やプロメテウスの罪を犯さなかった。

「大アルベルトゥス」、「アルベルトゥス マグヌス」は、全ての点で純粋に、アリストテレスの「カテゴリー」とペトルス ロンバルドゥスの「命題集」の結果としての、三段論法というスコラ神学の創造と理論武装に成功した。

アルベルトゥス マグヌスの三段論法は、全ての物についての答えを熟考して見つける代わりに、言い方についての巧妙さによって論争を形成する。

アルベルトゥス マグヌスの三段論法は、哲学と言うより、哲学的な自動人形、哲学的な人造人間であった。

アルベルトゥス マグヌスの三段論法は、根拠無く答える、機械が循環する様に主張を展開する、哲学的な人造人間であった。

アルベルトゥス マグヌスの三段論法は、人のロゴス、人の論理が無く、機械の変化の無い叫び、人造人間の命の無い言葉であった。

アルベルトゥス マグヌスの三段論法は、論理的な必然の自由な応用ではなく、機械に不可避の正確さしか無かった。

トマス アクィナスは、一撃で、アルベルトゥス マグヌスの三段論法という言葉遊びの足場を破壊した。

すでに頻繁に話した様に、トマス アクィナスは「神が望むから正しいのではなく、正しいから神が望む」という大いなる言葉によって論理の永遠の統治を宣言した。

より大いなる定理から、より小さい定理へ論じると、トマス アクィナスの「神が望むから正しいのではなく、正しいから神が望む」という定理に類似した結論は「アリストテレスが話したから正しいのではなく、論理的に正しいからアリストテレスは話す事ができた」に成る。

何よりも、真理と正義を求めなさい。そうすれば、アリストテレスの学問は付け足して与えられるであろう。

(マタイによる福音 6 章 33 節「何よりも、神の王国と神の正義を求めなさい。そうすれば、命と肉体についての全ての物は付け足して与えられるであろう」)

スコラ神学が電気を流して復活させたアリストテレスが、アルベルトゥス マグヌスの人造人間であった。

トマス アクィナスの祖の杖は、力と論理の傑作「神学大全」の考えであった。

「神学大全」は、論理的な健全な問題へ真剣に戻ろうとする時に、再び神学校で学ばれるであろう。

聖ドミニコからアルベルトゥス マグヌスを経由してトマス アクィナスへ伝えられたと言われている賢者の石とは、当時の支配的であった考えの哲学的な宗教的な基礎である、と理解する必要が有る。

仮に、聖ドミニコが「大作業」を成就できていたら、聖ドミニコは、カトリック教会のために守ろうとしていた世界の統治をローマの法王のために確保したであろう。

また、聖ドミニコは、火で多数の異端者を焼き殺す代わりに、火を錬金のるつぼを熱するのに使ったであろう。

トマス アクィナスは触れた物を全て黄金に変えた、と言われているが、例え話に過ぎない。

トマス アクィナスの例え話においても、黄金は真理の象徴である。

Ostanes、Romarius、女王クレオパトラ、アラビア人
Geber、Alfarabius、Salmanas、Morien、Artephius、Aristeus によってキリスト教の最初の数世紀から耕された錬金術という知について、さらに、いくつか話すのに適切である。

絶対の意味で理解すると、錬金術という知は、実現におけるカバラ、または、作業の魔術である、と言えるかもしれない。

そのため、錬金術には、宗教的な実現、哲学的な実現、肉体的な物質的な実現という３つの相互に類推可能な段階が有る。

錬金術の宗教的な実現は、帝国と祭司の堅固な基礎である。

錬金術の哲学的な実現は、絶対の考えと位階制の教育の確立である。

錬金術の肉体的な物質的な実現は、「大宇宙」、「大世界」にも絶え間無く満ちあふれている「小宇宙」の創造の法の範囲内における、または、「小宇宙」または「小世界」の範囲内における、発見と応用である。

創造の法は、物質と結びついた運動の１つである。

創造の法は、気化し易いものと結びついた気化し難いものの１つである。

創造の法は、固体と結びついた湿ったものの１つである。

創造の法は、神という理由である。

創造の法は、神の衝撃である。

創造の法の道具は、普遍の光である。

無限者である神の中では、普遍の光は天上的である。

星々と惑星の中では、普遍の光は星の光である。

金属の中では、星の光は金属の光沢の色、特効薬、水銀の様な物である。

植物の中では、星の光は植物の様な物である。

動物の中では、星の光は命である。

人の中では、星の光は磁気の様な物、体の様な物である。

星の光は、パラケルススの第５元素である。

星の光は、全ての被造物に潜在し自発的である。

星の光という第５元素が、真の命の若返り薬エリクサーである。

星の光は、耕す事によって、地から抽出される。

星の光は、混入、精留、昇華、合成によって、金属から抽出される。

星の光は、蒸留液と沸騰によって、植物から抽出される。

星の光は、吸収や同化によって、動物から抽出される。

星の光は、生殖によって、人から抽出される。

星の光は、呼吸によって、大気から抽出される。

前記の意味で、Aristeus は、大気から星の光という気体を抽出する必要が有る、と話している。

ハインリッヒ クンラートは、両性具有者の姿をした完全な人から星の光という生きている水銀を抽出する必要が有る、と話している。

ほとんど全ての賢者は、金属から星の光という金属の薬を抽出する必要が有る、と話している。

星の光という薬は、全ての領域で基本的に唯一であるが、形と種類に従って段階的に変化し特化する。

星の光という薬の使用は、共感、反感、つり合いという三重である。

段階的な第 5 元素は 2 つの力の補助に過ぎない。

各領域の薬は、地上的な鉱物の基礎の水銀と、生きている水銀または人の磁気を加えて、該当領域から抽出する必要が有る。

前記が、錬金術という知についての概要である。

錬金術は、カバラの様に、広く深い。

錬金術は、魔術の様に、神秘的である。

錬金術は、数学や自然科学といった正確な学問の様に、現実的である。

しかし、偽の錬金術師の失敗した貪欲が、あまりにも長く頻繁に錬金術の評判を落とした。

また、真の賢者が錬金術の理論と手順を理解し難い言葉で隠した事が、錬金術の評判を落とした。

第4巻 第6章 いくつかの有名な告発

古代世界の諸々の社会は、カースト的な唯物論の利己主義によって、滅んだ。

カースト的な政治は、カースト的な政治自体のせいで、石化した。

カースト的な政治は、大衆を、希望の無い排斥の中に閉じ込めてしまった。

カースト的な政治は、権力による統治を、人為的に物質的に選ばれた少数の人だけの物にしてしまった。

そのため、カースト的な政治は、循環を失った。

循環は、進歩、運動、命の原理である。

対立するものが無い権力、競合しない権力、制御できない権力は、王者や祭司にとって致命的である事が証明された。

他方、諸々の共和国は、多数の自由の衝突によって、滅んだ。

高く支持された位階制の義務を全て欠いた多数の自由は、相互に競合し合う多数の圧政に速やかに変わった。

カースト的な政治と共和政という2つの深淵の間に定点を見つけるために、キリスト教の法王は、自己犠牲を重く誓った結社を創造しようと考えた。

法王は、厳しい規則によって守られた結社を創造しようと考えた。

法王は、入門によって補充される結社を創造しようと考えた。

法王は、大いなる宗教的な社会的な秘密の唯一の受託者として、帝国の堕落にさらされる事無く、王や法王を作る結社を創造しようと考えた。

法王による結社の創造は、この世に所属しないで、この世の全ての高位を統治する、イエス キリストの王国の秘密であった。

この世に所属しないで、この世の全ての高位を統治するという考えは、大いなる修道会の設立の主な考えであった。

そのため、頻繁に、大いなる修道会は、教会の世俗的な権力や世俗の権力と争った。

偽のグノーシス主義や偽の「光に照らされた者」の反体制の分派である神殿騎士団も、この世の全ての高位の統治の実現を夢想した。

神殿騎士団は、使徒ヨハネによる原初のキリスト教の口伝を信じているという嘘を主張した。

神殿騎士団の夢想が教会と国家を現実に脅かす時が来た。

金持ちの放蕩な騎士団である神殿騎士団が、カバラの神秘の考えに入門し、正統な権力に歯向かう用意を見せ、位階制の伝統的な保守的な原理に歯向かう用意を見せ、巨人的な革命によって全世界を脅かす時が来た。

前記の、恐るべき陰謀者は、ほとんど歴史が理解されていない神殿騎士団であった。

ついに、神殿騎士団の堕落の秘密を明かす時が来た。

神殿騎士団の堕落の秘密の開示は、法王クレメンス 5 世とフランス王フィリップ 4 世の記憶の罪の許しと成る。

1118 年に Geoffrey de Saint-Omer、ユーグ ド パイヤンといった第 1 回十字軍の 9 人の騎士はコンスタンティノープルの総大司教の下でキリスト教への献身を誓った。

フォティオス 1 世の時代から常にコンスタンティノープルの総大司教はローマの教会に敵対していた。

神殿騎士団が公言していた目標は、聖地巡礼のキリスト教徒を守る事であった。

神殿騎士団の隠された目的は、エゼキエルが予見した見本によって、ソロモンのエルサレム神殿を建て直す事であった。

最初のキリスト教の数世紀の、ユダヤ教化した神秘主義者は、ソロモンのエルサレム神殿の復活を公式に予言していた。

ソロモンのエルサレム神殿の復活は、東のコンスタンティノープルの総大司教の秘密の夢と成っていた。

そして、建て直してカトリックの信仰にささげたソロモンのエルサレム神殿は、事実上、世界の中心に成ったであろう。

東のコンスタンティノープルの教会が西のローマの教会を圧倒したであろう。

コンスタンティノープルの総大司教は法王の位階を所有したであろう。

軍隊的な騎士団が採用した神殿騎士団という名前を説明するために、歴史家は、エルサレム王ボードゥアン２世がソロモン神殿の近くに会館を与えたからである、という誤った仮定をした。

しかして、歴史家は重大な時代錯誤という罪を犯した。

なぜなら、当時、ソロモンのエルサレム神殿という建物は存在しなかっただけではなく、ゼルバベルが再建した第二神殿の石も無かった。

ソロモンのエルサレム神殿が建っていた場所を示す事は困難であったであろう。

神殿騎士団の会館の場所は、ボードゥアン２世がソロモンのエルサレム神殿の近くに割り当てたのではなく、東のコンスタンティノープルの総大司教の秘密の武装した宣教師である神殿騎士団がソロモンのエルサレム神殿を建て直そうと企てていた場所の近くである、と結論するべきである。

神殿騎士団は、聖書の見本として、こてを一方の手に、剣を他方の手に持って働くゼルバベルの軍隊的な石工を採用した。

そのため、こてと剣は神殿騎士団の象徴と成った。

現代人が見る様に、後世に、神殿騎士団は「Masonic Brothers」という名前の下、偽のメーソンとして身を隠した。

神殿騎士団のこては四重である。

神殿騎士団のこては、十字の形に４つの三角形の平たい板が重なっていて、東の十字として知られているカバラの pantacle を形成している。

神殿騎士団の設立時にユーグ ド パイヤンが胸に秘めていた考えはコンスタンティノープルの総大司教の野心に仕える事では無かった。

当時、東には、ヨハネ派のキリスト教徒をかたる異端が存在した。

ヨハネ派をかたる異端は、自分たちだけが救い主イエスの宗教の隠された神秘に入門したという嘘を主張した。

ヨハネ派をかたる異端は、(処女懐胎を冒涜する)イエス キリストの真の歴史を知っているという嘘を主張した。

中略

キリスト教徒が聞くにはたえない、ヨハネ派をかたる異端による処女懐胎を冒涜する作り話は、ここまでにするつもりである。

言っておくと、ヨハネ派をかたる異端は、偽の口伝が使徒ヨハネにまで遡るという嘘をついた。

ヨハネ派をかたる異端は、使徒ヨハネが始めたという嘘をついた。

ヨハネ派をかたる異端の大司教は、キリストという称号をかたった。

ヨハネ派をかたる異端の大司教は、使徒ヨハネの時代から権力を連続して譲渡されてきたという嘘を主張した。

前記の、妄想上だけの名誉を神殿騎士団の設立時に自慢していた人の名前は Theoclet である。

　Theoclet は、ユーグド パイヤンと知り合った。

　Theoclet は、ユーグド パイヤンを偽の教会の神秘と希望に入門させた。

　Theoclet は、最高の祭司である法王と無上の王位という考えによって、ユーグド パイヤンを誘惑した。

　Theoclet は、ユーグド パイヤンを後継者に指名した。

　前記の様に、最初から神殿騎士団は異端による分裂と国々の権力者に対する陰謀で堕落していた。

　神殿騎士団の幹部は、異端と国々の権力者に対する陰謀という体質を深い神秘という名目で隠していた。

　対外的には神殿騎士団は無上の正統な教えへの信仰を告白していた。

　神殿騎士団の幹部だけが異端と国々の権力者に対する陰謀という方向性を知っていた。

　神殿騎士団の末端構成員は、幹部を信頼して従っていただけであった。

　異端と国々の権力者に対する陰謀を企て、ヨハネ派をかたる異端の教えを確立するために必要であれば戦うために、富と権力を獲得する事が、神殿騎士団の幹部が企てた手段であり目的であった。

　次の様に、神殿騎士団の幹部は主張した。

「見なさい。

法王の位階と、競合し合う諸々の君主国は、相互に口論し合い裏切り合い、堕落し、多分、明日には相互に滅ぼし合う。

法王と国々の堕落は、神殿騎士団が法王の位階と国々の王座を継ぐべきであると示している。
しばらくすれば、国々は神殿騎士団から王と法王を求めるであろう。
神殿騎士団は世界のつり合い、審判者、地の王者に成るつもりである」

　神殿騎士団には、神殿騎士団の幹部だけの物であるヨハネ派をかたる異端の教えである隠された教えと、ローマのカトリックの教えである公の教えという２つの教えが有った。
　前記の様にして、神殿騎士団の幹部は、取って代わろうとしていた敵であるキリスト教会と国々をだましていた。
　神殿騎士団の幹部の物であるヨハネ派をかたる異端は、偽のグノーシス主義による偽のカバラであった。
　神殿騎士団の幹部の物であるヨハネ派をかたる異端は、自然への偶像崇拝と全ての啓示された教えへの憎悪にすら変わった、神秘主義の汎神論へ速やかに悪化した。
　神殿騎士団の幹部は、より成功するために、支持者を確保するために、良心の自由と、全ての弾圧された信仰の総合と成る新しい正統な教えを全ての人に約束して、全ての堕落した宗教を惜しむ心と全ての新しい宗教への希望を助長した。
　神殿騎士団の幹部は、黒魔術の魔術師による汎神論の象徴まですら認めた。
　神殿騎士団の幹部は、以前から良心の呵責を感じていたキリスト教から離れるために、バフォメットという奇形の偶像を神の象徴としてたたえた。
　古代に、離反したイスラエルの諸部族が、ヤロブアム(1 世)がダンとベテルに置いた２つの金の子牛を敬礼した様に。

前記を、いくつかの最近発見された記念像や 13 世紀の貴重な文書が十分に証明している。

他の証拠は、隠されたメーソンの年代記の中や象徴の下に隠されている。

神殿騎士団の原理は、死という種がまかれていて、無政府状態による混乱であった。

なぜなら、神殿騎士団は、異端である。

神殿騎士団は、実行できない大き過ぎる作業を心に抱いていた。

なぜなら、神殿騎士団は、謙虚さや個人的な自己犠牲を理解しなかった。

神殿騎士団の多数は、教養が無く、剣を振るう事しかできなかった。

神殿騎士団は、世論と呼ばれる世俗の女王を必要であれば統治したり束ねる能力を持っていなかった。

ユーグ ド パイヤンは、視野の深さを所有していなかった。

後世に権力者を恐れさせた民兵と言えるイエズス会の軍隊的な初祖イグナチオ デ ロヨラは視野の深さを所有していた。

神殿騎士団は、堕落したイエズス会であった、と言えるかもしれない。

神殿騎士団の原理は、世界を買うために金持ちに成る事であった。

事実、神殿騎士団は、金持ちに成った。

なぜなら、1312 年にヨーロッパだけで神殿騎士団は 9 千以上の領地を所有していた。

富が神殿騎士団を滅ぼす危険物と成った。

神殿騎士団は、傲慢に成った。

神殿騎士団は、転覆させようとしていたキリスト教会といった宗教的な団体や政府といった社会的な団体への侮蔑を公にあらわにした。

イングランド王リチャード 1 世が信頼している司祭に返した答えは知られている。

後記の様に、司祭はリチャード１世に言った。

「陛下、あなたには、あなたにとって高くつき手離すと大いに良いであろう、野心、貪欲、贅沢という３人の娘がいます」

……。

リチャード１世は「野心、貪欲、贅沢を悔い改めろと言うのは正しい。ええと、野心、貪欲、贅沢という３人の娘を結婚させて手離そう。野心という娘を神殿騎士団に、貪欲という娘を修道士に、贅沢という娘を司教に与える。私は神殿騎士団、修道士、司教が同意してくれる事を前もって確信している」と答えた。

野心は神殿騎士団に致命的であった。

法王とフランス王は神殿騎士団の計画を見抜いて先回りした。

法王クレメンス５世とフランス王フィリップ４世はヨーロッパに合図を出した。

網にとらえられたと言える神殿騎士団は逮捕され武装解除され牢獄に投獄された。

神殿騎士団という一貫して見える武力による政変クーデターは今まで無かった。

全世界が驚いた。

全世界は神殿騎士団への告発による不思議な事物の開示を待った。

神殿騎士団への告発による不思議な事物の開示は多くの時代を通じて反響があった。

しかし、法王達は、神殿騎士団の陰謀の計画を大衆に開示する事ができなかった。

神殿騎士団の陰謀の計画を大衆に開示する事は、地の王者だけの物である秘密に、大衆を入門させる事に成ってしまう。

そのため、法王達は、魔術の罪による告発に頼る必要が有った。

そのために、偽の告発者と偽の証人があらわれた。

中略

神殿騎士団への魔術の罪による告発という劇の最後は知られている。

神殿騎士団の総長ジャックド モレーたちは焼き殺された。

しかし、神殿騎士団の総長ジャックド モレーは、死ぬ前に、偽の隠されたメーソンを組織して設立した。

ジャックド モレーは、牢獄の壁の中から、イタリアのナポリに東の偽のメーソンのロッジを、スコットランドの首都エディンバラに西の偽のメーソンのロッジを、スウェーデンの首都ストックホルムに北の偽のメーソンのロッジを、フランスの首都パリに南の偽のメーソンのロッジを設立した。

法王クレメンス 5 世とフランス王フィリップ 4 世は急死、不審死、突然死で死んだ。

神殿騎士団の主要な告発者である Squin de Florian は暗殺された。

神殿騎士団の剣は壊されて、短剣に変わった。

神殿騎士団のこては墓を建てるためだけに用いられた。

ここで、神殿騎士団を闇の中に去らせよう。

神殿騎士団は、闇の中に避難して、報復の計画を練っている。

革命の大いなる時代に神殿騎士団が再び現れるのを見るであろう。

象徴と業によって神殿騎士団を見分けられるであろう。

神殿騎士団への魔術の罪による告発の後に、歴史で起きた魔術の罪による大きな告発は、聖女と言える処女ジャンヌ ダルクへの魔術の罪による告発である。

ジャンヌ ダルクについて、教会は敗者の卑劣な恨みに追従したと非難されている。

使徒ペトロの椅子（イス）は、どの様な呪いをジャンヌ ダルクの暗殺者に浴びせたか、真剣に問うであろう。

ジャンヌ ダルクの暗殺者への神による呪いを知らない人に話すと、司教や祭司に不相応である、ボーヴェ司教ピエール コーションは、神の手によって突然、死んだ。

ピエール コーションは死後、カリストゥス４世によって破門された。

ピエール コーションの死骸は、聖所から取り出されて、公共の下水道に投げ捨てられた。

「オルレアンの乙女」、「ジャンヌ ダルク」を裁いて処罰したのは、教会ではなく、邪悪な聖職者と背教者であった。

報復する神意は、高貴な少女ジャンヌ ダルクを敵に渡したフランス王シャルル７世を手中にとらえた。

シャルル７世は、息子による毒殺を恐れて飢え死にした。

恐怖が卑劣な悪人への責め苦である。

シャルル７世は、遊女アニェス ソレルに夢中に成った。

シャルル７世は、遊女アニェス ソレルのために、フランス王国を借金で苦しめた。

処女ジャンヌ ダルクが、シャルル７世のために、フランスを守ってくれたのに。

国家的な詩人ヴォルテールは処女ジャンヌ ダルクをたたえている。

詩人ベランジェは遊女アニェス ソレルを歌っている。

ジャンヌ ダルクは無実の罪で死んだ。

以下略

第4巻 第7章 悪魔についての迷信

　教会が悪の霊について宣言した決定の平静さをすでに話した。

　教会は子に悪魔を恐れない様に勧めている。

　教会は悪魔に夢中に成らない様に勧めている。

　教会は悪魔の名前すら話さない様に勧めている。

　中略

　一家の父が、あらゆる種類の悪事をやりかねないと知られている、ろくでなしに門を閉ざした後で、ろくでなしに幼子と親交し甘言し誘拐し、とりつく許可を与えたら、どう思うのか？　と、お人よしの聖職者 Hilarion Tissot へ問いたい。

　悪魔がどんな者であれ、自ら悪魔に身を委ねた人にしか悪魔は憑依しない、と真のキリスト教徒としてあるために認めよう。

　自ら悪魔に身を委ねた人に悪魔が促（うなが）した悪事は全て、自ら悪魔に身を委ねた人の責任に成る。

　酩酊下における酩酊者による悪事は全て酩酊者の責任に成る様に。

　酩酊は一時的な狂気である。

　狂気は永遠の酩酊である。

　星の光という燐（リン）の脳神経での充満が、狂気や酩酊をもたらす。

　星の光という燐（リン）の脳神経での充満は、星の光というエーテルのつり合いを破壊する。

　星の光という燐（リン）の脳神経での充満は、魂から、魂の精密な道具を奪う。

酩酊状態の霊的な個人的な魂は、草製ゆりかごの中で布に包まれて束縛された、ナイル川の揺れる流れに身を任せた、モーセに似ている。

流体の物質的な地の魂である星の光が、酩酊状態の魂をさらっていく。

エロヒム、神々、神の霊が、星の光という神秘の水を覆っていた。

(創世記１章２節「神の霊が水の面を覆っていた」)

神の霊は、「光あれ」という啓発的な言葉によって、神の言葉を明確にした。

(創世記１章３節「光あれ」)

星の光という地の魂は、つり合いへ自動的に向かう傾向が有る、力である。

意思が星の光を統治するか、星の光が意思を圧倒してしまうか、どちらか１つである。

悪人という不完全な生物は、奇形の生物の様に、星の光を苦しめる。

そのため、星の光は、悪人という知性の失敗作を分解吸収しようと戦う。

そのため、狂人と幻覚患者は、破壊や死に抗えない同情を感じる。

狂人と幻覚患者は、消滅を良い物と誤解する。

そのため、狂人と幻覚患者は、自殺するだけではなく、他人の死を見て喜ぶ。

狂人と幻覚患者は、命が狂人と幻覚患者から離れるのに気づく。

正気は、狂人と幻覚患者を刺激して苦しめて、絶望すらさせる。

狂人と幻覚患者には、存在する事は死を理解する事である。

死を理解する事は地獄の苦しみである。

中略

存在とは、実体と命である。

命は、運動によってあらわれる。

つり合いが、運動を永続させ不滅にする。

そのため、つり合いは、不滅の法である。

良心とは、つり合いの自覚である。

つり合いは、公平であり、正義である。

過剰が致命的ではない場合は、過剰は正反対の過剰によって修正される。

正反対の過剰が過剰を修正する事は、反作用の永遠の法である。

過剰が全てのつり合いを破壊する場合は、過剰は、「外の闇」の中に失われて、永遠の死と成る。

(マタイによる福音 22 章 13 節「外の闇」)

星の光という地の魂は、論理がつり合わせる力によって抵抗しない、過剰なものを、星の光の運動による目眩(めまい)の中に引きずり込む。

悪人という不完全な奇形な生物が現れると、星の光という地の魂は悪人を破壊するために星の光という力を悪人に注ぐ。

ちょうど、生命力が傷を治すために生命力を傷に注ぐ様に。

そのため、特定の病人の近くでは、大気の混乱が生じる。

また、星の光という流体の動揺、テーブルの自動運動、空中浮揚、石の自動飛翔、悪霊に憑依された者の星の光の手足の目に見えるし触れられる放射が生じる。

ガンを切除するために、傷を塞ぐために、死を望む吸血鬼を命の共通の源泉に戻すために、自然が、特定の病人の近くで驚異現象を起こす。

自発的に動かない物の自発的な運動は、地を磁化する星の光という力の作用による結果に過ぎない。

霊、言い換えると、思考は、てこ無しでは何物も持ち上げる事ができない。

仮に、霊または思考が物を動かせるならば、手などの肉体の器官を創造して完成するための自然の無限と言える苦労は的外れに成るであろう。

仮に、感覚から解放された霊が物質を意思に従わせられるならば、秩序と調和に従って、高名な死者は何よりもまず出現しているであろう。

しかし、死人の霊が出現する代わりに、狂人といった病人の周囲で気まぐれな支離滅裂な性急な運動が生じるだけである。

狂人といった病人は、地の魂を乱す、乱れた磁石である。

失敗作である狂人などの発生によって、地が狂乱している時は、地が危機を経験していて、危機は激変に至るであろう。

中略

人は、存在の調和を正確に理解していない。

存在の調和は順序に従う。

存在の調和は位階に従う。

有名な狂人シャルル フーリエが話している様に。

神の言葉(、イエス)によって、霊は霊に作用する。

物質は、霊の印象を受け取る。

物質は、完全な生物によって、霊と交流する。

形における調和は、概念における調和と結びついている。

星の光は、共通の仲介者である。

星の光は、霊であり、命である。

星の光は、色の総合である。

星の光は、影の一致である。

星の光は、形の調和である。

星の光の振動は、生きている数学である。

ただし、闇、星の光による架空の幻、睡眠時における星の光という燐光の誤り、錯乱中に話された妄言は何物も創造しないし、何物も実現しないし、要約すると、存在しない。

闇、架空の幻、妄言は、命の外の物である。

闇、架空の幻、妄言は、星の光による酩酊による妄想であり、疲れた目による錯覚である。

疲れた目による錯覚という人をだます幻の火に従う事は、行き止まりの中へ歩く事である。

疲れた目による錯覚による偽の啓示を盲信する事は、死を敬礼する事である。

「疲れた目による錯覚による偽の啓示を盲信する事は、死を敬礼する事である」と自然が証明している。

テーブル ターニングによる神託は支離滅裂か悪口に過ぎない。

テーブル ターニングは、低俗な人の隠された思考の反響である。

テーブル ターニングは、非論理的な混乱した悪夢である。

テーブル ターニングは、大衆の中の滓(カス)が軽蔑を表すために用いる言葉である。

あの世と交信できると誤って主張したGuldenstubbe男爵の本がある。

あの世からGuldenstubbe男爵への返信は、淫らな落書き、なげやりな象形文字、「死の精神」と翻訳できるギリシャ語の「プネウマ タナトス」であった。

「死の精神」は、アメリカの教えと一致する驚異現象による偽の啓示の究極の言葉である。

「死の精神」は、祭司の権限から引き離された教えであり、位階制による制御から引き離された教えである。

驚異現象の現実性と重要性、驚異現象の証人の信頼性を否定しない。

しかし、神が教会に神聖に位階的に伝えた知の精神よりも、何よりも、驚異現象による混乱した暗い偽の神託を好む傾向が有る人全てに危険を警告する必要がある。

星の光という流体の地の魂が、眠りこけてしまった理性と知性による妄想を、驚異現象による偽の啓示へ自動的に反映している。

第 5 巻 達道者と祭司

へー

第 5 巻 第 1 章 魔術の罪で非難された(無実の)祭司と法王

すでに話した様に、偽のグノーシス主義による神への冒涜と不信心のせいで、教会は魔術を弾圧した。

神殿騎士団への弾圧によって、教会と魔術の決裂は決定的に成ってしまった。

神殿騎士団への弾圧以降、身を隠す事を余儀無くされた異端者、悪人の霊の魔術師は、闇の中で報復を計画し、(罪をなすりつけて)教会を社会的に葬ろうとした。

教会という祭壇に異端という祭壇を公に敵対させて弾圧と処刑を招いた大異端者より抜け目が無かった当時の異端者は、異端の教えと教会への敵意を隠した。

異端者は、恐るべき誓いによって、団結した。

そして、異端者、悪人の霊の魔術師は、世論という裁判所で優勢を確保するのが最重要である事に気づき、黒魔術を自らおとしめてから、教会を黒魔術の一派として大衆に告発して、黒魔術への悪い噂を、黒魔術の告発者であり裁判官である教会になすりつけた。

確信と信心を論理という不動の基礎に根づかせない限り、人は熱狂的に無差別に真理だけではなく虚偽をも望んでしまう。

双方とも厳しい反発に会った。

誰が争いを終わらせられるのか？

ローマの信徒への手紙 12 章 17 節「悪で悪に報復するなかれ」、ローマの信徒への手紙 12 章 21 節「善で悪に勝利しなさい」と話したイエスの使徒パウロの精神だけが、争いを終わらせられる。

カトリックの祭司は、迫害者として非難されている。

けれども、カトリックの祭司の使命は、「善きサマリア人」である。

そのため、カトリックの祭司は、盗賊に襲われた人を思いやらずに通り過ぎた思いやりが無いレビ族から祭司の役目を引き継いだ。

思いやりを発揮する事によって、祭司は、神が神性を祭司に授けている事を証明する。

そのため、聖職者に不適切に成った一部の人が犯した罪を、祭司全体になすりつけるのは、最悪な不正である。

常に、全ての人は、邪悪に成り得る。

常に、全ての人は、悪事を犯す可能性が有る。

しかし、常に、真の祭司には、思いやりがある。

偽の聖職者、異端者は、聖職者に不適切に成った一部の人が犯した罪を、祭司全体になすりつけて、祭司全体を見る。

グノーシス主義を禁止してから、キリスト教の聖職者が、知を無くして、知という権利の根拠が無いにもかかわらず力を不正利用している、と異端者は話している。

最早、善悪の知が統治していない位階制に何の意味が有るか？　善悪の知が統治していない位階制は無意味である！　と異端者は話している。

聖所の聖職者の最高指導者が、末端の聖職者と同じく、神秘についての無知と盲信によって、狂信や見せかけだけの偽善に走っている。

聖職者という盲人が盲人を導いている。

(マタイによる福音 15 章 14 節「もし盲人が盲人を導けば、盲人は諸共に穴に堕ちるであろう」)

同程度の聖職者における上の位階への昇進は、最早、運任せや不正な策略の結果でしか無い。

司祭の位階の聖職者は、下品な乱雑な信心によって、パンと赤ワインを神聖化しようとする。

司祭の位階の聖職者は、パンによる詐欺師である。

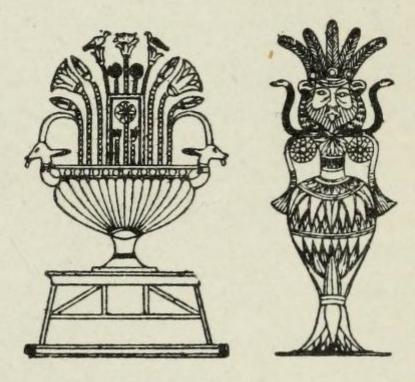
司祭の位階の聖職者は、人の肉を食い物にする人である。

司祭の位階の聖職者は、最早、奇跡を起こす人ではなく、悪人の霊の魔術師である。

前記が、異端者の決めつけである。

異端者は、祭司への誹謗中傷を強化するために、作り話を考えた。

例えば、10 世紀から法王達は闇の霊に身を委ねていると異端者は嘘をついた。

中略

エリファス レヴィは、プロテスタントの歴史家による実在しない女性の法王ヨハンナの嘘の伝記に目を通して２つの非常に興味深い絵に気づいて注目した。

プロテスタントの歴史家は実在しない女性の法王ヨハンナの絵であると誤解しているが、実際は、法王の三重冠をかぶったイシスが描かれている古代のタロットである。

未だに「女性の法王ヨハンナ」と呼ばれている、タロットの２ページ目の象徴的な絵として良く知られている。

タロットの２ページ目には、法王の三重冠をかぶっている女性が描かれている。

タロットの２ページ目には、法王の三重冠の直上に、三日月かイシスの角が描かれている。

プロテスタントが著書で実在しない女性の法王ヨハンナであると誤解していた２つの絵のうち一方に、より注目するべきである。

タロットの２ページ目には、薄く長い髪の女性が描かれている。

女性の胸には太陽の十字がある。

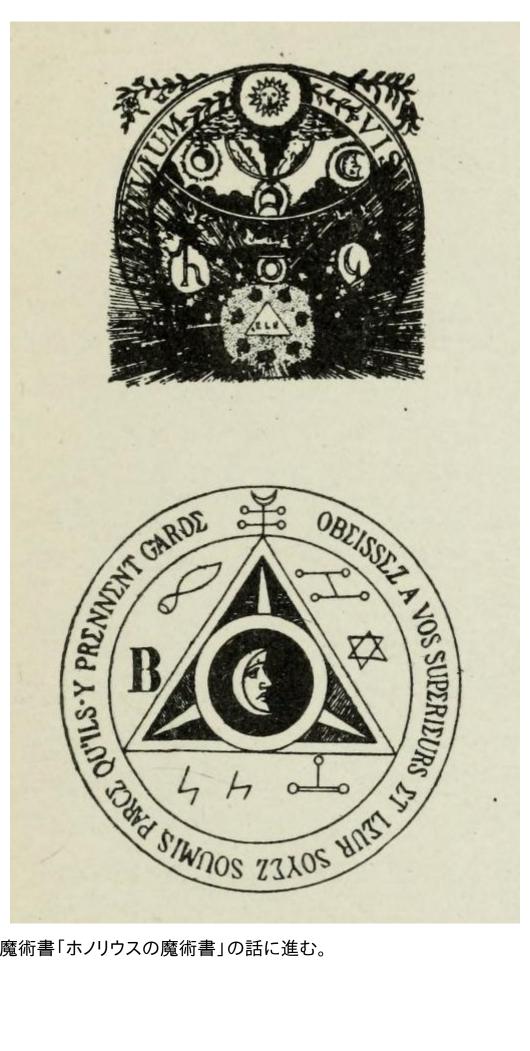
女性は「ヘラクレスの柱」という２つの柱の間に座っている。

女性の背後には海が流れていて、海面の上には蓮華が咲いている。

タロットの２ページ目には、法王の特徴を備えた、女神イシスが描かれている。

女神イシスは、息子のホルスを腕に抱いている。

カバラの資料として、２つの絵には比類無き価値が有る。

中略

偽の魔術書「ホノリウスの魔術書」の話に進む。

不信心な偽の魔術書「ホノリウスの魔術書」の作者は、13 世紀の熱意ある法王ホノリウス 3 世であると誤解されている。

　異端者と降霊術師は、法王ホノリウス 3 世を確かに憎んでいた。

　異端者と降霊術師は、法王ホノリウス 3 世を共犯者に仕立て上げて名誉を汚そうとした。

　1216 年に法王ホノリウス 3 世に成った、チェンツィオ サヴェッリは、ドミニコ会を承認した。

　ドミニコ会は、マニ教と悪人の霊の魔術師の子孫であるアルビジョア派と呼ばれたカタリ派とヴァルド派にとって恐るべき修道会であった。

　法王ホノリウス 3 世は、フランシスコ会とカルメル会を承認し、十字軍の結成を説き、教会を賢明に統治し、多数の法王の教令を残した。

　カトリックである法王ホノリウス 3 世に黒魔術の罪を着せる事は、法王ホノリウス 3 世が承認した大いなる修道会を疑う事と同じである。

　法王ホノリウス 3 世を疑う事と、法王ホノリウス 3 世が承認した修道会を疑う事で、利益を得るのは悪魔(と言える悪人)である。

　いくつかの偽の魔術書「ホノリウスの魔術書」の古い写本には作者は(対立教皇)ホノリウス 2 世であると記されている。

　しかし、法王ホノリウス 2 世に成った優雅なランベルト司教枢機卿を悪人の霊の魔術師に仕立て上げるのは不可能である。

　法王の位階へ昇進後、法王ホノリウス 2 世は、詩人に囲まれてフランスの都市ルマンの司教 Hildebert の様に哀歌のために詩人に司教の位階を与えた、また、サン ヴィクトルのフーゴーの様な学の有る神学者に囲まれていた。

ただ、偽の魔術書「ホノリウスの魔術書」の古い写本に作者は(対立教皇)ホノリウス２世であると記されている事は、恐るべき偽の魔術書「ホノリウスの魔術書」の真の作者に一筋の光を当てる。

　中略

　イタリアのロンバルディア州の司教たちはイタリアのパルマの陰謀を企んでいる司教カダルスを対立教皇として選んだ。

　パルマの司教カダルスは、あらゆる犯罪をやりかねない男であった。

　また、パルマの司教カダルスは、聖職位を売買し内縁の妻を持っている醜聞が公に成っている男であった。

　パルマの司教カダルスは、(対立教皇)ホノリウス２世を名乗った。

　中略

　パルマの司教カダルスは、闇に隠れに舞い戻った。

　そして、十中八九、パルマの司教カダルスは、(対立教皇)ホノリウス２世という名前、位階で、悪人の霊の魔術師と背教者の大祭司に成ろうと決意した。

　そして、パルマの司教カダルスは、(対立教皇)ホノリウス２世という名前で偽の魔術書「ホノリウスの魔術書」を書いた。

　中略

隠された知を学んだ人は皆、古代の魔術師が考えを記さずに pantacle の象徴的な文字で表現した事を知っているはずである。

中略

「エヘイエ ヤハウェ アドナイ アグラ」という４つの神の言葉は「絶対の存在は、ヤハウェであり、三位一体の主である神であり、教会の神であり位階制である」を意味する。

第 5 巻 第 2 章 放浪の民ロマの出現

前略

ロマは、占いで、象徴に意味が有る、数の力にかかっている、不思議な一連の象徴タロットを用いた。

中略

ロマが遭遇した弾圧は、ロマが運命を調べたり神託を得たりするために応用した不思議な書タロットにも降り注いだ。

理解し難い象徴を持つ色のついたタロット カードは、疑い無く、全ての古代の啓示の記念碑的な要約である。

タロットは、エジプトの象徴の鍵である。

タロットは、ソロモンの鍵である。

タロットは、ヘルメスであるエノクによる古代の書である。

エリファス レヴィが参照している、ロマについての本の著者ヴァイラントは、タロットを未だ完全に理解していないが深く研究した人の様にタロットについて話して、自身の非凡な聡明さを証明している。

後記は、ヴァイラントによるタロットについての話である。

「特にタロットに描かれている象徴は時間の経過と共に大きく変えられているが、石板タロットの象徴、象徴の配置、順序には明らかに意味が有る。

タロットの象徴は、古代の大衆への教え、古代の哲学の考え、古代の宗教の教えと密接に対応している。
タロットは、古代人の宗教の総合である、と考えざるをえない。
すでに明らかにした様に、タロットは、エノクの星の光の書から導かれた物である。
タロットは、エジプトの愛と美と幸運の女神ハトホルの星の光の車輪を基にして形成されている。
ハトホルは、アスタロトである。
北斗七星である大熊座、または、北半球の春を代表する星アークトゥルスである、インドの Ot-tara の様に、タロットは、世界の堅固さと地上の星空を支える、大いなる乾かす力である。
結果、太陽の戦車、ダビデの戦車、アーサー王の戦車と考えられる、北斗七星である大熊座の様に、タロットは、ギリシャ人のくじ、中国人のくじ、エジプト人の占いくじ、ロマのくじである。
タロットという北斗七星である大熊座のまわりを絶え間無く回転して、星の光という星々は、吉凶、運命を地に注ぐ。
タロットによって、星の光は、光と影を地に注ぐ。
タロットによって、星の光は、冷たさと熱さを地に注ぐ。
タロットによって、星の光から、善と悪が流れる。
タロットによって、星の光から、愛と憎しみが流れる。
愛憎は、人の幸せを作り上げる。
どこで、いつ発明されたか誰も知らないほど、もし書物タロットの起源が闇の中に失われても、全てのものが(ロマの)タロットはインドからタタールが起源であると信じる様に導く。

また、各国の教えと各国の賢者の特徴に段階的に応じて、古代の諸国がタロットを多様に変化させていても、タロットは、隠された知の書の１つである。
多分、タロットは、シビュラの書の１つですらある。
ヴァイラントは、タロットが現代人にまで到達した経路を十分に示せた。
ヴァイラントは、ローマ人がタロットを知っていた、と見ている。
ヴァイラントは、東のインド出身の無数のよそ者ロマの仲介によって、ローマの帝政の最初の時代からだけではなく、共和政の最初の時代から、ローマ人はタロットを知っていた、と見ている。
ロマは、酒神バッカスと女神イシスの神秘に入門している。
そして、ロマは、ロマの知をローマの第２の王ヌマ ポンピリウスの知の後継者にもたらした」

　ヴァイラントは、ホメロスが、棒、杯、剣、フランスのコインのドゥニエまたは黄金の輪というタロットの４つの象徴をアキレスの盾の紋章として描いている、とは話さなかった。
　しかし、後記の様に、ヴァイラントは、話している。

「タロットの杯は、時の円弧または時のアーチ、天の器または天の船である。
タロットのフランスのコインのドゥニエは、星座、恒星、惑星である。
タロットの剣は、火、光線である。
タロットの棒は、影、石、木、植物である。
杯の１は、宇宙の器、天の真理のアーチ、世界の原理である。
フランスのコインのドゥニエの１は、太陽、世界の大いなる目、命の食べ物と命の元素である。

剣の１は、戦神マルスの槍である。

戦神マルスの槍から、戦い、逆境、勝利へ至る。

棒の１は、蛇の目、羊飼いの杖、牛飼いの突き棒、ヘラクレスの棍棒、農耕の象徴である。

杯の２は、牛に変えられたイオまたは女神イシス、オシリスの牛アピスまたはエジプトの牛の神ムネヴィスである。

杯の３は、イシス、月、夜の女性の主である女王である。

フランスのコインのドゥニエの３は、オシリス、太陽、昼の主である王である。

フランスのコインのドゥニエの９は、神の使者メルクリウスまたは天使ガブリエルである。

杯の９は、幸運の妊娠である。

幸運の妊娠から、幸せに成る」

　後記の様に、ヴァイラント氏は話している。

「中国に、タロット カードと正に同じ数である、小さな仕切りを含んでいる、長方形の大きな仕切りによる、図表が存在する。

タロットに似ている中国の図表では、大きな仕切りは、垂直に６つ並んでいる。

タロットに似ている中国の図表では、最初の５つの大きな仕切りは各々14の小さな仕切りを含んでいて、最初の５つの大きな仕切りは全部で70の小さな仕切りを含んでいる。

一方、タロットに似ている中国の図表では、最後の第６の大きな仕切りは、７つの小さな仕切りしか含まない。

したがって、タロットに似ている中国の図表は、数 7 の組み合わせによって形成されている。

なぜなら、タロットに似ている中国の図表では、最初の 5 つの大きな仕切りは各々 7 の 2 倍である 14 の小さな仕切りを含んでいて、最後の第 6 の大きな仕切りは 7 つの小さな仕切りを含んでいる。

タロットに大いに似ている中国の図表では、最初の 4 つの大きな仕切りは、全部で 56 の小さな仕切りを含んでいて、棒、杯、剣、輪という 4 つの象徴による 56 枚のタロットの小アルカナに相当する。

タロットに似ている中国の図表では、最後の 2 つの大きな仕切りは、合わせて 21 の小さな仕切りを含んでいて、タロットの大アルカナの(22 枚のうち 21 番目の『愚者』以外の)21 枚に相当する。

タロットに似ている中国の図表の 6 つの大きな仕切りは、創世記の 7 日間のうち創世の 6 日間を表している。

タロットに似ている中国の図表は、中国人によると、神による大洪水の水が乾いた中国の最初の時代にまで遡る。

そのため、タロットに似ている中国の図表はタロットの原本か写本である、と結論できる。

また、いずれにしても、後記の様に結論できる。

タロットは、モーセより古い。

タロットは、最初の時代の物、または、黄道 12 星座が考案された時代の物である。

また、タロットは 6 千 6 百年前の物である、と結論できる。

前記が、ロマのタロットである。

タロットという名前から、文字の位置の置き換えによって、ヘブライ人はトーラーという言葉を作った。

トーラーは、ヤハウェの律法を意味する。

現在の様に遊戯の道具ではなく、タロットは、本、真剣な内容の本、象徴の本、星々と人の類推可能性の本であった。

タロットは、占いの本である。

タロットの助けによって、悪人の霊の魔術師は、運命の神秘のヴェールの奥を推測した。

当然、キリスト教徒は、タロットの象徴、名前、数やタロットによる神託を、悪魔のわざの道具、魔術の実践と見なした。

Sagi であるロマが軽率にも軽信し易い大衆を濫りに信頼してタロットをキリスト教徒に教えた時に、どの様な厳しさでキリスト教徒がタロットを禁止したか理解できるであろう。

そのため、タロットの神託への信頼が失われて、タロットは遊戯の道具に成ってしまった。

諸国の様式や幾世紀も連続した雰囲気に応じてタロットの絵は変えられてしまった。

近代のトランプはタロットを浅はかに変えてしまった物である。

チェスと比較したチェッカーの様に、タロットの組み合わせと比較したトランプの組み合わせは、劣っている。

そのため、タロット カードの起源はシャルル 6 世のタロットであると考えるのは誤っている。

なぜなら、アルフォンソ 11 世が 1332 年より前に設立したベルトの騎士団に入門した人が(タロット)カードで遊ばないと誓っている。

『Le Sage』、『ル サージュ』、『賢明王』と呼ばれているシャルル 5 世は、シャルル 5 世の時代にシエーナの聖ベルナルディーノが(タロット)カードを禁止して燃やした、と話している。

また、シャルル 5 世の時代に、タロットの 1 つに描かれている勝利したオシリスまたはアフラ マズダーをたたえる勝利の遊戯としてタロットは遊ばれていたのでタロットは『勝利』という名前で呼ばれていた。
さらに、シャルル 5 世は 1369 年に(タロット)カードを禁止した。
また、シャルル 5 世は、little Jean de Saintré が(タロット)カード遊びをしなかったという理由から、little Jean de Saintré を気に入ってたたえた。
当時、タロット カードは、スペインでは Naipes と呼ばれ、イタリアでは Naibi と呼ばれていた。
Naibi は、女の小悪魔、シビュラ、デルポイのアポロン神殿の巫女である」

　前記で、引用してきた本の著者ヴァイラント氏は、タロットはロマのタロットが変えられた物である、と考えている。

　中国の特徴を持つ一部のドイツのタロットは、ロマのタロットが変えられた物である。

　しかし、細部だけが変化して来たイタリアのタロットや、古代エジプトのタロットの名残にまで遡(さかのぼ)れるフランスのブザンソンのタロットは、ロマのタロットが起源ではない。

「高等魔術の教理と祭儀」でタロットについてのエッティラまたはアリエットの労作が何て見苦しいか話した。

　光に照らされた理髪師エッティラは、30 年間の研究の後に、偽の粗悪なタロットをもたらすだけに終わった。

　エッティラは誤ってタロットの順序を入れ換えてしまった。

　そのため、エッティラのタロットでは数と絵がもはや対応していない。

要するに、エッティラのタロットはエッティラの偉大ではない程度の知性に合った代物であった。

　エリファス レヴィは、ロマが秘伝伝授への鍵タロットの正統な所有者であると話しているヴァイラント氏に同意しない。

　疑い無く、あるヘブライ人のカバリストの背信行為または軽率な行為のおかげでロマはタロットを所有できた。

　ロマの出身はインドである。

　ロマについての歴史家は、ロマの出身がインドである、という説が有力である事を示している。

　現存しているロマのタロットは、ヘブライ人経由のタロットである。

　事実、ロマのタロットは、ヘブライ文字と対応している。

　ロマのタロットは、いくつかの象徴がヘブライ文字の形にすら成っている。

　ロマとは何者か？

　ある詩人が「ロマは古代世界の堕落の残存者である」と話している様に、ロマはインドのグノーシス主義の異端者である。

　以下略

第5巻 第3章 ライムンドゥス ルルスの伝説と史実

すでに話した様に、教会は、秘伝伝授を禁止した。

なぜなら、教会は、グノーシスへの冒涜に怒った。

ムハンマドは、信心に対して東の熱狂を武装させた時、キリスト教徒の祈るが無知な信心深さに対して厳しい好戦的な軽信を対立させた。

ムハンマドの後継者であるイスラム教徒は、ヨーロッパに足を踏み入れて、速やかに侵略してしまいそうであった。

キリスト教徒は「神意がキリスト教徒を非難して懲らしめている」と話した。

イスラム教徒は「運命はイスラム教徒の側に立っている」と答えた。

ヘブライ人のカバリストは、カトリックと言える国々で(悪人の霊の)魔術師として焼き殺されるのを恐れて、アラビア人の国々へ亡命した。

なぜなら、ヘブライ人の目には、イスラム教徒は異端者であるが偶像崇拝者ではない、様に見えた。

ヘブライ人のカバリストは、何人かのアラビア人に、カバラの神秘を知る事を認めた。

イスラム教徒は、教養の有るイスラム教徒が侮って西の未開人と呼んでいたキリスト教徒を、すでに力で圧倒していたが、やがて、知識でも圧倒しようと望んだ。

イスラム教徒による物質的な力による猛攻撃に対して、フランスの精神は恐るべき鉄槌による打撃を対立させた。

イスラム教徒の軍団の流れの前に、鎖かたびらをまとった指が明確な線を引いた。

キリスト教徒の勝利の力強い声が「あなたたちをもう進ませない」とイスラム教徒という大洪水に叫んだ。

知の霊はライムンドゥス ルルスを出現させた。

ライムンドゥス ルルスは、ダビデの子イエスのために、救い主イエスのために、ソロモンの遺産を取り戻した。

初めて、ライムンドゥス ルルスは、普遍の知の輝きに、盲信の子であるキリスト教徒を呼び寄せた。

中略

史実に至ろう。

哲学者であり達道者である、「光に照らされた博士」という称号に相応しい人である、ライムンドゥス ルルスは、Ambrosia di Castello への不適切な情熱で有名に成ったマジョルカ島の領主の代理の息子である。

ライムンドゥス ルルスは不死の薬エリクサーは発見しなかった。

しかし、エドワード 3 世のために、イギリスで、ライムンドゥス ルルスは黄金を創造した。

ライムンドゥス ルルスが創造した黄金は「ライムンドゥスの黄金」と呼ばれた。

非常に稀であるが、「ライムンドゥスの黄金」の丸い欠片が、いくつか現存している。

専門家は「ライムンドゥスの黄金」の丸い欠片を「Raymundins」と呼んでいる。

中略

実際に、多数の錬金術の象徴では、アンチモンを、卑金属を金に変える錬金で溶けている卑金属に投入する粉における効率的な主要な成分として、示している。

ライムンドゥス ルルスの時代に化学は存在しなかった事には同意する。

ただし、言い足すと、錬金術師が化学を作った。

と言うよりは、錬金術師は、魔術の聖所の宝であった化学の総合的な秘密は守って、化学の分析の手順のいくつかについて、当時の大衆に教えた。

後に、化学は完成された。

しかし、言葉の正しい意味で、現在でも未だに、化学者たちは、知の人を、錬金術の古代の総合に、導けていない。

錬金術の遺作で、ライムンドゥス ルルスは、錬金術の知の全ての原理を記した。

ただし、錬金術師の義務と慣習に従って、ヴェールで隠した形で、錬金術の遺作で、ライムンドゥス ルルスは、錬金術の知の全ての原理を記した。

ライムンドゥス ルルスは、ライムンドゥス ルルスの錬金術の遺作の鍵を作った。

また、ライムンドゥス ルルスは、ライムンドゥス ルルスの錬金術の遺作の、鍵の鍵である、補足を作った。

エリファス レヴィの意見では、ライムンドゥス ルルスの補足は、錬金術についてのライムンドゥス ルルスの文書のうち最も重要である。

ライムンドゥス ルルスの補足の原理と方法は、純粋な金属への洗練ではないし、混合物の分離ではない。

理論としては、ライムンドゥス ルルスの補足の原理は、Geber の原理と一致する。

実践としては、ライムンドゥス ルルスの補足の方法は、アルナルドゥス デ ビラ ノバの方法と一致する。

考えについては、ライムンドゥス ルルスの補足の考えは、カバラの無上に崇高な考えと一致する。

無知な人が大いなるものへの疑惑をもたらしても失望しない、真剣な人は、古代の世界の知の大いなる人々が従った絶対の探求を続けたい場合は、ライムンドゥス ルルスの補足をカバラ的に学ぶべきである。

神の正統な教えの使徒の務めに献身した使徒ヨハネの後における無上の秘伝伝授者である、超越的な達道者である、ライムンドゥス ルルスは、全生涯を、宗教的な物を建設し、教えを説き、無数の学問的な労作を書いて過ごした。

イスラム教徒の学者の文書の誤りを証明するために、アフリカ北西のイスラム教徒にキリスト教を説くために、1276 年に、マジョルカ島のパルマの北のバルデモーサに、ライムンドゥス ルルスは、フランシスコ会士が東の言語、特に、アラビア語を学ぶための、アラビア語学院を建設した。

1276 年 12 月 16 日のイタリアのヴィテルボからの教書で、法王ヨハネス 21 世は、ライムンドゥス ルルスのアラビア語学院の建設を認めた。

1293 年から 1311 年まで、ライムンドゥス ルルスは、アラビア語学院と同じ目的の多数の学校の建設を法王ニコラウス 4 世、フランスの王、イタリアのシチリアの王、キプロスの王、マジョルカ島の王に願い出て認可を得た。

ライムンドゥス ルルスは、修道院などを訪れて、ライムンドゥス ルルスの「大いなる技」によって教えた。

ライムンドゥス ルルスの「大いなる技」は、人の知の普遍の統合である。

ライムンドゥス ルルスの「大いなる技」の主要な目的は、考えの唯一の形として人々の間で唯一の言葉を定める事である。

ライムンドゥス ルルスは、パリを訪れて、最高に博識な学者たちを驚かせた。

その後、ライムンドゥス ルルスは、フランスを越境して、スペインを訪れ、Complute に一時滞在して、言語と学問を学ぶための中央学校を建設した。

ライムンドゥス ルルスは、多数の修道院、多数の修道会を改善し、イタリアを訪れて新しい軍隊的な修道会のために軍人を勧誘して正に神殿騎士団を非難していたウィーンの公会議で建設を提唱した。

ライムンドゥス ルルスは、カトリックの知と使徒ヨハネの真の秘伝伝授によって、不信心な人の手から、神殿を守る剣を取り戻そうとした。

この世の偉人たちは、貧しいライムンドゥス ルルスを笑いものにした。

しかし、それにもかかわらず、この世の偉人たちは、ライムンドゥス ルルスが望んだ事を全て行った。

夢想家ライムンドゥスと呼ばれて笑いものにされていた、光に照らされた者ライムンドゥス ルルスは、法王の中の法王であり王の中の王であった様に思われる。

ライムンドゥス ルルスは、ヨブの様に貧しかったが、権力者たちに施しを与えた。

ライムンドゥス ルルスは愚者と呼ばれたが、ライムンドゥス ルルスの愚かさは学者たちを負かすほどであった。

当時の大いなる政治家である、真剣で広い心の持ち主である、ヒメネス枢機卿は、常に、ライムンドゥス ルルスについて、「神の様な者ライムンドゥス ルルス」、「光に照らされた博士」と呼んで話した。

Genebrard によると、ライムンドゥス ルルスは 1314 年に死んだ。

「the Meditations of the Hermit Blaquerne(隠者 Blaquerne の瞑想録)」の序文の著者によると、ライムンドゥス ルルスは 1315 年に死んだ。

ライムンドゥス ルルスは 80 歳で死んだ。

ライムンドゥス ルルスの労苦した神聖な人生の終わりは使徒ペトロと使徒パウロの祝日 6 月 29 日に訪れた。

大いなるカバリスト達の弟子ライムンドゥス ルルスは、形骸化した抽象概念の代わりに自然の現実の確固とした概念を用いて、スコラ哲学の曖昧(あいまい)な用語の代わりに単純な自然な表現を用いて、絶対普遍の哲学を確立しようとした。

ライムンドゥス ルルスは、当時の学者の定義を非難した。

なぜなら、当時の学者は、不正確な曖昧(あいまい)な定義によって、議論を永続化した。

アリストテレスは「人は理性的な動物である」と定義した。

　しかし、「人は動物的な者ではない」、「人は、たまにしか、理性的ではない」と返す事ができてしまう。

　さらに、「動物的な者」と「理性的な者」という言葉は相反する。

　また、「理性的ではない愚者は人ではない」事に成ってしまう。

　ライムンドゥス ルルスは、同義語、類義語によってではなく、類似物によってではなく、正しい名前によって、ものを定義した。

　その後で、ライムンドゥス ルルスは、語源によって、ものの正しい名前を説明した。

　後記の様に、ライムンドゥス ルルスならば「人とは何者か？」という問いに答えたであろう。

「『人とは何者か？』という言葉は、全体的な意味では『人という存在の状態は何か？』を意味するが、個々の意味では『人の個性とは何か？』を意味する。
しかし、人の個性とは何であろう？
元々は、神が、土で肉体を作り、命を肉体に吹き込んで、個性を創造した。
厳密な意味では、人の個性とは、あなたであり、私ライムンドゥス ルルスであり、使徒ペトロであり、使徒パウロであり、他の人である」

　後記の様に、学問的な専門用語に慣れている人は、光に照らされた博士ライムンドゥス ルルスに抗議した。

「ライムンドゥス ルルスの様になら誰でも話せる。
ライムンドゥス ルルスの方法でなら全世界の人が学の有る者としてふるまえる。
学会の考えより、学会の教えより、大衆の常識が好まれてしまうであろう」

ライムンドゥス ルルスは、大いなる単純さによって、「それこそが正に私が望んでいる事である」と答えた。

そのため、ライムンドゥス ルルスの賢明な理論は幼子の様である、と学者は非難した。

マタイによる福音 18 章 3 節の「幼子の様に成らなければ、天の王国に入れない」というイエスの言葉の意味で、ライムンドゥス ルルスの理論は「幼子の様」であった。

天の王国は、知の王国ではないか？　天の王国は、知の王国である！

なぜなら、実に、神と人の天上での生とは、理解と愛、思いやりである。

ライムンドゥス ルルスの目的は、キリスト教化したカバラでアラビア人の宿命論的な魔術に対抗する事、エジプト人の口伝でインド人の口伝に対抗する事、光の魔術で黒魔術に対抗する事であった。

ライムンドゥス ルルスは「終わりの時に、反キリストの考えは物質化されて再現されて、悪人の霊の魔術による全ての奇形が再発するであろう」と話している。

そのため、ライムンドゥス ルルスは、人心を、エノクの帰還、または、エノクの知の最後の啓示に向けて用意させようとした。

エノクの知の鍵は、エノクのタロットである。

エノクの知という、論理と信心を一致させる光は、地上における救い主イエスの普遍の統治を先導する。

そのため、真のカバリストと真の予見者にとって、ライムンドゥス ルルスは、大いなる預言者である。

少なくとも崇高な性格と気高い大志を尊敬できる懐疑者にとっては、ライムンドゥス ルルスは崇高な夢想家である。

THE SEVEN PLANETS AND THEIR GENII

第 5 巻 第 4 章 何人かの錬金術師について

ニコラ フラメルは錬金術だけに入門した。

そのため、エリファス レヴィは、ニコラ フラメルが錬金術に入門するきっかけに成ったヘブライ人アブラハムの「Asch Mezareph」という象徴的な本だけを考慮に入れる。

サン ジャック ド ラ ブーシュリー通りの代書人ニコラ フラメルは、「Asch Mezareph」によって、「大作業」の絶対の鍵を見つけた。

「Asch Mezareph」という本は、タロットの鍵に基づいている。

「Asch Mezareph」は、「形成の書」のタロット的な錬金術的な注釈である。

(高等魔術の教理 21 章「多分カバリストのアブラハムは『形成の書』の編集者である」)

事実、ニコラ フラメルの話によると、「Asch Mezareph」は、21 枚の絵であり、表紙の絵を合わせると、22 枚の絵に成る。

(タロットの大アルカナは 22 枚の絵である。)

「Asch Mezareph」の 21 枚の絵は、3 組の 7 つ 1 組に分けられる。

「Asch Mezareph」の 3 組の 7 つ 1 組の絵は、7 枚ごとに、白紙のページがあった。

「Asch Mezareph」の 3 組の 7 つ 1 組の絵には 7 枚ごとに白紙のページがある所に、ヨハネの黙示録を連想しよう。

ヨハネの黙示録は、全ての隠された象徴の崇高なカバラ的な預言的な要約である。

ヨハネの黙示録は、象徴を 3 組の 7 つ 1 組に分けている。

7 つ 1 組の象徴ごとに、天には沈黙がある。

(ヨハネの黙示録８章１節「第７の封印を開いた時、天には沈黙があった」)

ヨハネの黙示録と、ニコラ フラメルの話による神秘的な本「Asch Mezareph」の名前の無い絵は類似している。

後記は、ヨハネの黙示録の３組の７つ１組である。

(1)開かれる７つの封印。

ヨハネの黙示録の７つの封印は、学ぶべき７つの神秘と、克服するべき７つの困難を意味する。

(2)鳴らされる７つのラッパ。

ヨハネの黙示録の７つのラッパは、理解するべき７つの言葉である。

(3)空(あ)けられる７つの杯。空(あ)けられる７つの鉢(はち)。

ヨハネの黙示録の７つの杯は、気化させて固定する必要が有る、７つの物質を意味する。

ニコラ フラメルの話による「Asch Mezareph」の７ページ目には、モーセの杖が、ファラオの魔術師がもたらした蛇たちを圧倒している絵が描かれている。

ファラオの魔術師の蛇たちは互いを飲み込み合っている。

「Asch Mezareph」の７ページ目は、タロットの７ページ目の「勝利者」に類似している。

タロットの７ページ目の「勝利者」は、古代エジプト人の魔術における白いスフィンクスと黒いスフィンクスを立方体の戦車につないでいる。

「Asch Mezareph」の 7 ページ目の絵は「預言者モーセ(の全ての預言者の中での超越性)を唯一認める」というマイモニデスの「13 の信仰箇条」の第 7 の考えに対応している。

「Asch Mezareph」の 7 ページ目の絵は、知と務めの一致を表す。

「Asch Mezareph」の 7 ページ目の絵は、「賢者の水銀」を表す。

分解と合成と、硫黄と「金属の塩」の相互作用が、「賢者の水銀」を形成する。

「Asch Mezareph」の 14 ページ目には、民数記 21 章 8 節から 9 節の十字のさおに吊るされた火の蛇が描かれている。

十字は、清められた硫黄と塩の結合を表す。

十字は、星の光の濃縮を表す、様に。

タロットの 14 ページ目には、金の杯と銀の杯で液体を混ぜている、星の光という地の魂である天使が描かれている。

「Asch Mezareph」の 14 ページ目の絵と、タロットの 14 ページ目の絵は、別の方法で表された同じ象徴である。

ニコラ フラメルの話による「Asch Mezareph」の 21 ページ目には、時間と普遍の命の象徴である、砂漠と泉と、あちこちで滑らかに動いている蛇たちが描かれている。

タロットの 21 ページ目では、(牡牛座、水瓶座、獅子座という)天空の東西南北の星座に配置された牛、人、ライオン、ワシという 4 つの象徴が時間を表し、円冠の中で踊る様に進む裸の少女が命を表す。

ニコラ フラメルは泉の数と蛇の数を話していないが、十中八九、創世記 2 章の楽園エデンの pantacle の様に、「Asch Mezareph」の 21 ページ目の絵では、唯一の泉から 4 つの川が流れている。

蛇の数は 4 か 7 か 9 か 10 である。

「Asch Mezareph」の 4 ページ目には、水銀の滓(かす)を除去する用意をしている、鎌(かま)を持つ擬人化された「時」が描かれている。

近くには、根が青色、茎(くき)が白色、葉が赤色、花が金色である、薔薇が咲いている。

数 4 は、四大元素による実現の数である。

鎌(かま)を持つ擬人化された「時」は、「大気の硝石」である。

擬人化された「時」が持つ鎌(かま)は、「大気の硝石」から引き出された「酸」である。

「大気の硝石」から引き出された「酸」は、水銀を、「塩」に変えて、固定する。

薔薇は、「作業」と、「作業」の連続する三段階の特徴である色を表す。

「作業」は、黒色、白色、赤色の三段階への精通である。

黒色、白色、赤色の三段階への精通から、芽を出して開く花として、黄金がもたらされる。

数 5 は、大いなる神秘の数である。

「Asch Mezareph」の 5 ページ目には、薔薇の周囲の地を掘って、遍在している大いなる代行者である星の光を探求している、盲人達が描かれている。

より賢明な何人かは、凝固した空気に似ている白い水を量(はか)っている。

「Asch Mezareph」の 5 ページ目の裏には、マタイによる福音 2 章のヘロデ大王による幼児虐殺と、幼子の血を浴びに降臨している太陽と月が描かれている。

錬金術のわざの秘密である「Asch Mezareph」の 5 ページ目の裏の象徴は、Aristeus の「大気から星の光という気体を抽出する必要が有る」という話の方法と関連が有る。

理解し易い言葉で話すと、「大気から星の光という気体を抽出する」事は、火の作用によって水が蒸気に変わる様に、「星の光によって『風』を力として応用して『風』を拡張する」事である。

知と善い意思が導いた電気と磁石と作業者の意思の強力な放射の助けによって、「大気から星の光という気体を抽出する」事、「星の光によって『風』を力として応用して『風』を拡張する」事の成就は可能と成る。

幼子の血という象徴は、「錬金術師の火」が四大元素による肉体から抽出した、精髄の光である星の光を表す。

幼子の血を浴びに降臨している太陽と月は、金色の硫黄を錬金で溶けている卑金属に投入する粉に変えるほどの純度を得た黄金と、星の光によって金色に染まった銀を意味する。

エリファス レヴィは錬金術についての論文を書いているわけではない。

けれども、錬金術という知は、実践された超越的な魔術である。

エリファス レヴィは、より詳細な他の専門書のために、錬金術の啓示と不思議を保留する。

民間の口伝によると、ニコラ フラメルは死んでいない。

また、ニコラ フラメルは、宝をサン ジャック ド ラ ブーシュリーの塔の下に埋めた。

光に照らされた達道者によると、ニコラ フラメルの宝は、7 つの金属の板で覆われたシダー ウッドの箱におさめられた、ヘブライ人アブラハムの高名な本「Asch Mezareph」の原本、ニコラ フラメルによる「Asch Mezareph」の注釈書、錬金で

溶けている卑金属に投入する粉の、仮に海が水銀であれば、海を黄金に錬金するのに十分な、サンプルである。

ニコラ フラメルの後に、ベルナール トレヴィサン、バシレウス ヴァレンティヌス、その他の高名な錬金術師が現れた。

バシレウス ヴァレンティヌスの 12 の鍵は、カバラ、魔術、錬金術である。

1480 年に、トリテミウスが現れた。

トリテミウスは、コルネリウス アグリッパの師である。

トリテミウスは、中世の大いなる教義的な魔術師である。

トリテミウスは、ベネディクト修道会の聖マルティン修道院の修道院長であった。

トリテミウスは、非の打ち所の無い正統な教えと、非の打ち所の無い品行の、修道院長であった。

トリテミウスは、弟子の大胆なコルネリウス アグリッパと異なり、隠された哲学を公に書くほど、無思慮ではなかった。

トリテミウスの全ての魔術書は、神秘を隠す技術によって、記されている。

トリテミウスは、真の達道者の作法に従って、考えを pantacle によって表現した。

トリテミウスの pantacle は、非常に稀少である。

トリテミウスの pantacle は、「七つの第二原因について」のいくつかの手書きの写本にしか記されていない。

ポーランドの紳士である、気高い心を持つ人である、Alexander Branistki 伯爵が、トリテミウスの pantacle が記された興味深い本「七つの第二原因について」を所有していて、親切にもエリファス レヴィに見せてくれた。

トリテミウスの pantacle は、底辺で結合した白い正三角形と黒い逆正三角形である。

黒い逆正三角形の頂点には、黒い逆正三角形の中に映っている自身の映像をかろうじて顔を向けて見つめて恐れている愚者がいる。

　白い正三角形の頂点の上では、騎士のような武装をして見すえて力強い態度で平静に命令している壮年の男性がいる。

　白い正三角形の中には、神のテトラ グラマトン、神の名前ヤハウェが記されている。

　トリテミウスの pantacle の自然な意味、大衆向けの意味は「賢者は真の神への畏敬によって安らぐが、愚者は妄想でねつ造した偽の神への恐怖に圧倒される」という言葉で説明できる。

　達道者は、トリテミウスの pantacle を全体的に熟考した後に部分的に熟考する事によって、カバラの究極の言葉と、大いなる秘密の言い表せない言葉を見つけるであろう。

　言い換えると、トリテミウスの pantacle は、奇跡と驚異現象の違いを表す。

　トリテミウスの pantacle は、霊の出現の秘密を表す。

　トリテミウスの pantacle は、磁気の催眠術の普遍の理論を表す。

　トリテミウスの pantacle は、全ての神秘の知を表す。

　トリテミウスは、「Veterum Sophorum Sigilla et Imagines Magicae(古代の賢者の象徴と魔術の象徴)」で、魔術の歴史を複数の pantacle で記した。

　「ステガノグラフィア」と「ポリグラフィア」で、トリテミウスは、全ての隠された知についての文書の鍵を与えた。

　「ステガノグラフィア」と「ポリグラフィア」で、トリテミウスは、呪文と降霊術の真の知をヴェールで隠した言葉で説明している。

　トリテミウスは、魔術の、師の中の師である。

エリファス レヴィは、トリテミウスを、達道者の中で最大の学の有る賢者とほめたたえるのをためらわない。

一方、コルネリウス アグリッパは、賢明ではなかった。

コルネリウス アグリッパは、一生、探求者のままであった。

コルネリウス アグリッパは、知にも平和にも到達できなかった。

コルネリウス アグリッパの本は、博識と自信に満ちている。

コルネリウス アグリッパは、独立独歩の人、奇人であった。

そのため、コルネリウス アグリッパは、憎むべき悪人の霊の魔術師として通（とお）ってしまった。

そのため、コルネリウス アグリッパは、聖職者と権力者に迫害された。

そのため、最後には、コルネリウス アグリッパは、幸せにしてくれなかった学問を否定する「学問の不確実さと空しさについて」という本を書いてしまった。

コルネリウス アグリッパは、みじめに見捨てられて死んだ。

学の有る気高いギヨーム ポステルの温和な好ましい人物像を話す時が来た。

ギヨーム ポステルは、高齢だが、光に照らされた女性である女子修道院長ジャンヌへの神秘的過ぎる愛によってしか知られていない。

ギヨーム ポステルは、女子修道院長ジャンヌの敬愛者である、だけではなかった。

しかし、大衆は、学ぶよりも、笑いものにする事を好む。

そのため、大衆は、ギヨーム ポステルの良い所を見ようと望まない。

エリファス レヴィがギヨーム ポステルの知や精神を教えるのは、大衆のためではない。

ギヨーム ポステルは、フランスのノルマンディーのバロントンの貧しい農民の息子であった。

ギヨーム ポステルは、忍耐によって、多くの犠牲を払って、どうにかして独学して、当時の最高の学の有る者に成った。

しかし、ギヨーム ポステルは、常に、貧困に苦しめられた。

ギヨーム ポステルは、貧困によって、本を売らざるをえない時も有った。

それにもかかわらず、ギヨーム ポステルは、あきらめ、温和に満ちて、一片のパンを得るために(学者なのに)肉体労働者の様に働き、帰ってからも、学んだ。

そうして、ギヨーム ポステルは、当時の全ての既知の言語と学問を習得した。

ギヨーム ポステルは、福音書外典と「形成の書」を含む貴重な手書きの文書を見つけた。

それにより、独力で、ギヨーム ポステルは、超越的なカバラの神秘に入門した。

そして、ギヨーム ポステルは、カバラの絶対の真理への純粋な畏敬と、カバラの全ての哲学と教えの無上の論理への純粋な畏敬から、世界の人々にカバラを明かす事を望んだ。

ギヨーム ポステルは、神秘を公の言葉で話した。

ギヨーム ポステルは、「創世から隠されたものの鍵」という本を書いた。

ギヨーム ポステルは、「創世から隠されたものの鍵」をトレントの公会議の教父に贈って、和解と普遍の統合への道に入るように求めた。

誰もギヨーム ポステルを理解できなかった。

ある人々は、ギヨーム ポステルを異端者と誤って非難した。

穏健な人々は、「ギヨーム ポステルは、愚者である」と誤って話すにとどまった。

ギヨーム ポステルは、「三位一体である神は、神の像にかたどって人を創造した」と話している。

「そのため、人の体は二重である。

人の体の３つ１組の統一は、左右の統一である。

また、人の魂は二重である。

人の魂の二重は、知アニムスと感情アニマである。

人の魂には男性性と女性性がある。

人の魂では、男性性は知に内在し、女性性は感情に内在している。

罪のつぐないの実現は、人にとっては二重である必要が有る。

知を清める事は、感情の誤りをつぐなう。

そうしてから、感情の豊かさによって、知を利己主義による不毛から解放する必要が有る。

ギヨーム ポステルから見ると、今まで論理的な知だけがキリスト教を理解し、キリスト教は感情にまで至っていない。

神の言葉イエスは男性の人に成った。

神の言葉が(宗教的に)女性的に成った時に、世界は救われるであろう。

宗教の母の精神が、愛、思いやり、愛情の精神の気高さを教えるであろう。

そうすると、論理は信心と一致するであろう。

なぜなら、論理は、愛情の神聖な行き過ぎを理解し、説明し、抑えるであろう」

　ギヨーム ポステルは、「多数のキリスト教徒が宗教を、どのように誤解しているか見なさい」と話している。

「多数のキリスト教徒は、宗教を無知な迫害する不公平に過ぎないと誤解している。

多数のキリスト教徒は、宗教を迷信的な愚かな頑迷さと誤解している。

特に、多数のキリスト教徒は、宗教を(神への畏敬ではなく)劣悪な恐怖と誤解している。

なぜ多数のキリスト教徒は、宗教を誤解しているのか？

なぜなら、宗教を信じている人々は、女性的な(思いやりの)心を持っていない(、今の所は)。

なぜなら、宗教を信じている人々は、母の愛情の神聖な神がかった熱狂と無縁である(、今の所は)。

母の愛情は、全ての宗教を説明する。

多数のキリスト教徒の知を襲っている力、多数のキリスト教徒の心をしばっている力は、善良な理解の有る忍耐強い神の力ではない。

多数のキリスト教徒の知を襲っている力、多数のキリスト教徒の心をしばっている力は、邪悪な愚かな臆病な悪魔の力である。

そのため、多数のキリスト教徒は、神を愛するよりも、悪魔を恐れる。

しなびた冷たい知性が、墓石の様に、死んでいる感情の重荷に成っている。

神の恵みによって感情が復活したら、感情は、理解力にとって目覚めに、理性にとって復活に、真理にとって勝利に成るであろう!

なぜ私ギヨーム ポステルは、前記を、理解している、ほぼ唯一の最初の人なのか？

何も聞く耳を持たない心が死んでいる人々の中で、復活に到達した人に独りで何が出来るのか？

来てください、早く来てください、おおっ、母の(思いやりの)精神。

母の(思いやりの)精神は、イタリアのヴェネツィアで、神の霊感を受けた処女である女子修道院長ジャンヌの精神によって、私ギヨーム ポステルの所にあらわれた。

母の(思いやりの)精神よ、降臨して、罪をつぐなう使命と、神聖な霊的な命の使徒の務めを新しい世界の女性達に教えてください」

ギヨーム ポステルの気高い霊感がイタリアのヴェネツィアで知り合った女子修道院長ジャンヌという信心深い女性のおかげであるのは事実である。

ギヨーム ポステルは、女子修道院長ジャンヌという神に選ばれた魂の、霊的な助言者であった。

ギヨーム ポステルは、女子修道院長ジャンヌの周囲を渦巻く神秘的な詩情的な流れに引き寄せられた。

ギヨーム ポステルが、パンをイエスの肉と思って頂く聖体エウカリスティアを女子修道院長ジャンヌに執り行った時、ギヨーム ポステルの目には、女子修道院長ジャンヌが光輝いて変身して見えた。

女子修道院長ジャンヌは 50 歳以上であったが、貧しい祭司ギヨーム ポステルには女子修道院長ジャンヌが 15 歳以下に見えたと純粋に話している。

ギヨーム ポステルと女子修道院長ジャンヌの愛情の共感がギヨーム ポステルの目に女子修道院長ジャンヌを 15 歳以下に変身させて見せた。

前記の、天上的な幻覚と詩情的な幼子の様な子供っぽさ、童貞と処女の神秘的な結婚、2 つの清らかな魂による愛の驚くべき神がかった熱狂を理解するには、禁欲生活に従う必要が有る。

ギヨーム ポステルは、女子修道院長ジャンヌに、イエス キリストの生きている精神を認めた。

イエス キリストの生きている精神は、世界を復活させる。

ギヨーム ポステルは、「私ギヨーム ポステルが女子修道院長ジャンヌに認めた愛情の光は、全ての人の心から、悪魔の憎むべき精神を追い払うであろう」と話している。

「愛情の光は、私ギヨーム ポステルの妄想ではない。
愛情の光は、世界にあらわれた。
愛情の光は、処女である女子修道院長ジャンヌによって、人に成った。
私ギヨーム ポステルは、女子修道院長ジャンヌによって、未来の世界の母である愛情の光をたたえる」

　前記は、ギヨーム ポステルを解釈した物と言うより、ギヨーム ポステルを解析した物である。

　中略

　ギヨーム ポステルと女子修道院長ジャンヌの神秘的な関係は約 5 年間、続いた。
　約 5 年後に、女子修道院長ジャンヌは、ギヨーム ポステルから離れずに物質的な命の束縛から解放されたらギヨーム ポステルを助ける事を、女子修道院長ジャンヌにとって聴罪司祭であったギヨーム ポステルに約束して、死んだ。

　ギヨーム ポステルは、「女子修道院長ジャンヌは、約束を守ってくれた」と話している。

「(死後も)女子修道院長ジャンヌは、パリで、私ギヨーム ポステルと共にいてくれた。
女子修道院長ジャンヌは、自身の光によって、私ギヨーム ポステルを照らして、論理と信心を一致させた。
2 年後に女子修道院長ジャンヌは、天へ昇った。

そして、女子修道院長ジャンヌの霊的な(星の)体や本質は私ギヨーム ポステルの所に降臨して感知できるほど全身に浸透した。
そのため、私ギヨーム ポステルは、私である、と言うよりは、私の中に生きている女子修道院長ジャンヌである、と言えるほどである」

　前記の、死んだ女子修道院長ジャンヌによる神秘的な体験後、常に、ギヨーム ポステルは自身を復活者と考える様に成り、「復活者ポステル」と自ら署名する様に成った。
　事実、後記の、興味深い現象が起きた。
　ギヨーム ポステルの白髪は、再び黒く成った。
　ギヨーム ポステルは、しわが消えた。
　禁欲生活と徹夜によって色が青白く淡く成っていた、ギヨーム ポステルの顔色は、若い血色の良い色に成った。

　中略

　ギヨーム ポステルは、狂人であると誤って非難された。
　なぜなら、宗教は、無上の論理の教えによって、人心を統治するべきである、とギヨーム ポステルは考えていた。
　また、統治は、力強くあるためには、長続きするためには、平和による統治により大衆の繁栄を勝ち取る事によって、人心をつなぎとめるべきである、とギヨーム ポステルは考えていた。

　ギヨーム ポステルは、狂人であると誤って非難された。

なぜなら、日々キリスト教徒が話している、神の王国の到来をギヨーム ポステルは信じていた。

ギヨーム ポステルは、狂人であると誤って非難された。

なぜなら、ギヨーム ポステルは、地上で、論理と正義を信じていた。

ええ、ええ、大衆のギヨーム ポステルへの非難は一理ある。

貧者ギヨーム ポステルには神聖な狂気があった。

ギヨーム ポステルに神聖な狂気があった証拠は、すでに話した様に、ギヨーム ポステルがトレントの公会議の教父に手紙を書いて、全世界の人々を祝福し誰も破門して呪わない様に求めた事である。

また、別の例では、ギヨーム ポステルはイエズス会士を改心させようと試みた。

そして、ギヨーム ポステルはイエズス会士に、普遍の調和を人々へ説かせようと試みた。

ギヨーム ポステルはイエズス会士に、平和を権力者へ説かせようと試みた。

ギヨーム ポステルはイエズス会士に、論理を聖職者へ説かせようと試みた。

ギヨーム ポステルはイエズス会士に、善、善行、徳、神をこの世の権力者へ説かせようと試みた。

ギヨーム ポステルの究極、無上の神聖な狂気として、ギヨーム ポステルは、この世の利益や偉人への御機嫌とりを無視した。

ギヨーム ポステルは、常に、謙虚に貧しく生きた。

ギヨーム ポステルは、知識と本しか所有しなかった。

ギヨーム ポステルは、真理と正義しか望まなかった。

神が貧者ギヨーム ポステルの魂に平和を与えます様に。

ギヨーム ポステルは温和で善良であったので、教会の上位者はギヨーム ポステルをあわれんだ。

後にラ フォンテーヌに言われた様に、十中八九、ギヨーム ポステルが悪人ではなく愚者であると教会の上位者は誤って考えた。

教会の上位者は、ギヨーム ポステルを余生を修道院に閉じ込めるにとどめた。

ギヨーム ポステルは、余生を修道院に閉じ込められるという、人生の終わりに向かって保証された静けさに感謝した。

ギヨーム ポステルは、教会の上位者が求めた通りに全ての発言を撤回して、平和に死んだ。

普遍の調和の人が、無政府主義者であるはずが無い。

ギヨーム ポステルは、誰よりも、誠実なカトリック教徒であり、謙虚なキリスト教徒であった。

ギヨーム ポステルの本は、いつか再発見され、驚きを持って読まれるであろう。

アウレオルスである(フィリップス)テオフラストゥス ボンバストゥスと呼ばれている、魔術の世界ではパラケルススという高名な名前で知られている、狂人と誤って非難されている人の話に進もう。

(

「アウレオルス」は「金の」を意味する。

パラケルススは「ローマの名医ケルススを超える」を意味する。

)

「高等魔術の教理と祭儀」で魔術師パラケルススについて話した概要をくり返すのは不要である。

しかし、パラケルススが復活させた、隠された医学について、いくつか話す。

パラケルススが見つけた、万能薬は、星の光の包括的な理論に基づいている。

達道者は、星の光を流体、または、飲用に適した黄金と呼んでいる。

星の光は、創造する代行者である。

星の光の振動は、全てのものの運動と命に成る。

星の光は、普遍のエーテルとして潜在している。

星の光は、中心に引き寄せられ、引き寄せる中心の周囲で放射される。

星の光は、中心で飽和して、運動と命を放射し、創造する流れを形成する。

星の光は、星々の中で、星の光に成る。

星の光は、動物の中で、動物的に成る。

星の光は、人の中で、人的に成る。

星の光は、植物の中で、成長する。

星の光は、金属の中で、輝く。

星の光は、自然の全ての形をもたらす。

星の光は、普遍の共感の法によって、全てのものをつり合わせる。

星の光は、パラケルススが見抜いた磁気的な現象を表す。

星の光は、肺という錬金的な、ふいごが空気を吸い込んで吐き出して、空気から解放された、血を赤色に染める。

赤色に染まった血は、真の命の若返り薬エリクサーに成る。

血という、わずかに金色の流体の中で、命の光による赤色の磁気を帯びた血球が浮遊している。

血球は、実際に、種(たね)の様な物である。

血球は、人の肉体という世界の縮図の中の全ての形に成る用意が有る。

血球は、希薄に成り、凝固できる。

血球は、希薄に成って凝固して、神経と骨の周囲の肉を循環している、四大体液を新しくする。

血球は、肉体の外で、光を放つ。

と言うよりは、血球は、希薄に成って、星の光の流れに引き寄せられて、星の体を循環する。

星の体は、心的な光る体である。

忘我状態の人の想像力は、星の体を拡張する。

そのため、忘我状態の人の血は、忘我状態の人の星の体が浸透して同化していた遠隔地の物を血の色に染める時が有る。

前記を、隠された医学についての専門書で、証明するつもりである。

しかし、学者には一見、不思議に逆説的に見えるかもしれない。

前記が、パラケルススが話している医学の基礎である。

パラケルススは、星の光による共感によって治した。

パラケルススは、薬剤を、星の体が引き上げると何も感じないで切れる全く受容的である外的な物質的な肉体ではなく、感覚の源泉である内的な媒体である星の体に施した。

パラケルススは、共感している第５元素によって、血の第５元素を新しくした。

例えば、パラケルススは、強い活性成分を流血に適用して、傷を治した。

パラケルススは、血の共感によって、星の光という物質的な魂と、清めた血を、流血から肉体へ戻した。

パラケルススは、病気に成った手足を治すために、ロウソクのロウで手足を作り、意思の力によって、星の光という磁気を病気に成った手足からロウソクのロウの手足へ移した。

そして、パラケルススは、ロウソクのロウの手足を硫酸、鉄、火で治療して、想像力によって、病人と対応している星の光という磁気によって、病人の手足を反応させた。

この時、ロウソクのロウの手足は、病人の付属物、病人の補助の手足に成っていた。

　パラケルススは、血の神秘を知っていた。

　パラケルススは、なぜ偽の神バアルの偽の祭司が天から火を地に堕とす前に自身の肉体を短剣で切り傷を作るのか、知っていた。

　パラケルススは、なぜオリエントの男性が性欲を女性に催させるために女性の前で血を流すのか、知っていた。

　パラケルススは、どうして流血が報復や同情を求めて叫ぶのか、知っていた。

　パラケルススは、どうして流血が大気を天使や悪霊で満たすのか、知っていた。

　血は、夢の道具である。

　血は、睡眠時に、脳で、映像を増殖させる。

　なぜなら、星の光が、血には満ちている。

　血球には男性性と女性性がある。

　血球は、磁気を帯びて鉄といった金属を引きつける。

　血球は、共感し、斥け合う。

　血の中の、星の光という物質的な魂から、世界の全ての形と映像を呼び出す事ができる。

　中略

　エリファス レヴィの考えでは、インドの偽の魔術師が木片を血で別の木に半時ほどで育てて見せたのは、血の中の光を放つ星の光という磁気による幻惑の一種であり、星の光という磁化された電気による「復活」と呼ばれている現象である。

「復活」と呼ばれている魔術によって、枯れた植物の灰を入れた容器に生きている同じ植物を見せる事ができる。

パラケルススは、「復活」と呼ばれている魔術の秘密を知っていた。

星の光という隠された自然の力を医学に応用して、パラケルススは、崇拝者と敵を作った。

パラケルススは、ギヨーム ポステルの様な単純な人物ではなかった。

パラケルススは、生まれつき攻撃的で、(身を守るために)嘘もついた。

そのため、パラケルススは、「大剣の柄頭(つかがしら)に使い魔を隠している」という嘘を話した。

そして、パラケルススは、大剣をそばから離さなかった。

パラケルススの人生は、絶え間無い戦いであった。

パラケルススは、旅をし、議論し、書き、教えた。

パラケルススは、心の克服よりも、物質的な結果に熱心であった。

そのため、パラケルススは、実践魔術師としては第一人者であったが、知の達道者としては最下位者であった。

パラケルススの哲学は１つの直感であり、パラケルススは自身の哲学を「直感哲学」と呼んで「大天文学または直感哲学」という本を書いている。

パラケルススは、完全には知らなくても、誰よりも物事を見抜いた。

パラケルススの直感に並ぶ物は、パラケルススの注釈の軽率さだけである。

パラケルススは、大胆な実験者であった。

パラケルススは、自分の考えと話に酔っていた。

何人かの伝記作家によると、パラケルススは、酒でも酔った。

パラケルススが残した著作は、学問にとって貴重である。

しかし、パラケルススの著作は、注意して読む必要が有る。

「神の様な者パラケルスス」は「神がかったパラケルスス」と言えるかもしれない、占い師という意味で。

パラケルススは、神託の様な者である。

しかし、パラケルススは、真の魔術師ではなかった。

何よりも、パラケルススは、医者として大いなる者であった。

なぜなら、パラケルススは、万能薬を見つけた。

それにもかかわらず、パラケルススは、自身の人生を延長できずに、仕事と不節制で疲弊して早死にした。

パラケルススは、数々の発見のおかげで、不思議な曖昧な栄光と共に、輝かしい名声を残した。

しかし、パラケルススと同時代の人々は、パラケルススの発見を利用できなかった。

パラケルススは、死ぬ時に、最後の言葉を話さなかった。

パラケルススは、エノクや使徒ヨハネと同じ事が言える神秘的な人の１人である。

パラケルスス(の考え)は、死んでいない。

パラケルスス(の考え)は、時の終わりの前に、地上に、再び現れるであろう。

第 5 巻 第 5 章 何人かの有名な悪人の霊の魔術師と神の聖霊の魔術師

ダンテの作品の注釈と研究は多いが、エリファス レヴィが知る限りでは、誰もダンテの作品の主要な特徴を指摘していない。

栄光の皇帝派ギベリンのダンテの傑作「神曲」は、神秘の大胆な啓示による、法王に対する宣戦布告である。

ダンテの叙事詩「神曲」は、ヨハネ派をかたる異端であり、偽のグノーシス主義である。

ダンテの「神曲」は、カバラの象徴と数をキリスト教に大胆に応用した物である。

そうして、ダンテの「神曲」は、キリスト教に絶対必要な要素を密かに否定している。

「神曲」でのダンテの超自然的な世界への訪問は、エレウシスの秘儀とテーバイの神秘への入門の様に行われた。

詩人ウェルギリウスが「神曲」での新しいタルタロスの圏内、新しい地獄の圏内でダンテを導き守った。

ガイウス アシニウス ポッリオの息子ガイウス アシニウス ガッルスの運命の優しく悲しげな予言者ウェルギリウスが、まるでキリスト教の叙事詩の非正統的であるが真の父である、とフィレンツェの詩人ダンテの目には見えたかの様に。

「神曲」で、ダンテは、ウェルギリウスの異教の知のおかげで、「この門をくぐる者は一切の希望を捨てよ」という絶望の文が門に記されていた地獄という深淵から脱出した。

「神曲」で、ダンテは、逆立ちして、地獄を脱出した。

「神曲」で、ダンテは、キリスト教を逆さにして、地獄を脱出した。

「神曲」で、ダンテは、悪魔を奇形のはしごの様に利用して、(地獄を脱出して、)光へ昇った。

「神曲」で、ダンテは、恐怖によって、恐怖から脱出した。

「神曲」で、ダンテは、「戻らない人にとっては、地獄は脱出できない世界である」と話している様に思われる。

「神曲」で、ダンテは、ありふれた表現を使うと「悪魔の性に合わなかった」ので、大胆さによって解放に到達した。

ダンテの「神曲」は、プロテスタントを超越した物である。

ローマの法王の敵の詩人ダンテは、負けたメフィストフェレスの頭を踏んで天国に昇るファウストをすでに見抜いていた。

「ダンテの『神曲』の地獄は煉獄の陰画である」と気づきなさい。

「ダンテの『神曲』の地獄は煉獄の陰画である」と言うのは、「ダンテの『神曲』の煉獄は地獄を鋳型として作られている」事を意味する。

ダンテの「神曲」の煉獄は、地獄という深淵の蓋(ふた)または栓(せん)の様な物である。

そこから、「神曲」で天国をよじ登っているフィレンツェの巨人ダンテは煉獄を地獄に蹴り落とすつもりだった、と理解できる。

ダンテの「神曲」の天国は、一連の、エゼキエルの pantacle の様に唯一の十字で分けられた複数のカバラの円である。

円をわけている十字の中心には薔薇の花が咲いていて、薔薇十字という象徴を、初めて公に明かし、ほぼ明確に説明している。

ダンテの「神曲」は薔薇十字という象徴を「初めて」公に明かしたと話したが、なぜなら、ダンテが生まれた 1265 年から 5 年前の、1260 年に死んだギヨーム ド ロリスは、「薔薇物語」を完成できなかった。

ギヨーム ド ロリスから約 50 年後に、ジャン ド マンが、「薔薇物語」を完成させた。

「薔薇物語」と「神曲」は同一の考えの正反対の形である、と驚きと共に発見されるであろう。

「薔薇物語」と「神曲」の共通の考えとは、精神の独立による入門である。

「薔薇物語」と「神曲」の共通の考えとは、当時の全ての団体への風刺である。

「薔薇物語」と「神曲」の共通の考えは、薔薇十字団の大いなる秘密の象徴的な教義である。

「薔薇物語」と「神曲」という隠された学問の重要なあらわれは、神殿騎士団の失墜と同時期に起こった。

なぜなら、「薔薇物語」を完成させたジャン ド マンは、晩年のダンテと同時代の人であり、神殿騎士団を滅ぼしたフランス王フィリップ 4 世の宮殿で最盛期に活躍した。

「薔薇物語」は、フランスの古い叙事詩である。

「薔薇物語」は、形は大衆向けであるが、意味は深い作品である。

「薔薇物語」は、アプレイウスの「黄金のロバ」と同じくらい学の有る、隠された神秘の啓示である。

ニコラ フラメル、ジャン ド マン、ダンテの薔薇の花は、同じ唯一の柴（しば）から咲出でた。

中略

宗教的な争いが世界を赤く染めていた時、ドイツで、神秘と魔術の団体である、光に照らされた者の秘密結社が、いくつか組織された。

当時のドイツの最古の秘密結社は薔薇十字団である、と思われる。

薔薇十字という象徴は、教皇派ゲルフと皇帝派ギベリンの争いの時代に遡（さかのぼ）る。

ダンテの詩「神曲」の象徴と、「薔薇物語」の象徴によって見られる様に。

薔薇は、全ての時代で、美、命、愛、快楽の象徴である。

薔薇は、ルネサンスの時にあらわれた全ての抗議である秘密の思想を神秘的に表す。

薔薇は、精神からの抑圧に対して反抗する、肉体である。

薔薇は、「神の娘である神の恵みの様に、自然は神の娘である」と宣言する、自然である。

薔薇は、禁欲主義者による抑圧を拒む、愛である。

薔薇は、不毛に対して反抗する、命である。

薔薇は、存在の調和の啓示に基づいて論理と愛に満ちている自然な宗教を望む、人性である。

薔薇は、秘伝伝授者にとっては、存在の、生きている花の象徴である。

実際、薔薇は、pantacle である。

薔薇は、形が丸い。

薔薇は、花冠の花びらが♡型で調和的に相互に寄りかかり合っている。

薔薇の色合いは、原色の調和的な色合いである。

薔薇の咢（がく）は、紫色と金色である。

すでに話した様に、ニコラ フラメルの話によるヘブライ人アブラハムの本「Asch Mezareph」では、薔薇は、「大作業」の成就の象徴である。

前記が、ギヨーム ド ロリスとジャン ド マンの「薔薇物語」の鍵である。

薔薇の克服は、知への入門がもたらす問題である。

一方、宗教、キリスト教は、十字架であるキリスト教の普遍の唯一の最終的な勝利を用意し確立している。

薔薇と十字架の結合は、天の高等な秘伝伝授がもたらす問題である。

実際、隠された哲学は、普遍の統合であり、存在の全ての現象を考慮する必要が有る。

生理的な事実としてのみ考えると、宗教とは、人の魂に必要な啓示と満足である。

事実、宗教が存在するのは、学問的である。

宗教の否定は、人性の否定に成るであろう。

人が宗教を発明したわけではない。

法や文明の様に、倫理道徳的な心の生活の必要、必然によって、宗教は形成される。

限定的な哲学的な立場から、全てを必然によって説明するならば、宗教は必然であると考える必要が有る。

無上の知的存在である神が自然の法の原因であると認めるならば、宗教は神聖な物であると考える必要が有る。

そのため、正確に言うと、全ての宗教の特徴は、超自然的な啓示によって、神に直接的に頼る事である。

超自然的な啓示以外の伝達では、教えへの承認を十分にもたらせない。

真の自然な宗教とは、啓示された宗教である、と結論する必要が有る。

言い換えると、宗教とは啓示された物である、とだけ理解する事は自然である。

全ての真の宗教は、自己犠牲を強く勧める。

しかし、人には、人の通常の地位の範囲外で、人の通常の地位を超えて、自己犠牲を同胞である人々に強制する力や権力は無い。

前記の、厳しい論理的な原理から進んで、薔薇十字団は、当時の支配的な、位階制の啓示された宗教であるキリスト教を畏敬するに至った。

そのため、薔薇十字団は、法王の敵でも無いし、正統な王の敵でも無い。

もし薔薇十字団が法王や王に敵対を謀ったとしたら、薔薇十字団が法王や王を個人的に義務の背教者や無秩序による混乱の扇動者と考えた時である。

事実、実に、宗教的な暴君や世俗の暴君は王冠をかぶった無秩序主義者ではなくて何か？　事実、実に、宗教的な暴君や世俗の暴君は王冠をかぶった無秩序主義者である！

前記によって、ハインリッヒ クンラートやハインリッヒ クンラート派の真の光に照らされた者といった、某・法王よりカトリックであり某・王より王であった何人かの大いなる達道者や、何人かの奇人の達道者が、なぜカトリックに敵対したプロテスタント、革命などによる急進主義であったか説明できる。

隠された知を特別に学んだ者を除き、全ての人々は、ハインリッヒ クンラートについて、ほとんど知らない。

ハインリッヒ クンラートは無上の魔術師の１人である。

ハインリッヒ クンラートは薔薇十字の王者である。

全ての点において、ハインリッヒ クンラートは「薔薇十字」という学問的な神秘的な名前に相応しい。

ハインリッヒ クンラートの pantacle は、「光輝の書」の光の様に、輝いている。

ハインリッヒ クンラートの pantacle は、トリテミウスの pantacle の様に、学が有る。

ハインリッヒ クンラートの pantacle は、ピタゴラスの pantacle の様に、正確である。

ハインリッヒ クンラートの pantacle は、ヘブライ人アブラハムの本「Asch Mezareph」の pantacle やニコラ フラメルの pantacle の様に、「大作業」を完全に開示している。

ハインリッヒ クンラートは、化学者であり医者であった。

ハインリッヒ クンラートは、1502 年に生まれた。

ハインリッヒ クンラートは、超越的な神知学の秘伝伝授に到達した時、42 歳であった。

ハインリッヒ クンラートの注目するべき著作「永遠の知の円形競技場」は 1598 年に公表された。

なぜなら、「永遠の知の円形競技場」への神聖ローマ皇帝ルドルフ 2 世による認可が 1598 年 6 月 1 日であると記されている。

ハインリッヒ クンラートは、革命などによる急進的なプロテスタントであると信仰告白をしているが、「永遠の知の円形競技場」では正統なカトリックという称号を大いに要求している。

ハインリッヒ クンラートは、当然の義務として秘密を守りながら、ヨハネの黙示録の鍵を所有している、と話している。

ハインリッヒ クンラートの、ヨハネの黙示録の鍵は、普遍の知の様に、唯一であり三重である。

「永遠の知の円形競技場」は、七重に分かれていて、超越的な哲学への入門の 7 つの段階と対応している。

「永遠の知の円形競技場」は、ソロモンの神託についての神秘的な注釈である。

「永遠の知の円形競技場」の最後は、書いて公開する事が可能な限りの、魔術と隠されたカバラの総合である、一連の要約の一覧表である。

後記の様に、「永遠の知の円形競技場」は、知の言い表せない秘伝の部分を、用心して記された 9 つの大いなる pantacle で表現している。

(1)ヘルメスの考え。

(2)魔術的な実現。

(3)知への経路と、「作業」または「務め」における最初の手順。

(4)7 つの神秘的な光線が照らしている、聖所の門。

(5)光の薔薇。光の薔薇の中心は、十字の形に両腕を横に水平に伸ばしている人である。

(6)祈りと作業の結合の必要性を表している、ハインリッヒ クンラートの魔術の研究室。

(7)知の絶対の総合。

(8)普遍のつり合い。

(9)

誹謗中傷者に対する強い抗議を例示している、ハインリッヒ クンラート個人の考えの要約。

陽気さと率直な怒りに満ちた、ドイツの風刺画に囲まれた、錬金術的な pantacle である。

錬金術師ハインリッヒ クンラートの敵は、ラテン語の説明文と下品なドイツ語の警句で飾られている、虫、愚者、牛、ロバとして描かれている。

右には、市民の恰好をしたハインリッヒ クンラートが描かれている。

左には、研究室での恰好をしたハインリッヒ クンラートが描かれている。

右でも左でも、ハインリッヒ クンラートは敵に嫌な顔をしている。

市民として、ハインリッヒ クンラートは、剣で武装し、蛇の尾を踏んで圧倒している。

研究者として、ハインリッヒ クンラートは、はさむ道具を持ち、蛇の頭を圧倒している。

ハインリッヒ クンラートは、常に同じ真理を、公では実証し、家では教えている。

ハインリッヒ クンラートは、天の鳥が敵の足下に堕ちて死ぬほど有毒な誹謗中傷者の汚れた息を気にもしないで抽出している。

非常に興味深い「永遠の知の円形競技場」の 9 番目の pantacle は、多数の写本では欠けてしまっている。

全体として、「永遠の知の円形競技場」は、無上の秘伝伝授の全ての神秘を含んでいる。

見出しが表す様に、「永遠の知の円形競技場」は、イエス キリストのカバラ、神の魔術、自然の化学、三重の唯一、普遍である。

「永遠の知の円形競技場」は、超越的な魔術と錬金術の真の手引書である。

「形成の書」と「光輝の書」を除き、「永遠の知の円形競技場」以外で、より完全な秘伝伝授は見つけられない。

「永遠の知の円形競技場」の 3 番目の pantacle の説明からの 4 つの重要な帰結として、ハインリッヒ クンラートは、次の様に、確証している。

(1)

「大作業」成就の総費用は、(術者の生活費と個人的な必要経費を除き、)30 ターレルを超えるべきではない。

また、ハインリッヒ クンラートは「私ハインリッヒ クンラートは、知っている人から学んだので、自信を持って話している。30 ターレルを超えて費やす人は、自分に都合良く誤解してしまって、金銭を浪費してしまう」と話している。

そのため、前記の話から、ハインリッヒ クンラートは、賢者の石を作らなかったか、迫害を恐れて賢者の石を作ったと認めたく無かった。

(2)

達道者の義務として、10 分の 1 を超えて富を私用するべきではなく、余剰の富を神の栄光と慈善事業にささげるべきである。

(3)

ハインリッヒ クンラートは「キリスト教の神秘と自然は相互に説明し合い解明し合う」と話している。

また、ハインリッヒ クンラートは「救い主イエスの未来の統治は、知と信心という二重の基礎に基づく」と話している。

自然という本は、福音書の神託を確証する。

知と論理という基礎によって、キリスト教が正しいと、ユダヤ教徒とイスラム教徒を説得できる。

そのため、神の恵みという助けによって、ユダヤ教徒とイスラム教徒を唯一の宗教であるキリスト教へ絶対に改宗できる。

(4)

「自然のしるしと、技術のしるしは、単一性であり、単純さである」

ハインリッヒ クンラートと同時代に、秘伝伝授者の医者、錬金術師、パラケルススの医学の弟子である、「the Book of Signatures, or True and Vital Anatomy of the Greater and Lesser World(署名についての書、または、大世界と小世界の真の命の解剖学)」の著者である、オズワルド クロルがいた。

オズワルド クロルの著作の序文は、非常に良くできた、錬金術についての概要である。

オズワルド クロルは、次の事を実証しようとした。

「神と自然は、全ての作品に署名した、と言える。

自然の力を与えられている全ての被造物は、消えない象形文字で記された、自然の力による、しるしを持っている。

そのため、隠された本に入門した人は、開かれた本の様に、複数のものの共感と反感や、ものの特性といった、被造物の全ての秘密を読める」

　異なるものの象形文字は元は星々、花々、山々、小石に存在する自然の署名である。

　水晶の形、鉱物の模様は、創造主である神が被造物を形成した時の思考の痕跡である。

　前記の、概念は詩情豊かであり壮大である。

　しかし、人には、世界の神秘の言葉の文法の知が欠けている。

　人には、原初の絶対の言葉の秩序的な語彙の知が欠けている。

　ソロモン王だけが、神の言葉の文法と語彙を知るという二重の作業を成就した、と信じられる。

　しかし、ソロモンの鍵、ソロモンの本は、失われた。

　オズワルド クロルの計画は、ソロモンの鍵の復元ではなく、創造する神の言葉イエスの普遍の言葉を獲得するための基本原理の発見であった。

　後記を、神の言葉イエスの普遍の言葉を獲得するための基本原理によって認められる。

　最初の象形文字は、幾何学の主要な要素に基づいている。

　最初の象形文字は、交互の運動や複合した運動が決定した形の本質的な法と対応している。

　つり合う複数の引力が、交互の運動や複合した運動を決定する。

　外見の形によって、混合物から単体を見分けられる。

　形と数の間の対応によって、ものの表面の１つ以上の線によって明かされた全てのものの数学的な分類が可能と成る。

エデンの知の思い出である、知的な努力の根本には、知を待ち望む発見の一大世界が存在する。

パラケルススは、見抜いた。

オズワルド クロルは、ほのめかした。

第三者が、実現し実証するであろう。

昨日は愚かに見えたものが、明日は天才に成るであろう。

人知のアトランティス大陸である失われたが復活した世界を初めて調査した気高い探求者を進歩は、たたえるであろう。

17 世紀の最初は、錬金術の大時代であった。

17 世紀の最初は、Philip Muller、John Torneburg、マイケル マイヤー、オルテリウス、Poterius、Samuel Norton、Baron de Beausoleil、David Planis Campe、Jean Duchesne、Robert Fludd、Benjamin Mustapha、デスパニエ、無上の人である「the Cosmopolite(世界市民)」、「the Cosmopolite(世界市民)」の文書を翻訳した de Nuisement、ヤン ファン ヘルモント、Eirenaeus Philalethes、ヨハン ルドルフ グラウバー、気高い靴屋ヤコブ ベーメの時代であった。

前記の、秘伝伝授者の主な人々は、超越的な魔術の研究に専念したが、「魔術」という憎まれ嫌われた名前を「錬金術の実験」というヴェールの裏に用心して隠した。

錬金術師が発見して弟子に伝えたかった「賢者の水銀」とは、学問的な宗教的な総合であり、王の統一の中に存在する平和である。

神秘主義者とは、真の光に照らされた者への盲信者でしかなかった。

光に照らされた者の学問は、星の光についての普遍の知であった、と言える。

1623 年の春に、パリの諸々の通りに、後記の、不思議な声明文が張られた。

「私達は、薔薇十字団の公認の使者である。
薔薇十字団は、わざと目立ったり、気づかれない様にしたりして、パリに滞在している。
薔薇十字団は、至高の神の恵みによって、外的な手段無しで、薔薇十字団が住む国々の言葉を話して、教えを授けて薔薇十字団の同胞である人々を恐怖と死から救う。
賢者の心は神に向かう。
もし単なる好奇心から誰かが薔薇十字団を探しても、薔薇十字団と交流できないであろう。
しかし、もし人が薔薇十字団の同胞愛に名を連ねたいという真剣な望みに駆り立てられたら、思考を見分けられる者である薔薇十字団は薔薇十字団の約束が真実である事を表すであろう。
そのため、薔薇十字団は、薔薇十字団が住む場所を開示しない。
なぜなら、薔薇十字団の声明文の読者が堅固な意思で薔薇十字団との結合を思考すれば、薔薇十字団が読者を知るのに十分であろうし、読者が薔薇十字団を知るのに十分であろう」

　薔薇十字団の神秘的な声明文は世論をとらえた。
　もし誰かが薔薇十字団は何者であるか公に質問したら、多分、後記の様に、見知らぬ人が質問者を他人から引き離して重々しく話すであろう。

「全世界で速やかに起こる必要が有る変革を運命づけられた、薔薇十字団は、無上の知の受託者である。

自然からの贈り物の平静な所有者として、薔薇十字団は、自然からの贈り物を思い通りに扱える。
薔薇十字団は、どこにいても、他の場所で起きている全ての物事を、現場にいるよりも良く知っている。
薔薇十字団は、飢えと渇きを超越している。
薔薇十字団には、恐れるべき老いも病気も無い。
薔薇十字団は、無上の力が有る聖霊や霊に命令できる。
神は、薔薇十字団を、敵から守るために、雲で覆った。
そのため、ワシの目より見通す目を持っていても、薔薇十字団が同意しないと、薔薇十字団を見る事はできない。
薔薇十字団の全体集会はエジプトのピラミッドで開かれる。
ただし、出エジプト記 17 章でモーセが泉を表した石の様に、エジプトのピラミッドは、薔薇十字団と共に砂漠を進み、薔薇十字団が約束の地に入るまで、薔薇十字団の後に従うであろう」

第5巻 第6章 いくつかの魔術の告発

　象徴的な「ケベスの石板」で、ギリシャの哲学者ケベスは、後記の、見事な結論を話している。

「望むべき唯一の本当に善い物は、知である。
恐れるべき唯一の本当の悪は、狂気である」

　実に、正に、倫理道徳的な心の悪と罪は、狂気である。
　多数の大胆な論文で、「犯罪者を罰する代わりに、犯罪者に世話をして犯罪者を治す必要が有る」と常に主張した神父 Hilarion Tissot に、エリファス レヴィは共感する。
　しかし、共感はするが、理性は、罪への寛大過ぎる解釈に対して抗議の声を上げる。
　罪への寛大過ぎる解釈は、法の武装解除によって、倫理道徳の拘束力を破壊する結果に成るであろう。
　エリファス レヴィは、狂気を酩酊に例える。
　酩酊は、ほぼ常に、自発的に行われる。
　だから、エリファス レヴィは、酩酊という自発的な理性の喪失を口実にさせずに、酩酊状態で犯された不品行や罪を罰する審判者の知をたたえる。
　酩酊状態といった自ら招いた状態を罪を重くする事情に数えられる時が来るかもしれない。

知性を持つにもかかわらず自発的な行動によって理性を逸脱した人は法の保護から外されてしまう時が来るかもしれない。

法とは、人の理性ではないか？　法とは、人の理性である！

赤ワインといった酒、傲慢、憎悪、性欲によって酩酊する人には災いが有る！

酩酊している人は、盲目に成り、不正、不公平に成り、状況に流される。

酩酊している人は、歩く不幸の源、生きている不幸の源である。

酩酊している人は、殺すかもしれないし、犯すかもしれない。

酩酊している人は、鎖につながれていない狂人である。

酩酊している人を、鎖につながれていない狂人として非難しなさい。

社会には自衛の権利が有る。

社会には護身の権利が有る。

自衛は、権利と言うよりも、義務である。

護身は、権利と言うよりも、義務である。

なぜなら、社会には幼子がいる。

前記の、考えを、エリファス レヴィが話す魔術の告発は、思い出させる。

頻繁に、教会と社会は、裁判による狂人の処刑によって、非難され過ぎている。

悪人の霊の魔術師は狂人である、とエリファス レヴィは認める。

しかし、悪人の霊の魔術師の狂気は、邪悪であった。

もし悪人の霊の魔術師と混同されて無実の病人が処刑されていたとしても、教会と社会には責任が無い不幸な出来事である。

国の法と当時の裁判による処刑は全て正当である。

国の法と当時の裁判により処刑される人が無罪に成る可能性は、神の手中にある。

しかし、国の法と当時の裁判により処刑された人は、人前では有罪であり、人前では有罪のままである必要が有る。

　中略

　しかし、もし現実には裁判は誤る可能性が有るとしても、法的には裁判は誤る可能性が有ってはならない。
　さもなければ、人の正義は、どう成ってしまうであろうか？
　死刑を宣告されたソクラテスは逃げても良かった。
　ソクラテスを裁いた者も自ら逃亡の手段をソクラテスに与えたであろう。
　しかし、ソクラテスは、法を尊重して、死ぬ事を決意した。
　いくつかの刑の過酷さは、中世の法に責任が有り、中世の裁判所には責任は無い。

　中略

　コンスタンティヌス１世の「私は祭司が恥ずべき罪によって祭司としての名誉を汚しているのを見つけたら、(密かに罰するが、)私は私の『紫衣』で祭司を覆い隠すであろう」という言葉は美しく王者に相応しい。
　なぜなら、祭司は、汚(けが)れない者であるべきである。
　(汚れている人は祭司に相応しくない。)
　正義が、大衆の倫理道徳性の前でも、誤りが無い物である、様に。

　中略

逆境は、大いなる人を明らかにする。

幸運の時に耐えるよりも遥かに、逆境で苦しみを耐えるのは容易である。

中略

遅かれ早かれ、神は迫害された人の無実に携わってくれる、のは疑いが無い。

しかし、地上では神が迫害されている人を敵から常には救ってくれない。

地上では神が迫害されている人を死によって救う時が実際に有る。

中略

全ての短気な性格の人の様に、Sieur de Kériolet は圧倒されて、無神論者という一方の極端から禁欲生活者という他方の極端へ移った。

中略

英雄と同じく、怪物は稀少である。

大衆は、大いなる善行もできないし、大罪も犯せない、凡人で構成されている。

中略

神意は、人々を人々自身の悪事によって罰する。

(興奮し過ぎて悪事を犯した人を興奮によって狂い死にするままにしておいたり、拷問者が拷問相手の事が焼きついて拷問相手の霊を幻視する様に成っても狂い死にするままにしておく、など。)

神意は、人々の過ちの悲惨な結果によって人々を教える。

中略

18 世紀に成ると、祭司を火刑にする様に成った。

ほぼ常に、善人が悪人の罪をつぐなう羽目に成る、様に。

18 世紀の最初でも、人への火刑は未だに続けられていた。

(大衆の)信心は死んでいたが。

ラバールという若者が行列祈祷式で帽子を外して敬意を表さなかったので、偽善者はラバールを恐るべき拷問にかけた。

その時、ヴォルテールがいて、ヴォルテールはヨーロッパへ侵略したフン族の王アッティラの様な使命感を心中に自覚した。

人の肉欲が宗教を冒涜したため、最早この世の人々には宗教は相応しく無いので、神は、ヴォルテールという新しい破壊者をこの世に遣わして、この世の人々から宗教を取り上げた。

中略

自然は、似た状況下で同様の一連の不思議な事実を再現して、悪魔が存在すると言う迷信家の自信過剰な無知と、驚異現象は存在しないと言うヴォルテール派の知の不足に、抗議する。

全ての時代で、特定の神経病は、物理的な混乱を伴う。

狂人、てんかん患者、強硬症カタレプシー患者、病的興奮者には異常な能力が有る。

狂人、てんかん患者、強硬症カタレプシー患者、病的興奮者は、伝染性の幻覚にかかり易い。

狂人、てんかん患者、強硬症カタレプシー患者、病的興奮者は、大気や周囲の物に混乱をもたらす時が有る。

幻覚患者は、自身の妄想を実体化した自身の影(、ラルヴァ)に苦しめられる。

脳の苦しみによって歪められた自身の反映(、ラルヴァ)に、肉体は包囲される。

幻覚患者は、星の光の中の自身の映像(、ラルヴァ)を見る。

星の光の強い流れは、磁石の様に作用して、家具を移動させたり倒したりする。

星の光の強い流れによって、夢の中にいるかの様に、物音や声が聞こえる。

前記の、驚異現象は、19 世紀に頻繁にくり返されて知られる様に成ったが、先祖は霊や悪魔のせいにしていた。

中略

磁気による現象が自然科学を新しい発見への経路の上に移した。

未来の化学の総合は、医者を星の光の知へ導くであろう。

星の光という普遍の力は一度でも知られれば、何ものが、星の光の磁石の強さ、数、方向を測定する事を妨害できるであろうか？　何ものも、星の光の磁石の強さ、数、方向を測定する事を妨害できない！

自然科学における変革が続くであろう。

そして、カルデアの超越的な魔術へ戻る事に成るであろう。

中略

目覚めているが、干し草の発散する気体によって半ば窒息している状態の人Bezuelの幻視で際立っている夢の特徴に気づくべきである。

脳の充血に続いて起きている、星の光による酩酊が認められる。

星の光による酩酊に続いて起きた、催眠状態が、M. Bezuelに、友人が星の光の中に残した、生きている時の最後の鏡像を見せた。

星の光の中の友人の鏡像が裸で腰までの上半身しか見えなかったのは、下半身が川の中に沈んで隠れていたからである。

十中八九、星の光の中の友人の鏡像の髪の紙は、水浴びする時に髪を縛るのに用いたハンカチーフである。

Bezuelは、友人に起きた全ての事を、催眠状態の直感で知った。

しかし、Bezuelは、友人の口から友人に起きた事を知った、と思った様である。

友人の映像が悲しくも見えなかったし陽気にも見えなかったのは、記憶と鏡像だけで構成された命の無い映像が与えた印象による物である。

M. Bezuelは、最初の幻視の時に、干し草による気体で酩酊して、はしごから落ちて、腕を痛めた。

Bezuelは、夢を見ている時の論理によって、腕の痛みは友人が腕をつかんだ感触であると思い込んだ。

Bezuelが意識を回復しても未だ腕に痛みを感じたのは、腕を痛めたからと全く自然に説明できる。

Bezuelと死んだ友人の会話の内容は死ぬ前の過去の事だけであった。

Bezuel と死んだ友人の会話には、死自体についての話や、あの世についての話は、存在しなかった。

　Bezuel と死んだ友人の会話の内容は死ぬ前の過去の事だけであったのは、この世と、あの世を隔てる壁の超越が何と不可能に見えるほど困難であるか改めて証明している。

　エゼキエル書では、お互いの中で回転する車輪が、命を表している。

　エゼキエル書では、牛、人、ライオン、ワシという 4 つの獣が、四大元素を表している。

　牛、人、ライオン、ワシという 4 つの獣は、車輪を昇り降りして、追い越す事無く、お互いに追いかけ合う。

　黄道 12 星座の象徴の様に。

　永久機関の車輪は、逆回転しない。

　形は、去った状態に戻らない。

　去った場所に戻るには、前進によって、常に同じで常に新しく、円を一周して渡る必要が有る。

　後記の様に、結論できる。

　この世の人生で表れる物は、全て、この世の人生の物である現象である。

　また、この世では、一瞬ですら、死という恐るべき壁を超越する物事は、思考の下に、想像の下に、幻覚の下や夢想の下にすら、与えられていない。

第 5 巻 第 7 章 フリーメーソンの魔術的な起源

教会に対する反乱がキリスト教の統一性を解体している時に、突然、ヨーロッパに、メーソンという名前で知られている大いなるカバラの結社が現れた。

メーソンについての歴史家は皆、メーソンの起源の説明に困っている。

ある歴史家は、ストラスブールの大聖堂を建築するために組織された石工ギルドがメーソンの起源であると話している。

クロムウェルの時代のイギリスのメーソンの儀式がピューリタンの無政府主義者の指導者クロムウェルへの抗議として発達した可能性を思考停止して、ある歴史家は、クロムウェルがメーソンを設立したと誤って主張している。

ある歴史家は、無知にも、イエズス会がメーソンを創設はしていなくても維持と指導はしていると誤って主張している。

メーソンは、長い間、秘密にされてきた結社であり、常に秘密に包み隠されている結社である。

イエズス会がメーソンに関与しているという論理が破綻している誤った意見を除いて、後記を認める事によって、エリファス レヴィは、メーソンの起源についての歴史家達の意見を調和できる。

メーソンは、名前と象徴を、ストラスブールの大聖堂の石工組合から取り入れた。

また、メーソンは、革新的な法のおかげで、クロムウェルの独裁を物ともせず、イギリスで公に最初に現れた。

さらに、話すと、(良くも悪くも、)神殿騎士団は、メーソンの見本と成った。

薔薇十字団が、メーソンの直接の先祖である。

(良くも悪くも、)ヨハネ派をかたる異端は、メーソンは遠く隔たっているが、先人と成った。

メーソンの考えは、ゾロアスターとヘルメスの考えである。

メーソンの法は、前進的な秘伝伝授である。

メーソンの原理は、位階制と普遍の友愛、同胞愛が調節する平等である。

メーソンは、アレクサンドリア学派の後継者である。

同様に、メーソンは、全ての古代の秘伝伝授の後継者である。

メーソンは、ヨハネの黙示録と「光輝の書」の秘密の、保管者である。

メーソンが敬礼する対象は、真理である。

メーソンは、真理を光で表す。

メーソンは、全ての信仰の形式を大目に見る。

メーソンは、唯一の哲学の学徒である、と話す。

メーソンは、真理だけを探求する。

メーソンは、真実を教える。

メーソンの計画は、全ての人の知性を論理の範囲内に徐々に段階的に導く事である。

フリーメーソンの例え話的な目的は、ソロモンのエルサレム神殿を建て直す事である。

フリーメーソンの実際の目的は、論理と信心の結合によって、社会の統一性を復活させる事である。

また、フリーメーソンの実際の目的は、知と徳に基づいた位階制の原理に立ち戻る事によって、入門への経路を復活させる事と、向上のための段階として役立つ入門の試練を復活させる事である。

フリーメーソンの考えと献身より美しいもの、大いなるものは存在しない。

不幸にも、一般のメーソンでは、統一の考えと位階制への服従を保持していない。

正統な真のメーソンではない、反乱分子の偽のメーソンが現れてしまった。

フランス革命という惨事における全ての最悪な物は、分派の異端の偽のメーソンのせいである。

ところで、フリーメーソンは、キュロス２世とゼルバベルについての伝説が補完する、ヒラムの神聖な伝説を保持している。

後記は、ヒラムの伝説である。

ソロモンは、エルサレム神殿を建てる計画をして、計画をヒラムと言う建設者に委託した。

建設者の達道者であるヒラムは、作業の秩序を確保するために、技術の段階に応じて建設者を３つに分けた。

建設者は多数であった。

そのため、建設者を見分けるために、作業に応じて建設者に報いるために、ヒラムは３つの合言葉と合図をそれぞれ３つの段階の建設者に与えた。

建設者の３つの段階は、見習い、同胞、達道者である。

３人の同胞が、達道者の地位を力で獲得しないで、達道者の地位を不当に望んだ。

３人の同胞は、エルサレム神殿の３つの主要な門でヒラムを待ち伏せた。

ヒラムが第１の門から出て来ると、第１の同胞が、建設者ヒラムを定規で脅して達道者の言葉を要求した。

ヒラムは「私ヒラムは達道者の言葉をそんな方法で授からなかった」と答えた。

第１の同胞は怒って、ヒラムを鉄の定規で打ち、最初の傷をヒラムに負わせた。

建設者ヒラムは第２の門へ逃げた。

第２の門でヒラムは第２の同胞に出会った。

第２の同胞は、ヒラムを直角定規、または、てこで脅して達道者の言葉を要求した。

ヒラムは「私ヒラムは達道者の言葉をそんな方法で授からなかった」と答えた。

第２の同胞は、ヒラムを直角定規、または、てこで打った。

第３の門には、第３の同胞がいて、同様の事をして、ヒラムを木槌で殺した。

３人のヒラムの殺害者は、ヒラムの死体をごみの山の下に隠した。

３人のヒラムの殺害者は、ごみの山という即席のヒラムの墓の上にアカシアの枝を立てた。

アベルを殺した後のカインの様に、３人のヒラムの殺害者は逃亡した。

ソロモンは、建設者ヒラムが帰らない事に気づいて、ヒラムを探すために９人の達道者を派遣した。

アカシアの枝が、ヒラムの死体の在処（ありか）を明かした。

９人の達道者は、ごみの山の下からヒラムの死体を引き出した。

ヒラムの死体は長い間、置かれていたので、９人の達道者は「肉が骨から落ちた」という意味の言葉を口にした。

ヒラムの葬式が正しく行われた。

ソロモンは、ヒラムの殺害者を探すために27人の達道者を派遣した。

第１のヒラムの殺害者は、洞窟で見つかった。

第１のヒラムの殺害者の、近くではランプが燃え、足元では小川が流れ、そばには護身用の短剣が置かれていた。

洞窟に最初に入った達道者は、第１のヒラムの殺害者を見つけ、第１のヒラムの殺害者の武器の短剣を取って、ヘブライ語で「נקם」、「ネカム」と叫んで、第１のヒラムの殺害者を刺した。

ヘブライ語の「נקם」、「ネカム」は「報復」、「復讐」を意味する名詞である。

第１のヒラムの殺害者の頭は、ソロモンの所に運ばれた。

ソロモンは、第１のヒラムの殺害者の頭を見ると、怒りで震えた。

ソロモンは、第１のヒラムの殺害者を討った報復者に「残念な人だ、罰を与えて裁く権利は私だけの物であると知らなかったのか？」と話した。

27 人の達道者はソロモン王の前にひざまずき、熱意で我を忘れた報復者の達道者への許しをソロモンに懇願した。

第２のヒラムの殺害者は、隠れ家の提供者に裏切られた。

第２のヒラムの殺害者は、燃える柴の近くの岩で隠れていた。

岩の上には虹が輝いていた。

第２のヒラムの殺害者の近くで、犬が横に成っていた。(犬と水銀は第２の段階の象徴の場合が有る。)

犬に警戒されない様にして、27 人の達道者は、第２のヒラムの殺害者をつかまえ、拘束し、エルサレムに運んだ。

エルサレムで、第２のヒラムの殺害者は、処刑された。

第３のヒラムの殺害者は、ライオンに殺された。

第３のヒラムの殺害者の死体を確保するには、ライオンを圧倒する必要が有った。

(ライオンと硫黄は第３の段階の象徴の場合が有る。)

他説では、27 人の達道者が第３のヒラムの殺害者を見つけた時、第３のヒラムの殺害者は斧アシェットで護身していたが、27 人の達道者は第３のヒラムの殺害者の武装解除に成功して、ソロモンの所へ運び、罪をつぐなわせた。

前記が、最重要なヒラムの伝説である。

後記は、ヒラムの伝説の説明である。

ソロモンは、無上の知を擬人化した者である。

エルサレム神殿は、地上における真理と論理の位階制による統治の実現と象徴である。

ヒラムは、知によって、神の王国に到達した達道者を表す。

ヒラムは、各人の行いに応じて各人に報いを与えて、正義と秩序によって統治する。

3 つの段階は 3 つの合言葉に対応している。

3 つの段階は 3 つの言葉に対応している。

3 つの合言葉は 3 つの意味を表す。

3 つの言葉は 3 つの意味を表す。

ヒラムにとっては、言葉は唯一である。

しかし、唯一の言葉は 3 つの方法で表される。

見習いの言葉

見習いは見習いの言葉を話す事ができる。

見習いの言葉は、自然を意味する。

作業が、見習いの言葉を説明する。

同胞の言葉

同胞が話す時、同胞の言葉は、思想を意味する。

研究が、同胞の言葉を説明する。

学が、同胞の言葉を説明する。

達道者の言葉

達道者が口で話す時、達道者の言葉は真理を意味する。

知が、達道者の言葉を説明する。

言葉自体は、神を意味するために使われる。

神の真の名前は、大衆には話す事ができない。

そのため、位階制には３つの段階が有る。

(

幼子の様な者、大人の様な者、長老の様な者。

大人の様な者は学の有る者である。

)

ソロモンのエルサレム神殿には３つの門が有る。

光には３つの表れ方が有る。

(心を暖める光、知の光、視覚的な光。)

星の光には３つの形態が有る。

(星の光は、固体、液体、気体に成る。)

自然には、つり合わせる力、上げる力または高める力、固める力という３つの力が有る。

定規は、つり合わせる力の象徴である。

てこは上げる力または高める力の象徴である。

木槌は固める力の象徴である。

知による位階制の統治に対する、先天的な肉欲による反乱は、連続的に自然の３つの力で武装していき、自然の３つの力を正しい利用方法から逸らしてしまう。

自然に対する反乱、知に対する反乱、真理に対する反乱という3つの典型的な反乱が存在する。

自然に対する反乱、知に対する反乱、真理に対する反乱という3つの典型的な反乱は、古代ギリシャ人が例えた地獄で、ケルベロスの3つの頭によって、表されている。

自然に対する反乱、知に対する反乱、真理に対する反乱という3つの典型的な反乱は、民数記16章のコラ、ダタン、アビラムによるモーセへの反乱によって表されている。

メーソンの口伝では、多様な儀式において、3人のヒラムの殺害者の特徴を名前で表している。

第1のヒラムの殺害者は、通例、民数記16章の「アビラム」または「ヒラムの殺害者」と呼ばれ、大いなる達道者ヒラムを定規で打った者である。

見せかけの偽の法の下で人の肉欲が正しい人を殺す、というのが第1のヒラムの殺害者の例え話の意味である。

第2のヒラムの殺害者は、サムエル記下9章などの「メピボセテ」または「メフィボシェテ」と呼ばれ、ヒラムを直角定規、または、てこで打った者である。

サムエル記下9章などの「メピボセテ」または「メフィボシェテ」は、ダビデの王位を狙った滑稽な弱者である。

無思慮な平等による大衆の直角定規、または、てこは、大衆の手の中では暴君の道具と成ってしまい、定規よりも、知と徳の王国を攻撃してしまう、というのが第2のヒラムの殺害者の例え話の意味である。

最終的に、第3のヒラムの殺害者がヒラムを木槌で殺した。

先天的な物である肉欲は、暴力と恐怖の力で、知を圧倒して、誤った秩序を確立しようとした時に、正しい人を殺す、というのが第３のヒラムの殺害者の例え話の意味である。

十字架や祭壇の様に、ヒラムの一時的な墓の上にはアカシアの枝があった。

アカシアの枝は、生き残った知の象徴である。

アカシアの枝は、次の春を予言する、緑の春である。

人が自然の秩序を乱すと、ソロモンが建設者の達道者ヒラムの死の報復をした様に、神意は自然の秩序を回復するために介入する。

定規でヒラムを打った第１のヒラムの殺害者は、短剣によって滅んだ。

ヒラムを直角定規、または、てこで打った第２のヒラムの殺害者は、法による首切り斧によって罪をつぐなう羽目に成った。

法による処刑は、永遠の、王殺しへの裁きである。

ヒラムを木槌で殺した第３のヒラムの殺害者は、悪用した力の犠牲に成る。

ヒラムを定規で打った第１のヒラムの殺害者は、照らしてくれるランプと飲み水をもたらす小川によって裏切られる。

自然によって殺されるのは、自然の殺害者への報復の法である。

ヒラムをてこで打った第２のヒラムの殺害者は、眠っている犬の様に、用心を怠った時に、発見されてしまう。

協力者が、第２のヒラムの殺害者を見限って引き渡した。

なぜなら、無秩序による混乱は、裏切りの母である。

ヒラムを木槌で殺した第３のヒラムの殺害者は、ライオンに食い殺された。

ライオンは、オイディプスのスフィンクスの一種である。

ライオンを圧倒できる人がヒラムの後を継ぐのに相応しい。

建設者ヒラムの腐乱死体は、形は変わるかもしれないが精神、知は残る事を表す。

(骨は白色なので知の象徴である。)

第１のヒラムの殺害者の近くの小川の源泉は、自然に対する罪を処罰した大洪水を思い出させる。

第２のヒラムの殺害者を裏切った燃える柴と虹は、思想への侵害を非難する命と光を表す。

圧倒されたライオンは、精神に圧倒された物質という、精神の勝利と、知に最終的に従う力を表す。

エルサレム神殿、統一の神殿を建てるという知的な労苦の始まりから、ヒラムが代表である正しい人は頻繁に殺されたが、常に正しい人は復活する。

正しい人は、イノシシに殺されたアドニスである。

正しい人は、セト、ティフォンに殺されたオシリスである。

正しい人は、迫害されて殺されたピタゴラスである。

正しい人は、酒神ディオニュソスの女信者に八つ裂きにされて殺されたオルフェウスである。

正しい人は、申命記 34 章でネボ山の洞窟に置き去りにされたモーセである。

正しい人は、ユダ、サドカイ人のカイアファ、ローマの総督ピラトに十字架にかけられたイエスである。

真のメーソンは、ヒラムの計画に従って忍耐強くエルサレム神殿を建て直す事を試みる人である。

前記が、メーソンの大いなる重要なヒラムの伝説の説明である。

メーソンには美しい深い伝説が他にも存在する。

しかし、エリファス レヴィは、メーソンの神秘的な他の伝説を開示する事は正しくないと感じる。

エリファス レヴィは、研究によって神からしか秘伝伝授を受けていないが、自分の保持している秘密の様に、超越的なフリーメーソンの秘密を保持しているつもりである。

エリファス レヴィは、労苦によって沈黙する必要が有るほどの知の段階に到達して、言動による誓いによってよりも、確信によってメーソンとして誓ったと自身を見なしている。

知は高貴な者の義務である。

エリファス レヴィは、薔薇十字団の王冠に相応しいつもりである。

エリファス レヴィも、ヒラムが代表である正しい人の復活を信じている。

メーソンの儀式は、秘伝伝授の口伝の記録を伝えるために用意された。

メーソンの儀式は、秘伝伝授の口伝を同胞の間で保存するために用意された。

もしメーソンが神聖で崇高であるならば、どうして教会はメーソンを頻繁に弾圧するのか？　と大衆は問うかもしれない。

しかし、エリファス レヴィは、分派の異端の偽のメーソンについて話して、すでに答えている。

メーソンはグノーシスである。

偽のグノーシスのせいで、真のグノーシスまで混同されて弾圧されてしまった。

偽のメーソンのせいで、真のメーソンまで混同されて弾圧されてしまった。

真のグノーシスや真のメーソンは、身を隠す様に追い込まれた。

しかし、真のグノーシスや真のメーソンは、光を恐れたわけではない。

なぜなら、光は、真のグノーシスや真のメーソンが、望むものであり、探求するものであり、敬礼するものである。

実に、真のグノーシスや真のメーソンは、神聖なものへの冒涜を恐れた。

言い換えると、真のグノーシスや真のメーソンは、誤解者、誹謗中傷者、神聖なものを笑いものにする懐疑者、宗教への敵、倫理道徳への敵を恐れた。

さらに、現在では、自分がメーソンだと思い込んでいる多数の偽のメーソンは、神秘のための鍵を失って、メーソンの儀式の意味を知らない。

自称メーソンの多数の偽のメーソンは、ロッジのカーペットの上に記されている絵の意味を誤解している。

メーソンのロッジのカーペットの上に記されている絵は、絶対の普遍の知の書タロットの絵である。

メーソンのロッジのカーペットの上に記されている絵は、カバラの鍵によって読み解く事ができる。

ソロモンの鍵をすでに所有している秘伝伝授者にとっては、メーソンのロッジのカーペットの上に記されている絵は、隠されていない。

メーソンは、汚されただけではなく、神殿騎士団の総長ジャックド モレーの共犯者や神殿騎士団による分裂工作を続ける人々という無政府主義者の陰謀のためのヴェールや口実として利用された。

ヒラムの殺害の報復をする代わりに、偽のメーソンは、ヒラムの殺害者の処刑への逆恨みによる犯行を実行した。

偽のメーソンという無政府主義者は、定規、直角定規、木槌に「自由、平等、友愛」と記して、定規、直角定規、木槌を再び持った。

偽のメーソンの自由とは、肉欲のための自由である。

偽のメーソンの平等とは、劣悪な人に合わせて全てを引き下げる事による平等、堕落による平等である。

偽のメーソンの友愛、同胞愛とは、破壊工作のための悪人同士の団結である。

教会は偽のメーソンを正しく弾圧してきているし、教会は偽のメーソンを永遠に弾圧するであろう。

第 6 巻 魔術と革命

ヴァウ

THE GREAT HERMETIC ARCANUM

第6巻 第1章 18世紀の注目するべき著者

17世紀の終わりまで、中国は、外の世界には、ほとんど知られていなかった。

17世紀の終わりに、中国という広大な帝国は、キリスト教の宣教師によって、ある程度、探検され、明らかにされ始めた。

そして、中国は、過去の全ての知の死都の様に現れた。

中国人は、ミイラの民である、と例えられる、かもしれない。

中国人は、何も進歩させなかった。

なぜなら、中国人は、中国の口伝の不動の中で生きている。

そのため、精神、命が引き上げてしまってから、長い時間が経っていた。

最早、中国人は、何も知らない。

しかし、中国人は、全てのものについての曖昧な記憶を持っている。

中国の守護神は、「ヘスペリデスの園」の竜ラドンである。

竜ラドンは、知の園である「ヘスペリデスの園」で、黄金のりんごの木の果実を守っている。

中国の「神の人」である「英雄」は、カドモスが戦神アレスの竜を圧倒した様に竜を圧倒する代わりに、すくみ、鱗によって変化する幻を見せる「怪物」としての竜に魅了された。

中国では、謎だけが生き残っている。

中国では知は昏睡状態である。

または、少なくとも、中国では知は深い眠りの中で夢の中でしか話さない。

魔術の歴史 第5巻 第2章で、すでに話した様に、中国のタロットは、ヘブライ人の「形成の書」の様に、カバラの絶対の知に基づいている。

また、中国には、破線の陰と直線の陽という2つの形の組み合わせだけで構成されている象徴的な本である皇「伏羲」の著書「易経」が存在する。

M. de Maison は、中国についての手紙で、「『易経』は全く解読できない」と話している。

しかし、「易経」は、「光輝の書」より、解読が困難ではない。

「易経」は、「光輝の書」の興味深い補足である、と思われる。

実に、「易経」は、「光輝の書」の役に立つ付録である。

「光輝の書」は、普遍のつり合いの作用を説明する。

「易経」は、普遍のつり合いの、象徴的な、暗号化された、実証である。

「易経」の鍵は、伏羲の3つ1組の「八卦」として知られている pantacle である。

史料収集による中国の大いに権威の有る歴史書である、宋の時代の劉恕の「資治通鑑外紀」に記されている伝説によると、何千年も前の、ある日、河畔で、皇「伏羲」は、自然の大いなる秘密について瞑想していた。

伏羲は、竜と馬を複合させた様な象徴的な動物であるスフィンクス龍馬が、河から、あらわれるのを見た。

龍馬の頭は、馬の頭の様に長く伸びていた。

龍馬には、脚が4本あった。

(龍馬は、四足獣であった。)

龍馬の尾は、蛇の尾の様であった。

龍馬の背中は、鱗で覆われていた。

龍馬の背中の各鱗の上には、神秘的な八卦の紋様が輝いていた。

龍馬の八卦の紋様は、龍馬の胸や背といった中心より、龍馬の先端へ向かうにつれて小さく成っていた。

しかし、龍馬の八卦の紋様は、全体的に、完全に調和していた。

龍馬という竜は姿を水面に映していて、水面に映った鏡像の龍馬の八卦の紋様は逆さに成っていた。

龍馬という蛇の様な馬は、ギリシャ神話のペガサスの様に、(神の聖霊の様に)霊感を吹き込むもの、または、(星の光の様に)霊感をもたらすものである。

龍馬、ペガサス、クロノスの蛇は、普遍の光を表す。

龍馬という普遍の光は、伏羲を普遍の知に入門させた。

八卦は、伏羲の入門に役立った。

伏羲は、龍馬の鱗から、八卦を読み取った。

伏羲は、「易経」の様に、3つ1組の八卦同士を組み合わせて6つ1組の六十四卦にした。

伏羲は、自然に元々存在する必然の調和によって相互に比較し合い統一し合う、知の総合である「易経」を考え出した。

「易経」の六十四卦は、伏羲による八卦同士の不思議な組み合わせの結果である。

伏羲の数は、カバラの数と同一である。

「高等魔術の教理」3章で、すでに説明した様に、pantacleである、伏羲の八卦は、ソロモンの六芒星と似ている。

伏羲の「易経」の六十四卦は、カバラの光の32の経路や、カバラの光の50の門と対応している。

そのため、結果的に、「形成の書」と「光輝の書」の鍵を所有している人にとっては、「易経」は明らかであるはずである。

そのため、絶対の哲学の知は、中国に存在していた。

「五経」は、絶対の知についての注釈である。

絶対の知は、大衆から隠されている。

「易経」を除く「五経」と「易経」の関係は、モーセ五書と「Sepher Dzenioutha」の中の啓示の関係に似ている。

「Sepher Dzenioutha」は、神秘についての本であり、「光輝の書」の鍵である。

孔子は、カバラの啓示者、または、カバラをヴェールで隠した者である。

孔子は、大衆の詮索を逸らすために、怪力乱神を語らず、カバラの存在を教えなかった。

学の有るタルムード学者マイモニデスが、ソロモンの鍵の存在を否定した、様に。

中国には、孔子の後に、(第 28 祖の達磨が正しい仏教を中国に伝えるまで、)物質主義化されてしまった仏教が伝来してしまった。

中国で、物質主義化されてしまった仏教は、古代エジプトの超越的な魔術の名残を、インドの悪人の霊の魔術師の口伝に取って代わらせてしまった。

中国で、物質主義化されてしまった仏教は、知の進歩を停滞させてしまった。

物質主義化されてしまった仏教は、大いなる民であった中国人の文明を挫折させ形骸化させ、中国人の知性を麻痺させてしまった。

賢明な哲学者である、見事に深い、学の有るライプニッツは、確かに、絶対の知の無上の真理への入門に相応しかった。

ライプニッツは、微分学で発見した二進法を「易経」に認めた、と考えた。

ライプニッツは、二進法の計算で採用していた数字 0 と数字 1 を破線の陰と直線の陽に認めた。

ライプニッツは、真理の門にいた。

ライプニッツは、真理の一歩手前にいた。

しかし、ライプニッツは、真理の細部の一部だけを見ていた。

ライプニッツは、真理の全体を理解できなかった。

中国の宗教的な古さについての最重要な発見は、神学的な議論の結果であった。

キリスト教へ改宗した中国人に「天」と先祖への敬礼をイエズス会が許すのは正しいかどうか？　という問題によって神学的な議論が起きた。

言い換えると、教養の有る中国人が「天」という言葉は「神」を意味すると考えているのか？

それとも、「天」という言葉は「天空」という空間や「自然」をただ意味すると考えているのか？

教養の有る中国人や、大衆の良識に頼るのが論理的であった。

しかし、教養の有る中国人や、大衆の良識では、神学的な権威を形成できない。

そのため、多数の議論が行われ、多数の文書が書かれ、より感心を集めた。

イエズス会は、基本的に正しかったが、手続きの方法を間違えてしまった。

その結果、新しい困難が作られ、未だに、克服されておらず、中国では、キリスト教の不屈の殉教者の血を流させ続けている。

アジアで宗教による克服が議論されていた時、大きな精神的な不安がヨーロッパを動揺させていた。

キリスト教への信仰が消えようとしている様に見えた。

至る所で、新しい啓示と奇跡の噂があった。

学問と世界で確かな地位を持っていたエマヌエル スヴェーデンボルグは、スウェーデンを予見で驚かせていた。

また、ドイツは、新しい、光に照らされた者であふれていた。

反乱分子の神秘主義者が、位階制の宗教の神秘を、無秩序による混乱の神秘に取って代わらせようと企んだ。

大惨事が、用意されて、迫っていた。

スヴェーデンボルグは、偽の光に照らされた者の偽預言者の中では最も誠実で温和であったが、他の偽預言者と同様に危険であった。

事実、「全ての人は神と直接的に交流する様に求められている」という誤ったスヴェーデンボルグの主張は、秩序的な正しい宗教の教えと前進的な秘伝伝授を、熱狂による逸脱と妄想による過剰に取って代わらせてしまう。

知的な光に照らされた者は、「宗教は、人性が大いに必要とする欲求による物なので、破壊されないはずである」と感じた。

偽の光に照らされた者は、宗教だけではなく、宗教が伴う、無知が導く神がかりによる致命的な結果としての狂信も、位階制の教会の権威を転覆させるための武器として利用した。

偽の光に照らされた者は、狂信による争いが新しい位階制をもたらす、と認識した。

偽の光に照らされた者は、狂信による争いがもたらす新しい位階制の始祖や指導者に成る事を望んだ。

「学ぶ労苦無しに、全てを知って、あなたたち人は神々の様に成るであろう。獲得する労苦無しに、全ての物を所有して、あなたたち人は王者達の様に成るであろう」というのが、革命の精神が嫉妬深い大衆に約束した嘘を要約した物である。

革命の精神は、死の精神である。

死の精神である革命の精神は、創世記の古い蛇である。

しかし、死の精神である革命の精神は、運動と進歩の父である。

なぜなら、死だけが世代交代させる。

そのため、古代インド人は、厳しい破壊神シヴァを敬礼した。

シヴァの象徴は、性欲と物質的な生殖の象徴である、男性器であった。

スヴェーデンボルグの考えの体系は、位階制の原理が欠けたカバラであった。

スヴェーデンボルグの考えは、要石と基礎が無い神殿であった。

スヴェーデンボルグの考えは、大建造物であるが、幸運にも、全てが空中にそびえている非現実的な妄想の大建造物である。

　なぜなら、仮に、スヴェーデンボルグの考えという大建造物の実現を地上で試みても、大建造物を転覆させなくても、大建造物の主要な柱の１つに寄りかかっただけで、試行した最初の幼稚な人の頭の上に大建造物は崩れ落ちてくるであろう。

　無秩序の秩序的な組織化は、革命家が解決に取り組んできた問題である。

　そして、革命家は、永遠に、無秩序を秩序的に組織化する羽目に成る。

　無秩序の秩序的な組織化は、シシュフォスの岩である。

　無秩序の秩序的な組織化というシシュフォスの岩は、常に、革命家の上に落ちてくる。

　革命という一瞬のためだけに存在させるために、常に、革命家は、必要以外の正当性を持たない独裁を必然的に即席で作る様に追い込まれる。

　そして、革命家による独裁は、無政府状態による混乱の様に盲目的で暴力的に成ってしまう。

　論理による調和的な統治の拘束が無く成ると、愚かな無秩序な独裁にのみ到達する。

　スヴェーデンボルグが間接的に提案した、超自然的な世界と交流する手段は、夢、忘我状態、強硬症カタレプシーを結合した、霊媒状態を形成する。

　光に照らされたスウェーデン人スヴェーデンボルグは、「霊媒状態の形成が可能である」と断言した。

　しかし、スヴェーデンボルグは、霊媒状態への到達に必要な鍛錬についての糸口を与えなかった。

多分、スヴェーデンボルグの模倣者達は、スヴェーデンボルグが与えなかった霊媒状態への到達に必要な鍛錬を補うために、インドの魔術の儀式に頼った、かもしれない。

スヴェーデンボルグの模倣者達が霊媒状態への到達を試行錯誤している時に、ドイツの医者メスメルという天才があらわれて、スヴェーデンボルグの予言的なカバラ的な直感を自然な奇跡で補完した。

メスメルは、秘伝伝授無しに、隠された知無しに、星の光という普遍の代行者と、星の光による驚異現象を再発見する名誉を得た。

当時の学者はメスメルの言葉が矛盾の塊であると誤解した。

メスメルの言葉は、自然科学の総合の基礎を最終的に形成するであろう。

メスメルは、「自然の存在には 2 つの形がある」と主張した。

自然の存在の 2 つの形とは、実体と命である。

実体と命は、固定と運動をもたらす。

固定と運動は、複数のもののつり合いを形成する。

さらに、メスメルは、星の光という「第一質料」の存在を認めた。

星の光は、遍在する、流体である。

星の光は、固定させたり運動させたりする事が可能である。

星の光の固定は、実体の構造、実体の性質を決定する。

星の光の絶え間無い運動は、形を変化させたり復活させたりする。

星の光という、流体の「第一質料」には、自発性と受容性がある。

星の光の受容性は、引き寄せる。

星の光の自発性は、星の光を放射する。

星の光という「第一質料」の力によって、世界と、世界の中に住む人々は、引き寄せ合い、斥け合う。

血が循環する様に、星の光は全てのものを循環している。

星の光は、全ての存在の命を保持したり復活させたりする。

星の光は、全ての存在の力の代行者である。

星の光は、全ての存在の意思の道具と成れる。

驚異現象は、超常的な意思か労苦の結果である。

星の光という普遍の流体または「第一質料」の２つの性質の多様な組み合わせが、凝集力による現象、弾力による現象、肉体の濃密さや希薄さによる現象をもたらす。

全ての肉体の不調の様に、病気は、自身の体組織の中における、または、他者の体組織による、星の光という「第一質料」のつり合いの混乱のせいである。

体組織同士は、体組織に特有のつり合いが異なるので、相互に共感し合ったり反発し合ったりする。

共感する肉体同士は、相互に、つり合いを回復し合って、肉体の不調や病気を治し合う事が可能である。

星の光という「第一質料」の引き寄せや放射によって、肉体同士が相互につり合わせ合う能力をメスメルは「磁気」と呼んだ。

星の光が形の中で作用している時、形に応じて星の光が変化するので、メスメルは、生物の中の星の光を研究していた時に、生物の中の星の光を動物磁気と呼んだ。

メスメルは、理論を実験によって証明した。

メスメルの実験は、完全な成功によって、報われた。

メスメルは、動物磁気の現象と電気の現象の間の類推可能性を観察して、金属の伝導体を利用した。

メスメルは、星の光の２つの力を引き寄せたり放射したりするために、金属の伝導体を、土と水を入れた共通の容器につなげた。

メスメルは、複雑な仕組みの容器の利用を中止して、金属の伝導体と容器の代わりに、木のテーブル、絹の布、羊毛の布といった唯一の円形の非伝導体の上に重ねた複数の手による生きている鎖を利用した。

メスメルは、金属を磁化する処理を、生きている生物組織に応用して、磁化された金属の現象と類似した現象の存在を確かめるに至った。

メスメルは、踏み出すべき一歩手前まで、後記を、断言するべき一歩手前まで、来ていた。

星の光による驚異現象は、熱、光、電気、磁気という自然科学の４つの不可量物による物である。

星の光による驚異現象は、星の光という唯一の同一の力が、多様な応用によって、多様に表れた物である。

星の光という力は、他の、星の光という「第一質料」を運動させる。

星の光という力は、他の、遍在する星の光という「第一質料」と(遍在性によって)不可分である。

星の光という力は、光を放ち、火の様であり、電気的であり、磁気的である。

星の光という力は、「光」という唯一の名前を持っている。

創世記１章３節で「光あれ」と話して、モーセは、星の光を「光」と呼んでいる。

創世記１章３節で全能である神が「光あれ」と命令したと話して、モーセは、「全ての実体や全ての形より前に、星の光という『光』が表れた」と話している。

創世記１章３節「光あれ」

後に知られるであろう１つの真実を大胆に断言しよう。

18 世紀の大いなる物とは、ヴォルテール、ディドロ、ダランベール、ルソーによるフランスの「百科全書」ではなく、ヴォルテールによる笑いものにする哲学ではなく、ディドロとダランベールによる否定的な哲学ではなく、ルソーによる有害な邪悪な博愛主義ではない。

18 世紀の大いなる物とは、メスメルの共感的な奇跡的な自然科学である。

メスメルは、プロメテウスの様に大いなる者であった。

メスメルは、星の光という雷である天からの火を人に与えた。

フランクリンは、雷を導く事しかできなかった。

メスメルの天才は、憎悪による迫害に事欠かなかったし、迫害の誤った正当化に事欠かなかった。

メスメルは、ドイツから追放された。

メスメルは、フランスで笑いものにされた。

しかし、メスメルは、フランスで富を得た。

なぜなら、星の光によるメスメルの治療は明らかに効果があって、メスメルの患者は治療費をメスメルに支払った。

ただし、メスメルの患者は、学者の敵意を招かない様に、「偶然、回復した」という嘘をついた。

公認の団体は、星の光というメスメルの発見の調査で、奇跡に敬意を払う事すら無かった。

大いなる人メスメルは、巧妙な詐欺師と誤って呼ばれる事に甘んじた。

星の光によるメスメルの治療メスメリズムに敵対した人は学者だけではなかった。

信心深いキリスト教徒は、星の光というメスメルの新しい発見が危険であると誤って恐れた。

迷信家は、星の光によるメスメルの治療が悪事、魔術であると誤って叫んだ。

賢者は、星の光についてのメスメルの知の悪用を予想した。

愚者は、メスメルが発見した星の光という不思議な力の発揮をすら大目に見なかった。

ある人は、「星の光というメスメルの『磁気』という名目で、救い主イエスと聖人達の奇跡が否定されてしまう」と誤解した。

ある人は、「星の光というメスメルの『磁気』は悪魔の力にとっては、どうして都合が良いであろうか？　星の光というメスメルの『磁気』は悪魔の力にとっては、都合が悪い！」と考えた。

しかし、真の宗教には、真理の発見によって恐れるべき物は何も無い。

さらに、星の光というメスメルの「磁気」は、人の力の限界を明らかにして、神による奇跡を破壊する代わりに、神による奇跡を支持しないか？　星の光というメスメルの「磁気」は、人の力の限界を明らかにして、神による奇跡を支持する！

星の光についてのメスメルの知によって、愚者は、驚異現象を悪魔のせいにする機会が減少して、憎しみと怒りを発揮する機会が減少するであろう。

しかし、真の信心深い人には、星の光についてのメスメルの知を不満に思う理由は無い。

光が表れて、無知が減少すると、悪魔は土地を失う。

しかし、知と光が獲得した土地が増えると、神の王国と神の栄光への人の愛は、ますます強く成る。

第 6 巻 第 2 章 18 世紀の神秘的な人達

18 世紀の大衆は、魔術だけを軽信した。

なぜなら、曖昧（あいまい）な信心が、真の信心が無い大衆による信心である。

18 世紀の大衆は、イエス キリストによる奇跡を否定してしまった。

一方、18 世紀の大衆は、サンジェルマン伯爵による復活の奇跡を信じてしまった。

サンジェルマン伯爵という超常的な人物は、大作業の秘密、(錬金術による)ダイアモンドの創造の秘密、(錬金術による)宝石の創造の秘密を所有していると信じられた、神秘的な神知学者である。

サンジェルマン伯爵は、フランス社交界の人であり、会話は好ましく、振る舞いは上品であった。

ジャンリス夫人は、若い頃のサンジェルマン伯爵と、ほぼ毎日、会っていた。

ジャンリス夫人は、「サンジェルマン伯爵の宝石の絵には、化学者や画家が秘密を見抜けなかった、自然な輝きがあった」と話している。

サンジェルマン伯爵の絵は、証拠として、存在していない。

そのため、サンジェルマン伯爵は、光を宝石の絵に固定したか、真珠母と呼ばれている真珠層の光沢物質による化粧か金属の塗装を宝石の絵にしたか、という推測しかできない。

サンジェルマン伯爵は、カトリックの信仰告白をして、大いに遵守した。

しかし、サンジェルマン伯爵は降霊術を実践した疑惑があるという記録や、サンジェルマン伯爵は神出鬼没であったという記録が存在した。

サンジェルマン伯爵は、永遠の若さの秘密を所有している、と主張した。

サンジェルマン伯爵の話は、酔狂な冗談なのか、狂気による思い込みなのか？

サンジェルマン伯爵の家族については、知られていない。

　サンジェルマン伯爵の過去の出来事についての話を聞くと、サンジェルマン伯爵は何世紀も生きている、と誤解してしまう。

　サンジェルマン伯爵は、隠された知については、少ししか話さなかった。

　秘伝伝授をサンジェルマン伯爵に求めると、サンジェルマン伯爵は秘伝伝授について知らないふりをした。

　サンジェルマン伯爵は、弟子を選んだ。

　サンジェルマン伯爵は、サンジェルマン伯爵への無抵抗の服従を弟子に求めた。

　それから、サンジェルマン伯爵は、弟子が招かれている王位、メルキゼデクの王位、ソロモンの王位、秘伝伝授による王位について話した。

　王者は祭司である。

　(祭司は王者である。)

　サンジェルマン伯爵は、「世の光であれ」と話している。

　(マタイによる福音 5 章 14 節「あなた達は、世の光である」)

「もし、あなたの光が、惑星が反射する光に過ぎなければ、(言い換えると、あなたが肉体的な人に過ぎなければ、)あなたは神の目には虚無としか見えないであろう。
私サンジェルマン伯爵は、あなたのために、太陽の栄光が影に成る輝き(、言い換えると、星の光が神の光の影に過ぎなく成る神の光)を約束する。
そうすれば、あなたは、星々の軌道を導けるであろう。
あなたは、星々が統治する国々を統治するであろう」

　前記の、サンジェルマン伯爵から弟子への約束の正しい意味は、真の達道者にとっては、全く理解し易い。

「a History of Secret Societies in Germany(ドイツの秘密結社の歴史)」で、匿名の著者は、一言一句同じではないが、サンジェルマン伯爵から弟子への約束の言葉に似た言葉を記している。

サンジェルマン伯爵から弟子への約束の言葉は、サンジェルマン伯爵と繋がりが有る秘伝伝授の学派についての証拠と成る。

後記は、サンジェルマン伯爵について知られていない詳細である。

17 世紀の終わりに、ボヘミアの都市リトミエルジツェで、サンジェルマン伯爵は生まれた。

サンジェルマン伯爵は、「友であるカバリスト」を意味する「the Companion Kabalist」に似た「Comes Cabalicus」という名前を名乗っていた薔薇十字団員の実子か養子であった。

不運なニコラ ピエール アンリ ド モンフォーコン ド ヴィラール神父は、「ガバリス伯爵」という書名によって、サンジェルマン伯爵の父である薔薇十字団員を笑いものにしていた。

ただし、サンジェルマン伯爵は、父については話さなかった。

サンジェルマン伯爵は、「サンジェルマン伯爵は、迫害される生活を送っていた。そのため、母を導き手として、森の世界をさまよった。7 歳の時の話である」と話している。

しかし、前記の、サンジェルマン伯爵の 7 歳の時の話は、例え話として理解するべきである。

前記の、サンジェルマン伯爵の 7 歳の時の話は、サンジェルマン伯爵が達道者の段階にまで向上した時の秘伝伝授者としての例え話である。

サンジェルマン伯爵の例え話の中の母とは、達道者の知である。

サンジェルマン伯爵の例え話の中の森とは、真の文明と光を欠いた国々を意味する。

サンジェルマン伯爵の原理は、薔薇十字団の原理である。

自国のボヘミアで、サンジェルマン伯爵は秘密結社サン ヤキンを設立したが、後に、秘密結社サン ヤキンで無政府主義の考えが優勢に成ると、サンジェルマン伯爵は秘密結社サン ヤキンから離れた。

秘密結社サン ヤキンは、新しい偽のグノーシス主義者と合流した。

秘密結社サン ヤキンは、サンジェルマン伯爵を破門し、裏切り者としての罪を負わせた。

いくつかの、光に照らされた者についての記録では、「サンジェルマン伯爵はリュエイユ マルメゾンの城の地下牢に閉じ込められた」と、ほのめかしている様に思われる。

他方、ジャンリス夫人は、「サンジェルマン伯爵は、自分の良心に苦しめられ、あの世を恐れ、ホルシュタイン公国で死んだ」と話している。

どちらにしても、サンジェルマン伯爵が突然パリから姿を消したのは確かである。

サンジェルマン伯爵が姿を消した場所は、正確には、誰も知らない。

秘密結社サン ヤキンは、可能な限り、サンジェルマン伯爵の記録を沈黙と忘却のヴェールで覆い隠してしまった。

サンジェルマン伯爵はサン ヤキンという名前で秘密結社を形成した。

秘密結社サン ヤキンは、秘密結社サン ヨアキムに変わった。

秘密結社サン ヤキン、秘密結社サン ヨアキムはフランス革命まで続いた。

フランス革命の時に、他の多数の秘密結社の様に、秘密結社サン ヤキン、秘密結社サン ヨアキムは解散したか、変質した。

中略

薔薇十字団の後継団体である秘密結社サン ヤキンは、薔薇十字団の秘伝伝授の厳しさと位階的な方法を少しずつ改悪してしまい、神秘主義の異端の偽の薔薇十字団に成り下がってしまった。

秘密結社サン ヤキンは、神殿騎士団の魔術的な考えを熱心に取り入れた。

中略

秘密結社サン ヤキンの修行者は、命をささげる様に求められた。

そして、秘密結社サン ヤキンの修行者は、瀉血されて、気絶した。

秘密結社サン ヤキンは、瀉血による気絶を死と呼んでいた。

修行者が意識を回復すると、秘密結社サン ヤキンは、修行者の偽の復活を、爆発的に喜んで、たたえる。

もたらされる多様な感情と、悲しみから一転した輝く様な光景は、修行者の想像力を半永久的に感動させて、修行者を狂わせるか、興奮させる。

多数の修行者は、「復活が自身に本当に起き、最早、自分は死なない」と誤って思い込んでしまった。

前記の様にして、善意よりも頻繁に確実に狂気がもたらす、狂信者、盲信者、疲れを知らない献身者を、隠された計画に役立つ最も恐るべき道具として、秘密結社サン ヤキンの幹部は得ていた。

異端の秘密結社サン ヤキンは、魔術の幻惑にどっぷりつかった、偽のグノーシス主義の団体である。

秘密結社サン ヤキンは、薔薇十字団と神殿騎士団を利用した。

ヤキンという名前は、ソロモンのエルサレム神殿の 2 つの柱に記されたボアズとヤキンという 2 つの名前のうちの 1 つである。

　ヘブライ人のアルファベットである神の文字ヘブライ文字で、ヤキンの最初の文字は、イョッドである。

　また、ヘブライ文字で、神の名前ヤハウェの最初の文字は、イョッドである。

　ヤキンという名前によって、神の名前ヤハウェは、大衆からヴェールで覆い隠されていた。

　そのため、サンジェルマン伯爵は、サン ヤキンという名前を秘密結社に与えた。

　秘密結社サン ヤキンは、魔術の実践に無思慮にも夢中に成った、神知学者の団体であった。

　神秘的なサンジェルマン伯爵についての話を総合すると、サンジェルマン伯爵は、熟練の医者であり、優れた化学者であった。

　サンジェルマン伯爵は、複数のダイアモンドを跡を残さずに融合させる方法を知っていた、と言われている。

　また、サンジェルマン伯爵は、宝石から不純物を除去して、質の悪い欠点の有る宝石を高価な宝石にできた。

　「a History of Secret Societies in Germany(ドイツの秘密結社の歴史)」の愚かな匿名の著者は、サンジェルマン伯爵が、質の悪い宝石を高価な宝石にできたと信じたが、錬金術で黄金を創造したとは信じなかった。

　まるで宝石の錬金によっては黄金を錬金できないかの様に。

　(サンジェルマン伯爵は錬金術で黄金を創造した可能性が高い。)

　「a History of Secret Societies in Germany(ドイツの秘密結社の歴史)」によると、サンジェルマン伯爵は、より大いなる光沢と展延性、柔軟性を銅に与える技術を、発明して、産業科学に残した。

更なる光沢と柔軟性を銅に与える技術の発明は、十分な富をサンジェルマン伯爵に裏づけた。

サンジェルマン伯爵は、科学への功績によって、「私サンジェルマン伯爵は女王クレオパトラと親しかった」、「私サンジェルマン伯爵は『シバの女王』と親しく話している」という嘘をついても、許される。

サンジェルマン伯爵は、善い人であり、女性に親切な人であった。

サンジェルマン伯爵は、幼子を可愛がった。

サンジェルマン伯爵は、美味しい砂糖菓子と見事な遊び道具を幼子にあげて喜ばせた。

サンジェルマン伯爵は、肌は色黒で、背は低かった。

サンジェルマン伯爵は、高価だが良い趣味の服を着ていた。

サンジェルマン伯爵は、心地良い洗練された上品さを育(はぐく)んだ。

サンジェルマン伯爵は、フランス王ルイ 15 世と親しかった、と言われている。

サンジェルマン伯爵は、フランス王ルイ 15 世と、ダイアモンドといった宝石の事に没頭した、と言われている。

遊女と快楽に夢中だったフランス王ルイ 15 世がサンジェルマン伯爵を私的な謁見に招待したのは、フランス王ルイ 15 世が、学問についての真剣さよりも、女々しい好奇心による気まぐれに従ったからである、可能性が高い。

サンジェルマン伯爵は、一時、人気に成った。

サンジェルマン伯爵は、神知学者の法悦を放蕩者の噂話に混ぜる方法を知っていた感じの良い若い長命者であったので、複数のサークルで大人気に成った。

しかし、すぐに、人気は、他の幻惑者に移ってしまった。

大衆の人気とは、すぐに移り変わる物である。

サンジェルマン伯爵が神秘的なアルトタスの正体であると誤って言われている。

アルトタスとは、カリオストロの話による、カリオストロの魔術の師である。

エリファス レヴィは、アルトタスについて話すつもりである。

カリオストロは、アシャラと名乗った。

アシャラはカバラ的な名前である。

後で話す様に、サンジェルマン伯爵がカリオストロの魔術の師であるという推測は根拠が無い誤りである。

サンジェルマン伯爵がパリで人気だった時に、神秘的な達道者であるラスカリスと言う錬金術師が、大衆に近づいて、錬金術の使徒として勧誘していた。

ラスカリスは、「私ラスカリスは、東の大修道院長で、ギリシャの修道院のために御布施を集めている」という嘘を話していたが、事実とは異なる。

ラスカリスは、金銭を求める代わりに、黄金をまき散らして、黄金という足跡を残した。

ラスカリスは、神出鬼没で、姿は千変万化であった。

ラスカリスは、ある場所では老人に成り、別の場所では若者に成った。

ラスカリスは、錬金術で黄金を自らは公には創造しなかった。

しかし、ラスカリスは、弟子に錬金術で黄金を創造させた。

ラスカリスは、弟子の所を去る時に、卑金属に投入する粉を少し、弟子に残した。

ラスカリスの使者、ラスカリスの弟子達が錬金術で卑金属を金に変えたのは、何よりも、確証されている。

錬金術についての学の有る著作で、ルイ フィギエは、錬金術の実在と錬金術の重要性を疑っていない。

特に、自然科学では、何よりも、事実は厳然として不動不変である。

そのため、後記の様に、ラスカリスの弟子達が錬金術で黄金を創造した事実から、結論する必要が有る。

賢者の石は、架空の物ではない。

隠された知の膨大な口伝、多数の古代の神話、全ての時代の大いなる人達の多数の真剣な研究は、賢者の石の実在を十分に確証している。

近代の、ある化学者は、破滅的な方法による銀からの金の抽出に到達して秘密を公表した。

破滅的な方法による銀からの金の抽出では、銀から、銀の価値の約 10 分の 1 以下の金しか抽出できなかった。

コルネリウス アグリッパは、普遍の溶媒に到達できなかった。

しかし、コルネリウス アグリッパは、破滅的な方法による銀からの金の抽出を公表した化学者より幸せであった。

なぜなら、コルネリウス アグリッパは、銀の価値と同等の金を得る事ができた。

そのため、コルネリウス アグリッパは、錬金術で、ただ労苦して、損をしただけであった。

錬金術の応用による自然の大いなる秘密の探求を損と言えるのであればだが。

黄金の魅力によって、絶対の哲学に至る事に成る探求を人々にさせる事が、ラスカリスの活動の目的であった、と思われる。

錬金術を熟考して研究した人達は、必然的に、カバラの知に至る。

18 世紀の秘伝伝授者は、秘伝伝授者の時代が来た、と考えた。18 世紀の異端者は、異端者の時代が来た、と考えた。

秘伝伝授者は、新しい位階制の設立を探求した。

異端者は、全ての権威の転覆を探求した。

異端者は、社会の上流階級の失墜を探求した。

世論を探るために、秘密結社は、偵察、斥候を世界中に派遣した。

秘密結社は、必要に応じて、世論を起こした。

サンジェルマンとラスカリスの後に、メスメルが現れた。

メスメルの後に、カリオストロが現れた。

しかし、サンジェルマン、ラスカリス、カリオストロの団体は全て異なる。

サンジェルマンは、光に照らされた者の神知学者の代表である。

ラスカリスは、錬金術の口伝と結びついた自然研究の博物学の学者の代表である。

カリオストロは、神殿騎士団の代行者である。

そのため、ロンドンの全てのメーソンに宛てた回覧で、カリオストロは「永遠者である神の神殿を建てる時が来た」と書いた。

神殿騎士団の様に、カリオストロは、黒魔術の実践と、死に至る降霊術の知にふけった。

カリオストロは、過去と現在を見通し、未来を予言し、不思議な治療を行い、黄金を創造できるふりをした。

カリオストロは、古代エジプトのメーソンという名前で、新しい儀式を伝えた。

カリオストロは、女神イシスへの神秘的な敬礼を復活させようとした。

カリオストロは、テーベのスフィンクスの nemys の様な、nemys をまとった。

カリオストロは、象徴で飾られた、光に照らされた、一続きの部屋で、夜の集会を主宰した。

カリオストロの巫女は、若い女性であった。

カリオストロは、カリオストロの巫女を鳩(ハト)と呼んだ。

カリオストロは、神託を得るために、水占いによって、カリオストロの巫女を忘我状態にした。

水は、優れた、星の光の伝導体である。

水は、強力な、星の光の反射鏡である。

水は、高度に、星の光を屈折させる媒体である。

海や雲の幻が、水は星の光の伝導体、反射鏡、屈折させる媒体である、と証明している、様に。

カリオストロが、メスメルの知の継承者であり、巫女の霊媒の現象の鍵を所有していた、のは明らかである。

カリオストロは、霊媒者であった。

なぜなら、カリオストロは、神経組織の感受性が超常的に強かった。

そして、カリオストロは、神経組織の感受性の強さに、工夫と確信の蓄積を加えた。

特に、女性の、大衆の誇張と想像が、カリオストロの神経組織の感受性の強さを補強した。

カリオストロは、成功し過ぎた。

「神の様な者カリオストロ」と記されたカリオストロの胸像が、至る所で見られた。

カリオストロへの熱狂と同等の反作用が、当然、予想された。

カリオストロは、神に成った後で、陰謀家、詐欺師、妻の強姦者、悪人に成ってしまった。

ローマの宗教裁判は、カリオストロを終身刑にして、慈悲を見せた。

妻がカリオストロを裏切って売ったという事実が、カリオストロが妻を性的に売っていたという話が事実であると証明している。

カリオストロは、罠にかけられてしまった。

カリオストロは、告発されてしまった。

カリオストロの告発者は、自分に都合の良い様に公表した。

そうしている内に、フランス革命が来た。

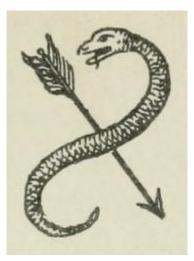
全ての人が、カリオストロを忘れてしまった。

しかし、達道者カリオストロは、魔術の歴史において、重要である。

カリオストロの象徴は、ソロモンの象徴と同じくらい、大きな意味を持っている。

　カリオストロの象徴は、カリオストロが知の無上の秘密に入門していた事を証明している。

　カリオストロの象徴は、アシャラとアルトタスという名前のカバラの文字によって説明すると、大いなる秘密と大作業の主要な特徴を表している。

　カリオストロの象徴は、文字 א、文字アレフを形成している、矢が貫き通されている蛇である。

　カリオストロの象徴は、自発性と受容性の結合の象徴である。

　カリオストロの象徴は、霊と命の結合の象徴である。

　カリオストロの象徴は、意思と、星の光の結合の象徴である。

　カリオストロの象徴の矢は、古代ギリシャの光の神アポロンの矢である。

　カリオストロの象徴の蛇は、古代ギリシャ神話のピュトン、錬金術の緑の竜である。

　文字 א、文字アレフは、つり合わされた統一性を表す。

　カリオストロの象徴は、古代の魔術のタリスマンに多様な形であらわれる。

　ただし、時には、カリオストロの象徴の蛇は、女神ユノーの孔雀に置き換えられている。

　孔雀は、頭は王冠の様に飾られ、尾は多色である。

　孔雀は、分析された光の象徴である。

孔雀は、大作業の鳥である。

孔雀の羽は、金色に輝いている。

時には、カリオストロの象徴に似た象徴では、華やかな色の孔雀の代わりに、白い子羊が描かれている。

白い子羊、若い太陽の牡羊は、十字架を持っている。

フランスの都市ルーアンの紋章に未だに見られる様に。

孔雀、白い子羊、牡羊、蛇は、受容的な原理と女神ユノーの王笏という、同一の象徴的な意味を持っている。

十字架と矢は、自発的な原理、意思、魔術的な作用、溶媒の凝固、錬金で卑金属に投入する粉による気化し易いものの固定、火の土への浸透を意味する。

自発的な原理と受容的な原理の結合が、普遍のつり合い、大いなる秘密、大作業、ボアズとヤキンのつり合いである。

カリオストロの象徴に記されている頭文字「L.P.D.」は、自由、力または能力、義務を意味する。

カリオストロの象徴に記されている頭文字「L.P.D.」は、光、つり合い、密度を意味する。

カリオストロの象徴に記されている頭文字「L.P.D.」は、法、原理、正義または権利を意味する。

フリーメーソンは、「L∴D∴P∴」という形で、頭文字「L.P.D.」の順序を変えた。

フリーメーソンは、「L∴D∴P∴」と象徴的な橋に記して、「L∴D∴P∴」をフランス語の「Liberte de Penser」、「考える自由」という言葉に翻訳した。

ただし、フリーメーソンは、「L∴D∴P∴」と象徴的な橋に記して、「L∴D∴P∴」をフランス語の「Liberte de Passer」、「渡る自由」という言葉に、入門していない人々には解釈させた。

カリオストロの告発の記録では、カリオストロが「L.˙.D.˙.P.˙.」を「百合を足の下に踏んで圧倒しなさい」または「百合(が紋章であるフランス王家)を足の下に踏みにじりなさい」という意味に解釈していたと尋問によって引き出したと言われている。

剣で茎(くき)が切られた百合が描かれた、「報復は(百合という)収穫をもたらす」と記された、16 世紀か 17 世紀の偽のメーソンのメダルは、偽のメーソンが「L.˙.D.˙.P.˙.」を「百合(が紋章であるフランス王家)を足の下に踏みにじりなさい」という意味に解釈していた証拠かもしれない。

カリオストロが名乗っていた、アシャラという名前は、カバラ的に אשאראת と書く。

אשאראתは、三重の統一を表す。

אשは、原理と原因の単一性を表す。

ארは、命の単一性と、復活させる運動の永遠性を表す。

אתは、絶対の総合による目的の単一性を表す。

カリオストロの話による、カリオストロの魔術の師の名前「アルトタス」は「アル トート アス」という 3 つの言葉で出来ている。

「アル アス」をカバラ的にヘブライ語的に逆に読むと「サラ」に成る。

「サラ」は「使者」を意味する。

そのため、「アルトタス」、「アル トート アス」は「古代エジプト人の神の使者であり使者の神であるトート」を意味する。

誰よりも、カリオストロは、魔術の師として、トートを評価していた。

(トートはエノクである。)

また、カリオストロは「大いなるコプト」と名乗っていた。

(コプトはエジプトのキリスト教徒を意味する。)

カリオストロの教えには、心の復活と肉体の復活という二重の目的があった。

後記は、大いなるコプトであるカリオストロの心の復活の教えの言葉である。

「モーセと共に、シナイ山を登りなさい。

ゴルゴタの丘を登りなさい。

ペレグと共に、イスラエルのタボル山に登りなさい。

エリヤと共に、イスラエルのカルメル山の上に立ちなさい。

山の頂上に、あなたの幕屋を建てなさい。

幕屋を 3 つに分けなさい。

ただし、幕屋の 3 つの部分をつなげなさい。

幕屋の中央は、3 階建てにしなさい。

1 階は、(唯一の)食堂にしなさい。

2 階は、唯一の円形の部屋にしなさい。

2 階の部屋の壁に沿って、12 のベッドを置きなさい。

2 階の部屋の中央に、1 つのベッドを置きなさい。

2 階の部屋を眠りと夢の場としなさい。

3 階は、唯一の正方形の部屋にしなさい。

3 階の部屋の各壁に 4 つの窓を作りなさい。

(3 階の部屋に合計 16 の窓を作りなさい。)

3 階の部屋を光の場としなさい。

40 日間、昼は、3 階の部屋で、独りで、祈りなさい。

40 日間、夜は、12 使徒の共同寝室である 2 階の部屋で、眠りなさい。

そうすれば、あなたは、7 つの霊の署名と、新品の羊皮紙に描かれた五芒星を受け取るであろう。

受ける者の他には誰も知らない、象徴である。

(ヨハネの黙示録 2 章 17 節『受ける者の他には誰も知らない』)

12 使徒のうち最も若い使徒ヨハネの黙示録に記されている、白い小石に記されている、秘密の象徴である。

(ヨハネの黙示録 2 章 17 節『白い小石には、受ける者の他には誰も知らない、新しい名前が記されている』)

神の火が、あなたの心を照らすであろう。

そして、あなたの肉体は、幼子の肉体と同じく、汚(けが)れが無く成るであろう。

あなたの洞察力は、無制限に成るであろう。

あなたの力は、大いなる物に成るであろう。

あなたは、不死の始まりである完全な休息に入るであろう。

傲慢無しに、真に、あなたは『私は存在する神である』と言えるであろう」

前記の、謎の、カリオストロの心の復活の教えの言葉は、「心の復活に到達するには、超越的なカバラを学び、理解し、実現する必要が有る」事を意味している。

1 階、2 階、3 階は、物質的な生、哲学的な光、宗教的な望みの結合を意味する。

12 使徒は、大いなる啓示者である。

12 使徒の象徴を理解する必要が有る。

7 つの霊の署名は、大いなる秘密の知を意味する。

カリオストロの心の復活の教えの言葉は、全て、例え話である。

そのため、メーソンにとってエルサレムに神殿を建てる事は課題であるわけではない、のと同様に、3 階建ての家を建てる事は課題であるわけではない。

中略

カリオストロは、裁判官たちを前に、キリスト教の位階制の最高指導者として法王を敬礼するカトリックであると信仰告白して、断固とした態度と落ち着きを見せた。

　カリオストロは、隠された知については、謎の言葉で話した。

　そして、裁判官がカリオストロの謎の言葉が不条理で理解できないと責めると、カリオストロは「裁判官には判断のための基礎が無い」と裁判官に話した。

　裁判官は、カリオストロの言葉で不快に成って、カリオストロに七つの大罪、七つの死に至る大罪を話す様に命令した。

　カリオストロは、「色欲、金銭への貪欲、嫉妬、暴食、怠惰」と話した。

　裁判官は、「カリオストロ、傲慢と憤怒を言い忘れているぞ」とカリオストロに話した。

　後記の様に、被告カリオストロは話した。

「失礼。

私カリオストロは、傲慢と憤怒を言い忘れたわけではないのですよ。

私カリオストロは、あなたたち裁判官を尊重して、あなたたち裁判官が更に不快に成らない様に、傲慢と憤怒を言わなかったのですよ」

　カリオストロは、死刑を宣告された。

　後に、カリオストロへの刑は、終身刑に変わった。

　地下牢で、カリオストロは、司祭に懺悔したいと求めた。

　そして、カリオストロは、カリオストロに姿と背の高さが似た司祭を懺悔の相手に指名した。

　聴罪司祭がカリオストロの所を訪れ、司祭(の服をまとった人)が出て行くのが見かけられた。

　数時間後、看守が、カリオストロの服を着た絞殺死体を見つけた。

　カリオストロが指名した司祭は、姿を消した。

大いなるコプトであるカリオストロは、(司祭に成りすまして脱獄して、)アメリカに現在いて、死者の霊がテーブルを叩いて伝言すると信じている人たちの、姿を見せない最高神官長をしている、と好事家は話している。

第6巻 第3章 カゾットの予言

18世紀に、マルティネス ド パスカーリは、マルティニスト会という知られざる哲学者の団体を設立した。

ルイ クロード ド サンマルタンは、マルティニスト会を継続させた。

マルティニスト会は、真の秘伝伝授の、最後の達道者達が組織した団体である、と思われる。

ルイ クロード ド サンマルタンは、タロットの古代の鍵を知っていた。

言い換えると、ルイ クロード ド サンマルタンは、神のアルファベットであり祭司だけの象徴であるタロットの神秘を知っていた。

ルイ クロード ド サンマルタンは、多数の非常に興味深いpantacleを残した。

ただし、ルイ クロード ド サンマルタンのpantacleは、石や金属に彫刻された事は無い。

エリファス レヴィは、紙に記されたルイ クロード ド サンマルタンのpantacleの写しを所有している。

ルイ クロード ド サンマルタンのpantacleの1つは、大作業の口伝の鍵である。

ルイ クロード ド サンマルタンは、大作業の口伝の鍵であるpantacleを、富の鍵と成るので、地獄の鍵と呼んだ。

マルティニスト会は、最後のキリスト教徒の団体であり、光に照らされた者の団体である。

マルティニスト会は、高名なカゾットに秘伝伝授した。

すでに話した様に、18世紀に、真の光に照らされた者から、分派の異端の偽の光に照らされた者が現れた。

真の光に照らされた者は、自然と知についての口伝の保管者であり、位階制を復活させる事を望んだ。

偽の光に照らされた者は、反対に、大いなる秘密を大衆に口外して、全てのものを破壊して引き下げて、王者と祭司が世界に存在できない様にする事を望んだ。

ある偽の光に照らされた者たちは、野心家や悪人であり、世界の残骸の上に自分の王座を建てようとした。

他の、偽の光に照らされた者たちは、だまされた人、便乗者や愚者である。

真の光に照らされた者は、深淵に進む社会を失望して見ていた。

真の光に照らされた者は、無政府主義による混乱による恐怖を予見した。

フランス革命は、後に、フランス革命の指導者ピエール ヴェルニヨの死んでいる精神の前に、「我が子を食らうサトゥルヌス」という暗い絵で表れる様に運命づけられていた。

しかし、すでに、カゾットの予言の夢の中で、フランス革命は、完全武装して表れていた。

ある夜、カゾットは、未来のジャコバン派の盲目的な手先に囲まれていた。

カゾットは、「最強の者と最弱の者は死刑に成り、最も熱狂的な者は自殺する」と、ジャコバン派の死を予言した。

カゾットの予言は、その時は、暗い冗談であると思われた。

しかし、カゾットの予言は、実現した。

実際は、カゾットの予言は、可能性の計算に過ぎない。

しかし、カゾットの予言は、厳密で正確であった。

なぜなら、カゾットの予言は、すでに必然の結果に成っていた可能性を計算していた。

ラ アルプは、カゾットの予言に感銘を受けた。

ラ アルプは、カゾットの予言を、誇張して、より不思議に見せた。

例えば、カゾットが、自殺を予言した人がカミソリで喉(のど)を切った正確な回数を予言したという嘘をラ アルプは書いた。

ラ アルプといった類(たぐい)の詩的な誇張は、超常的な話の話し手には、許しても良いかもしれない。

ラ アルプなどの虚飾は、虚偽や嘘というよりは、実質的には、表現や詩作である。

自然によって不平等である人々に、絶対的な自由を与える事は、社会的な争いを用意する事である。

肉欲は先天的な物である。

大衆の無思慮な肉欲を抑えるべき人々が、愚かにも大衆の無思慮な肉欲を解放すると、最初に大衆の無思慮な肉欲に食い殺される羽目に成る事は、予見するのに大いなる魔術師に成る必要は無い。

なぜなら、大胆な熟練の猟師が射撃や罠で仕留めるまで、動物的な肉欲は相互に餌食にして苦しめ合う運命である。

カゾットは、マラーを予見した。

マラーが反作用と独裁者を予見した様に。

カゾットは、いくつかの些細な文学作品の著者として初めて公にあらわれた。

カゾットの秘伝伝授は、「悪魔の恋(人)」という恋愛物語のおかげである、と言われている。

疑い無く、カゾットの「悪魔の恋(人)」は魔術の直感に満ちている。

性欲は、人生における最高の試練である。

達道者の考えの真の光の下で、カゾットの「悪魔の恋(人)」では、性欲が描かれている。

想像力の奴隷に成っている人々は、肉欲に夢中に成り愚かに成って勝てない。

肉体的な性欲は、魅力的な外見を装った、死であり、誕生によって刈り入れた者を復活させようとする。

肉体的な愛の女神ウェヌスは、遊女の様な化粧をし服を着た、死である。

キューピッドは、肉体的な母である愛の女神ウェヌスの様に、破壊者であり、肉体的な愛の女神ウェヌスのために犠牲者を誘う。

遊女である肉体的な愛の女神ウェヌスは、満足したら、仮面を脱いで死としての正体を現して餌食を求める。

そのため、教会は、結婚を神聖化して誕生を擁護する。

そして、教会は、性欲による乱行を容赦無く責めて、放蕩が死をもたらすと真相を暴露する。

愛着されている女性が、実は天使ではないと、愛着する男性の腕の中で義務を犠牲にして不死を獲得して、最後には女性の動物的な利己主義の全ての醜悪さを男性の前にさらして、男性を酷使し殺すストリゲスに成る。

「悪魔の恋(人)」の犠牲者には災いが有る!

悪魔の恋人ビヨンデッタの淫らな愛撫に惑わされる人々には 3 倍の災いが有る!

速やかに、悪魔の恋人ビヨンデッタの女性としての優美な容貌は、カゾットの恋愛物語「悪魔の恋(人)」の最後に悲劇的に現れるラクダの頭に変わってしまうであろう。

カバリストによると、リリスとナヘマーという 2 人のストリゲスの女王が地獄にいる。

リリスは、中絶の母である。

ナヘマーは、死に至らせる殺人の美女である。

神が用意した妻を男性が裏切ると、男性が不妊な肉欲の乱行にふけると、神は、正統な花嫁を取り上げて男性をナヘマーの抱擁に引き渡す。

ナヘマーは、必要に応じて、処女の全ての魅力や、魅惑的な女性の魅力を装う事ができる。

ナヘマーは、父親の心を変質させ、そそのかして、父親に子へ抱いている全ての義務を捨てさせてしまう。

ナヘマーは、既婚者を離婚させてしまう。

ナヘマーは、神が清めた人に、神を冒涜する結婚をさせてしまう。

ナヘマーが妻の役割を装っても、ナヘマーは簡単に正体を現す。

なぜなら、結婚日に、ナヘマーは、禿げた頭で現れる。

髪は、女性の謙遜、慎みのヴェールである。

しかし、結婚日には、ナヘマーには髪が禁じられている。

そして、ナヘマーは、生存への絶望と嫌悪の雰囲気を装う。

ナヘマーは、自殺を説く。

ナヘマーは、ナヘマーと共存しようとする男性を、地獄の星を男性の両目の間に記して、見捨てる。

さらに、「ナヘマーは、母に成れるかもしれないが子を養わない。なぜなら、ナヘマーは、子を死に至らせる姉リリスに食わせる」とカバリストは話している。

(リリスは、ナヘマーの姉である、という説が存在する。)

「魂の変革」についてのヘブライ語の文書、Rosenroth による「裸のカバラ」に収集した文書、ソタというタルムードの注釈に存在する、リリスとナヘマーについてのカバラの例え話を、「悪魔の恋(人)」の著者カゾットは、知っているか、直感で見抜いているに違い無かった。

そのため、「悪魔の恋(人)」を公表後に、「秘密裁判所」の使者の口伝の様な黒衣をまとった、マントをまとった見知らぬ人、マルティニストが、カゾットの所を訪れた、と言われている。

マルティニストは、カゾットが理解できない、合図をした。

それから、マルティニストは、本当に、カゾットが秘伝伝授者であるか、質問した。

カゾットは秘伝伝授者ではないと答えた。

　マルティニストは、暗い表情を和らげて、後記の様に、話した。

「あなたカゾットが、私達マルティニスト会の秘密の不貞な器ではなく、知のために用意された選ばれた器である、と私は理解しました。
本当に、あなたカゾットは、人の肉欲や、汚れた霊を圧倒したいと望みますか？」

　カゾットは、興味を示した。

　マルティニストと、カゾットは、長時間、話し合った。

　マルティニストと、カゾットが、多数の会合を持つ発端と成った。

　最後に、「悪魔の恋(人)」の著者カゾットは、マルティニスト会に入門する様に求められた。

　カゾットは、秩序と権威の信心深い支持者に成った。

　(

　カゾットは、マルティニスト会に入門した。

　カゾットは、秘伝伝授者に成った。

　)

　また、結果的に、カゾットは、無政府主義者の恐るべき敵に成った。

　すでに話した様に、カリオストロの心の復活の教えの言葉という例え話によると、心の復活のために登る必要が有る山が存在する。

　心の復活のために登る必要が有る山は、イスラエルのタボル山の様に光で白いか、シナイ山やゴルゴタの丘の様に火と血で赤い。

　後記の様に、「光輝の書」に記されている。

　白色と赤色という２つの色の総合が存在する。

白色は、平和と精神的な光の色である。

赤色は、戦いと物質的な命の色である。

ジャコバン派は、血の旗を広げようと企んだ。

ジャコバン派の祭壇は、赤い山の上に建てられた。

カゾットは、光の旗の下に入った。

カゾットの神秘の幕屋は、白い山の上に建てられた。

血に汚れたものが一時的に勝利して、カゾットを告発した。

カゾットの娘エリザベートは、女性の英雄である。

カゾットの娘エリザベートは、アベイの牢獄で起きた九月虐殺からカゾットを救った。

カゾットの娘エリザベートの名前には、貴族を表す接頭辞が付けられていなかった。

そのため、カゾットの娘エリザベートは、友愛の恐るべき乾杯無しで済んだ。

友愛の恐るべき乾杯は、不滅の名声をマリー モリーユ ソンブレイユ嬢の親孝行に与えた。

マリー モリーユ ソンブレイユ嬢は、革命派に、父であるソンブレイユ侯爵が王党派ではない事を証明するために処刑された王党派の貴族の血を飲み干す様に言われて、飲み干した。

カゾットは、自身の死を予言した。

なぜなら、良心が、カゾットに、最後まで無政府主義による混乱と戦わせずにはおかなかった。

カゾットは、良心に従った。

カゾットは、再び逮捕されて、革命派の裁判所に連行された。

カゾットの死刑を宣告した革命派の裁判所の長は、最後までカゾットに相応しくカゾットを犠牲にする事を誓い、カゾットが生きてきた様に気高く死ねる様に誓うという、カゾットへの尊重と後悔に満ちた誓いを話した。

　カゾットの死刑を宣告した革命派の裁判所の長の逸話は、フランス革命が、内戦であった、事を表す。

　また、フランス革命では、同胞は、相互に死刑を宣告し合う時に、挨拶を交わした。

　なぜなら、フランス革命では、双方に信念による誠実さが存在していた。

　そのため、フランス革命では、双方に尊敬される資格が有った。

　正しいと思うもののために死ぬ人は、だまされていても、英雄である。

　フランス革命の、血まみれの赤色の山の無政府主義者は、他人を死刑にする時だけ大胆であったのではなく、自身が死刑に成る時も青白く成らずに大胆であった。

　神と後世がフランス革命の無政府主義者を裁きます様に。

第 6 巻 第 4 章 フランス革命

かつて、世界には、自分の性質が臆病であり邪悪である事を発見して嫌悪した人ルソーがいた。

ルソーは、自身への嫌悪を社会全体のせいにした。

ルソーは、自然への不適切な愛好者であった。

自然は、怒って、天罰としてルソーを雄弁で武装させた。

ルソーは大胆にも、知に対して、無知が正しい物であると誤って主張した。

ルソーは、文明に対して、未開の状態が正しい物であると誤って主張した。

ルソーは、全ての社会的な高みに対して、全ての下層的な生活の深みが正しい物であると誤って主張した。

直感的に、大衆は狂人ルソーに石を投げた。

(実際に大衆はルソーに石を投げた。)

しかし、ルソーは、偉人に喜んで受け入れられた。

ルソーは、女性にもてはやされた。

ルソーは、大いに成功したので、反発によって、人間嫌いを増した。

ルソーは、怒りと嫌悪から、最終的に、自殺行為をして終わった。

ルソーの死後、世界は、ルソーの妄想の実現の試行錯誤によって震えた。

神殿騎士団の総長ジャックド モレーの死から常に社会体系の破壊を誓ってきた、偽メーソンの、沈黙していた陰謀家は、ジュネーブの狂信者ルソーを守護聖人として、偽のメーソンのロッジを Platriere 通りのルソーが住んでいた家に設立した。

ルソーが住んでいた家の、偽のメーソンのロッジは、革命の宣伝の中心と成った。

王家の血筋の、ある王族は、ルソーが住んでいた家の、偽のメーソンのロッジに来て、神殿騎士団を滅ぼしたフランス王フィリップ 4 世の後継者の死を、神殿騎士団の墓に誓った。

18 世紀の貴族が大衆を堕落させた。

18 世紀の貴族は、イギリスの「摂政時代」の酒宴が起源である、平等への熱狂にとらわれていた。

18 世紀の貴族は、快楽のために、低い身分の人と交際した。

18 世紀の宮廷の貴族では、スラムの言葉を話す娯楽が流行った。

摂政が総長であった、と神殿騎士団の古文書には記されている。

総長である摂政の後継者は、メーヌ公であるルイ オーギュスト ド ブルボン、ブルボン コンデ家とブルボン コンティ家の王族たち、デ コセ ブリサック公であった、と神殿騎士団の古文書には記されている。

カリオストロは、カリオストロが古代エジプトのメーソンという名前で呼んでいた儀式の会員数を増やすために、中流階級から援助者を集めた。

全ての人が、衰退期の堕落した文明を破壊に駆り立てる、秘密の抗えない衝動に従う事を望んでいた。

フランス革命は、カゾットが予見した様に、まるで目には見えない手に駆り立てられるかの様に、出来事が相互に積み重なっていって、速やかに進行した。

不適切なフランス王ルイ 16 世は、最悪の敵、偽のメーソンに導かれていた。

偽のメーソンは、ルイ 16 世のパリからの卑劣な逃亡計画を手配してから台無しにして、ヴァレンヌ事件を引き起こした。

偽のメーソンは、ヴァレンヌ事件の前のパリの女性達がヴェルサイユ宮殿に乱入して食糧を要求する事件に関与したり、ヴァレンヌ事件の後の「8 月 10 日事件」に関与したりした、様に。

至る所で、偽のメーソンは、フランス王ルイ16世の評判を地に堕ちさせた。

偽のメーソンは、大衆の怒りを助長させるために、何世紀も用意してきたフランス王の処刑という悲惨な出来事を確実にするために、フランス王ルイ16世を大衆の怒りから何度か救う事さえした。

フランス王の処刑が、神殿騎士団の逆恨みによる犯行の完成には必要であった。

フランス革命戦争の内戦的な圧力で、「国民議会」は、「8月10日事件」を起こして王権を停止した。

「国民議会」は、フランス王一家をリュクサンブール宮殿に収監する事を提案した。

しかし、偽のメーソンの秘密の会議は、フランス王一家をタンプル塔、テンプル塔に収監する様に命令した。

(フランス語で神殿騎士団、テンプル騎士団をタンプル騎士団と発音する。)

失墜したフランス王一家は、タンプル塔、テンプル塔に収監された。

タンプル塔、テンプル塔は、神殿騎士団の本拠地であった。

タンプル塔、テンプル塔は、天守塔と小塔と共に、神殿騎士団の不変の記憶によるフランス王の処刑を待って、残っていた。

フランス王ルイ16世は、タンプル塔、テンプル塔に収監された。

フランスのキリスト教の精鋭は、国外追放されたか、アベイの牢獄に収監された。

パリのセーヌ川のポンヌフ橋の上では、大砲が轟いていた。

国が危険である、と主張する脅迫するポスターが貼られていた。

偽のメーソンの、見知らぬ者たちが九月虐殺を計画した。

長い髭(ひげ)に覆われた醜い巨人の様な大男の偽のメーソンが、虐殺する聖職者がいる場所では、どこでも見かけられた。

長髭(ながひげ)の醜い大男の偽のメーソンは、残酷な冷笑を浮かべて、「見ろ」と叫んだ。

「この一撃は、アルビジョア派と呼ばれたカタリ派とヴァルド派からの報復を代行した物だ。
この一撃は、神殿騎士団からの報復を代行した物だ。
この一撃は、プロテスタントへの『サン バルテルミの虐殺』に対する報復を代行した物だ。
この一撃は、プロテスタントによる『カミザールの乱』、『セヴェンヌ戦争』の亡命者からの報復を代行した物だ」

　長髭の醜い大男の偽のメーソンは、そばにいた聖職者を、絶え間無く、サーベル、斧、棍棒で打った。
　長髭の醜い大男の偽のメーソンの武器は、壊れると、新しい武器に交換された。
　長髭の醜い大男の偽のメーソンは、頭から足まで、全身、血まみれに成った。
　長髭の醜い大男の偽のメーソンは、神聖なものを冒涜しながら、血でしか体を洗わない事を誓った。
　長髭の醜い大男の偽のメーソンが、天使の様なマリー モリーユ ソンブレイユ嬢に、父であるソンブレイユ侯爵が王党派ではない事を証明するために処刑された王党派の貴族の血を飲み干す様に言った。
　タンプル塔、テンプル塔で、天使の様なマダム エリザベートと呼ばれたエリザベート フィリッピーヌ ド フランスが涙を流して祈っていた。
　エリザベート フィリッピーヌ ド フランスは、神からのフランス王家への許しを得るために、自分と 2 人の子の受難を神に捧げた。
　処女の殉教者エリザベート フィリッピーヌ ド フランスの全ての苦しみと涙が、ポンパドゥール夫人やデュ バリー夫人といった遊女とのルイ 15 世の愚かな快楽への罪をつぐなうのに必要であった。

ジャコバン派の「ジャコバン」という名前は、パリのジャコバン修道院を本部に選ぶ前からの物である。

　ジャコバン派の「ジャコバン」は、神殿騎士団の総長ジャックド モレーやジャン ジャック ルソーの「ジャック」という名前に由来する。

　神殿騎士団の総長ジャックド モレーは不吉の象徴であり、ジャン ジャック ルソーは革命をもたらした。

　フランスの聖像破壊者は、常に、「ジャック」と呼ばれてきた。

　哲学者ジャン ジャック ルソーの致命的な名声はジャックリーの乱を用意した。

　哲学者ジャン ジャック ルソーは、ヨハネ派をかたる異端の偽のメーソンの血まみれの陰謀のきっかけと成った。

　フランス革命の主導者である偽のメーソンは、神殿騎士団の総長ジャックド モレーの墓に、フランスの王座とキリスト教の祭壇の破壊を密かに誓っていた。

　フランス王ルイ 16 世が処刑された時、報復と殺人の象徴である「さまよえるユダヤ人」である、長髭（ながひげ）の醜い大男の偽のメーソンは、処刑台に昇って、呆然としている観衆を前に、両手でフランス王の血をすくい取って大衆の頭上に投げて、「フランス国民よ、私は、『ジャック』と『自由』の名前において、フランス国民を洗礼する」という恐るべき言葉を叫んだ。

　フランス王ルイ 16 世の処刑で、偽のメーソンの目的の半分は終わった。

　偽のメーソンの残り半分の目的として、法王に対して、神殿騎士団である偽のメーソンの軍団は、全精力を傾けた。

　教会からの略奪、神聖なものへの冒涜、行列祈祷式を笑いものにする偽の行列祈祷式、パリの首都大司教管区における理性の宗教の開始は、法王への攻撃への主な兆候であった。

　パレ ロワイヤルで、法王ピウス 6 世の肖像画が焼かれた。

フランス第一共和政の軍団が、ローマへの進軍の用意をした。

神殿騎士団の総長ジャックド モレーたちは殉教者であった、かもしれない。

しかし、神殿騎士団の総長ジャックド モレーたちの殺害への逆恨みによる犯行者は、神殿騎士団の総長ジャックド モレーたちの記憶を汚した。

フランス王ルイ 16 世の処刑によって、フランス帝政は、復活した。

法王ピウス 6 世の監禁によって、教会は勝利した。

フランスのヴァランスで、法王ピウス 6 世は、監禁されて、疲労と苦労によって死んだ。

一方、神殿騎士団の無価値な後継者である偽のメーソンは、フランス革命という惨事をもたらした勝利に飲み込まれて、滅んだ。

当時の聖職者の状態を特徴する兆候的な濫用や、大金持ちの不適切さが必然的に伴う危険な醜聞が、あった。

しかし、金持ちが徐々に消えると、超越的な徳が戻ってきた。

黙示録「メトディオスの予言書」では、フランス革命という一時的な惨事と、フランス革命後の霊的な精神的な勝利が、予言されている。

魔術の歴史 第 1 巻 第 1 章で「メトディオスの予言書」について話した事がある。

エリファス レヴィは、1527 年に印刷された、不思議な絵で飾られた、ブラック レター書体の写本を所有している。

「メトディオスの予言書」には、神聖なパンと赤ワインを豚に投げ与えている、祭司に不相応な聖職者が描かれている。

「メトディオスの予言書」には、聖職者を殺し神聖な器を聖職者の頭で破壊している反乱した大衆が描かれている。

「メトディオスの予言書」には、軍人の手で監禁された法王(ピウス 6 世)が描かれている。

「メトディオスの予言書」には、一方の手でフランスの旗(はた)をかかげ、他方の手で剣をイタリアに向けている、王冠をかぶった(神殿騎士団である偽のメーソンの)騎士が描かれている。

「メトディオスの予言書」には、2 羽のワシと、フランス王家の百合の紋章フルールド リスを二重に胸につけ、王冠をかぶっている、鶏が描かれている。

2 羽のワシのうち 1 羽は、上半身がワシであり下半身がライオンであるグリフォンと、一角獣ユニコーンと共に、巣からハゲタカを追い払っている。

「メトディオスの予言書」には、他にも不思議な絵が多数、存在する。

超常的な「メトディオスの予言書」と比較できるのは、イタリアのカラブリア州の、フィオーレのヨアキム修道院長の著書「全ての教皇に関する預言」の挿し絵入りの版である。

フィオーレのヨアキムの著書「全ての教皇に関する預言」では、反キリストの到来までの、全ての未来の法王の肖像が、法王の任期の象徴と共に、描かれている。

フィオーレのヨアキムの著書「全ての教皇に関する預言」は、未来が過去の事の様に描かれた、不思議な未来の年代記である。

フィオーレのヨアキムの著書「全ての教皇に関する預言」は、出来事がくり返されている、連続した世界を暗示している、様に思われる。

そのため、未来のものの予知は、過去に失われた映像の呼び出しである、と思われるほどである。

第 6 巻 第 5 章 霊媒狂による現象

前略

もし、意思による驚異的な努力によって、自身を別人であると想像できれば、別人の心の奥底の思考をすぐに知るであろうし、別人の最も秘密の記憶を引き寄せるであろう、とパラケルススは話している。

思考が類似するほどの会話をした後に、思考が類似するほどの会話をした相手の秘密の人生の記憶を夢で見る時がある。

以下略

第6巻 第6章 ドイツの光に照らされた者

前略

自然な手段は、驚異現象への道を舗装するが、驚異現象自体は動作させせない。

最も頑迷な懐疑者を驚かせ惑乱させる事が起きたのである。

さらに、シュレプファーは、幻灯機もヴェールも利用しなかった。

ただし、シュレプファーは、来た人たちに、用意した一種のパンチを飲ませた。

シュレプファーが霊媒であらわした霊的なものは、アメリカ人の霊媒師ホームが霊媒であらわした霊的なものと、似ている。

言い換えると、シュレプファーとアメリカ人の霊媒師ホームが霊媒であらわした霊的なものは、不完全に物質化していた。

シュレプファーとアメリカ人の霊媒師ホームが霊媒であらわした霊的なものは、触れようとした人に、肌がゾッとする、電気の混乱に似た、不思議な感じを引き起こした。

しかし、出現した霊的なものに触れようとする前に手を濡らすと、肌がゾッとする、電気の混乱に似た、不思議な感じは起きなかった。

シュレプファーは、誠実に霊媒を行っていた。

アメリカ人の霊媒師ホームが誠実に霊媒を行っていた様に。

シュレプファーは、呼び出した霊的なものが実際の霊であると誤って思い込んでいた。

シュレプファーは、呼び出した霊的なものが実際の霊であるか疑い、自殺してしまった。

中略

神秘主義は、最も危険な物である。

なぜなら、神秘主義がもたらす熱狂は、人の知の全ての組み合わせを妨げる。

社会を転覆させる者は、常に、狂人である。

偉大な政治家が予見できない物は、狂人の自暴自棄の行為である。

エフェソスの月の女神ディアナの神殿の建設者は、永遠の栄光を期待したが、ヘロストラトスの様な記録に残るための放火者を考慮に入れなかった。

ジロンド派は、マラーを予見できなかった。

世界のつり合いを変えるのに必要なものは何か？

パスカルは、クロムウェルに関連して、「世界のつり合いを変えるのに必要なものは何か？」と問われた。

パスカルは、「世界のつり合いを変えるのに必要なものは、独りの人の内臓に運任せに形成された砂粒である」と答えた。

些細な原因によって、大きな出来事が起こる。

文明という神殿が崩壊するのは、常に、神殿の柱を揺さぶったサムソンの様な、独りの盲目な人の行為のせいである。

中略

知の仲介によってのみ、自然を知る事ができる。

中略

ドイツには、魔術の叙事詩「ファウスト」という巨人的な劇文学と、サバトの大いなる詩人ゲーテがいた。

「ファウスト」は、人の知という完成されたバベルの塔である。

ゲーテは、魔術の哲学の全ての神秘に入門していた。

若い時に、ゲーテは、魔術の儀式を実践さえした。

魔術の儀式の実践という大胆な試みの結果は、一時は、生への深い嫌悪と、死へ向かう強い傾向をゲーテにもたらした。

事実、ゲーテは、「若きウェルテルの悩み」という恋愛物語を書いて、本の中で自殺した。

「若きウェルテルの悩み」は、死を説く危険な作品であり、非常に多数の心酔者がいた。

それから、ゲーテは、失望と生への嫌悪に勝利して、平和と真理の静かな領域に入って、「ファウスト」を書いた。

「ファウスト」は、ルカによる福音 15 章 11 節から 32 節の放蕩息子の例え話という美しい逸話の 1 つに対する、大いなる注釈である。

「ファウスト」は、反抗的な知を経て罪へ、罪を経て労苦へ、労苦を経て罪のつぐないと調和的な知へ入門する話である。

ファウストは、人の知の代表である。

人の知ファウストは、従者として、悪の霊メフィストフェレスを利用する。

悪の霊メフィストフェレスは、人の主に成る事を望んでいる。

人の知ファウストは、想像による不法の性欲の全ての快楽をあきらめ尽くす。

人の知ファウストは、愚かな酒宴を通り抜ける。

人の知ファウストは、無上の美の魅力に引き寄せられて、幻滅の深淵から、概念の高みへ、不滅の美の高みへ昇る。

中略

目に見える光が存在する限り、つり合う影が存在するであろう。

休止は、類似の正反対の運動がつり合わせないと、幸せには成らない。

自由な祝福が存在する限り、神への冒涜は可能であろう。

天国が存在する限り、地獄は存在するであろう。

つり合いは、自然の不変の法であり、正義の永遠の意思である。

正義の別名は、神である。

第 6 巻 第 7 章 「フランス第一帝政」と「フランス復古王政」

　ナポレオンは、世界を不思議で満たした。

　ナポレオン自体が、世界で最大の不思議であった。

　ナポレオンの妻、皇后ジョゼフィーヌは、クレオール人であるため、好奇心旺盛であり信じ易かったので、占いなどに誘惑された。

　少女時代にジョゼフィーヌは放浪の民ロマの老女の占い師に「女王以上の存在に成る」と皇后に成る栄光を予言された、と言われている。

　ジョゼフィーヌは皇帝ナポレオンの勝利の女神、幸運の女神であった、と田舎の大衆は未だに信じている。

　事実、ジョゼフィーヌは優しく謙虚な助言者であった。

　仮に、ナポレオンがジョゼフィーヌの忠告に常に耳を傾けていれば、ジョゼフィーヌは多数の危険からナポレオンを救ったであろう。

　しかし、運命が、というよりは、神意が、ナポレオンを進ませた。

　ナポレオンの身に起こる事は、事前に決まっていた。

　後記は、1524 年に印刷された、編者不明のフランスの予言集「ミラビリス リベル(驚異の書)」にある、St Césaire の予言とされているが、Jean de Vatiguerro の署名がある予言である。

「教会は、冒涜されるであろう。

大衆の信心は、止むであろう。

ワシは、世界中を飛んで、多数の国々を圧倒するであろう。

西で最大の王、最高の王は、超自然的な敗北の後に、敗走するであろう。

最も貴い王は、敵に監禁されて、自分に忠実な人々の事を思って悲しむであろう。
フランスに平和が戻る前に、同様の出来事が何度もくり返されるであろう。
ワシは、三重の王冠をかぶるであろう。
ワシは、勝利して巣に戻るであろう。
ワシは、巣を離れると、昇天するしかないであろう」

　ノストラダムスは、教会への略奪と聖職者の殺害を予言した後に、イタリアの近くでの皇帝(、ナポレオン)の誕生を予言している。
　ノストラダムスは、イタリアの近くで生まれた皇帝(、ナポレオン)による統治がフランスに大いなる流血をさせる、と予言している。
　ノストラダムスは、イタリアの近くで生まれた皇帝(、ナポレオン)が味方に裏切られてフランスに流血をさせた罪で告発される、と予言している。

「皇帝(、ナポレオン)がイタリアの近くで生まれるであろう。
皇帝(、ナポレオン)は帝国に高い犠牲を払わせるであろう。
大衆は『誰と共に、皇帝(、ナポレオン)は国を守るのか!?』と話すであろう。
皇帝(、ナポレオン)は、皇帝よりも、虐殺者として見られるであろう。
皇帝(、ナポレオン)は、一兵卒から、最高指揮官に成るであろう。
皇帝(、ナポレオン)は、短衣から長衣に成るであろう。
皇帝(、ナポレオン)は、武装して勇敢であり、教会にとって悪い人ではなく、水が海綿(スポンジ)に浸透する様に、聖職者を騒がせるであろう」

　言い換えると、教会が大いなる惨事を経験した時に、皇帝(、ナポレオン)は、利益を与えて聖職者を圧倒するであろう。

エリファス レヴィが写本を所有している1820年に印刷された「ノストラダムスの予言」では、皇帝ナポレオン1世の予言の後に、「甥は、叔父が失敗した事を成就するであろう」と記されている。

有名な女占い師ルノルマンは、「オリヴァリウスの予言」の論文と、ナポレオンの統治と失墜を予言した10枚の手書きの文書を含む、厚紙を羊皮紙で閉じた本を所有していた。

女占い師ルノルマンは、ナポレオンの予言の内容を、皇后ジョゼフィーヌに知らせていた。

ルノルマンに言及したので、ルノルマンという変わった女性について、いくつか話す。

ルノルマンは、ふくよかな人並みの美しさの女性であり、話しぶりは強く、表現は滑稽であるが、覚醒した催眠状態により良く見える洞察力を持っていた。

ルノルマンは、「フランス第一帝政」と「フランス復古王政」の時に人気の女占い師であった。

ルノルマンの本は読み解くのに最も疲れて、うんざりする。

ルノルマンは、タロット カード占い師として、最も成功した。

フランスでは、エッティラまたはアリエットが、タロット カード占いを復活させた。

文字通り、タロット カード占いは、あらかじめ決められているタロット カードの象徴群によって、運命をたずねる。

タロット カードの象徴群は、数との組み合わせによって、タロット カードを凝視している霊媒者に神託を暗示する。

タロット カードという象徴群は、ゆっくりと混ぜられた後なので、運任せに引かれる。

カバラの数に従ってタロット カードを並べると、タロット カードに真剣に誠実に質問している人々の思考に、タロット カードは常に答える。

なぜなら、全ての人は予感の世界を心の中に持っている。

全ての人が心の中に持っている予感は、何かの口実によって、表れる。

感受性の高い過敏な神経質な人々は、磁気的な衝撃を他人から受け取る。

他人からの磁気的な衝撃は、他人の神経の状態による印象を、感受性の高い過敏な神経質な人々に伝える。

水の波紋、雲の形、地面に乱雑に投げられた金属片や木片やコイン、コーヒーの残滓が皿の上に作る模様、トランプのくじ引き、タロット カードの象徴群によって、感受性の高い過敏な神経質な霊媒者は、他人の恐怖や希望を読み取る事ができる。

学の有るカバラの本として、タロットの全ての組み合わせは、象徴、文字、数の間に元々存在する調和を明かす。

タロットの実践的な価値は、本当に、何ものよりも、驚異的である。

しかし、人は、占いによって、普遍の光との密接な交流による秘密を、自身から強引に引き出せば、当然、罰を受ける。

トランプ占いやタロット カード占いは、危険と罪を伴って動作する、真の降霊術である。

降霊術では、人は、自分の星の体が、自身の前に表れる様に強制する。

占いでは、人は、自分の星の体が、自身の前に表れて、話す様に強制する。

降霊術と占いでは、人は、自分の想像力に、星の体という体を与える。

降霊術と占いによって、人は、言葉の力が呼び出すと実現する、信心が選び取ると実現する、未来の実現を近づける。

占いの習慣や、磁気の催眠状態による助言の習慣を身につけてしまう事は、めまいと契約する事に成ってしまう。

そして、すでに確証した様に、めまいとは地獄である。

　中略

　世界に起きた大きな出来事群が、全ての人心を、神秘主義に向かわせてしまった。

　宗教的な反作用が始まったのである。

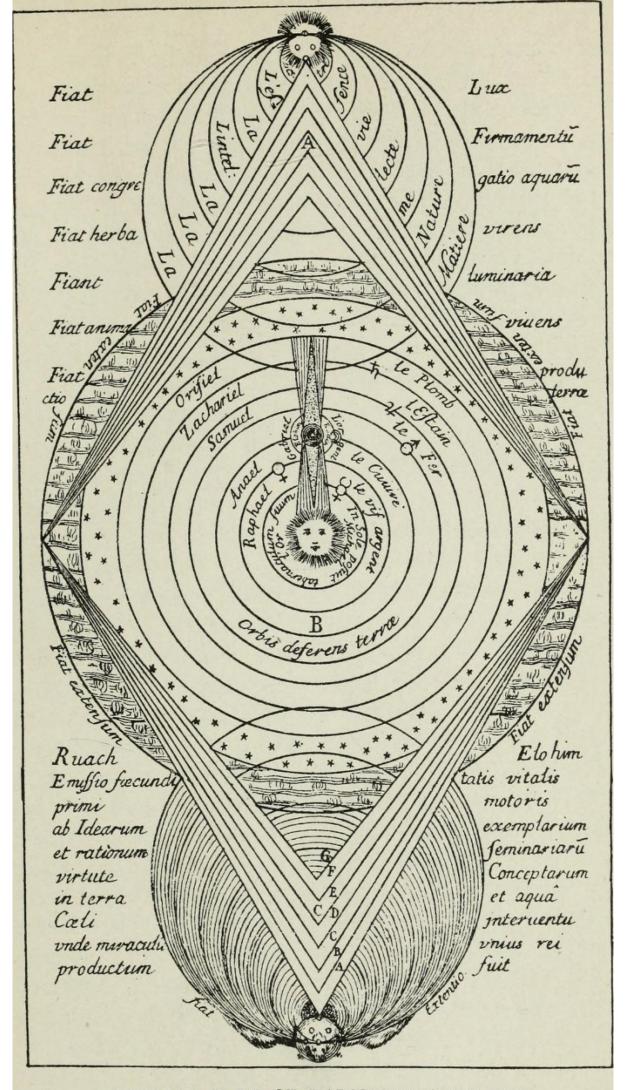
「神聖同盟」の権力者たちは、統一した王笏を、十字架と結びつける必要性を感じた。

　中略

　存在と存在の調和を目の当たりにしながら疑う事、至る所で神を表している命の永遠の数学と不変の法を目の当たりにしながら疑う事は、間違い無く最も愚かな迷信であり、最も危険なので最も許し難い軽信である。

第 **7** 巻 **19** 世紀の魔術

ザイン

GENERAL PLAN OF KABALISTIC DOCTRINE

第 7 巻 第 1 章 磁気の催眠術の、神秘主義者と物質主義者

　前略

　宗教の教えによる永遠の支持が無い倫理道徳は、疑わしい不安定な物に成ってしまった。

　中略

　苦痛を人に必然とする論理が、苦みを海水に必然とする。
　先天的な物である肉欲の全開を認めたら、野獣の存在を認められ無く成るであろう。
　全ての倫理道徳の代わりとして、肉欲を満足させる能力を人に与えたら、人はオランウータンといった猿を羨望するであろう。
　地獄を否定する事は、天国を否定する事に成る。
　なぜなら、「上のものは下のものから類推可能である」という大いなるヘルメスの考えの最高の解釈によると、天国をつり合わせる論理が、地獄を存在させている。
　なぜなら、正反対の 2 つのものの類推可能性が、調和をもたらす。

「上のものは下のものから類推可能である」

　上のものは、下のものを前提とする。
　深みは、高みを決定する。
　谷間の低地を埋める事は、山々を消す事である。

影を奪う事は、光を奪う事に成る。

なぜなら、光と闇の段階的な対比だけが、光を目に見える物にする。

完全に目をくらませる輝きは、完全な闇をもたらす。

光の色の存在は、影の存在のおかげである。

色は、光と闇の三重の結合である。

色は、教えの光る象徴である。

救い主イエスは人に成った神の言葉イエスである、様に、色は影に成った光である。

「上のものは下のものから類推可能である」は、創造の第一の法、自然の唯一絶対の法に基づいている。

創造の第一の法、自然の唯一絶対の法は、普遍のつり合いによる、正反対の２つの力の調和的なつり合いと区別の法である。

人々の良心に反感を抱かせた物は、地獄を教えた事ではなく、地獄を軽率に解釈した事である。

中世の地獄への野蛮な妄想、教会の柱で支えられた屋根つきの玄関に彫られた残酷な卑猥な地獄の責め苦、永遠に生きて苦しむ人の肉体を煮る悪名高い大釜、地獄の火の煙を喜ぶ神に選ばれた人々といった誤った考えは愚かであり不信心であり、キリスト教会の神聖な教えの物ではない。

残酷な行為の原因を神のせいにする事は、最も恐れるべき神に対する冒涜と成る。

正確には、厳密には、人の意思が神の善意を拒絶すると、人の悪を永遠に治せなく成ってしまう。

神は、自殺の死という原因に成ってしまう代わりとしてのみ、地獄に堕ちた人を永罰の責め苦で非難する。

無上の正義である神は「所有するために労苦しなさい。そうすれば、あなたたち人は幸せに成るであろう」と人に話す。

「私は労苦しないで所有して楽しみたい」

「それでは、あなたは盗人(、搾取者)に成ってしまい、いつか苦しむ事に成る」

「私は神や善に反抗する」

「いつか、あなたは破綻して破滅して余計に苦しむ事に成る」

「私は神や善に永遠に反抗する」

「それでは、あなたは永遠に苦しむ事に成る」

　前記が、絶対の論理であり無上の正義である神による判決である。

　傲慢で愚かな人は神に何と答える事ができるであろうか？　傲慢で愚かな人は神に何も答えられない！

　たがが外れた神秘主義は、宗教の最大の敵である。

　神秘主義者は、熱狂による幻覚を神聖な啓示と誤解する。

　悪魔の王国を創造した人は、神学者ではなく、偽の信者や悪人の霊の魔術師である。

　人々の理性や信心の権威よりも、自分の脳の幻覚を信じ込む事は、常に、宗教的な、異端の始まりであり、哲学的な、愚かな考えの始まりである。

他人の理性を信じられれば、愚者や狂人に成らないであろう。

神や善に反抗する狂信は、幻覚に事欠かない。

論理を破門して国外追放した思考者は、妄想に事欠かない。

前記の、観点から、間違い無く、磁気の催眠術は危険である。

なぜなら、催眠状態は洞察力のある直感に簡単に至れる、のと同様に、催眠状態は幻覚に簡単に至る。

魔術の歴史 第 7 巻 第 1 章では、神秘主義的な磁気の催眠術師と、物質主義的な磁気の催眠術師を扱う。

エリファス レヴィは、知の名前において、磁気の催眠術の危険について磁気の催眠術師に警告するつもりである。

占い、磁気の催眠術の体験、降霊術は、同一の現象の物である。

占術、催眠術、降霊術の悪用や誤用は、理性と命を危険にさらす事に成る。

中略

エリファス レヴィは、ウロンスキーの後に、絶対の知に到達した。

ウロンスキーは、絶対の知を 15 万フランという非常な高値で売り渡してしまった。

しかし、エリファス レヴィは、絶対の知を読者に無料で文書として与える。

(ただし、読者は絶対の知についての文書を労苦して読み解く必要が有る。)

なぜなら、真理は、全世界の人々のために存在する。

真理を私物化する権利、真理を金銭で売り渡す権利、真理を金銭で買う権利は誰にも無い。

エリファス レヴィの正しい行いが、ウロンスキーの誤りをつぐないます様に。

ウロンスキーは、貧困に近い状態で死んだ。

ウロンスキーは、知のためではなく、知によって私腹を肥やすために、労苦した。

ウロンスキーは、知の理解や所有に相応しく無かった、のかもしれない。

第 7 巻 第 2 章 幻覚

全ての異端者の狂信の根底には野心や貪欲が必ずある。

マタイによる福音 20 章 20 節などで、時々、自国で窮乏と流浪の日々を過ごしていたイエス キリストは、神の王国に入り神の王国で上位に成る事を希望していた親近者の弟子を厳しく叱った。

中略

ヴァントラスは、紫衣をまとい、先端が親指と小指だけ伸ばした手の形である魔術的な王笏を持った。

親指は金星ウェヌスにささげられている。

小指は水星メルクリウスにささげられている。

(

手相では親指のつけ根の手のひらのふくらみを金星丘と呼んでいる。

手相では小指のつけ根の手のひらのふくらみを水星丘と呼んでいる。

)

親指と小指だけ伸ばした手の形は、古代の両性具有神ヘルマプロディトスの象徴である。

(

ヘルマプロディトスという名前はヘルメスとアフロディーテの名前を組み合わせた物である。

ヘルメスはメルクリウスである。

アフロディーテはウェヌスである。

)

親指と小指だけ伸ばした手の形は、古代の儀式的な酒宴の象徴である。

親指と小指だけ伸ばした手の形は、サバトの卑猥な仮装行列の象徴である。

中略

ヴァントラスは、狂人に分類されないためならば、地獄堕ちに同意する。

狂人が狂人と見なされる事を恐れるのは、残存している理性が理性の計り知れない価値を直感しているのである。

酩酊者は、酩酊者と見なされる事だけを恐れる。

偏執狂者は、自分の狂気を認めるよりも死を選ぶ。

すでに話した様に、ギリシャの哲学者ケベスの「ケベスの石板」の美しい言葉によると、理性や狂気について説明すると、望むべき唯一の善い物は、知である。

知は、理性を実践する事である。

恐れるべき唯一の本当の最悪は、狂気である。

第 7 巻 第 3 章 催眠術師と被催眠者

教会は、大いなる知によって、神託に相談する事を禁止して、(未来を占う事を禁止して、)無思慮な好奇心によって未来の秘密を侵害する事を禁止している。

現在では、最早、教会の言葉を気に留める人はいない。

大衆は、占い師や巫女の所へ戻ってしまった。

最早、福音書の戒めを信じない大衆にとっては被催眠者は預言者に成ってしまった。

予言された未来の出来事に心を占有される事は、ある意味で、自由を抑圧される事、自衛の手段を麻痺させる事に成ると気づかない。

人は、未来の出来事を予見するために魔術に相談する事によって、運命に手付金を払う羽目に成ってしまう。

被催眠者は、現代の巫女シビュラである。

巫女シビュラは、古代の被催眠者である、様に。

不道徳な占い師や愚劣な占い師に軽信を利用されていない相談者は幸いである。

なぜなら、相談者は、友好的に相談したという事実によって、神託を吹き込んでくる不道徳な占い師や愚劣な占い師と霊的に交流する羽目に成ってしまう。

占い師の仕事は楽であり、だまされ易い人が多数である。

占い師、催眠術師の中で、誰が誠実であるか知る事が重要である。

占い師、催眠術師の中で、デュ ポテ男爵が(誠実であり)第一人者である。

デュ ポテ男爵の良心的な作業は、メスメルの知をすでに大きく前進させている。

デュ ポテ男爵は、パリに、催眠術の現象の手順と検証の知識を獲得するための、大衆が入学できる、磁気の催眠術の実践的な学校を開いた。

デュ ポテ男爵には、超常的な高度な直感がある。

知識人を含む、全ての現代人と同じく、デュ ポテ男爵は、カバラとカバラの神秘について何も知らない。

しかし、磁気の催眠術は、魔術の知を、デュ ポテ男爵に明かした。

デュ ポテ男爵の目には催眠術が明かした知は恐ろしく見えたので、デュ ポテ男爵は、明かす必要を感じながらも、発見した知を隠した。

デュ ポテ男爵は、発見した知を全く密かに隠して本を書いて弟子にだけ売った。

エリファス レヴィは、デュ ポテ男爵と約束したわけではないが、(デュ ポテ男爵の本を所有していて、)秘儀祭司デュ ポテ男爵の信念への敬意から、デュ ポテ男爵の秘密を隠したままにする。

デュ ポテ男爵の本は純粋な直感による物の中で最も注目するべき物である、と言える。

エリファス レヴィはデュ ポテ男爵の秘密が危険であるとは考えていない。

なぜなら、デュ ポテ男爵は、正確な使用方法無しに、星の光という 2 つの力の存在を暗示しているだけである。

デュ ポテ男爵は、磁気の催眠術の手段によって、善行をしたり悪事を犯したりでき、破壊したり救ったりできる、と気づいた。

デュ ポテ男爵が催眠術の手段である自然の力を実践的に明確にしなかった事をエリファス レヴィは祝いたい。

なぜなら、生殺与奪の権利は、神の様な統治権を前提とする。

どんな方法であれ、生殺与奪の権利を売り渡す人は、生殺与奪の権利の所有に相応しく無い、と考えるべきである。

デュ ポテ男爵は、勝利して、星の光という普遍の光の存在を確証した。

透明な想像力を持つ人は、思考の全ての映像と全ての反映を星の光の中に読み取れる。

デュ ポテ男爵は、「魔法の鏡」と呼んでいる、星の光を吸収する装置によって、星の光の生きている放射を補助した。

デュ ポテ男爵の「魔法の鏡」は、細かい篩（ふるい）にかけられた炭の粉で覆われた、ただの円または正方形である。

デュ ポテ男爵の「魔法の鏡」の炭の暗い場所に、催眠術師と被催眠者が放射して組み合わされた星の光が、すぐに、神経の印象に対応する形を色づけて実現する。

被催眠者は、阿片（アヘン）や大麻による全ての妄想の様な物がデュ ポテ男爵の「魔法の鏡」に表れるのを見る。

被催眠者がデュ ポテ男爵の「魔法の鏡」の光景から気を逸（そ）らされなかったら、けいれんが起きるであろう。

デュ ポテ男爵の「魔法の鏡」による現象は、カリオストロが実践した水占いによる現象と似ている。

水を凝視すると、目がくらんだり曇ったりする。

目の疲労は、脳が幻覚を見るのに有利に働く。

カリオストロは、性的な記憶による不安による逸脱という妨害を除去するために、完全な処女の被催眠者を水占いの実験のために確保しようとした。

多分、デュ ポテ男爵の「魔法の鏡」は、水占いより、神経系全体を疲労させる。

水占いによる目のくらみは、デュ ポテ男爵の「魔法の鏡」より、危険に脳に作用するであろう。

デュ ポテ男爵は、ガリレオが心に抱いた「それでも地球は動く」という秘密の信仰告白を小声でくり返す、科学からの軽蔑と世論からの先入観を勇敢に忍耐する、信念が固く深い人の 1 人である。

19 世紀に、テーブルが回転する事が発見された。

地球が回転している様に。

人の磁化の様な力は、移動可能な物を霊媒者の感化力に従わせて、特異な回転を移動可能な物に与える。

星の光という力は、驚くほど重い物を持ち上げる事ができ、空中を移動させる事ができる。

なぜなら、星の光という 2 つの力のつり合いだけが、重さを存在させている。

星の光のうち、一方の力の作用を増やすと、すぐに、他方の力は退く。

被催眠者の個人的な超興奮に応じて自発性か受容性を星の光に与えて、神経組織が星の光を引き寄せたり放射したりすれば、星の光の作用に従わされた、星の光の命に浸透された、自発的に動かない物体は、星の光の満ち引きに従って、軽く成ったり重く成ったりする。

星の光の運動の新しいつり合いによって、星の光は、浸透可能な物体や非伝導体を、生きている中心の周囲に引き寄せる。

宇宙空間の中で、惑星が、太陽の周囲に、引き寄せられ、つり合う様に。

常に、星の光という引き寄せたり放射したりする力の異常は、被催眠者の病的な状態を前提とする。

全ての霊媒者は、異常な悪いつり合いの人である。

霊媒狂は、固定観念、不節制な肉欲、乱れた色情狂、殺人傾向、自殺傾向といった他の一連の神経の熱狂を前提とするか、他の一連の神経の熱狂をもたらす。

中略

知は、雷を圧倒して、雷を光明に変えた。

知と真理の輝きを前に、怪物は消えるであろう。

光だけが、無知と闇の精神を破る事ができる。

第 7 巻 第 4 章 魔術文学の中の幻想小説

　エリファス レヴィの幼馴染の 1 人、アルフォンス エスキロスが高尚な幻想小説「魔術師」を 1838 年に出してから 1858 年で 20 年に成る。

　アルフォンス エスキロスの小説「魔術師」は、当時のロマン主義者が想像した不思議な物を全て包含している。

　「魔術師」で著者アルフォンス エスキロスは魔術師と、Gannal が発見した方法により防腐処理された死んだ女性達の後宮をもたらした。

　アルフォンス エスキロスの小説「魔術師」の登場人物には、貞淑を説く青銅製の自動人形と、衛星である月と恋愛して月と定期的に交流する両性具有神ヘルマプロディトスが含まれている。

　アルフォンス エスキロスの小説「魔術師」には他にも不思議なものがあったが、エリファス レヴィは今は忘れてしまった。

　アルフォンス エスキロスは、空想物語「魔術師」の公表によって、魔術の幻想小説家の一派を設立した、と言えるかもしれない。

　興味深い若者アンリ デラージェは、魔術の幻想小説家の 1858 年現在の高名な代表的な人である。

　アンリ デラージェは、創造力に富む小説家、奇跡を起こす知られざる人、天与の誘惑者である。

　アンリ デラージェの表現は、アルフォンス エスキロスの考えと、同じくらい、驚くべき物である。

　アルフォンス エスキロスは、アンリ デラージェの秘伝伝授の師である。

復活者を扱っている著書で、アンリ デラージェは、後記の様に、キリスト教に対する反対について話している。

「私は、キリスト教に対する反対の喉を絞めあげた。
私が手を放すと、キリスト教に対する反対という絞殺死体の重みで、地が重く鳴り響く」

　キリスト教に対する反対にアンリ デラージェがほとんど答えていないのは真実である。
　しかし、キリスト教に対する反対が絞めあげられて、キリスト教に対する反対という死体の重みで地が重く鳴り響いたら、何を答えるのか？
　すでに話した様に、アンリ デラージェは、奇跡を起こす知られざる人である。
　事実、冬にインフルエンザが流行した時にアンリ デラージェが部屋に入っただけで部屋の中の全ての人がすぐに治った、とアンリ デラージェはエリファス レヴィの知人に教えた。
　不運にも、アンリ デラージェは奇跡の犠牲者に成った。
　なぜなら、アンリ デラージェは、奇跡を起こして以来、声が少しかすれてしまった。
　アンリ デラージェには遍在する天与の才能がある、とエリファス レヴィの友人の多数が話している。
　アンリ デラージェは、出版社「祖国」を出たはずなのに、出版社「祖国」で出版者Dantuと共にいるのを見かけられている。
　さらに、アンリ デラージェの遍在を目撃して驚き早退した人が帰宅すると、アンリ デラージェが待っていたのである。
　アンリ デラージェは、熟練の誘惑者である。

ある上流階級の令嬢が、アンリ デラージェの本を読んで、アンリ デラージェの本より、良い本、美しい本は知らないと話した。

　しかし、アンリ デラージェが美を与える事ができるのは本だけではない。

　「若い魔術師アンリ デラージェの体の魅力は天使達の体の魅力以上である」という Fiorentino 署名の記事をエリファス レヴィは読んだ事がある。

　エリファス レヴィは、アンリ デラージェに、会って、好奇心から、異常な記事について質問した。

　アンリ デラージェは、着ていたベストに手を入れて、4 分の 3 回転し、微笑みながら天を見上げた。

　幸運にも、エリファス レヴィは、法王レオ 3 世の「Enchiridion」を携帯していた。

　法王レオ 3 世の「Enchiridion」は誘惑から守ってくれる、と知られている。

　そのため、誘惑者アンリ デラージェの天使の様な美しさは、エリファス レヴィの目には見えなかった。

　アンリ デラージェの良い外見への心酔者よりも、真剣にアンリ デラージェをたたえよう。

　アンリ デラージェは、カトリック教徒であり、カトリックを愛し畏敬している、と大きな声で心から話している。

　カトリックは、アンリ デラージェを聖人にできる。

　魔術師という称号よりも、聖人という称号は、たたえるべき栄光ある称号である。

　若者アンリ デラージェが魔術の幻想小説家の第一人者であるのは、アンリ デラージェが広報担当者として第一人者だからである。

　中略

ウルシュの気質は、多血質であった。

ウルシュは、極度の神経質な敏感な人であった。

ウルシュは、美しい女性の被催眠者との催眠実験によって、異常に興奮し続けていた。

そのため、ウルシュは、脳卒中の発作に襲われていた、のかもしれない。

中略

知の名前において話すと、エリファス レヴィの話を信じないであろうGuldenstubbé のためではなく、不思議な現象の真剣な観察者のために話すと、紙に浮かんだ文字は、あの世からの物ではなく、Guldenstubbé が無意識に星の光によって成した物である。

さらに、話すと、Guldenstubbé は、過度に複雑な実験と、意思の過剰な緊張によって、流体である星の体のつり合いを壊してしまった。

Guldenstubbé は、自分の妄想の実現を、自分の星の体に強制してしまった。

紙に浮かんだ文字は、Guldenstubbé の記憶の中の文字であり、Guldenstubbé の想像や思考の反映である。

仮に、Guldenstubbé が、磁気の催眠の眠りの、意識が明確な状態を完全に保てば、夕日で影が伸びる様に、肉体の手に対応している、星の体の光る手が伸びる光景を見たであろう。

星の体の手が紙に文字を記す光景を見たであろう。

地や、人は、星の光という肉体的な光を放射している。

極限まで柔軟に伸縮する流体の外皮、柔軟に伸縮する星の体の外皮が、星の光を包んでいる。

命の生気の精髄と、血の精髄が、星の体の外皮を形成している。

星の体の外皮の色は、星の光の色に由来する。

人の秘密の意思が、星の体の外皮の色、星の光の色を決定している。

星の体の外皮は、人の想像に似た形に成る。

母の想像が胎内の幼子の形を決定する様に、紙に文字が浮かぶ。

紙に浮かんだ文字のインクに見える物は、黒く成った血、霊化されていた血が物質化した物である。

紙に浮かぶ文字の増大に比例して、血を消費する。

もし驚異現象の実験を続けたら、徐々に、脳が衰弱して記憶が損なわれる。

手足の関節と指の関節に言い表せない痛みを感じる。

突然死するか、幻覚や狂気に襲われて長期に渡って苦しんだ後に死ぬ。

中略

土葬された人は、短時間しか、覚醒できない。

しかし、土葬された人が、明確な意識を保った催眠状態によって星の光によって肉体を保存すると、地下で生き長らえる事ができる。

星の光によって肉体を保存している時、魂は、目に見えない鎖によって、眠っている肉体とつながっている。

強欲な罪人の魂は、自然に眠っている他人の血の精髄を吸収して奪う時がある。

罪人の魂は、肉体を復活できるかもしれないという曖昧な希望にすがって、眠っている他人の血の精髄を吸収して奪い、保存している土葬されている自分の肉体に移す。

罪人の魂による眠っている他人の血の精髄の吸収強奪が、吸血鬼と呼ばれている、恐るべき現象である。

歴史上の重要な出来事と同じく確証されている、多数の実例によって、吸血鬼の実在は確証されている。

中略

吸血鬼の死を確定させるために、剣の先端を吸血鬼の墓の中へ向けた。

なぜなら、星の光による幻の体は、金属の先端の作用によって、分解される。

金属の先端は、星の光を共通の貯蔵所へ引き寄せて、星の光の凝固した塊を分解する。

神経質な人を安心させるために話すと、幸運にも、吸血鬼の実例は、非常に希少である。

また、共犯によって、または、異常な肉欲によって、生前に身心を吸血鬼に委ねなければ、身心が健全な人が吸血鬼の犠牲に成るはずが無い。

中略

魔術の幻想小説家というテーマから脱線してしまった。

吸血鬼の問題は忘れて、タロット カード占い師エドモンドについて話して、魔術の幻想小説家の話に戻ろう。

中略

占い師エドモンドは、超越的な知の哲学的な秘密を知らない、と話している。

　占い師エドモンドは、ソロモンのカバラの鍵を所有していない、と話している。

　中略

　ある日、カバラの弟子でありエリファス レヴィの友人であり占い師エドモンドに全く知られていない人が占い師エドモンドの所に占ってもらいに行って前金を支払い神託を待っていると、占い師エドモンドは畏敬しながら立ち上がって返金を受け取る様に懇願した。

　占い師エドモンドは、「あなたを占えなかった」と説明した。

「私エドモンドに対して、あなたの運命は隠された知の鍵で閉ざされている。

私エドモンドが言える様な事は全て、すでに、あなたは知っているでしょう」

　占い師エドモンドは、多大な敬意を表して見せた。

　以下略

第 7 巻 第 5 章 著者エリファス レヴィのいくつかの個人的な思い出

　1839 年の、ある朝、アルフォンス エスキロスが、本書の著者エリファス レヴィを訪れた。

　アルフォンス エスキロスは、「マパを敬礼しましょう」と話した。

　自然な疑問がわきあがった。

「マパとは誰または何ですか？」

　……。

　アルフォンス エスキロスは、「マパは神です」と答えた。

　……。

　著者エリファス レヴィは、「ありがとうございました。私エリファス レヴィは、目に見えない神だけを愛し信じ敬礼しています」と話した。

　……。

「それでも、行きましょう。マパは、ものの目に見える秩序の中で、最も雄弁な、最も輝かしい偉大な、狂人です」

　……。

「友アルフォンス エスキロスよ、私エリファス レヴィは狂人が嫌いである。狂気という病気は伝染する」

　……。

「仮に狂気が伝染するとしても、親愛なる友エリファス レヴィよ、私アルフォンス エスキロスが誘っているのですよ」

　……。

「わかりました。それでは、マパを敬礼しに行きましょう」

以下略

第 7 巻 第 6 章 隠された知

隠された知の秘密は、自然の秘密である。

隠された知の秘密は、天使と世界の生成の秘密である。

隠された知の秘密は、神の全能性の秘密である。

創世記 3 章 5 節で蛇は「あなた達は善と悪を知って神の様に成るであろう」と話した。

そのため、善悪の知の木は、死の木に成った。

(ヨハネによる福音 3 章 3 節「再び生まれ直さないと神の王国を見る事はできない」)

6 千年間、知の殉教者達は、善悪の知の木が再び命の木と成る様に、善悪の知の木の根元で、労苦して死んだ。

愚者が探求して賢者が見つけた絶対とは、普遍のつり合いの真理、現実、論理である。

つり合いとは、正反対の 2 つのものの類推可能性による調和である。

今まで、人類は、まるで片脚で立つかの様に、人類をつり合わせようとしてきた。

今まで、人類は、右脚だけで立とうとしたり、左脚だけで立とうとしたり、してきた。

相互に、独裁からの無政府主義による離反によって、または、反乱の独裁的な無政府主義によって、人は文明を建てたり崩壊させたりしてきた。

迷信的な熱狂、または、物質主義の先天的な物である肉欲による情けない陰謀が、国々を間違った方向へ導いてきた。

しかし、ついに、神は、全世界の人々を、信じる論理と、論理的な信心に向かわせた。

哲学の無い預言者や、宗教の無い哲学者は、不要である。

盲信者と懐疑者は、同じ様な者であり、永遠の救いから遠い。

全き懐疑の混沌の中で、知と信心の対立の中で、偉人や予見者は、理性と命の危険をおかして理想の美を探求している、病んだ芸術家である。

偉人や予見者という高尚な幼子を見てみなさい。

偉人や予見者は、女性の様に、気まぐれであり、神経質である。

偉人や予見者は、人目につかないと傷つく。

偉人や予見者は、論理に怒る。

偉人や予見者は、互いに対して不正である。

王冠を求めて、空想的な越権行為によって、偉人や予見者は、ピタゴラスが「花冠の花々を散らすなかれ」という見事な例えで禁じている罪を真っ先に犯してしまう。

偉人や予見者は、真っ先に既存の王冠を悪く言って足下に踏みにじってしまう。

偉人や予見者は、栄光を求める狂信者である。

善良である神は、偉人や予見者が公に危険な言動をしない様に、偉人や予見者を世論という鎖で縛っている。

凡才である大衆という裁判所は、訴えが無くても、天才を裁く。

なぜなら、全世界の人々の光である天才は、照らすのをやめると、無価値である死んでいる者と見なされる。

凡才である大衆の無関心が、詩人の忘我状態を抑制する。

大衆の良識が拒絶する全ての狂信者は、狂人であり、天才ではない。

偉大な芸術家を無知な大衆の奴隷と見なすなかれ。

なぜなら、大衆が、理性のつり合いを、偉大な芸術家の才能に与える。

光は、明暗のつり合いである。

運動は、慣性と自発性のつり合いである。

権威は、自由と権力のつり合いである。

知は、思考のつり合いである。

徳は、思いやりのつり合いである。

美は、形のつり合いである。

美しい形は、真の形である。

自然の美は、美の代数学である。

正しいものは全て美しい。

美しいものは全て正しい。

(

美しいものは全て存在する。

肉体が美しくても心が醜い人は醜い。

)

天国と地獄は、倫理道徳的な心の生活のつり合いである。

善と悪は、自由のつり合いである。

「大作業」、「大いなる務め」とは、つり合わせる力が存在する中心点に到達する事である。

さらに、つり合わされた力の反作用は、生と死という永久機関の永久運動によって、普遍の命を全ての場所で保存している。

そのため、錬金術師は、黄金を太陽に例えている。

また、そのため、錬金術の黄金は、魂の全ての病気を治して、不死を知らせる。

中心点を見つけた人は、知と論理の、真の、奇跡を起こす、達道者である。

達道者は、地の富の主である。

達道者は、天の王者の親友である。

自然は、達道者に従う。

なぜなら、法が望むものを、達道者は望む。

法は、自然の原動力である。

法は、全世界の人々の救い主イエスが「神の王国」として話しているものである。

イエスが話している「神の王国」は、神のカバラの「神の王国」である。

法は、ソロモンの王冠と指輪である。

法は、第 24 祖ヨセフの王笏である。

天では星々が第 24 祖ヨセフの王笏に従い、地では収穫物が第 24 祖ヨセフの王笏に従う。

エリファス レヴィは、法という全能性の秘密を発見した。

法は、市場で金銭と交換で売られてはいない。

ただし、もし神がエリファス レヴィに法の授業料を設定する様に命令したら、買い手の全財産でも法を教える代価に相当するか疑う。

エリファス レヴィは、私腹を肥やすためではなく、学徒のために、法を教える代価として、学徒の魂と命の全てを要求する。

第 7 巻 第 7 章 要約と結論

要約と結論が残されている。

知の歴史を要約する事は、知を要約する事である。

そのため、全ての時代を通じて保存され伝えられてきた、秘伝伝授の大いなる原理を要約する。

魔術の知は、つり合いの絶対の知である。

魔術の知は、本質的に、宗教である。

魔術の知は、古代の世界で、教えの形成を統治した。

魔術の知は、全ての文明の乳母であった。

おおっ、魔術の知は、詩情と霊感という乳を最初の何世代かに与えながら、顔と胸を覆い隠す、貞淑な神秘的な母である。

何よりも、魔術という知は、神の定義を試みないで、神を信じて敬礼する様に、人を導く。

なぜなら、人が神を定義すると、多かれ少なかれ、有限な神に成ってしまう。

神の後に、(神を信じて敬礼する様に人を導いた後に、)魔術の知は、ものの無上の原理として、永遠の数学とつり合わされた 2 つの力を教える。

知恵の書 11 章 21 節に「神は数、目方、尺度で全てのものを創造した」と記されている。

知恵の書 11 章 21 節「神は数、目方、尺度で全てのものを創造した」

目方は、つり合いである。

数は、数量である。

尺度は、比率である。

数、目方、尺度は、数 3 である。

数、目方、尺度は、自然の知の、永遠の、神の、基礎である。

後記は、つり合いの原則である。

正反対の 2 つのものの類推可能性が、調和をもたらす。

数は、類推可能性の、ものさしである。

尺度は、数の比率である。

「光輝の書」の隠された知の全体は、つり合いの知である、と言えるかもしれない。

「形成の書」には、数の鍵がある。

数の生成は、概念の認知と形の生成に似ている。

そのため、カバラの光に照らされた秘儀祭司は、神のアルファベットであるヘブライ文字やタロットで、数の象形文字、概念、形を組み合わせた。

神のアルファベットである、ヘブライ文字やタロットの組み合わせは、概念の方程式をもたらす。

ヘブライ文字やタロットの組み合わせは、見通しとして、自然の形の全ての可能な組み合わせである。

創世記 1 章 27 節「神は人を神に似せて創造した」

そのため、人は、被造物の生きている総合である。

そのため、人を含む、被造物は、神に似せて創造されている。

この世には精神、自由な形にできる仲介者、物質という３つのものが存在する。

古代人は、精神の直接の道具である火の様な流体、「硫黄」と呼んでいるもので、精神を表した。

古代人は、ヘルメスの杖ケーリュケイオンで表しているもの、「水銀」と呼んでいるもので、自由な形にできる仲介者を表した。

古代人は、固定された「塩」は超自然の「火」の作用に耐えて自然の燃焼の後に残るので、「塩」と呼んでいるもので、物質を表した。

精神、「硫黄」は、「火」の創造する作用から、父に例えられる。

自由な形にできる仲介者、「水銀」は、引き寄せ増殖する力から、母に例えられる。

物質、「塩」は、自然が教育に従わせるものである子に例えられる。

精神、自由な形にできる仲介者、物質を、創造する実体は唯一である。

古代人は、精神、自由な形にできる仲介者、物質を、創造する唯一の実体を、「光」と呼んでいる。

自発的な光、火の様な光は、気化し易い硫黄である。

受容的な光、火の振動が目に見える様にさせている光は、流動体の水銀、エーテルの水銀である。

中間の光、光と言うよりは影、地の形で凝固した複合体、地の形で固定された複合体は、「塩」と呼ばれているものである。

「エメラルド板」でヘルメストリスメギストスは「上のものは下のものから類推可能である。下のものは上のものから類推可能である。なぜなら、唯一のものによる複数の不思議の実現である」と話している。

後記を、「上のものは下のものから類推可能である。下のものは上のものから類推可能である。なぜなら、唯一のものによる複数の不思議の実現である」は意味する。

固定されたものと気化し易いものの類推可能性が、普遍の運動をもたらす。

気化し易いものは、固定される傾向がある。

固定されたものは、気化される傾向がある。

そのため、唯一の実体の 2 つの形である、固定されたものと気化し易いものの、絶え間無い交流がもたらされる。

また、固定されたものと気化し易いものの交流という事実から、普遍の形の組み合わせの絶え間無い更新がもたらされる。

「火」は、オシリス、または、太陽である。

「光」は、イシス、または、月である。

オシリスは大いなる Telesma の父であり、イシスは大いなる Telesma の母である。

Telesma とは、普遍の実体である。

オシリスとイシス、太陽と月、「火」と「光」は、Telesma の創造者ではなく、Telesma が生成している 2 つの力である。

Telesma の 2 つの力の組み合わせは、固定されたもの、または、地をもたらす。

そのため、Telesma の 2 つの力は地を形成した時に完全な表れに到達した、とヘルメスは話している。

そのため、古代エジプトの聖所の大いなる秘儀祭司にとっても、オシリスは、神自体ではない。

(

オシリスは生前は人であった。

オシリスは死後に神格化された。

）

「オシリス」、「火」は、命の知的な原理の、火の様な影、または、光る影である。

そのため、秘伝伝授の最後に、ヴェールをかぶった祭司が、飛ぶ様な速さで達道者を追い越しながら、「オシリスは黒い神である」という疑わしい啓示を達道者の耳にだけ、ささやいた。

理解が古代エジプトの啓示の純粋に物質的な象徴を信心で超越できなかった修行者には災いが有る。

理解が物質的な象徴を信心で超越できなかった修行者にとって、「オシリスは黒い神である」という言葉は、無神論の言葉に誤解されてしまい、心を盲目にさせてしまう。

しかし、理解が物質的な象徴を知で超越している信者にとって、「オシリスは黒い神である」という言葉は、最も崇高な希望の証拠の様に聞こえる。

後記の様に、「オシリスは黒い神である」という言葉によって、秘伝伝授者は修行者に話している。

「我が子よ、あなたはランプを太陽と誤解している。
しかし、ランプは、夜の星に過ぎない。
さらに、別の、真の太陽が存在する。
夜から出て、太陽の光を探求しなさい」

古代人が四大元素として理解していたものは、自然科学の単体ではなく、唯一の実体の四大元素による表れである。

スフィンクスは、唯一の実体の四大元素による表れの象徴である。

スフィンクスの、ワシの翼は、「風」に対応している。

スフィンクスの、人の(頭や)女性の胸は、「水」に対応している。

スフィンクスの、牛の体は、「土」に対応している。

スフィンクスの、ライオンの爪は、「火」に対応している。

唯一の実体は、本質的な形が３倍の三重であり、表れの形が４つ１組である。

「唯一の実体は、本質的な形が３倍の三重であり、表れの形が４つ１組である」事は、３つのピラミッドの秘密である。

ピラミッドは、真横から見ると三角形であり、基礎が正方形であり４つの形を持つスフィンクスが守っている。

ピラミッドという記念建造物を建てて、古代エジプトは、普遍の知のヘラクレスの柱を建てようと試みた。

砂が蓄積し、何世紀も過ぎた。

しかし、ピラミッドは、永遠の偉大さによって、未だに、解決法が失われた謎を人々に出している。

スフィンクスは、時代の塵の中に堕ちた様に見える。

ダニエル書の大いなる国々は、順に地上を統治して、自重で崩壊して、墓に堕ちた。

戦いによる獲得地、労苦による記念建造物、人の肉欲の結果は全てスフィンクスの象徴的な体と共に飲み込まれた。

まるで思考の普遍の王国を探求しているかの様に、スフィンクスの人の頭だけが砂漠の砂の上にあらわれている。

スフィンクスは「見抜くか、死か」という畏敬するべき二者択一を、テーバイの王位を求める修行者に提案する。

なぜなら、実は、知の秘密は、命の秘密である。

「見抜くか、死か」という二者択一は、「統治するか、仕えるか」という二者択一である。

「見抜くか、死か」という二者択一は、「存在するか、存在しないか」という二者択一である。

人が自然の２つの力を世界を圧倒するために応用しないと、自然の２つの力は人を破壊する。

なぜ自身が存在するのか、自身は何者であるのか、自問自答しないので、無意味な無価値な存在しないも同然の人々に数えられる事に同意しない限り、王者の高みと犠牲状態の深淵の間に中間は存在しない。

スフィンクスの複合した形は、星の光という普遍の代行者の、分解、凝固、加熱、冷却という４つの性質を、象徴の類推可能性によって、表す。

人の意思は、星の光の、分解、凝固、加熱、冷却という４つの性質を傾ける事ができる。

星の光の、分解、凝固、加熱、冷却という４つの性質は、与えられた衝撃に従って、生か死をもたらして、健康か病気をもたらして、愛か憎しみをもたらして、富か貧しさをもたらして、自然の全ての形を変える事ができる。

星の光の、分解、凝固、加熱、冷却という４つの性質は、星の光の全ての反映を、人の想像力の役に立たせる事ができる。

星の光の、分解、凝固、加熱、冷却という４つの性質は、超越的な魔術が設定できる未開拓の問題の、逆説的な解決法に成る。

後記は、星の光の、分解、凝固、加熱、冷却という４つの性質で解決できる問題と答えである。

(1)

死を免れるのは可能か？

(2)

賢者の石といったものは存在するか？

賢者の石といったものを見つけるには何をする必要が有るか？

(3)

霊を仕えさせるのは可能か？

(4)

ソロモンの鍵、ソロモンの指輪、ソロモンの封印は何を意味するか？

(5)

信頼できる計算で未来を予言するのは可能か？

(6)

魔術の力で思い通りに善行をしたり悪事を犯したりするのは可能か？

(7)

真の魔術師に成るには何をする必要が有るか？

(8)

黒魔術が動作するのに要求する力は正確には何か？

前記の問題を、エリファス レヴィは逆説的な問題と呼んでいる。

なぜなら、前記の、逆説的な問題は、自然科学によって理解できる物ではないし、宗教が否定している様に見える物である。

前記の、逆説的な問題は、学の無い人が話せば、無謀な言葉に過ぎない。

前記の、逆説的な問題は、達道者が完全な解決法を与えると、神への冒涜の様に思われるであろう。

神や自然は聖所や超越的な知を閉ざしている。

そのため、ある限界を超えると、知者が話しても無駄に成る。

なぜなら、ある限界を超えた、知者の言葉は理解されない。

そのため、幸運にも、大いなる魔術の秘密の啓示は不可能である。

　エリファス レヴィが与えようとしている答えは、魔術の言葉の可能な限り究極の表現に成る。

　エリファス レヴィは、答えを全く明確にする。

　しかし、エリファス レヴィは、答えが全ての読者にとって理解可能であるとは保証できない。

　(1)死を免れるのは可能か？　(2)賢者の石といったものは存在するか？　賢者の石といったものを見つけるには何をする必要が有るか？　について

　時においてと、永遠において、という 2 つにおいて、死を免れるのは可能である。

　病気を治す事によって、また、老化という弱体化を免れる事によって、時において、人が死を免れるのは可能である。

　存在の変形の中においても記憶において個人の同一性を永続する事によって、永遠において、人が死を免れるのは可能である。

　ただし、後記を、確証する。

　(1)

　運動が命をもたらす。

　形の連続と形の完成だけが命を維持できる。

　(2)

　永久機関の永久運動の知は、命の知である。

　(3)

　命の知の目的は、つり合わされた感化力の正しい理解である。

(4)

破壊が全ての更新を動作させる。

そのため、生成は死を必要とする。死は生成を必要とする。

さらに、後記を、古代の賢者と共に、確証する。

命の普遍の原理は、実体の運動、または、永遠に本質的に動かされたり動かしたりするものである実体である。

実体の運動、または、実体は、気化していると、目に見えないし、手で触れられない。

実体の運動、または、実体は、両極性を与えられて固定されると、物質的に表れる。

実体は、不滅であり、壊敗しない。

そのため、結果的に、実体は、不死である。

ただし、形の世界における、実体の表れは、永久機関の永久運動によって、永遠の変化に従う。

全てのものは、死ぬ、と言える。

なぜなら、全てのものは、生きている。

そのため、もし何かの形を永遠にするのが可能であると、運動がとらわれてしまい、唯一の実際の死を創造してしまう。

永遠に魂を人の死体のミイラに閉じ込める事は、同一の体における、同一の地における、偽の不死についての、魔術の逆説の恐るべき解決法である。

「第一質料」の普遍の溶媒は、全てのものを復活させる。

第 5 元素で、普遍の溶媒の力は、濃縮される。

言い換えると、二重の両極のつり合っている中心で、普遍の溶媒の力は、濃縮される。

(十字の中心で、普遍の溶媒の力は、濃縮される。)

古代人の四大元素とは、普遍の磁石の4つの力である。

古代人は、四大元素、普遍の磁石の4つの力を、十字の形で表した。

四大元素の十字は、中心を軸に、無限に回転する。

回転する十字は、円積問題についての謎を提起する。

創造する神の言葉(、イエス)は、十字の中心から、話す。

神の言葉(、イエス)は、「終えた」と叫ぶ。

(ヨハネによる福音19章30節「終えた」)

四大元素の形の正確なつり合いによって、体の万能薬を探求する必要が有る。

全世界の人々を救うために十字架で身代わりに成ったイエスによりキリスト教によって魂の万能薬がもたらされている、様に。

太陽の周囲の諸天体のつり合わされた引力が、諸天体の磁気の状態と両極性をもたらす。

太陽は、諸天体の電磁気の共通の貯蔵所である。

共通の貯蔵所の周囲の、第5元素の振動は、星の光で表れる。

星の光の両極性は、諸々の色で明かされる。

白色は、第5元素の色である。

陰極に向かうに従って、白色は、青色として濃縮して、黒色として固定される。

陽極に向かうに従って、白色は、黄色として濃縮して、赤色として固定される。

中心から分離する命は、黒色から、白色を経由して、赤色へ至る。

中心へ戻る命は、赤色から、白色を経由して、黒色へ戻る。

シアン色、紫色、黄色、白色という四色の中間色または混色は、赤色、緑色、青色という三原色と共に、プリズムの七色と、太陽の光のスペクトルをもたらす。

七色は、各太陽の周囲の7つの大気、または、7つの光る帯を形成する。

各、大気または光る帯で支配的な惑星は、大気または帯の色に対応して、磁化される。

唯一の潜在する星の光の、各、感化力が、天空で惑星が形成する様に、地の深みで金属を形成する。

唯一の潜在する星の光は、大気または帯を通過中に、分光する。

特化する前に陽極の赤色へ至らせた金属的な星の光が潜在している実体の所有が、言い換えると、特化する前に星の光から得た「火」の助けによって生きている赤色へ至らせた金属的な星の光が潜在している実体の所有が、大作業の全ての秘密である。

極度に濃縮された陽極の赤色の星の光は、普遍の溶媒として役立つ、自然の全ての王国または領域のための唯一の薬として役立つ、固定された命である、と理解できるであろう。

白鉄鉱マーカサイト、アンチモン、「錬金術師のヒ素」から、星の光という生きている両性具有の金属の精液を抽出するには、月経に例えられる鉱物の塩の溶媒である、最初の溶媒が必要である。

さらに、電気と磁気の協力が必要である。

錬金炉である唯一の容器によって、唯一のランプの段階的な火によって、「大作業」の残りの作業は、ひとりでに進む。

「『大作業』の残りの作業は、女性や子供でも出来る作業である」と錬金術師は話している。

古代人の唯一の実体の四大元素で表れた現象が、現代の化学者と物理学者の熱、光、電気、磁気である。

古代ヘブライ人は、星の光という唯一の実体を「光」を意味する「アウル」または「オウル」、「オド」、「オブ」と呼んでいる。

(

אור、AWR、アウル、オウルは光を意味する。

「大いなる神秘の鍵」「金を意味するフランス語の OR は光を意味するヘブライ語の AOUR に由来する」

)

オドは、自発的な星の光である。

オブは、受容的な星の光である。

アウルまたはオウルは、両性具有のつり合わされた複合している星の光の名前である。

錬金術師が黄金について話している時は、アウルまたはオウルは、黄金を意味する。

大衆の黄金は、金属化されたアウルまたはオウルである。

「錬金術師の黄金」は、溶解可能な宝石の状態のアウルまたはオウルである。

理論的に、古代の超越的な知によると、全ての病気を治して錬金を成就する賢者の石は、議論の余地無く、存在する。

しかし、実際に、賢者の石は存在しているのか？

または、賢者の石は存在させられるのか？

もしエリファス レヴィが賢者の石が存在すると断言して答えても、誰も信じないであろう。

そのため、賢者の石を見つけるために何をする必要が有るか？　という問題について扱わないで、「理論的に、古代の超越的な知によると、全ての病気を治して錬金を成就する賢者の石は、議論の余地無く、存在する」という言葉を(1)死を免れるのは可能か？　(2)賢者の石といったものは存在するか？　賢者の石といったものを

見つけるには何をする必要が有るか？　という2つの逆説的な問題への逆説的な答えとするつもりである。

エリファス レヴィの代わりに、M. de la Palisseが、「何かを見つけるためには、その何かの発見が運に左右されない限り、その何かを探す必要が有る」と答えるであろう。

探求を先導するために、探求を助けるために、すでに十分に話している。

(3)霊を仕えさせるのは可能か？　(4)ソロモンの鍵、ソロモンの指輪、ソロモンの封印は何を意味するか？

マタイによる福音4章などで、全世界の人々の救い主イエスが、荒れ野で誘惑に遭って、食欲、野心、金銭への貪欲という魂を縛る3つの肉欲を圧倒すると、天使達が来て仕えた、と記されている。

なぜなら、霊は、無上の霊である神に従う。

そして、イエスは、無上の霊である神である。

無上の霊である神は、肉体の反乱と肉体の不法な傾向を縛る。

また、存在するもの同士の間に存在している交流の自然な秩序を覆す事は、神意という法に反している、事に注意するべきである。

全世界の人々の救い主イエスと使徒達が死んだ人の魂を呼び出したという話は見た事が無い。

魂の不死は、正しい人の慰めと成る宗教の教えの1つである。

魂の不死は、信心による望みのためだけの物である。

魂の不死は、自然科学による批評が近づける事実として証明される事は無い。

「あの世」を「この世」の肉眼でのみ推測を試みる者への罰は、常に、理性の喪失、または、少なくとも、理性の錯乱である。

魔術の口伝では常に、「死んだ人の霊は、呼び出された事を悲しんだり怒ったりした顔で応じる」と話している。

死んだ人の霊は、安息を乱されたと抗議する。

死んだ人の霊は、非難と脅迫だけをもたらす。

ソロモンの鍵は、諸々の象徴で表された、宗教的な論理的な２つの力である。

ソロモンの鍵の効能は、霊の呼び出しから、だけではなく、隠された知に関連して体験する異常から、守ってくれる。

ソロモンの封印は、ソロモンの鍵の総合である。

ソロモンの指輪は、ソロモンの鍵の応用法を教える。

ソロモンの指輪は、円形である、と共に、正方形であり、円積問題の神秘を表す。

ソロモンの指輪は、円形を形成する様に並んだ７つの正方形である。

ソロモンの指輪の宝石の受け溝には、金製の円形と、銀製の正方形がある。

ソロモンの指輪は、金線細工や銀線細工といった７つの金属の線細工であるべきである。

ソロモンの指輪の、銀製の正方形の、宝石の受け溝には、白い宝石をはめる。

ソロモンの指輪の、金製の円形の、宝石の受け溝には、赤い宝石をはめる。

ソロモンの指輪の、白い宝石には、大宇宙の象徴、六芒星を記す。

ソロモンの指輪の、赤い宝石には、小宇宙の象徴、五芒星を記す。

ソロモンの指輪を指につける時は、光の霊の統治を望むか、闇の霊の統治を望むか、に応じて、ソロモンの指輪の白い宝石と赤い宝石の一方を内側に他方を外側に向けるべきである。

ソロモンの指輪の絶対の諸力を説明すると、意思は、自然の生きている2つの力で武装すると、全能である。

考えは、言葉か象徴で表さない限り、怠惰で死んでいる。

言葉か象徴で表さない考えは、意思を鼓舞しないし、意思を先導しない。

象徴は、考えの必然の形である。

象徴は、意思に必要な道具である。

より完全な象徴は、より力強く考えを明確にし、結果として、より大きな力で意思を導く。

盲信ですら山々を動かす。

それでは、疑う余地の無い完全な知が信心を照らした場合は、信心には何が可能と成るであろうか？

魂が全理解と全精力を唯一の言葉を話す事に集中させた場合、唯一の言葉は全能に成るのではないか？

二重の三角形であるソロモンの封印である六芒星を持つ、ソロモンの指輪は、魔術師の全ての知と信心を、唯一の象徴で表す。

ソロモンの指輪は、「天上の大宇宙」でも、「人の小宇宙」でも、天と地の2つの力と、天と地を統治する神の法を表す。

ソロモンの指輪は、タリスマンの中のタリスマン、神のタリスマンである。

ソロモンの指輪は、pantacleの中のpantacle、神のpantacleである。

ソロモンの指輪は、命の象徴である限りは、全能である。

しかし、ソロモンの指輪は、死んだ象徴である限りは、効能が無い。

知と信心、自然の知と自然の永遠の自発的な原因である神への信心が、諸々の象徴の命である。

自然の神秘の深い学は、精神的な疲労が心の呼吸を麻痺させるので、外見だけの観察者を神から遠ざける。

そういう意味では、隠された知は、特定の人にとっては、危険で致命的である。

数学的な正確さ、自然の法の絶対の厳しさ、自然の法の調和と単純さは、神意が永久機関の時計の鉄の歯車の裏に薄れてしまう様に、必然の永遠の不変の機械仕掛けを多数の大衆に連想させてしまう。

大衆は、考える人の自由と王国という疑う余地の無い事実について考えない。

人は、人と同じ有機体の被造物を思い通りにする。

人は、空の鳥、水の魚、森の獣をとらえられる。

人は、森を全て伐採したり焼いたりできる。

人は、岩々や山々に穴を開けたり吹き飛ばす事ができる。

人は、周囲の全ての形を変えられる。

しかし、自然の無上の類推可能性にもかかわらず、神や神の聖霊といった他の知的な存在が思い通りに、諸々の世界を分解して消滅させたり、太陽といった星々を一息で消したり、太陽といった星々を星の塵に帰したりできる、と人は信じない。

神や神の聖霊といった大いなる存在は、人の視力には大き過ぎる。

十中八九、ダニやミミズの目には人が感知できない、様に。

そして、もし、神や神の聖霊といった存在が、この世を何度も破壊せずに、存在しているとしたら、ツバメの巣や蝶（チョウ）の蛹（さなぎ）の破壊を禁じている様に、諸々の世界の消滅を禁じている無上の意思、唯一の知、全能の力に神や神の聖霊といった存在が従っている、と人は認める必要が有るのではないか？

性格の深い所で力を自覚している、普遍の法を永遠の正義の道具として理解している魔術師にとって、ソロモンの封印、ソロモンの鍵、ソロモンの指輪は、無上の王位の証拠と成る。

(5)信頼できる計算で未来を予言するのは可能か？　(6)魔術の力で思い通りに善行をしたり悪事を犯したりするのは可能か？　について

後記が、答えである。

同じ技量の2人のチェスの指し手が試合を始めたら、どちらが勝利するか？

間違い無く、より用心した人が勝利する。

もし両者が夢中に成っている物を知る事ができたら、両者の試合の結果を確実に予見できる。

予見する事は、チェスの試合で勝つ事である。

予見する事は、人生という試合で勝つ事である。

人生には、偶然は無い。

偶然とは、予見できなかっただけである。

賢者は、無知な者が事前に気づかない物事の存在をすでに確認している。

2つの力の対立、または、2つの力のつり合いは、全ての形をもたらす様に、全ての物事をもたらす。

2つの力は、数で表せる。

そのため、計算によって事前に未来を測定できる。

全ての過激な作用は、同等な反作用でつり合わされる。

笑いは、涙を予言する。

そのため、マタイによる福音5章4節で、人々の救い主イエスは、「悲しむ人は幸いである」と話している。

また、マタイによる福音23章12節で、イエスは、「自分を高くする人は低くされ、自分を低くする人は高くされる」と話している。

今日、地上の神であるかの様に傲り高ぶっていたネブカドネザル２世は、明日は、ダニエル書４章33節の様に獣に変身する。

今日、勝利してバビロンに入り地上の神であるかの様に全ての祭壇で香を捧げられたアレクサンダーは、明日は、下品に酩酊して死ぬ。

未来は、過去の中にある。

過去は、未来の中にある。

天才が予見する時、天才は思い出している。

結果は、必然的に正確に、原因とつながっている。

結果は、別の結果の原因と成る。

派生の原因と結果をもたらしたと考えられる、神である第一原因と直接の結果と、間接の派生の原因と結果は、類推可能である。

そのため、たった１つの事実が、一連の神秘の全体を、予見者に明かす。

キリストの降臨は、反キリストの到来を確実にした。

しかし、反キリストの到来は、神の聖霊の勝利の前触れに成る。

現代人が生きている金儲けが目的の時代は、世界が未だ覚えている、より豊かな思いやりと大いなる善行の前触れである。

後記を、理解する必要が有る。

人の意思は、目に見えない諸原因を変える。

また、人による、たった１つの刺激が、世界全体のつり合いを変える事ができる。

もし人の統治下にある地における人の力が地を変える事ができるならば、太陽といった星々を統治する知的な存在である神の聖霊の力は、どの様な物であるはずか？

エグリゴリの最も小さい者でも、一息で、突然、地に潜在する熱を膨張させて、地を粉砕して塵の雲に帰す事ができる。

(

「エグリゴリ」はギリシャ語で「見張る者」を意味する。

エノク書にはエグリゴリは地上を見張る天使であったが堕天したと記されている。

)

人は、一息で、1 人の人の全幸福を消す事ができる。

世界の様に、人は磁化されている。

太陽といった星々の様に、人は特有の光を放射している。

ある人は、より多く吸収し、別の人は、より多く放射する。

世界では誰も孤立していない。

各人は運命か神意である。

オクタウィウスとキンナは、出会った。

オクタウィウスとキンナは、傲慢で無慈悲であった。

オクタウィウスとキンナが傲慢で無慈悲であったのは、運命である。

運命によって、キンナは、オクタウィウスを殺そうとする。

運命によって、オクタウィウスは、キンナを罰したかった。

しかし、オクタウィウスは、キンナを許した。

そのため、運命は、神意に変わった。

そのため、無上の思いやりで始まったオクタウィウスの時代は、イエスの誕生に立ち会うのに相応しかった。

マタイによる福音 5 章 44 節で、イエスは、「敵を(許し)愛しなさい」と話している。

オクタウィウスは、思いやりをキンナにまで及ぼして、オクタウィウスの全ての報復をつぐなった。

人は、運命の命令に従う限り、大衆である。

言い換えると、運命の命令に従う人を、知の聖所から除外する必要が有る。

なぜなら、運命の命令に従う人の手中では、知は破壊のための恐るべき道具と成ってしまう。

正反対に、知の理解によって命の盲目的な先天的な物である肉欲を統治する自由な人は、本質的に、自然の保護者であり、自然の修復者である。

なぜなら、自然は、知者の力の領地であり、知者の不死性の神殿である。

学の無い人が善行をしようとすると、悪事を犯す結果に成ってしまう。

他方、真の秘伝伝授者は、悪事を犯す事を望むのは不可能である。

秘伝伝授者が打つのは、懲らしめるためであり、治すためである。

学の無い人の息は、致命的である。

秘伝伝授者の息は、命をもたらす。

大衆は、他者を苦しませるために、苦しむ。

しかし、秘伝伝授者は、他者を苦しませないために、苦しみに耐える。

大衆は、他人を毒するために、自分の血を矢につける。

秘伝伝授者は、自分の血の一滴だけで、他人の酷い傷を治せる。

(7)真の魔術師に成るには何をする必要が有るか？　(8)黒魔術が動作するのに要求する力は正確には何か？

自然の秘密の 2 つの力を圧倒されずに扱える人は、真の魔術師である。

行動によって、死に方によって、真の魔術師を知る事ができる。

真の魔術師の行動と死に方は、常に、大いなる自己犠牲である。

真のゾロアスターは、東の原初の考えと文明を創造した後に、オイディプスの様に、嵐の中に姿を隠した。

オルフェウスは、詩と共に、全ての高尚なものの美しさを、ギリシャにもたらした。

その後に、オルフェウスは、参加を拒否した酒神祭で死んだ。

ユリアヌスは、徳があったにもかかわらず、黒魔術の秘伝伝授者に過ぎなかった。

ユリアヌスの死は、殉教者としての死ではなく、犠牲者としての死であった。

ユリアヌスの死は、無意味であり、敗北であった。

ユリアヌスは、時代を理解できなかった。

ユリアヌスは、超越的な魔術の考えを知っていたが、儀式に誤用してしまった。

ティアナのアポロニウスとシュネシオスは不思議な哲学者に過ぎなかった。

ティアナのアポロニウスとシュネシオスは、真の知を開拓したが、後世のためには何もしなかった。

ティアナのアポロニウスとシュネシオスの時代に、マタイによる福音 2 章の 3 人のマギは、既知の世界を 3 つの部分に分けて統治していた。

ベツレヘムの幼子イエスの叫びは、諸々の神託を沈黙させた。

イエスは、王の中の王、神である。

イエスは、魔術師の中の魔術師、魔術師の神である。

神イエスが、世界に人として誕生した。

イエスは、諸々の宗教、諸々の法、諸国といった全てのものを変えた。

イエス キリストからナポレオンまでの間、驚異の世界は空白であった。

戦いの言葉が人に成ったと言える、武装した救い主と言える、ナポレオンは、盲目的に、知らないで、キリスト教の神託を完成しに現れた。

ちなみに、イエスは、究極の名前をもたらす者である。

キリスト教の神託、キリスト教の啓示は、今まで、死に方だけを教えてきた。

しかし、ナポレオンの文明フランスは、勝利する方法を見せた。

自己犠牲と勝利、耐えて死ぬ方法と戦って勝利する方法という 2 つの神託は、一見、正反対に見えるが、一致して、名誉の大いなる秘密を形成する。

救い主イエスの十字と、英雄の十字は、片方だけでは不完全である。

なぜなら、自己犠牲と死ぬ方法を学んだ人だけが、(悪や肉欲を)圧倒する方法を知る事ができる。

永遠の命を信じないで、どうして自己犠牲と死ぬ方法の学に到達できるであろうか？

ナポレオンは外見的には肉体的には死んだが、ナポレオンの精神を実現した人によって、ナポレオンの精神は地上に戻ってくる運命である。

また、唯一の王によって、ソロモン王とカール大帝の知は地上に戻ってくる。

その時、キリスト教の口伝によると時の終わりに再生する使徒ヨハネは、無上の法王、知の理解と愛の使徒として地上にあらわれる。

全ての預言者は、ソロモン王やカール大帝と、使徒ヨハネという２つの統治者の組み合わせを預言している。

ソロモン王やカール大帝と、使徒ヨハネという２つの統治者の組み合わせは、世界の復活という奇跡をもたらす。

その時、真の魔術師の知は、全盛に成る。

なぜなら、奇跡は、今まで、ほとんど、悪人の霊の魔術師や、運命の盲目的な道具である運命の奴隷の物であった。

運命が、この世に投げ与える教師は、すぐに運命によって覆される。

肉欲の名前において勝利した人は、肉欲の犠牲者に陥る。

プロメテウスは、ユピテルへの嫉妬で、神ユピテルの雷を盗んで、不死のワシを創造しようとしたが、不死のハゲタカしか創造できなかった。

他の例え話では、不信心な王イクシオンは、神の女王ヘラを犯そうとしたが、あてにならない雲を抱き、火の蛇によって容赦の無い運命の車輪に縛りつけられた。

プロメテウスとイクシオンの深い例え話は、偽の魔術師、魔術の知の冒涜者、黒魔術の異端者への警告である。

　黒魔術の力とは、めまいや狂気の伝染力、感化力である。

　肉欲の運命とは、この世の人々の魂を飲み込んで、この世を絞めあげて、悶え苦しむ、火の蛇に似ている。

　しかし、聖母マリアが象徴する、平和な、微笑む、愛に満ちた、知が蛇の頭を足下に置いて圧倒する。

　運命は、自滅する。

　運命は、自身の尾を永遠に飲み込もうとするクロノスの古い蛇である。

　より正確に言うと、運命は、調和が２頭の蛇を魅了してヘルメスの杖ケーリュケイオンで平和に絡み合わせるまで、戦って対立している２頭の蛇である。

結論

　全ての誤信のうち、最も過酷な非論理的な誤信は、普遍な絶対な知的な原理が存在しないと誤信する事である。

　普遍な絶対な知的な原理が存在しないというのは誤信である。

　なぜなら、普遍な絶対な知的な原理が存在しないという誤信は、無限者である言い表せない者である神の誤った否定を含んでいる。

　神の否定は、過酷である。

　なぜなら、神の否定は、孤立させるし、荒廃させる。

　神の否定は、非論理的である。

　なぜなら、神の否定は、完全の代わりに、虚無を前提とする。

　自然では、つり合いが全てのものを保存し、運動が全てのものを更新する。

秩序的なつり合いと運動は、進歩、前進を意味する。

つり合いと運動の知は、自然の絶対の知である。

知の助けによって、人は、人より高等な完全な知に向かって常に向上しながら、自然の現象をもたらしたり導いたりできる。

倫理道徳のつり合いは、知と信心の協力である。

知という力と信心という力は、異なるが、作用において一致して、論理という法則を人の精神と心に与える。

信心を否定する知と、知を否定する信心は、同様に、非論理的である。

知は、信心の対象を定義できないし、ましてや、信心の対象を否定できない。

正反対に、知は、信心の仮説の論理的な基礎を確証するために求められている。

孤立している誤信は、信心を形成できない。

孤立した誤信は、真の宗教を形成できない。

なぜなら、孤立している誤信には、権威が無い。

そのため、孤立している誤信には、倫理道徳の保証が無い。

孤立している誤信は、狂信や迷信に陥る傾向が有る。

信心とは、真の宗教がもたらす信頼である。

言い換えると、信心とは、信心の共有がもたらす信頼である。

普遍の祈りが、真の宗教を形成する。

そのため、常に、本質的に、真の宗教は、カトリックである。

言い換えると、常に、本質的に、真の宗教は、普遍である。

真の宗教は、未知という革新的な領域において公然とたたえられた、理想的な独裁である。

より適切に、つり合いの法を理解した時、つり合いの法は、古代の世界の全ての争いと革命を終わらせる。

王と法王という２つの権力の対立が存在している。

知と信心という心の２つの力の対立が存在している、様に。

法王は、世俗の権力に執着しているので、非難されている。

しかし、大衆は、精神的な権力を強奪する傾向がプロテスタントに有るのを忘れている。

権力者が法王に成ろうとする野心を進める限り、つり合いの法によって、法王は世俗の権力者に成ろうとする野心に駆られる。

世界の大衆は、政治的な権力の統一を夢見続けている。

しかし、権力が、つり合わされた二重性に存在する、と大衆は理解していない。

突き詰めて考えると、世俗の権力者が法王の精神的な権力を強奪してしまって、法王が精神的な権力者では無く成ったら、世俗の権力者は法王といった精神的な権力者では無く成ってしまう。

世俗の秩序では、世俗の権力者も、他者の様に、時代の大衆の予断に従う羽目に成る。

もし世界の大衆の多数が世俗の権力の放棄を醜聞と見なす場合は、世俗の権力者は世俗の権力の放棄を試みる事ができない。

世俗の権力者は法王に成る事ができない、と世論が公に主張した時、ロシア皇帝とイギリスの王が、祭司を嘲笑している様な、聖職者としての権力を放棄した時、法王は、法王が行うべき事が残っている事を知る。

世俗の権力者が法王に成る事をあきらめるまで、法王は、ペトロの遺産の一貫性を維持するために、戦う必要が有るし、必要ならば死ぬ必要が有る。

心のつり合いの知は、宗教的な論争と、哲学による神への冒涜を終わらせる。

宗教が良心の自由を非難しないと認めた時、また、真に宗教的な人々が知を尊重した時、また、知が普遍の宗教の存在と必要性を認めた時、知の理解が有る人は、宗教の人に成る。

普遍の宗教を認める知は、歴史の哲学を新しい光であふれさせる。

普遍の宗教を認める知は、自然の全ての知の総合の図表をもたらす。

つり合わされた 2 つの力の法と、生物的な補整の法は、新しい化学と新しい物理学を明かす。

そして、発見から発見へ遡(さかのぼ)って、錬金術にまで遡(さかのぼ)る。

そして、長きに渡って忘れられていた錬金術の単一性と超越性の不思議議に驚かされるであろう。

その時、哲学は、数学の様に正確に成る。

なぜなら、真の概念は、生きている秩序と同一である。

そして、真の概念は、現実の知を形成する。

真の概念は、論理と正義と一致する。

真の概念は、数と同様に、正確なつり合いと方程式をもたらす。

その時、無知な大衆だけが、誤る可能性が有る。

そして、真の知者は、自己欺瞞から自由に成る。

美学は、流行の変化に従って変わる時代の趣味の気まぐれに従わないであろう。

美が真理の輝きであるならば、確実に知る事ができる、正確に精密に測定できる、光源からの光の放射を誤り無しに計算できる。

詩には、愚かな破壊的な傾向が無く成る。

詩人は、愚かさと破壊へ誘惑する、危険な誘惑者ではなく成るであろうし、プラトンが名誉を与えて国外へ追放した詩人ではなく成るであろう。

(プラトンは、「国家」で「神々に失礼な詩を歌う詩人を王国から追放する必要が有る」と話して、詩人に名誉を与えて国外へ追放した。)

詩人は、論理の魔術師と、調和の優美な数学者に成るであろう。

地は理想郷に成るのか？

いいえ。

なぜなら、人類が存在する限り、弱者、小さい者、無知者、貧者という幼子が存在する。

しかし、真の地の王者達が社会を統治するであろう。

人生で、治せない悪は無く成るであろう。

神の奇跡は、永遠の秩序の物である、と理解されるであろう。

説明できない不思議を信じて妄想による幻を敬礼する事は無く成るであろう。

特定の現象の超常性は、自然の法に対する人の無知を証明するに過ぎない。

神が神についての知を伝えようとする時、神は、人の理性を教え導き、人の理性を混乱させようとしたり驚かせようとしたりしない。

その時、人は、神に似せて創造された人の力の最大を知るであろう。

(創世記 1 章 27 節「神は人を神に似せて創造した」)

人の力の範囲内では人は創造主である、と人は理解するであろう。

また、永遠の論理である神に導かれた、人の善意は、自然が人の影響下と統治下に置いたものにとって、下位の神意に成る、と人は理解するであろう。

その時、宗教は、進歩を永遠に恐れなく成るであろうし、進歩に従うであろう。

カトリックという黄金の鎖で畏敬されている博士である福者 Vincent de Lerins は、進歩と保守的な権威の一致を見事に説明している。

不変の権威が人の無知による気まぐれから真の宗教の考えを守っているので、真の宗教は人の信頼を受けるに相応しい、と Vincent de Lerins は話している。

　「それにもかかわらず、」と Vincent de Lerins は話している。

「真の宗教の不動性、不変性は、死ではない。

正反対に、真の宗教の不変性は、未来のために、命の芽を保存している。

現在の人が理解できないで信じているものを、未来の人は、理解するであろうし、

知って喜ぶであろう。

『古代人が理解できないで敬礼したものを、未来の人は、理解して、喜ぶであろう』

イエス キリストのキリスト教は全ての進歩を除外しない。

なぜなら、イエスのキリスト教は、進歩を大いに期待している。

誰が、進歩を妨げようと望むほど、人に嫉妬したり神を憎悪したりするであろうか？

ただし、信念の変化ではなく、真の進歩であるべきである。

進歩とは、位階と性質に応じた、各々のものの成長と発達である。

無秩序とは、諸々のものの混乱や、諸々のものの性質の混乱である。

疑い無く、教会による時代を通じての自然な更新によって、各時代の人類全体でも、

個人個人にも、知の段階には違いが存在する。

ただし、そのため、全てのものは、保存される。

また、常に、宗教は、同一の精神、同一の知を大事にして、同一の定義、同一の意味

を維持する。

宗教は、人々の魂を連続的に成長させるべきである。

命が、成長の全段階を通じて手足の数といった同一性を残したまま、肉体を成長さ

せる、様に。

幼子の時代の開花と、長老の時代の熟達の、違いは、何て大きいであろう。

しかし、人格は、幼子の時代も、長老の時代も、同一である。

変化は外見だけである。

ゆりかごの中の幼子の手足は、弱いが、大人の手足と、同一の根本原理を持っている、

同一の組織である。

幼子の手足と、大人の手足は、数などが同一である必要が有る。

なぜなら、幼子の手足と、大人の手足が、数などが異なる場合は、奇形か死である。

イエス キリストのキリスト教では、類推可能性が成立する。

なぜなら、イエスのキリスト教では、同一の条件と同一の法が、進歩を実現する。

年月が経つにつれて、イエスのキリスト教は、成長する。

年月が経つにつれて、イエスのキリスト教は、力を強める。

しかし、イエスのキリスト教は、余計なものをキリスト教という存在の総合に加えない。

イエスのキリスト教は、完全なつり合いで誕生した。

イエスのキリスト教は、変質せずに成長する。

教父達は、小麦の種をまいた。

祭司の婚外子が、毒麦を刈り入れるべきではない。

中間の刈り入れは、小麦の種の性質を変えない。

必然的に、小麦の種を、受け取った様に、残す。

カトリックは、薔薇を植えた。

カトリックの薔薇を茨(イバラ)に取って代わらせるべきか？

疑い無く、いいえ。

カトリックの薔薇を茨(イバラ)に取って代わらせたら、災いが有る。

カトリックという精神的な楽園のバルサムとシナモンをトリカブトと毒に変えるなかれ。

教父達が教会という神の美しい地に種をまいた全てのものを、子孫は栄養を与えて育てる必要が有る。
カトリックだけは成長する必要が有る。
カトリックだけは花開く必要が有る。
カトリックを高める事ができる。
カトリックは成長するべきである。
事実、カトリックの神の哲学の考えを学び、発達させて、ある意味で洗練させる事を神は許している。
しかし、カトリックの神の哲学の考えを変質させる事を神は禁じている。
カトリックの神の哲学の考えを削ったり削除によって台無しにしたりする事は犯罪である。
新しい光がカトリックの神の哲学の考えに降臨します様に。
賢明な区別がカトリックの神の哲学の考えを多様にさせます様に。
ただし、カトリックの神の哲学の考えが、完全さ、一貫性、生来の性質を常に保存します様に」

　過去に知による全ての獲得物は、普遍の教会のために獲得された、と認めよう。
　Vincent de Lerins に賛同して、全ての未来の進歩の未配当の遺産を、普遍の教会に配当しよう。
　ゾロアスターの大いなる願望とヘルメスの全ての発見は、普遍の教会への配当物である。
　契約の箱の鍵と、ソロモンの指輪は、普遍の教会の物である。
　なぜなら、普遍の教会は、神の不変の位階制の代表である。
　普遍の教会は、戦いによって、より強く成る。

普遍の教会は、外見上の失墜によって、より大いに安定して落ち着く。

普遍の教会は、統治するために苦しむ。

普遍の教会は、向上するために失墜する。

普遍の教会は、復活するために死ぬ。

ジョゼフド メーストル伯爵は、「人は、用意しておく必要が有る」と話している。

「神の秩序における、大いなる出来事のために、人は、用意しておく必要が有る。

人は、大いなる出来事に向かって加速して動いている。

大いなる出来事は、全ての観察者の前にあらわれるに違い無い。

大いなる出来事があらわれる時は近づいた、と印象的な諸々の神託が話している。

ヨハネの黙示録の多数の預言は、現代について話している。

すでに大いなる出来事は始まっている、と、ある著者は極言までしている。

また、フランスは全ての変革のうち最大の変革の大いなる道具に成る運命である、

と、ある著者は極言までしている。

現在、全ヨーロッパで、知識人である真に宗教的な人は、驚くべき大いなる出来事を

期待している。

大いなる出来事への全体的な予感は重要ではないか？

救い主イエスの誕生まで、過去を遡(さかのぼ)りなさい。

後記の様に、当時、天の高等な神秘的な声が、東で、話し始めた。

東は、勝利しようとしている。

勝利者が、ヘブライ人から現れる。

神の幼子が、人に授けられる。

神の幼子は、無上の天から降臨して、地上に黄金時代を復活させるであろう。

前記の、考えは、全ての場所に広まった。

前記の、考えは、何物よりも、詩に力を貸した。
そのため、最大のラテン詩人ウェルギリウスは、前記の、考えを受け取った。
『救世主の歌』と呼ばれている、『牧歌』の第４歌で、ウェルギリウスは、前記の、考えを輝く色で飾った。
ウェルギリウスの時代の様に、現在、世界の人々は期待している。
力強い確信を、どうやって軽蔑するのか？
神聖な兆候に基づく神聖な探求に身を捧げている人々を、何の権利で非難するのか？
もし起きようとしている大きな出来事の証拠を探すのであれば、自然科学に探せ。
化学と天文学の進歩を考えなさい、そうすれば、化学と天文学が導いている場所を理解するであろう。
例えば、ニュートンが人をピタゴラスの元に戻すと思うか？
また、天体と結びついている知的な存在である神の聖霊が天体を人体の様に動かしているのは、やがて証明されるであろうと思うか？
方法はわからないが、神の聖霊が天体を動かしていると、議論の余地無く証明されようとしている。
前記の、考えは逆説的に滑稽に見えるかもしれない。
なぜなら、現在の世論は、前記の、考えを逆説的に滑稽に見る様に強制する。
宗教と知の自然な類推可能性が、独りの天才の知の中で、宗教と知を結合させる、まで待とう。
天才の到来は遠いはずが無い。
その時、現在は変に非論理的に見える考えは、誰も疑わない原理に成るであろう。
また、現在の大衆が中世の迷信について話す様に、未来の大衆は現在の愚かさについて話すであろう」

トマス アクィナスは「神の望みは全て正しい。しかし、神が望むからだけで正しいのではない」と話している。

「神が望むから正しいのではない」

　「神が望むから正しいのではない」という言葉に、未来の倫理道徳の考えが含まれている。

　「神が望むから正しいのではない」という有益な原理から、すぐに、後記の、結果が続く。

　信心の立場から神の命令を行うのは善い、だけではなく、論理の立場から神に従うのは善いし論理的である。

　そのため、人は、「神が望むからだけではなく、(論理的に、)私も望むから、私は善を行う」と話す事ができる。

　人の意思は、自由であり、服従である。

　なぜなら、理性は、信心による命令が賢明であると拒絶不能な形で証明する。

　理性は、神の法に従って、適切な理由に基づいて行動する。

　言わば、理性は、神の法への人からの支持と成る。

　その時から、迷信と不信心は不可能に成る。

　前記の、考えから、宗教において、実践的な哲学、倫理道徳の哲学において、絶対の権威が存在する様に成るであろう。

　また、倫理道徳的な教えだけが、啓示され、確立されるであろう。

　その時まで、権利と義務の簡潔な普遍な物事が、日々、異議を唱えられるのを見る苦痛と恐怖を経験するであろう。

神への冒涜を沈黙させる事ができても、説得して改心させる事は別問題である。

人が悪事で超越的な魔術を悪用していたので、必然的に、教会は魔術を禁じた。

偽のグノーシス主義は、かつては純粋であったグノーシス主義という名前の評判を地に堕とした。

偽の魔術師、悪人の霊の魔術師は、マギの子孫である真の魔術師、神の聖霊の魔術師を侮辱した。

しかし、宗教は、口伝の友であり、古代からの宝の守護者である。

宗教は、聖書より古い考えを拒絶できない。

宗教は、過去への口伝的な畏敬と完全に一致する考えを拒絶できない。

宗教は、未来での進歩への生きている希望と完全に一致する考えを拒絶できない。

大衆は、労苦と信心によって、所有権と知る権利に入門する。

常に、大衆が存在する。

常に、幼子が存在する、様に。

しかし、知を授けられた、知者という貴族が大衆の母に成った時、個人的な連続的な段階的な前進的な自由への解放への経路が全ての人に対して開かれるであろう。

招かれた人は、自由への解放への経路によって、知者によって、知によって、自身の労苦によって、自身の努力によって、神に選ばれた人の位階に到達できるであろう。

前記の、未来の神秘を古代の秘伝伝授は闇の奥に隠していた。

人の意思に従う自然による奇跡は、未来の神に選ばれた人のためだけの物である。

祭司の杖は、奇跡の杖に成るであろう。

モーセの時代やヘルメスの時代は、祭司の杖は、奇跡の杖であった。

再び、祭司の杖は、奇跡の杖に成るであろう。

魔術師の王笏は、地の王者の王笏、皇帝の王笏に成るであろう。

知と徳において最も大いなる人は、権利として、最上位の人に成るであろう。

その時、魔術は、無知な人にとっては隠された知であるが、知者にとっては明らかにされている知に成るであろう。

魔術は、全ての人にとって、議論の余地が無い物に成るであろう。

その時、普遍の啓示が、普遍の啓示という黄金の鎖によって、相互に、全ての輪、全ての繋がりを結びつけるであろう。

人の叙事詩は、終わるであろう。

巨人が努力しても、真の神の祭壇の復活に役立つだけであろう。

神の思考をまとった、全ての形が、連続的に、不死に、完全に、生まれ変わるであろう。

国々の代々の芸術が描いてきた全ての特徴が統一されて、神の完全な像を形成するであろう。

清められた、混沌から脱け出した、考えは、誤りが無い絶対の倫理道徳を自然にもたらすであろう。

そして、社会の秩序は、絶対の倫理道徳に基づいて形成されるであろう。

現在、戦っている、社会の諸体制は、黄昏の夢である。

黄昏の夢を通り過ぎさせなさい。

太陽は、輝く。

地は、一定の航路を進む。

昼の到来を疑う人は、狂っている。

「カトリックは死んだ幹に過ぎない」、「カトリックという死んだ幹に斧で攻撃を与える必要が有る」という誤りを話す人は狂っている。

乾いた樹皮の下でカトリックという生きている木は絶え間無く復活している、事を愚者、狂人は理解できない。

真理には、過去も未来も無い。

真理は、永遠である。

真理には、終わりが無い。

人の夢だけが終わる。

人の目には破壊する物である金槌や斧アシェットも、神の手によると、剪定人のナイフに成る。

人にとっては破壊の道具でも、神の手によると、手入れの道具に成る。

永遠の確信、永遠の信心という木からは、宗教、学問、政治における迷信と異端という死んだ枝だけが切り取る事ができる。

本書「魔術の歴史」の目的は、後に隠されてしまったが、最初は宗教の象徴は知の象徴であったと証明する事であった。

宗教と知が、未来に、再び一致します様に。

宗教と知が、姉妹の様に、相互に、助け合い、愛し合います様に。

なぜなら、宗教と知の発祥の地は同一であった。